石川原遺跡（4）

第1分冊　本文編

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第78集

2021

国土交通省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

第688集
石川原遺跡（4）
第1分冊
本文編
八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第78集
二〇二一
国土交通省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

石川原遺跡（4）

第1分冊　本文編

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第78集

2021

国土交通省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

昭和22(1947)年のカスリーン台風被害などを発端として建設が計画された八ッ場ダムは、既に令和元(2019)年3月末に本体工事が竣工し、本格運用が始まっています。この間、当事業団では平成６(1994)年４月から令和元(2019)年９月にいたる26年の長きに亘り、100万㎡を超える広大な範囲を対象とした埋蔵文化財の発掘調査を実施して参りました。

その主要遺跡の一つの石川原遺跡は、平成20年度及び平成26年度から令和元年度にかけて、９万７千㎡余の区域を対象に発掘調査を実施し、縄文時代から江戸時代にかけての多くの遺構と出土遺物を発見しました。ここに一連の八ッ場ダム建設事業の最後の発掘調査報告書のひとつとして、天明３(1783)年の浅間山の噴火に伴い発生した天明泥流で埋没した遺構、遺物を収録した本書を上梓いたす運びとなりました。

石川原遺跡で発見された天明泥流の被災遺構には、寺院、屋敷、建物、畑、道、溝、土坑などがあり、これらの遺構に伴い建築材やムシロ、仏具、陶磁器や木製品等の日用品、唐臼等の石製品など多くの遺物が出土いたしました。また八ッ場ダムの発掘調査において、初めて被災者骨が発見されたのも当遺跡でした。石川原遺跡の調査で、近世後期の土地利用の在り方、想定外の建物の建築方法の発見など多くの知見が得られました。

ここに発掘調査から報告書作成まで、ご指導、ご協力を賜りました国土交通省関東地方整備局、同八ッ場ダム建設事務所、群馬県教育委員会及び群馬県地域創生部文化財保護課、長野原町教育委員会をはじめ関係各位に衷心より感謝申し上げる次第であります。そして、本報告書が地域の歴史を知るうえで欠くことのできない情報を提示していることを確信いたしますと共に、広く活用されますことを願い序とします。

令和３年７月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理　事　長　　向　田　忠　正

例　言

1　本書は、八ッ場ダム建設工事に伴う石川原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書の第４集および前原遺跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡の名称および所在地

石川原遺跡(いしかわらいせき)

群馬県吾妻郡長野原町大字川原湯乙37番地ほか

前原遺跡(まえはらいせき)

群馬県吾妻郡長野原町大字川原湯120-2ほか

3　事業主体　国土交通省

4　発掘主体　公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

5　発掘の期間・組織(職名は当時)

石川原遺跡

平成20年度　　期間　平成20年８月１日～10月31日

担当　麻生敏隆(主任専門員・統括)・田村公夫(主任調査研究員)・綿貫　昭(同)

平成26年度　　期間　平成26年４月１日～12月31日

担当　齊藤利昭(上席専門員・調査統括)・麻生敏隆(上席専門員)

平成27年度　　期間　平成27年４月１日～７月31日・平成28年２月15日～３月16日

担当　大西雅広(上席専門員・調査統括)・麻生敏隆(上席専門員)・齊藤利昭(上席専門員・調査課長)

平成28年度　　期間　平成28年４月１日～平成29年３月31日

担当　麻生敏隆(上席専門員・調査統括)・黒田　晃(主任調査研究員)・山本光明(同)・石川真理子(専門員)・藤巻幸男(専門調査役)・間庭　稔(同)

平成29年度　　期間　平成29年４月１日～平成30年３月31日

担当　須田正久(主任調査研究員)・黒崎博樹(同)・小原俊行(専門員)・石川真理子(専門員)・小野和之(専門調査役)・間庭　稔(同)・桜岡正信(同)・榛澤健二(同)

平成30年度　　期間　平成30年４月１日～平成31年３月31日

担当　須田正久(主任調査研究員・調査統括)・関　俊明(同)・黒崎博樹(主任調査研究員)・石田　真(同)・梅村唯斗(調査研究員)・鈴木佑太郎(専門員)・間庭　稔(専門調査役)・齊藤利昭(同)

平成31年/令和元年度　　期間　平成31年４月１日～令和元年６月30日

担当　石田　真(主任調査研究員・調査統括)・山本直哉(調査研究員)

前原遺跡

平成29年度　　期間　平成29年12月１日～12月31日

担当　関　俊明(主任調査研究員)・梅村唯斗(調査研究員)

6　整理等作業の期間・担当者

石川原遺跡

期間　平成20年１月１日～平成20年３月31日　担当　田村公夫(主任調査研究員)

平成29年１月１日～平成29年３月31日　担当　麻生敏隆(上席専門員・調査統括)・洞口正史(専門調査役)

平成29年４月１日～平成30年３月31日　担当　洞口正史(専門調査役)　(石川原遺跡(１)刊行)

平成30年４月１日～平成31年３月31日　担当　石川真理子(調査研究員)・中沢　悟(専門調査役)・洞口正史(同)・佐藤元彦(同)・大西雅広(同)

平成31年４月１日～令和２年３月31日　担当　石川真理子(調査研究員)・中沢　悟(専門調査役)・洞口正史(同)

令和２年４月１日～令和３年３月31日　担当　石川真理子(専門員(主任))・鈴木佑太郎(専門員)・中沢　悟(専門調査役)・麻生敏隆(同)

前原遺跡

期間　平成29年４月１日～平成29年４月30日　担当　洞口正史(専門調査役)

7　令和２年度整理等作業の組織

整理担当　石川真理子(専門員(主任))・鈴木佑太郎(専門員)・中沢　悟(専門調査役)・麻生敏隆(同)

金属製品保存処理　板垣泰之(専門員)・関　邦一(専門調査役)

8　本報告書作成関係者

執筆・編集　中沢　悟(専門調査役)・洞口正史(同)

遺物観察　　石器・石製品　津島秀章(調査課長)・松村和男(上席専門員・資料統括)

中・近世陶磁器　矢口裕之(資料１課長)・大西雅広(専門調査役・普及課長)

金属器・金属製品　板垣泰之(専門員)・関　邦一(専門調査役)

木製品　板垣泰之・大西雅広・中沢　悟

金属製品・有機質遺物保存処理　板垣泰之(専門員)・関　邦一(専門調査役)

遺構写真撮影　各発掘担当者

遺物写真撮影　石器・石製品　津島秀章・松村和男　　中近世陶磁器　矢口裕之　大西雅広

金属器・金属製品　板垣泰之　　木製品　板垣泰之

9　本報告書執筆分担

石川原遺跡

第１章・第２章・第３章第１節　中沢　悟　　第２節・第３節　松村和男

第４章　前原遺跡　洞口正史

第５章　第１節・第２節　田中義文(パリノ・サーヴェイ株式会社)　第３節　黒沼保子(パレオ・ラボ)・鈴木三男(東北大学植物園)　第４～６節　金井慎司(パリノ・サーヴェイ株式会社)　第７節　姉崎智子(群馬県立自然史博物館主幹　学芸員)　第８節　板垣泰之

10　調査・分析委託等

石川原遺跡

埋蔵文化財遺跡掘削工事

平成20年度　株式会社測研

平成26年度　株式会社歴史の杜

平成27年度　測研・吉澤建設・技研コンサル・瑞穂建設吾妻地区埋蔵文化財遺跡掘削工事経常共同企業体

平成28年度　歴史の杜・吉澤建設・南波建設吾妻地区埋蔵文化財遺跡掘削工事経常共同企業体

平成29年度　測研・吉澤建設・技研コンサル・瑞穂建設吾妻地区埋蔵文化財遺跡掘削工事経常共同企業体

平成30年度　測研・技研コンサル・瑞穂建設吾妻地区埋蔵文化財遺跡掘削工事経常共同企業体

平成31年/令和元年度　歴史の杜・吉澤建設・南波建設吾妻地区埋蔵文化財遺跡掘削工事経常共同企業体

遺構測量　株式会社測研　空中写真撮影　技術コンサル株式会社

大型石器実測・トレース　株式会社測研

大型建築材・木製品実測・写真撮影　株式会社測研

自然科学分析　　建築部材等樹種同定　パリノ・サーヴェイ株式会社

繊維製品等の素材植物の同定　株式会社パレオ・ラボ

前原遺跡

埋蔵文化財遺跡掘削工事　シン技術・毛野・山下吾妻地区埋蔵文化財掘削工事経常共同企業体

遺構測量　株式会社測研

11　資料保管等

本発掘調査の出土遺物と調査図面、写真等の資料は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

12　謝辞

本報告書作成にあたり、下記の諸機関、諸氏にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表す。

国土交通省関東地方整備局八ッ場ダム工事事務所　同利根川ダム統合管理事務所　群馬県地域創生部　群馬県教育委員会文化財保護課　長野原町教育委員会　川原湯区

箱崎和久(奈良文化財研究所　都城発掘調査部長)には21号建物全体をはじめ遺跡内出土建築部材全般、目黒新悟(奈良文化財研究所　研究員)、山崎有生(同)には21号建物出土建材についてご教示をいただいた。

村田敬一(群馬県文化財保護審議会委員)には寺(不動院)と27号建物、大野敏(横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院教授)には建物部材について現地指導を含めてご教示いただいた。

凡　例

1　本書で使用する測量図の座標は、日本測地系による。図上の方位は座標北を示す。

2　遺構図および遺物図の縮尺は基本的に下記によるが、紙幅の範囲内で、遺構の形状を最も把握しやすいと思われる縮率を選択した。各図幅には縮尺を注記するとともに、縮尺を示すスケールを付した。また、遺物図と遺物写真は基本的に同縮尺としたが、対象の形状により異なる場合がある。遺構写真および遺物細部の拡大写真等は任意縮尺である。

遺構図　対象調査区全体図　1：2000　　屋敷・畑等全体図　1：120／1：150　　建物図　1：60／1：80

個別遺構図　1：30／1：40　　同詳細図　1：20

遺物図　漆椀や材木の柱等大きさが様々である。個々の実測図に縮尺とスケールを付した。

3　遺物写真の番号は、遺物実測図および遺構図中の遺物番号と一致するが、写真のみを掲載し、出土位置の記載や実測図掲載を行っていない遺物もある。

4　一覧表中の計測値は、それが推定値あるいは残存部の実測値である場合にはその旨を記し、あるいは(　)を付した。

5　土層、土器の色調はともに「新版標準土色帳」を基準色として慣用名を使用することとしているが、必ずしも統一されていない。基準色、慣用名が使用されていない場合には、発掘担当者の記載に従った。

6　遺構図に使用したスクリーントーンは以下を示す。

焼土　　炭化物　　灰層　　粘土　　As-A　　黒色土

硬化面　　軟化範囲　　植物痕　　筵　　黄色土　　カクラン

7　遺物は屋敷を単位に遺物番号を付けた。屋敷内に複数の建物がある場合、屋敷単位の通番とした。

8　遺物番号は陶磁器・鉄銅製品・石器の順番とした。木製品は他の遺物と区分してまとめて掲載し、遺物番号の前にWを付けた。

9　遺物図に使用したスクリーントーンは以下を示す。

黒色　　煤　　灰釉　　緑釉　　強い磨り面　　磨り面

10　本書で使用した地形図は下記の通りである。

国土地理院20万分の１地勢図「長野」、５万分の１地形図「草津」(平成11年発行)

石川原遺跡（４）・前原遺跡

総　　目　　次

石川原遺跡（４）

【本文編】（第１分冊）

序

例言

凡例

目次

挿図目次

表目次

写真目次

第１章　石川原遺跡の発掘調査

　第１節　発掘調査に至る経過

　第２節　発掘調査の経過

　第３節　整理等作業の経過

　第４節　地理的環境

　第５節　歴史的環境

　第６節　対象範囲・基本土層・調査面

第２章　発掘された遺構と遺物

　第１節　１号屋敷跡

　第２節　２号屋敷跡

　第３節　３号屋敷跡

　第４節　４号屋敷跡

　第５節　５号屋敷跡

　第６節　６号屋敷跡

　第７節　７号屋敷跡

　第８節　８号屋敷跡

　第９節　９号屋敷跡

　第10節　10号屋敷跡

　第11節　12号屋敷跡

　第12節　11号屋敷跡

　第13節　14号屋敷跡

　第14節　13号屋敷跡

　第15節　16号屋敷跡

　第16節　15号屋敷跡

　第17節　屋敷以外の建物

　第18節　寺（不動院）

　第19節　出土遺物

第３章　発掘調査成果のまとめ

　第１節　調査成果のまとめ

　第２節　石製品について

　第３節　石臼について

報告書抄録

【遺物図版編】（第２分冊）

目次

陶磁器・鉄・石製品の実測図

建築部材・木製品の実測図と写真

【遺構・遺物写真編】（第３分冊）

目次

遺構・陶磁器・鉄・石製品の写真

【建物以外の遺構・前原遺跡】（第４分冊）

目次

第４章　建物以外の遺構

　第１節　浅間山天明噴火災害からの復旧にかかる遺構

　第２節　浅間山天明噴火堆積物直下の遺構

　第３節　補遺

　第４節　付　石川原遺跡の天明泥流下畑遺構をめぐって

前原遺跡

　第１節　発掘調査の経過

　第２節　発掘された遺構

掲載遺構一覧表

写真図版

【自然科学分析・遺物観察表編】（第５分冊）

目次

第５章　自然科学分析

　第１節　建築部材・木製品の樹種同定（１）

　第２節　建築部材・木製品の樹種同定（２）

　第３節　繊維製品等の素材植物について

　第４節　出土人骨鑑定（１）

　第５節　出土人骨鑑定（２）

　第６節　人骨のDNA鑑定

　第７節　獣骨の鑑定

　第８節　緑色系漆椀の分析

遺物観察表

本 文 編 目 次

序
例言
凡例
総目次
目次
挿図目次
表目次
写真目次

第１章　石川原遺跡の発掘調査
　第１節　発掘調査に至る経過 ・・・・・・・・・・・・・ 1
　第２節　発掘調査の経過 ・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　第３節　整理等作業の経過・・・・・・・・・・・・・・ 5
　第４節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
　第５節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
　　第１項　発掘調査された周辺集落の様相
　　第２項　川原湯村の概要・変遷
　　第３項　川原湯温泉
　　第４項　不動院について
　　第５項　川原湯温泉を描いた墨刷絵
　第６節　対象範囲・基本土層・調査面 ・・・・・・・15
　　第１項　本報告の対象
　　第２項　遺跡略号と地区・区・グリッド及び発掘区
　　1 遺跡略号　2 地区・区・グリッド、発掘区
　　第３項　発掘調査の方法
　　第４項　土層と調査面

第２章　発掘された遺構と遺物
　第１節　１号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
　　第１項　１号屋敷跡概要　　第２項　１号建物
　　第３項　洗い場　　第４項　１号木枠　　第５項
　　出土遺物
　第２節　２号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
　　第１項　２号屋敷跡概要　　第２項　９号建物
　　第３項　洗い場(階段)　　第４項　中庭・中庭の踏
　　石・集められたAs-A軽石・集められた褐色土
　　第５項　10号建物　　第６項　11号建物(蔵)
　　第７項　12号建物　　第８項　25号建物　　第９項
　　24号建物　　第10項　11号道　　第11項　22号道
　　第12項　石垣について　　第13項　出土遺物
　第３節　３号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・65
　　第１項　３号屋敷跡概要　　第２項　16号建物
　　第３項　中庭の集積火山灰　　第４項　薪場１
　　第５項　中庭の造成　　第６項　１号洗い場　　第
　　７項　17号建物(蔵)　第８項　18号建物　　第９項
　　出土遺物
　第４節　４号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 106
　　第１項　４号屋敷跡概要　　第２項　20号建物構造
　　と規模　　第３項　囲炉裏　　第４項　前庭と集積
　　火山灰　　第５項　屋敷東端の段差と垣根　　第６
　　項　56号建物　　第７項　27号道　　第８項　出土
　　遺物
　第５節　５号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 120
　　第１項　５号屋敷跡概要　　第２項　21号建物構造
　　と規模　　第３項　竈と出土した釜　　第４項　囲
　　炉裏　　第５項　唐臼　　第６項　室　　第７項
　　馬屋　　第８項　57号建物　　第９項　廃材置場
　　第10項　洗い場　　第11項　出土遺物
　第６節　６号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 181
　　第１項　６号屋敷跡概要　　第２項　15号建物
　　第３項　54号建物　　第４項　洗い場　　第５項
　　石橋　　第６項　出土遺物
　第７節　７号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 197
　　第１項　７号屋敷跡概要　　第２項　13号建物
　　第３項　55号建物　　第４項　洗い場　　第５項
　　出土遺物
　第８節　８号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 205
　　第１項　８号屋敷跡概要　　第２項　30号建物
　　第３項　31号建物(蔵)　　第４項　32号建物(肥溜)
　　第５項　34号建物　　第６項　洗い場　　第７項
　　石橋　　第８項　出土遺物
　第９節　９号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 230

第１項　９号屋敷跡概要　　第２項　14号建物
第３項　35号建物　　第４項　洗い場　　第５項
石橋　　第６項　集石　　第７項　その他の遺構
第８項　出土遺物
第10節　10号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・ 244
第１項　10号屋敷跡概要　　第２項　36号建物
第３項　前庭の「有機質範囲」(推定堆肥置場)
第４項　洗い場　　第５項　石橋　　第６項　出土
遺物
第11節　12号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・ 252
第１項　12号屋敷跡概要　　第２項　42号建物
第３項　44号建物　　第４項　洗い場　　第５項
出土遺物
第12節　11号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・ 272
第１項　11・14号屋敷跡概要　　第２項　11号屋敷
跡概要　　第３項　38号建物　　第４項　48号建物
第５項　47号建物　　第６項　洗い場　　第７項
出土遺物
第13節　14号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・ 288
第１項　11・14号屋敷跡概要　　第２項　41号建
物　　第３項　49号建物　　第４項　洗い場　　第
５項　柱穴(庭)　　第６項　出土遺物
第14節　13号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・ 298
第１項　13・16号屋敷跡概要　　第２項　39号建物
第３項　46号建物　　第４項　出土遺物
第15節　16号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・ 308
第１項　13・16号屋敷跡概要　　第２項　40号建物
第３項　出土遺物
第16節　15号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・ 312
第１項　15号屋敷跡概要　　第２項　27号建物構
造と規模　　第３項　前庭と被災建物の堆積状況
第４項　物干台と物干竿　　第５項　前庭に並べら
れた植物　　第６項　洗い場　　第７項　52号建物
第８項　53号建物　　第９項　人骨の出土　　第10
項　猫の骨出土　　第11項　出土遺物
第17節　屋敷以外の建物・・・・・・・・・・・・・・・ 399
第１項　22号建物　　第２項　23号建物　　第３項
26号建物　　第４項　28号建物　　第５項　33号建
物　　第６項　43号建物　　第７項　45号建物
第８項　50号建物
１．50号建物概要　２．柱穴と柱　３．構造と規
模　４．50号建物の北に接した７号道南側の杭
５．出土遺物
第９項　51号建物　・・・・・・・・・・・・・・・・ 416
１．51号建物概要　２．構造と規模　３．囲炉裏
４．出土遺物　５．天明泥流による埋没過程　６．
７号道北側51号建物仏壇南の杭列　７．29号集石
第18節　寺(不動院)・・・・・・・・・・・・・・・・・ 431
第１項　寺の建物配置と整地　　第２項　６号建物
(本堂)　　第３項　５号建物(庫裏)　　第４項　庭
(池・築山・方形区画遺構)　　第５項　寺北側の石
垣と石段　　第６項　その他の建物　　第７項　３
号建物(観音堂)　　第８項　出土遺物
第19節　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 465

第３章　発掘調査成果のまとめ
第１節　調査成果のまとめ・・・・・・・・・・・・・・ 469
第１項　建物の規模と構造　　第２項　建物構造
第３項　土座
第２節　石製品について・・・・・・・・・・・・・・・ 483
第３節　石臼について・・・・・・・・・・・・・・・・ 489

報告書抄録

付図１
付図２
付図３

挿図目次

第１図　八ッ場ダムと石川原遺跡の位置 …… 2
第２図　石川原遺跡周辺の地名 …… 6
第３図　天明泥流下の屋敷等が発掘調査されている遺跡分布図 …… 9
第４図　吾妻郡河原畑村(川原畑村)周辺の道と村 …… 11
第５図　川原湯温泉 …… 13
第６図　川原湯村絵図(明治６年３月) …… 14
第７図　石川原遺跡発掘区配置図 …… 15
第８図　発掘区の設定 …… 17
第９図　基本土層・発掘面模式図 …… 18
第10図　６区１号屋敷位置図 …… 23・24
第11図　６区１号屋敷　１号建物 …… 25
第12図　６区１号屋敷　１号建物断面 …… 26
第13図　６区１号屋敷　１号建物断面 …… 27
第14図　６区１号屋敷　１号建物１号竈 …… 28
第15図　６区１号屋敷　１号建物１号～３号囲炉裏 …… 29
第16図　６区１号屋敷　１号建物唐臼、馬屋 …… 30
第17図　６区１号屋敷洗い場 …… 31
第18図　６区１号屋敷１号木枠 …… 32
第19図　７区２号屋敷位置図 …… 35・36
第20図　７区２号屋敷断面 …… 37
第21図　７区２号屋敷石垣立面１ …… 38
第22図　７区２号屋敷石垣立面２ …… 39
第23図　７区２号屋敷石垣断面 …… 40
第24図　７区２号屋敷　９号建物 …… 41・42
第25図　７区２号屋敷　９号建物竈 …… 44
第26図　７区２号屋敷　９号建物１号囲炉裏 …… 45
第27図　７区２号屋敷　９号建物２号・３号囲炉裏 …… 46
第28図　７区２号屋敷　９号建物室・馬屋１ …… 49
第29図　７区２号屋敷　９号建物馬屋２ …… 50
第30図　７区２号屋敷　９号建物洗い場 …… 52
第31図　７区２号屋敷　10号建物 …… 53
第32図　７区２号屋敷　10号建物囲炉裏 …… 55
第33図　７区２号屋敷　11号建物 …… 56
第34図　７区２号屋敷　12号建物 …… 58
第35図　７区２号屋敷　25号建物 …… 59
第36図　７区２号屋敷　25号建物断面 …… 60
第37図　７区２号屋敷　24号建物 …… 61
第38図　７区２号屋敷　24号建物断面 …… 62
第39図　５区３号屋敷位置図 …… 67・68
第40図　５区３号屋敷　16号建物断面(１) …… 69・70
第41図　５区３号屋敷　16号建物断面(２) …… 71
第42図　５区３号屋敷　16号建物竈 …… 72
第43図　５区３号屋敷　16号建物１号囲炉裏 …… 73
第44図　５区３号屋敷　16号建物２号囲炉裏 …… 74
第45図　５区３号屋敷　16号建物３号囲炉裏 …… 75
第46図　５区３号屋敷　16号建物室 …… 76
第47図　５区３号屋敷　16号建物唐臼(１) …… 77
第48図　５区３号屋敷　16号建物唐臼(２) …… 78
第49図　５区３号屋敷　16号建物馬屋(１) …… 79
第50図　５区３号屋敷　16号建物馬屋(２)・1561号土坑(便槽) …… 81
第51図　５区３号屋敷　16号建物厠 …… 82
第52図　５区３号屋敷　16号建物遺物出土状況 …… 83・84
第53図　５区３号屋敷　庭全体図・断面・石列 …… 85・86
第54図　５区３号屋敷　薪遺構(１) …… 87
第55図　５区３号屋敷　薪遺構(２) …… 88
第56図　５区３号屋敷　１号洗い場(１) …… 90
第57図　５区３号屋敷　１号洗い場(２)立面図 …… 91
第58図　５区３号屋敷　17号建物(１) …… 93
第59図　５区３号屋敷　17号建物(２) …… 94
第60図　５区３号屋敷　17号建物(３) …… 95
第61図　５区３号屋敷　18号建物 …… 96
第62図　５区３号屋敷　18号建物(板面) …… 99
第63図　５区３号屋敷　18号建物(大引・根太) …… 100
第64図　５区３号屋敷　18号建物(礎石) …… 102
第65図　５区３号屋敷　18号建物１号・２号囲炉裏 …… 103
第66図　５区３号屋敷　18号建物床上遺物図 …… 104
第67図　５区３号屋敷　18号建物床下遺物図 …… 105
第68図　５区４号屋敷・５号屋敷位置図 …… 107
第69図　５区４号屋敷 …… 108
第70図　５区４号屋敷　20号建物(板面) …… 110
第71図　５区４号屋敷　20号建物(大引・根太) …… 111
第72図　５区４号屋敷　20号建物(礎石) …… 112
第73図　５区４号屋敷　20号屋敷断面(１) …… 113
第74図　５区４号屋敷　20号建物断面(２) …… 114
第75図　５区４号屋敷　20号建物１号囲炉裏 …… 117
第76図　５区４号屋敷　20号建物２号囲炉裏 …… 118
第77図　５区４号屋敷　56号建物 …… 119
第78図　５区５号屋敷位置図 …… 121
第79図　５区５号屋敷　21号建物 …… 122
第80図　５区５号屋敷　21号建物床面・柱・土台 …… 124
第81図　５区５号屋敷　21号建物土台石 …… 125
第82図　５区５号屋敷　21号建物ピット断面 …… 126
第83図　５区５号屋敷　21号建物石列・土台石等断面 …… 127
第84図　５区５号屋敷　21号建物板間の床板 …… 129
第85図　５区５号屋敷　21号建物板間の柱・大引・根太 …… 130
第86図　５区５号屋敷　21号建物土台石の配置 …… 133
第87図　５区５号屋敷　21号建物壁材１ …… 137
第88図　５区５号屋敷　21号建物壁材２(上面) …… 138
第89図　５区５号屋敷　21号建物壁材３(下面) …… 139
第90図　５区５号屋敷　21号建物壁材４ …… 140
第91図　５区５号屋敷　21号建物１号竈 …… 142
第92図　５区５号屋敷　21号建物１号・２号囲炉裏 …… 143
第93図　５区５号屋敷　21号建物唐臼 …… 145
第94図　５区５号屋敷　21号建物室 …… 147
第95図　５区５号屋敷　21号建物馬屋 …… 148
第96図　５区５号屋敷　57号建物厠 …… 149
第97図　５区５号屋敷　廃材置場 …… 151
第98図　５区５号屋敷　洗い場 …… 152
第99図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(１)建材 …… 154
第100図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(２)建材 …… 155
第101図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(３)建材 …… 156
第102図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(４)建材 …… 157
第103図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(５)建材 …… 158
第104図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(６)建材 …… 159
第105図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(７)建材 …… 160
第106図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(８)建材 …… 161
第107図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(９)建材 …… 162
第108図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(10)建材 …… 163
第109図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(11)建材 …… 164
第110図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(12)建材 …… 165
第111図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(13)製品 …… 166
第112図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(14)製品 …… 167
第113図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(15)製品 …… 168
第114図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(16)製品 …… 169
第115図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(17)製品 …… 170
第116図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(18)製品 …… 171
第117図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(19)製品 …… 172
第118図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(20)製品 …… 173
第119図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(21)その他 …… 174
第120図　５区５号屋敷　21号建物仏壇出土遺物 …… 179
第121図　５区５号屋敷　21号建物仏壇北出土遺物 …… 180
第122図　６区６号屋敷位置図 …… 182
第123図　６区６号屋敷 …… 183
第124図　６区６号屋敷　15号建物 …… 184
第125図　６区６号屋敷　15号建物断面(１) …… 185
第126図　６区６号屋敷　15号建物断面(２) …… 186

第127図　６区６号屋敷　15号建物ピット・室(1210号土坑)・木杭 ・ 187
第128図　６区６号屋敷　15号建物竈 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 188
第129図　６区６号屋敷　15号建物囲炉裏 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 190
第130図　６区６号屋敷　15号建物馬屋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 191
第131図　６区６号屋敷　15号建物(屋敷整地に伴う配石)・床下土坑・ 193
第132図　６区６号屋敷　15号建物遺物出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・ 194
第133図　６区６号屋敷　54号建物厠・庭周辺 ・・・・・・・・・・・・・・・ 195
第134図　８区７・８号屋敷位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 198
第135図　８区７号屋敷　13号建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 199
第136図　８区７号屋敷　13号建物ピット断面 ・・・・・・・・・・・・・・・ 200
第137図　８区７号屋敷　13号建物竈 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 201
第138図　８区７号屋敷　13号建物１号・２号囲炉裏 ・・・・・・・・・・・ 202
第139図　８区７号屋敷　13号建物唐臼・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 203
第140図　８区７号屋敷　55号建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 204
第141図　８区８号・９号・10号・12号屋敷位置図 ・・・・・・・・・・・・ 206
第142図　８区断面 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 207
第143図　８区８号屋敷位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 208
第144図　８区８号屋敷　30号建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 209
第145図　８区８号屋敷　30号建物断面(１)・・・・・・・・・・・・・・・・ 210
第146図　８区８号屋敷　30号建物断面(２)・・・・・・・・・・・・・・・・ 211
第147図　８区８号屋敷　30号建物１号竈 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 213
第148図　８区８号屋敷　30号建物２号竈 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 214
第149図　８区８号屋敷　30号建物１号囲炉裏 ・・・・・・・・・・・・・・・ 215
第150図　８区８号屋敷　30号建物２号・３号囲炉裏 ・・・・・・・・・・・ 216
第151図　８区８号屋敷　30号建物唐臼・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 217
第152図　８区８号屋敷　30号建物馬屋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 219
第153図　８区８号屋敷　30号建物遺物出土・・・・・・・・・・・・・・・・・ 220
第154図　８区８号屋敷　31号建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 221
第155図　８区８号屋敷　32号建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 223
第156図　８区８号屋敷　34号建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 224
第157図　８区８号屋敷　洗い場１ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 225
第158図　８区８号屋敷　洗い場２ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 226
第159図　８区８号屋敷　洗い場３ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 227
第160図　８区８号屋敷　石橋(53号溝５号石橋)・・・・・・・・・・・・・・ 227
第161図　８区８号屋敷壁材・７区漂着物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 228
第162図　８区30号建物前庭出土壁材、７区漂着物 ・・・・・・・・・・・・ 229
第163図　８区９号屋敷位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 231
第164図　８区９号屋敷　14号建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 232
第165図　８区９号屋敷　14号建物断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 233
第166図　８区９号屋敷　14号建物竈 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 236
第167図　８区９号屋敷　14号建物囲炉裏・焼土 ・・・・・・・・・・・・・・ 237
第168図　８区９号屋敷　14号建物唐臼・馬屋 ・・・・・・・・・・・・・・・ 238
第169図　８区９号屋敷　35－１号建物(厠)・35－２号建物 ・・・・・・ 240
第170図　８区９号屋敷　洗い場・石橋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 242
第171図　８区９号屋敷　集石 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 243
第172図　８区10号屋敷位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 245
第173図　８区10号屋敷　36号建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 246
第174図　８区10号屋敷　36号建物断面(１)・・・・・・・・・・・・・・・・ 247
第175図　８区10号屋敷　36号建物断面(２)・・・・・・・・・・・・・・・・ 248
第176図　８区10号屋敷　36号建物竈 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 249
第177図　８区10号屋敷　36号建物１号囲炉裏 ・・・・・・・・・・・・・・・ 250
第178図　８区10号屋敷　洗い場・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 251
第179図　８区10号屋敷　石橋 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 251
第180図　８区９号屋敷・７区12号屋敷位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・ 253
第181図　７区12号屋敷位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 254
第182図　７区12号屋敷　42号建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 255
第183図　７区12号屋敷　42号建物断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 256
第184図　７区12号屋敷　42号建物１号囲炉裏 ・・・・・・・・・・・・・・・ 258
第185図　７区12号屋敷　42号建物唐臼、室(旧２号囲炉裏)・・・・・・ 260
第186図　７区12号屋敷　42号建物馬屋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 261
第187図　７区12号屋敷　42号建物ネコの大きさと敷かれた範囲・・・ 263
第188図　７区12号屋敷　42号建物床下遺構・・・・・・・・・・・・・・・・ 266
第189図　７区12号屋敷　42号建物竈(旧６号囲炉裏)、３号・５号
囲炉裏 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 267
第190図　７区12号屋敷　42号建物４号・７号囲炉裏 ・・・・・・・・・・・ 268
第191図　７区12号屋敷　44号建物(便所) ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 270
第192図　７区12号屋敷　洗い場・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 271
第193図　６区11号・14号・13号屋敷位置図・・・・・・・・・・・・・・・・ 273
第194図　６区11号・14号屋敷 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 274
第195図　６区11号屋敷　38号建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 275
第196図　６区11号屋敷　38号建物断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 276
第197図　６区11号屋敷　38号建物１号囲炉裏 ・・・・・・・・・・・・・・・ 278
第198図　６区11号屋敷　38号建物２号・４号・５号囲炉裏・・・・・・ 279
第199図　６区11号屋敷　38号建物床下遺構・竈・３号囲炉裏 ・・・・ 280
第200図　６区11号屋敷　38号建物６号囲炉裏(１号集石) ・・・・・・・ 281
第201図　６区11号屋敷　38号建物唐臼・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 281
第202図　６区11号屋敷　38号建物遺物出土状態・・・・・・・・・・・・・・ 282
第203図　６区11号屋敷　48号建物(厠)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 284
第204図　６区11号屋敷　47号建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 286
第205図　６区11号屋敷　洗い場・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 287
第206図　６区14号屋敷　41号建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 289
第207図　６区14号屋敷　41号建物断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 290
第208図　６区14号屋敷　41号建物竈 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 292
第209図　６区14号屋敷　41号建物１号囲炉裏・唐臼 ・・・・・・・・・・・ 293
第210図　６区14号屋敷　41号建物室・馬屋・・・・・・・・・・・・・・・・・ 294
第211図　６区14号屋敷　41号建物遺物出土状態・・・・・・・・・・・・・・ 295
第212図　６区14号屋敷　49号建物(厠)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 296
第213図　６区14号屋敷　洗い場・柱穴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 297
第214図　６区13・16号屋敷位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 299
第215図　６区13号屋敷　39号建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 301
第216図　６区13号屋敷　39号建物断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 302
第217図　６区13号屋敷　39号建物竈・囲炉裏 ・・・・・・・・・・・・・・・ 304
第218図　６区13号屋敷　39号建物唐臼・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 305
第219図　６区13号屋敷　46号建物(厠)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 305
第220図　６区13号屋敷　39号建物遺物出土状態(１)・・・・・・・・・・・ 306
第221図　６区13号屋敷　南東部遺物群遺物出土状態(２)・・・・・・・ 307
第222図　６区16号屋敷　40号建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 309
第223図　６区16号屋敷　40号建物断面・竈・・・・・・・・・・・・・・・・・ 310
第224図　６区16号屋敷　40号建物囲炉裏・1565土坑(厠) ・・・・・・・ 311
第225図　５区15号屋敷位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 313
第226図　５区15号屋敷　27号建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 317
第227図　５区15号屋敷　27号建物断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 318
第228図　５区15号屋敷　27号建物１号・２号竈(１)・室 ・・・・・・・ 325
第229図　５区15号屋敷　27号建物１号・２号竈(２)・・・・・・・・・・・ 326
第230図　５区15号屋敷　27号建物１号・２号囲炉裏 ・・・・・・・・・・・ 328
第231図　５区15号屋敷　27号建物３号囲炉裏 ・・・・・・・・・・・・・・・ 329
第232図　５区15号屋敷　27号建物唐臼・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 330
第233図　５区15号屋敷　27号建物馬屋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 332
第234図　５区15号屋敷　27号建物厠 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 333
第235図　５区15号屋敷　物干場・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 334
第236図　５区15号屋敷　洗い場・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 335
第237図　５区15号屋敷　52・53号建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 337
第238図　５区15号屋敷　52号建物断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 338
第239図　５区15号屋敷　53号建物断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 339
第240図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(１) ・・・・・・・・・・・・ 342
第241図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(２) ・・・・・・・・・・・・ 343
第242図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(３) ・・・・・・・・・・・・ 344
第243図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(４) ・・・・・・・・・・・・ 345
第244図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(５) ・・・・・・・・・・・・ 346
第245図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(６) ・・・・・・・・・・・・ 347
第246図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(７) ・・・・・・・・・・・・ 348
第247図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(８) ・・・・・・・・・・・・ 349
第248図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(９) ・・・・・・・・・・・・ 350
第249図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(10) ・・・・・・・・・・・・ 351
第250図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(11) ・・・・・・・・・・・・ 352
第251図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(12) ・・・・・・・・・・・・ 353
第252図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(13) ・・・・・・・・・・・・ 354
第253図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(14) ・・・・・・・・・・・・ 355
第254図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(15) ・・・・・・・・・・・・ 356
第255図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(16) ・・・・・・・・・・・・ 357
第256図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(17) ・・・・・・・・・・・・ 358
第257図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(18) ・・・・・・・・・・・・ 359

第258図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(19) ・・・・・・・・・・・・ 360
第259図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(20) ・・・・・・・・・・・・ 361
第260図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(21) ・・・・・・・・・・・・ 362
第261図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(22) ・・・・・・・・・・・・ 363
第262図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(23) ・・・・・・・・・・・・ 364
第263図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(24) ・・・・・・・・・・・・ 365
第264図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(25) ・・・・・・・・・・・・ 366
第265図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(26) ・・・・・・・・・・・・ 367
第266図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(27) ・・・・・・・・・・・・ 368
第267図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(28) ・・・・・・・・・・・・ 369
第268図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(29) ・・・・・・・・・・・・ 370
第269図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(30) ・・・・・・・・・・・・ 371
第270図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(31) ・・・・・・・・・・・・ 372
第271図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(32) ・・・・・・・・・・・・ 373
第272図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(33) ・・・・・・・・・・・・ 374
第273図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(34) ・・・・・・・・・・・・ 375
第274図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(35) ・・・・・・・・・・・・ 376
第275図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(36) ・・・・・・・・・・・・ 377
第276図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(37) ・・・・・・・・・・・・ 378
第277図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(38) ・・・・・・・・・・・・ 379
第278図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(39) ・・・・・・・・・・・・ 380
第279図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(40) ・・・・・・・・・・・・ 381
第280図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(41) ・・・・・・・・・・・・ 382
第281図　５区15号屋敷　27号建物土台・柱出土図 ・・・・・・・・・・・・ 383
第282図　５区15号屋敷　27号建物土台・柱・壁出土図・・・・・・・・・・ 384
第283図　５区15号屋敷　27号建物大戸・障子・板戸出土図・・・・・・ 385
第284図　５区15号屋敷　27号建物人骨・猫出土図 ・・・・・・・・・・・・ 386
第285図　５区15号屋敷　27号建物縁側板 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 387
第286図　５区15号屋敷　27号建物構造材 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 388
第287図　５区15号屋敷　27号建物２階構造材と床板 ・・・・・・・・・・・ 389
第288図　５区15号屋敷　27号建物食膳用品出土図 ・・・・・・・・・・・・ 390
第289図　５区15号屋敷　27号建物桶・樽出土図・・・・・・・・・・・・・・ 391
第290図　５区15号屋敷　27号建物戸棚出土図(１) ・・・・・・・・・・・・ 392
第291図　５区15号屋敷　27号建物戸棚出土図(２) ・・・・・・・・・・・・ 393
第292図　５区15号屋敷　27号建物戸棚出土図(３) ・・・・・・・・・・・・ 394
第293図　５区15号屋敷　27号建物戸棚出土図(４) ・・・・・・・・・・・・ 395
第294図　５区15号屋敷　27号建物戸棚出土図(５) ・・・・・・・・・・・・ 396
第295図　５区15号屋敷　27号建物戸棚出土図(６) ・・・・・・・・・・・・ 397
第296図　５区15号屋敷　27号建物戸棚出土図(７) ・・・・・・・・・・・・ 398
第297図　６区22号建物　１面 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 399
第298図　６区22号建物　２面 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 400
第299図　６区22号建物断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 401
第300図　５区23号建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 402
第301図　５区26号建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 404
第302図　７区28号建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 405
第303図　８区33号建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 406
第304図　８区43号建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 408
第305図　８区43号建物断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 409
第306図　10区45号建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 411
第307図　５区50号建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 413
第308図　５区51号建物・29号集石 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 417
第309図　５区51号建物　囲炉裏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 420
第310図　５区51号建物　遺物出土状態(西壁)１面 ・・・・・・・・・・・・ 422
第311図　５区51号建物　遺物出土状態(柱・土台)２面・・・・・・・・・ 423
第312図　５区51号建物　遺物出土状態３面・・・・・・・・・・・・・・・・ 424
第313図　５区51号建物　遺物出土状態４面・・・・・・・・・・・・・・・・ 425
第314図　５区51号建物断面(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 426
第315図　５区51号建物断面(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 427
第316図　５区51号建物　遺物出土状態仏壇１・２ ・・・・・・・・・・・・ 428
第317図　５区51号建物　遺物出土状態仏壇３・４ ・・・・・・・・・・・・ 429
第318図　寺の建物配置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・433・434
第319図　１区不動院・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 435
第320図　１区不動院　６号建物(本堂)１ ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 436
第321図　１区不動院　６号建物(本堂)２断面(１) ・・・・・・・・・437・438
第322図　１区不動院　６号建物断面(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・ 439
第323図　１区不動院　５号建物(庫裏)１ ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 441
第324図　１区不動院　５号建物(庫裏)２遺物出土状態・・・・・・・・・ 442
第325図　１区不動院　５号建物(庫裏)３遺物出土状態・・・・・・・・・ 443
第326図　１区不動院　５号建物(庫裏)断面(１)・・・・・・・・・・・・・ 444
第327図　１区不動院　５号建物(庫裏)断面(２)・・・・・・・・・・・・・ 445
第328図　１区不動院　５号建物(庫裏)４号土坑遺物出土状態(１) ・ 447
第329図　１区不動院　５号建物(庫裏)４号土坑遺物出土状態(２) ・ 448
第330図　１区不動院　築山・池状遺構１面・取水溝 ・・・・・・・・・・ 451
第331図　１区不動院　築山・池状遺構断面(１)・・・・・・・・・・・・・ 452
第332図　１区不動院　池状遺構・取水溝・２号長方形配石遺構立面・
断面(２) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 453
第333図　１区不動院　池状遺構２面 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 454
第334図　１区不動院　３号石垣位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 455
第335図　１区不動院　３号石垣・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 456
第336図　１区不動院　３号石垣立面・断面・・・・・・・・・・・・・・・・ 457
第337図　１区不動院　１号長方形配石遺構・旧８号建物 ・・・・・・・ 458
第338図　１区不動院　１号長方形配石遺構・旧８号建物断面 ・・・・ 459
第339図　１区不動院　３号建物(観音堂)１・・・・・・・・・・・・・・・・ 461
第340図　１区不動院　３号建物断面 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 462
第341図　１区不動院　３号建物(観音堂)２・・・・・・・・・・・・・・・・ 463
第342図　１区不動院　３号建物(薬師堂)断面 ・・・・・・・・・・・・・・・ 464
第343図　５区７号道(21・25号道交差点東側) ・・・・・・・・・・・・・・・ 466
第344図　５区３号水路周辺遺物出土状態(１) ・・・・・・・・・・・・・・・ 467
第345図　５区３号水路周辺遺物出土状態(２) ・・・・・・・・・・・・・・・ 468
第346図　上層農家の屋敷例(１)土台建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 471
第347図　上層農家の屋敷例(２)土台建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 472
第348図　中層農家の屋敷例(１)土台建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 473
第349図　中層農家の屋敷例(２)掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・・・ 474
第350図　中・下層農家掘立柱建物と階層不明の屋敷 ・・・・・・・・・・・ 475
第351図　小屋・寺・お堂と思われる建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 476
第352図　下湯原遺跡光背形墓標の変遷(松村 2018加筆)と石川原遺跡
光背形墓標の変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 487
第353図　下湯原遺跡・石川原遺跡光背形墓標の変遷 ・・・・・・・・・・・ 488
第354図　石臼(上臼) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 493
第355図　石臼(上臼・下臼)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 494

表 目 次

第１表　遺跡調査の経過 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 3・4
第２表　本報告書の遺跡と天明泥流下の屋敷等が発掘調査されている遺跡 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 10
第３表　川原畑村周辺における元禄16(1703)年の石高一覧 ‥‥‥‥ 11
第４表　川原湯村の石高変遷 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 12
第５表　川原湯村の人口と家数等 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 12
第６表　下湯原遺跡および石川原遺跡地域における畑数 ‥‥‥‥‥ 12
第７表　八ッ場ダム建設に伴う発掘調査遺跡の略号 ‥‥‥‥‥‥ 16
第８表　石川原遺跡本文編掲載順 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 19
第９表　建物一覧表 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 20
第10表　屋敷別面積及び建物面積等一覧 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 477
第11表　高崎市域の墓標(墓石)編年 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 486
第12表　石臼全体計測表 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 491
第13表　石臼(上臼)・(下臼)計測表 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 492

写 真 目 次

写真１　７区12号屋敷　42号建物土座ネコのサンプル ‥‥‥‥‥ 264

第１章　石川原遺跡の発掘調査

第１節　発掘調査に至る経過
第２節　発掘作業の経過
第３節　整理等作業の経過
第４節　地理的環境
第５節　歴史的環境
　第１項　発掘調査された周辺集落の様相
　第２項　川原湯村の概要・変遷
　第３項　川原湯温泉
　第４項　不動院について
　第５項　川原湯温泉を描いた墨刷絵
第６節　対象範囲・基本土層
　第１項　本報告の対象
　第２項　遺跡略号と地区・区・グリッド及び発掘区
　　１　遺跡略号　２　地区・区・グリッド、発掘区
　第３項　発掘調査の方法
　第４項　基本土層と調査面

第１節　発掘調査に至る経過

八ッ場ダムは、洪水調節、流水機能維持、用水源の新たな確保並びに発電を目的とする多目的ダムとして、吾妻川中流の群馬県吾妻郡長野原町大字川原畑字八ッ場および大字川原湯字金花山に建設された。昭和24年に利根川改修改定計画の一環として立案され、昭和27年には建設準備のための調査が着手されたが、紆余曲折を経て平成４年に至って本格的な工事が着手され、令和２年４月に完成した。

ダム建設地域内のうち、長野原町内の文化財に関しては、町教育委員会が昭和61年から文化財総合調査計画を策定し、自然環境や民俗、石造文化財、古文書、昔話等の調査を行うとともに、埋蔵文化財の詳細分布調査も行った。

八ッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、建設省関東地方建設局（現国土交通省関東地方整備局）と群馬県教育委員会、長野原町教育委員会、吾妻町教育委員会（現東吾妻町教育委員会）が協議し、平成６年３月18日「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定書」を建設省関東地方建設局と群馬県教育委員会の両者で締結し、発掘調査事業の実施計画が決定された。調査組織等の役割は、調査実施機関は群馬県教育委員会で、調査機関は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団とした。

同年４月１日、関東地方建設局長と群馬県教育委員会との間で発掘調査受託契約を締結し、同日同教育長と群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長の両者で発掘調査委託契約が締結され、発掘調査が開始された。

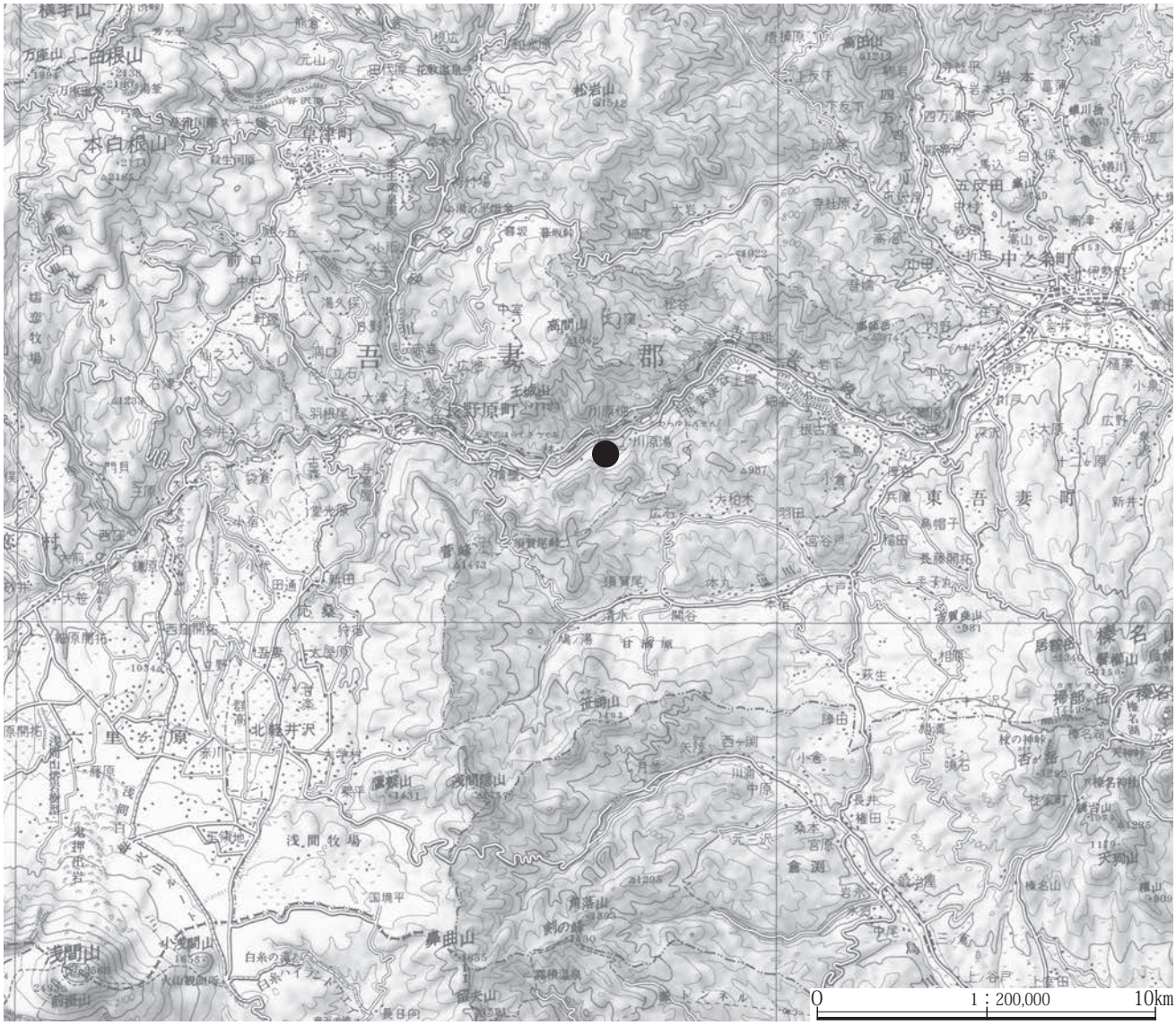
さらに、平成11年４月１日に関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長により「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定の一部を変更する協定書」を締結し、平成11年４月１日以降は調査実施機関を財団法人群馬県埋蔵文化財調査業団に変更している。以後、平成17年、平成20年、平成28年、平成29年、平成30年と６回にわたる協定変更を重ね、現在に至っている。

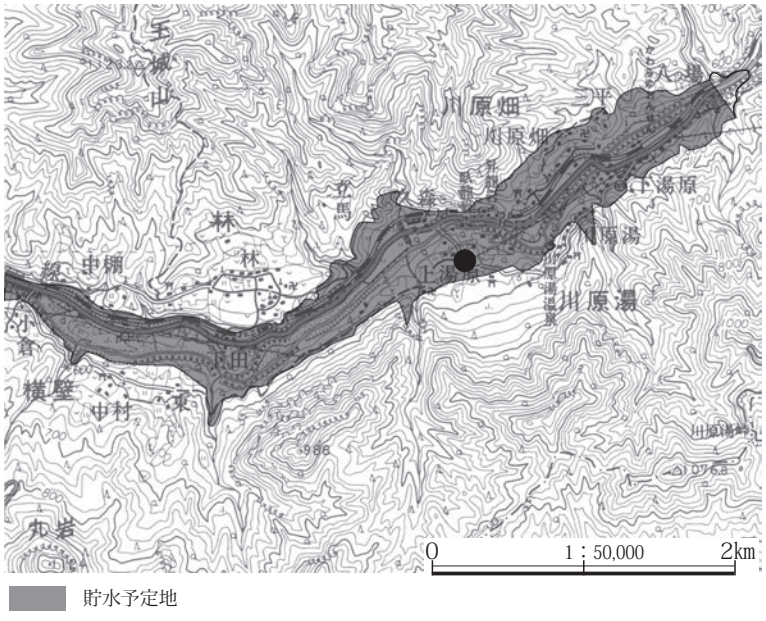
石川原遺跡は、群馬県吾妻郡長野原町大字川原湯乙37番地ほかに所在する（第１図）。平成20年度及び平成26年度から令和元年度にかけて、財団法人（平成24年から公益財団法人）群馬県埋蔵文化財調査事業団が行った。総対象面積は97,398㎡に及ぶ。

第２節　発掘調査の経過

本遺跡の発掘調査は平成20年度に着手され、その後平成26年度から令和元年度にかけて実施された。地形及び現道による区画により、１区から10区の発掘区を設定しているが、工事工程に合わせてその都度発掘地点を設定しているため、年度毎の発掘区域はより細分され、複雑な形状を呈する。

平成20年度には、８月から10月にかけて、担当者２名により、後に６区とされる調査区の一部を発掘し、天明泥流下の屋敷、畑、縄文時代の集落を確認した。この調査により、当遺跡には、天明泥流下の屋敷群を含む埋没





第１図　八ッ場ダムと石川原遺跡の位置（国土地理院20万分の１と地勢図「長野」、５万分の１地形図「草津」使用）

第１表　遺跡調査の経過

（前半は1月から6月、後半は7月から12月）

		2008年		2014年		2015年		2016年		2017年		2018年	
		平成20年		平成26年		平成27年		平成28年		平成29年		平成30年	
		前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半
1号屋敷	表土・泥流除去												
	1号建物												
	洗い場												
	1号木枠												
2号屋敷	表土・泥流除去												
	9号建物												
	洗い場(階段)												
	中庭・中庭の踏み石												
	10号建物												
	11号建物												
	12号建物												
	25号建物												
	24号建物												
	11号道												
	22号道												
	石垣												
3号屋敷	表土・泥流除去												
	16号建物												
	中庭の集合火山灰												
	薪場1												
	1号洗い場												
	17号建物(蔵)												
	18号建物												
4号屋敷	表土・泥流除去												
	20号建物												
	前庭と灰かき山												
	56号建物												
	27号道												
5号屋敷	表土・泥流除去												
	21号建物												
	57号建物												
	廃材置き場												
	洗い場												
6号屋敷	表土・泥流除去												
	15号建物												
	54号建物												
	洗い場												
	石橋												
7号屋敷	表土・泥流除去												
	13号建物												
	55号建物												
8号屋敷	表土・泥流除去												
	30号建物												
	31号建物												
	32号建物												
	34号建物												
	洗い場												
	石橋												
9号屋敷	表土・泥流除去												
	14号建物												
	35号建物												
	洗い場												
	石橋												
	集積												

		2008年		2014年		2015年		2016年		2017年		2018年	
		平成20年		平成26年		平成27年		平成28年		平成29年		平成30年	
		前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半
10号屋敷	表土・泥流除去												
	36号建物												
	洗い場												
	石橋												
12号屋敷	表土・泥流除去												
	42号建物												
	44号建物												
	洗い場												
11号屋敷	表土・泥流除去												
	38号建物												
	48号建物												
	47号建物												
	洗い場												
14号屋敷	表土・泥流除去												
	41号建物												
	49号建物												
	洗い場												
13号屋敷	表土・泥流除去												
	39号建物												
	46号建物												
15号屋敷	27号建物												
	前庭被災建物												
	物干し台												
	洗い場												
	52号建物												
	53号建物												
16号屋敷	表土・泥流除去												
	40号建物												
屋敷以外の建物	22号建物												
	23号建物												
	26号建物												
	33号建物												
	43号建物												
	45号建物												
	50号建物												
	51号建物												
寺（不動院）	表土・泥流除去												
	6号建物（本堂）												
	5号建物（庫裏）												
	3号建物（観音堂）												
	旧7・8号建物												
	池・築山												
	石垣と石段												

村落があり、縄文時代には列石・配石を伴う大規模集落があることが予測された。

その後中断を経て、平成26年度に発掘調査を再開した。４月から12月にかけて、担当者２名により、遺跡北東部の１区及び２区の大部分の発掘を行った。天明泥流下の建物、畑、中近世の掘立柱建物群、畑、墓、平安時代の竪穴建物などを検出した。また、遺跡東端部では、後に「不動院」と想定された寺院遺構が確認され、翌年度の発掘調査に引き継ぐことになる。

平成27年度は４月から７月にかけて、担当者２名により、昨年度確認された寺院遺構および関連建物の発掘調査を継続した。本堂や庫裏と想定される建物、池や築山のある苑地を確認した。また、銅製の密教法具一括など良好な資料が出土した。

平成28年度は４月から平成29年３月にかけて、担当者６名により、１区から８区のそれぞれ一部が発掘調査され、天明泥流下の屋敷や畑、前昨年度調査を行った寺院遺構の一部をなす階段、中近世の畑、平安時代集落の他、墓坑や掘立柱建物、縄文時代の配石遺構や集落の一部が確認された。天明泥流下の遺構は建築材や生活用具などが良好に残っており、また縄文時代の遺構範囲は予想を上回るものであったため、調査期間の延長を行うとともに、効率的な発掘調査行うために、冬季に次年度調査予定地の表土掘削を先行して実施した。

平成29年度は４月から平成30年３月にかけて、担当者８名により、１・２区・４区～10区それぞれの一部を発掘調査した。天明泥流下の屋敷や畑、中近世の田畑、鍛冶遺構、平安時代集落の他、縄文時代の配石遺構や集落が確認された。山間の寒冷地である当地域において、中世相当面での水田確認は極めて希な例である。縄文時代遺構等については、冬期も継続して発掘調査を行った。

平成30年度は４月から平成31年３月にかけて、担当者８名により、５区～７区のそれぞれ一部について発掘調査を行った。天明泥流下で、２階建ての建物を含む、建築部材や道具類を多く出土する屋敷が確認され、さらには４体の人骨も出土した。縄文時代面でも、竪穴建物や列石・配石遺構、掘立柱建物、水場などの多様な遺構が発掘調査され、膨大な量の遺物が出土した。当年度で縄文時代の一部遺構を除いて、発掘調査を終了し、引き渡しを行った。平成31年・令和元年度は、４月から６月まで、担当者２名により、７区の縄文時代の竪穴建物、配石遺構、配石墓等の発掘調査を行った。これにより、本遺跡の発掘調査を終了した。

これら全体の調査経過とは別に、第１表に、本報告書で報告する天明泥流下で調査された建物や屋敷の発掘調査経過をまとめた。

第３節　整理等作業の経過

平成20年度の発掘作業終了後、冬期の屋外作業困難期にあたる平成29年１月から３月まで、担当者１名で、基礎的な整理作業を行った。平成29年１月から３月には担当者２名で、また同４月から平成30年３月には、担当者１名が、遺跡東部にあたる１区から３区の中世以後にかかる遺構、遺物について整理等作業を行い、平成29年度には、このうちの寺院遺構を除く部分について、「石川原遺跡（１）」として発掘調査報告書を刊行した。平成30年は縄文時代の遺構・遺物については当事業団八ッ場ダム調査事務所で、それ以外の時代の遺構遺物については当事業団本部で整理等作業を行うこととし、５名の担当者が配置された。平成31・令和元年度は、縄文時代担当２名、天明泥流下建物担当１名と、これに該当しない遺構遺物の担当１名の計４名が配置され、中近世から平安時代を対象とする発掘報告書として「石川原遺跡（２）」を刊行した。令和２年度は縄文時代の遺構・遺物について八ッ場ダム調査事務所で２名、天明泥流下の遺構担当１名の３名の担当者が配置された。天明泥流下遺構の発掘調査報告が本書である。

本報告書で取り扱った、天明泥流下の屋敷や建物の整理事業は、遺跡内から出土した膨大な建築部材や木や竹を用いて作られた生活用具の基礎整理から始めた。小さなお盆や曲物やかご等は発掘された段階で本部の保存処理室に運ばれ、保存処理等が実施されてきた。現場のプールで保存されていた大きな柱や梁等の建築部材は、整理のためにトラック数台で本部に運び、洗浄後実測写真撮影等を実施した。これらの木製品等は、水に浸かっていたことにより保存されてきたものであり、発掘調査により取り上げられた段階から、常に水につけておかないと乾燥して割れる。またカビが発生する。1.5m以下の小さな木製品等の多くは、真空凍結乾燥等により保存処理

を実施した。２m以上の大きな建材は、表面にPEG等を複数回塗布して、急激な乾燥を防いだ。これらの保存処理や、実測及び写真撮影は、多くの時間を必要とした。整理が終了し、報告書に掲載できた建築部材や生活用具は、1000点を超えている。竹で編まれたかごや現場から取り上げられなかった製品についても、現場で撮影された写真を掲載し、多くの情報を報告できるように努めた。

第４節　地理的環境

長野原町は群馬県北西部､吾妻郡の南西隅に位置する。町域の北部を吾妻川が東流し、川を挟んで北西には草津白根山、南西には浅間山が位置する。また東部には、吾妻川より北側に高間山(1342m)や王城山(1123m)、南側に丸岩(1124m)や菅峰(1474m)、浅間隠山(1757m)、鼻曲山などが南北に連なる。長野原町は、その地形の特徴から、高間及び白根の両山系と菅峰に挟まれた吾妻川流域地帯の北部と浅間高原地帯の南部とに大別される。

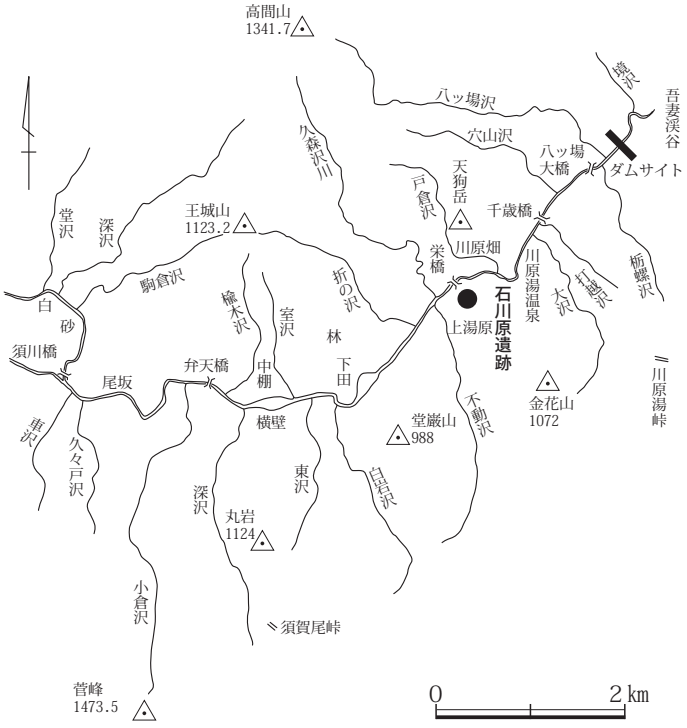
吾妻川は、長野県境の鳥居峠(1362m)付近に水源を発して東流し、町域のほぼ中央では川幅をやや広くするものの、東端では第３紀層を刻んで吾妻渓谷を形成している。その支流は、両岸の山地から発する河川や渓流が多く、左岸には草津白根山麓から発する万座川や赤川、遅沢川、上信越国境の白砂山麓から発する白砂川などが南流する。また右岸には、浅間山麓から発する小宿川や、鼻曲山麓から発する熊川などが北流する。流長76.2㎞の吾妻川は、渋川市街地付近で、全長322㎞の利根川に合流する。

長野原町は、地質構造上では那須火山帯と富士火山帯が接する付近にあるため、周囲の山地は火山活動により形成された火山性山地が多く、浅間山や白根山は現在も活動を続ける。高間山や王城山、菅峰も約100～90万年前頃活動していた火山であるが、現在は浸食が進みほとんど原形を止めていない。菅峰火山から流出した溶岩が断層によって独立したものが｢丸岩｣である。丸岩は南側を除いた三方が100mにも達する垂直の崖に囲まれ、吾妻川方面から望むと巨大な円柱状に見える特徴的な岩峰である。それは、長野原・横壁・林・川原湯・川原畑の八ッ場ダム関連の５地区どこからでも望むことができるランドマークとなっている。

吾妻川両岸には、吾妻川からの比高を基準に、最上位・上位・中位・下位の４段階の河岸段丘面が形成されている。現在の吾妻川からの平均的な比高は、最上位段丘で約80～90m、上位段丘で約60～65m、中位段丘で約30～50m、下位段丘で約10～15mを測る。

長野原町の地質形成に大きな影響を与えた火山が浅間山である。町域の南西部、長野県境に位置し、古い方から黒斑山・仏岩・前掛山・釜山の４つの火山体で構成される標高2568mの成層火山である。約2.1万年前の黒斑火山の噴火では、山体崩壊によって｢応桑泥流｣が発生した。この泥流堆積物は、当時の河床を数十mの厚さで埋めており、その後の浸食によって吾妻川両岸に最上位と上位の河岸段丘面が形成されたといわれる。浅間山はその後も多くの火山噴出物を堆積させているが、特に町域では浅間草津黄色軽石(As-YPk：1.3～1.4万年前)の堆積が顕著である。また、浅間Ｂテフラ(As-B：1108年)や浅間粕川テフラ(As-Kk：1128年)も平安時代の黒色土中に数㎝の厚さで確認できる。さらに天明３(1783)年の噴火により発生した泥流は、下位段丘面や中位段丘面を平均約１mの厚さで覆っている。

石川原遺跡は、標高約533～547mの吾妻川右岸中位河岸段丘面上の大字川原湯字上湯原に所在し、堂巌山の北東、金花山の北西麓に位置する。



第２図　石川原遺跡周辺の地名

(『長野原町の自然』長野原町1993　図１～56を加除筆引用)

第５節　歴史的環境

本報告書で取り扱う遺構や遺物は、江戸時代天明３年の天明泥流により埋まった集落や畑等を対象としている。江戸時代以前の石川原遺跡周辺の歴史的環境については、すでに刊行されている石川原遺跡の報告書で紹介されているので、それらを参照してほしい。

ここでは、江戸時代を中心とした歴史的環境について説明する。周辺遺跡についても、発掘された多くの遺跡の中から、屋敷や建物が調査されている遺跡を中心とした。畑については本報告書の中で詳しく紹介している。

第１項　発掘調査された周辺集落の様相

第２表に、石川原遺跡周辺で屋敷等が発掘調査された川原湯村・川原畑村・林村・長野原町・坪井村・三島村の遺跡を掲載した。屋敷数の決め方は報告書により様々である。石川原遺跡の調査基準から屋敷数を想定した。多くの屋敷等の建物が発掘調査されたのは、川原畑村の22軒(西宮遺跡11軒、東宮遺跡11軒)、川原湯村の16軒(石川原遺跡)、林村の８軒(下田遺跡８軒)である。これら建物は、天明３年のほぼ同時期に埋没したことが明らかで、同時に存在していたものである。石川原遺跡で明らかとなったように、屋敷や多くの建物は、規模や構造、出土する生活用具等が様々である。各村の中には主屋のほかに複数の建物と、複数の馬を飼うことのできる大きな馬小屋、さらに蔵を持つ家がある。対照的に狭い屋敷地で付属建物は厠等の建物だけで、馬小屋もない小さな屋敷もある。また、付属建物もない小さな建物も存在している。村を構成している人々の間には、大きな階層差が存在していたことを物語っているようである。

第２項　川原湯村の概要・変遷

川原湯村は、往古より吾妻郡に属している。永禄元亀の頃(1570年頃)海野長門守、その後真田安房守昌行之領地となる。明暦３(1657)年真田伊賀信澄が領し、その後天和元(1681)年改易され、同年11月より江戸幕府の直轄領となる。元治元(1684)年まで184年間代官支配となり、明治維新を迎えている。

江戸時代における川原湯村の石高の推移は「表３　川原湯村の石高変遷」の通りである。

なお、寛文３(1663)年の石高については、当時の沼田藩５代藩主真田伊賀守信利が、真田松代本家の10万石に対抗するため、表石３万石に対して14万4000石を強引に打ち出し幕府に報告した検地(古検)によるもので、農民の難渋は並大抵のものではなかった。貞享２(1685)年の石高については、前橋藩主酒井忠挙の家老高須隼人が、天和元(1681)年真田信利の領地没収後、再検地(新検)を実施したことによるもので、寛文検地(古検)と比較すると、石高はおよそ273石９斗１升７合から73石７と５合と37％に軽減されている。明治時代に入ると、明治５(1872)年の大小区制期には第20大区第10小区に属し、明治11(1878)年の郡区町村制に移行すると、林村、横壁村、川原畑村、川原湯村が組み合わされて林村に戸長役場が置かれた。その後、明治17(1884)年には、戸長配置区域の改正があり、川原畑村外３ヵ村戸長役場として、川原畑村に連合戸長役場が置かれることとなった。さらに、明治22(1889)年の市町村制の施行により、10ヵ村が合併して長野原町になると、旧来の町村は大字となり、長野原町大字川原湯村と称した。大正６(1917)年からは村の呼称を取り、大字河原湯となり、昭和28(1953)年長野原町区条例の改正により第２区となっている。その後、平成元(1989)年の呼称変更により川原湯区となる。

人口・戸数(世帯数)について、宗門人別帳や郡村史から「第５表　川原湯村人口と家数等」の通りである。江戸時代の軒数は30軒以下で人口はほぼ100人以下であったと思われる。また所属寺院については、２つの宗門人別帳に1850年頃の村人がどの寺の旦那となっているかに記されている。表からわかるように、川原湯村の90％以上は現在の東吾妻町にある禅宗応永寺の旦那となっており、長野原町にある禅宗雲林寺の旦那は約10％と少ない。

第３項　川原湯温泉

川原湯温泉は川原湯村のほぼ中央に位置し、川原湯村を考える上で重要な温泉である。川原湯村の名前はここに温泉があったことによると思われる。川原湯温泉には健久４(1193)年源頼朝入浴の伝説がある。康平７(1062)年王臣浦上康久が入浴したともいう(川原湯村誌)「沼田領郷村品々記録」(天保元年1681)には湯銭200貫文ほどを納めているが、これは草津に次ぐものであり、繁盛のほ

どがうかがえる。「天保７年３月　吾妻郡川原湯村の湯屋敷頭売渡保証状」（県立県史資料編11近世３）には、孫右衛門所持の湯屋敷・長屋門・書院・長屋・居宅・土蔵・物置・内湯および湯株が川原畑の伊左衛門に250両で売られている。湯屋として一定の敷地と建物を確保し、旅館内に湯を引いた内湯があったことがわかる。また温泉で営業するための権利である「湯株」があり、これも売買の対象となっていた。温泉の軒数は、享保７（1722）年には８軒（吾妻郡略記）、明治10（1877）年には４戸であった（郡村史）。

第４項　不動院について

石川原遺跡の東端から、寺が発掘調査されている。検出されたのは、６号建物（本堂）・５号建物（庫裏）・池・築山・北側の石垣等であり、西側に３号建物（観音堂）が確認されている。この建物は、残された記録等（宗門人別改帳）から、天台宗不動院と思われる。この寺について残っている古い記録に、貞享３（1686）年の検地水帳がある。そこには不動院の土地が１反４畝５坪、屋敷１か所425坪、除地として「湯沢薬師堂境内　堂守　惣兵衛」とともに「薬師堂境内　別当　不動院」が記されており、貞享３年以前に不動院は存在していたことがわかる。地元に残る石像物には、享保６（1721）年から宝暦５（1755）年の間に、「亮義代」と刻銘された多くの石像物が残されている。この亮義とは、宝暦５年に遷化した「不動院大阿闍梨亮義大和尚」のことと思われる。この頃不動院が大きな力を持っていたことが想定できる。その後天明３（1783）年、天明泥流により吾妻側に近い場所にあった寺は完全に埋まってしまう。湯沢薬師堂の隣にあった薬師堂は、不動院が別当となっていたので、おそらくこの場所が天明泥流以降記録に残っている不動院であったものと思われる。記録としては覚書（寛政２年～文政３年・1790～1820）宗門人別改帳（文政３年・1820）（嘉永５年・1852）（慶応４年・1868）等がある。天明泥流により埋没した寺の敷地は、寛政２（1790）年天明泥流で埋没後７年後頃から、村が当時不動院の本寺である光源寺（現前橋市）に院代として年賦で支払って村の所有地としていたようである。このことは、明治６年に壬申字引絵図に、発掘された不動院の場所が「村持」と記されていることと一致する。天明泥流で埋没した不動院は、同じ場所で復興することはなかった。埋没した村の屋敷の多くが、ほぼ同じ場所に復興しているので、大きく異なっている。（不動院に関する石像物等については、長野原町文化財調査員豊田拓司に現地案内を含めてご教示を受けた。）

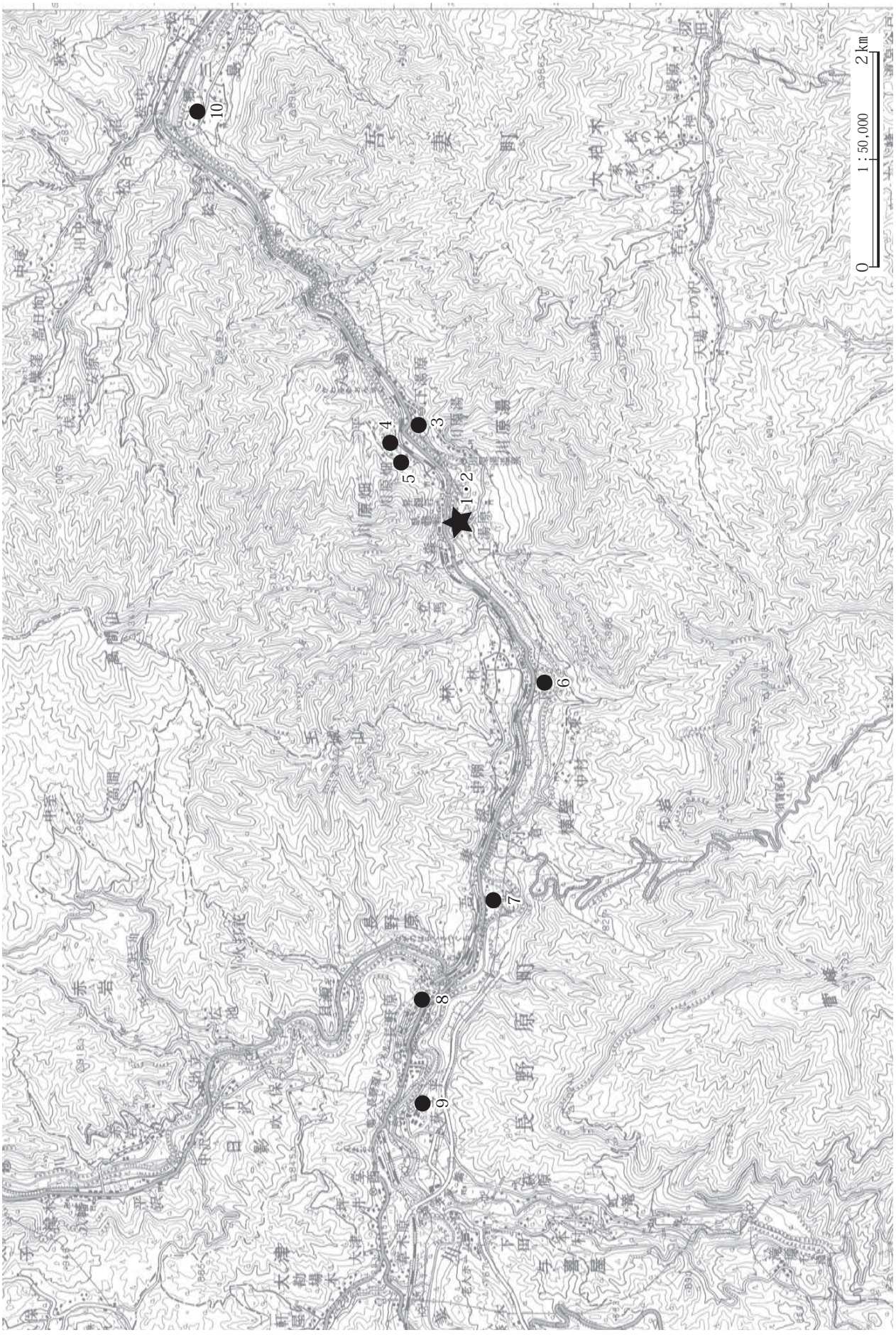
第５項　川原湯温泉を描いた墨刷絵

川原湯温泉を描いた墨刷絵が残っている。時代は江戸時代後半と思われる。川原湯神社のあった場所に、「薬師」と書かれた建物がありその隣に「不動院」と書かれた建物が描かれている。温泉街の中央部には「御高札」が書かれており、この場所が村の中心地であったことがわかる。その場所から石段を登った場所に「湯前」と書かれた建物がある。川原湯神社は明治５年以降に合祭して村社川原湯神社となっており、合祭以前に存在した建物と思われる。西端には不動の滝があり近接した東側に「不動堂」が書かれている。墨刷絵には、ほかにも多くの信仰に関すると思われる建物が描かれている。墨刷絵に絵の所有者大江正行氏が色を乗せて作成したものを、所有者の承諾を得て報告書に掲載した。

明治６年の壬申字引絵図から、村の建物を復元

明治６年の壬申字引絵図から、川・道・山・屋敷・湯屋敷・社・墓等を選び出して作成したのが、第７図である。村中央部に幹線道路があり、道に面して屋敷14軒、川原湯温泉の湯屋敷８軒、社５社、墓４か所が存在していた。発掘で明らかとなった天明３年段階の集落の様子に近いことがわかる。

参考文献
長野原町『長野原町の古文書』2001
長野原町『長野原町の自然』1993
長野原町『長野原町の文化財報告書１』2012
群馬県史編さん委員会編　1986『群馬県史』資料編11近世３
萩原　進　1986「浅間山天明噴火史料集成」Ⅱ群馬県文化事業振興会
長野原町誌編纂委員会編　1976『長野原町誌』上巻・下巻
関　俊明　2006「天明泥流はどう流下したか」『ぐんま史料研究』第24号
『群馬県の地名』日本歴史地名大系10巻　1987
群馬県立文書館インターネット古文書講座　176
群馬県文化事業振興会『上野国郡村誌』11　1986



第３図　天明泥流下の屋敷等が発掘調査されている遺跡分布図（国土地理院1：50,000地形図「草津」使用）

第２表　本報告書の遺跡と天明泥流下の屋敷等が発掘調査されている遺跡　元禄郷張から村名を推定

（屋敷数に関しては報告書内容から中沢が想定した。）

No	遺跡名	所在地	旧村名 （家数約）	天明泥流下の遺構	文献
1	石川原遺跡	〃大字川原湯	川原湯村 （引化２年、24軒）	本報告書の遺跡。川原湯村の中央部分に位置する川原湯温泉の西側に位置する。発掘調査により屋敷16軒、屋敷外の建物８軒、寺院・道・用水・広大な畑等が確認されている。寺院は不動院と考えられる。調査区西橋に地蔵や五輪塔を伴う墓地と思われる施設がある。	1
2	前原遺跡	〃大字川原湯	川原湯村	本報告書の遺跡。発掘調査により天明泥流下の畑１枚確認されている。	
3	下湯原遺跡	〃大字川原湯	川原湯村	川原湯温泉の東側に位置する。西側は三島村である。発掘調査により、残りが悪かったが土台石を持つ建物と掘立柱と思われる建物が２軒（屋敷２軒か）確認されている。ほかに２個の埋設桶を伴う小屋と思われる建物と石垣に囲まれた敷地内にお堂と思われる建物と多くの墓が発掘調査されている。	2
4	東宮遺跡	長野原町大字川原畑	川原畑 （天保８年、30軒）	川原畑村の下段東側に位置する集落である。発掘調査により、屋敷11軒が確認されている。大きな１号屋敷からは多くの建築部材や生活用具が出土している。酒蔵、蔵を持つ屋敷等あり、街道筋に面した小さな集落である。	3
5	西宮遺跡	長野原町大字川原畑	川原畑	川原畑村の下段西側に位置する集落である。発掘調査により、屋敷11軒が確認されている。石川原遺跡の次に多い建築部材や大量の生活用具を出土している。蔵を持つ屋敷１軒、東宮と同じ街道に面する集落。西端に諏訪神社あり。	4
6	下田遺跡	〃大字林	林村 （安政４年、73軒）	林村の下段の集落である。村の中心は上の段である。中世の建物も多く発掘されており、中世から継続している集落である。上の段位は林城があり、一部発掘調査されている。発掘調査により、屋敷11軒が確認されている。	5
7	尾坂遺跡	〃大字長野原	長野原町 （天保９年、72軒）	長野原町の東端部分に位置する。集落の中心は諏訪神社西側の町遺跡西側である。遺跡からは１軒の屋敷が発掘されており、土台等の建築部材が出土している。	6
8	町遺跡	〃大字長野原	長野原町	主屋と思われる建物から大量の建築部材や、多くの下駄等の木製品出土、遺跡東側は畑。	7
9	小林家住宅	〃大字長野原	坪井村 （江戸後期12軒）	吾妻の分限者小林助左衛門屋敷の一部を検出、土蔵跡１棟、礎石建物２棟、屋敷の背後の石垣、石製の搗臼、固定臼、石臼、鉄銅製品、陶磁器等出土	8
10	上郷岡原遺跡	〃三島	三島村 （江戸後期267軒）	吾妻で最も大きな村である三島村の西に位置する。村の中心は東側の唐堀遺跡南側周辺と思われる。発掘調査により屋敷２軒が確認されている。	9

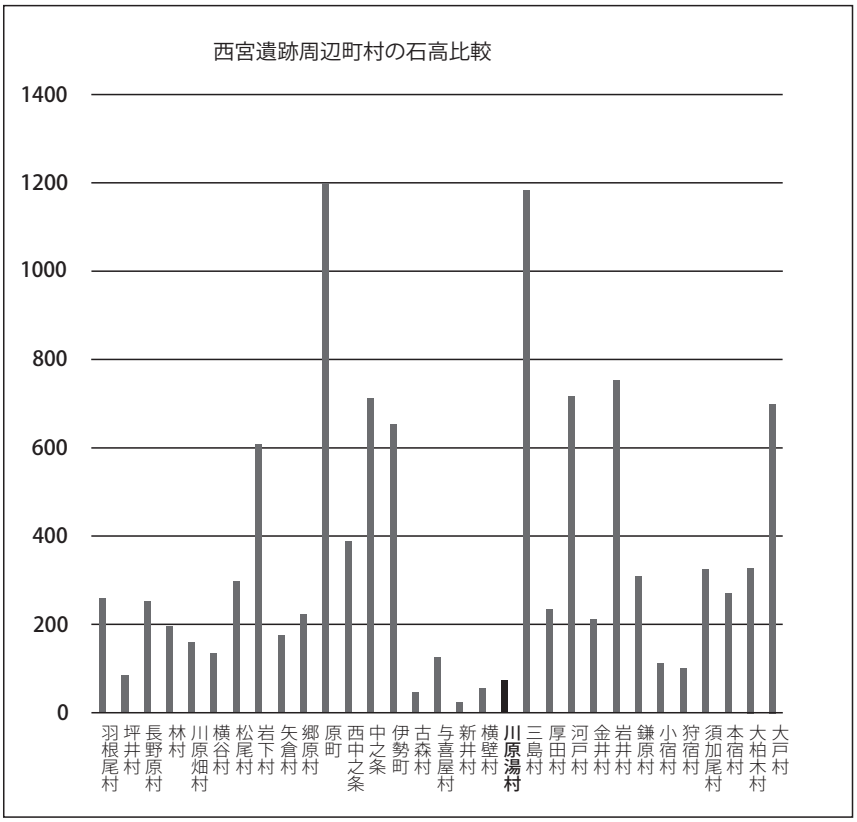
文献

1　『石川原遺跡（１）』2018年（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第640集
　『石川原遺跡（２）』2020年（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第671集
2　『下湯原原遺跡（１）』2018年（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第641集
　『下湯原原遺跡（２）』2020年（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第666集
3　『東宮遺跡（１）』2011（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第514集
　『東宮遺跡（２）』2012（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第536集
　『東宮遺跡（３）』2017（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第628集
　『東宮遺跡（５）』2021（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第675集
4　『西宮遺跡（１）・西宮岩陰遺跡』2018（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第634集
　『西宮遺跡（２）・川原畑の宝篋印塔』2020（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第670集
5　『下田遺跡（２）』2017（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第629集
　『下田遺跡（３）』2020（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第665集
6　『尾坂遺跡（２）』2016（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第618集
7　『町遺跡』2015（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第593集
8　『小林家屋敷跡』2005　長野原町埋蔵文化財調査報告　第12集
9　『上郷岡原遺跡（１）』2007（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第410集

☆　各村の家数については『長野原町誌』上巻、『東宮遺跡（３）』、『群馬県の地名』日本歴史地名体系1987を参照した。

第３表　川原畑村周辺における元禄16(1703)年の石高一覧

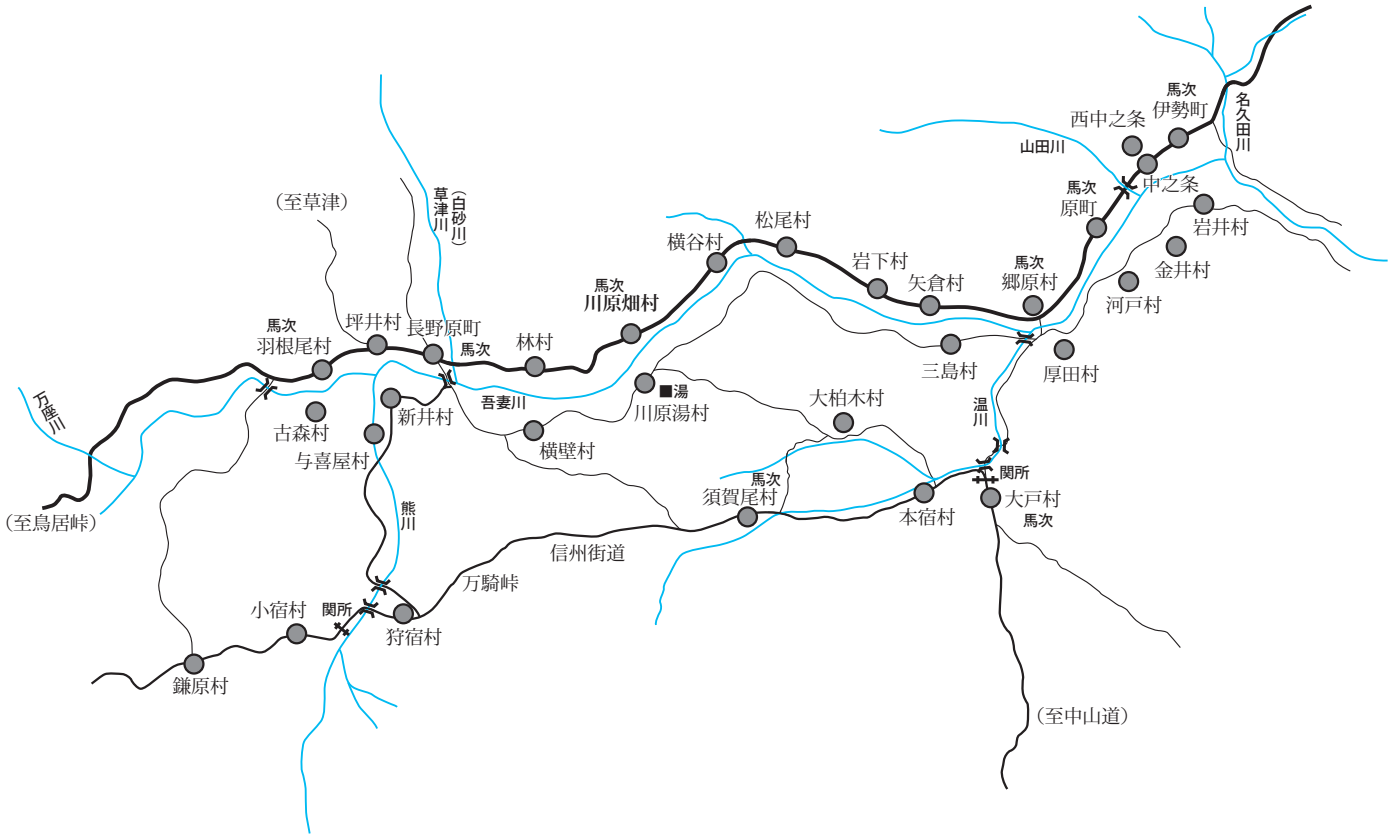
区域	町村名	石高
吾妻川左岸	羽根尾村	258.278
	坪井村	84.315
	長野原町	252.479
	林村	195.415
	川原畑村	159.913
	横谷村	134.357
	松尾村	296.733
	岩下村	607.95
	矢倉村	175.513
	郷原村	223.082
	原町	1198.732
	西中之条	387.862
	中之条	711.508
	伊勢町	652.227
吾妻川右岸	古森村	46.304
	与喜屋村	126.321
	新井村	24.049
	横壁村	55.272
	川原湯村	73.705
	三島村	1181.89
	厚田村	235.466
	河戸村	717.732
	金井村	210.377
	岩井村	752.884
信州街道	鎌原村	309.154
	小宿村	113.294
	狩宿村	99.919
	須加尾村	325.782
	本宿村	271.243
	大柏木村	327.401
	大戸村	699.55



『群馬県史』資料編11付録郷村変還の元禄16年の資料により作成

県内平均石高　404石

(上野国絵図(元禄十五年)目録部分　群馬県立文書館所蔵文書Ｐ8710、№１より計算)



第４図　吾妻郡河原畑村(川原畑村)周辺の道と村(元禄絵図「上野国」群馬県立文書館所蔵より修正して作成)

参考文献

長野原町『長野原町の古文書』2001

長野原町『長野原町の自然』1993

群馬県史編さん委員会編　1986『群馬県史』資料編７中世３

群馬県史編さん委員会編　1986『群馬県史』資料編11近世３

萩原　進　1986「浅間山天明噴火史料集成」Ⅱ群馬県文化事業振興会

長野原町誌編纂委員会編　1976『長野原町誌』上巻・下巻

関　俊明　2006「天明泥流はどう流下したか」『ぐんま史料研究』第24号群馬県立文書館

『群馬県の地名』日本歴史地名大系10巻　1987

群馬県立文書館インターネット古文書講座　176 2017

群馬県文化事業振興会『上野国郡村誌』11　1986

第４表　川原湯村の石高変遷

史　料　名	村高（石）	註
寛永20年検地（寛永20年 1643）	60.1	1
寛文２年検地（寛文２年 1662）	273.917	1
貞享３年検地（貞享３年 1686）	73.705	1
天保郷帳（天保５年 1834）	73.705	2
明治元年（明治元年 1868）	74.356	1

註１　「税の変遷」『長野原町誌』長野原町　1976
註２　「郷村変遷」『群馬県史』資料編11　1980

第５表　川原湯村の人口と家数等

史　料　名	家数（軒）	人口（人）	男（人）	女（人）	所属寺院			註
					禅宗 応永寺	禅宗 雲林寺	天台宗 不動院	
検地水帳（貞享３年　1686）	23	不明	不明	不明	不明	不明	不明	1
宗門人別書上帳面（弘化２年　1845）	24	86	45	41	78	8	不明	2
宗門人別書上帳面（嘉永７年　1854）	25	98	47	51	90	8	不明	2
上野国郡村誌（明治８年頃　1875）	35	161	83	78	不明	不明	不明	3

註１『上野国吾妻郡河原湯村御検地水帳』貞享三年（長野原町教育委員会コピー所蔵閲覧）
註２「昔の人口の動き」『長野原町誌』長野原町』　1976
註３『上野国郡村誌11』群馬県文化事業振興会1985

第６表　下湯原遺跡および石川原遺跡地域における畑数（貞享３年）

地　名	上　畑	中　畑	下　畑	下々畑	計
下湯原	11	13	18	4	46
新井の門		9	10	26	45
石川原			5	11	16
計	11	22	33	41	107
比　率	10.3%	20.6%	30.8%	38.3%	100.0%

（『上野国吾妻郡河原湯村御検地水帳』貞享三年 1686 ）
（長野原町教育委員会コピー所蔵閲覧）

天三　天保七年三月　吾妻郡川原湯村湯屋敷等売渡しにつき保証状

内規定書之事

一川原湯村孫右衛門所持
湯屋敷三畝弐拾弐歩
右地所ニ建家
門長家壱ヶ所　但二階造
書院壱ヶ所　但同断
長家壱ヶ所　但同断
居宅壱ヶ所　但平家
土蔵弐ヶ所
但壱ヶ所者屋敷添畑地ニ建置候間、
右地所反別共

物置小屋壱ヶ所
内湯壱ヶ所
外雪隠其外等有之候

一湯株壱軒分

〆

代金弐百五拾両也

右孫右衛門儀借金嵩、此節及　公訴、親類組合者不申及、村役人迄難義いたし候ニ付、右書立之地所并建家湯株共、貴殿御引受被下候様我等共被相頼、達而申入候所御承知被下、則代金書面之通御差出被下候筈取極忝存候、然ル上者、親類ゟ者我等共江一札取置候間、我等共ゟ貴殿江一札差入相頼申処、為後日仍而如件

天保七申年三月廿六日

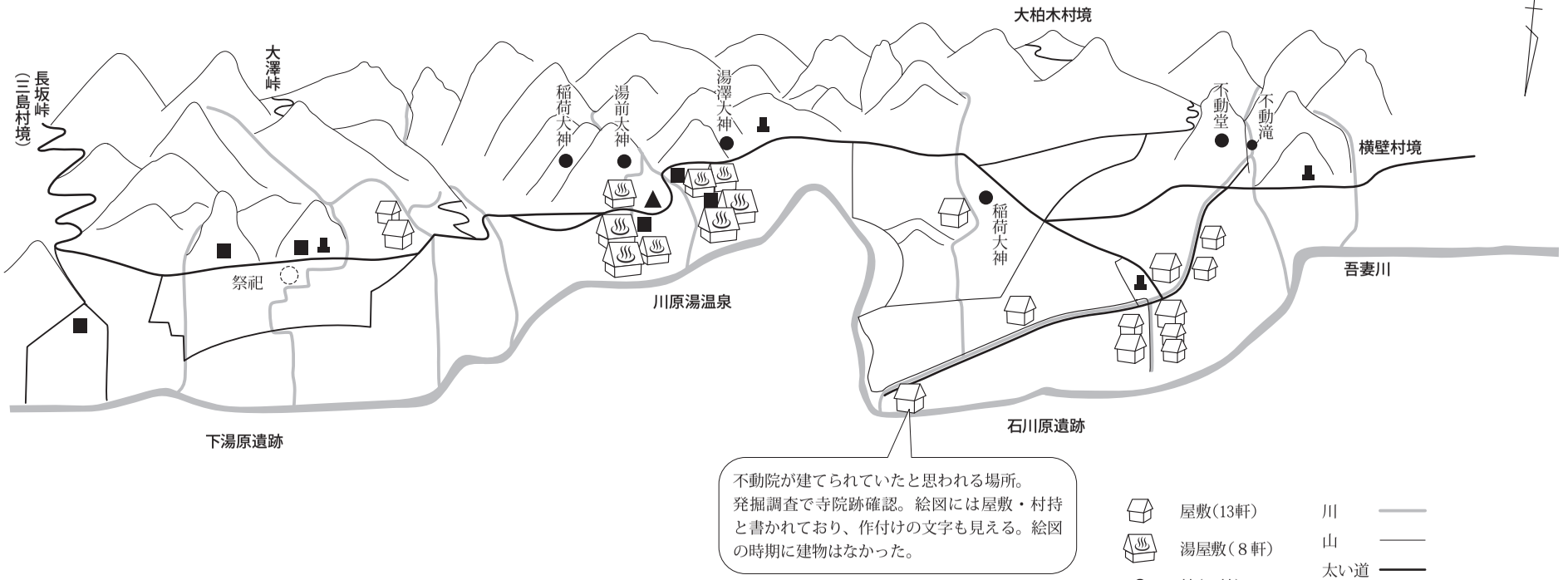
林村
大乗院㊞
草津村
平兵衛（爪印）

川原畑村
伊左衛門殿

〔幕府領〕（吾妻郡長野原町林　浦野英彦氏所蔵）

『群馬県史』資料編11 近世３　1980 P908・909引用

第５図
川原湯温泉　この絵は、温泉場を中心とした景観を北から望んだ江戸時代後期の墨刷絵を基に加彩したものです。絵の所有者大江正行氏の承諾を得て掲載。



絵図に屋敷又は湯屋敷と記載されている場所に建物を配置した。絵図には屋敷と書かれた土地に作付と書かれ既に建物がない土地や、畑と書かれた土地に家作と書かれており、家が建っていた土地もある。また家も居宅と家作と区別して書かれている。

第６図　川原湯村絵図(明治６年３月)（壬申地引絵図より作成）

第６節　対象範囲・基本土層・調査面

第１項　本報告の対象

石川原遺跡については、平成26年度から27年度にかけて調査された調査区１区・２区、28年度に調査された３区のうち、調査区北東部の１区Ｄ部分で調査された天明泥流に覆われた寺院跡とこれに関連する遺構群および古代以前の遺構確認面で調査された遺構を除く部分についての発掘記録を「石川原遺跡（１）」として、平成29年度に刊行した。平成20年、平成26年から30年に調査された４区から10区の、近世相当面（発掘時には第２面、前報告においては第３面として扱った発掘面）、中世相当面（発掘時第３面、前報告第４面）及び１区から10区の平安時代相当面（発掘時に第４面とされた発掘面）の発掘記録を「石川原遺跡（２）」として、2020年度に刊行した。本報告書では、天明泥流により直接覆われた建物・道・溝・畑等の遺構を報告する。この面の報告は前述のように一部は「石川原遺跡（１）」の中ですでに報告しているが、大部分は本報告で報告する。

石川原遺跡北側に位置する前原遺跡では天明泥流下の畑が発掘調査されている。本報告の中で報告する。

発掘調査の対象とする埋蔵文化財の種類、年代は、「群馬県埋蔵文化財発掘調査取扱い基準」に従うが、浅間山天明泥流が堆積する地域であるため、同基準４－（１）－１）－②－ウ）により、近世に属する遺跡、特に浅間山天明泥流災害被災遺構、およびこの災害に対する復興の様相を示す「復旧溝」と呼ばれる土坑群等についても、発掘調査対象としている。

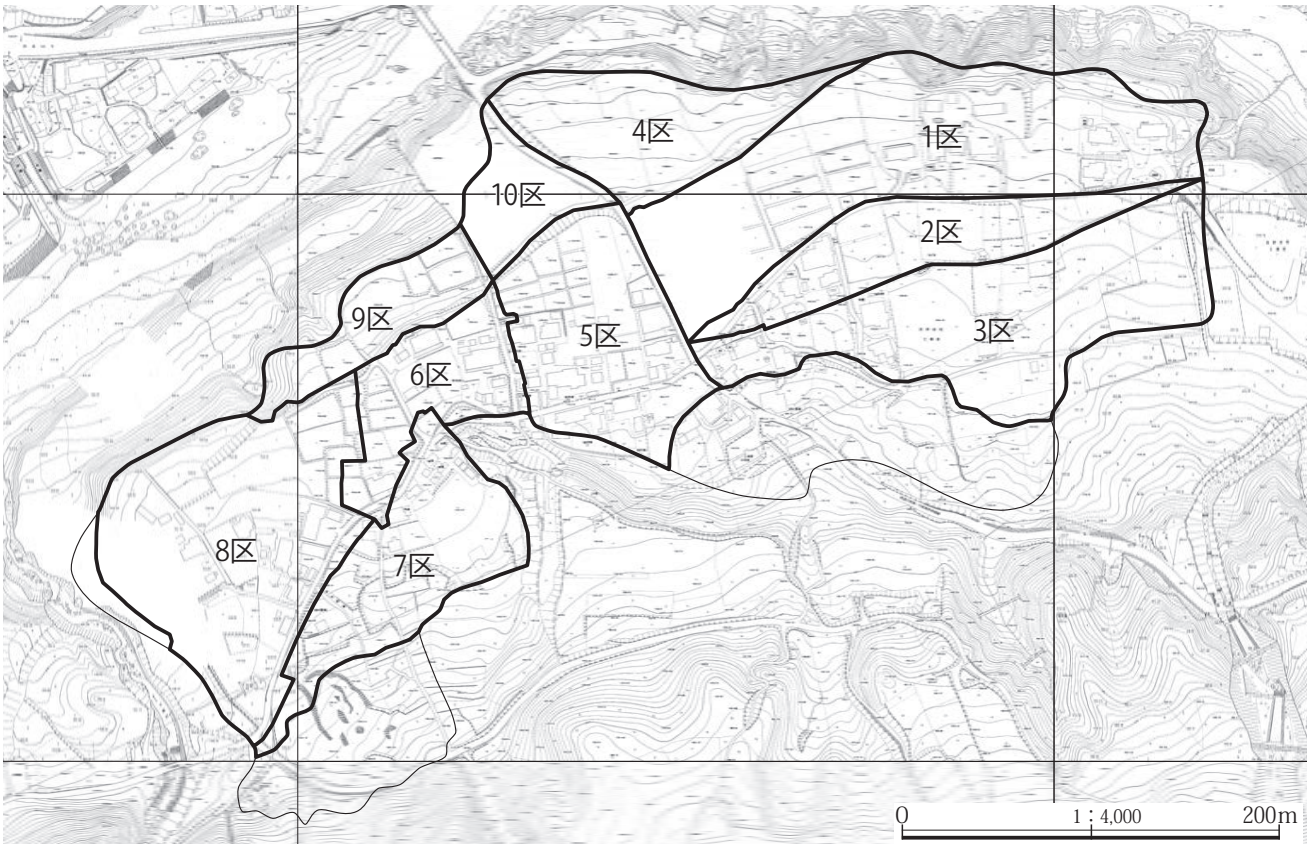
本書で報告する遺構は、次の通りである。

石川原遺跡

屋敷16軒（建物37軒）、屋敷以外の建物９軒、観音堂を含む不動院と思われる寺。

天明泥流上位復旧坑217基、天明泥流下位道12条、溝５条、水路２条、石垣２か所、畑139枚、平坦面132か所、柵１条、土坑１基、ヤックラ４か所。

前原遺跡　天明泥流下の畑１枚。



第７図　石川原遺跡発掘区配置図　1/4000

第２項　遺跡略号と地区・区・グリッド及び発掘区

１　遺跡略号　八ッ場ダム建設関連発掘調査に於ける遺跡名称、略号、グリッド設定等は、平成６年度開始以来、「八ッ場ダム関連埋蔵文化財発掘調査方法」により設定されている。

遺跡名は八ッ場ダム建設に係る長野原町の５地区大字（川原畑、川原湯、横壁、林、長野原）に小字名を加えて命名されている。

本遺跡は「石川原」を遺跡名称としているが、当初は「川原湯石川原遺跡」という遺跡名称で調査が行われていた。

遺跡略号は頭書に八ッ場ダムの略号「ＹＤ」が付され、これに続いて上記５地区に充てられた番号（川原畑：１、川原湯：２、横壁：３、林：４、長野原：５）が付され、「－」を記した後、地区毎の調査順の通し番号が付される。本遺跡の遺跡略号は「ＹＤ２－03」となる。

２　地区・区・グリッド、発掘区

（１）地区・区の設定　本遺跡の地区・区は、「八ッ場ダム関連埋蔵文化財発掘調査方法」による統一の仕様により設定した。

東西南北の１㎞四方を「地区」とし、同じく100m四方を区として設定している。

起点は、世界測地系第９系のX=58100m、Y=-107400（北緯36° 31′ 03″、東経138° 38′ 03″付近）であり、これを南東隅とする地区を01地区として、その西側及び北側に向かい10地区ずつ設定されている。

西側に01～10地区、01区の北側が11地区、この区の更に北側が21地区と順に加算し、下１桁は西側に向かって１ずつ加算して地区番号を付している。

これにより、本遺跡は25・26・35地区に属する。

また、地区の中は東西方向10区画×南北方向10区画の100区画の「区」が入る。

区の呼称は南東隅のものを01区として、西側に下一桁を加算して01～10区、北側に上一桁を加算して11区から91区と加算して区の名称を付している。

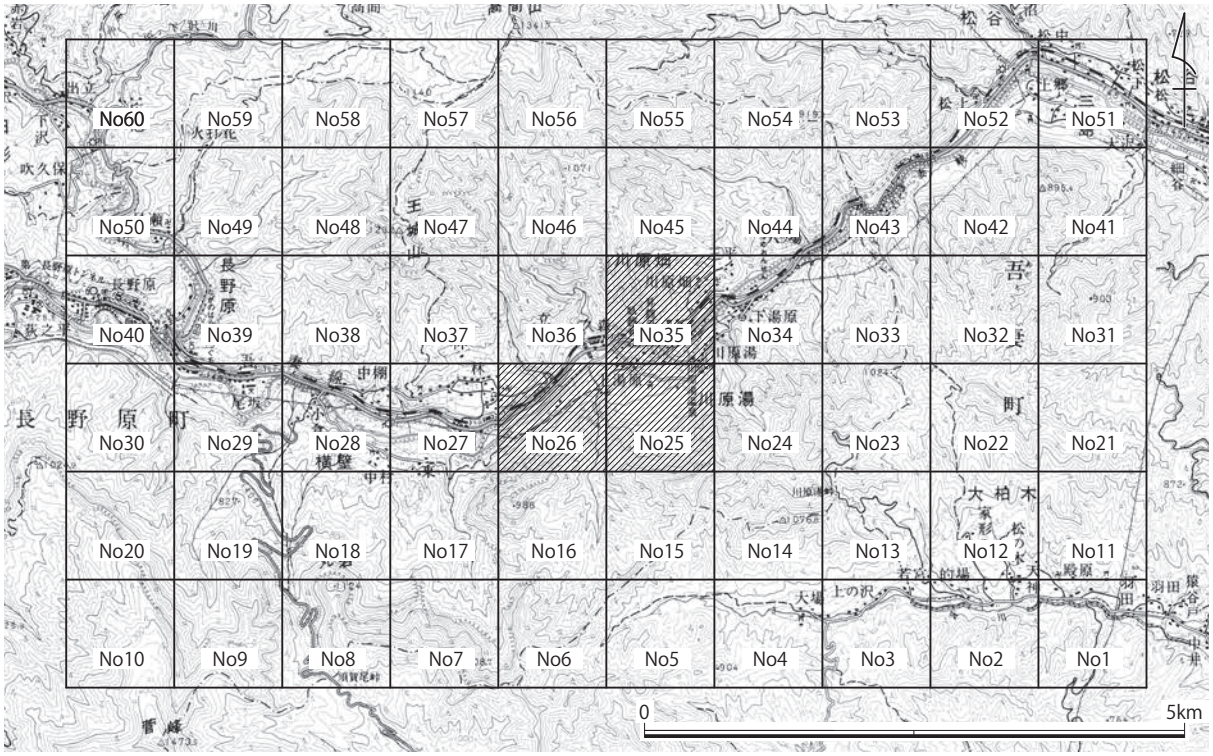
これにより、本遺跡は25地区79・80・86～90・96～100区、26地区71・72・81・82・91区、35地区６～10区に属することになる。

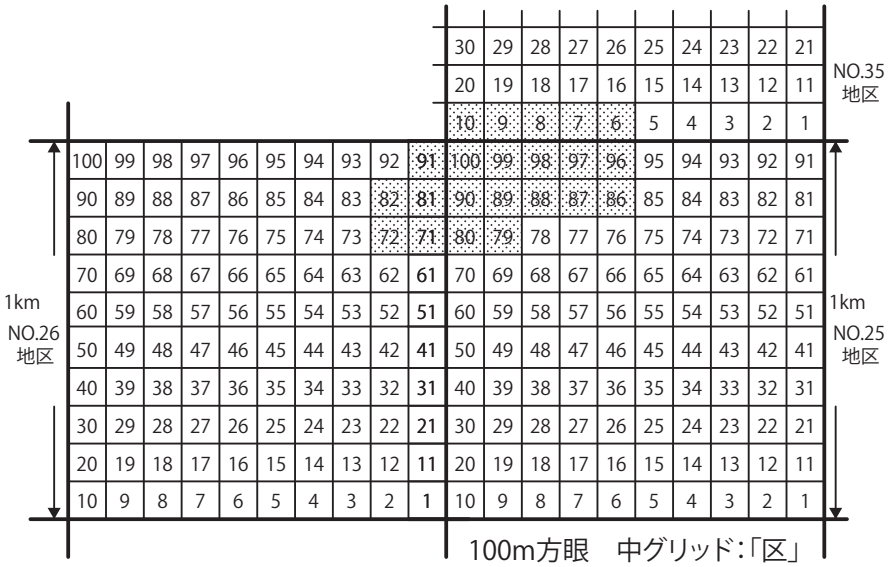
（２）グリッドの設定　グリッドの設定も、八ッ場ダム地域埋蔵文化財発掘調査統一の仕様により行なった。

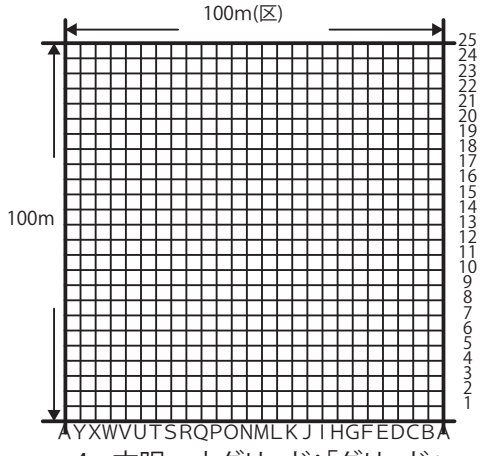
東西南北方向４m四方の規格を１グリッドとして設定

第７表　八ッ場ダム建設に伴う発掘調査遺跡の略号

所在大字	YD番号		遺跡名	調査年度
川原畑	YD1	01	－	
	YD1	02	東宮	9･19～21･26～29
	YD1	03	石畑	10･29
	YD1	04	三平Ⅰ	16･17･24･25
	YD1	05	二社平	10･29
	YD1	06	三平Ⅱ	16
	YD1	07	上ノ平Ⅰ	18･19･28
	YD1	08	西宮	20･26～29
	YD1	09	西宮岩陰	26
	YD1		三ッ堂岩陰	28
	YD1		川原畑の宝篋印塔	29
	YD1		石畑Ⅰ岩陰	29
川原湯	YD2	01	川原湯勝沼	9･15･16･28
	YD2	02	西ノ上	14･27～29
	YD2	03	石川原	20･26～R1
	YD2	04	下湯原	27～29
	YD2		川原湯中原Ⅲ	28
	YD2		前原	29
横壁	YD3	01	横壁勝沼	6
	YD3	02	西久保Ⅰ	6･10･12･29
	YD3	03	横壁中村	8～18
	YD3	04	山根Ⅲ	10･13･18
	YD3	05	西久保Ⅳ	21･23
	YD3		西久保Ⅴ	28･29
林	YD4	01	下田	7･25･26･28･29
	YD4	02	－	
	YD4	03	上原Ⅰ	24
	YD4	04	－	
	YD4	05	花畑	10～12
	YD4	06	楡木Ⅲ	10
	YD4	07	中棚Ⅱ	11～13･28～30
	YD4	08	下原	12･13･15･16･29
	YD4	09	楡木Ⅱ	11～13･16･17
	YD4	10	二反沢	12
	YD4	11	立馬Ⅰ	13･14･17
	YD4	12	立馬Ⅱ	14
	YD4	13	上原Ⅳ	15･21
	YD4	14	林中原Ⅰ	16･19～21
	YD4	15	林中原Ⅱ	16･20･21
	YD4	16	上原Ⅱ	16
	YD4	17	林の御塚	
	YD4	18	立馬Ⅲ	19
	YD4	19	東原Ⅰ	20
	YD4	20	東原Ⅱ	20
	YD4	21	東原Ⅲ	20･21
	YD4	22	楡木Ⅰ	21
	YD4	23	林宮原	24･27
	YD4	24	上原Ⅲ	25･27
長野原	YD5	01	長野原一本松	6～10･12～17･19･20
	YD5	02	尾坂	11･18～22･25･26
	YD5	03	久々戸	7･9･10･15･27･28
	YD5	04	幸神	8･9･14･17
	YD5	05	長野原城跡	23
	YD5	06	町	23～25
三島	YD6	01	上郷B	13･14
	YD6	02	上郷岡原	13～15･17･18
	YD6	03	上郷A	15･19･20
	YD6	04	上郷西	19
	YD6		三島大沢	
大柏木	YD7	01	廣石A	13
	YD7		大柏木上ノ沢	
松谷	YD8		松田前田	
岩下	YD9		－	


No60
No59
No58
No57
No56
No55
No54
No53
No52
No51
No50
No49
No48
No47
No46
No45
No44
No43
No42
No41
No40
No39
No38
No37
No36
No35
No34
No33
No32
No31
No30
No29
No28
No27
No26
No25
No24
No23
No22
No21
No20
No19
No18
No17
No16
No15
No14
No13
No12
No11
No10
No9
No8
No7
No6
No5
No4
No3
No2
No1
0
5km


NO.35
地区
NO.26
地区
NO.25
地区
1km
1km
100m方眼　中グリッド:「区」


100m(区)
100m
AYXWVUTSRQPONMLKJIHGFEDCBA
4m方眼　小グリッド:「グリッド」

第８図　発掘区の設定

している。１地区内に設定されるグリッドは、東西方向25グリッド×南北方向25グリッドから成る。

なお、グリッドの呼称は各区の南東隅をＡ１とし、西に向かってＡ～Ｙ、北に向かって１～25の記号と番号が付し、アルファベット・数字の順に標記している。

（３）発掘区の設定　本遺跡は総面積10万平米に達しようかという広域を占めているため、発掘の便宜上、地形や道路を境界として、当初は８区画、最終的には10区画の発掘区を設定して作業に当たった。

しかし、工事工程により、各発掘区がさらに細分されたこと、また、遺構のまとまりや分布状況が発掘区とは一致しないことなどから、本書では、発掘区を単位とした記載は行わないこととした。

第３項　発掘調査の方法

１　掘　削　本遺跡では、表土及び硬質の天明泥流を爪隠しを装着した掘削重機で除去した後、天明泥流及びAs-A下の遺構面をスコップ、鋤簾、移植鏝当の道具を用いて人力で検出した。

また、以下の発掘面では、事前に遺構確認用のトレンチを掘削し、遺構の有無を確認した。

遺構が確認された場合には、想定範囲を掘削重機あるいは人力で除去した後、遺構確認面を精査し、確認された遺構を掘削し、あるいは遺物包含層を掘削して遺物の記録、採取を行った。

この他、必要に応じて適宜土層観察用のベルトを設け、あるいは対象を半截することにより土層の観察を行った。

出土した遺物等は記録後、原位置より取り上げ、出土位置の記録等を付して収納した。

なお、遺跡掘削業務、遺物の洗浄注記、一部の自然科学分析は専門業者の請負・委託により実施した。

２　記　録　遺構の記録は測量と写真撮影による。

遺構図はデジタル測量による地上測量、あるいは航空写真測量を基本として専門業者に委託した。

遺構平面図は1/40縮尺図での割図の作成を原則とし、全体図は1/100縮尺図で作図した。

遺構断面図は割図に合わせ、原則として1/40縮尺図として作図し、個別遺構については1/20縮尺図を基本として作図した。

写真はデジタル写真撮影とブローニ版による銀塩写真により、発掘担当者が撮影した。

また、空中写真は当事業団職員により、ドローンを使用して撮影したが、一部専門業者に委託した撮影も行った。

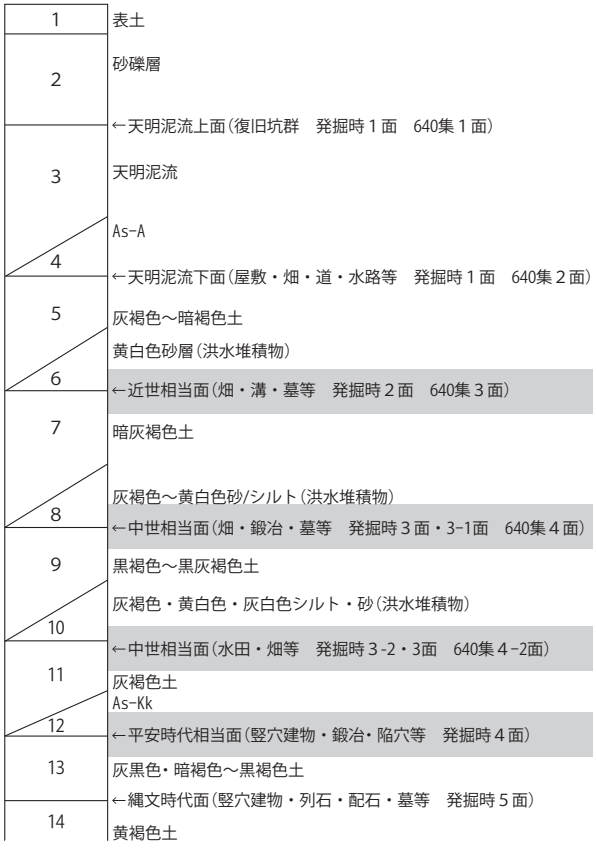
第４項　土層と調査面

遺跡の北を東へ流下する吾妻川に向かって、南から北へ、また西から東へと傾斜する地形であり、この傾斜に沿った斜面崩落が生じている。特に南側の丘陵に近い部分からの斜面崩落は多く、本遺跡を特徴付ける浅間山天明３年噴火に伴う泥流堆積物（以下、天明泥流）の上にも１ｍ以上の厚さで砂礫層が堆積している。

調査は、現表土から上記天明泥流までを掘削重機により除去し、泥流下面を露出させて実施した。

泥流は遺跡全体を覆っているが、北部の川沿いには堆積の比較的薄い部分があり、この泥流を掘り込んだ明らかに後出の遺構である復旧坑群も泥流下面で確認される。

本報告では、天明泥流下の遺構の報告を基本としているので、それ以前の土層は直接関連していない。しかし、遺跡全体を理解するには天明泥流下の土層も必要と思われるので、刊行されている「石川原遺跡（２）」の中で掲載した基本土層を掲載した。



第９図　基本土層・発掘面模式図

第２章　発掘された遺構と遺物

概要

第１～16節　屋敷

第17節　屋敷以外の建物

第18節　寺(不動院)

第19節　建物以外の出土遺物

概要

第２章で報告する遺構は、天明泥流下から発掘調査された遺構である。それらの遺構は、川原湯村の中央である川原湯温泉西側に位置する集落と集落周辺の畑である。これらの遺構の中から､集落を中心として報告する。畑や道、また溝等については、第４分冊で報告する。石川原遺跡で発掘された集落は、16軒の屋敷と９軒の建物と寺である。建物は、屋敷と屋敷以外の建物に分けて報告する。両者を分けた基準は、明瞭でないが以下の基準で区分した。

屋敷　①建物の他に前庭のある一定の広さの屋敷地を確保している。
②主屋の他に厠や小屋等の付属建物がある。
③主屋内に馬屋が作られていることが多い。
④建物構造が、上屋柱と下屋柱の構造となっているものが大部分である。

建物　①前庭がほとんどない。建物が小さくて敷地が狭い。
②主屋の他に付属建物は、基本的にない。
③主屋内に馬屋はない。
④建物構造が、上屋柱と下屋柱の区別がない。

屋敷の中には、さらに広大な敷地を持ち、主屋では広い馬屋があり複数の馬を飼うことができる。付属建物に蔵や板敷の建物等多くの付属建物を持つ屋敷と、付属建物は厠が１軒だけで、狭い敷地で主屋も小さな屋敷も存在する。屋敷と判断した建物にも、大きな差が存在している。

主屋や建物の造られている場所は、平らではなく、南側が高く北側が低くなっている敷地が多い。そこで屋敷地を水平に整地している。その整地の方法についてもできる限り記述した。さらに屋敷や建物は、集落の一部であり集落の道や水路さらに隣同士とのつながりが存在する。報告では、屋敷や建物が、集落の中で道とどのようにつながっているのか、また生活の基本である水をどのように確保していたのかについても、可能な限り記述した。

屋敷及び建物は以下の表で示した。この順番で遺構と遺物について記述する。

第８表　石川原遺跡本文編掲載順

屋敷	１号屋敷(１号建物)
	２号屋敷(９・10・11・12・24・25号建物)
	３号屋敷(16・17・18号建物)
	４号屋敷(20号建物)・５号屋敷(21号建物)
	６号屋敷(15号建物・54号建物) 37号含む
	７号屋敷(13号建物・55号建物)・８号屋敷(30・31・32・34号建物)・９号屋敷(14・35号建物)・10号屋敷(36号建物)・12号屋敷(42・44号建物)
	11号屋敷(38・47・48号建物)・14号屋敷(41・49号建物)
	13号屋敷(39・46号建物)・16号屋敷(40号建物)
	15号屋敷(27・52・53号建物)
建物	22号建物
	23号建物
	26号建物
	28号建物
	33号建物
	43号建物
	45号建物
	50号建物
	51号建物
不動院	６号建物(本堂)
	５号建物(庫裏)
	築山
	池
	石垣
	３号建物(薬師堂)

第９表　建物一覧表

建物番号	調査区	屋敷番号等	概要	建物番号	調査区	屋敷番号等	概要
1	6	１号屋敷	主屋	31	8	８号屋敷	蔵・土台石以下良好に残存
2	1	屋敷外	石川原遺跡（１）報告済み	32	8	８号屋敷	付属建物・1208・1209号土坑
3	1	寺	薬師堂？	33	8	屋敷外	小屋か
4		欠番		34	8	８号屋敷	付属建物・床面ローム状粘性土
5	1	寺	庫裏？密教法具出土	35	8	９号屋敷	付属建物・1229・1230号土坑
6	1	寺	本堂	36	8	10号屋敷	主屋
7	1	屋敷外	石川原遺跡（１）報告済み	37	6	欠番	
8	2	屋敷外	石川原遺跡（１）報告済み	38	6	11号屋敷	主屋・付属建物２軒
9	7	２号屋敷	蔵持主屋・馬複数・付属建物５軒・遺跡最大の屋敷	39	6	13号屋敷	下屋柱無しの主屋
10	7	２号屋敷	付属板敷建物	40	6	16号屋敷	下屋柱無しの主屋
11	7	２号屋敷	蔵	41	6	14号屋敷	主屋
12	7	２号屋敷	付属建物	42	7	12号屋敷	小さな主屋・土座明瞭に残る
13	6	７号屋敷	主屋・下屋柱無し主屋・焼却後廃屋・唐臼掘出倒置	43	8	屋敷外	宗教関連施設か・施設は３か所。地蔵や五輪塔出土
14	8	９号屋敷	主屋	44	7	12号屋敷	付属建物・1334号土抗
15	6	６号屋敷	主屋	45	4	屋敷外	小屋か
16	5	３号屋敷	蔵持主屋・付属建物３軒・薪場	46	6	13号屋敷	付属建物・１号土坑・２号土坑
17	5	３号屋敷	蔵	47	6	11号屋敷	付属建物
18	5	３号屋敷	付属板敷建物	48	6	11号屋敷	付属建物・１号土坑・２号土坑
19	2	屋敷外	石川原遺跡（１）報告済み	49	6	14号屋敷	付属建物・１号土坑・２号土坑
20	5	４号屋敷	主屋・北側の板敷良好に残る	50	5	屋敷外	小屋か・太い丸柱残る
21	5	５号屋敷	主屋・膨大な遺物。板間南に土間・仏壇	51	5	屋敷外	小屋規模の小さな主屋。多くの建築部材と生活用具・仏壇
22	6	屋敷外	大きな小屋か	52	5	15号屋敷	付属建物・桶１・桶２
23	5	屋敷外	畑中の小屋か	53	5	15号屋敷	付属建物
24	7	２号屋敷	付属建物	54	6	６号屋敷	付属建物・660・674号土坑
25	7	２号屋敷	付属建物	55	6	７号屋敷	付属建物・650号土坑
26	1	屋敷外	段丘下の小屋か	56	5	４号屋敷	付属建物・823・824号土坑
27	5	15号屋敷	主屋・遺跡最大量の建築部材や生活用具出土。２階床張り建物・３人の人骨と猫の骨出土	57	5	５号屋敷	付属建物・703・704号土坑
28	7	屋敷外	畑内の小屋か				
29	7	屋敷外	石川原遺跡（２）報告済み 中世鍛冶遺構				
30	8	８号屋敷	蔵持主屋・馬複数・板間南に土間・付属建物３軒				

第１節　１号屋敷跡(第10～18図、PL.１～４)

第１項　１号屋敷跡概要
第２項　１号建物　（１)土間　（２)竈　（３)１号囲炉裏
（４)２号囲炉裏　（５)３号囲炉裏　（６)唐臼
（７)馬屋
第３項　洗い場
第４項　１号木枠
第５項　出土遺物

第１項　１号屋敷跡概要

１号屋敷跡は、北側の吾妻川に向かって低くなる緩やかな傾斜面に造られている。屋敷と集落の中央にある村の幹線道21号道とは、屋敷前庭から南にある１号道により繋がっている。１号道の長さは約15mである。屋敷は21号道より約2.3m低い場所となっている。21号道の脇には不動沢から水を引いたと思われる53号溝が造られている。１号屋敷の西側には、屋敷とほぼ並行するように10号道があり、道の東側には５号溝がある。この10号道と５号溝は、屋敷南側で21号道と53号溝から北西方向に分離して造られている。10号道は１号屋敷より約90㎝低い場所にある。屋敷の東側と北側は畑となっており、屋敷は東側の畑より10～20㎝低く、北側の畑より20～30㎝程高い。屋敷の南側には庭があり、庭の大きさは東西14m、南北幅４m前後である。

１号屋敷は付属建物や井戸はない。屋敷前庭南側、通路の脇に石で長方形に区画された洗い場と思われる遺構がある。その西側には長方形に掘り込まれ底部に板が敷き詰められている遺構が確認された。用途不明である。調査担当は１号木枠と呼称して調査した。

As-A軽石が１号屋敷地内では、建物の雨落溝周辺に確認できたが前庭にはほとんど残っていなかった。除去されていたものと思われる。

第２項　１号建物(第11～16図、PL.２～４)

25-90・100-H～L-24～３グリッドに位置する。
【概要】屋敷の主屋である１号建物は、土台建物である。東西方向に長い建物であり、棟方向(東西)７間、奥行き方向(南北)４間で南側に縁側？(下屋)を持つ建物である。馬屋部分は、糞尿用の馬屋桶部分に小さな屋根が架けられていたようである。土間は前庭より高くなっており、As-A軽石は、建物を囲むように堆積していた。建物西側約半分が土間で、東側約半分が板間であったようである。板間部分には土台下に置かれていた土台の石が多く残っていた。土台の石は数点残っていないが、本来置かれていたと思われる場所は点線で図示した。

雨落溝は、標高の高い東側の畑との境に幅30㎝前後残っていたが、建物より低い位置にある北側と西側部分ではAs-A軽石は残っていたが、溝状の雨落溝は残っていなかった。１号建物出入口は土間南側で、馬屋の隣付近であったと思われる。土間の北側に２号囲炉裏とその北に竈、南西コーナー部分に馬屋が配置されている。馬屋の南側には馬屋桶が埋められている。北西コーナー部分に唐臼が埋められていた。唐臼の東側に支脚穴と思われる小さな落ち込みが確認されている。東側の板間と思われる部分は、幅２間、奥行き３間の板間が２間造られていた。中央の板間を板間１、奥の東側の板間を板間２と呼称する。奥の板間２は南北の２部屋に分かれる可能性が考えられ、多くの石で囲まれた１号囲炉裏がある。板間１の中央部分にも大きな石がほぼ円形にまとまって出土している。ここに囲炉裏が造られていたものと思われ、３号囲炉裏とする。
【位置・規模】建物は、土台下の石を参考に心々寸法で計測すると、棟方向(東西)14.25m。奥行方向(南北)は7.6m。板間のある東側壁面部分は東西7.6mで東西２つの板間に分かれる。板間部分の南には、主屋の礎石から約95㎝離れて下屋柱を持つ。この部分は縁側等が造られていたもの思われる。
【構造】土台の石は平石および川原石が多用されていた。建物内の土台の石の大きさは同じような石を使用しているが、地形的に低く盛土されたであろう軟弱な西側には、大きな石を連続して並べている。さらに石の外側にあたる西側には、大きな石が置かれている。土留めのためであろうか。

床面と考えた東側４間の範囲に、床材や大引・根太痕は残っていなかった。しかし石で高く盛り上げられていた囲炉裏が造られており、土間より高い床面が造られていたことが考えられる。

（１）土間（第11図参照）

１号建物の西側に位置し、東側が板間と思われる。土間の南西コーナー部分に馬屋がある。土間面は堅く、踏み固めた部分やローム等を用いて固めていた様子は認められない。

（２）竈（第14図、PL. ３）

【位置・概要】１号建物土間の奥、２号囲炉裏北側に位置する。残りが悪く竈を築くために燃焼部を囲むように積まれていた石は、ほとんど残っていなかった。土間の床面から下面に位置する燃焼下部が残っており、竈の存在を確認することが出来た。

【規模・形状】残っていた竈燃焼下部は、地山が楕円形に20㎝程掘り込まれていた。泥流を除去すると、燃焼下部に焼土、その下に多くの粉状の炭と少量の灰があった。その下部は、燃焼部の熱を受けて焼土化したであろう淡いピンク色の焼土層が残っていた。残っていた燃焼下部の規模は、炊口から煙道の南北方向96㎝、燃焼部東西方向70㎝であった。竈燃焼部分は、竈周辺の土間より約25㎝の深さで凹んでいる。

【構造・所見】残りの悪い竈であった。竈の南１ｍ以内に近接して２号囲炉裏がある。これほど近接して両者が造られている例は、これまでの調査ではなかった。使用方法や機能について、今後の調査例から検討する必要があるものと思われる。

（３）１号囲炉裏　第15図、PL. ３）

【概要】建物東側南寄りに、細長い石を用いて方形に区画した遺構が確認された。確認面に焼土・灰・炭等は全く確認されなかった。これまでの調査例から囲炉裏と思われる。土間より高い位置となるように多くの石を方形に組んでいるので、この部分は板の貼られた床面となっていたものと思われる。

【構造・規模】長さ60㎝、横幅30㎝、厚さ10㎝前後の大きな石を方形に並べ、その石の周辺に小さな石を置き、ほぼ方形の石組となっている。石で囲まれた内径は東西南北とも約70㎝である。残っていた石の最も高い部分は、土間の高さより約15㎝高くなっていた。囲まれた石組内部は、地山と同じような土で埋まっていた。

【所見】板間に造られた囲炉裏と思われるが、焼土や灰の出土はなく、使用されていたか不明である。周辺に焼土・灰・炭等は残っていなかった。囲炉裏として造ったが使用していたかは疑問である。

（４）２号囲炉裏（第15図、PL. ３）

【位置・概要】１号建物土間の東寄りで、竈の南側に位置する。確認段階では、土間のＵ字状の掘り込みの中を底部まで天明泥流が埋めていた状態であった。掘り込み面南側から十能が出土していた。天明泥流を除去すると、長方形の掘り込みであり、土間面より15㎝前後の所に中段があり、そこから内側はＵ字状の掘り込みとなっていた。中段部分に灰が少し残っていたが、中段から内側は灰・炭・焼土等一切なかった。

十能が出土した囲炉裏の中段の北側部分の灰を含む層上から、箸のように細長い鉄の棒が２本確認された。錆が進んで遺物として取り上げることはできなかった。火箸の可能性があるのではないだろうか。泥流や杯を含む中段の覆土を撤去すると、長方形の掘り込みが確認された。

【規模】長軸方向128㎝、短軸方向95㎝、土間面からの深さは灰が残っていた中段面まで15㎝、撹乱を受けている中央底部まで38㎝である。掘り込み面の４隅に置かれていたと思われる枠木の想定幅は約９㎝である。

【所見】囲炉裏内中央部は厚く泥流で埋まっており、囲炉裏内の灰は中段に少し残っていただけであった。平面形の形状も、これまで東宮遺跡や西宮遺跡で調査された囲炉裏は、ほぼ90㎝前後の方形を呈していたのに対し、この囲炉裏は長方形で規模が大きい。このように少し異質な遺構である。しかし囲炉裏内中段部分から出土した灰と、その上にあった十能や火箸と思われる遺物が、床面を長方形に掘り込んでいること等から囲炉裏と考えられる。

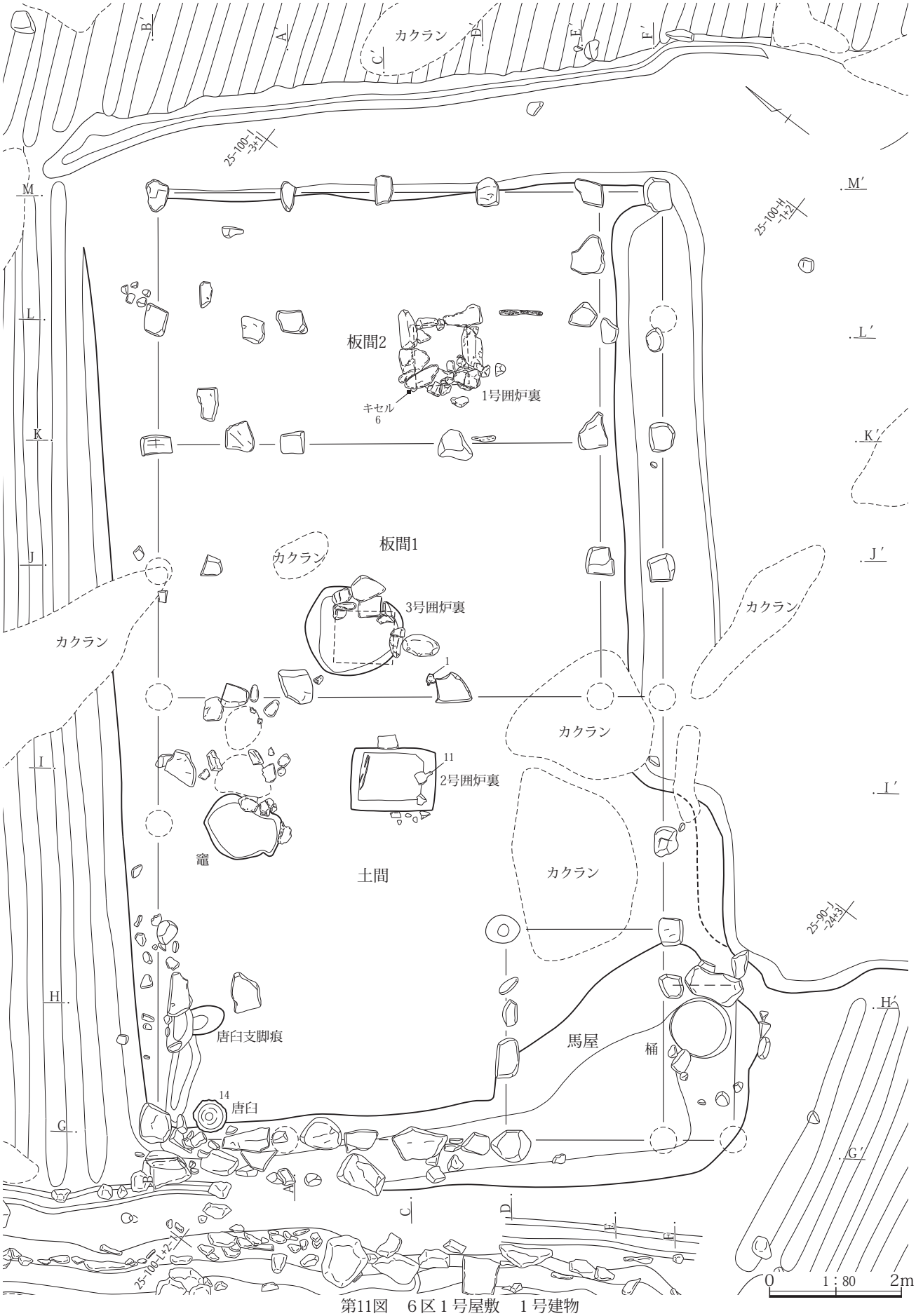
（５）３号囲炉裏　（第15図、PL. ３・４）

【位置・概要】板間１の中央部、やや土間寄りに円形に掘り込まれ、南と東側に１号囲炉裏と同じような大きな石が並べられた遺構が確認された。調査担当は中央集石として調査したが、土間に近い板間に、囲炉裏が造られていない建物はほとんどないので、この施設は囲炉裏であり、それが壊されたものと考えたい。

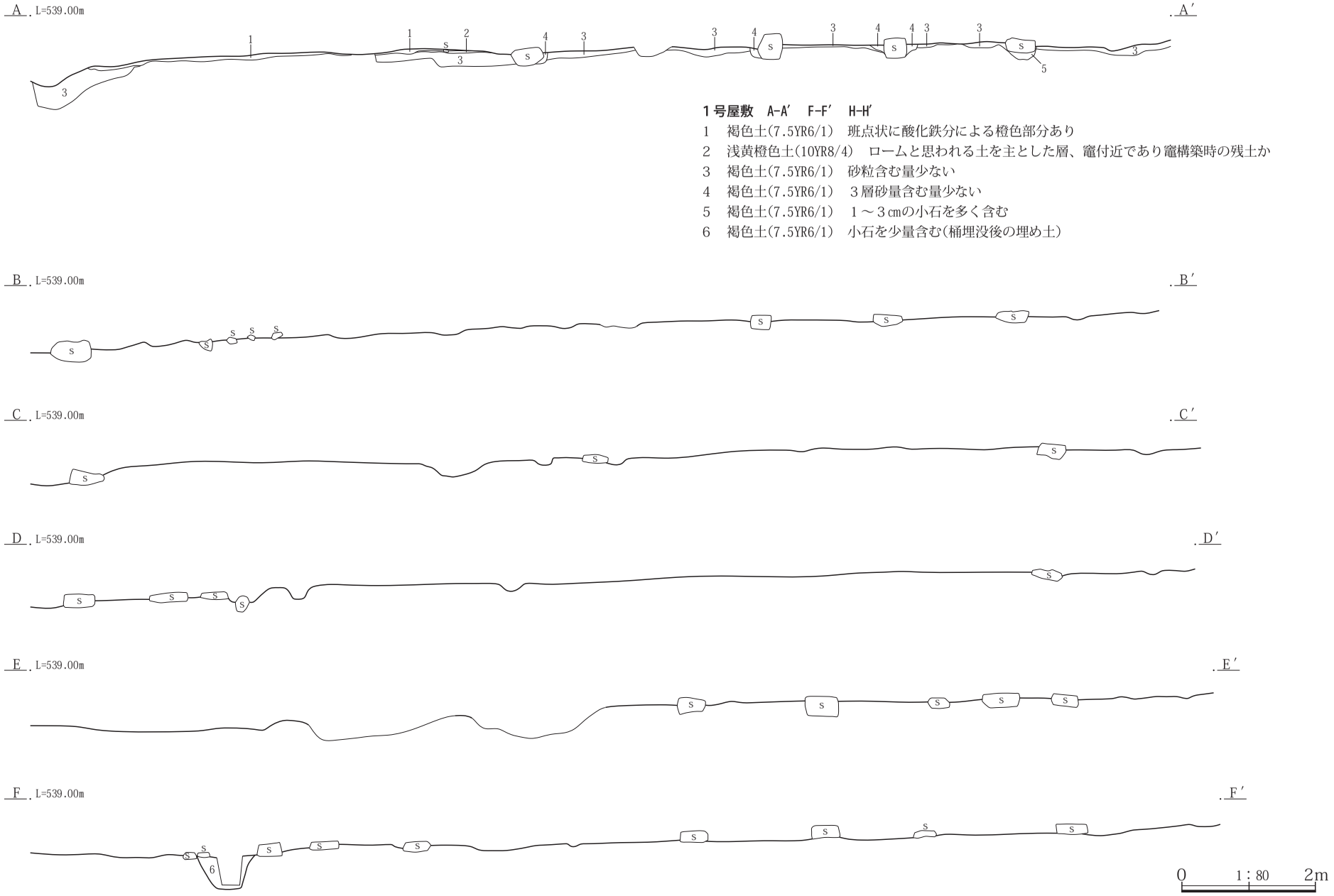
【規模】掘り込み面は東西南北とも約1.4ｍの円形であり、土間面からの深さは10㎝程低くなっている。

（６）唐臼（想定）（第16図参照）25-100-Ｌ-１グリッドに位置する。

第10図　6区1号屋敷位置図



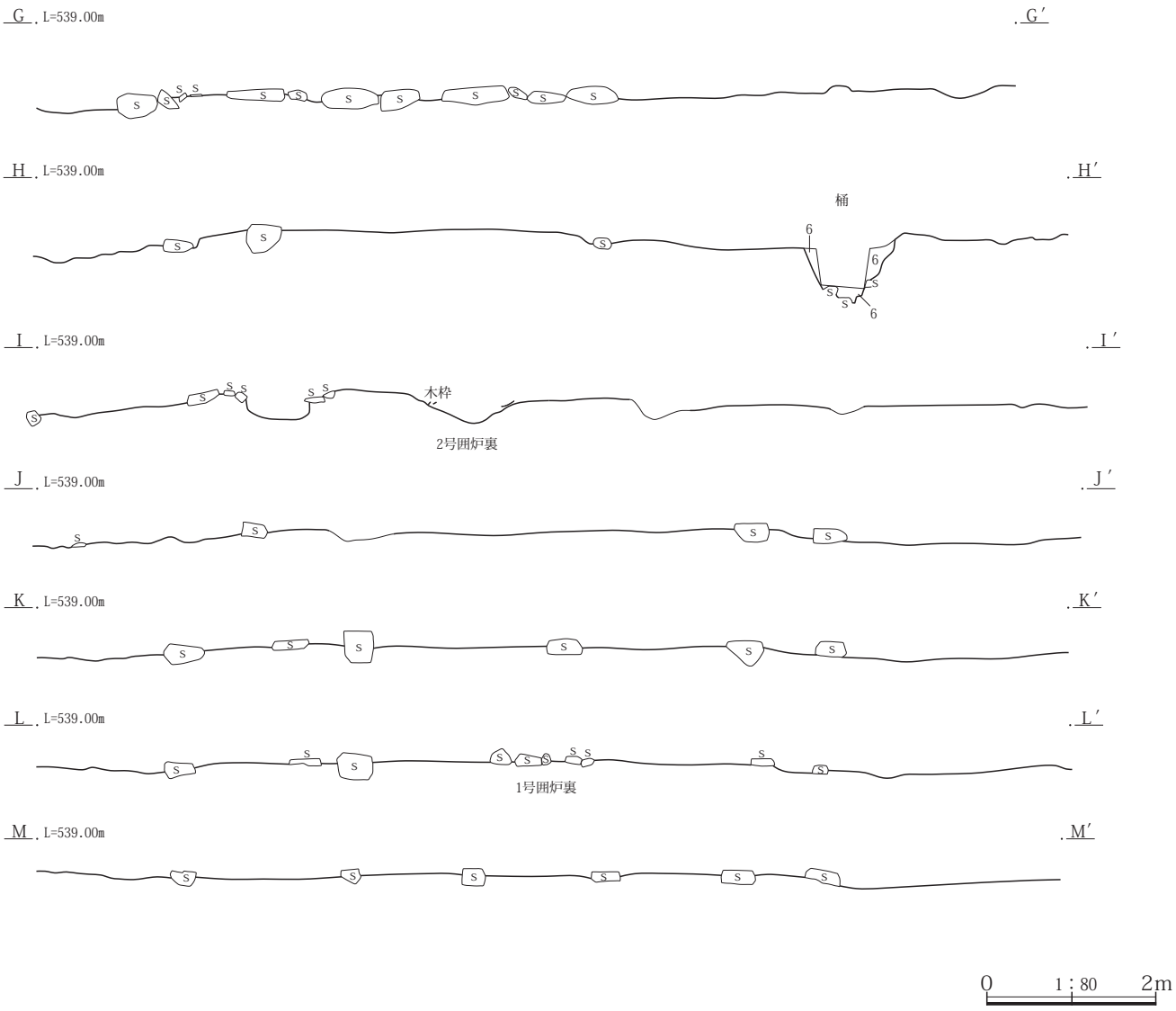
第11図　6区1号屋敷　1号建物



１号屋敷　A-A′　F-F′　H-H′

1　褐色土(7.5YR6/1)　班点状に酸化鉄分による橙色部分あり
2　浅黄橙色土(10YR8/4)　ロームと思われる土を主とした層、竈付近であり竈構築時の残土か
3　褐色土(7.5YR6/1)　砂粒含む量少ない
4　褐色土(7.5YR6/1)　３層砂量含む量少ない
5　褐色土(7.5YR6/1)　１～３㎝の小石を多く含む
6　褐色土(7.5YR6/1)　小石を少量含む(桶埋没後の埋め土)

第12図　６区１号屋敷　１号建物断面



第13図　６区１号屋敷　１号建物断面

【概要・所見】土間部分、北西コーナーから唐臼が出土した。唐臼は少し斜めに傾いていたが、大部分が土間に埋められた状態であり、石臼が使用されていて段階に近い状態であった。唐臼は木製の杵と杵を支える支点となる支脚が必要であるが、杵や支脚は残っていなかった。支脚が埋まっていたと思われる掘り込みが石臼東側約140㎝付近に確認できた。底面まで調査していないので、他の調査例を参考にして、石臼と支脚穴との関連を図示した。

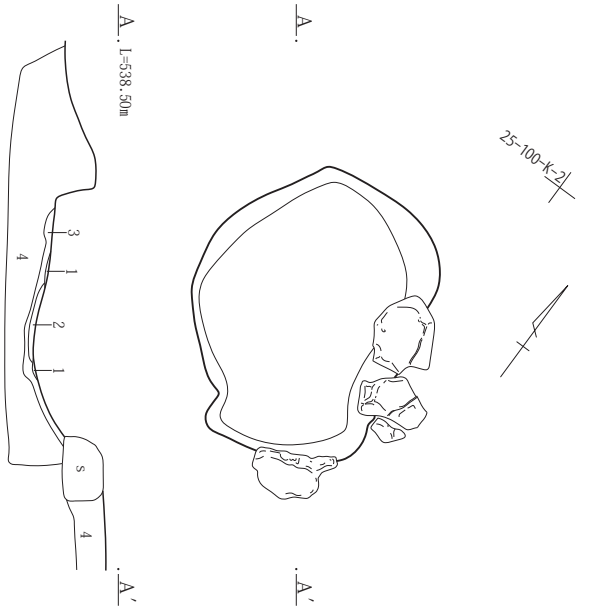
（７）馬屋（第16図、PL. ４）

【位置・規模・構造】１号建物の南西隅に位置する。主屋同様に馬屋の柱も北東の掘立柱以外は土台の石が用いられている。馬屋の南側には埋設桶（便槽）が埋められていた。中は泥流で埋まっていた。土間部分の標高は538.5m、馬屋部分の標高は538.2mであり、馬屋部分は土間部分より低くなっている。馬屋の規模は東西方向約3.2m、南北方向2.4mである。

埋設桶（便槽）

【概要・規模】馬屋の南側に接して桶が埋められていた。桶は残っていなかったが、桶の木質部が残っていた。桶底面の直径は約80㎝、残っていた上部での直径は83㎝、桶の高さは45㎝前後であるが、本来は70㎝前後の深さはあったものと思われる。タガの痕跡が底部から８㎝と28㎝の所に２か所あった。

【所見】桶はこれまで、東宮遺跡９・18号建物・西宮遺跡４・５号建物等で調査されている例と同じであり、便槽と思われる。１号屋敷には他に厠等も造られていないので、馬の糞尿と人間の便所を兼ねていると思われる。便



１号屋敷　竈A-A′
1　赤橙色土(10YR5/4)　焼土粒を主とした層
2　暗赤灰色土(10YR3/1)　粉状の炭を多く、少量の灰を含む層
3　橙色土(2.5YR7/8)　焼土粒を多く含む層
4　灰黄褐色土(10YR5/2)　砂質の地山層

0　1：30　1m

第14図　６区１号屋敷　１号建物１号竈

槽に雨水等が入らないように屋根があり、便槽を囲む仕切りもあったと思われる。便槽の東側にある大きな石は、人間が便槽に入るための踏石ではないだろうか。

第３項　洗い場（第17図、PL.４）

25-90-Ｈ・Ｉ-23・24グリッドに位置する。

【概要】１号屋敷に入る道の途中、道の東側に石で方形に囲まれた長方形の掘り込みがある。これは洗い場と思われる。洗い場から南12ｍの位置に53号溝があり、当時不動滝付近から引いた水が常時流れていたものと思われる。53号溝の底部の標高は540.6ｍ、洗い場底部の標高は538.45ｍ、洗い場は53号水路より２ｍ以上低い位置にある。屋敷の標高は538.5ｍで洗い場の底面とほぼ同じ標高である。

【規模・構造】石で囲まれている洗い場を内径で計測すると長軸方向143㎝、短軸方向94㎝、深さは南側64㎝、北側50㎝である。天明３年の段階では、当初造られた底面から深さの半分近くに相当する約20㎝埋没しており、底面にはAs-A軽石が、その上を天明泥流が埋めていた。積まれている石は幅40㎝、高さ30㎝、厚さ15㎝前後の大きさの石を用いているが、それより小さな石や、横幅85㎝の細長い石等も用いている。小口積みではなく、細長い面を表面に積んで、最も上になる石は、小口積みにして崩壊を防いでいるようである。石は２段から７段程積まれている。

【所見】屋敷に井戸はないので生活水を確保するための洗い場と思われる。このように方形に区画された洗い場は２・９・11・16号屋敷にも造られており、この村では生活水はここで確保していたものと思われる。

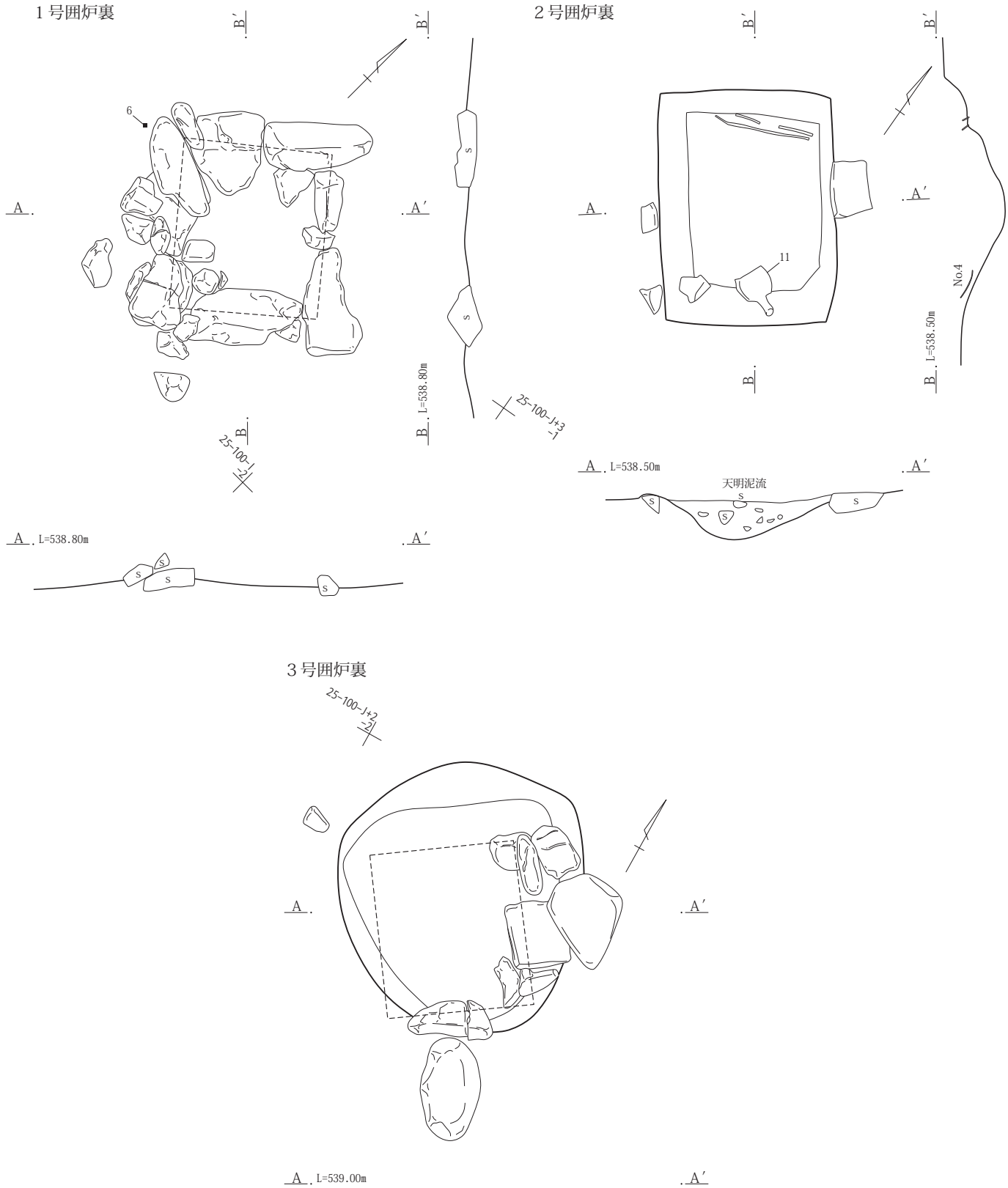
第４項　１号木枠(第18図、PL.４)

25-90-Ｉ・Ｊ-22・23グリッドに位置する。

【概要】１号屋敷に入る道の途中、道の西　側の斜面部を長方形に掘り込んで、底面･側面、おそらく蓋も板で囲った長方形の掘り込みがある。

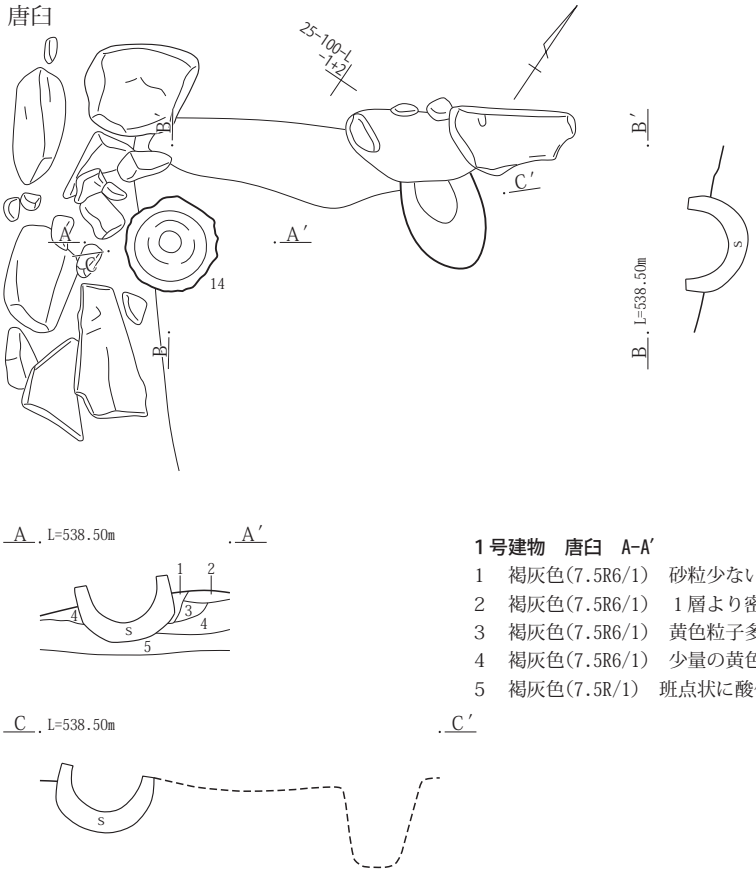
【規模･構造】板は底面に６枚、側面には横方向に２枚使われていた。天井部は残っていなかったが、泥流に巻き込まれたような状態で、内部に多くの木質が残っていたので、おそらく蓋があったものと思われる。規模は長軸方向126㎝、短軸方向108㎝、深さは最も残りの良い南側で40㎝である。使われていた板の幅は28㎝前後が中央に、左右には少し幅の狭い板が使われていた。板の厚さは残りが悪く確認できない。これらの複数の板を固定するための桟木の痕跡は、外面に残っていなかった。

【所見】１号屋敷に入る道の東側には石で方形に囲まれた長方形の掘り込みがあり、他の調査例から洗い場とした。板で囲まれた遺構と洗い場の両者の間は、4.5ｍの距離であり、底面の標高は洗い場が538.45ｍ、板で囲まれた遺構は標高538.3ｍで、ほぼ同じである。大きさは、洗い場は長軸方向143㎝、短軸方向94㎝、深さ50㎝。木枠で囲まれたこの遺構は、長軸方向126㎝、短軸方向108㎝、深さは40㎝。石で囲むか、板で囲むかの違いはあるが、ほぼ同じ高さで同じような遺構が道の両側に造られている。調査担当は１号木枠として調査した。用途等不明であるために、名称は調査段階のものを使用して報告する。今後調査例の増加を待って、内容や名称について検討したい。



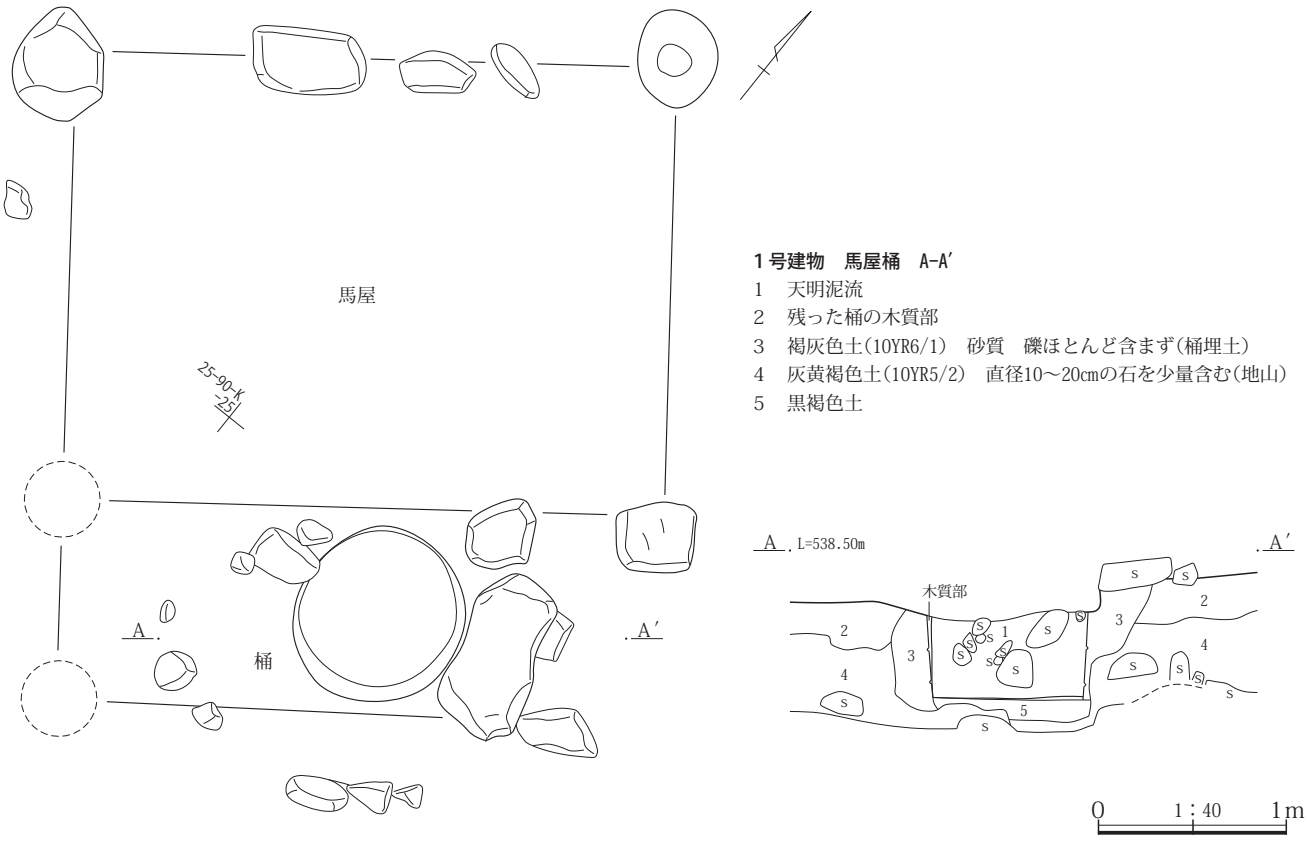
0　1：30　1m

第15図　６区１号屋敷　１号建物１号～３号囲炉裏



１号建物　唐臼　A-A′

1　褐灰色(7.5R6/1)　砂粒少ない
2　褐灰色(7.5R6/1)　１層より密(地山)
3　褐灰色(7.5R6/1)　黄色粒子多く含む(地山)
4　褐灰色(7.5R6/1)　少量の黄色粒子を含む(地山)
5　褐灰色(7.5R/1)　班点状に酸化鉄による橙色部分あり(地山)

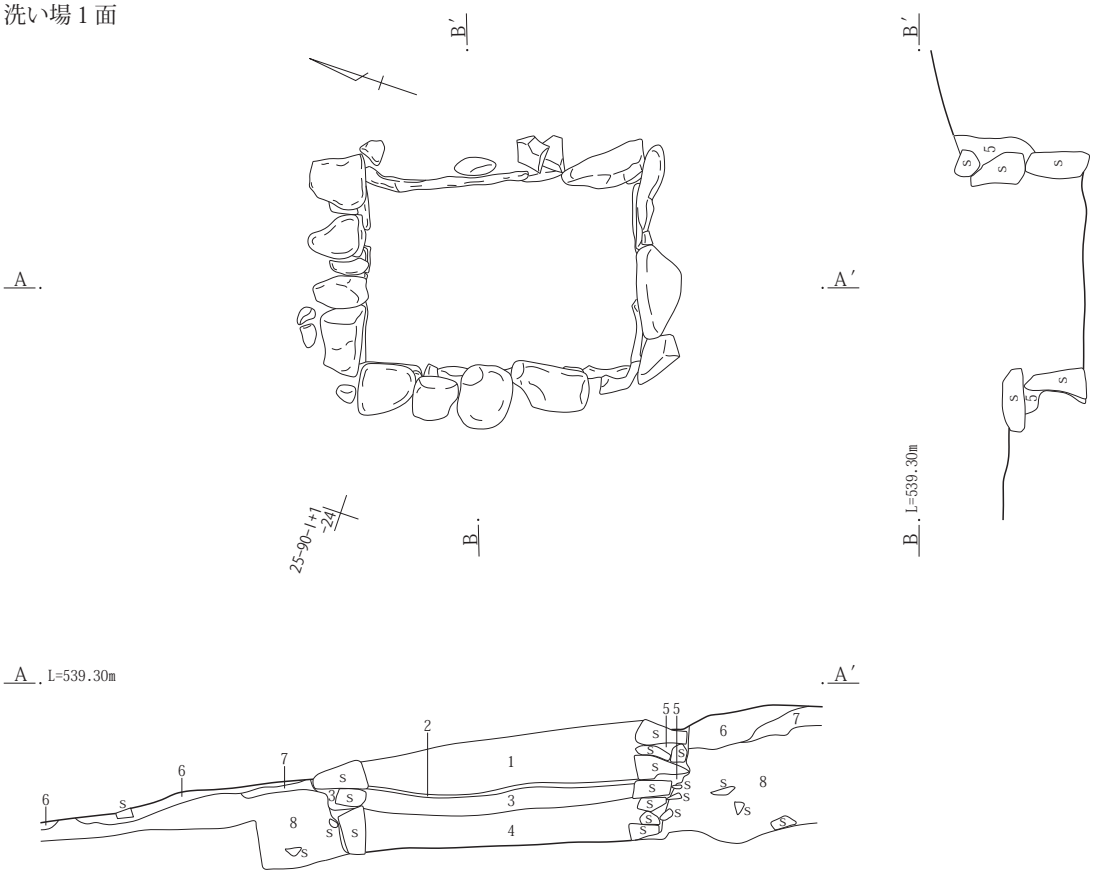


１号建物　馬屋桶　A-A′

1　天明泥流
2　残った桶の木質部
3　褐灰色土(10YR6/1)　砂質　礫ほとんど含まず(桶埋土)
4　灰黄褐色土(10YR5/2)　直径10～20㎝の石を少量含む(地山)
5　黒褐色土

第16図　６区１号屋敷　１号建物唐臼、馬屋

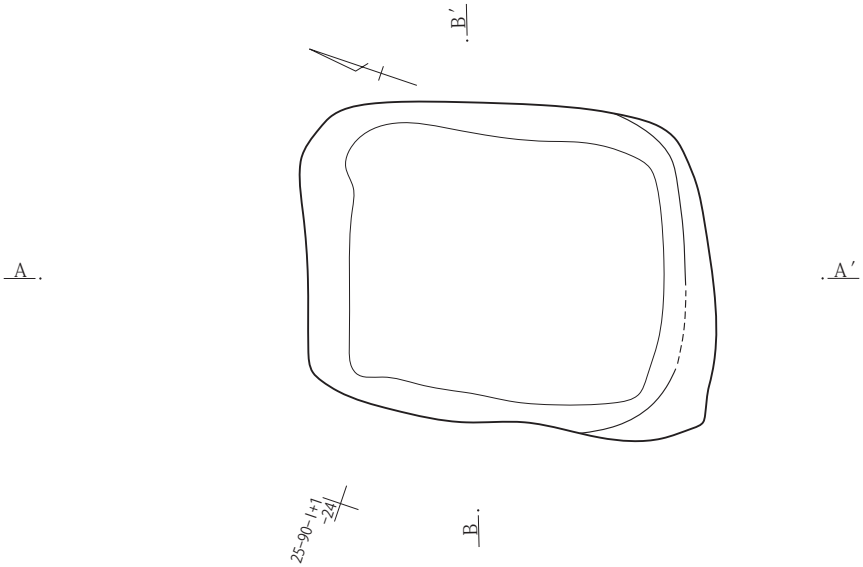
洗い場１面



１号屋敷　洗い場　A-A′

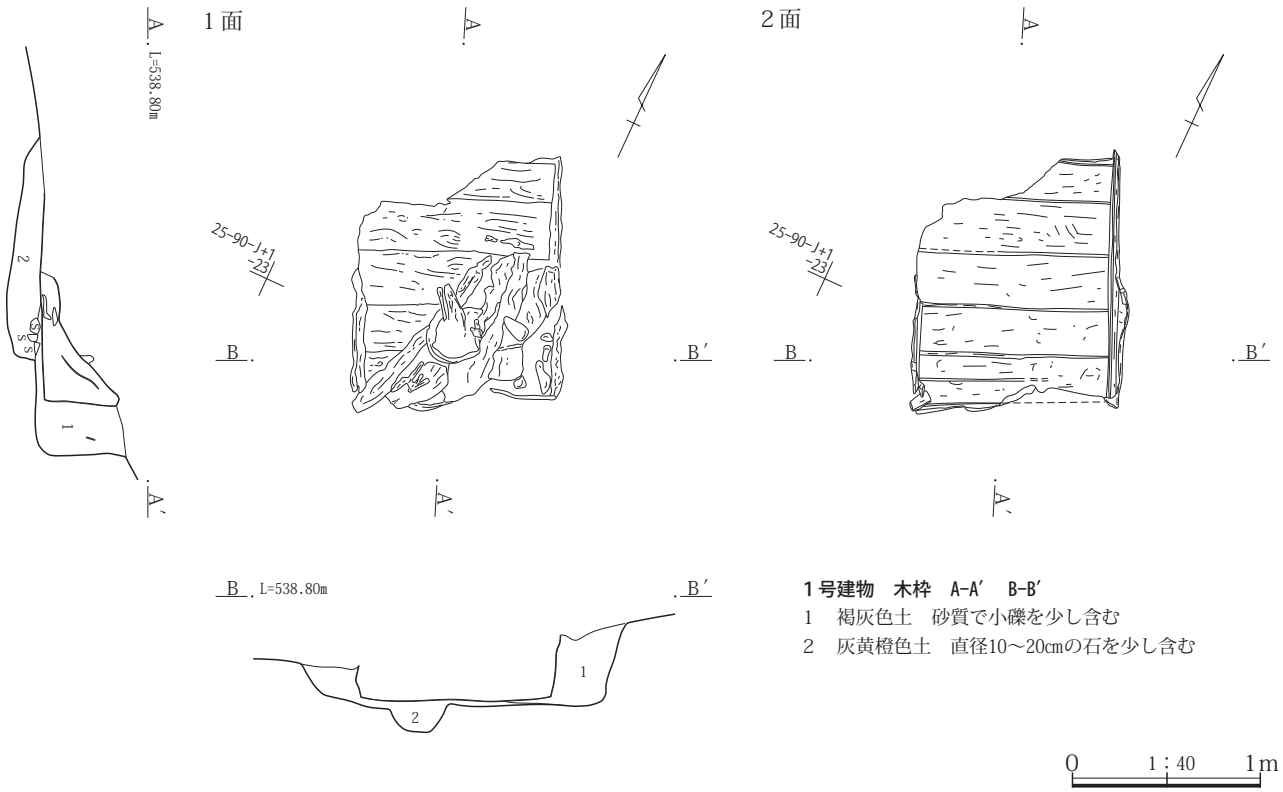
1　天明泥流
2　As-A軽石
3　灰褐色土　粘質土
4　灰褐色土　砂と小礫を混入
5　灰褐色土　小礫少ない(石積裏込)
6　褐灰色土　酸化鉄による橙色の土を斑点状に含む(地山層)
7　褐灰色土　６層に近いが、橙色の土含まず(地山層)
8　灰黄橙色土　直径10～20㎝の石を少量含む(地山)

洗い場２面



0　1：40　1m

第17図　６区１号屋敷洗い場



第18図　６区１号屋敷１号木枠

第５項　出土遺物(第356・357図、PL.313)

遺物の出土量は多くない。木製品は、屋敷南側の１号木枠の底部に、５枚の板材と東西に即位他の痕跡が残っていた。底板の長さ108cm、幅28cmで大きさはほぼ同一である。取り上げることができる状態ではなかった。陶磁器は、瀬戸・美濃陶器の片口(１)が２号囲炉裏と３号囲炉裏の中間地点南側から出土している。馬屋南の埋設桶(便槽)の中から肥前磁器碗が２個と肥前染付碗が１個出土している。天明泥流で埋まった段階で、桶の中に落ちたのであろうか。煙管の雁首が１号囲炉裏西端から、銅製品の十能が２号囲炉裏内南端から出土しており、おそらく使用されていた状態に近い位置からの出土と思われる。建物覆土中から、新寛永通寶１枚、茶釜１個、鍋と思われる底部が出土している。茶釜は残りが良好であったが、鍋は底部だけであり、底面は平らであった。石製品である唐臼が建物西端部、土間の北西コーナー部分で土間に埋まった状態で出土している。唐臼から東1.4m前後の場所に、唐臼で脱穀等をするために杵と直行して組まれている長い柄を支える支脚を固定するための穴と思われる彫り込みが確認された。

杵と直行して組まれている柄の上に、重量を増すために組み込まれる石製品が、建物覆土中から出土している(13)。５号屋敷21号建物と15号屋敷27号建物では、杵と柄とこの石製品が組み込まれた状態で出土している。

唐臼は口縁部が土間より８cm前後高くなるように埋められているが、水平ではなく、杵のある東側が、少し高くなるようになっている。唐臼を垂直方向の断面で観察すると、最大径は口縁部でなく、一段下の肩部分となっている。このように、土間より高い位置に口縁部がくるように埋められ、断面最大径が口縁部下の肩部の唐臼は、口縁部を土間より少し深く埋め、その上に中空の枠木やローム等を乗せて、使用する唐臼ではない。

第２節　２号屋敷跡(第19～38図､PL.５～30)

第１項　２号屋敷跡概要
第２項　９号建物　(１)竈　(２)１号囲炉裏
(３)２号囲炉裏　(４)３号囲炉裏　(５)唐臼
(６)室　(７)705号土坑
(８)676号土坑・677号土坑　(９)Ｐ１・Ｐ２
(10)馬屋　(11)712号土坑(飼葉桶)
(12)654号土坑　(13)709号土坑・651号土坑
(14)763号土坑　(15)713号土坑・714号土坑
第３項　洗い場(階段)
第４項　中庭・中庭の踏石・集められたAs-A軽石・集められた褐色土
第５項　10号建物
第６項　11号建物(蔵)
第７項　12号建物
第８項　25号建物　(１)708号土坑・Ｐ３
第９項　24号建物　(１)715号土坑　(２)710土坑
第10項　11号道
第11項　22号道
第12項　石垣について　(１)５号石垣　(２)６号石垣
(３)７号石垣　(４)８号石垣　(５)９号石垣
第13項　出土遺物

第１項　２号屋敷跡概要

２号屋敷跡は集落の中央部で、村の幹線道である21(７)号道の南側に位置する。屋敷の東側は南東方向から伸びる丘陵の先端部となっている。明治６年壬申字引絵図には、この丘陵上に道(22号道)が描かれており、丘陵先端部が平地と接する２号屋敷東側で村の幹線道である21号道とＴ字状に交差している。この道(22号道)は、南東方向にある川原湯温泉へと繋がっており、村の幹線道である。この道と思われる遺構が、24号建物北側に接して22号道として調査されている。幅３ｍで、村の幹線道である21号道(1.8m)より幅が広い。丘陵の稜線に造られていて、21号道と11号道交差点付近から丘陵を上るように北東10m進むと、1.4m高くなる傾斜の強い道である。このように、２号屋敷は川原湯温泉へつながる22号道と、村の幹線道の21(７)号道が交差する場所の東側に位置する。

２号屋敷は丘陵先端部西側に位置し､斜面を一部削り、付属建物である24・25号建物が建てられている。屋敷に入る11号道の西側に、主屋である９号建物、主屋の南には広い庭があり、庭の西側に10号建物(板敷)、南側に11号建物(蔵)、11号建物北側で25号建物の西側に12号建物がある。主屋の他に付属建物が５棟造られている。主屋を含めて６棟からなる屋敷は石川原遺跡では最大である。建物は残りの悪い付属建物を含めて、すべて土台建物であり、掘立柱建物はないと思われる。屋敷全体の敷地は平らではない。丘陵西側の斜面を削平して建てられた24・25号建物の敷地は、主屋である９号建物の敷地面より約１ｍ高い。10号と12号建物の敷地はほぼ同じ高さであるが、11号建物の敷地は主屋より約１ｍ高い。屋敷の北側には、切石を２～３段積み、長さ21m、高さ70～80㎝の９号石垣が造られていた。石垣の北側は、村の幹線道で幅約1.8mの21号道があり、21号道と石垣の間には53号溝がある。２号屋敷９号建物土間北部分では、９号石垣の一部を掘り込んで階段が造られ、階段下に洗い場が造られていた。屋敷の北および西側は畑となっていた。

２号屋敷は、他の屋敷のように幹線道北側の広い場所に造られていない。尾根の西側に位置し、尾根の一部を削って敷地を確保している。幹線道下(21号道)に残されている丘陵先端部の存在から、２号屋敷の主屋である９号建物の東側の敷地部分も、丘陵の一部を削って確保した場所と思われる。石川原遺跡では最大の敷地と最も多くの建物であり､村では３軒だけが持っている蔵がある。屋敷周辺の石垣(５・６・７・８号石垣)や、建物周辺の石垣には、多量の切石を使っている。このようなことから、この屋敷は財政的に非常に豊かであったと思われるが、北側の旧市街地を避けており、比較的新しい段階に開発された敷地に建てられた屋敷ではないだろうか。

As-A軽石は、屋敷に入るための11号道、９・11・24・25号建物雨落溝等に残っていた。しかし、中庭は除去されほとんど残っていなかった。除去されたAs-A軽石は、10号建物南側(Ａ地点)と11号建物北西部分(Ｂ地点)に、山のように高く積まれていた。

各建物は地形の関係と思われるが、東西南北を家の軸

線とはしていない。家の正面である座敷や出入口部分は南東方向に向いている。これは南側に高い山があり、太陽の光を受けるには、南向きより南東方向に向くことが必要であった結果と思われる。このような傾向は吾妻川右岸で南に高い山がある集落で多く認められる。現在でも東吾妻町上郷地区の農家は、南東方向に向いて建てられている家が多い。そのようなことも考慮し、また説明の煩雑さを避けるためにも、主屋の出入口部分を南側として説明する。

第２項　９号建物(第24～30図、PL.７～17・30)

25-90-Ｅ～Ｉ-11～17グリッドに位置する。

【概要・構造・規模】東西方向に長い建物であり、棟行方向(東西)17.1m(約9.5間)、梁行方向(南北)方向10.1m(約５間半)である。土間は東側の桁行方向8.3m、梁行方向10.1mの範囲であり、板間は西側の桁行方向幅8.9m、梁行方向7.4mであると思われる。

土間(４間半)+板間(２間半)+板間(２間半)であり、石川原遺跡では３号屋敷16号建物に次ぐ間口の広い建物である。板間に床材は残っていなかったが、板間と思われる床下の土間部分に、約45㎝間隔で根太の痕跡が多く残っていた。建物外壁部分には全面に礎石が隙間なく並べられている。柱が建てられたであろう場所の礎石は、特に大きい石を使っている。内部の礎石は、柱が建てられたであろう部分だけ礎石が配置されている。東西方向に長い建物であり、東側が土間、西側が板間で、出入口は土間の南側である。土間の東側に馬屋がある。馬屋は４頭分の区画があり、厩肥等の痕跡から３頭の馬の存在が考えられる。唐臼は埋まっていなかった。土間奥に竈、竈西側に土間を少し掘り込み、石で長方形に囲まれている施設が造られてある。室と思われる。土間の地表面には、黄色い土が表面に持ち込まれていたが、３号屋敷16号建物のように明瞭には残っていなかった。

板間に近い土間部分に３号囲炉裏が造られていたが、泥流による埋没段階では、囲炉裏は埋められ土間となっていた。16号建物の場合、この囲炉裏を囲むように板間が造られていた。一時期は同じような使い方がなされていたのかもしれない。また土間南西コーナー部分に、溝に囲まれた約160×90㎝の区画があり、南側の土台の外側に桶が埋められていた。この区画は、位置や同じような大きさから、東宮遺跡１号建物の２号施設(風呂)の可能性を考えたい。南側の埋設桶705号土坑は、便槽でもあると思われるが、風呂の水を貯蔵するための施設でもあったのではないだろうか。

板間の北、室の西側に石で囲まれた部屋が造られていた。As-A軽石はないので、屋根は架けられており、主屋の中の部屋であったものと思われる。規模は東西5.1m、南北2.8mである。部屋の土間に根太の痕跡はなく、土間面で残っていた同じような黄色い土が南東部分を中心に残っていた。西端から陶器の水盤が出土しているが、他の遺物は少なく部屋の性格は不明である。台所に伴う物置等の部屋であったのだろうか。

板間は東西の２間あり、それぞれの部屋に囲炉裏が造られている。囲炉裏の規模は異なっているが、両方とも切石で囲まれている。このような囲炉裏は他の建物ではない。奥の板間の土間面に残されていた根太の痕跡を囲むように、土壁の痕跡がＬ字状に残っていた。これは土壁の最も下面に残る痕跡と思われ、この部分に土壁があったと思われる。このような痕跡を持つ建物はほとんどないので、今後の検討が必要であると思われる。

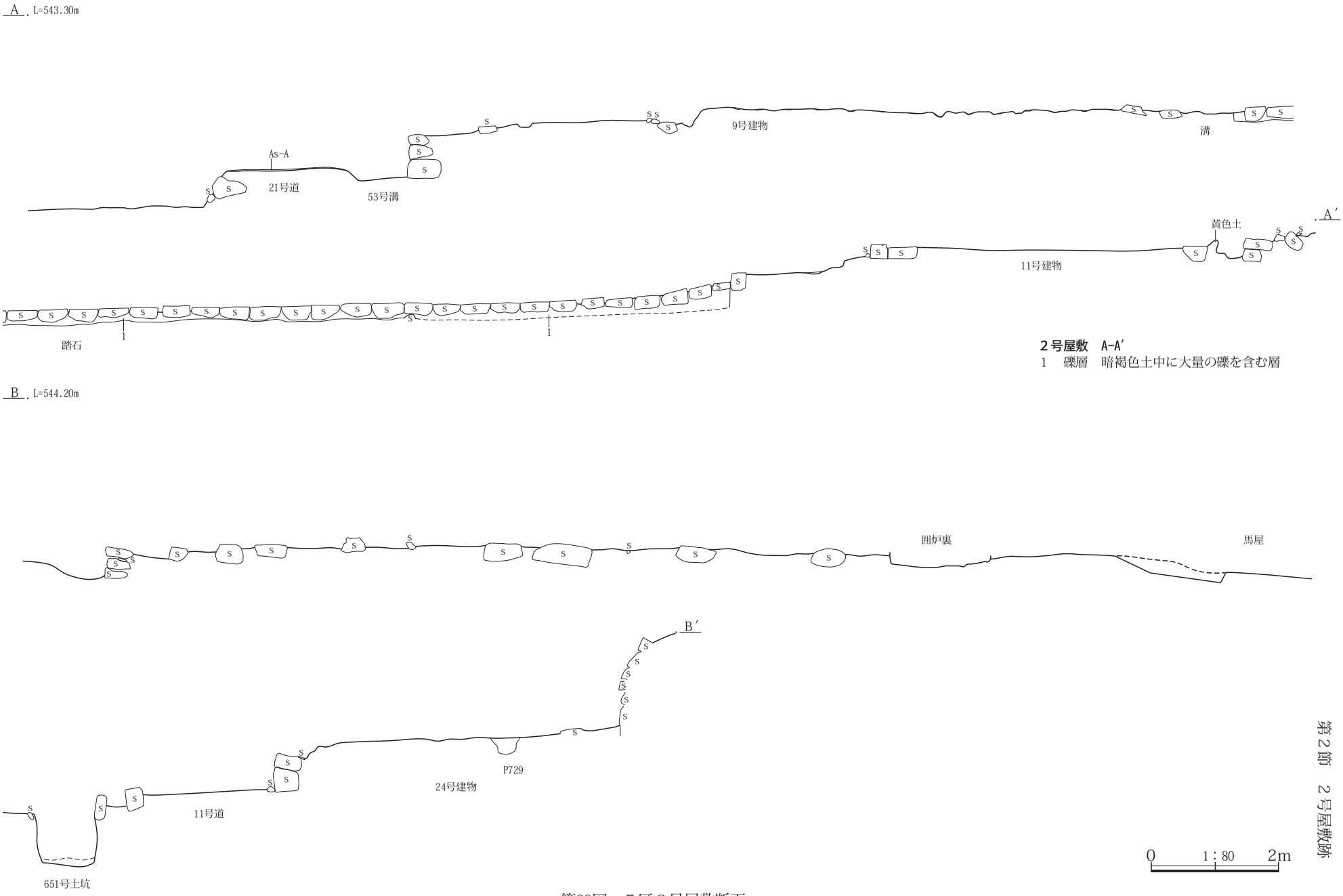
板間の南に礎石より60㎝程離れた位置に、小さな礎石が半間あるいはそれより狭い間隔に並んでいる。これまでの調査例では、下屋柱の場合建物内の柱間が１間から１間半に対し、下屋柱は倍の間隔である２間から２間半が多い。この狭い間隔の礎石は板間南と西側を囲むように造られている。縁側が造られていた可能性を指摘したい。北側には、建物礎石より45㎝程離れた位置に大きな石が連続して並べられている。幅は２間弱である。東宮遺跡１号建物や石川原遺跡16号建物の調査例から、床の間が造られていたものと思われる。

11号道から中庭に入る建物南東コーナー部分に、楔の痕跡を明瞭に残す切石が１石置かれていた。建物の雨水は、この石と屋敷を囲む切石の間を53号溝に向かって流れるようになっている。11号道に雨落溝の雨水は流れないようになっていた。この切石は長さ90㎝、幅19㎝、厚さ16㎝である。残っていた楔の削り跡は８か所である。

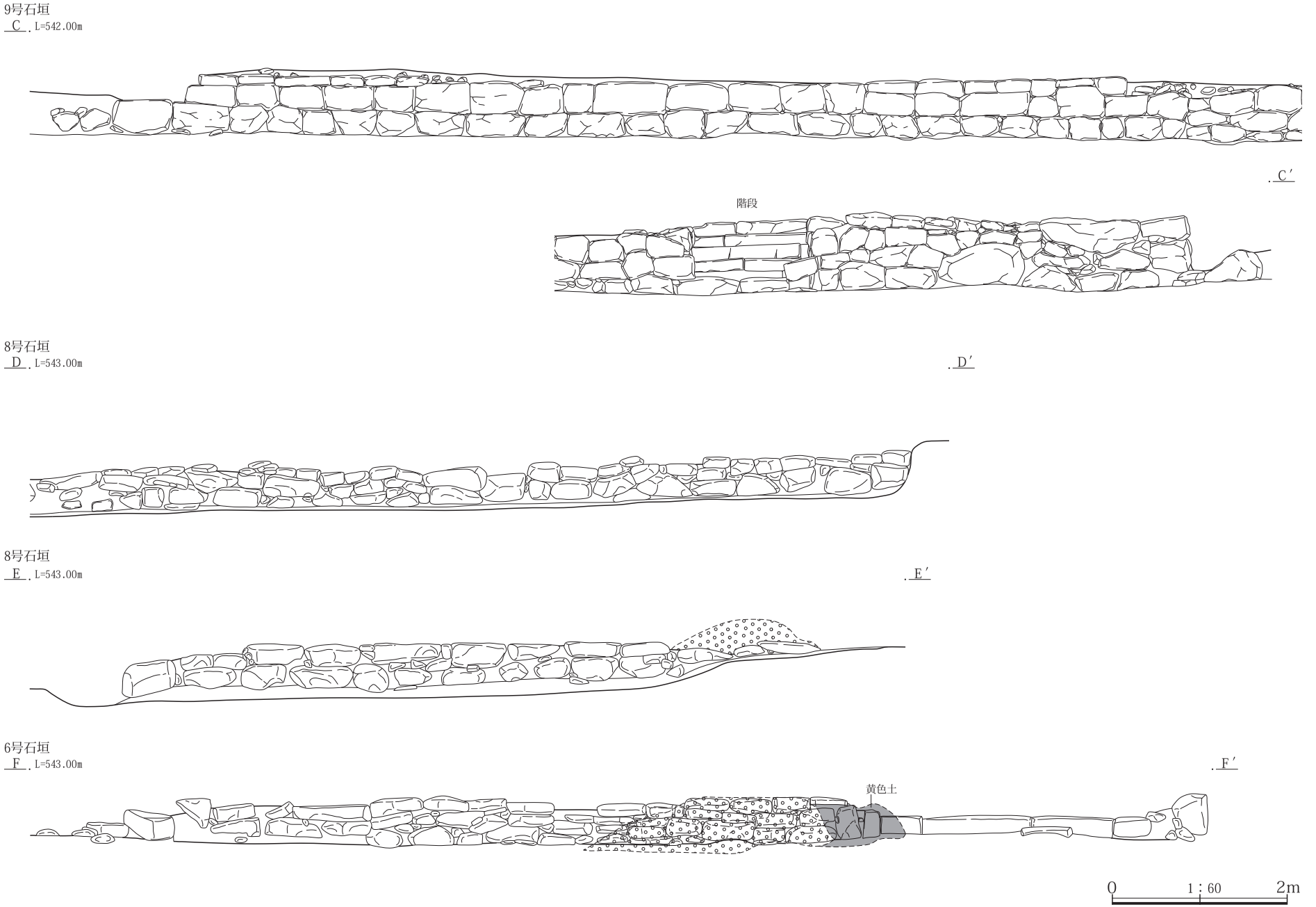
(１)竈(第25図、PL.９・10)

【位置・概要】土間の中央部奥に竈が造られていた。竈の北西約１ｍの位置に室、南西約１ｍに既に埋められていた３号囲炉裏がある。竈は炊口部分と鍋を載せる上部分

第19図　７区２号屋敷位置図



第20図 7区2号屋敷断面

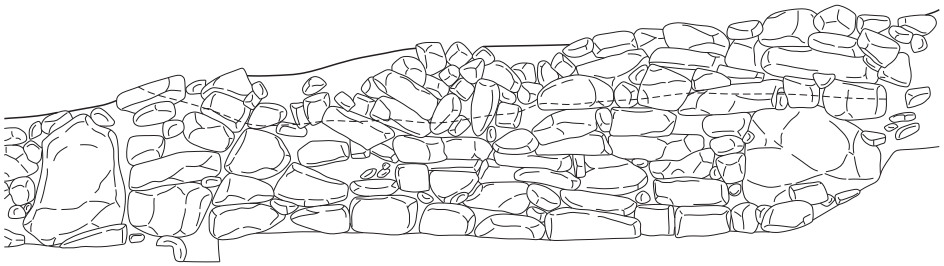


第21図　７区２号屋敷石垣立面１

6号石垣
G . L=546.00m

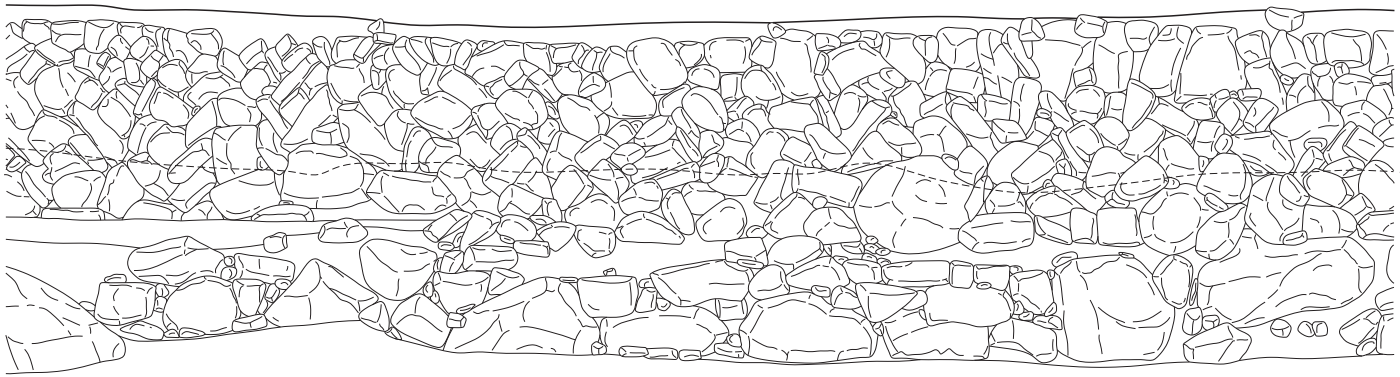
. G′

5号石垣
I . L=546.00m



. I′

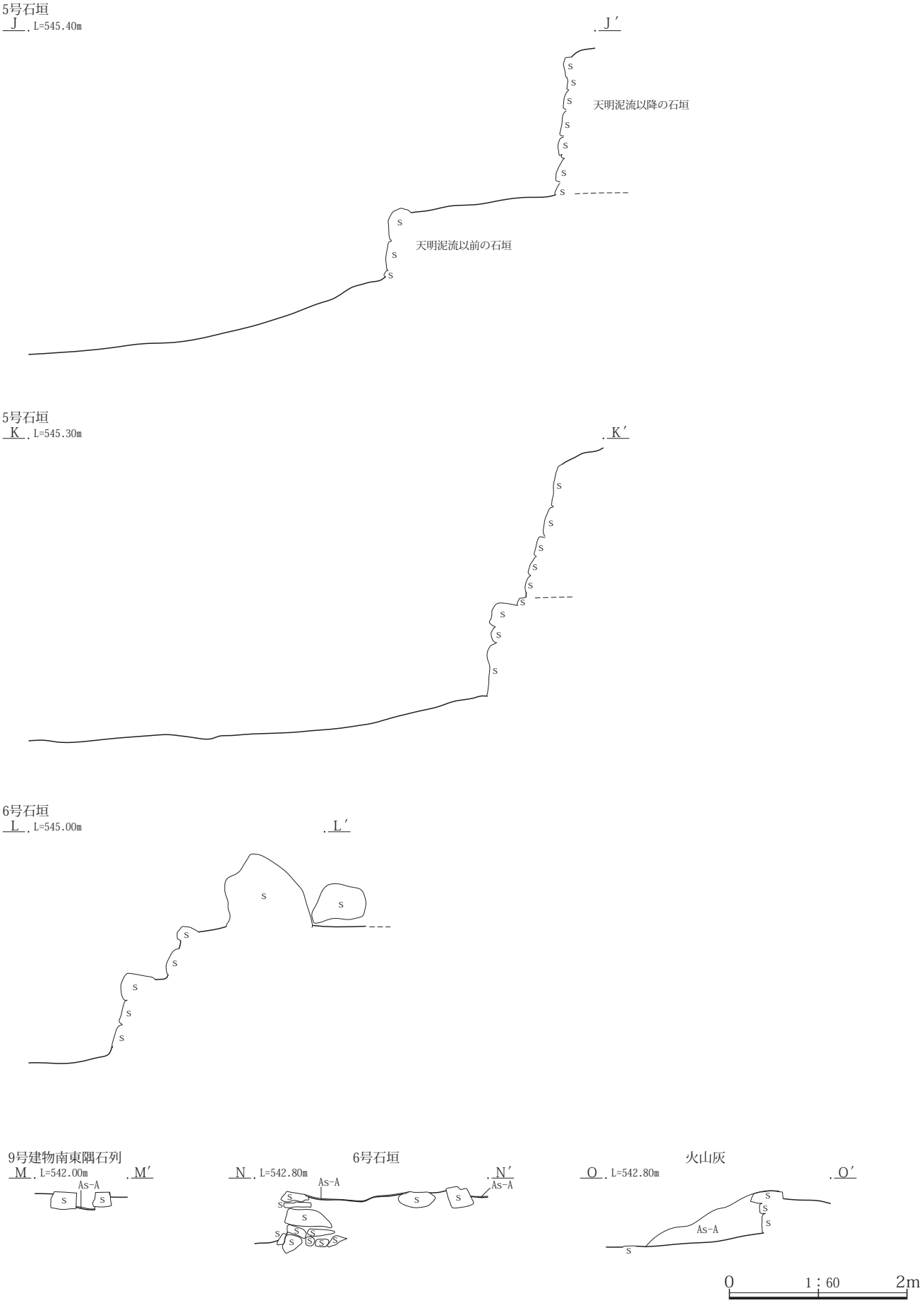
5号石垣
H . L=546.00m



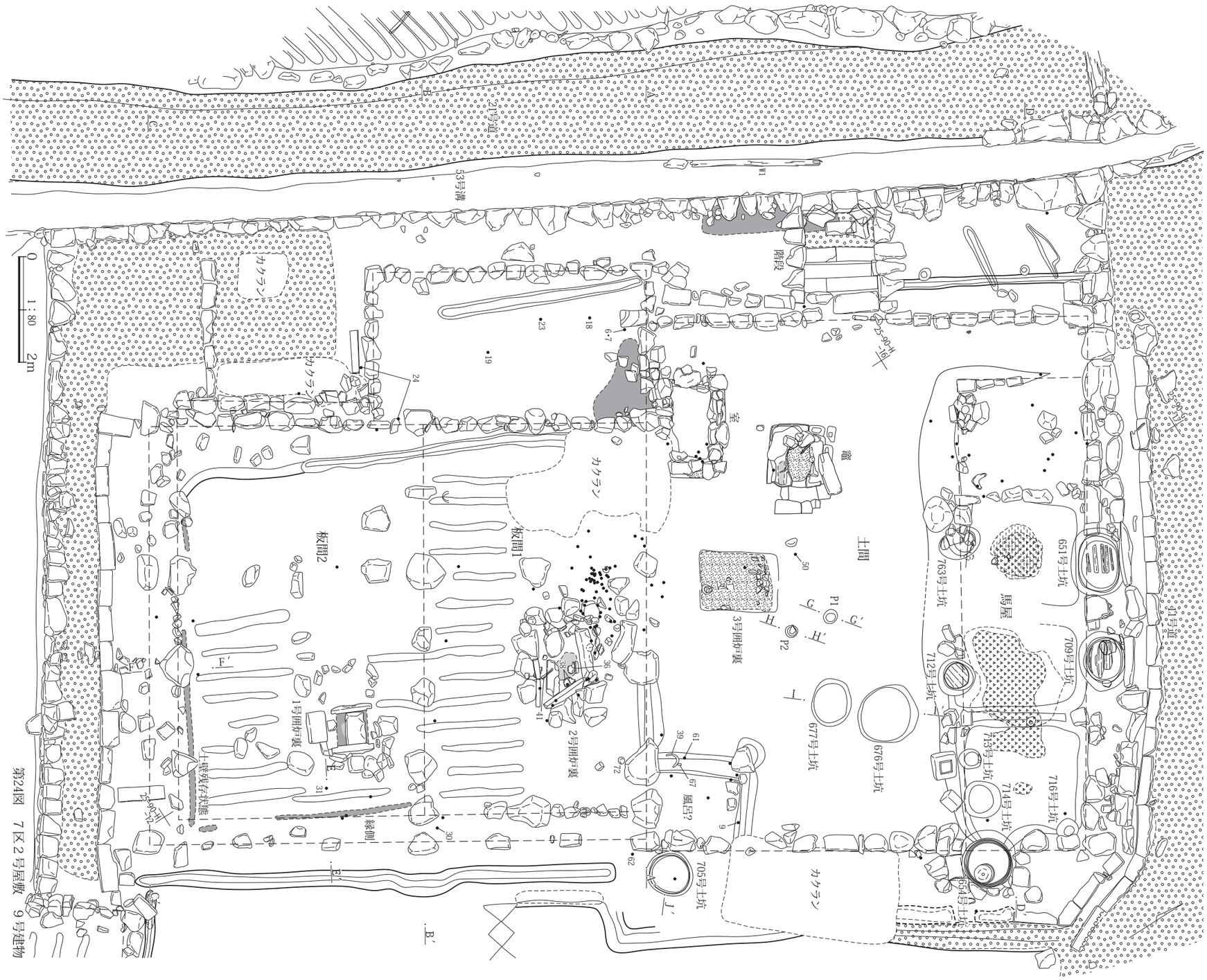
. H′

0 1：60 2m

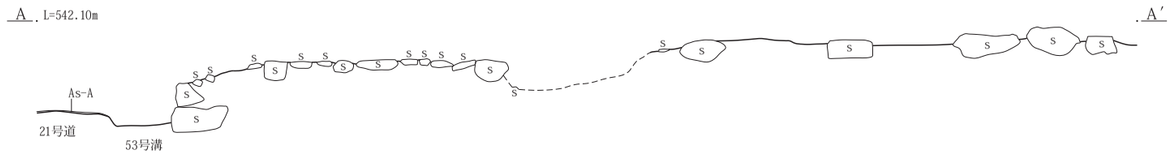
第22図　７区２号屋敷石垣立面２

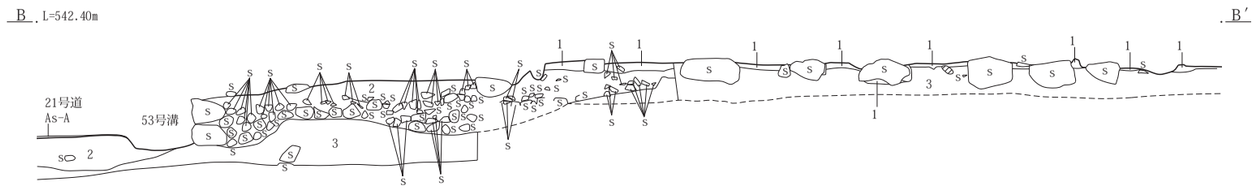


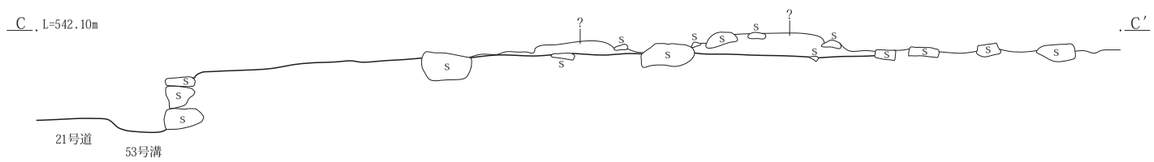
第23図　７区２号屋敷石垣断面

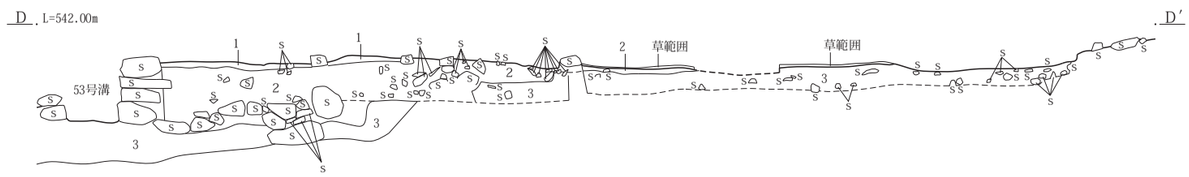


第24図　7区2号屋敷　9号建物



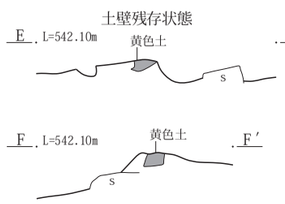


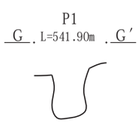


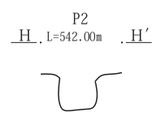


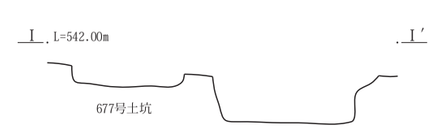
9号建物　B-B′ D-D′
1　暗褐色土　土間の床面
2　盛土
3　地山

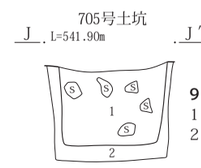
0　1：80　2m











9号建物　J-J′
1　天明泥流
2　暗褐色土　桶の埋め土

0　1：40　1m

が壊れていたが、他の屋敷の竈と比較すると残りの良い竈であった。確認段階の竈は、炊口の土間部分に長方形の切石が方形に敷かれ、左袖部分・奥壁部分・右袖部分の外側に長方形の切石が竈を囲むように置かれていた。切石上にはロームが竈を囲むように積み上げられていた。切石を方形に組み上げて造られた竈のように見えた。竈を囲むロームを取り外すと、切石に囲まれた内側には、切石ではないが一部割られて加工された石を、平面正方形に近い形で並べられている竈の骨組部分が姿を現した。炊口部分左右の袖石手前には、土間面を掘り込んで平らな石が埋め込まれていた。多くの竈は切石ではない石を馬蹄形に組んで、その石を囲むようにロームが貼りつけられて造られている。この竈はそのように造られた竈の外側を囲むように切石が置かれていた。これまでの調査で、切石で組んだ竈は東宮遺跡１号建物、13号建物で確認されているが、このように竈を化粧石のように囲んで切石が使われていた例はなかった。

竈燃焼部の底面は多くの竈では土間面より15㎝前後低くなっている。しかし､この竈は土間面より約20㎝深い。深い部分は燃焼部だけでなく、竈手前の平石(枕石)まで深く掘り込まれていた｡袖石より25㎝手前には幅約25㎝、長さ70㎝、厚さ15㎝の平石(枕石)が土間を掘り込んで置かれていた。その石から竈内の燃焼部までほぼ平らとなっており、土間面より約20㎝低くなっている。これまでこのような例は見過ごしていたと思われる。西宮・東宮・石川原遺跡の発掘調査例を調べてみると、西宮遺跡５号建物の竈でも、炊口袖石部分から手前20㎝離れた場所に平石(枕石)が置かれ、その部分まで燃焼部の高さと同じように、土間面より20㎝前後低くなっていた。また東宮遺跡16号建物の竈は、炊口袖石より手前40㎝付近まで土間面より15㎝前後低い面が馬蹄形に掘り込まれていた。すべての竈が、このように炊口手前部分を燃焼部と同じように深く掘り込んでいるわけではないと思われるが、再度検討する必要があるのではないだろうか。煙突を持たない竈であるので､炊口部分から煙を出すために、この距離と深さが必要であったのだろうか。

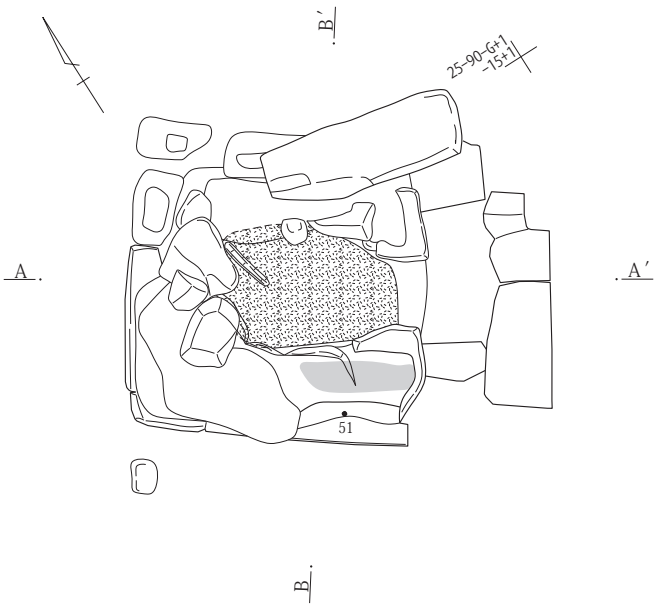
【規模・形状】奥壁に１石、左右の側壁部分に各３個、計７個の石をコの字型に並べている。左右の石は幅30㎝、厚さ25㎝、高さ50㎝、奥壁は幅35㎝、厚さ25㎝、高さ45㎝である。左右の側壁や奥壁の外側を覆うように平らな切石が置かれていた。切石の大きさは長さ80㎝、厚さ12㎝、高さ30㎝である。竈内側壁７個の石は土間面を掘り込んで埋められていたが、外側に貼り付けるように置かれた平らな切石は、土間面の上に位置し、内側の石を隠す化粧石のように置かれていた。その切石(化粧石)の上から竈全体を覆うようにロームが貼り付けてあった。そのため外見上は切石で積まれた竈のように見える。竈燃焼部内の規模は両袖方向45㎝、奥行方向110㎝(竈内45㎝＋枕石までの距離65㎝)。土間面から燃焼部までの深さ20㎝、残っていた側壁部分の高さ土間面＋35㎝、竈の高さ20㎝＋35㎝＝55㎝となる。使われていた段階での竈内の深さは不明である。出土した鉄鍋の深さ32㎝前後あるので、竈内の深さが55㎝前後であれば、55㎝－32㎝＝23㎝、鉄鍋の底部から燃焼部まで20㎝前後あるので、この55㎝前後の数値が深さであったと思われる。

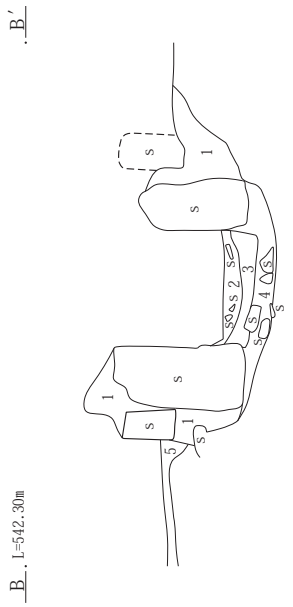
燃焼部下には、灰層と焼土層がそれぞれ厚さ約７㎝残っていた。その下は地山となっていた。

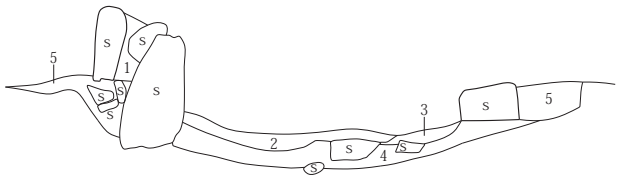
（２）１号囲炉裏（第26図、PL. 10～12）

【位置・概要・規模】板間２に内径60㎝四方の小さな囲炉裏が造られていた。囲炉裏を囲む４枚の切石は、内面が４面とも平らに整形されていた。切石の外側に切石を抑えるように、直径150㎝前後の範囲に大小の自然石が数多く置かれていた。４面の切石は南北の２石は原位置を保っていたが、東西２石の切石は、天明泥流により西側に倒れていた。切石は縦断面が蒲鉾のような形をしており、囲炉裏内に面する内面と上面は丁寧に平らに整形されていたが、外面は丸みを持っており、粗い整形であった。４枚の切石は同じ長さではなく、前庭と奥の座敷方面に位置する切石は75㎝と長く、内側両端が２～３㎝前後掘り込まれている。その部分に長さ65㎝の切石が組み込まれていた｡切石の上面はほぼ同じ高さとなっており、おそらくこの上に囲炉裏の枠木が置かれたものと思われる。囲炉裏の深さ35㎝で、内部には10㎝程の厚さでロームが持ち込まれていた。ローム面の中央部幅38㎝の範囲が焼土化しており、切石上面から焼土までの深さは25㎝であった。最も厚く焼土化した部分は中央部で厚さ３㎝であった。灰は表面にわずかにあったが、ほとんど残っていなかった。

竈１面

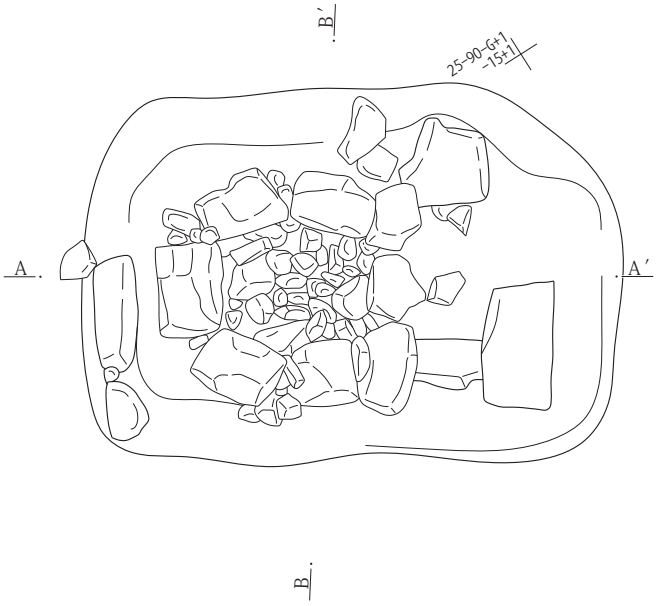




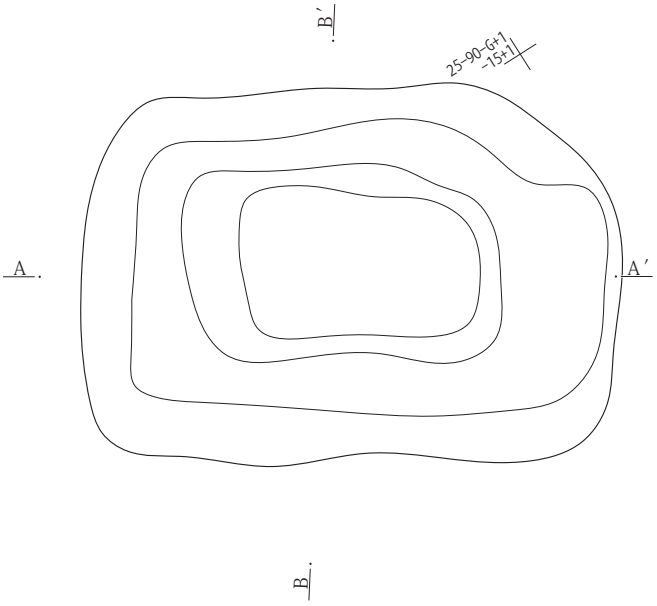


９号建物　竈A-A′　B-B′
1　黄褐色土　ローム層
2　白色土　灰層
3　赤色土　焼土層
4　暗褐色土　小量を焼土粒を含む
5　暗褐色土　ローム粒を含む　密な層

竈２面

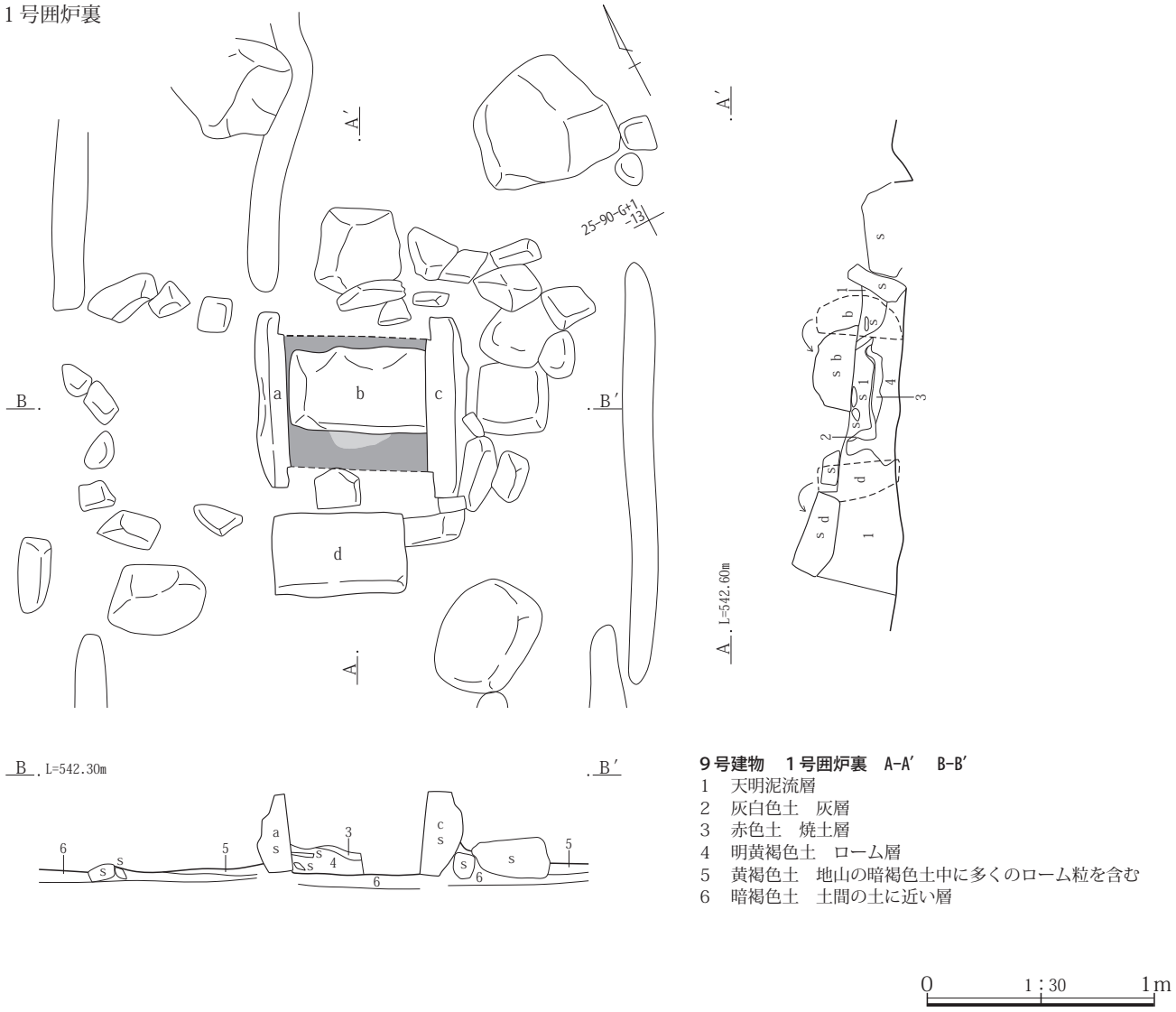


竈３面



0　1：30　1m

第25図　７区２号屋敷　９号建物竈



９号建物　１号囲炉裏　A-A′　B-B′
1　天明泥流層
2　灰白色土　灰層
3　赤色土　焼土層
4　明黄褐色土　ローム層
5　黄褐色土　地山の暗褐色土中に多くのローム粒を含む
6　暗褐色土　土間の土に近い層

0　1：30　1m

第26図　７区２号屋敷　９号建物１号囲炉裏

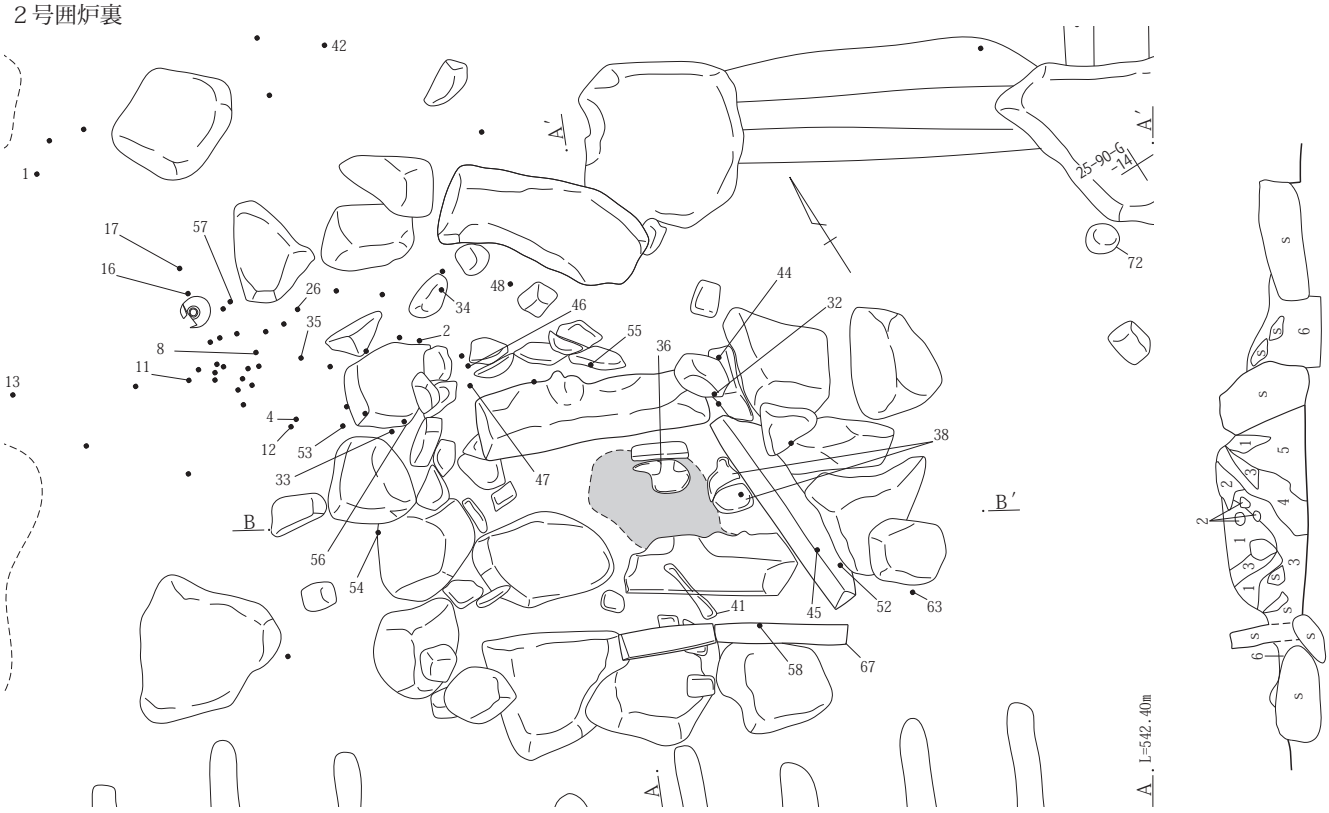
（３）２号囲炉裏（第27図、PL. 12・13）

【位置・概要・規模】１号囲炉裏の東側、板間１に内径90㎝四方の２号囲炉裏が造られていた。囲炉裏を囲む石は内面が４枚とも平らな切石であり、切石の外側に切石を抑えるように大小の自然石が数多く置かれていた。切石は断面が蒲鉾のような形をしている。囲炉裏内に面する内面と上面は丁寧に平らに成形されていたが、外面は丸みを持っており粗い整形であった。４枚の切石は完形品としては残っていなかった。しかし、１号囲炉裏と同じような構造である。前庭と奥の座敷方面に位置する切石は現状では90㎝であるが、片側の端部が欠けており、110㎝前後と思われる。内側の端が２～３㎝前後掘り込まれている。その部分に長さ93㎝の切石が組み込まれていたものと思われる。切石の上面は水平に成形されており、おそらくこの上に囲炉裏の枠木が置かれたものと思われる。囲炉裏の深さは38㎝で、内部には22㎝程の厚さでロームが持ち込まれていた。切石上面から焼土面までの深さは15㎝であった。ローム面の中央部幅50㎝の範囲が焼土化しており、最も厚く焼土化した部分は中央部で厚さ18㎝であった。灰は表面にわずかにあったが、ほとんど残っていなかった。

（４）３号囲炉裏（第27図、PL. 13）

【位置・検出状況・概要】竈と室（706号土坑）南側の土間に囲炉裏が造られていた。天明泥流で埋まった段階では、すでに埋められて囲炉裏上面は土間となっていた。囲炉裏を囲む枠木も外されており残っていなかった。発掘段階で間口方向に細長い囲炉裏として調査しているが、囲炉裏を囲んでいる多くの石・内部の灰・焼土の状態か

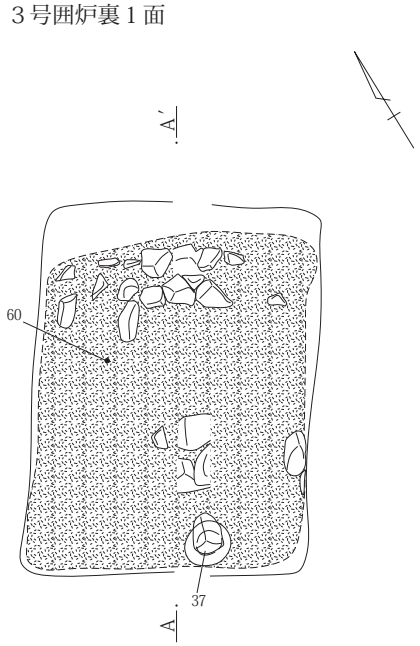
２号囲炉裏



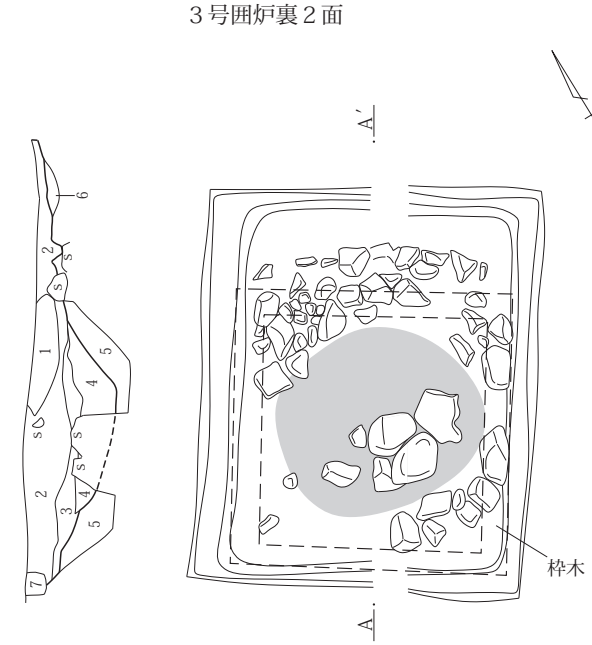
９号建物　２号囲炉裏　A-A′　B-B′

1　天明泥流層
2　灰白色土　灰層
3　黄褐色土　ロームを主とし、小量の暗褐色土を含む
4　赤色土　焼土層
5　黄褐色土　ロームを主とした層
6　暗褐色土　土間の土に近い層

３号囲炉裏１面



３号囲炉裏２面



９号建物　３号囲炉裏　A-A′

1　黒褐色土　少量の炭を含む
2　暗褐色土　土間の土に近い層
3　灰白色土　灰層
4　赤色土　焼土層
5　暗褐色土　地山層
6　明黄褐色土　ロームを主とした層
7　暗褐色土　囲炉裏枠木の痕跡か

0　1：30　1m

第27図　７区２号屋敷　９号建物２号・３号囲炉裏

ら、外径約90㎝四方の囲炉裏であったものと思われる。
【規模・構造】囲炉裏は多くの石を外径120㎝、内径80㎝の範囲に円形に並べて、約90㎝四方の枠木はこの石の上に載せられたものと思われる。石で囲まれた内側を円形に掘り込む。掘り込んだ最も中央部の深さは35㎝である。他の囲炉裏では、その場所にローム等を持ち込んでいることが多いが、ロームは残っていないので、持ち込まれていないものと思われる。掘り込まれた中央部に焼土が厚さ13㎝、その上が厚さ７㎝の灰層となっていた。灰層の上には厚さ15㎝の土間の土と思われる黒褐色土で埋められていた。この囲炉裏が使われていた段階で、使用面は土間面より約15㎝低かったものと思われる。
【所見】大きな建物で、土間に張り出して造られた板間の囲炉裏が、東宮遺跡１号建物や石川原遺跡16号建物に存在する。９号建物の囲炉裏は造られている場所から、同じような土間に張り出して造られた板間の囲炉裏の可能性もあると考えた。しかし土間面を30㎝前後掘り込んでいることから、板間の囲炉裏ではなく、土間に造られた囲炉裏と思われる。囲炉裏は板間１に大きな２号囲炉裏がある。３号囲炉裏は不要となり埋められたものと思われる。

（５）唐臼

【概要・規模・所見】大小多くの主屋で唐臼が、土間の奥あるいは土間出入口部分に埋められている。唐臼を持たない家もあるが、そのような家は少ない。しかし９号建物では、唐臼は埋められていなかった。掘り出された痕跡もなく、設置されていなかったものと思われる。村の中では最も大きな屋敷であり、これまでの調査例では複数の唐臼の存在が考えられる。（東宮遺跡１号建物・石川原遺跡16号建物等）なぜ唐臼がないのであろうか。

（６）室（第28図、PL. 13・14）

【位置・検出状況】２号囲炉裏の北東約３ｍ、竈の北西約１ｍの所に、土間面を45㎝程掘り込み、その面に平石を３～４段石垣として積んだ長方形の遺構が確認された。発掘段階では、土で底面中央部５㎝、壁面近くで20㎝前後埋まっていた。表面は炭が全体に薄く堆積していた。このように竈と囲炉裏の間の土間を長方形に掘り込んで、壁面に２～３段の石垣を積んでいる遺構は竈と囲炉裏の中間付近で多く確認されている。これらの遺構は室と思われる。その中でも、東宮遺跡１号建物（長軸185㎝、短軸105㎝、深さ45㎝）・石川原遺跡16号建物（長軸150㎝、短軸68㎝、深さ20㎝以上）に次いで、規模や深さが大きな室である。
【規模・形状・構造】石組の外側で長軸210㎝、南北130㎝、石組の内側で長軸140㎝、短軸70㎝、深さ40㎝である。室を囲む石は平らな石が３～４段積まれている。石の大きさは一定ではないが、長さ25～45㎝、幅30～50㎝、厚さ８～20㎝前後の石が使われていた。底面は土となっており平石は敷いていない。底面を掘り進むと多くの石が出土したが、これらの石は地山の石と思われる。

（７）705号土坑（埋設桶）（第28・29図、PL. 14・15・17）

【位置・概要】建物出入口左側、下屋の下に位置する。土坑内部は天明泥流により埋もれていた。桶の木質部は残っていなかった。桶の北側に主屋の土台下の礎石が一列に並んでいた。桶南側の前庭部分に石は置かれていなかった。馬屋の南と東側にある埋設桶（654・651・709号土坑）は、建物土台下礎石を一部外して埋められていたが、705号土坑は建物の土台下の礎石に接してはいるが、土台の礎石は外すことはなく、礎石に接するよう設置されている。
【規模・構造】底面の直径60㎝、口縁部の直径70㎝、高さは現状で55㎝である。タガの痕跡は残っていなかった。
【所見】この位置に馬屋桶とは異なり、建物の土台下の礎石に接して桶が埋められていた。目的は人間のための便所とも考えられるが、この桶の北側屋敷の土間部分は、北と東側を溝で囲まれた東西1.6ｍ、南北0.9ｍの区画が想定される。その外側を溝が囲んでいる。東宮遺跡１号建物の調査例から、ここに風呂が造られていた可能性を指摘したい。705号土坑は、風呂水を溜めるためのものであったのではないだろうか。同時に人間の便所としての機能もあったと考えられる。

（８）676号土坑・677号土坑

【位置・概要・規模】両土坑は建物土間出入口、土間面に掘られていた。発掘担当は土間との新旧関係について、土間を後世に掘り込んだものと判断している。676号土坑は直径75㎝、深さ14㎝、677号土坑は直径90㎝、深さ27㎝である。

（９）Ｐ１・Ｐ２

【位置・概要・規模】676号土坑・677号土坑と囲炉裏３の間の土間面に、小穴であるＰ１・Ｐ２が掘られていた。

直径と深さは10㎝前後である。性格や掘られた時期は不明である。

(10)馬屋(第28・29図、PL.15・16)

【位置・概要】土間の東端、北端の一部以外、ほぼ全体が馬屋となっていた。馬の区画は４頭分である。北端の１頭分は馬屋として使っていなかったが、３頭分は馬屋として使っていたようである。馬屋部分は竈手前の土間面より全体が30㎝前後低くなっている。低くなっている土間面は南北(長軸)8.6m、東西(短軸)2.4m(８尺)の範囲である。南から馬屋１～馬屋４と仮称する。馬屋１は建物の南東コーナー部分に位置し、馬屋南側の主屋下屋部分に馬屋桶(654号土坑)が埋められていた。馬屋１～馬屋３の土間面に草が残っており、馬が飼われていた痕跡を残している。また馬屋２・馬屋３の東側の主屋の外側には、馬屋桶(709・651号土坑)が埋められていた。このように馬屋１～３には埋設桶が伴っていた。最も北に位置する馬屋４は、竈手前の土間面より20㎝程低くなっているが、他の馬屋より10㎝程高く、土間面には大小多くの石があり、錆びた鉄の塊・陶磁器の片口・擂鉢・鉄鍋の破片等が出土しており、一時期馬屋として使われていたが、その後馬屋としてではなく利用されていたものと思われる。

馬屋２の出入口と思われる西側に、飼葉桶と思われる桶(712号土坑)が少し埋まった状態で確認された。他の２か所の馬屋部分に飼葉桶はなかった。

【規模・形状・構造】規模は南北(長軸)8.6m(約28尺)、東西(短軸)2.4m(８尺)で、馬屋部分の土間面は竈手前の土間面より30㎝前後低くなっている。馬屋１は東西2.4m(８尺)、南北2.3m(８尺弱)で、他の馬屋２～４は東西2.4m(８尺)、南北2.1m(７尺)で、馬屋１は他の馬屋よりやや広くなっている。馬屋１と馬屋２の間に、高さ10㎝前後の土手状の高まりが２つの馬屋を区画するように残っていた。馬屋２と馬屋３との間はトレンチで一部掘られていたが、同じような高まりが残っていた。馬屋３と馬屋４との間には、馬屋１と馬屋２の区画と異なり、石が直線的に並べられていた。各馬屋を区画するための柱等は建てられていなかったが、明瞭に区画されていたようである。

(11)712号土坑(飼葉桶)

【位置・概要】馬屋２の出入口部分に、丸い桶の底部が少し埋められた状態で出土した。桶の底板と側板が残っていた。馬屋の土間面は標高541.46m前後で、建物土間面標高541.75mより30㎝前後低くなっている。飼葉桶は土間面から馬屋土間面に向かって低くなる傾斜面に、一部埋まった状態で出土した。飼葉桶の底部の高さ(側板底部)は標高541.5mで、馬屋土間面とほぼ同じ高さであり、土間面より25㎝程低い。一部埋まった状態で出土したが、馬屋土間面と飼葉桶底面はほぼ同じ高さであるので、基本的には置かれた状態で使用していたものではないだろうか。

【規模・構造】桶木材の残りは悪かった。桶の大きさは直径40㎝、深さは底部から高さ22㎝まで側板が残っていた。

【所見】飼葉桶は、他の遺構では、長さ1.5m前後の丸太材の側面を箱状に刳りぬいた長方形の製品が多い。東宮遺跡１号建物、石川原遺跡16号建物・21号建物では、馬屋に面して置かれた状態で出土している。円形の桶が飼葉桶として使われた例はこれまでないようである。

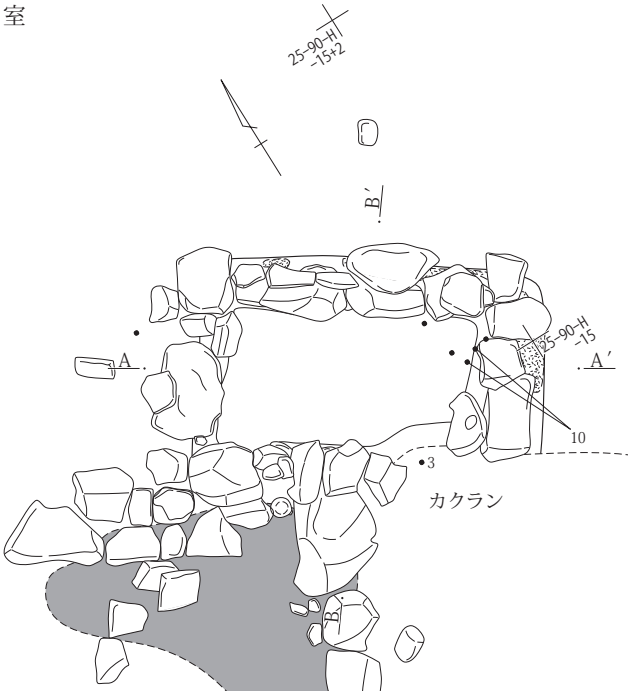
(12)654号土坑(馬屋桶１)

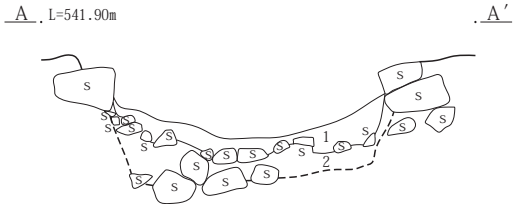
【位置・概要】建物出入口右側、馬屋１の南側に位置する。この部分の下屋は幅1.5m以上と広くなっており、その下に位置する654号土坑に雨水等は入らないようになっている。土坑の北側は、建物土台の場所と重なり礎石が一部外され、その部分に桶が埋められていた。おそらく土台の下に桶の一部が位置するような状態であったようである。桶のまわりは多くの平石で囲まれている。他の建物ではこのように丁寧に囲まれる例は少ない。主屋に近接して別棟の厠等が造られていないので、上屋等の囲いが造られ厠としても使われていたのであろうか。桶の内部は天明泥流で埋まっており、表面に完形の上臼と下臼が上下逆の状態で埋まっていた。桶の痕跡は残っていたが、木質部は全く残っていなかった。

【規模・構造】底面の直径82㎝、口縁部の直径95㎝、高さ現状で78㎝である。タカの痕跡が３本残っていた。タガの位置は底板から上、６・23・62㎝であった。掘り込まれた便槽のまわりは、地山に近い土で埋められており、ローム等を持ち込むことはなかった。

【所見】これまでの調査で３頭以上の馬を飼うことのできる馬小屋を持つ建物は、東宮遺跡１号建物、石川原遺跡９号建物・16号建物の３棟だけである。いずれも広い敷地で、大きな主屋があり蔵がある。馬屋の外側に屎尿等

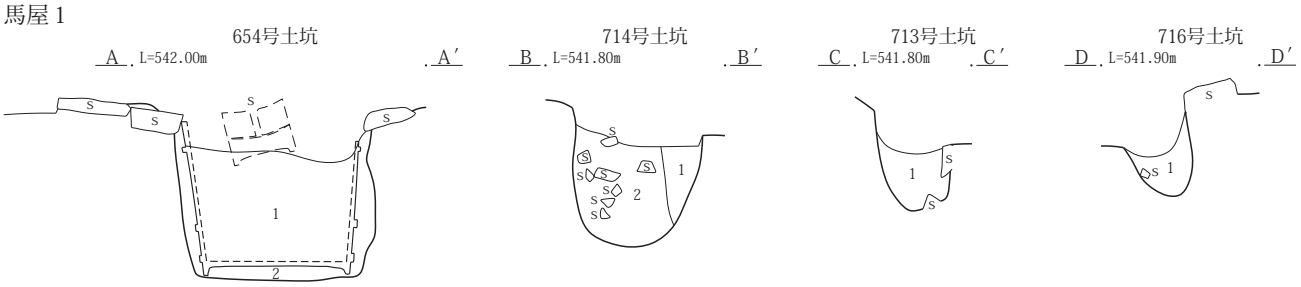
室



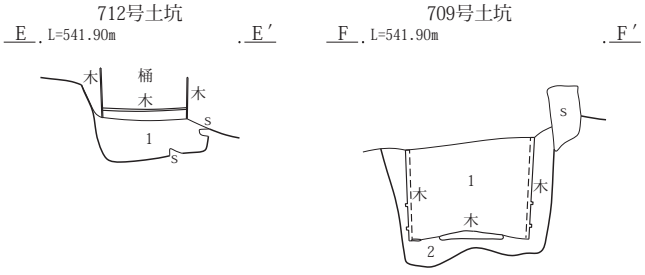


９号建物　室A-A′
1　褐灰色　上面に多くの炭を含む
2　褐灰色　多くの砂粒を含む

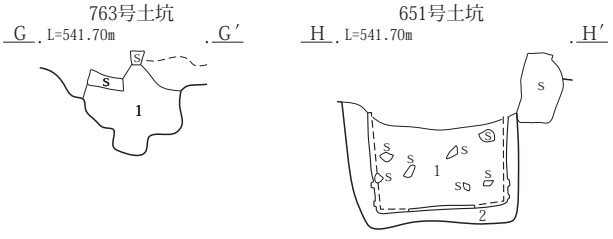
馬屋１



馬屋２



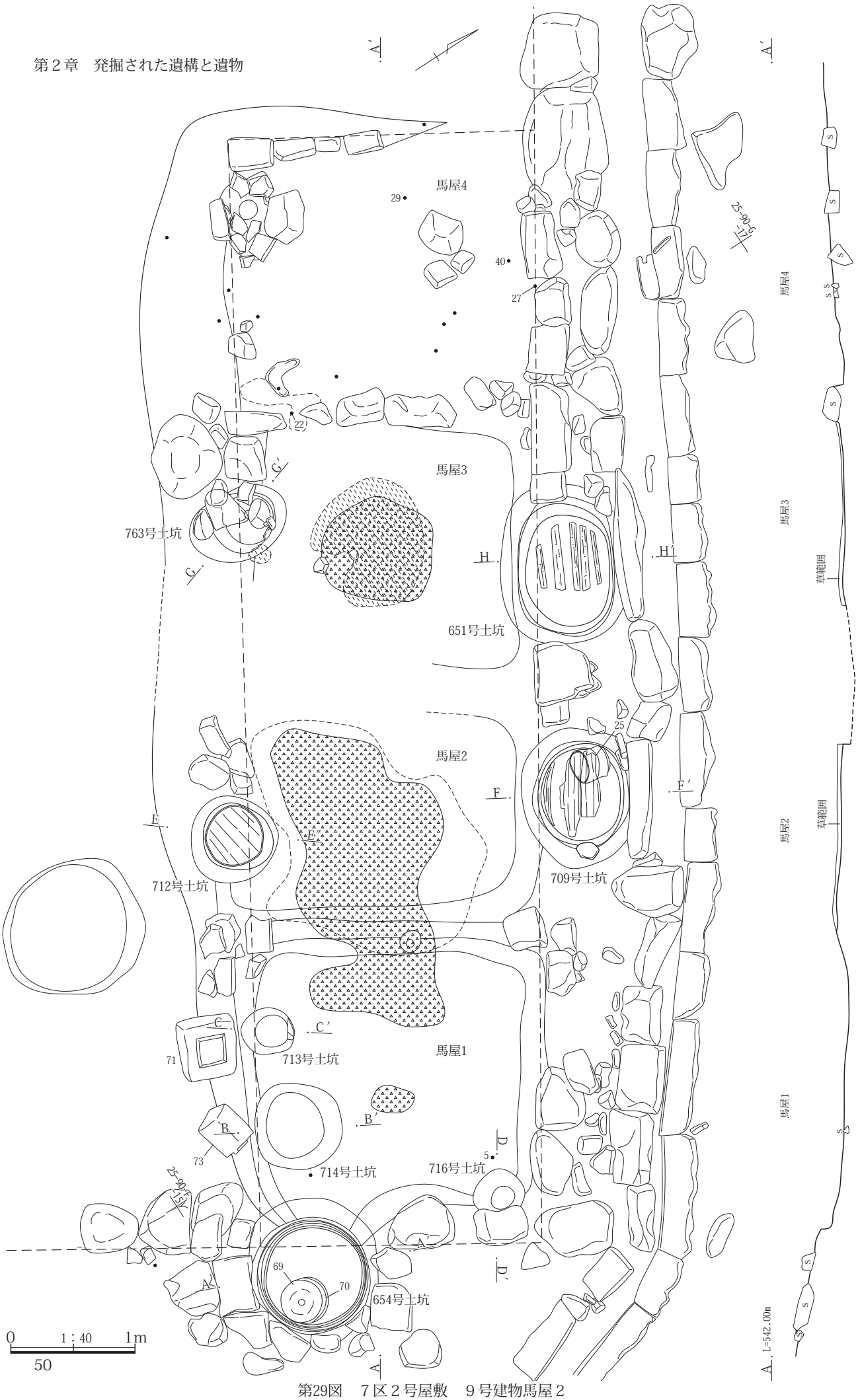
馬屋３



９号建物　馬屋　A-A′～H-H′
1　天明泥流
2　暗褐色土　樽を埋めている　地山の土を主とした層

0　1：40　1m

第28図　７区２号屋敷　９号建物室・馬屋１



第29図　７区２号屋敷　９号建物馬屋２

を溜める桶が１～２個埋められている。これらの建物は村の中心的な役割を果たした建物であると思われる。

(13)709号土坑(馬屋桶２)・651号土坑(馬屋桶３)

馬屋２と馬屋３の外側(東側)に709号土坑と651号土坑が掘られていた。木質部は残っていなかったが、それぞれの馬屋の糞尿等を溜める桶と思われる。両方の土坑とも雨落溝の内側に位置し、桶の外側に細長い石が並べられている。雨水等は入らないように工夫しているようである。２つの桶は建物の礎石の延長上に位置しており、桶の掘られている部分の礎石は外され、その部分に桶が埋められていた。おそらく、土台の下に桶の一部が位置するような状態であったようである。

桶の痕跡は残っていたが木質部は全く残っていなかった。

709号土坑

【規模】桶は楕円形を呈し、底面の長径81㎝、短径70㎝、高さは現状で55㎝である。タガが２本残っていた。タガの位置は底板部分上、６・20㎝である。掘り込まれた便槽のまわりは、地山に近い土で埋められていた。

651号土坑

【規模】桶は楕円形を呈し、底面の長径105㎝、短径78㎝、高さは現状で54㎝である。タガが２本残っていた。タガの位置は底板部分上、６・16㎝である。掘り込まれた便槽のまわりは、地山に近い土で埋められていた。

【所見】これまでの調査で３頭以上の馬を飼うことのできる馬小屋を持つ建物は、東宮遺跡１号建物、石川原遺跡９号建物・16号建物の３棟だけである。いずれも広い敷地で大きな主屋があり、蔵がある。馬屋の外側に屎尿等を溜める桶が１～２個埋められている。これらの建物は村の中心的な役割を果たした建物であると思われる。

(14)763号土坑

【位置・概要・規模】763号土坑は馬屋３の出入口部分にある。発掘では馬屋土間面より35㎝程深いとして調査しているが、写真等の検討の結果５㎝前後の低い掘り込みが認められ、それ以下は地山と思われる。土坑を埋めていた覆土は泥流ではなく、馬屋を使っていた段階で埋まった土と思われる。土坑は円形で、大きさは直径40㎝前後である。桶等の痕跡はない。確認された位置や規模とから、隣の馬屋２に設置されていた712号土坑と共通するところが多い。おそらく飼葉桶が一時期置かれていた掘り込みと思われる。

(15)713号土坑・714号土坑

【位置・概要・規模】713号土坑と714号土坑は馬屋１の出入口部分に掘られていた土坑である。両土坑とも馬屋土間を掘り込んで埋められているが、土間の土とは異なっている。馬屋との新旧関係は不明であるが、馬屋と同時に存在していないと思われる。713号土坑は直径34㎝、深さ35㎝、714号土坑は直径46㎝、深さ60㎝である。

第３項　洗い場(階段)(第30図、PL.17・18)

25-90-H-15・16グリッドに位置する。

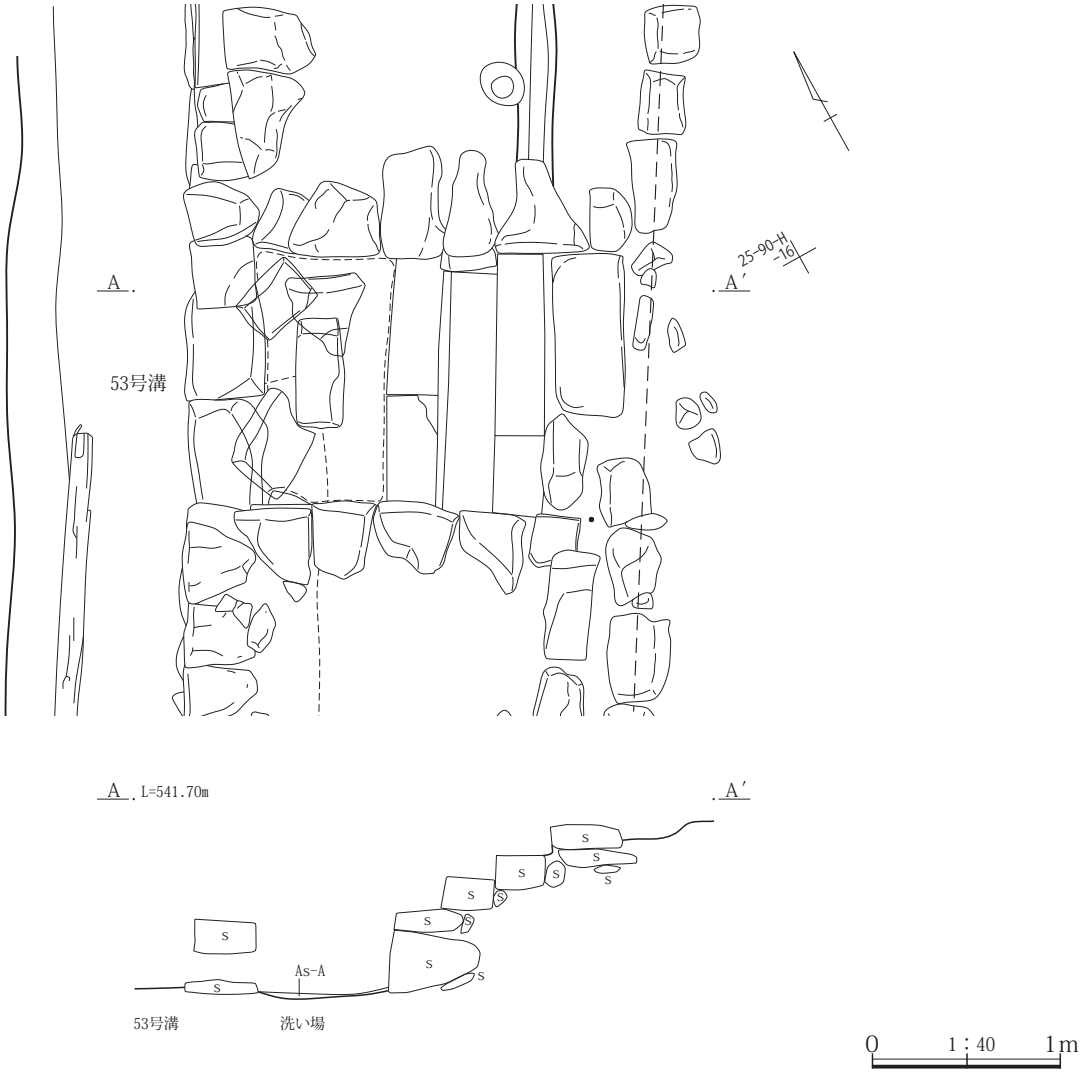
【概要・位置】生活用水を確保するために、ほとんどの屋敷には洗い場が造られている。２号屋敷では屋敷北の21号道との間に53号溝があり、その溝の水を利用して 洗い場(階段)が造られていた。洗い場は９号石垣の一部を掘り込んで造られていた。９号石垣は切石を２～３段積んだ大きな石垣である。規模は長さ約21ｍ、高さ70～80㎝である。屋敷土間の北側、竈の後ろ付近にあったと思われる裏口付近から、溝に降りる階段が石垣の一部を掘り込んで造られていた。階段は４段あり、４段目から下は深さ45㎝前後の洗い場となっていた。階段の最も上と、洗い場の底面との高低差は65㎝である。

溝と洗い場との間は石垣の１段目の石が残されており、洗い場と溝とを区画している。その１段目の石垣は東端部分が１石外され、底・天井部・東・西と４面、門のように石で囲まれた空間を持つ構造となっていた。おそらく、溝から洗い場に入る水の量を調整するための施設と思われる。

発掘担当は階段として調査したが、階段は洗い場のための施設であるので、階段を含めて洗い場と呼称したい。

【構造・規模】階段の石は、長さ35～45㎝、厚さ13～17㎝、踏み幅25～30㎝の切石を横方向に２個程度並べて、１段分の幅130㎝の階段石とし、４段の階段としている。階段下に位置する洗い場部分の石は高さ34㎝、奥行き45㎝と大きな石を使っている。階段左右の石は小口幅30～50㎝、長さ40～50㎝の細長い石を小口積で積んでいる。洗い場の大きさは、長辺130㎝、短辺70㎝、深さ満水時45㎝。洗い場と53号溝との間に置かれた石垣の最下段部分の石は幅33㎝、高さ18㎝である。

【所見】この洗い場は、53号溝の水を門のように石で囲ま



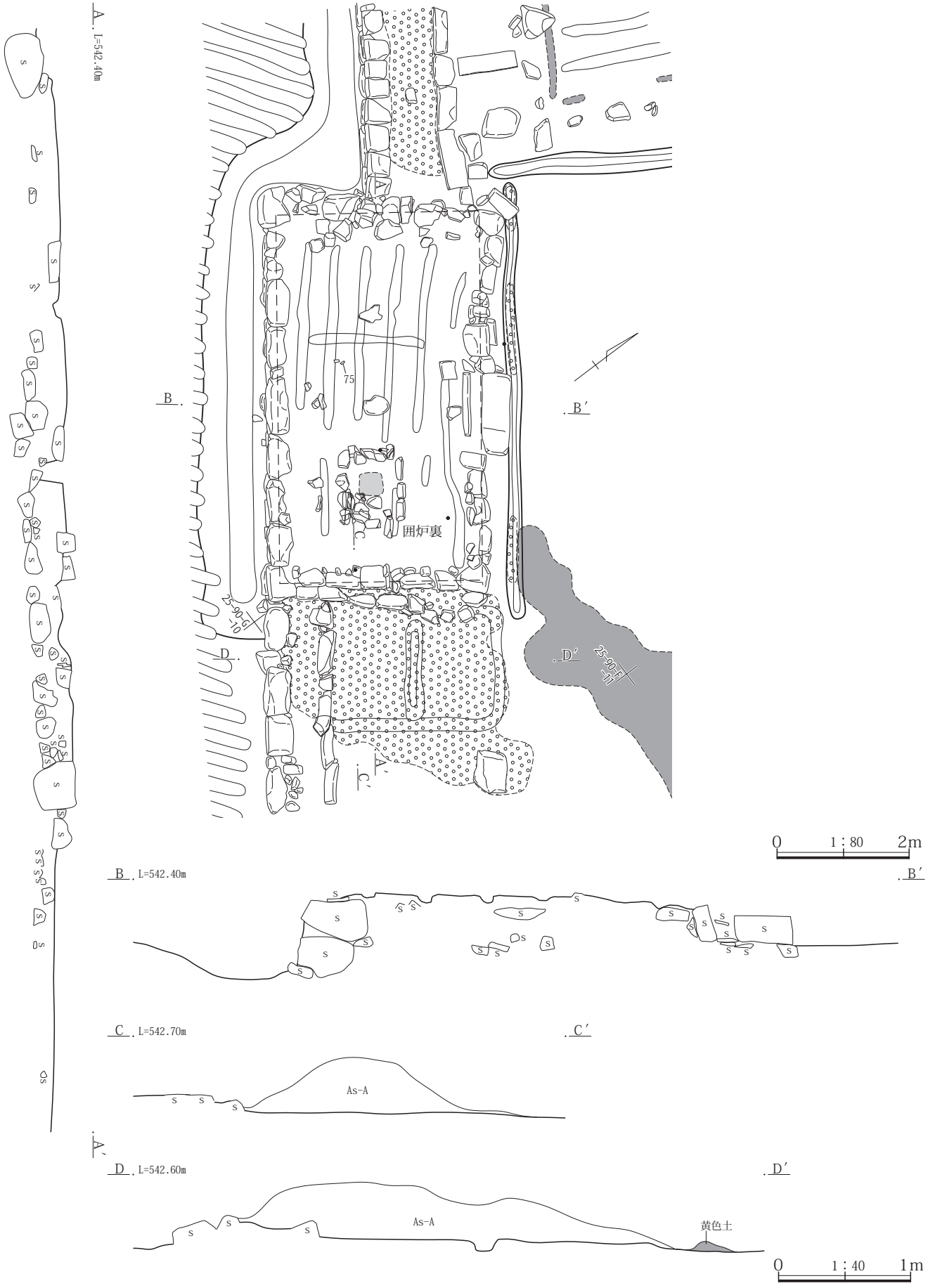
第30図　７区２号屋敷　９号建物洗い場

れた施設により、水の出入りあるいは、遮断したりして、水量を調整していたようである。他の洗い場で見られたように、溝の近くに溝底部よりやや低く掘って、地下からの湧水を利用した洗い場ではないようである。

第４項　中庭・中庭の踏石・集められたAs-A軽石・集められた褐色土(PL.18～20)

【位置・概要・規模】２号屋敷には広い庭がある。庭の範囲は難しいが、北が主屋である９号建物、西は10号建物、南は11号建物手前の６号石垣、東は25号建物に囲まれた範囲とした。庭の中に12号建物を含めて考えた。この想定した範囲の規模は東西約17m、南北約17mである。中庭は南側が少し高いがほぼ平らに整地されており、北側と南側の高低差は約20㎝である。主屋である９号建物から南側の蔵である11号建物手前の６号石垣に接するまで、約12mの距離に正方形の踏石が、45度傾けて菱形のように一列に並べられていた。踏み石の大きさは約35㎝四方の正方形である。厚さは15～20㎝で、表面は平らに成形されているが、裏面はやや雑に加工し厚さは統一されていない。９号建物面の１石は半分の大きさの三角形に、反対側の11号建物手前の６号石垣に接する部分の石は、長方形に加工した石を並べている。その２石を加える総数は27個である。航空写真で見ると、見事な踏石である。

庭や道に降り積もったAs-A軽石は、屋敷に入る11号道部分では取り除かれることなく残っていたが、庭部分ではほとんど除去されていた。除去したAs-A軽石は、10号建物の南側(Ａ地点)と、Ａ地点より少ない11号建物出入口右側(西側)に近い６号石垣北側(Ｂ地点)にまとめられ



第31図　７区２号屋敷　10号建物

ていた。最も多く集められていたのは10号建物南側（Ａ地点）であり、幅３×２ｍ、最大の高さ40㎝前後の長方形の範囲に積まれていた。その軽石を除去すると、軽石の中央付近に南北方向の溝１本と、南側と東側に軽石を囲むように溝が掘られていた。南側と東側の溝と、北側と西側の石垣に囲まれた東西2.5m、南北1.5mの区画となっていた。おそらく軽石を集める場所とし、溝と石垣に囲まれた範囲を設定したのではないだろうか。軽石はこの範囲を超えて集められていたが、整然と長方形の形状に積まれていた。

一方、Ｂ地点の軽石は６号石垣に一定の規格により集められたものではなく、石垣の手前に幅2.5m×１m、高さ60㎝前後の半月状に集められていた。その軽石の東側には底面に多くのローム、その上にはローム混じりの暗褐色土が、隣の山積みされた軽石に寄せて積み上げられたような状態で確認された。軽石を集めて積上後、さらに庭の土を集めて軽石の隣に積み上げたものであろうか。

第５項　10号建物（第31・32図、PL.21～23）

25-90-Ｆ～Ｈ-10・11グリッドに位置する。

【概要・位置】主屋である９号建物南西部、前庭の西側に10号建物がある。主屋である９号建物の付属建物５軒中の１軒と思われる。建物の敷地は前庭より20～30㎝程盛土して高くなっている。盛土部分は建物出入口部分である東側で１段、裏側となる西側で２段石垣が積まれている。北側と南側は１段の石垣となっている。その石垣の内側の囲炉裏北側では、板間の下にある根太の痕跡が南北方向に６本、大引の痕跡が東西方向に１本明瞭に残っていた。建物南側に囲炉裏が造られていたが、この囲炉裏は天明泥流で埋まった段階では使われていなかったようである。その囲炉裏の東西にも根太の痕跡が残っていた。

建物の出入口は庭に面した建物東側中央と思われる。その場所に建物出入口の踏石が置かれている。建物板間下土間の高さは542.20m。建物出入口付近前庭の高さは541.91mで、約30㎝高低差がある。踏み石天井部の高さは542.13mで前庭より約20㎝高い位置に設置されている。踏み石から板間までの高さは10㎝前後であるが、大引根太・床板からなる床面の高さを10㎝とすると、踏石から床面までの高さは20㎝前後となる。土間から板間までの40㎝前後の高低差のほぼ中間の高さになるように、踏石が置かれたのではないだろうか。

踏石の大きさは長さ125㎝、幅42㎝、厚さ20㎝である。上面は平らに整形されている。

【構造・規模】建物の柱や土台等の建築部材は全く出土していない。建物を建てるための盛土のまわりに積まれている石垣が土台下の礎石となっている。そのために石垣の石としては大きな石が使われている。この石の内側に根太の痕跡が南北方向に６本、大引の痕跡が東西方向に１本明瞭に残っていた。根太や大引の痕跡からほぼ全面床板の建物であったものと思われる。建物の規模は南北方向5.5m（18尺・３間）、東西方向3.06m（10尺３間弱）である。

（１）囲炉裏（第32図、PL.21～23）

【概要・位置】囲炉裏が建物南側に造られていたが、発掘段階では表面に灰や焼土はなく、土間の土が表面を覆っていた。おそらく囲炉裏は埋められ、その上に床板が貼られていたものと思われる。

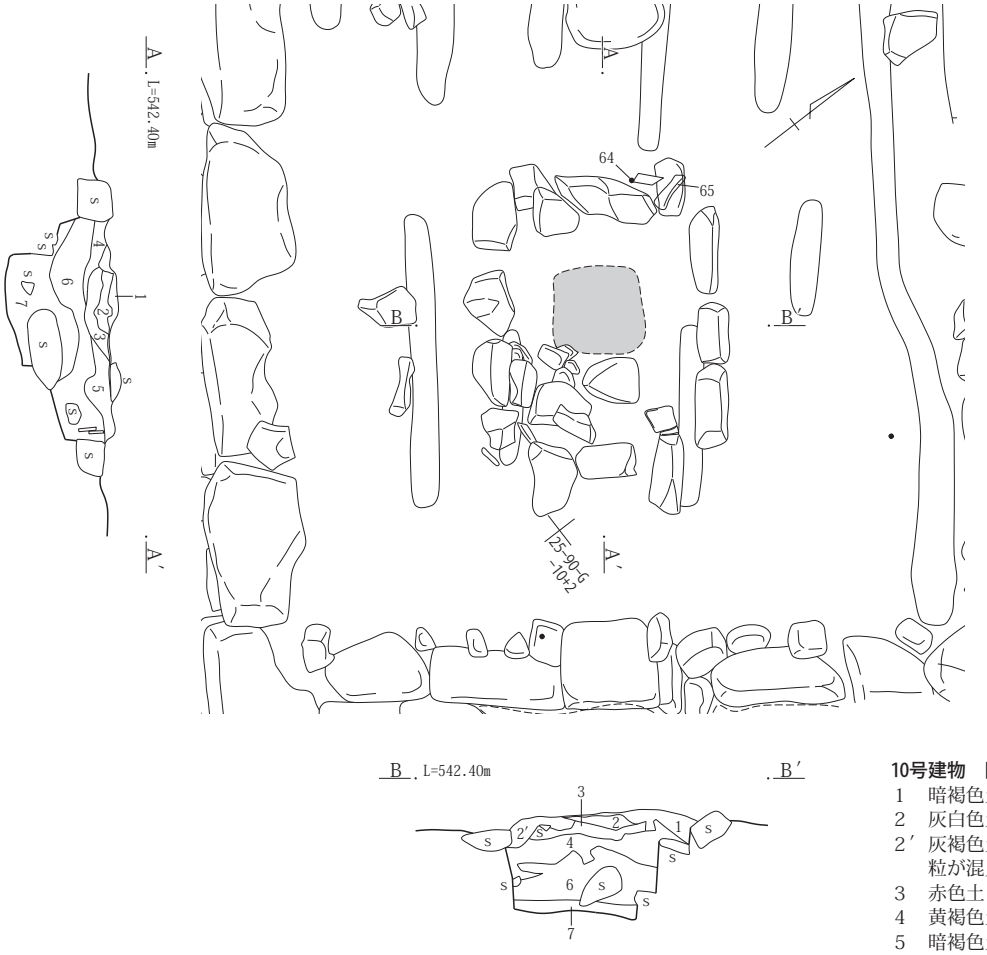
【構造・規模】囲炉裏は石を南北方向にやや長い長方形に並べて造られていた。内部に少量のロームが持ち込まれていたが、持ち込まれた量は少ない。囲炉裏下面は、盛土と思われる土が持ち込まれていた。

規模は石組の外側で東西105㎝、南北120㎝、石組の内側で東西75㎝、南北90㎝である。囲炉裏内の灰は、囲炉裏を囲んでいる石の高さとほぼ同じであった。

第６項　11号建物（蔵）（第33図、PL.23・24）

25-90-Ａ～Ｄ-10～12グリッドに位置する。

【概要・位置】主屋である９号建物と中庭を挟んだ南約15mに位置する。調査段階では西側の半分が残っていた。建物は南側の標高が高く、北側の主屋部分の標高が低くなる地形の中で最も地形的に高い場所に位置する。南側の畑との境は建物整地面では20㎝程畑面が高いので、削ってその面に石垣を２段積んでいる。西側の畑より約20㎝、北側の蔵出入口付近の地面より30㎝土間面が高い。このような整地面に蔵は建てられている。蔵は切石の土台石が間断なく全面に並べられていた。土台切石の上面の高さは地面の土より30～40㎝高い。土台切石の内側には多くの石が密集して埋まっていた。地山の石の他に一



10号建物　囲炉裏　A-A′

1　暗褐色土　土間の土に近い層
2　灰白色土　灰層
2′灰褐色土　暗褐色土中に多くの灰・炭・焼土粒が混入した層
3　赤色土　焼土層
4　黄褐色土　ロームを主とした層
5　暗褐色土　石ほとんど含まない。地山の層に近い層
6　赤褐色土　砂・少礫・粘土を含む層(盛土？)
7　暗褐色土

0　1：30　1m

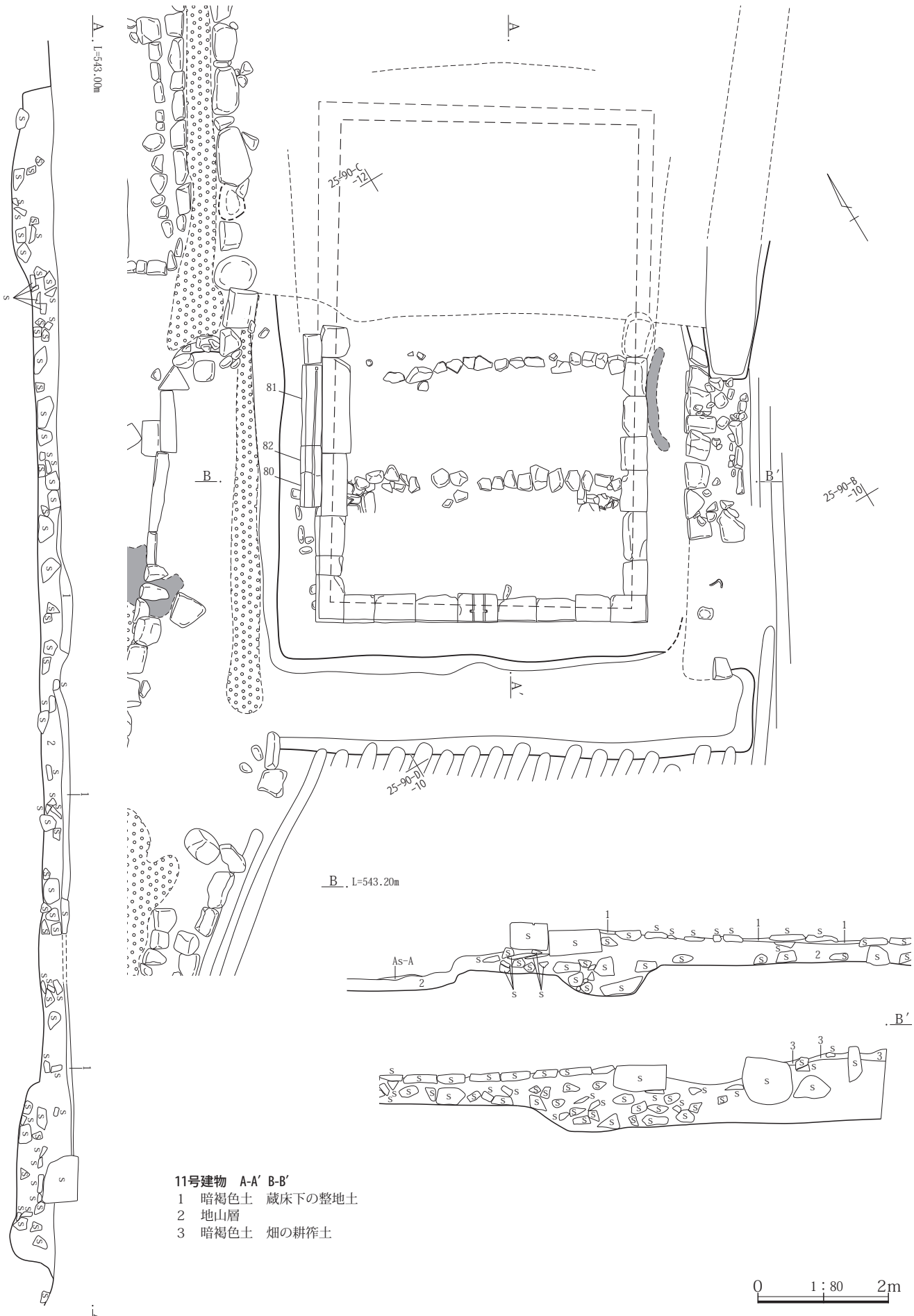
第32図　７区２号屋敷　10号建物囲炉裏

部盛土に伴い持ち込まれた石もあると思われる。表面は土で覆われていた。土間面に南北方向に直線で２列の石列がある。石の高さは土台切石とほぼ同じである。土間の場合、この２列の石列は不要と思われる。板間で見られるような大引や根太の痕跡は残っていなかったが、ここに大引が置かれていたものと思われる。その場合、板間であったことが考えられる。

建物出入口部分は切石の土台石が２段に並べられている庭に面した北側と思われる。この切石は上面に１列の溝が掘られている。この上に入口の扉の歯車が回転して、扉が開くような構造であったと思われる。蔵は石川原遺跡では３軒確認されているが、このように出入口部分に置かれた切石に溝が一直線に掘られていた例は初めてである。これが出入口扉下の石であったとしたら、現在この地方に残っている蔵の扉と位置が異なる。現在残っている蔵の出入口扉は、蔵の壁面内側に取り付けられている。

西側切石の土台中央部に凹状の溝がある。最近まで民家のコンクリート土台は、土台の東西南北の中央部に同じような床下換気口が造られていた。同じような構造であると思われる。現在残されている大きな蔵は、東西南北の４か所にこのような凹状の溝があるが、この11号建物では西側の１か所以外は不明である。

【規模・構造】西側約1/2だけが残っていた。切石の土台や２列の大引下の石列と思われる存在から建物規模を推定する。間口(東西)7.36m(４間)、奥行(南北)4.36m(２間半)。大引が１間間隔３本存在したと思われる。切石の土台の大きさは長さ60㎝、幅20～30㎝、厚さ20㎝



11号建物　A-A′ B-B′

1　暗褐色土　蔵床下の整地土
2　地山層
3　暗褐色土　畑の耕作土

0　1：80　2m

第33図　７区２号屋敷　11号建物

前後が多い。北側の出入口部分の土台の石は、長さが1.48ｍと最も長い石を使用している。その石が蔵出入口土台下の石である。その石に面した北側に３つに割れているが、切石の土台中央部に浅い溝の掘り込みがある石が置かれている。石の長さは2.15ｍ、幅28㎝、厚さ20㎝、溝は幅、深さとも１㎝である。

長さが2.15ｍあるので、半間の扉が開く長さである１間以上の幅は確保されている。

西側の切石の土台中央部に、床下換気口に似た凹状の溝がある。掘られている大きさは幅14㎝、奥行42㎝、深さ3.5㎝である。掘り込みの中間より外側に幅・奥行・深さとも１㎝の掘り込みが両側にある。あたかも床下換気口から、小動物が入らないように設置している金網が差し込まれていたような構造である。

第７項　12号建物(第34図、PL.24・25)

25-90-Ｃ～Ｅ-12・13グリッドに位置する。

【概要・位置】主屋である９号建物の南側、蔵である11号建物北側、25号建物西側に位置する。25号建物と並行しており、南北方向に長い２間×３間の建物と思われる。建物は南側の標高が高く、北側の主屋部分の標高が低くなる地形の中で､南側が北側より20㎝程高くなっている。

建物の残りは悪く、土台下の礎石が北側ではほぼ残っていたが、東西の壁面下では南側が約半分程度残っていただけであった。北側には連続していないが、３個礎石と思われる石列が残っていた。その礎石の西に小穴Ｐ１が、礎石の東に小穴Ｐ２が掘られていた。小穴の大きさは直径約20㎝、深さ約30㎝であった。改修や補強に伴い柱が建てられたのであろうか。その石列の北約50㎝の位置に建物に沿って長さ4.2ｍ､幅30㎝前後の雨落溝が残っていた。南側には礎石北約60㎝の位置に雨落溝があり、そこにAs-A軽石が残っていた。南側雨落溝の南北両側には石が並べられており、西側に位置する25号建物の雨落溝に繋がっている。

南北方向に長い２間×３間の建物北側１間の範囲は少し削られており、南側より低くなり礎石は残っていなかった。その部分に黄褐色の粘土質の土が残っていた。おそらくこの部分は土間に敷かれた土と思われる。残りの良い南側２間×２間の中の南側２間×１間には板間の下の根太の痕跡が東西方向に４本残っていた。根太の痕跡は約45㎝間隔であり、幅は10㎝前後であった。おそらく残りの良い南側２間×２間は板間であったと思われる。

このような残された痕跡から、この建物は２間×３間の建物であり、北側１間×１間が土間、南側２間×２間が板間の建物であったと思われる。建築部材等は全く出土していない。

【構造・規模】規模は南北桁行5.6ｍ(３間)、東西3.68ｍ(２間)、板間である南側は南北3.6ｍ、北側の土間は南北2.0ｍと思われる。

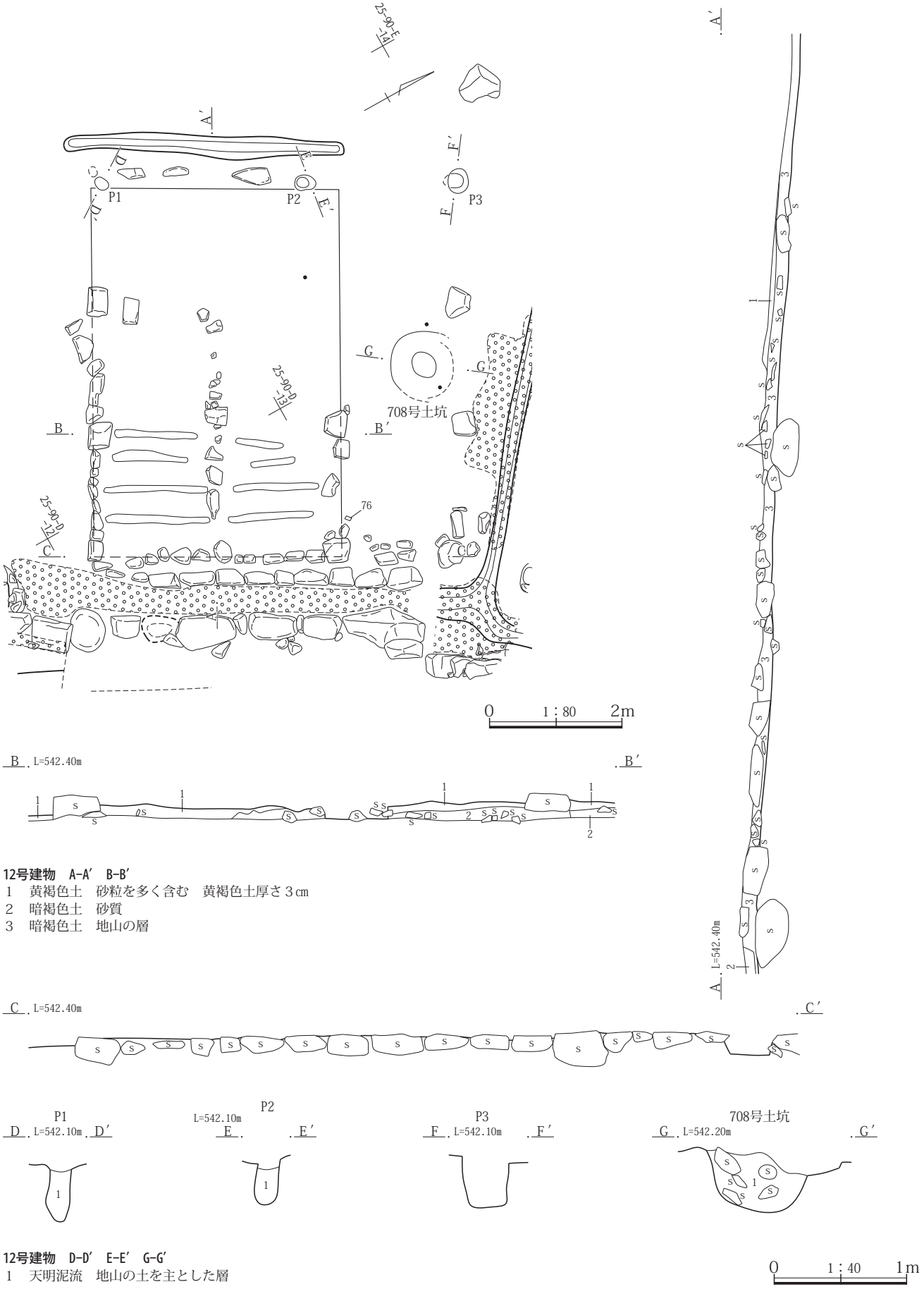
土台下の礎石は、柱の下に位置する石は長さや幅が30～40㎝と、やや大きな石を使っているが、主屋である９号建物や、付属建物である10号建物の礎石と比較すると小さな石である。

第８項　25号建物(第35・36図、PL.26)

25-90-Ｂ～Ｄ-13～15グリッドに位置する。

【概要・位置・規模】12号建物東側に位置する。12号建物と並行しており、南北方向に長い２間×４間の建物と思われる。建物の東側は丘陵となっており、その東側傾斜面を削って平らな面を確保しそこに建てられている。削られた断面には３段前後の５号石垣が積まれている。その上に中段が造られ、中段の上には、天明泥流以降に積まれた石垣が７段前後積まれていた。建物立地は12号建物より高くなっている。12号建物礎石の高さは542.26ｍ前後であるが、25号建物礎石の高さは542.50ｍであり、約25㎝高くなっている。

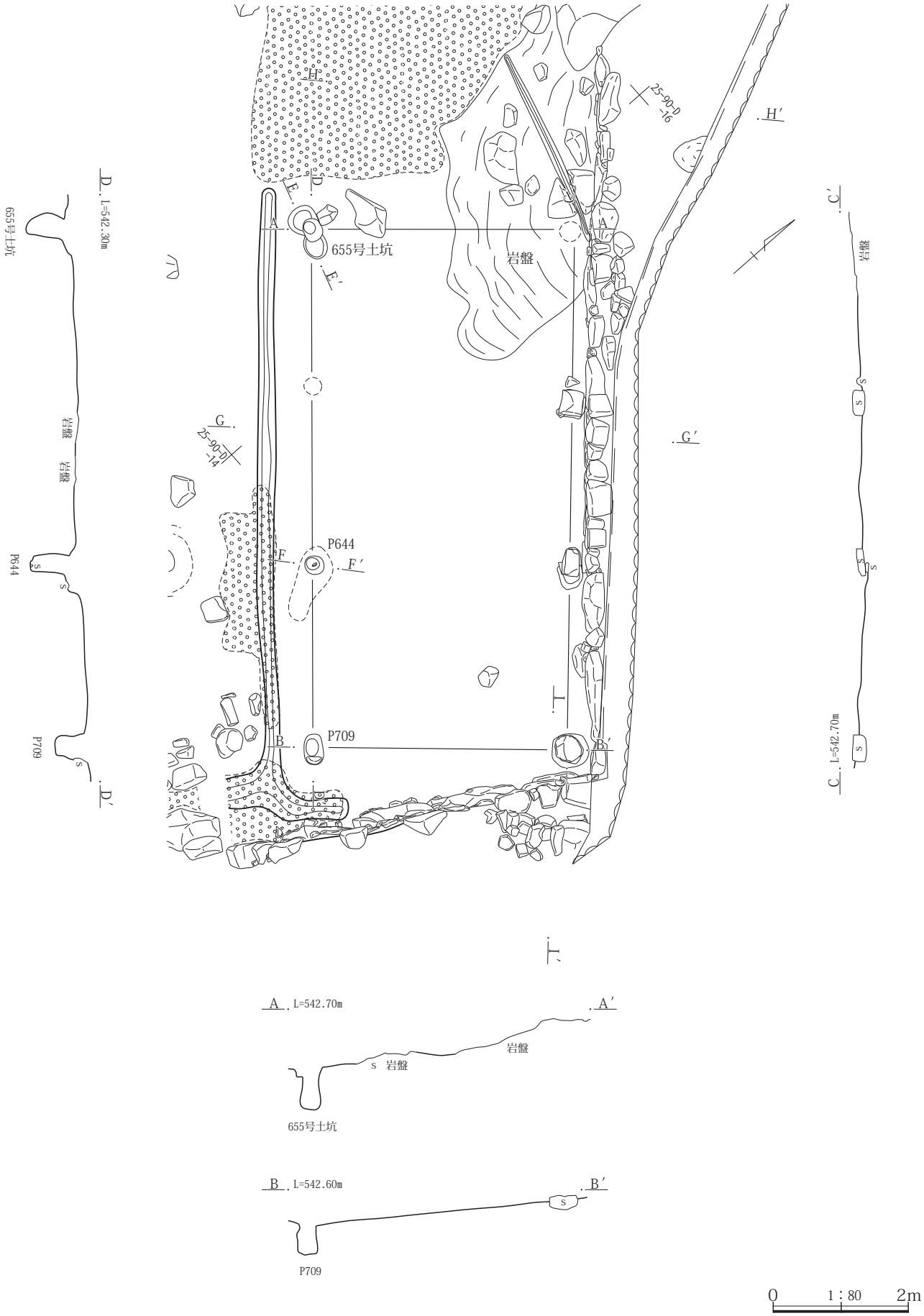
建物は、丘陵下の平地面に並行して残されていた建物の礎石と思われる平石３個、およびその北側に整地され地盤の石が露出している面の存在から、長さ7.36ｍ(４間)の建物の東壁面の存在が想定された。西側壁面下の礎石は全く残っていなかった。想定される礎石部分には、３個の小穴(Ｐ709・Ｐ644・655号土坑)が掘られていた。この位置が西側の壁面部分であったとすると、規模は南北7.36ｍ(４間)、東西3.68ｍ(２間)の建物の存在が想定できる。西側柱穴の外側には雨落溝らしき溝も存在しており、屋根の存在が考えられる。東西3.68ｍ(２間)、中間に柱の痕跡はない。建物長軸方向東側の柱が礎石で、反対側の西側柱が掘立柱である建物は、これまでの調査では存在しない。西側３個の小穴部分には、本来礎石が



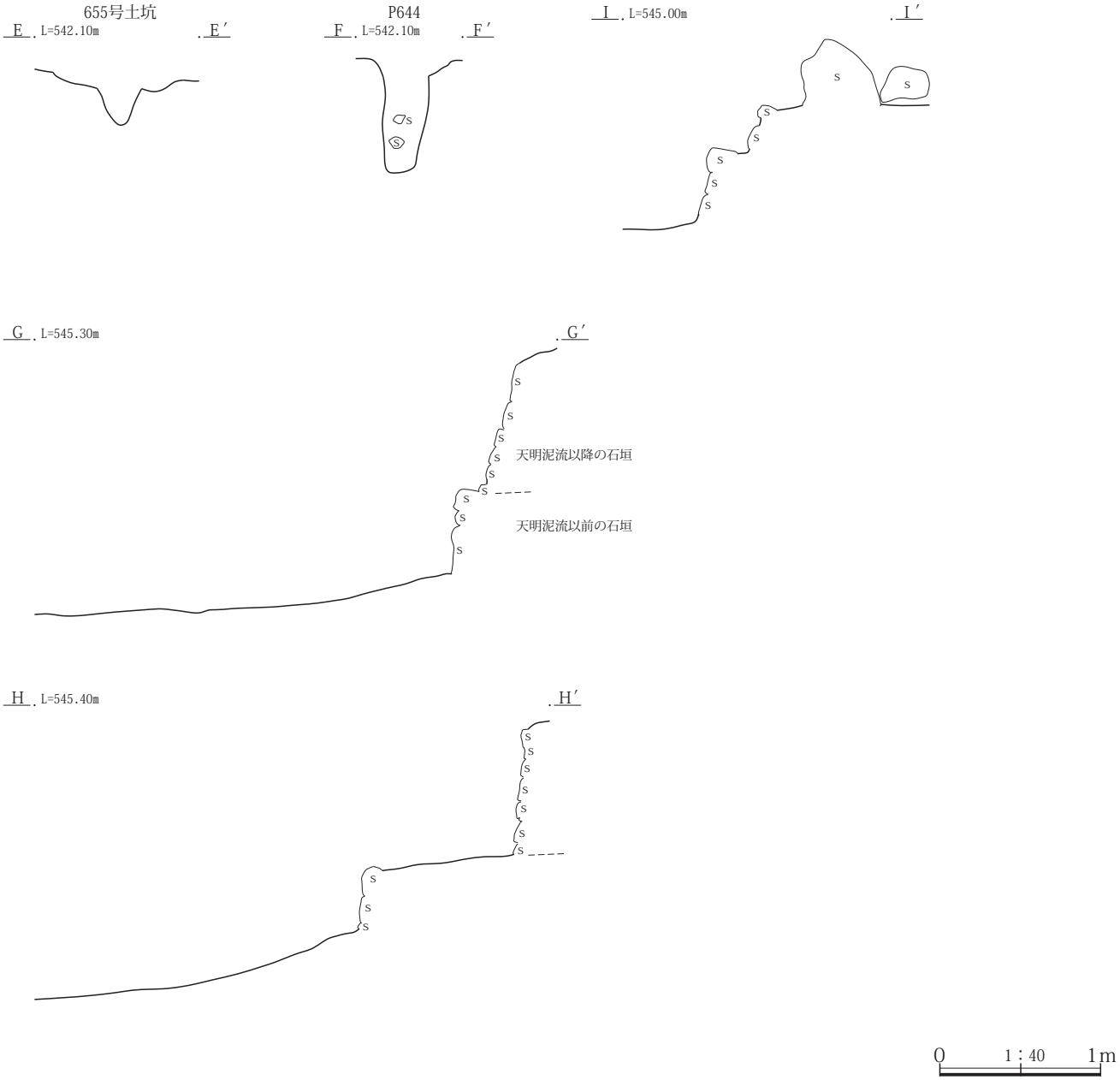
12号建物　A-A′　B-B′
1　黄褐色土　砂粒を多く含む　黄褐色土厚さ３㎝
2　暗褐色土　砂質
3　暗褐色土　地山の層

12号建物　D-D′　E-E′　G-G′
1　天明泥流　地山の土を主とした層

第34図　７区２号屋敷　12号建物



第35図　７区２号屋敷　25号建物



第36図　７区２号屋敷　25号建物断面

置かれており、礎石の痕跡部分を小穴として調査したのではないだろうか。建築部材や遺物等は全く出土していない。

（１）708号土坑・Ｐ３（第34図、PL.25）

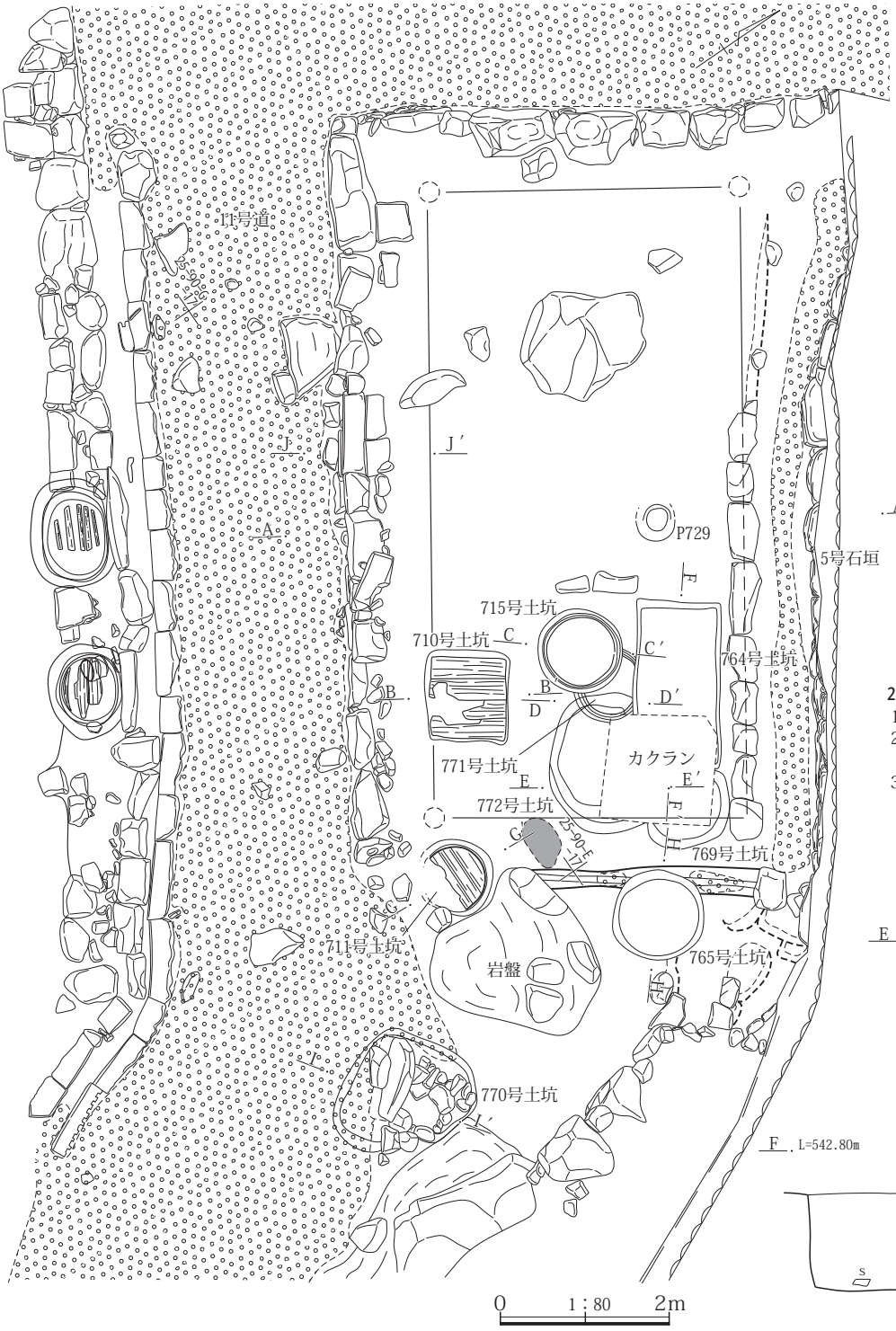
25-90-Ｃ-13グリッドに位置する。

25号建物と12号建物の間に708号土坑・Ｐ３が掘られていた。どのような目的で掘られたのか不明である。708号土坑は、直径１ｍ前後、深さ50㎝前後であり、内部には多くの天明泥流で埋まっていた。桶が埋められていた痕跡はない。Ｐ３は直径30㎝前後､深さ34㎝である。

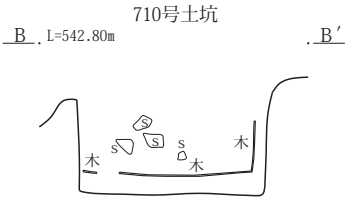
第９項　24号建物（第37図、PL.26・27）

25-90-Ｄ～Ｇ-16～18グリッドに位置する。

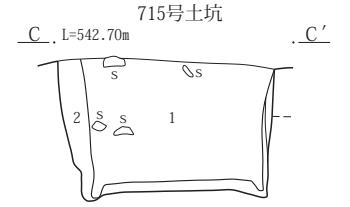
【概要・位置】主屋である９号建物東側、屋敷に入るための11号道の東側、川原湯温泉まで繋がっていると思われる22号道の南側に位置する。建物の東側は舌状の丘陵先端部となっており、西側の傾斜面を削って平らな敷地面を確保し、そこに建てられている。削られた断面には８段前後の５号石垣が積まれている。丘陵から西側に離れている主屋の９号建物は、標高541.75ｍであり、24号建物礎石付近土間の標高は542.60ｍである。24号建物は主



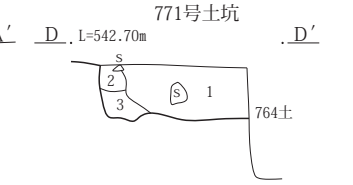
710号土坑



715号土坑



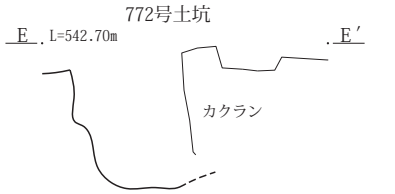
771号土坑



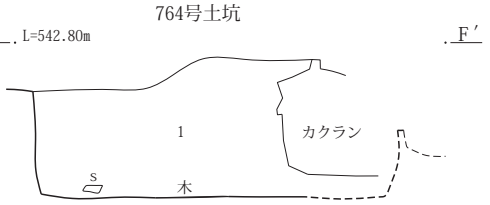
24号建物　C-C′・D-D′・F-F′

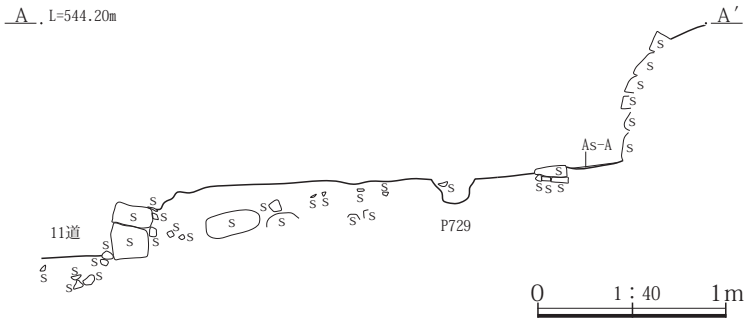
1　褐灰色土　軟質で耕作土に近い層
2　黄褐色土　多くのローム粒を含む層（地山）
3　明黄褐色土　ロームを主とした層（埋土）

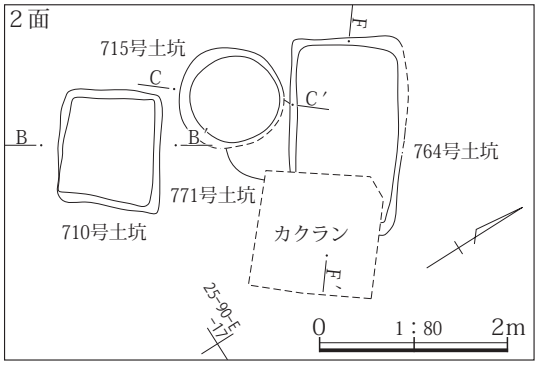
772号土坑



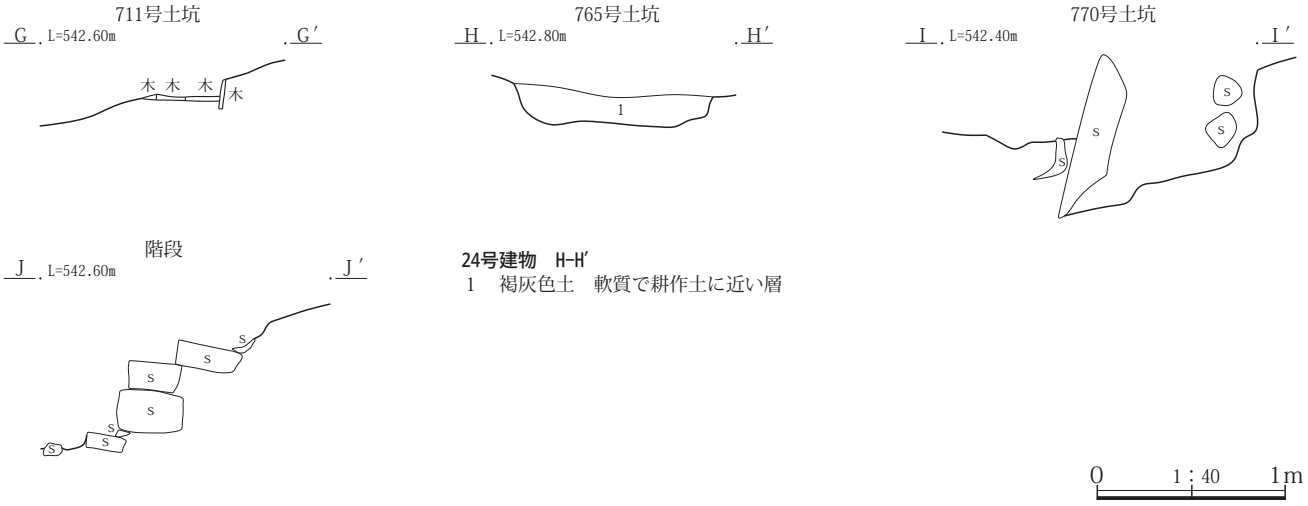
764号土坑







第37図　７区２号屋敷　24号建物



第38図　７区２号屋敷　24号建物断面

屋より１m近く高い位置に建てられている。９号建物と24号建物の間にある11号道の標高は541.7mであり、９号建物とほぼ同じ高さである。24号建物は11号道より１m弱高い。そこで11号道との境に石垣が積まれている。石垣の長さは約8.8m、高さ60㎝前後である。積まれていた石は切石で、幅60～80㎝と長い石を使っている。北端のコーナー部分の石は、長さ140㎝と特に大きな石を使っている。北側に積まれた石も幅90㎝前後の大きな石が使われている。その場所は22号道に面し21号道に近いので、大きな石が目立つ石垣となっていたものと思われる。道に面して24号建物の敷地に入るために、建物西側中央部付近に２段の階段が造られていた。階段の幅約90㎝、１段の高さは約30㎝である。24号建物北側は主屋である９号建物より約１m高い位置にあり、北側も１m程低い22号道となっている。そのため天明泥流の堆積が薄く、その後の開発等により建物北側約1/3は表面が60㎝前後削られて残っていなかった。また南側も撹乱を受けてコンクリート製の構造物や土坑が掘られており、全体の残りは悪く建物範囲も明確でない。この場所は調査前には物置が建てられており、撹乱を受けた可能性がある。

建物の礎石が東側に９個残っていた。礎石の外側の雨落溝と思われる場所にAs-A軽石が残っていた。南側に雨落溝と思われる溝があり、As-A軽石が残っていた。残っていた礎石と雨落溝の位置から建物の範囲を想定した。建物内および建物南側の土坑等は建物に伴う遺構と特定するのは困難である。764・769号土坑はコンクリート埋設に伴う後世の撹乱、765・711号土坑は浅く明瞭な掘り込みがないので、後世の撹乱と思われる。770号土坑は11号道を一部壊して多くの石が埋められており、大きな石が11号道より高い位置に出ている。これも後世の撹乱と思われる。715号土坑と710号土坑も建物内の配置から建物に伴うとしたら不自然である。発掘調査以前にはこの場所に24号建物と重なるように南北方向に長い物置が建てられていた。715号土坑と710号土坑とも24号建物に伴う遺構とは確認できないが、概略を報告する。

建築部材等は全く出土していない。

【構造・規模】残りが悪く、残された礎石や雨落溝、敷地内の配置等から、南北方向に長い２間×４間の土台建物と思われる。

建物東側に残っていた９個の土台下の礎石は、長さ30～80㎝、幅30～40㎝とやや大きな石を使っている。建物の規模は南北桁行7.36m（４間）、東西3.68m（２間）と想定した。板間である痕跡はない。

（１）715号土坑

【概要・位置・規模】建物南側中央部の埋設桶である。直径98㎝、深さ64㎝。底面に桶の底板、側面にタガの痕跡を残す。木材の痕跡は全く残っていない。

（２）710号土坑

【概要・位置・規模】715号土坑の西側に位置する。長方形の土坑である。東西90㎝、南北1.1m、深さ50㎝である。地面と側面にわずかに木材の痕跡が残っていた。

第10項　11号道(第37図、PL.27)

25-90-Ｅ～Ｇ-15～17グリッドに位置する。

【概要・位置・規模】21号・22号道から２号屋敷主屋である９号建物と付属建物である24号建物の間を通り、屋敷の前庭までの道である。幅約２ｍ、長さ約15ｍあり、村の幹線道である21号道よりやや広い。地形に沿って南側が北側より約50㎝高くなっている。東側は24号建物の石垣が積まれており、西側は９号建物の敷地に積まれた石列の外側に９号建物南東部から繋がっている細長い長方形の切石が並べられて、水路が造られていた。この水路用の石は長さ約12ｍ残っていた。並べられていた切石は長さ30～60㎝、幅20㎝前後である。９号屋敷南東コーナー部分(654号土坑南東部)からこの水路は始まっており、その部分の切石には楔の跡が８か所残っていた。

第11項　22号道(第19図、PL.27)

25-90-Ｆ・Ｇ-17～19グリッドに位置する。

【概要・位置・規模】22号道は24号建物北側で確認された広い道であり、南東方向にある川原湯温泉へと繋がっている村の幹線道と思われる。53号溝(幅60～80㎝)をまたいで､21号道とＴ字状に交差していたものと思われる。53号溝北には長さ３ｍの切石が橋台のように並べられており、この切石の上に橋が架けられて、21号道と22号道は繋がっていたものと思われる。

第12項　石垣について

天明泥流下から確認される石垣は、石川原遺跡・東宮遺跡・西宮遺跡等多くの遺跡で確認されている。それらの石垣は畑等から出土する大小さまざまな石を雑に積むこともあるが、切土や盛土部分に積まれる石垣、さらに、家の前の石垣や道路に面した石垣は一定の大きさで、全体に平らな石を選んで整然と積んでいることが多い。石垣の最下部には最も大きな石を並べ、中間には大きさがほぼそろった平らな石､最上部には再度大きな石を用い、水平を意識して並べることが多い。それらの石は平らな石が使われる。平らな石を水平方向に積んでおり、斜めに積む石垣は天明泥流下で確認することはできない。天明泥流以降現在に至る石垣の多くは、平らな石を斜めに積んでいることが多い。天明泥流以前に積まれていた石垣の上に、その後石垣が追加されて積まれている例も多く見かける。その石垣は、天明泥流下に積まれた平らな石を平に積んだ石垣の上に斜めに積んだ石垣となっている。その様子は東宮遺跡５号屋敷12号石垣や石川原遺跡２号屋敷５号石垣で確認することができる。

２号屋敷では、建物のまわりに多くの石垣が積まれていた(５～９号石垣)。東側の丘陵との境に５号石垣、11号建物北側、前庭南端に６号石垣、11号建物南で畑との境に積まれた７号石垣、９号建物と10号建物の西側で畑との境に８号石垣、２屋敷と21号道の間の53号溝南側に積まれた、切石を積んだ９号石垣等である。

(１)５号石垣(24号建物東側石垣)(第19図、PL.28)

25-90-Ｂ～Ｆ-14～18グリッドに位置する。

【概要・位置・規模】屋敷東側の丘陵との境に積まれている。南側の25号建物から北側の24号建物までの東側に石垣は積まれている。石垣は天明泥流以前に積まれていた石垣とその上に天明泥流で埋没した以降に積まれた石垣、およびおそらく近代以降に新たに積まれた石垣に分かれる。24号建物東側の石垣は、下約2/3が天明泥流により埋まっており、その上に天明泥流以降の新たな石垣が積まれていた。新旧の石垣は石の大きさや積み方が異なっている。新しい石は古い下の石より小さい石が多く使われ、細長い石の多くは水平でなく、一部は斜めに傾斜して積まれている。規模は長さ７ｍ､高さ1.8ｍ､上約1/3が天明泥流以降に積まれている。石の大きさは長さ60～70㎝､厚さ20㎝前後の細長い石が多く使われている。

25号建物東側の石垣では下約1/2が天明泥流に埋まっており、その上に天明泥流以降の新たな石垣が積まれていた｡新しい石垣の石は古い石垣より小さな石が積まれ、細長い石の多くが斜めに積まれている｡規模は長さ12ｍ、高さ2.6ｍ、上約1/2が天明泥流以降に積まれている。

最も新しい石垣は24号・25号建物の中間に積まれている石垣である。石垣底面の高さは、南北両側の石垣より１ｍ前後高く、その面は天明泥流にほとんど埋まっていない。使われている石や積み方は他の石垣と大きく異なっている。最も大きな違いは、使われている石が一定の規格された長方形の切石であること。さらに、積み方が一定の規格による斜め方向であることである。おそらく、近代以降に積まれた石垣であると思われる。この部分の石垣は図示していない。

（２）６号石垣（24号建物東側石垣）（第19図、PL.28）

25-90-Ｂ～Ｆ－９～14グリッドに位置する。

【概要・位置・規模】11号建物敷地北側の段差部分に積まれた石垣である。石垣は12号建物南側にも連続していたと思われるが、石垣の上部が削られており、残っていなかった。この石垣は地形的に高い北側に建てられた11号建物の敷地と、一段低く整地した前庭との高低差約50㎝の段差面に積まれたものである。使われていた石は加工され平らな石を平に積んでいる。石垣の長さは、西の８号石垣部分から踏石（前庭中央部で９号建物から11号建物出入口までの踏石）までで、約9.5m、高さは50㎝前後である。石の大きさは幅50～90㎝、厚さ20㎝前後である。石垣の上面の石はやや大きい石を用いて平らになるように工夫している。

（３）７号石垣（24号建物東側石垣）（第19図、PL.28）

25-90-Ｂ-10グリッドに位置する。

【概要・位置・規模】11号建物南側、雨落溝外側に並べられた石列である。地形的に高い南側の畑からの畑土の流入を防ぐ目的もあったと思われる。発掘担当は７号石垣として調査したが、石は１段だけであり石垣ではないと思われる。残っていた石列の長さは３m、使われていた石の大きさは間口30㎝、奥行40～50㎝の小口積である。

（４）８号石垣（９号建物西側石垣）（第19図、PL.28）

25-90-Ｅ～Ｊ－９～12グリッドに位置する。

【概要・位置・規模】８号石垣は２号屋敷９号建物・10号建物の西端に積まれている石垣である。西側は畑で、２号屋敷の敷地面は畑面より20～30㎝高くなっている。その段差面に石垣が積まれている。畑と石垣の間は、雨水等を流すために幅90㎝、深さ20㎝の溝が造られている。敷地は10号建物部分で西に約1.5m拡張され、その部分に10号建物が建てられている。それに伴い、石垣も拡張部分にも積まれている。９号建物西側の石垣は長さ12.4m、高さ40～50㎝である。細長い平らな石を平らに２～３段積んでいる。10号建物西側の石垣は長さ11m、高さ50㎝前後である。この石垣の上に建物土台があったと思われる。石垣上面はほぼ水平であり、長さ60～80㎝、厚さ20～30㎝、幅30㎝前後の大きな石を積んでいる。

（５）９号石垣（９号建物北側石垣）（第19図、PL.28）

25-90-Ｈ・Ｉ-12～17グリッドに位置する。

【概要・位置・規模】９号石垣は２号屋敷北端に位置し、石垣の北は53号溝があり、その北は村の幹線道である21号道である。２号屋敷の敷地面は21号道より60㎝前後高い。石垣北側の53号溝の深さは15㎝前後あり、53号溝に面して積まれている石垣は２～３段で、高さ70～80㎝の石垣としている。長さは約21mの大きな石垣であり切石を隙間なく整然と積んでいる。石垣は西側では薄い長方形の切石が積まれていた。２段＋薄い石の３段、大きさは下の石が幅40㎝前後、厚さ24㎝前後、中段の石が幅40～80㎝、厚さ35㎝前後と大きな石を積んでいる。一番上の石は高さを揃えるために薄い石を使用しており、幅40～60㎝、厚さ10～12㎝の石を並べている。東側の洗い場近くの石は、同じ切り石でも長方形だけでない石も使用しており、西側より不揃いである。幅60㎝前後、厚さ20～30㎝で、中には幅100㎝、厚さ50㎝の大きな石も使用している。

このような石垣は他の屋敷ではない。屋敷から西の畑になると石垣はなくなり、９号石垣反対側の53号溝に石垣はない。村の中に突然現れた別格の存在を主張しているようである。

第13項　出土遺物（第358～363・471図、PL.313～316）

遺物の多くは９号建物から出土している。木製品は屋敷北の洗い場近く、53号溝から出土した柱材（Ｗ１）がある。付属建物である板敷の10号建物囲炉裏付近から煙管、12号建物から砥石、蔵である11号建物では、切石の礎石と出入口外側に、溝のある切石が並べられていた。前庭には方形の平石が９号建物から11号建物間に25個並べられていた。

９号建物板間北側の石で囲まれた部屋から多くの陶磁器が出土している。この場所は倉庫等の機能があったのであろうか。

煙管が９号建物１号囲炉裏と10号建物囲炉裏脇から出土しており、煙管の使用状況を示している。

馬屋で入り口付近に礎石と沓石、馬屋１南の645号土坑（埋設桶）の覆土上面から上下組完形の臼が倒置した状態で出土している。

第３節　３号屋敷跡(第39～67図､PL.31～54)

第１項　３号屋敷跡概要
第２項　16号建物　(１)竈　(２)１号囲炉裏
(３)２号囲炉裏　(４)３号囲炉裏　(５)唐臼
(６)室　(７)馬屋　(８)飼葉桶　(９)馬屋埋設桶
(10)1561号土坑(埋設桶)　(11)厠
第３項　中庭の集合火山灰
第４項　薪場１
第５項　中庭の造成
第６項　１号洗い場
第７項　17号建物(蔵)
第８項　18号建物　(１)土壁　(２)板間　(３)土間
(４)１号囲炉裏　(５)２号囲炉裏　(６)飼葉桶
(７)薪場２
第９項　出土遺物

第１項　３号敷跡概要

３号屋敷跡は村の中央部北側に位置する。北に向かって緩やかに低くなる地形であり、北側は一段低い畑地となっており、畑地の北は吾妻川である。屋敷の西側は村の幹線道である21(７)号道から北方向に分岐した25号道があり、屋敷は25号道を通路としていた。25号道は４・11・13号屋敷も通路としている。21(７)号道に次ぐ重要な幹線道である。25号道の西脇には57号溝がある。57号溝の水は南側の53号溝から分岐し北側の吾妻川に向かって流れている。57号溝西側の２・３号洗い場が11・13号屋敷、東側の１号洗い場が３号屋敷で使用したものと思われる。

屋敷は集落のほぼ中心に位置し、屋敷面積約130坪の広い敷地を確保している。この面積は集落内では２番目に広い。最大の敷地は南西方向にある２号屋敷である。屋敷内は、主屋がある16号建物、南西コーナー部分に蔵、南東コーナー部分に18号建物がある。集落内で蔵を持つ建物は、２・３・８号の３屋敷だけである。中庭には、降り積もったAs-A軽石が、幅1.5m、高さ20㎝前後の円錐形に３か所集められていた。また前庭の南端には、大量の薪が積み上げられていた。主屋の間口11軒の建物は、これまで発掘調査された八ッ場ダム関連の遺跡では、東宮１号建物と同じであり、天明年間の主屋で発掘調査された県内で最も大きな建物であると思われる。

第２項　16号建物(第40～53図、PL.32～39)

25-99-Q～X-９～13グリッドに位置する。

【概要】(分類：５類　土間上屋柱梁間４間以上)

間口11間奥行５間と大きな建物であり、内部構造は、板間２+板間１(囲炉裏を持つ一段低いと思われる狭い下座敷)であり石川原遺跡では最も間口の広い建物である。柱は礎石が一部残っているが､多くは残っていなかった。残っていた礎石は土間面を20㎝前後掘り込み固定されており、本来礎石が据えられていたと思われる場所に、20㎝前後と浅い掘り込みが多く残っている。この場所に礎石が据えられていたが、残っていなかったものと思われる。これまでの調査例から、掘立柱の上屋柱の掘り込みは60㎝以上、下屋柱の掘込は30㎝以上あるために、20㎝前後の掘り込みは掘立柱ではない。東西方向に長い建物であり、西側が土間、東側が板間で、出入口は土間の南側である。土間の西側に馬屋がある。馬屋は３頭以上の区画があり、堆肥等の痕跡から２頭の馬の存在が考えられる。屋敷出入口東側に、南北方向に２基並んで唐臼、土間奥に竈、竈東側に土間を少し掘り込み、石で長方形に囲まれた施設が造られており、室と呼称した。土間と考えられる多くの地表面には、黄色い土が表面に持ち込まれていた。しかし、１号囲炉裏周辺から東側の板間部分には敷かれていない、土間と用途が異なることがわかる。おそらくその部分は、東宮遺跡１号建物で認められたような、囲炉裏のまわりを板間とした座敷より一段低い板間、現在まで残されている民家で呼ばれていた囲炉裏を囲む狭い板間である板間１(下座敷)等があったものと思われる。

下座敷の東側に南北方向に柱列があり、この柱を境に東側が板間であったと思われる。板間は間口５間ある。５間のほぼ中央部やや西寄りを境に、板間が東西に区画されていたものと思われる。西側の板間を板間２(座敷)、東側の板間３(デイ)と呼称する。東西の板間下の土間部分に、大きな石と焼土や灰が少し出土している。位置的に囲炉裏の可能性が考えられ、調査段階では２・３号囲炉裏として調査した。しかし囲炉裏の区画が明瞭でなく、灰や焼土の出土も少ないので、囲炉裏として一時使われ

たかもしれないが、囲炉裏としては明瞭でない。

板間２(座敷)、東側の板間３(デイ)の南側は半間(約90㎝)の距離で礎石が東西に据えられている。その付近から45～50㎝と短い根太が多く出土している。この部分には外廊下があったのではないだろうか。また板間３(デイ)の北側には、約45㎝離れた位置に礎石が撤去されたような痕跡が、２間幅で確認されている。この場所に書院等の施設があったことも考えられる。板間１の南側外廊下があったと思われる部分に、板床と思われる一部が、板間１から前庭方向に押し出されたような状態で一部残っていた。また板間２の南側雨落溝付近に、多くの木材が北側から押し出されたように散乱して残っていた。その中には大黒柱のような大きな部材もあった。材質は松である。大きさは27.3×30.3×135㎝で、上下は鋸で切られている。隣には籠が出土している。

【構造・規模】東西方向に長い建物であり、棟行方向(東西)20m(約11間)、梁行方向(東西)方向９m(約５間)である。

西側の桁行方向10.6m、梁行方向9.2mの範囲が土間であり、東側の桁行方向幅9.4m、梁行方向9.2mが板間であると思われる。

(１)竈(第42図、PL.33～35)

【位置・概要】土間の中央部奥に、竈が造られていた。竈の東約１mの位置に室、南東約2.5mに囲炉裏のある板間1がある。竈の右袖部分には幅約70×70㎝、厚さ24㎝の平らな石が置かれていた。大きさや位置から上屋柱が建てられていたものと思われる。奥壁や両袖石は幅50×60㎝前後の大きな石を方形に組んでいた。竈全体を覆うように積まれていたロームは崩れていたが、比較的残りの良い竈であった。泥流に埋もれた状態で竈中底面から20㎝前後高い場所から、底径39.7㎝の大きな鉄釜の底部付近が出土した。竈内の位置は奥壁より炊口部に近い位置であり、泥流により押されて炊口に近い位置に移動したものと思われる。この鉄鍋は口縁部を欠くが、同じ底径を持つ鉄鍋から口径を推定する。41号建物出土鍋の底径は39.5㎝、口径は66.5㎝、頸部53㎝である。口縁部を欠いているこの鉄鍋の口径は66㎝、頸部53㎝前後と思われる。建物内外より鉄鍋の出土は、これまでの発掘した東宮遺跡・西宮遺跡で、竈や囲炉裏周辺からの出土はあるが、竈内からの出土はないようである。石川原遺跡では、この16号建物の他に21・27・41号建物で確認されている。いずれの鉄鍋も、口径60㎝以上と大きいものである。

【規模・形状】奥壁や両袖石は幅50×60㎝前後の大きな石を方形に組んでいた。加工した切石は使っていない。燃焼部底面には幅60㎝、厚さ10㎝前後の薄い石を敷き詰め、壁や両袖部分は大きくて厚い石を２段に組んでいる。石組されている竈の外側は110㎝四方、燃焼部幅約60㎝四方である。高さは、約40㎝である。鉄鍋の置かれる竈上部の口径は、50㎝前後であったと思われる。

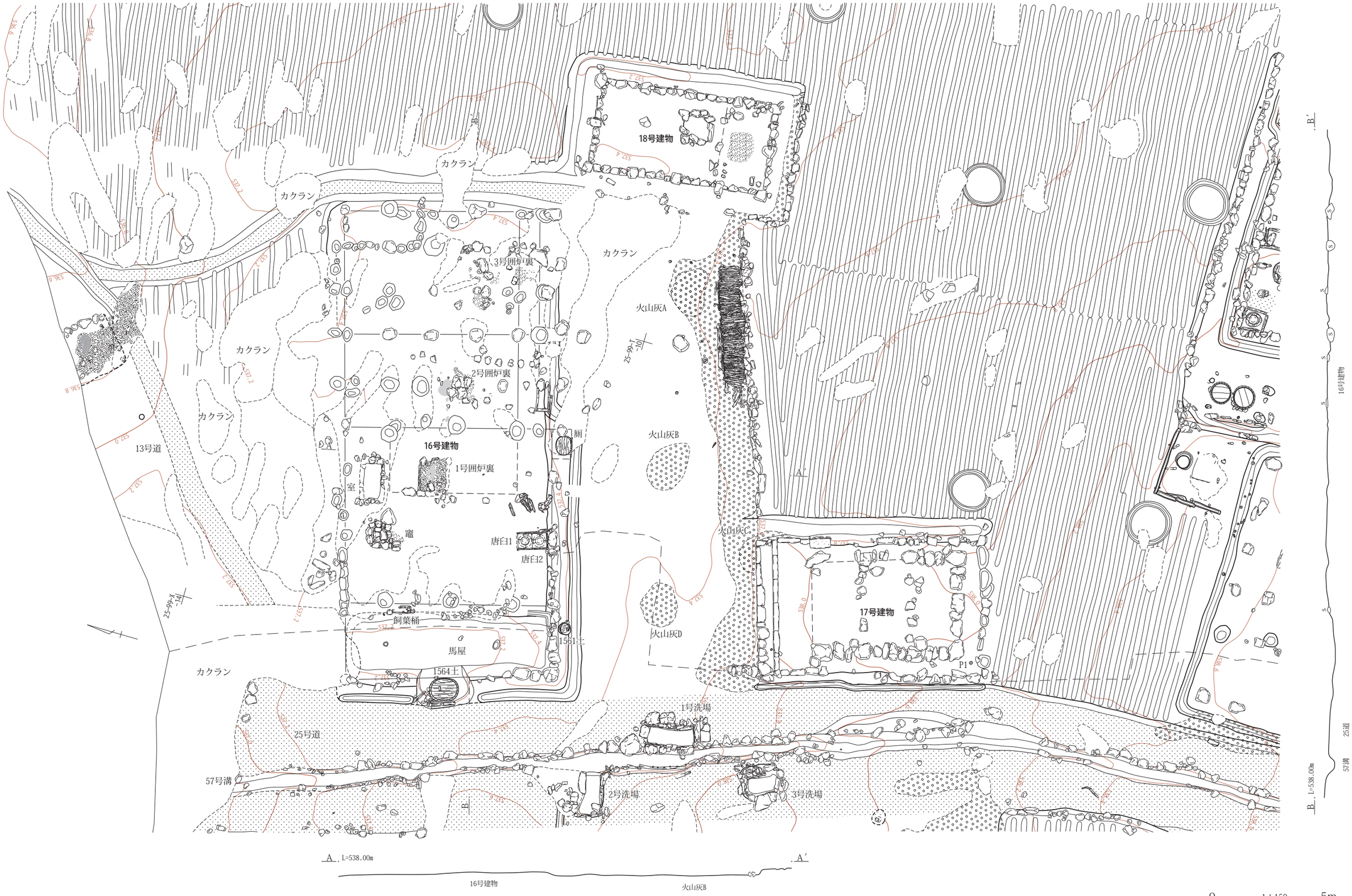
これらの石のまわりや鍋を受ける上部には、ロームがまかれていたと思われ、竈石の周辺には、多くのロームが残っていた。

燃焼部下には、焼土粒が多く残っていたが灰はほとんど残っていなかった。

(２)１号囲炉裏(第43図、PL.35・36)

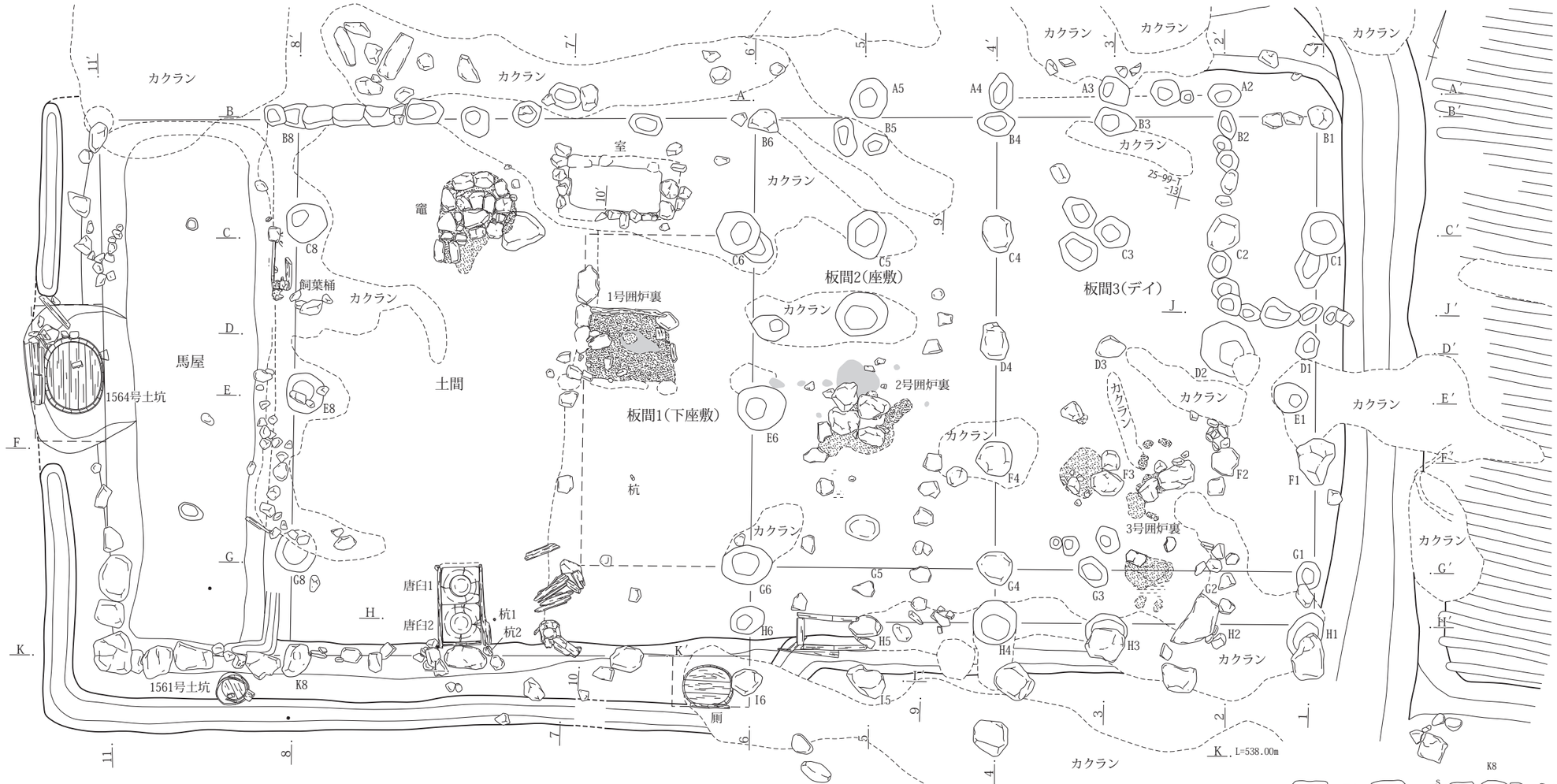
【位置・概要】 板間１に大きな囲炉裏が造られていた。囲炉裏を囲む石は西側と北側のコーナー部分に残っており、南東コーナー部分には石が外された痕跡が残っていた。北側にはこの石の上に、囲炉裏を囲むように置かれている枠木と思われる木材が残っていた。東側には木材の一部が残っていた。四隅の石を枕石として囲炉裏枠木が設置されていたものと思われる。囲炉裏から板間２の部分は土間で残っていた土間面の黄色い土が敷かれていない。また囲炉裏西側には、囲炉裏の範囲を超えて大きな石が南北方向に並べられている。この石は板間１の西側の梁が置かれたものと思われる。このような痕跡から、この囲炉裏は東宮遺跡１号建物で造られていた土間にせり出して造られた板間と考えたい。土間に接した西面は床がなく南・東・北側は板床が敷かれていたものと思われる。

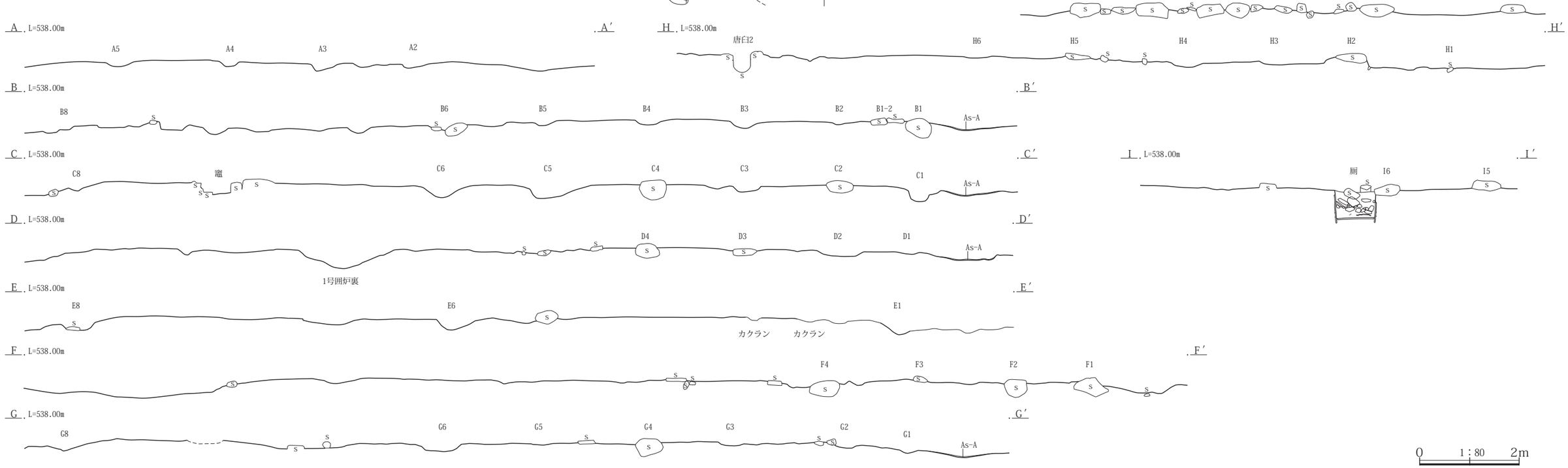
【規模・形状・構造】囲炉裏枠木の一部が残っている。そこで計測すると、囲炉裏枠木の外側で東西140㎝、南北120㎝、囲炉裏枠木の幅を10㎝とすると、囲炉裏内部の規模は東西120㎝、南北100㎝となる。この数値が適正であるなら、これまで調査してきた囲炉裏の規模は、枠木を含めて約90㎝四方が多く、この囲炉裏は大きなものである。囲炉裏中央部は土間面より５㎝前後低くなっており、表面は灰層、その下に焼土層・囲炉裏内に持ち込まれたロームを主とした明黄褐色土、その下に厚く堆積し



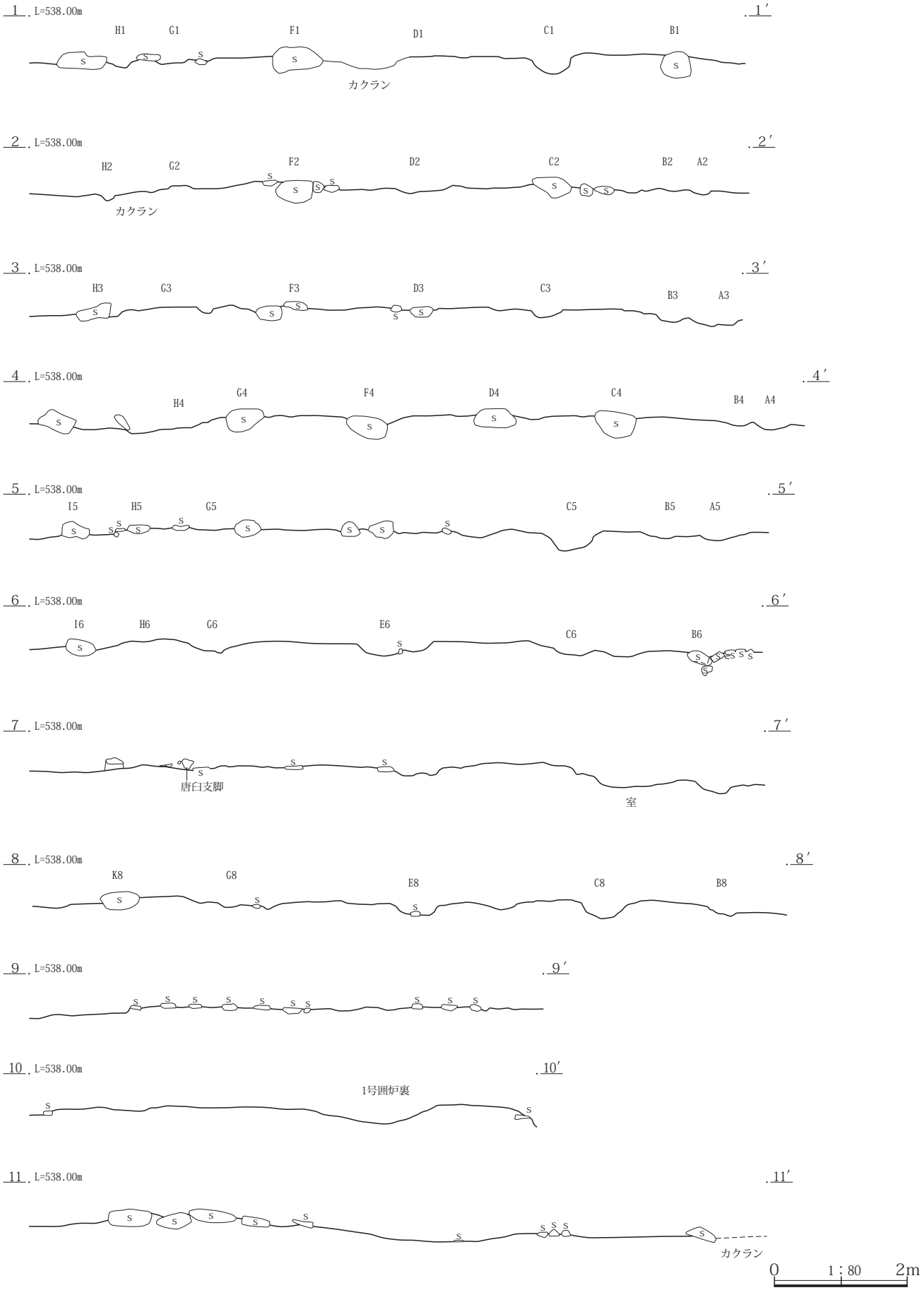
0 1:150 5m

第39図　5区3号屋敷位置図





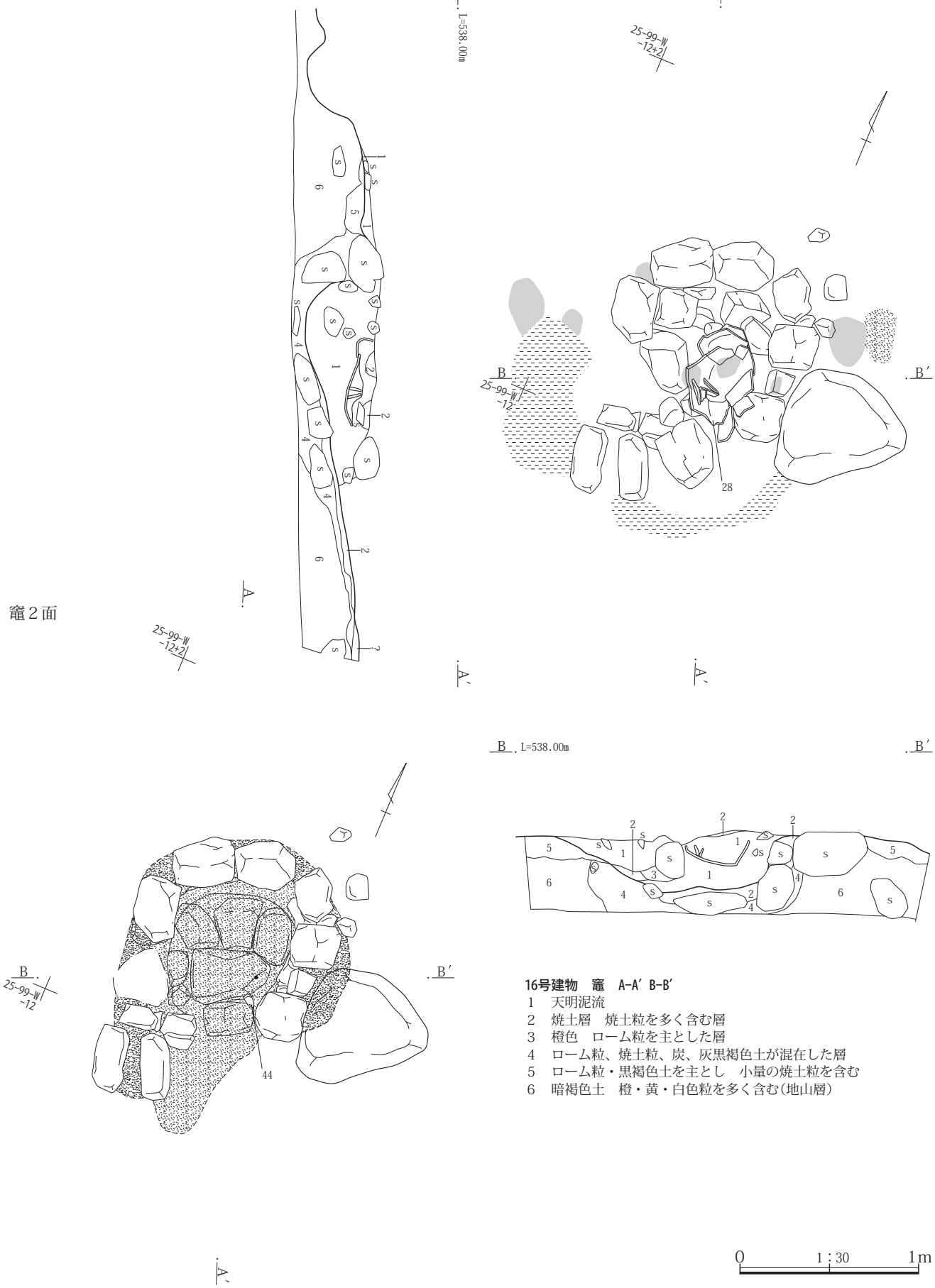
第40図　５区３号屋敷　16号建物断面（１）



第41図　５区３号屋敷　16号建物断面（２）

竈１面

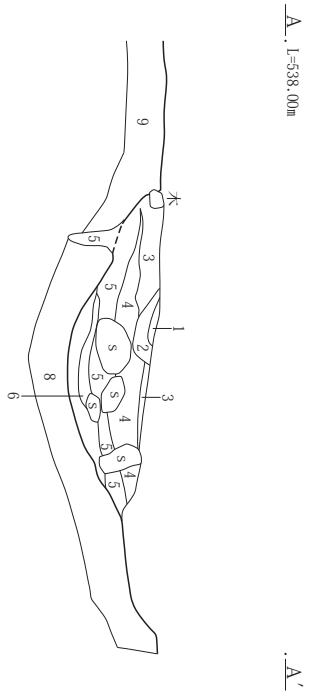
竈２面

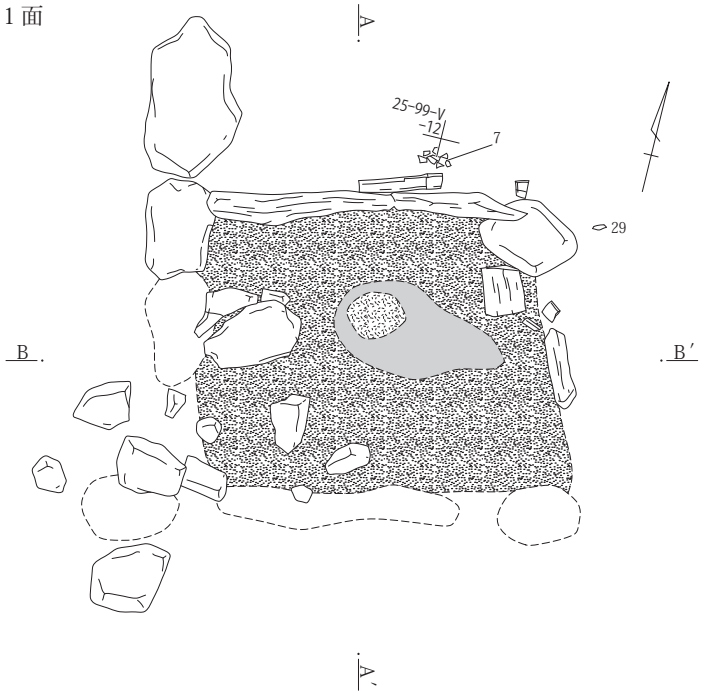


16号建物　竈　A-A′ B-B′

1　天明泥流
2　焼土層　焼土粒を多く含む層
3　橙色　ローム粒を主とした層
4　ローム粒、焼土粒、炭、灰黒褐色土が混在した層
5　ローム粒・黒褐色土を主とし　小量の焼土粒を含む
6　暗褐色土　橙・黄・白色粒を多く含む(地山層)

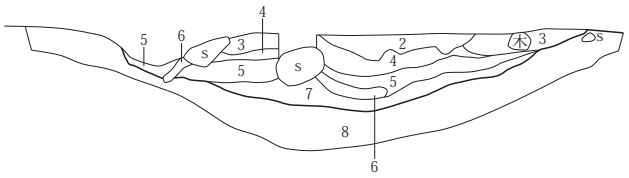
第42図　５区３号屋敷　16号建物竈

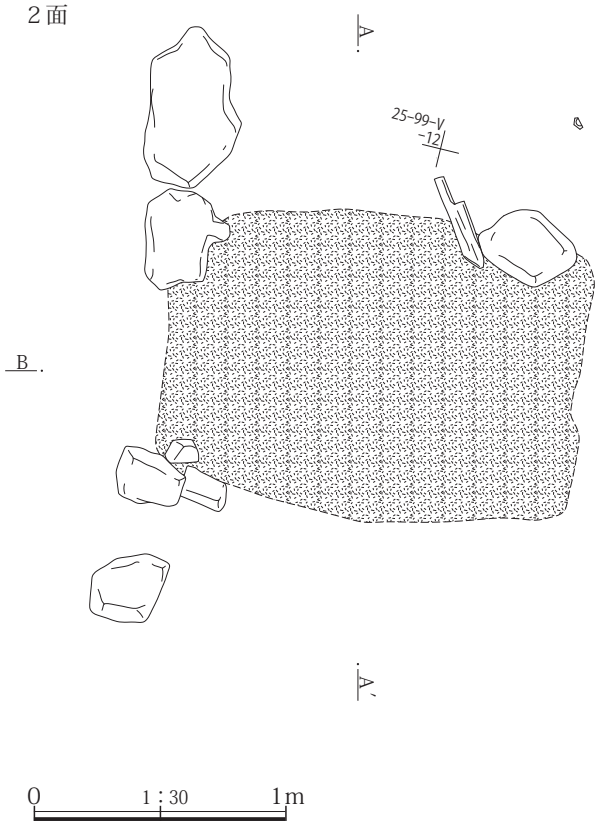


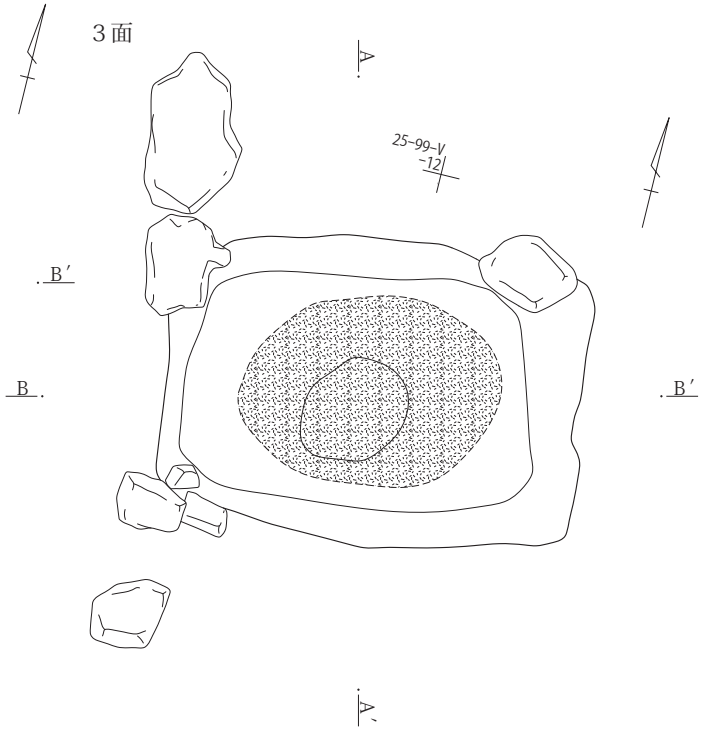


16号建物１号囲炉裏　A-A′ B-B′

1　灰白色土　灰層
2　橙色土　焼土層
3　明黄褐色土　ロームを主とした粘質土
4　褐灰色土　地山の８層に近い層
5　灰白色土　灰層
6　橙色土　焼土層
7　褐灰色土　地山の８層に近い　層中に炭・灰・焼土等を含む
8　褐灰色土　地山の層　白・黄色粒を多く含む
9　褐色土　多くのローム粒を含む(土間の床面)

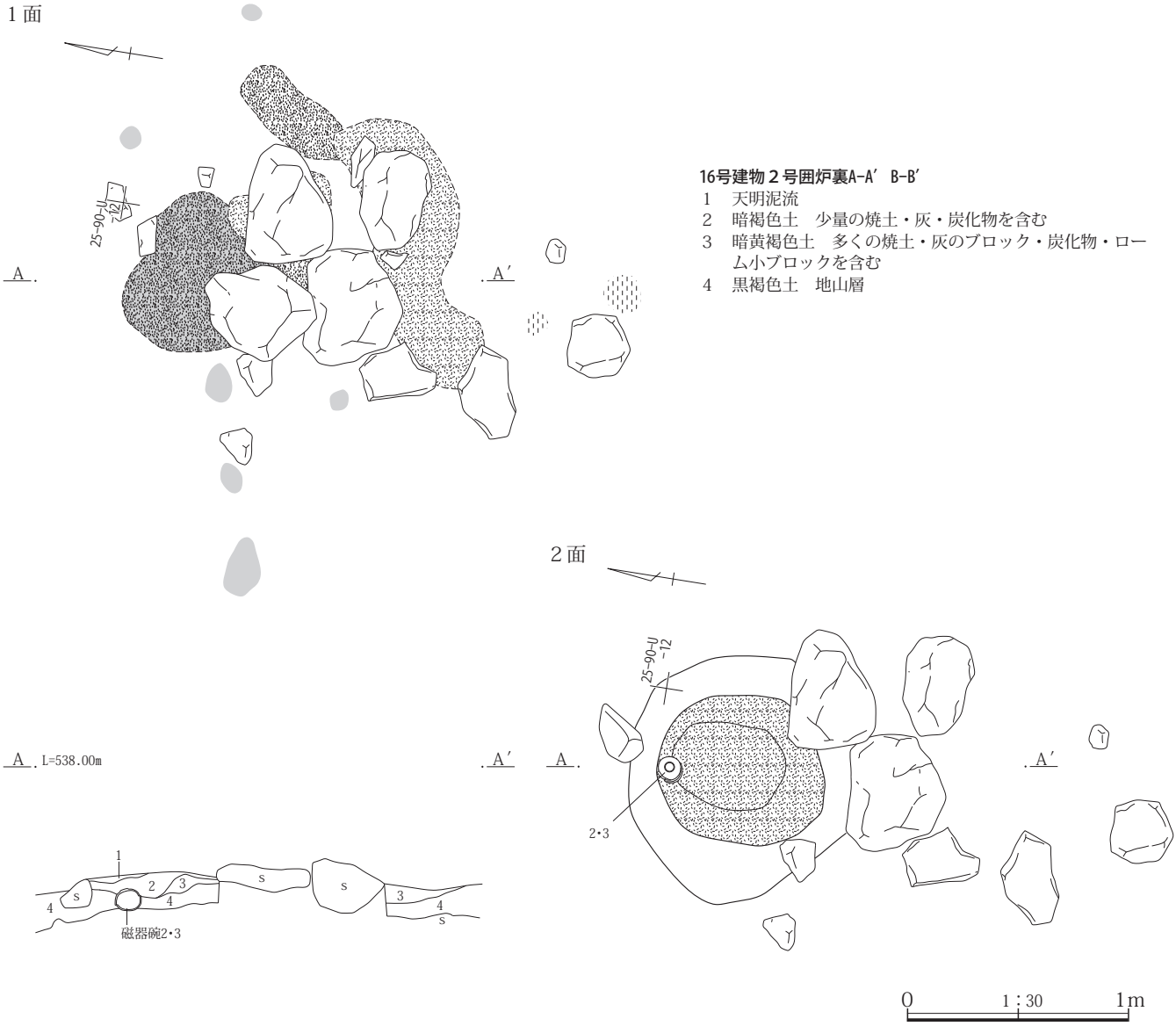






0　1:30　1m

第43図　５区３号屋敷　16号建物１号囲炉裏



第44図　５区３号屋敷　16号建物２号囲炉裏

た灰層等が確認された。囲炉裏を造る段階で、掘り込まれた囲炉裏面にローム等を持ち込み造られていたようである。ロームは床面にも敷かれていた。

（３）２号囲炉裏（第44図、PL.35・36）

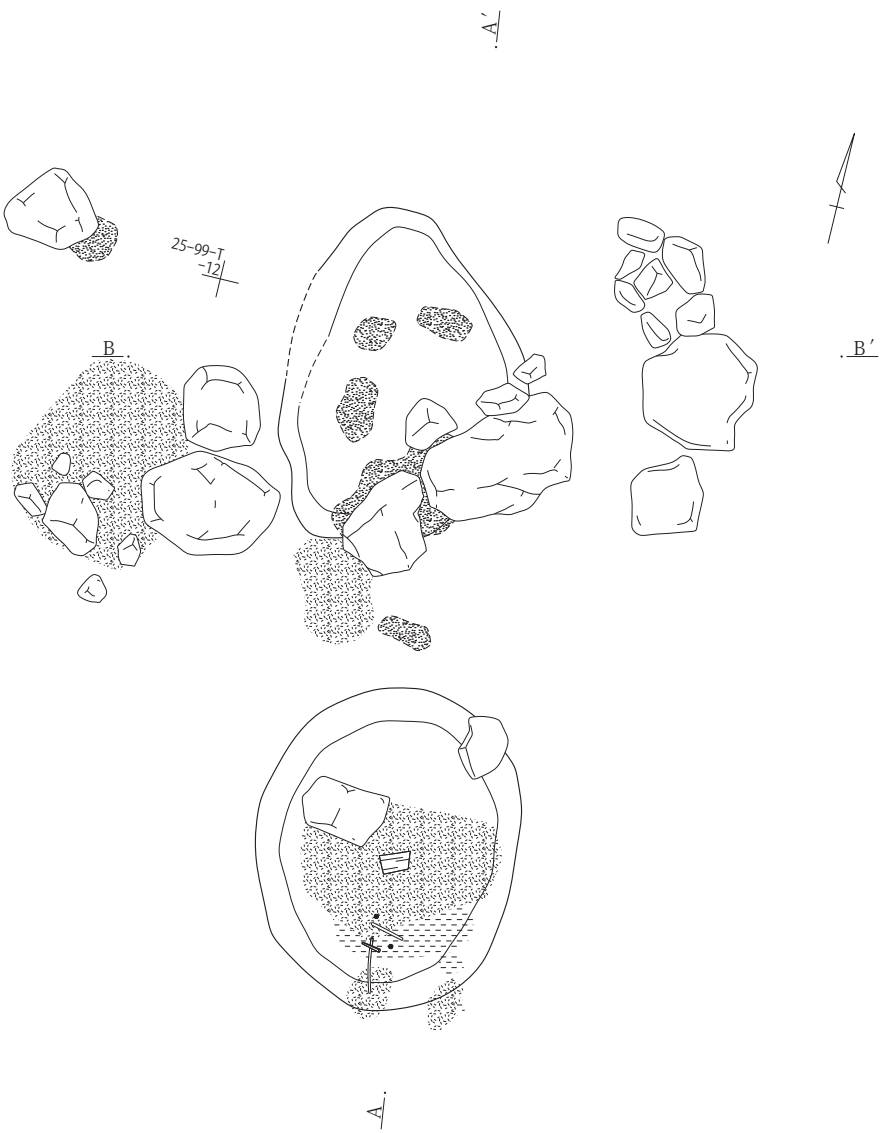
【位置・検出状況】板間２の床下部分に約1.5m四方の範囲に、直径40㎝前後の石が４個あり、周りに焼土・粘土・灰等が確認され、調査担当は２号囲炉裏として調査した。しかし囲炉裏としての範囲は不明であり、残された石も少なく、方形に配置されていない。焼土や灰の存在から、一時期囲炉裏や炉との目的で使用されたかもしれないが、囲炉裏としては疑問である。２号囲炉裏ではないと思われる。

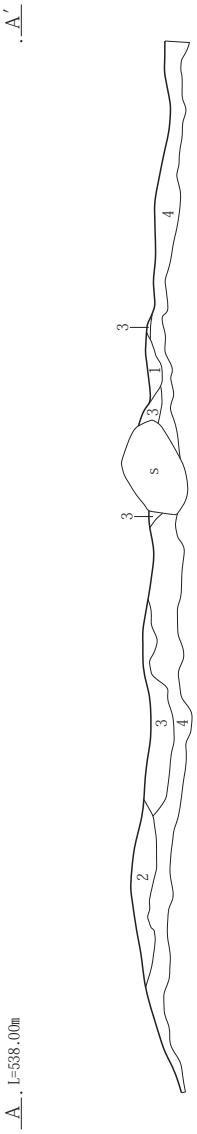
（４）３号囲炉裏（第45図、PL.36）

【位置・検出状況】板間３の床下部分に約３m四方の範囲に、直径30～50㎝前後の石が散乱するように存在し、周辺に粘土・灰・炭等が出土した。調査担当は３号囲炉裏として調査した。しかし囲炉裏としての範囲は不明であり、残された石も少なく、方形に配置されていない。焼土や灰の存在から、一時期囲炉裏や炉との目的で使用されたかもしれないが、囲炉裏としては疑問である。囲炉裏ではないと思われる。

（５）唐臼（第47・48図、PL.36・37）

【概要・規模・所見】屋敷出入口右側（東側）の土間部分に唐臼が２個設置されていた。出入口左側（西側）は馬屋である。唐臼は多くの屋敷で設置されており、主屋には竈・囲炉裏とともに基本的な施設である。これまで東宮



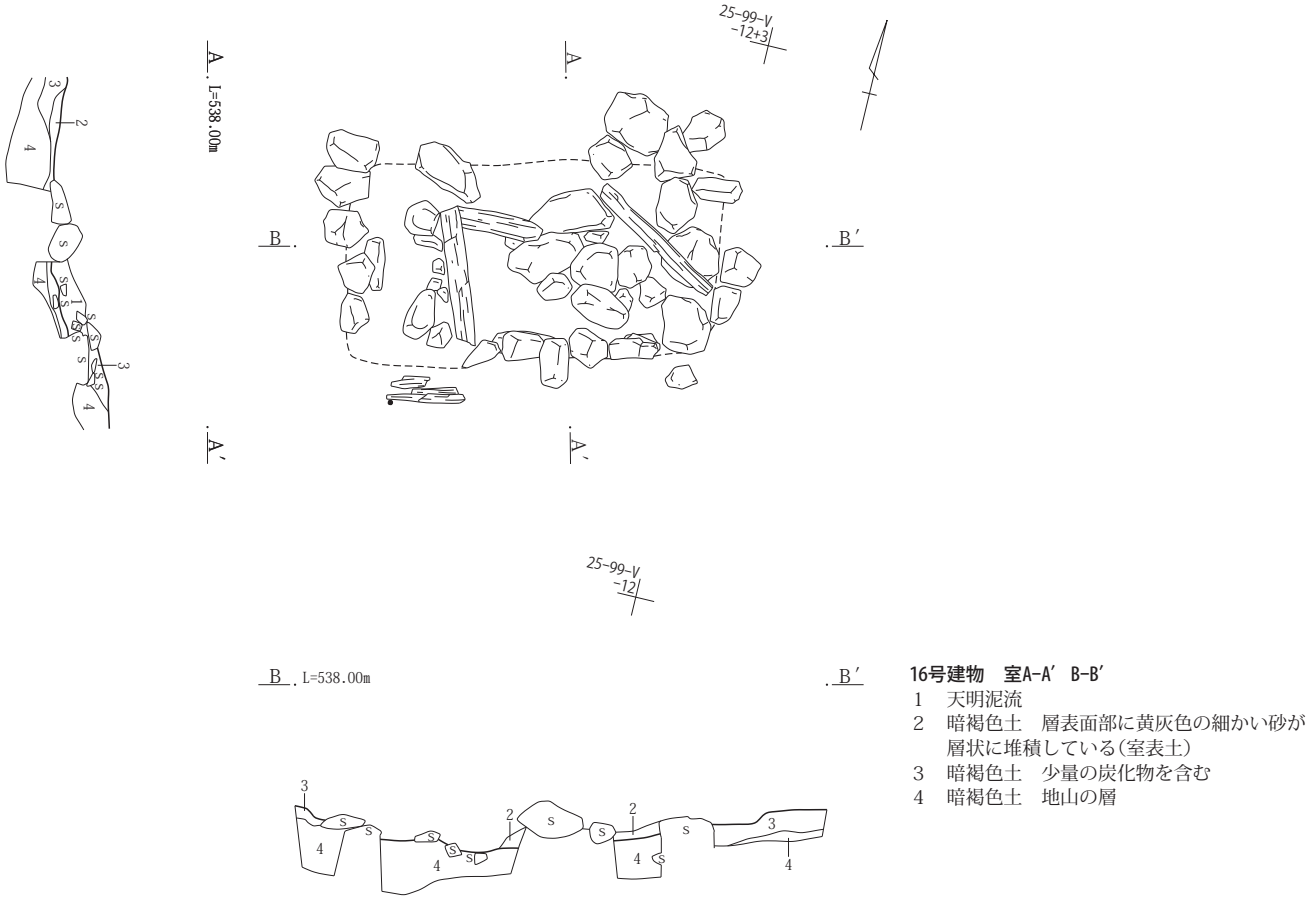


16号建物３号囲炉裏A-A′ B-B′

1　天明泥流
2　暗褐色土　多くの黄褐色粘土と炭の小破片と炭の粒子を含む
3　暗黄褐色土　粒子の密な層　灰を主とした層と思われる
4　暗褐色土　地山の層

0　1：30　1m

第45図　５区３号屋敷　16号建物３号囲炉裏



第46図　５区３号屋敷　16号建物室

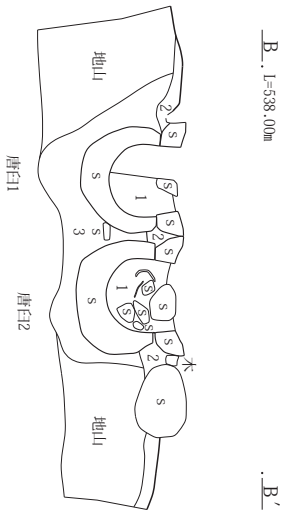
遺跡や西宮遺跡等で調査してきた12軒の建物で、唐臼が据えられた状態で残っていた。他の主屋でも唐臼が据えられた状態で調査されているが、東宮遺跡や西宮遺跡では、発掘段階では石製の唐臼が掘り出されて残っていなかった主屋も多い。主屋で、出入口部分に唐臼が造られていた建物は、東宮遺跡１・13号建物と石川原遺跡の16号建物だけであり、他の建物では全て竈に近い土間部分に設置されていた。また２個以上の複数の唐臼が設置されていた建物は、東宮遺跡１号建物だけである。その建物でも１個は出入口部分にあるが、他の１個は裏口の下屋部分であった。裏口の唐臼は支脚があるが、出入口近くの唐臼は支脚がなかった。このような調査例から、この16号建物で２個の唐臼が隣り合わせに同時に設置され、おそらく同時に使われていた初めての例となる。

石製の臼は埋められており、口縁部が土間上に10㎝前後高く出ている調査例と、口縁部が土間面より10㎝程低く埋められ、口縁部の上に石・ローム・木材等を用いて、マンホールの蓋が外されたような状態で唐臼上部を覆っている調査例がある。16号建物の唐臼は厚さ約12㎝の方形で、平らな石(１石ではなく数個の石を用いている)の中央部をくり抜いて、唐臼を囲むように唐臼の上に置かれていた。石臼を囲んでいる石の平面の大きさは約60㎝四方である。２個の唐臼の上に置かれた範囲は、南北12㎝、東西60㎝である。この平石を囲むように、木製の板材が南西東側を囲んでいた。北側に痕跡は残っていたが、材は残っていなかった。

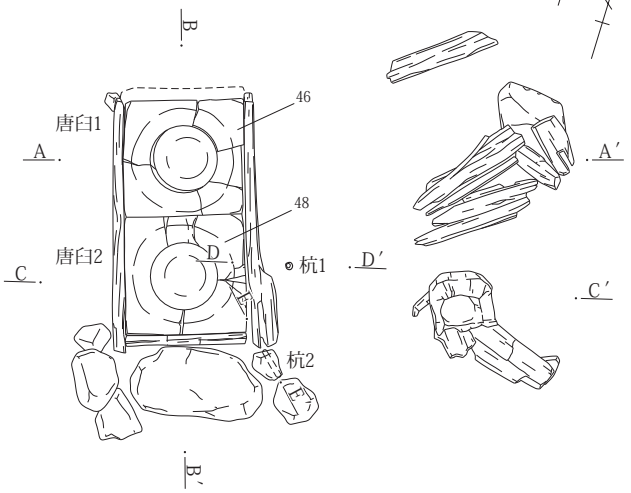
多くの例では、唐臼から1.3m前後離れた場所に、杵を支える支脚穴が掘られている。16号建物の２個の唐臼も東に約1.3m離れた所に、支脚および支脚を埋めたであろう穴が確認された。杵は、大きな横木と共に残っていなかった。埋められていた支脚は、直径30㎝、長さ90㎝程あり、多くの部分が地中に埋められていた。地

16号建物　唐臼A-A′ B-B′ C-C′

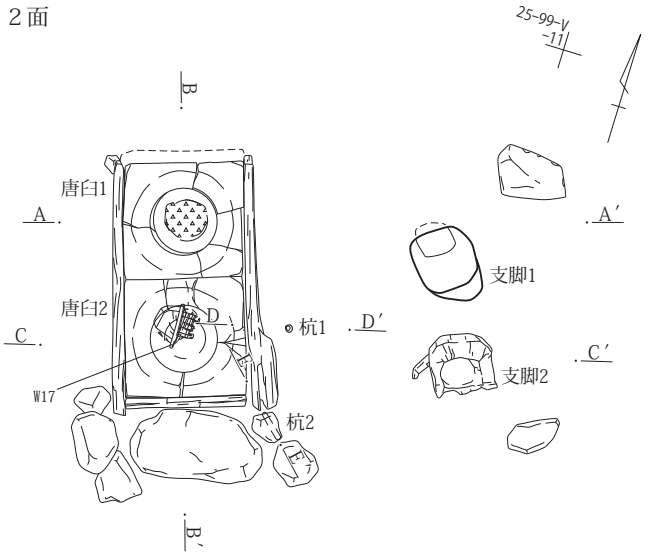
1　天明泥流堆積物
2　黄褐色土　若干の礫を含むローム質土、締まっており、下部に鉄分凝集
3　黒褐色土　多量の礫と黒色土、黄色粒の混土、人為的埋土
4　黒色土　礫を多く含む
5　黒褐色土　地山黄褐色土砂礫多く含む

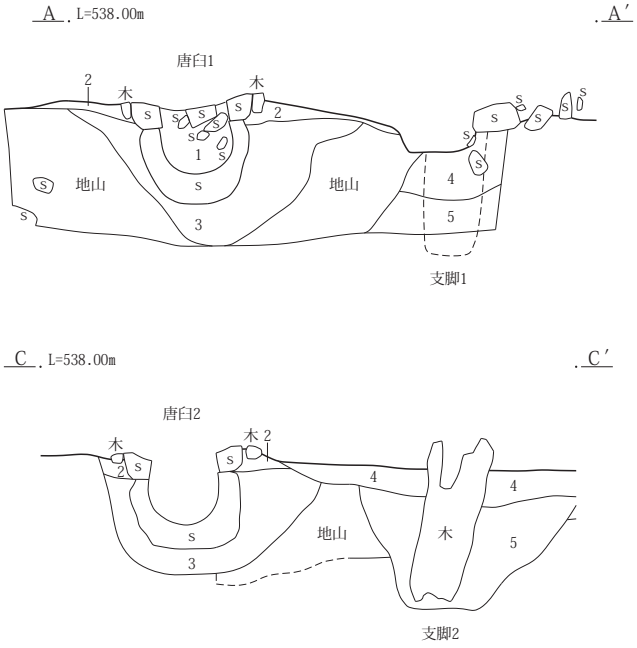


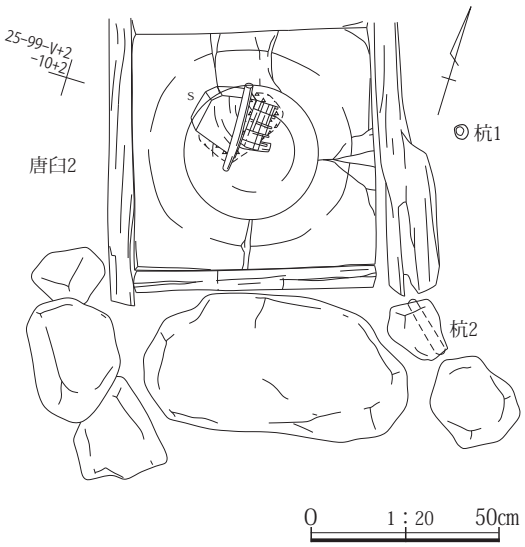
１面

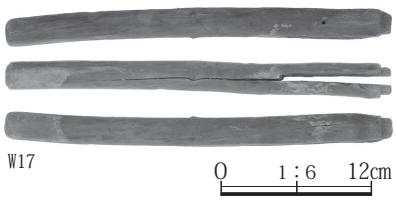


２面



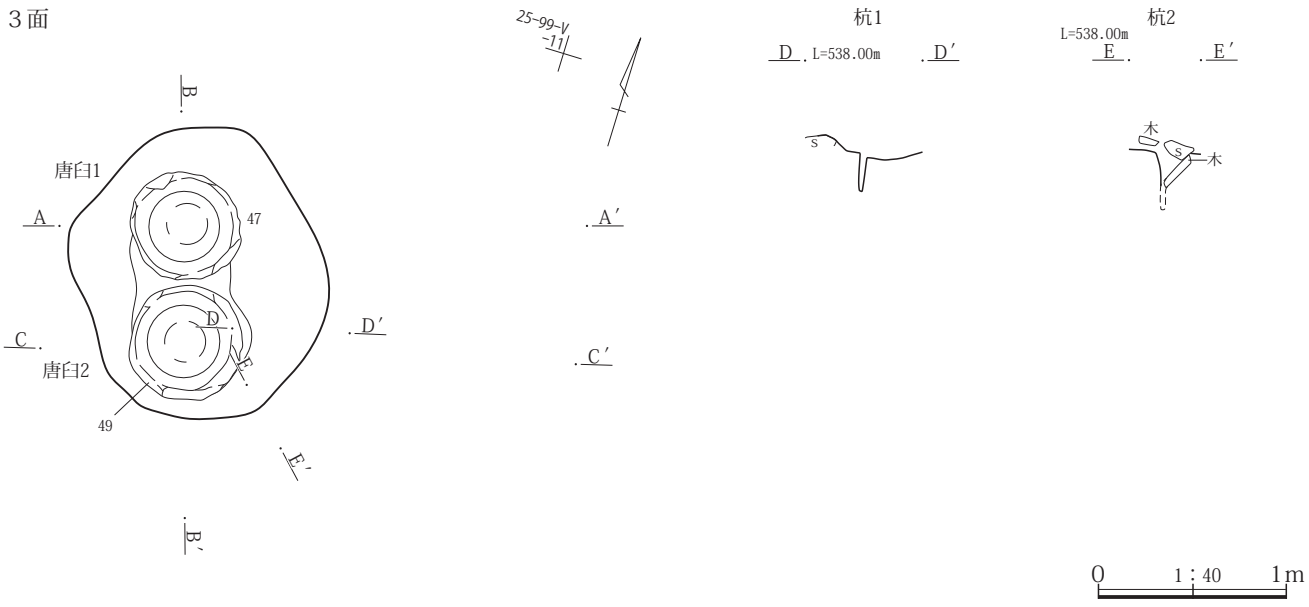






0　1：40　1m

第47図　５区３号屋敷　16号建物唐臼（１）



第48図　５区３号屋敷　16号建物唐臼（２）

上に出ていた部分は15㎝程であり、それより上の部分は残っていなかった。地上に出ていた材の中央部に加工痕が残っており、おそらく杵の横木部分が、シーソーのように上下するための加工痕の一部と思われる。地中に埋められた部分は丸材で、地上部分は一部方形に加工されていたが、残りは悪かった。

【規模・形状】唐臼は、口唇部がほぼ水平に成形されており、この上に平らな石が先述したように乗せられていた。南北方向に近接（５㎝以内）して並ぶ唐臼は、２個ともほぼ同じ大きさである。外形約55㎝、口径約37㎝、外面高約40㎝、内面高約24㎝、口縁部の厚さ約12㎝であった。上に載せられた石の高さ約12㎝を加えると、内面高は約36㎝となる。

唐臼２の底面に、箕の一部と鎌と鎌の木製の柄および、植物の一部が残っていた。穀類はなかった。

（６）室（第46図、PL. 37）

【位置・検出状況】１号囲炉裏の北側、竈の北東側約１ｍ離れた所に、土間面を20㎝程掘り込み、石を２段前後長方形に組んだ遺構が確認された。内部には多くの石の他に、長さ50～80㎝、幅10㎝前後の角材が３本落ち込んでいた。内部の石は長方形に積まれていた石が落ちたものと思われる。この遺構は室と思われる。

【規模・形状・構造】石組の外側で東西200㎝、南北110㎝、石組の内側で東西150㎝、南北70㎝、深さ22㎝である。室を囲む石は長さ20～30㎝、厚さ15㎝前後の石が使われていた。

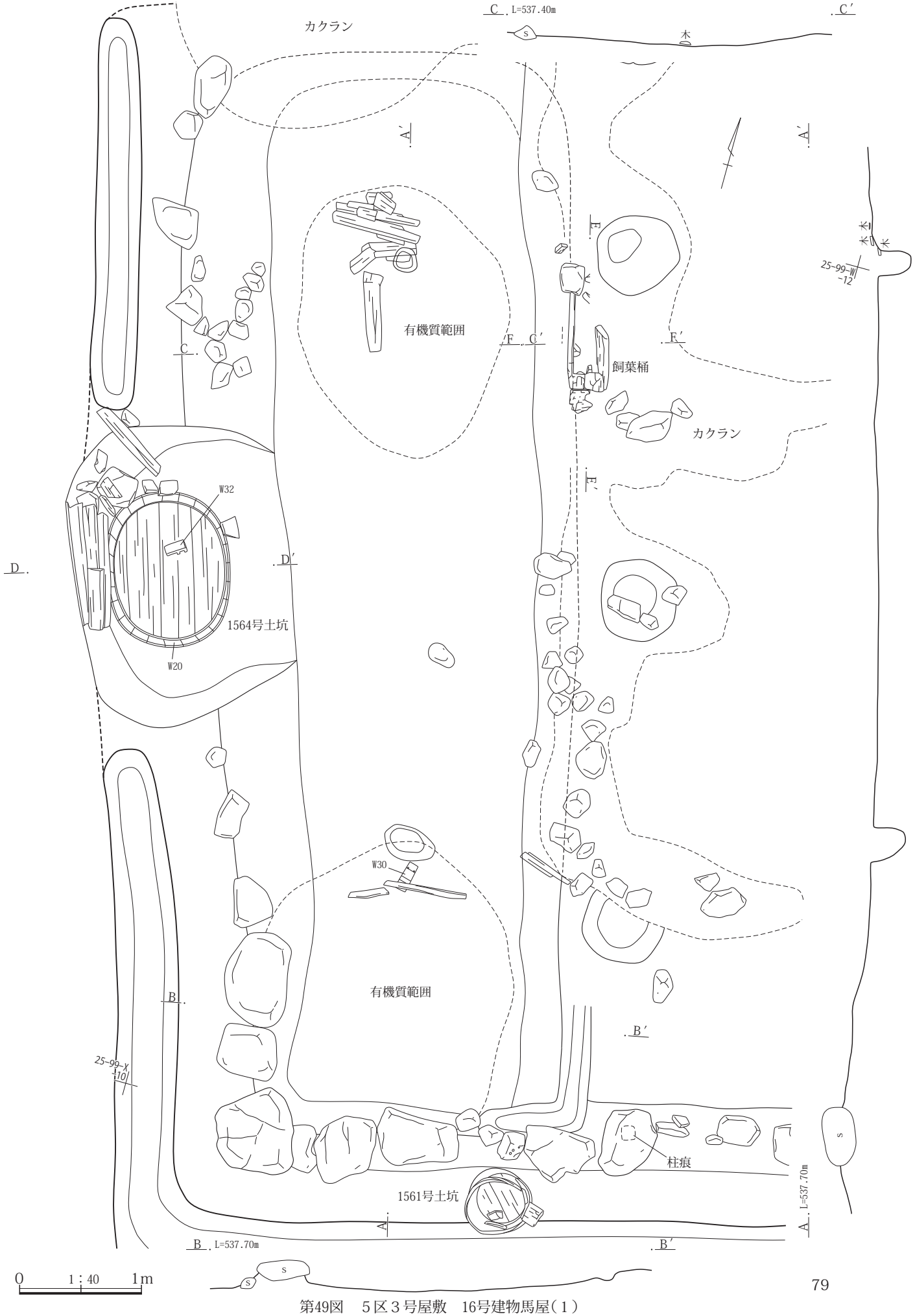
（７）馬屋（第49・50図、PL. 37・38）

【位置・概要】出入口左側（西側）の土間面全体に馬屋が造られていた。馬屋部分の土間面は竈手前の土間面より20～30㎝程低くなっている。馬屋の南北の２か所に、馬糞や植物の葉や茎と思われる有機質が約1.5ｍ×2ｍの範囲で残っていた。２か所は南北に分かれており、中間に馬１頭分の空間があり、３頭の馬を収容できる馬屋であったものと思われる。北側の馬屋の出入口に近い場所に、飼葉桶が１個土間に埋まった状態で出土した。他の２か所の馬屋部分に飼葉桶はなかった。馬屋の中央部外側に屎尿等を集めたであろう大きな楕円形の桶（馬屋桶）が埋まっていた。また、馬屋南側の屋敷下屋部分に小さな桶が埋まっていた。

【規模・形状・構造】土間西端全体が馬屋となっている。３頭分の馬屋である。東西方向約2.7ｍ、南北方向約９ｍであり、１棟分の広さは東西2.7ｍ、南北約３ｍである。馬屋で多くある広さ９尺四方（2.7ｍ四方）に近いが、少し広い。３頭分の馬屋を区画するような溝や、各馬屋を区画する柱を建てたであろう柱穴等は、確認できなかった。明瞭な区画はなかったのであろうか。土間と馬屋との境部分は、20～30㎝程の落差があり、その部分は段差となっており、馬屋と土間が区別されている。

（８）飼葉桶（第49・50図、PL. 38）

【位置・概要】北側の馬屋の出入口部分に飼葉桶が１個出



第49図　5区3号屋敷　16号建物馬屋（1）

土した。馬屋の土間面は標高537.2m前後で、建物土間面標高537.50mより30㎝前後低くなっている。飼葉桶は土間面から馬屋土間面に向かって低くなる傾斜面に土間に面した側面が埋まった状態で出土した。飼葉桶の底部の高さは標高537.32mで馬屋土間面より12㎝高く、土間面より18㎝程低い。一部埋まった状態で出土したが、馬屋土間面より飼葉桶底面は高い位置にあるので、置かれた状態で使用していたものではないだろうか。

【規模・構造】飼葉桶は半分以上残っていなかった。外径80㎝×38㎝内径64㎝×18㎝である。高さは残っている側壁部分の高さで12㎝である。

【所見】この飼葉桶は使用段階で埋まっており、土間面に置かれて使われていなかった。このように埋まっていた飼葉桶は21号建物で確認されている。また飼葉桶が馬屋の出入口付近に置かれていた例として、東宮１号建物で裏返した状態で置かれていた。

飼葉桶と呼ばれる大きな木を刳り抜いた容器は、石川原遺跡では９個出土している。18号建物入口に置かれているものもあり、飼葉桶のほかに水等を入れる容器として使われたものも多いのではないだろうか。27号建物では馬屋は１頭分の大きさであるが、飼葉桶と呼ばれている容器は５個出土している。

（９）馬屋埋設桶（1564号土坑）

【位置・概要】３頭分の馬屋のほぼ中央部で、馬屋西側に埋められていた。桶の一部が下屋の外側に位置する。建物のまわりの雨落溝がその部分で繋がっていないことから雨水等が入らないために、簡単な屋根が造られていたと思われる。桶を囲む建材の一部と思われる板が桶の外側に残っている。屋根だけでなく板等により桶は囲まれていたものと思われる。

【規模・構造】桶は楕円形を呈し、底面の長径120㎝、短径90㎝、高さ現状で80㎝である。タガが４本残っていた。タガの位置は底板部分およびその上６・17・33㎝で、底板は３枚である。掘り込まれた便槽のまわりは、地山に近い土で埋められており、ローム等を持ち込むことはなかった。

【所見】これまでの調査で２頭以上の馬を飼うことのできる馬小屋を持つ建物は、東宮遺跡９号建物・西宮遺跡20号建物・石川原遺跡30号建物等であり３頭以上の馬を飼うことのできる馬小屋を持つ建物は、東宮遺跡１号建物・石川原遺跡９号建物・16号建物の３棟だけである。いずれも広い敷地で大きな主屋があり蔵がある。馬屋の外側に屎尿等を溜める桶が１～２個埋められている。これらの建物は村の中心的な役割を果たした建物であると思われる。

（10）1561号土坑（埋設桶）

【位置・概要】土間入口左側の下屋部分に小さな楕円形の埋設桶が埋まっていた。土間出入口近くの埋設桶は、板間に近い土間の南側にもあり、調査担当者は便所として調査した。このように、出入口に近いところに２個埋設桶がある建物は、この16号建物と９号建物で確認されている。両屋敷とも蔵を持つ大きな建物である。埋設桶は埋められていた桶の底面から20㎝程浮いた位置で、さらに別の桶が埋まっていた。下の桶と上の桶の間や、上の桶上面は泥流で埋まっていた。便所と思われる。桶の底から肥前磁器の仏飯器脚部と、直径10㎝の曲物の底板が出土している。

【規模・構造】下に埋まっていた桶は楕円形で、底部の大きさは、長径71㎝、短径59㎝、側板は上部が腐って残っていなかった、現状での高さは55㎝である。側板の外側にタガの痕跡が２本残っていた。その桶の中に埋まっていた桶の底板の幅は40㎝である。側板の高さは48㎝あり、口縁部は地上面より上に出ていた。

桶の中になぜ別の桶が埋まっていたのかは不明である。

（11）厠

【位置・概要】土間入口左側の下屋の下1561号土坑の東約７mの位置に、大きな楕円形の桶が埋められていた。調査担当は便所として調査した。下屋の下に位置し南側に雨落溝があるので、雨水等は入らない。1561号土坑も便所であると思われるので、別の用途の便所であろうか。建材の一部と思われる板が桶の外側に残っている。板等により桶は囲まれていたものと思われる。

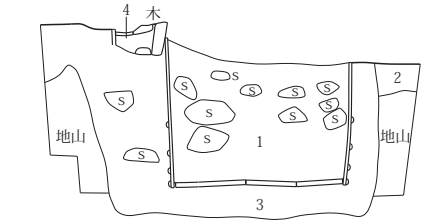
桶の内部から建材の一部と思われる木材が出土した。

【規模・構造】底板の長径80㎝、短径67㎝、側板の高さ52㎝である。側板の外側にタガの痕跡が２本残っていた。

第３項　中庭の集積火山灰

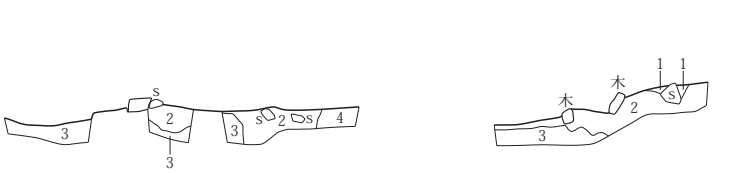
【位置・概要・規模】16号建物の前庭に、堆積したAs-A軽石を、小さな山のように集めた遺構である。前庭は東

1564号土坑



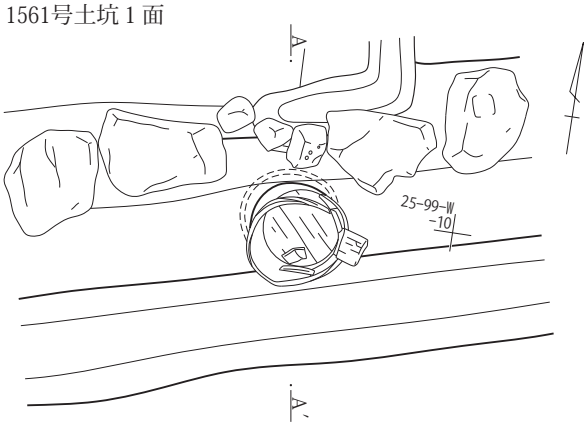
16号建物1564号土坑（馬屋桶）
1　天明泥流堆積物
2　黒褐色土　地山礫、砂礫度多く含む
3　黒色土　黒味強く、小礫多く含みやや締りあり
4　黒褐色土　砂利を多く含む

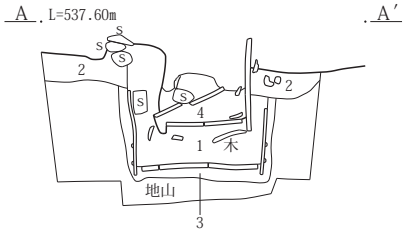
飼葉桶



16号建物　飼葉桶E-E′F-F′
1　天明泥流堆積物
2　暗褐色土　炭化物・褐色粒子が目立つ　小礫目立つ　ロームブロックが少し見られる
3　暗褐色土　橙・黄・褐色粒子が目立つ　酸化鉄の付着
4　暗褐色土　炭化物が目立つ　ローム（または粘土）が小さなブロック状になって多く混入

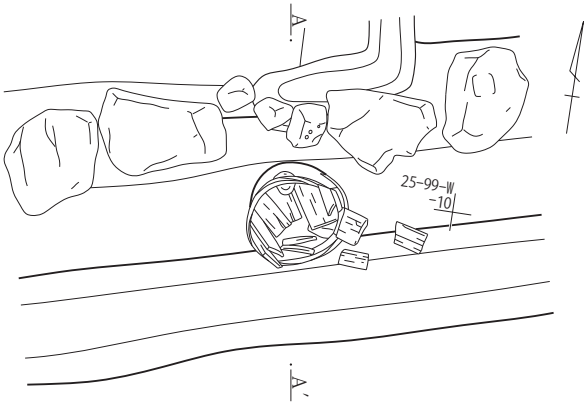
1561号土坑１面



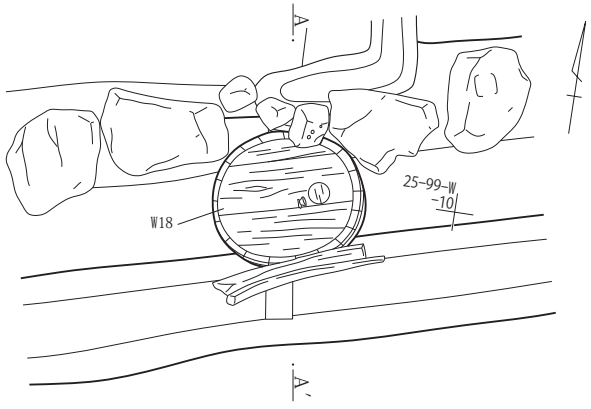


16号建物1561号土坑（便槽）
1　黄褐色土　黄色粘質土ローム
2　暗黒褐色土　黒色土主体で若干の礫ローム粒含む、やや粘性あり
3　黒褐色土　小礫含みやや粗粒、粘性は少ない
4　黒褐色土　小礫多く含みやや粗粒、粘性は少ない

２面

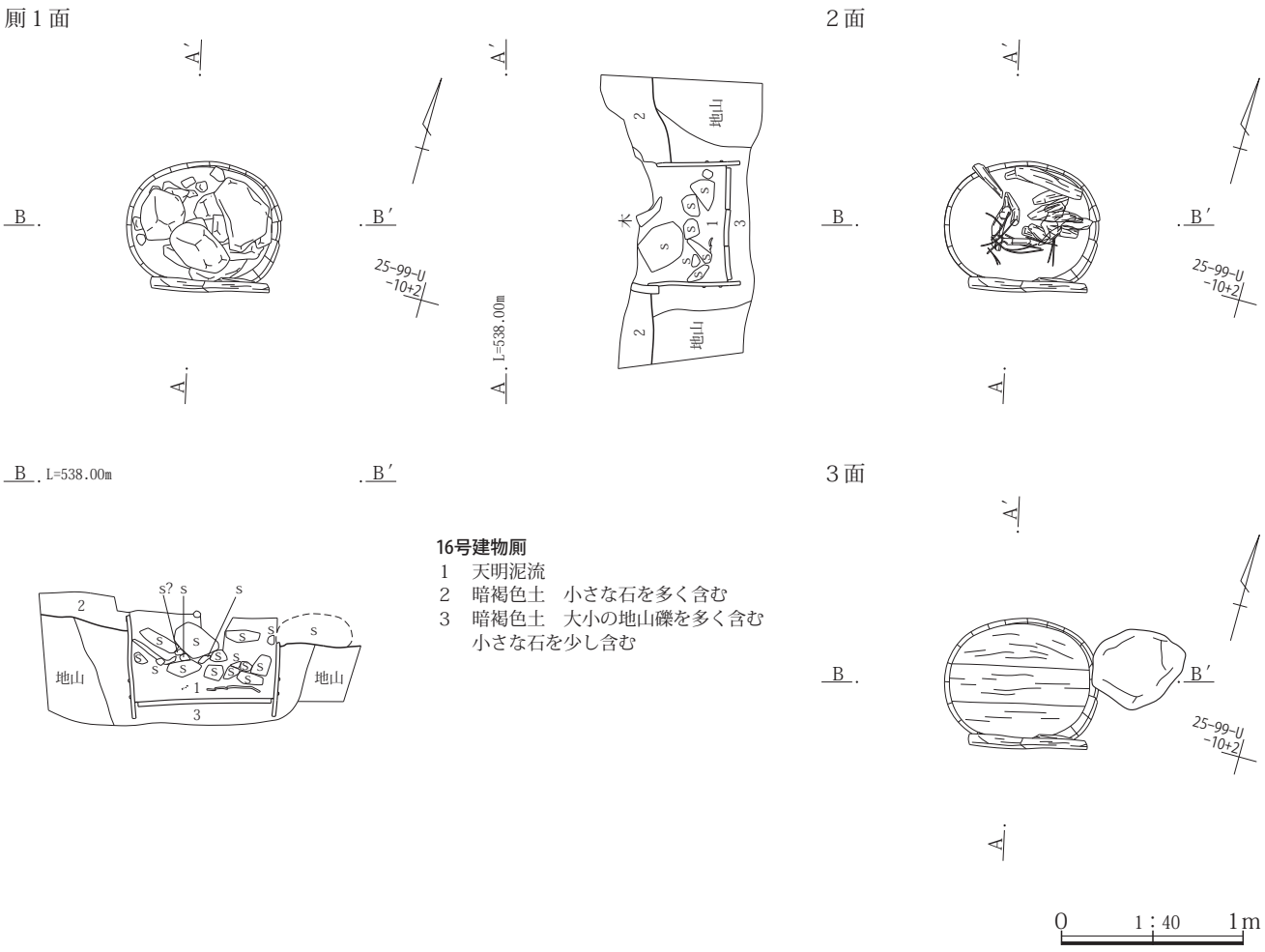


３面



0　1：40　1m

第50図　５区３号屋敷　16号建物馬屋（２）・1561号土坑（便槽）



第51図　５区３号屋敷　16号建物厠

西約24.4m、南北約8.5mの広さがあり、As-A軽石は中庭の中央付近に３か所、17号建物(蔵)出入り左側に１か所の計４か所で確認されている。

東側から軽石Ａ～軽石Ｄと呼称した。軽石Ａは薪場１の北側、軽石Ａは中庭中央付近、軽石Ｃは17号建物北東部石垣北側、軽石Ｄは16号建出入口と17号建物との中間付近の中庭にある。集められた範囲や規模は同じではないが、幅1.5m、高さ20㎝前後の円錐形である。断面観察すると、軽石だけが集められている小さな円錐形である軽石Ｃ・軽石Ｄと、集められた軽石の上に中庭の土表が、薄く盛られているやや大きな円錐形の軽石Ａ・軽石Ｂがある。

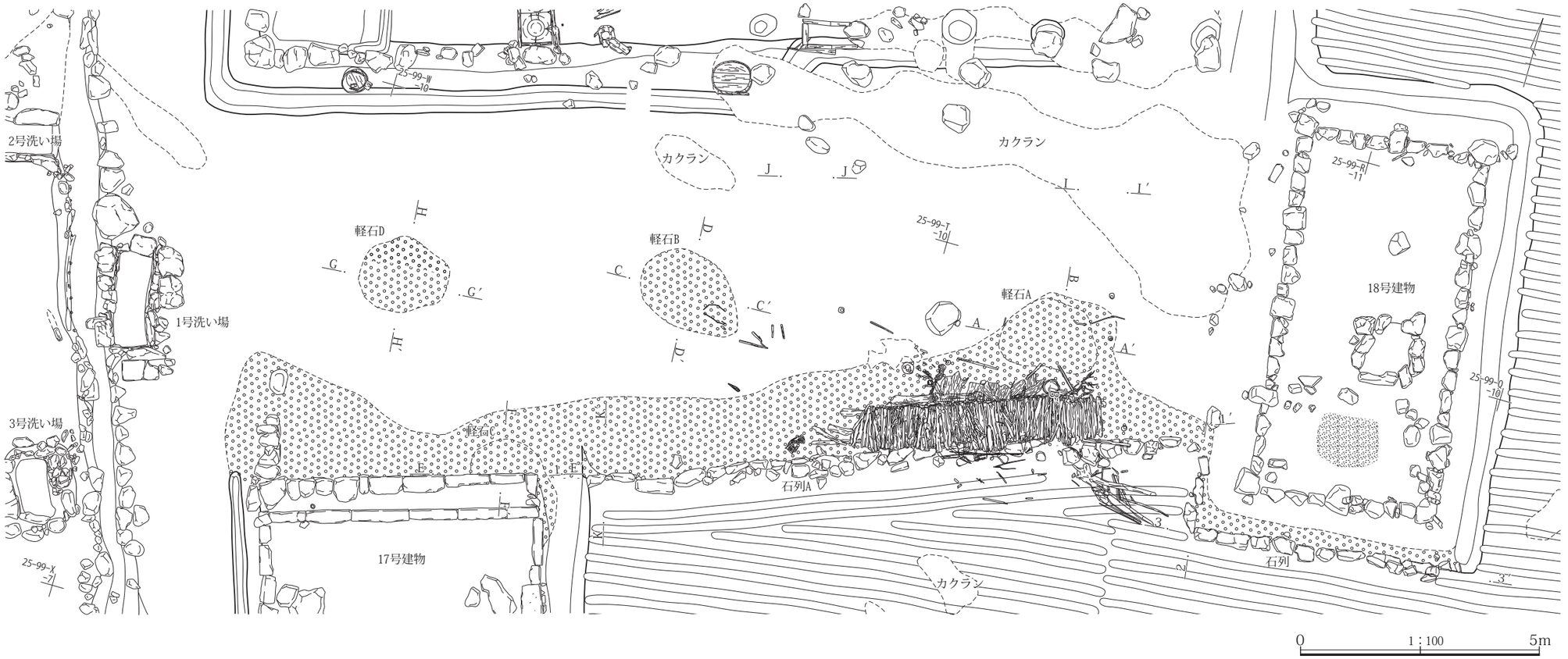
第４項　薪場１(第54・55図、PL.40～42)

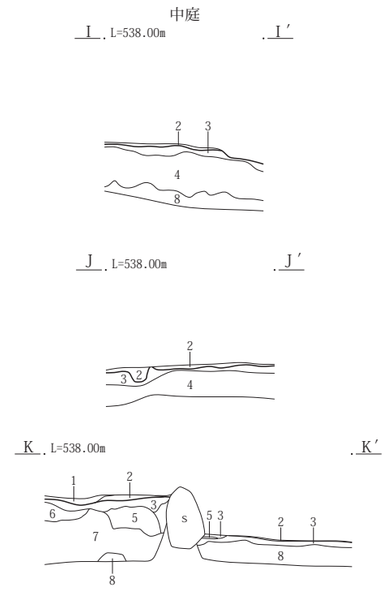
【位置・概要・規模】16号建物前庭の南端、畑との境に積まれていた石列の北側の石列に沿って、東西方向に大量の薪が積まれていた。また18号建物の出入口北側にも建物に接して、多くの薪等が積まれていた。薪は直径15㎝前後、長さ90ｃｍ前後の木の幹を４分割に割った割材と、木の脇枝である太さ６～８㎝の丸材を、長さ90㎝前後に切りそろえた材も含めていた。

薪場の上部に屋根らしき材は残っていなかったが、薪場の上に薪が積まれている東西方向に竹が出土している。また薪の北側側面には、木の皮あるいは、植物の茎等が厚く堆積した状態で残っていたので、薪を覆う簡単な覆い等の存在が考えられる。東宮遺跡１号屋敷の薪場で見られたような細い柱を建て、屋根を掛けたと思われる小屋の柱穴や柱材は存在していない。

【規模・構造】薪場は、東西6.2m、南北１ｍの範囲を中心に造られていた。薪が直接地面に接すると腐るので、２本のレールのように材木を土台として並べ、その上に薪を積み上げている。土台の材木は丸材の一部を削って加工している長さ１～３ｍと様々で、太さは５～10㎝が多い。これらの材木を長さ6.2mとするために４本前後

第52図　5区3号屋敷　16号建物遺物出土状況

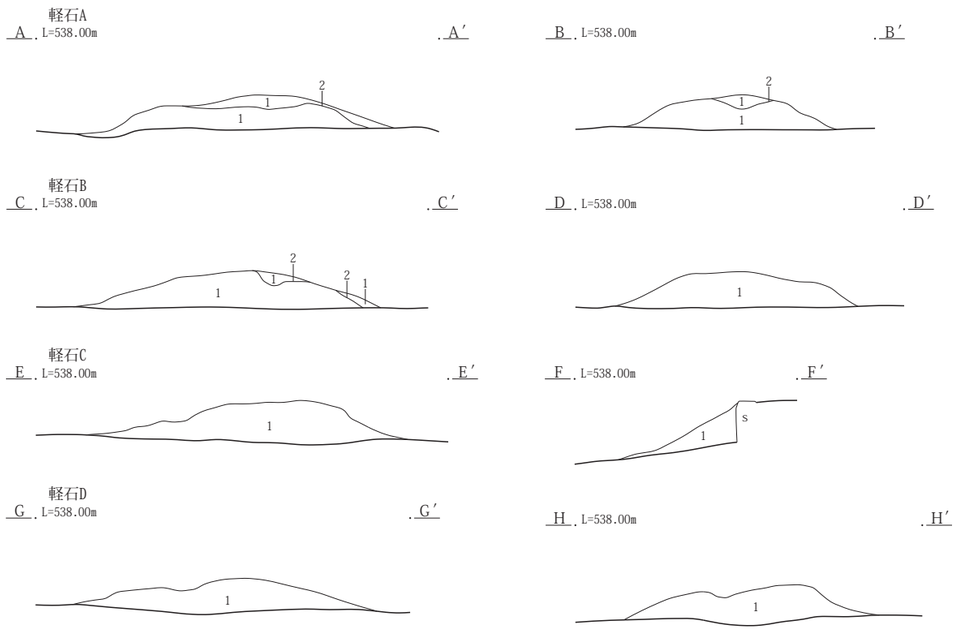


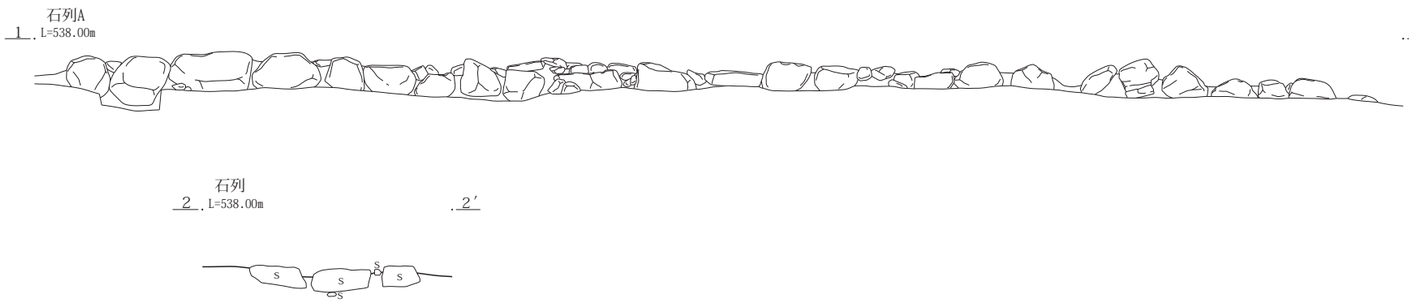


16号建物中庭 I-I′～K-K′

1　天明泥流
2　As-A軽石
3　暗褐色土　橙・白・黄色粒子多い
4　暗褐色土　橙色粒を少し含む
5　暗褐色土　白色粒を少し含む、鉄分付着
6　暗褐色土　大量の礫を含む
7　黄褐色ローム
8　黄色砂礫　礫・軽石・黄色砂を含む

0 1：40 1m

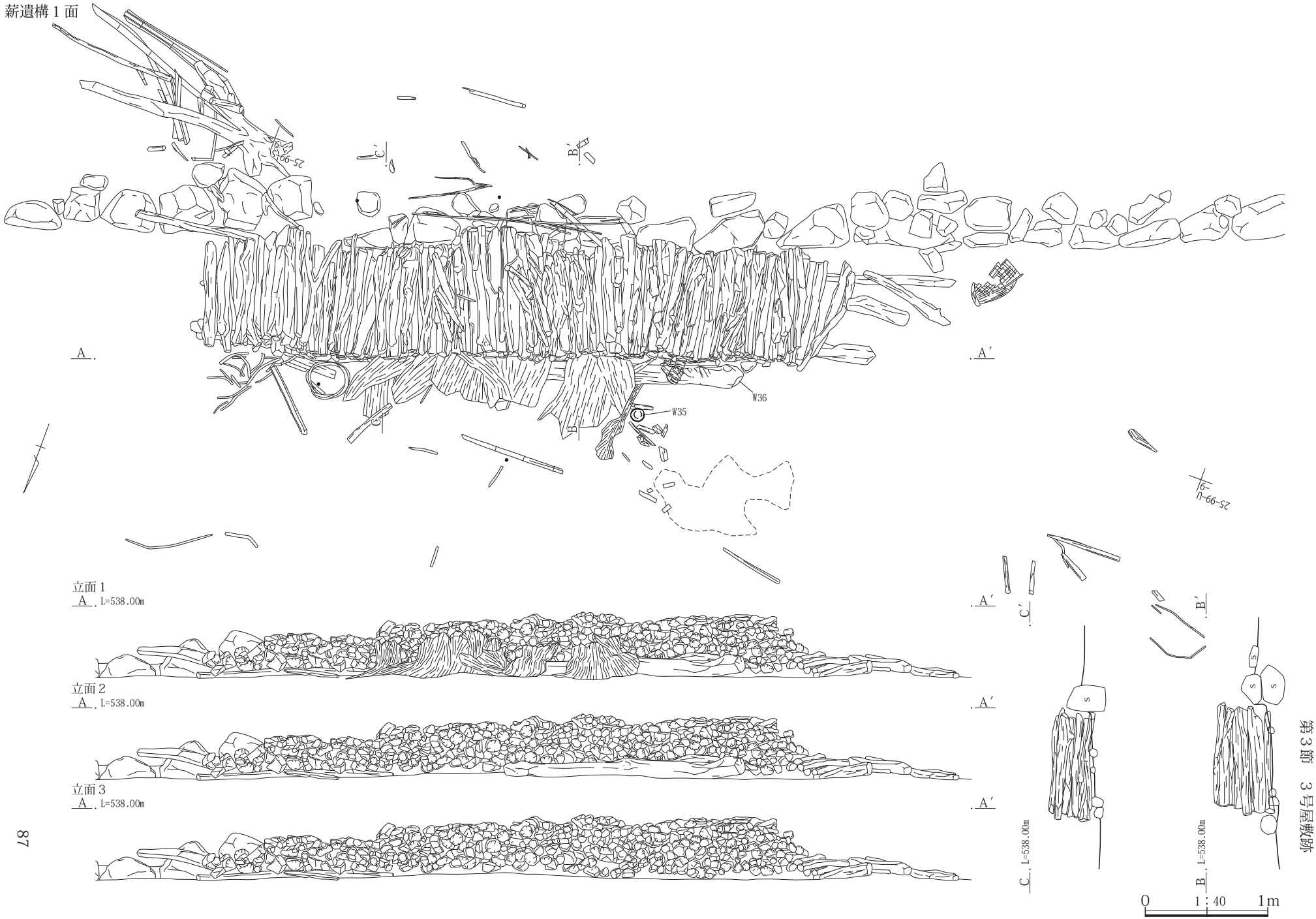




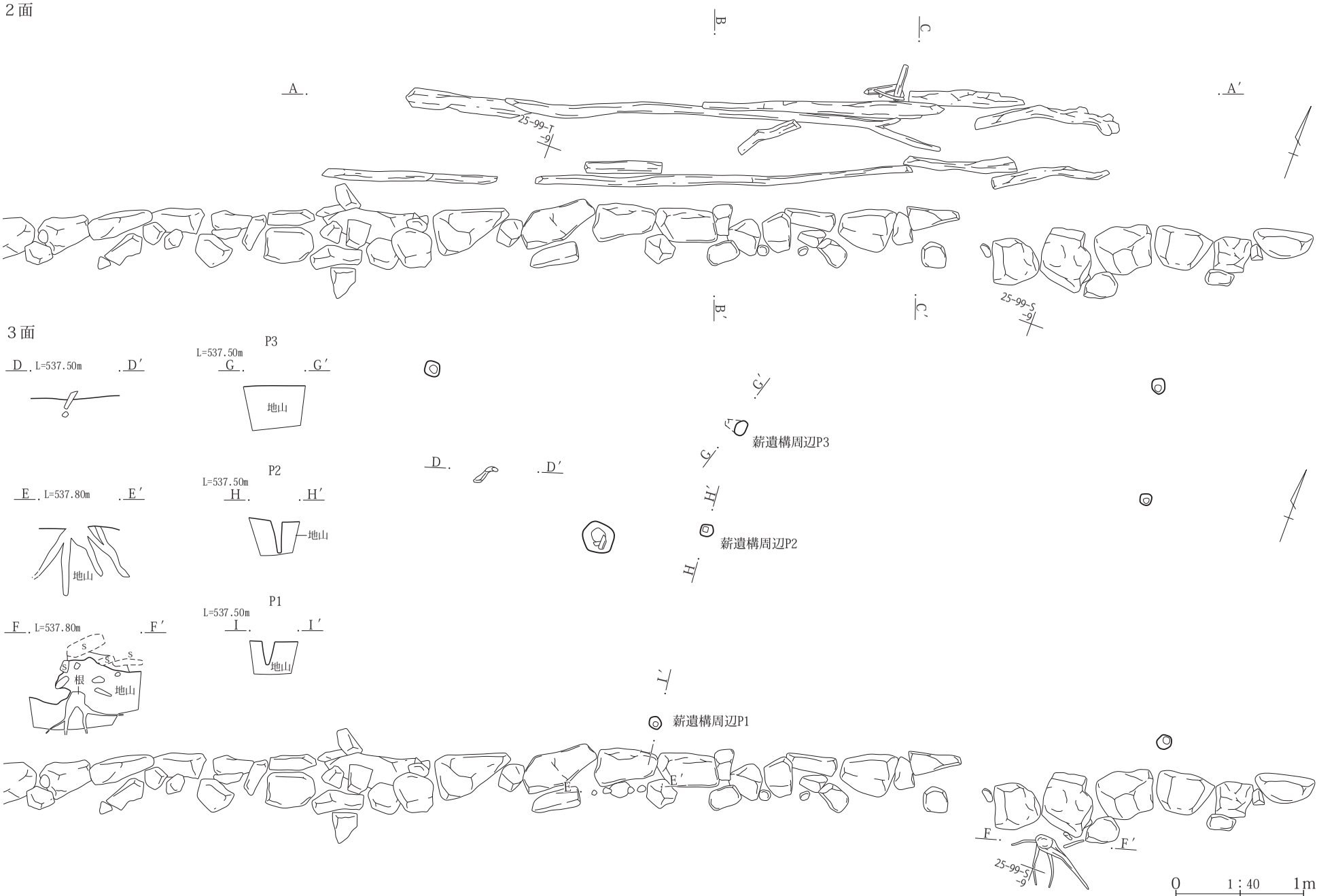
0 1：40 1m

0 1：60 2m

第53図　５区３号屋敷　庭全体図・断面・石列



第54図　５区３号屋敷　薪遺構（１）



第55図　5区3号屋敷　薪遺構（2）

並べている。地形的に北側が少し低くなっているので、水平を確保するために北側の材木は、太く頑丈な材木を選んで使用している。２本の土台の材木は、南側の石垣から25㎝と40㎝離れて並べられていた。薪の長さは90㎝前後であるので、土台の両側に20㎝前後出る状態で積まれていた。積まれていた薪の高さは、30～50㎝であり、16号建物に近い西側が少し高く積まれていた。薪は大部分(90％以上)が割材であり、密に積まれていた。

薪場の北側(前庭方向)に長さ1.9m、太さ15㎝前後の丸い材木が薪場に沿って東西方向に置かれていた。材木の西側約1/3の表面には、垂直方向の刃物の切り傷が大量にあり、その部分は削られ少し平らになっていた。おそらく薪を短く切ったときに使用した切台(材を切るための台であるとともに、刃物の歯を傷めないために使用する)と思われる。

薪場は一定の長さや太さに加工した薪を集めたものであり、薪として加工する場所ではない。周辺から切りくずや不揃いの材は出土していない。ここで刃物を使用する目的は、長さ90㎝前後の長い薪を切って短くすることであると思われる。この切台が置かれていた場所は、薪が使われ減って、薪場の下に敷かれていた土台が顔を出している、薪場の西端部分である。薪は西側から持ち去られ、次第に東側の薪を使用するようになる。使用される薪の場所とともに切台も東側に移動するのであろうか。

薪場から出土した観察可能な薪236本の樹種を同定した。その結果は第５章第１節で報告した。ここでは簡単に報告する。薪は大部分が割材であり、多くは４つに割られていた。割材・丸材とも樹皮は付いていた。長さは80～90㎝が多く、太さは割材が約8.5㎝で、丸材は直径約8.6㎝である。

樹種は82％がナラ類であり、ハンノキが14％であった。ナラ類の木を伐採し、燃料として確保していたものと思われる。

【所見】生活の中で燃料が必要である。しかし屋敷内にこのように大量に薪が積まれている調査例は、少ない。石川原遺跡ではこの２号屋敷だけであり、東宮遺跡では現在までに報告されている遺構は１号屋敷だけである。この燃料は太さ８～９㎝の割材を中心とし、長さ80～90㎝であり、大量に積まれて保管されていた。長さ50㎝前後の薪が、石川原遺跡３号屋敷18号建物の出入口部分で確認されている。積まれている量は多くない。３号屋敷で大量に出土した割材を中心とした薪は、ナラ類の一定の大きさの材が大部分であり、１本の木を４分割に割っているものが多い。丸材は１割以下と少ない。太い木を割って薪としており、日常の生活の中で、竈や囲炉裏で使用する燃料としての細い枝を中心とした材とは大きく異なっている。東宮遺跡１号屋敷では酒蔵があり、そこでの使用が考えられるが、この屋敷から出土した薪の用途は不明である。

薪の樹種はナラ類が８割以上であった。ナラ類は、遺跡周辺に現在でも最も大量に存在する。遺跡から出土した建築部材で使われている樹種は、ナラ類は基本的にない。土台と大引はクリ、柱・板・梁・根太はクリと松が多い。ナラ類が使われているのは農具の柄・下駄の歯等である。小さなナラ類の板は出土しているが、割って両側を削って板としており、鋸で薄く切った床板はないようである。薪として大部分を占めるナラ類は、当初から建築部材としてではなく、燃料や工具等に使用することを目的として、使用されていたのではないだろうか。

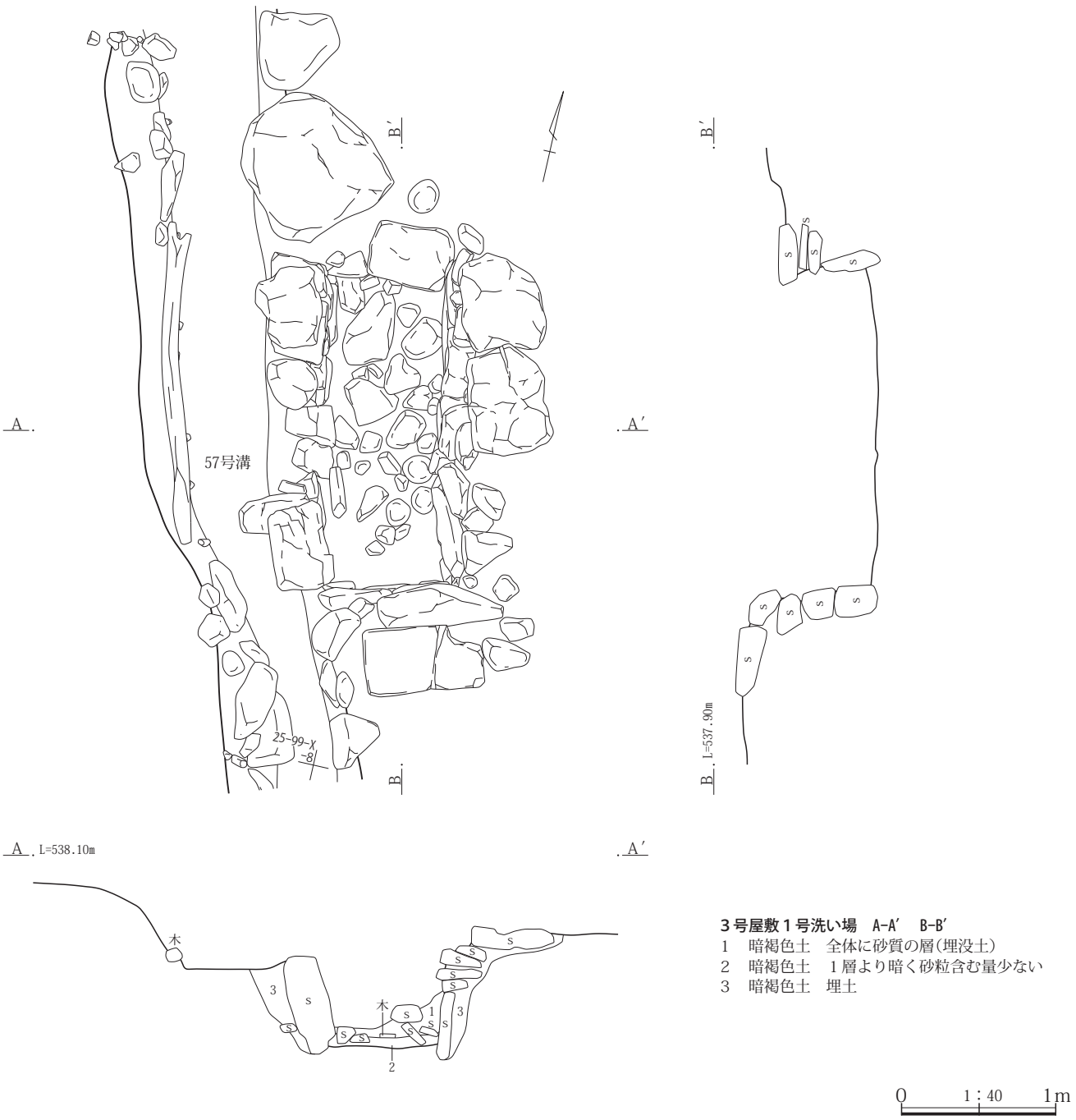
第５項　中庭の造成

２号屋敷は標高の高い南側の畑と低い北側の畑約22mの距離で、高低差が約50㎝ある。東西方向はほぼ平らである。そのような緩やかな傾斜地に造られている。前庭の造成を知るために南北にトレンチを入れて調査した。東西方向では、地山を中心とした土で、盛土はほとんど認められなかった。南北方向では、北側の16号建物付近で、石を含む量が少ない土が少し厚く盛られていた。16号建物部分を含めて少し盛土されたようである。16号建物の北側の土間と屋敷の北側にある畑との高低差は約25㎝ある。これに近い高さと思われる南側の畑と前庭との高低差は約20㎝あり、これに近い高さが切土であり、切土された畑と前庭との境部分には石を並べて、土砂の流入を防いでいる。切土により造成した中庭部分はほとんど盛土がない。

第６項　１号洗い場(旧57号溝１号洗い場)

(第56・57図、PL.42・43)

25-99-W・X-８グリッドに位置する。



第56図　５区３号屋敷　１号洗い場（１）

【概要・位置】生活用水を確保するために、ほとんどの屋敷には洗い場が造られている。３号屋敷では、庭の西に57号溝があり、その手前に溝と平行する南北方向に長い長方形の洗い場が造られていた。57号溝の西側には２個の洗い場（旧57号溝２号洗い場・11号屋敷、旧57号溝３号洗い場・14号屋敷）が近接して造られていた。１号洗い場と２・３号洗い場の距離は約３ｍ、２・３号洗い場の距離は約６ｍで、この場所に３個の洗い場が集中している。１号洗い場はその中で最も規模が大きく、使われていた石も大きく丁寧に組んでいる。各洗い場とも底面の深さは57号溝よりやや低くなっており、57号溝の水が泥水とともに直接流れ込まないように、土手あるいは石垣等が築かれていたようである。２号屋敷に伴う洗い場は、溝の高さより洗い場の底面は50㎝程低くなっていた。このような状態では、溝の泥水が直接洗い場に流入し、埋まり使用できなくなる。発掘段階では溝と洗い場との間に土手や石垣等は残っていなかったが、石垣等が積まれて、溝の泥水が直接流入しない構造となっていたもの

第57図　５区３号屋敷　１号洗い場（２）立面図

と思われる。洗い場の底部には、木片２個が出土し、その下には厚さ５㎝程砂が堆積していた。

【構造・規模】石で囲まれた内部で規模を計測する。南北方向２ｍ、東西方向１ｍ、深さ60㎝である。洗い場に積まれている石垣は、４段前後であり、大きな石を多く積んでいる。洗い場の足場として使えそうな70×50㎝前後の大きな平石が、洗い場のまわりに敷かれたように一部残っていた。おそらく多くの場所に敷き詰められていたものと思われる。底面を長方形に囲んでいる側石も、幅40～70㎝の大きな平石を用いていた。

第７項　17号建物(蔵)(第58～60図、PL.43・44)

25-99-Ｕ・Ｖ-５～７グリッドに位置する。

【概要・位置】16号建物の前庭の南西側に位置する。建物の南と東側は畑である。屋敷の南側が高く、主屋である北側が低くなっている地形にあり、水平面を確保するために地形的に低い北側を40㎝程盛土し、東西部分は地形の高低差に応じて盛土し、水平面を確保している。盛土縁辺部は石を積んでいる。北側は畑面とほぼ同じ高さであり、石を一列に並べ、外側は溝を掘り蔵と畑を区分したと思われる。

発掘の段階で、蔵の土台から上の部分は残っていなかった。当初確認できたのは、蔵を造るために盛土し、その周りを囲む石列、蔵の北側に並べられた２段の切石の列、２段の石列の間を整地して、ロームを用いた土で固めた土間部分および、蔵本体部と思われる部分に埋められていた、多くの大小の石等であった。蔵内部北半分近くの表土が、撹乱を受けていた。建物出入口は、切石が２段に並べられている、庭に面している北側と思われる。調査を進める中で、蔵内部の土間部分に根太痕と思われる約45㎝間隔の痕跡が南北方向で２列、大引痕と思われる痕跡が東西方向に１列確認できた。大引痕は想定される蔵南壁面付近から北約２ｍ(約１間)である。蔵の調査は、これまで東宮遺跡１号建物、石川原遺跡11号・31号建物等で調査されたほかに、西宮遺跡でも調査されている。それらの蔵はいずれも土台に切石が使われており、それらの切石は現地に残されていた。しかし、この17号建物に切石の土台は残っていない。土台が置かれていたと思われる場所は周辺部より一段低くなっていた。土台に切石が使われていないなら、この建物は蔵ではない可能性もある。しかし、①土台内部ほぼ全面に大量の石が厚さ15㎝程敷き詰めてあること。②蔵の出入口に多くの切石が使われていること。③主屋でない付属建物であるが、建物地盤を盛土し、全体を石で囲んでいる。これらの特色から蔵と思われる。

【規模・構造】蔵の土台が置かれていたと思われる部分は、周辺部より一段低くなっており、切石の土台はなく、多くの主屋で使われている礎石と同じような大きな石がほぼ全面に敷かれていた。石川原２号屋敷11号建物(蔵)や、８号屋敷31号建物(蔵)では、大きな切石が土台として敷かれており、土台の切石の下は少量の石が敷かれていたが、主屋等で使われる大きな土台石は敷かれていない。このような調査例から、この建物は、通常の主屋と同じように、土台の下に大きな自然石を並べ、その上に木製の土台が置かれたものと思われる。このような考えを基本として、規模を計測する。

盛土し石列で囲まれている整地部分の規模は、東西5.92m、南北10m、想定される建物の規模は、東西5.92m(２間)、南北６ｍ(３間)、北側の出入口部分に約２ｍの平らな土間面、その北には一段低い幅１ｍ弱の平らな整地面がある。その部分は切石で囲まれていた。

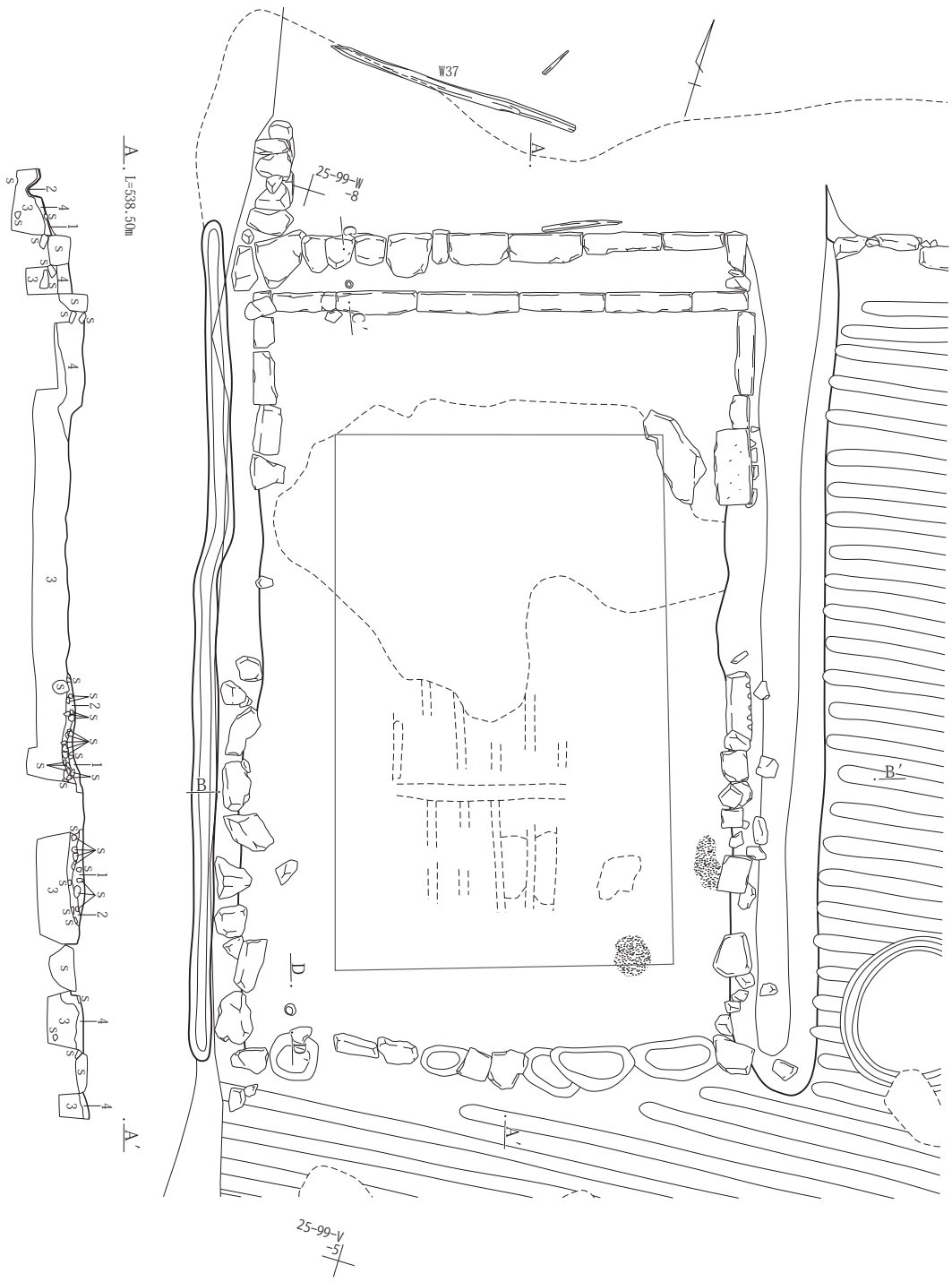
土間面に残っていた東西方向の大引痕の下と、そこから北約２ｍの場所に土台石と思われる石列が確認された。おそらくこの場所に大引が置かれていたと思われ、直行する根太があり、その上に厚い板が敷かれていたのではないだろうか。

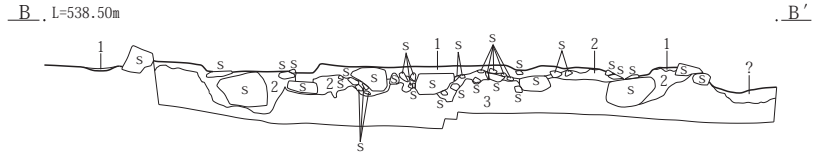
第８項　18号建物(第61～67図、PL.45～53)

25-99-Ｑ・Ｒ-９～11グリッドに位置する。

【概要・位置】３号屋敷南東部分の前庭東端に位置する。主屋である16号建物の南西にある17号建物(蔵)とともに、16号建物の付属建物である。北・東・南側は畑となっており、西側が３号屋敷の庭である。建てられている地形はほぼ平らな場所であり、盛土等は行われていない。

18号建物は南北方向に長い２間×４間の土台建物であり、主屋に近い北側に板間、中央部に１号囲炉裏、南側が土間となっており、土間に２号囲炉裏が造られていた。出入口は土間西側で建物の南西部にあたる。建物の外側、出入口北に飼葉桶と同じように丸い材木を刳りぬいた容器が、伏せた状態で置かれていた。さらにその北側に多





1号杭痕
L=538.50m
C　C′

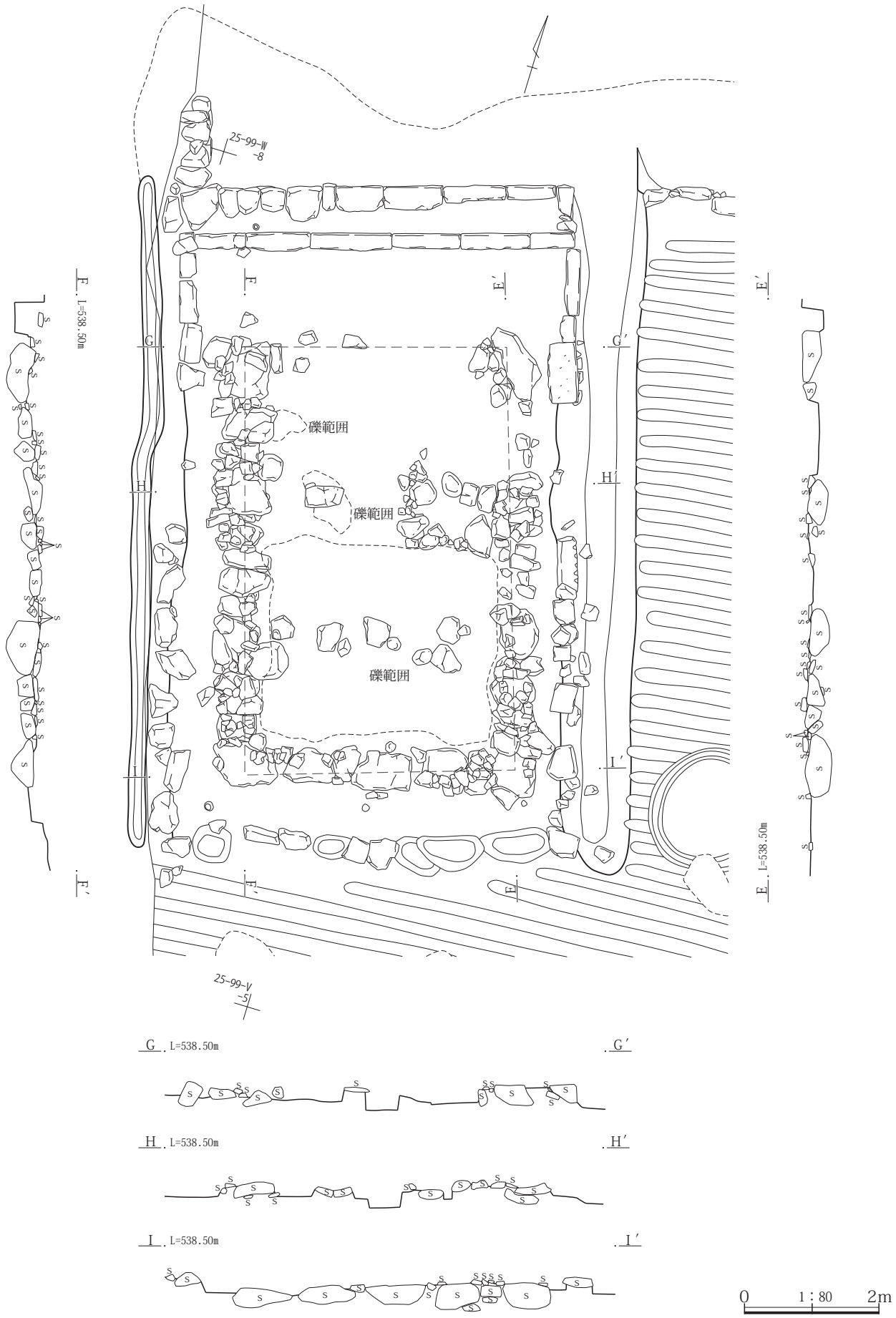
P1
L=538.50m
D　D′

17号建物A-A′～D－D′

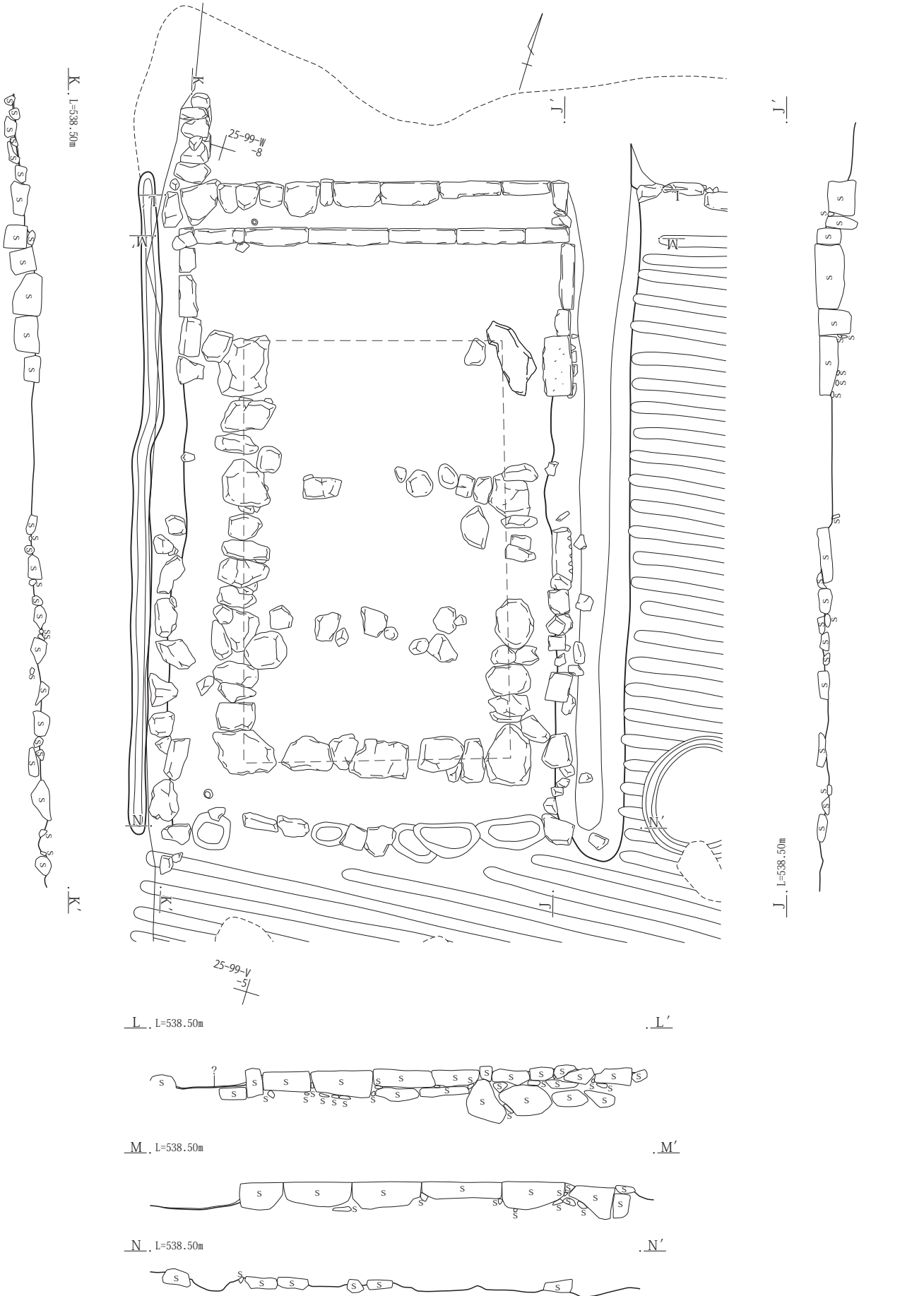
1　As-A軽石　灰黄色軽石。径２～４㎜程度が主体。
2　灰褐色土　天明泥流堆積物
3　暗褐色土　橙・黄色粒子僅少　鉄分付着
4　にぶい黄色粘土　白色粒子(軽石か)少量

0　1：80　2m

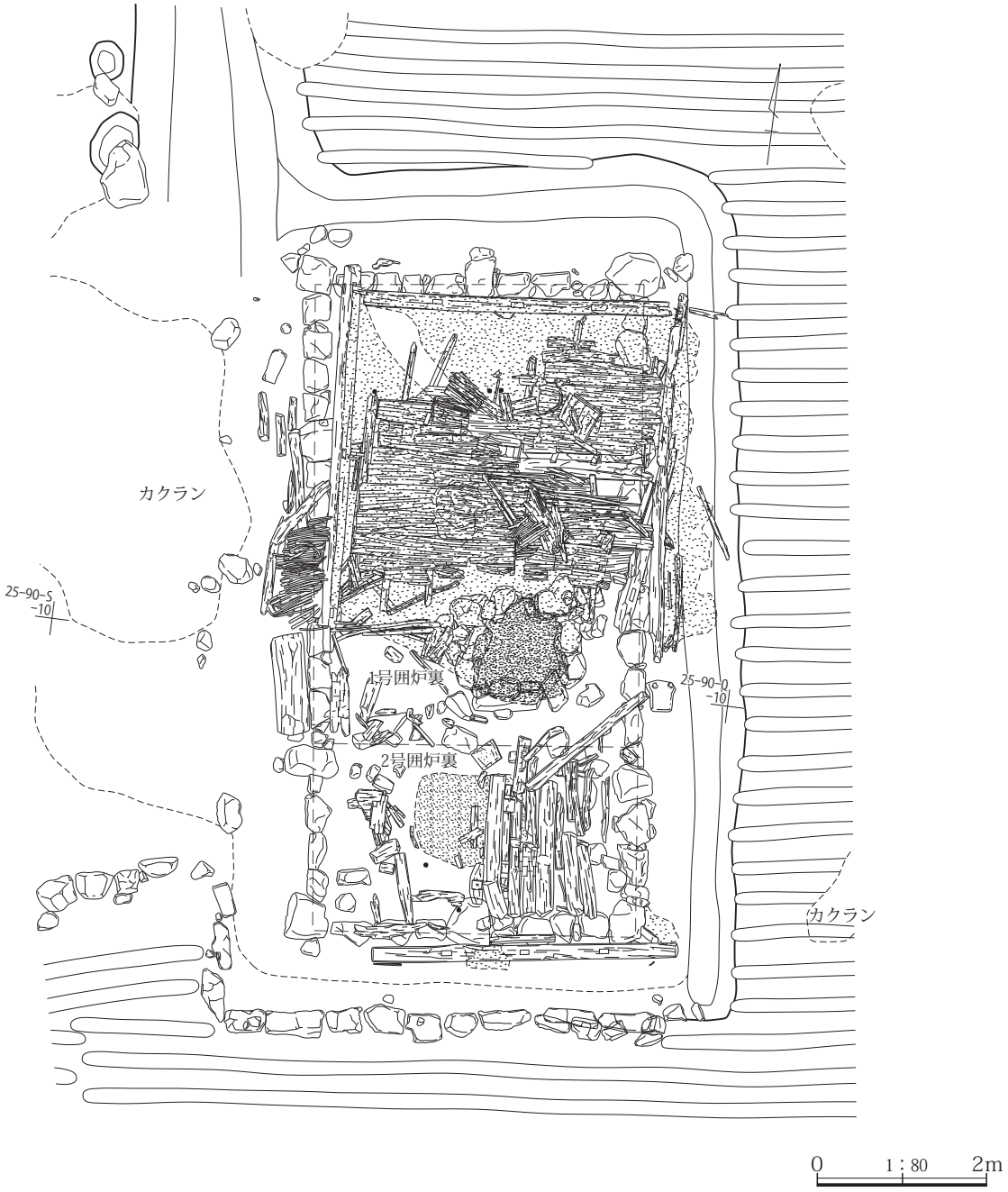
第58図　５区３号屋敷　17号建物（１）



第59図　５区３号屋敷　17号建物（２）



第60図　５区３号屋敷　17号建物（３）



第61図　５区３号屋敷　18号建物

くの薪が積まれていた。18号建物西側の前庭には大量の薪が蓄えてあり、３号屋敷では２か所に薪が蓄えてあった。

２号囲炉裏には、大量の灰が残っていた。建物中央部にある１号囲炉裏は灰や焼土等がなく、使われていなかったと思われる。２号囲炉裏は泥流で埋没する段階では､出入口と反対側の約半分が丸い材木で覆われており、使われていなかった。土間は半分の面積となっていた。建物内から多くの建築部材が、良好な状態で出土している。特に北側の床面は、当時の床構造を良好な状態で残していた。北側の床面上に、長さ42㎝前後、幅11㎝前後、厚さ約0.2㎝の薄い板材が重なった状態で56枚出土した。板屋根の材料と思われるが不明である。

【構造・規模】南北方向に長い２間×４間の土台建物である。土台の下は全面に幅40㎝前後の大きな礎石が並べられていた。柱が建つ部分では、１間間隔でさらに大きな幅50㎝前後の礎石が置かれていた。北側の土台１と西側の土台２には、柱を建てる場所に枘穴がある。それを観察すると、桁行方向は１間間隔、梁間方向は半間間隔である。桁行方向の柱は１間ごとに建てられ、梁間方向の

柱は、１間ごとに柱の中間に間柱が建てられていたようである。大引の中央部にも柱用と思われる枘穴があり、大引を境に北と南で、板間が仕切られていたことが考えられる。

規模は桁行7.6m（４間）、梁間3.8mである。板間である北側は南北5.5m、南側の土間は南北2.1mと考えられる。板間西側に土台２が良好に残っていた。長さ4.5m幅は上面17㎝、側面14㎝で上面が広い。土台２の北端は、桁方向の土台１と連結されており、土台１のホゾを受ける枘穴が先端から20㎝程離れて掘られていた。土台２の南側は大栓継となっており、南側の土台と接合されていたようである。土台の上に建つ柱は残っていないので大きさは不明である。柱の建つ枘穴の大きさは10×５㎝前後であった。

（１）土壁

【概要・構造】建物北半分および東側の雨落溝部分に、多くの土壁と思われる黄色い土が残っていた。南側の土間付近にはほとんど残っていなかった。東側の雨落溝部分に残っていたのは、泥流により建物が西方向に倒された結果、土壁が堆積したものと思われる。建物の土台が西・東・北・南に残されていた。西側の土台には約184㎝の間隔で柱の枘穴があり、その間に土壁で使われる小舞を固定する間渡竹を差し込む穴が６個、北側の土台には約92㎝の間隔で柱の枘穴があり、その間に土壁で使われる小舞を固定する間渡竹を差し込む穴が３個掘られていた。このように板間の西と北側は土壁となっていたようである。東にある土台は残りが悪く不明であるが、西側と同じような土壁であったと思われる。土間のある南側の土台は残りが悪いが、北側と同じ柱を建てる枘穴が３個掘られていた。しかし、小舞を固定する間渡竹を差し込む穴は確認出来なかった。建物南側の東西の土台は残っていなかったので、間渡竹を差し込む穴の有無は不明であり、土壁の有無も不明である。しかし残っている土壁から、囲炉裏周辺から南側は土壁ではなかったものと思われる。

（２）板間

【概要・構造】建物内から多くの建築部材が、良好な状態で出土している。北側の板間部分では東西方向の大引・南北方向の６本×２列＝12本の根太・東西方向の10枚×２列＝10枚以上の板材等がほぼ元位置を留めた状態で残っていた。

大引の西端に柱等と組むための仕口があるが、土台にそれを受ける仕口がない。土台と大引の間に土台に沿って置かれている薄い角材があり、その上に大引が置かれていた。大引は土台や柱に繋がっていない。大引の西側は残りが悪く仕口は不明であるが、大引が置かれる場所付近の土台の下に掘立柱の転用品と思われる角材が置かれていた。この角材は土台の内側に置かれており、そこに大引が置かれていたことも考えられる。大引の裏面には床束を挿入するホゾ穴はなく、礎石を受けるヒカリツケ等の加工もなかった。大引の上面は根太を受ける掘り込み（長さ・幅６㎝、奥行５㎝前後）が左右各６個、計12個あり、ここに根太が固定されていた。根太は、北側の土台と南側の囲炉裏付近まで残っていた。北側の土台まで根太は残っていないが、土台に乗っていた痕跡はない。土台の残りが悪いので、根太受け等の痕跡も確認できない。土台の内側に角材等が置かれ、そこに根太が置かれたと思いたい。囲炉裏側の根太の下には、細いが角材や竹等が残っていた。それらの上に根太が置かれたと思われる。このように柱や土台と連結することなく、建物内側の土間に、床が置かれたように造られていたと思われる。

１号囲炉裏付近は土台・根太・板材は残っていなかった。囲炉裏は大きな石で囲まれている。これまでの調査からこのような囲炉裏は、板間に造られることが多いので、１号囲炉裏周辺も板間であったと思われる。建物の板床は、現在の農家の主屋で見られるような建物の柱や、足固めに固定された構造ではない。所見で説明した②の置床と思われる。

【規模】板間は、南北5.5m、東西3.5m前後の範囲と思われる。東端が残っていない大引の長さは現状では3.42m、太さは上幅21㎝、横幅18㎝である。表面にある柱を受ける枘穴を中央とすると長さは、364㎝前後となると思われる。床板は東西２列に並べられていた。残りの良い床板は、長さ194㎝、幅30㎝、厚さ１㎝であった。板の側面は、両端を幅1.4㎝程の幅で半分ほどの薄さに削っている。左右面で削る上下面を変えており、横方向に板を敷いた場合、相欠の組み合わせで、隙間なく板を敷くことができるようになっている。また板は釘が４か所打たれており、板は根太に釘で固定されていた。21号建物の

床板は釘で固定されていなかったので、床板の固定方法は異なっていた。

【所見】床板を明瞭に残している建物は、石川原遺跡では、この18号建物の他に21号建物がある。また東宮遺跡では１号建物と４号・５号建物がある。また床板等は明瞭に残っていないが、大引や根太等の存在から、床面の構造について多くの情報を残した遺構として27号建物がある。これらの建物を比較検討することにより、当時の様々な建物構造や床構造について知ることができる。板間は、土台建物だけでなく、掘立柱を持つ21号建物でも良好に残っており、東宮遺跡５号建物も基本的には掘立柱建物であり、多くの板間が残っている。この板間は、構造的に大きく２つにわけることが出来そうである。

①(構造床)床を構成する大引や根太等が、柱や足固め等の構造材に組み込まれ固定される。大引は柱と結合し固定される。固定される位置は、柱底部か30㎝前後高い場所である。長さ約4.5m(２間半)～約6.5m(３間半)と長い大引は、反対側の柱に固定される間に、１～２か所床束が付けられ、土間から浮いた状態で保たれる。床束は礎石の上に建てられた太さは４寸角程度の角材で、長さは25㎝前後である。床束上部の枘(３×９㎝、高さ６㎝等)が、大引に掘られた枘穴に差し込まれ固定されている。(礎石地上高10㎝+床束25㎝+大引15㎝マイナス根太受け掘り込み５㎝で、床下の土間と床板までの高さは45㎝前後となる。)

土間から45㎝前後高い位置に床板が貼られる。

②(置床)建物の構造材である柱や足固めに組み込まれることなく、柱や土台の内側の土間に独立して置かれるような状態の板床である。大引は柱と結合することなく、土台の内側に置かれた土台に似た材と固定される。大引は建物の土台下に置かれている礎石と同じような礎石の上に置かれ、床束はない。土間から床板までの高さは、礎石(地上10㎝)＋大引の厚さ(15㎝)マイナス根太受け掘り込み５㎝であり、20㎝前後と思われる。

(３)土間

【概要・規模・構造】建物北側が土間であった。土間中央部に２号囲炉裏があり、泥流で埋没する段階では、出入口と反対側の囲炉裏の上約半分と囲炉裏東側の土間部分は、丸い材木で覆われていた。覆われていた範囲は東西1.3m、南北２ｍであった。覆っていた材の直径は15～20㎝、長さは0.8～1.7ｍで、８列前後並べられていた。

(４)１号囲炉裏

【概要・規模・構造】建物中央部に造られていた囲炉裏である。長さや幅が30㎝前後の大きな石を、内径80㎝前後の範囲で崩れた方形のように並べているが、本来は内径90㎝前後の方形に並べたものであろう。内面に灰・炭・焼土は全く出土しない。囲炉裏としては使っていないようである。

(５)２号囲炉裏

【概要・規模・構造】土間中央部に造られていた。泥流で埋まった段階では使われていなかった。囲炉裏を囲む枠木は、痕跡を含めて残っていなかった。残された灰の範囲から規模は東西1.2m、南北１ｍ前後である。

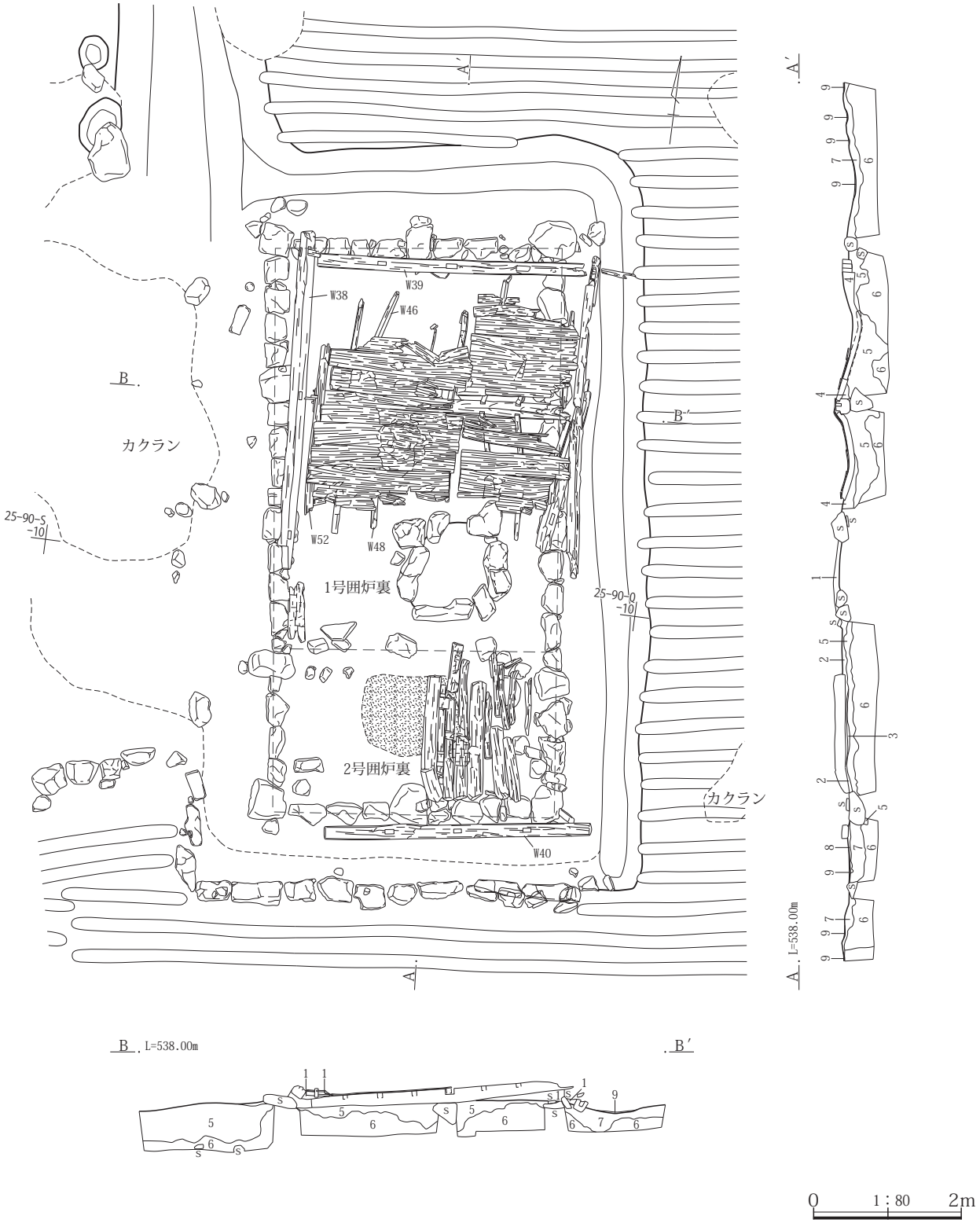
表面は少量の灰を含む土間の床土、その下に厚さ５㎝前後と厚く堆積した灰層、灰層の下は厚さ３㎝前後の焼土層となっていた。

(６)飼葉桶

【概要・規模・構造】建物の外側、出入口北に飼葉桶と同じように、丸い材木を刳り抜いた容器が伏せた状態で置かれていた。片側に丸い取っ手のような突起が造られている。外形で116ｍ、幅37㎝、高さ25㎝、抉られている内面の長さ87㎝、幅27㎝、深さ15㎝である。馬屋のない18号建物出入口部分に置かれている。水等を入れるための容器であろうか。

(７)薪場２

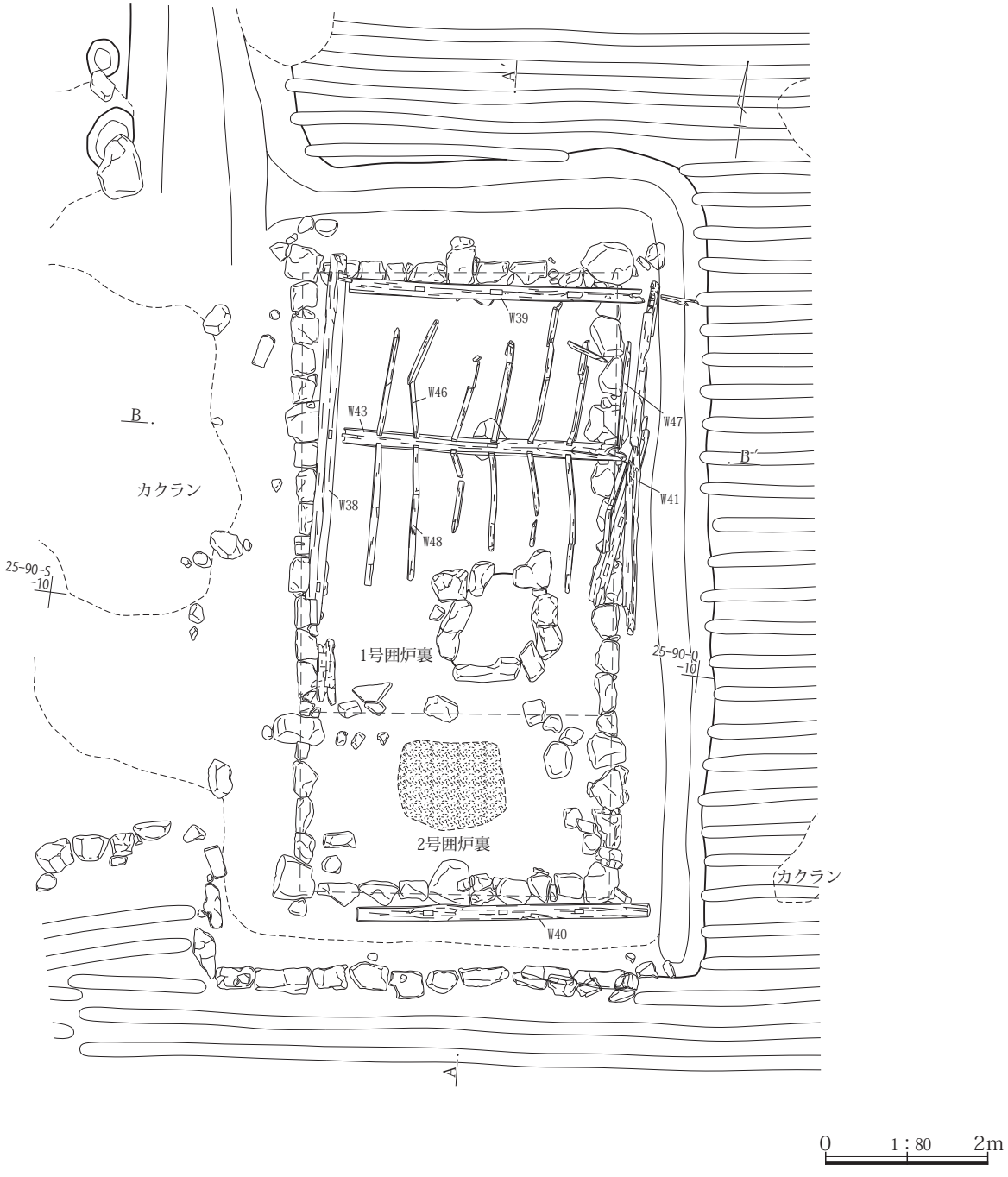
【位置・概要・規模】薪場２は、18号建物出入口北側下屋の下に位置し、建物に沿って南北方向に並べられていた。出入口北に飼葉桶があり、その北である。前庭にも大量の薪が蓄えてあり、３号屋敷では２か所に薪が蓄えてあった。前庭の薪場を薪場１、18号建物西の薪場を薪場２と呼称する。薪場１の薪は、直径15㎝前後、長さ90㎝前後の割材(２～４分割)と、太さ６～８㎝の丸材をであった。薪場２の薪は、長さがすべて50㎝前後であり、90㎝の材はなかった。直径は２㎝前後の丸い材から５㎝前後の割材を含んでいる。薪の外側には薪を囲むように直径10㎝前後、長さ約180㎝の丸材が置かれていた。その材の表面には、多くの刃物の傷が残っていた。同じような材は薪場１でも存在しており、薪を切るときの切台として使われたものと思われる。薪場２は18号建物の下屋の下に位置し、雨水は薪の外側に落ちるようになって



第62図　５区３号屋敷　18号建物(板面)

いる。薪場１は前庭にあり、薪の上には薪を覆う簡単な覆い等の存在が考えられる。このように薪場１と薪場２は、少し性格が異なっているようである。

【規模・構造】建物に沿って南北約1.2m、東西幅約50㎝の範囲で南北方向に並べられていた。高さは、30㎝前後である。薪が直接地面に接すると腐るので、薪場１には２本のレールのように材木を土台として並べ、その上に積み上げているたが、薪場２はそのような明瞭な材は置かれていなかった。薪は建物出入口に近い北側の量が少ない。その部分から使われていたものと思われる。



第63図　５区３号屋敷　18号建物（大引・根太）

【所見】薪場が２か所あるが、置かれていた薪の量、長さ、太さ等が異なっている。この２か所の薪場は使われる薪の目的が異なっていると思われる。他の屋敷で薪場はほとんどなく、日々の生活の中で必要な燃料は、屋敷内に特別な施設で貯蔵されることはなかったようである。薪場２は、長さ50㎝前後、太さ２～５㎝で、日々の生活の中で囲炉裏や竈で使ったものであり、木の幹ではない枝等を中心とした燃料と思われる。このような状態で他の屋敷でも燃料の薪があったのではないだろうか。

第９項　出土遺物（第364～367・472～486図、PL.317・318）

（１）16号建物

【建築建材と木製品】16号建物の板間２と板間３の南側から建築部材等が、まとまって出土している。これらの遺物は、北から押し寄せた天明泥流により下屋部分から南側の雨落ち部分に押し出されたものと思われる。幅32×27㎝、長さ140㎝の大きな材が出土している。端部の加工痕から切られていることがわかる。用途は不明であ

る。また、長さ45㎝前後の根太と思われる部材が多く出土している。しかし、柱や床板等は残っていなかった。木製品としては板間２と板間３の南側から建築部材とともに櫛・かんざし・漆碗・曲物・下駄・桶等が出土している。

【陶磁器等】多くの陶磁器が出土している。それらは、肥前陶器の陶胎染付碗や肥前磁器の碗等が多い。板間１(下座敷)北側から特に多く出土しており、この付近に食器類が保管されていた可能性がある。また、その付近に肥前磁器の仏飯器が出土している。石川原遺跡から仏飯器が、10個出土しており、出土建物は４・５・16・20・21・30・39号建物である。多くの建物では１個であるが、16号建物で３個、21号建物で２個出土している。21号建物では仏壇が出土しているが、他の建物では確認されていない。また、仏壇が出土している51号建物では仏飯器は出土していない。仏飯器はどのように使用されていたのであろうか。

肥前陶器陶胎染付碗が、１号囲炉裏脇から１個、２号囲炉裏内から２個重なって出土している。この碗がどのような目的で使用されていたかについて、良好な出土例と思われる。

【竈内出土の釜】石川原遺跡では囲炉裏周辺から多くの鍋が出土している。おそらく、日常の食事等で煮炊きに使用されていたものであろう。鍋が竈内から出土した例はないと思われる。竈の口径は45㎝前後で鍋の口径は30～40㎝が多く、竈では使用できないと思われる。16号建物竈内の燃焼部上面から口縁部が欠損している釜が出土している。釜の底部(底径39.5㎝)は天明泥流で埋まっており、おそらく使用されていた近い状況で出土したものと思われる。このように竈内から釜が出土した建物として、21号建物と41号建物がある。27号建物からは竈東隣からほぼ完形の釜が出土している。16号建物出土釜と同じ底径(39.5㎝)の釜が、41号建物からほぼ完形で出土しており、口径66.5㎝、底径39.5㎝、頸部から底部までの高さ23㎝である。他に竈内から釜が出土した建物は21号建物がある。この釜の底径が33㎝と16号建物出土の釜より小さい。16号建物竈内から出土した釜は、出土例の少ない貴重な例である。竈と囲炉裏での鍋と釜の使い分けを知る良好な出土例である。

【石製品】建物出入口付近の土間から、唐臼が出土している。２つの唐臼が、並んで出土することはほとんどない。また、唐臼は石をくり貫いて唐臼を囲むように唐臼の上に置かれている。このような唐臼は他に出土例がない。詳しくは遺構の中で説明している。

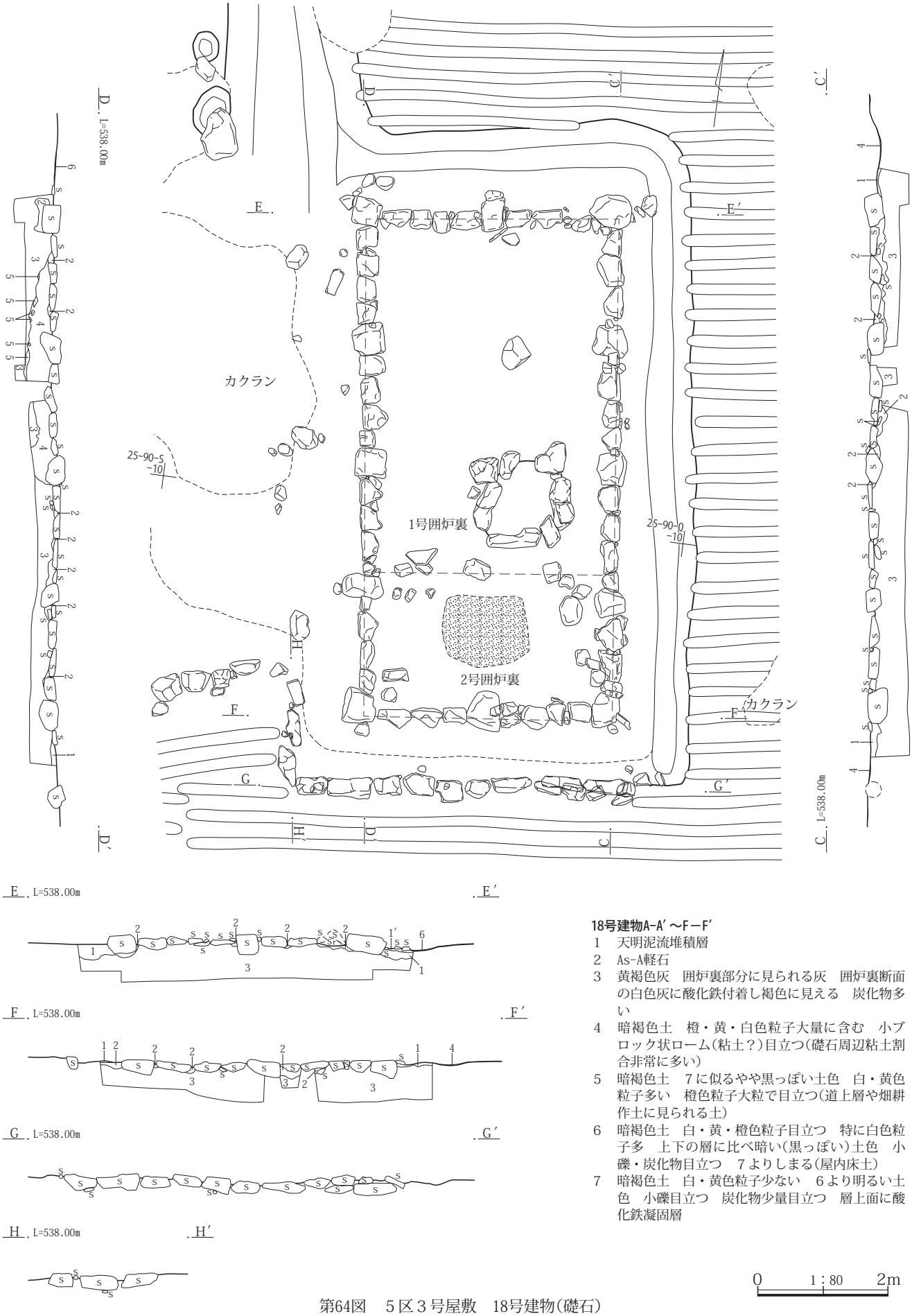
（２）18号建物

【建材部材と木製品】建物の当初の姿は中央部に囲炉裏があり、北側が板間で、囲炉裏南が土間となっていた。天明泥流で埋まる段階では、建物出入口の一部以外は板間となっていたようである。北側板間の残りが良好である。建築部材等については、遺構の中で説明している。

【煙管等】天明泥流で埋没以前に使われていたであろう２号囲炉裏周辺から煙管の吸い口と雁首及び砥石が出土している。一時期は囲炉裏として使用されていたようである。

（３）薪場１・薪場２と飼葉桶

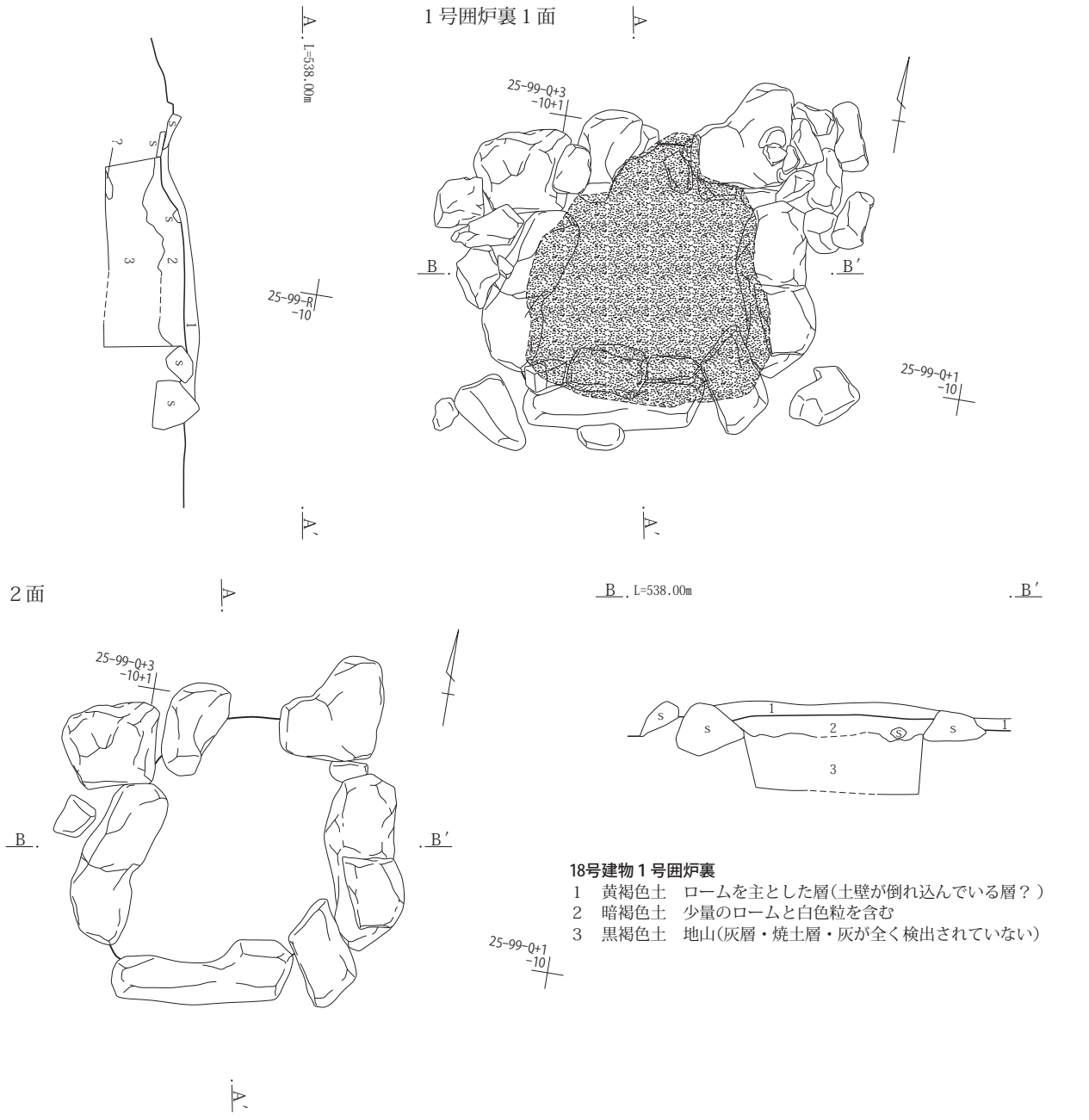
16号建物前庭の南端、畑との境に薪場１、18号建物出入口部分に薪場２、薪場２の南側に飼葉桶が口縁部を下にした状態で置かれていた。詳しい内容に関しては、第４項薪場１と第８項(６)飼葉桶(７)薪場２で説明している。



18号建物A-A′～F－F′

1　天明泥流堆積層
2　As-A軽石
3　黄褐色灰　囲炉裏部分に見られる灰　囲炉裏断面の白色灰に酸化鉄付着し褐色に見える　炭化物多い
4　暗褐色土　橙・黄・白色粒子大量に含む　小ブロック状ローム(粘土？)目立つ(礎石周辺粘土割合非常に多い)
5　暗褐色土　7に似るやや黒っぽい土色　白・黄色粒子多い　橙色粒子大粒で目立つ(道上層や畑耕作土に見られる土)
6　暗褐色土　白・黄・橙色粒子目立つ　特に白色粒子多　上下の層に比べ暗い(黒っぽい)土色　小礫・炭化物目立つ　7よりしまる(屋内床土)
7　暗褐色土　白・黄色粒子少ない　6より明るい土色　小礫目立つ　炭化物少量目立つ　層上面に酸化鉄凝固層

第64図　５区３号屋敷　18号建物(礎石)



18号建物１号囲炉裏

1　黄褐色土　ロームを主とした層(土壁が倒れ込んでいる層？)
2　暗褐色土　少量のロームと白色粒を含む
3　黒褐色土　地山(灰層・焼土層・灰が全く検出されていない)

18号建物２号囲炉裏

1　暗褐色土　橙・白・黄色の粒子多量　硬く締まる　屋内の床土
2　暗褐色土　白色灰が多量に混入し、白っぽく見える層　炭化物・粘土ブロックが目立つ　白色灰がブロック状に入る部分もある
3　白色灰　細粒の炭化物多量　部分的に褐色(酸化鉄の付着)
4　橙色土　焼土　柔らかくしまりが弱い
5　暗褐色土　白・黄色粒子僅少　炭化物目立つ

第65図　５区３号屋敷　18号建物１号・２号囲炉裏

第66図　5区3号屋敷　18号建物床上遺物図

第67図　5区3号屋敷　18号建物床下遺物図

第４節　４号屋敷跡(第68～77図､PL.55～63)

第１項　４号屋敷跡概要
第２項　20号建物構造と規模
（１)概要　（２)規模　（３)土台　（４)板間
（５)壁(土壁)（６)雨落溝
第３項　囲炉裏　（１)１号囲炉裏　（２)２号囲炉裏
第４項　前庭と集積火山灰
第５項　屋敷東部の段差と垣根
第６項　56号建物　（１)概要　（２)規模
第７項　27号道
第８項　出土遺物

第１項　４号屋敷跡概要

25-89・99-Ｓ～Ｖ-24～４グリッドに位置する。

４号屋敷は、屋敷が密集して造られている村中心部に位置する。東側に接して５号屋敷21号建物があり、両建物は、東西に長い屋敷地の西と東に分かれているような配置である。西側に位置する４号屋敷の敷地は東側の５号屋敷より50㎝前後高くなっており、両屋敷の境界部分には、段差が南北方向に存在している。段差部分には、多くの杭が北西方向から南東方向に倒れており、さらにオガラと思われる植物・竹等が部分的に残っていた。段差上の多くの場所には、垣根が造られていたものと思われる。屋敷の北は畑となっており、建物の北東部分に20号建物の付属建物と思われる56号建物がある。そこには埋設された円形の桶１個と方形の箱が埋められていた。20号建物の便所であったものと思われる。建物西側は南北方区の25号道に面しており、道の西側には57号溝がある。20号建物南側には庭があり、庭の南側には東西方向の27号道がある。20号建物は、４号屋敷の主屋と思われる。土台建物であり、西側に土間、東側が板間となっていた。板間は東西方向に２間、２間の北側に東西方向に細長い部屋があり全部で３部屋と思われる。この屋敷は東側を平成28年に、西側を平成30年に調査しており、図面は合成して作成したが、遺構写真は、調査年度時の写真であり、屋敷全体の写真はない。

第２項　20号建物構造と規模(第70～76図、PL.55～63)

25-99-Ｓ～Ｖ-１～３グリッドに位置する。

(１)概要

20号建物は、４号屋敷の主屋であると思われる建物である。土台建物であり、西側に土間、東側が板間となっていた。建物の出入口は西側の土間南側と思われる。

土間は間口幅１間半と狭く、南北に３間半と細長い。板間は東側に２間、その北側に東西方向に細長い板間が造られていた。狭い土間に竈・室・馬屋・唐臼は造られていなかった。土間西側の土台(No.161)に接する土間部分から粉引臼と木槌が出土しているので、ある程度の生活の様子を知ることが出来るが、他の主屋とは異なる目的の建物であったと思われる。

この規模の建物としては異質である。東西の板間にはそれぞれ囲炉裏が設置されていた。

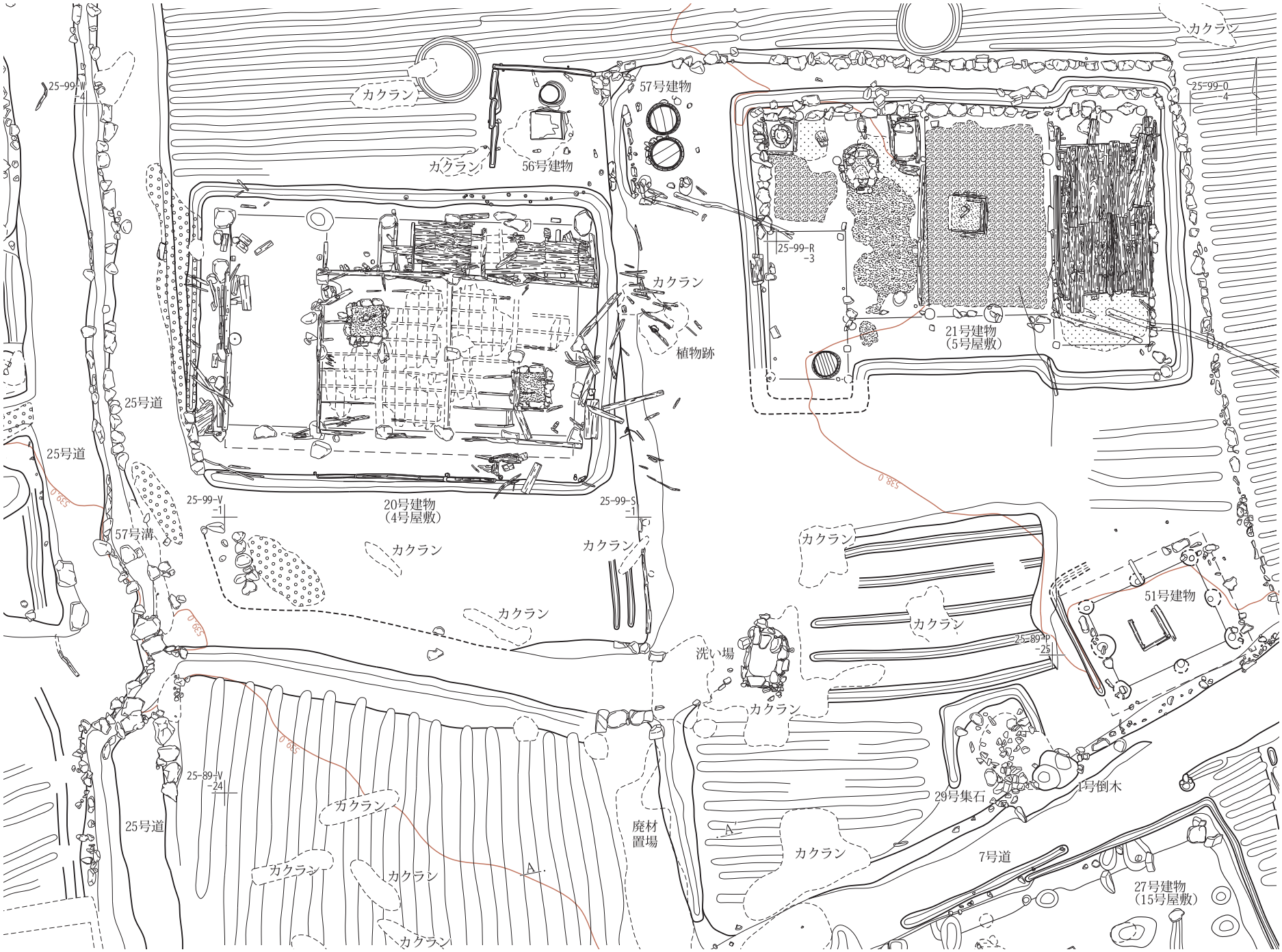
建物東西南の土台の存在から、土台建物であることがわかり、土台に残された木舞を固定する間渡穴の痕跡から、東西の多くは土壁であった。北側の土台は残っていなかった。南側の土台は残りが悪いが、ほぼ全体に残っていた。木舞等の存在は残りが悪く確認できなかった。

板間は、東西と北側の３間ある。土間に近い西側を板間１、東側を板間２、板間１と板間２の北側の細長い板間を板間３と呼称する。板間３には根太とその上の床板の多くが残っていた。板間１・板間２には建材の大部分は残っていなかったが、大引や根太痕は、土間部分にめり込んだ状態で残っていた。また、腐食した床板の植物繊維が褐色の色でほぼ全面に残っており、床板の幅や方向を知ることが出来た。このように床板の痕跡が良好に残っていた遺跡としては、西宮遺跡３号屋敷５号建物がある。板間１・板間２と板間３では、根太と床板の方向は90度異なっている。

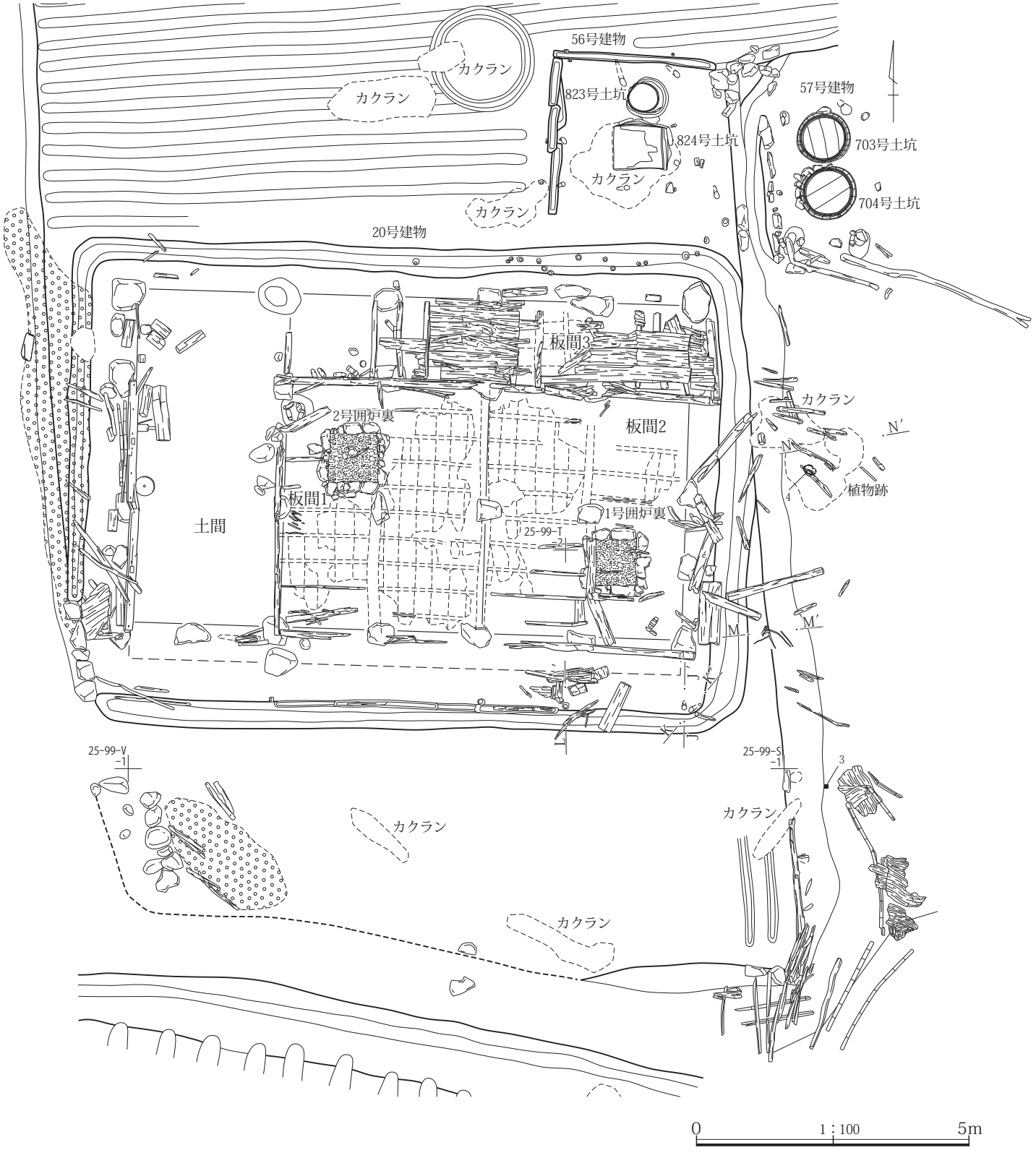
(２)規模

明瞭に遺構が残っていたわけではないが、これまでの調査から、１間(184㎝)を基準として計測した。

東西10.1m(５間半)、南北6.13m(３間半)、西側の土間は間口2.76m(９尺)、奥行6.13m(３間半)。東側の板間は東西7.36m(４間)、南北4.6m(２間半)、東側の板間１と板間２は同じ大きさであり、それぞれ間口3.68m



第68図　５区４号屋敷・５号屋敷位置図


56号建物
カクラン
カクラン
823号土坑
824号土坑
57号建物
703号土坑
704号土坑
カクラン
カクラン
20号建物
板間3
板間2
2号囲炉裏
板間1
土間
1号囲炉裏
25-99-T
-2
カクラン
N′
N
植物跡
4
M
M′
6
25-99-V
-1
25-99-S
-1
3
カクラン
カクラン
カクラン
0
1：100
5m

第69図　５区４号屋敷

（２間）、奥行4.6m（２間半）、板間１と板間２の北側になる東西方向に長い板間３は、板間は間口7.36m（４間）、奥行1.53m（５尺）である。

（３）土台礎石と土台の配置

土台の礎石は、一部欠損しているが、多く残っており、その観察や、礎石の上に残っていた土台から以下の事が指摘出来そうである。

①礎石は図示したように、外壁部分と内部では異なる。さらに土間部分と板間部分でも異なっている。

②土台は20号建物の西端と東端に良好に残っていた。南側の土台も東側を中心に多く残っていたが、残りが悪く、大きさや、仕口等の様子はわからなかった。西側の土台は長さ4.6m、幅13㎝の角材で、115㎝間隔に柱を受ける枘穴が中央部に３か所残っていた。両端にも柱が建つと思われるので、4.6m間に115㎝間隔で５本の柱が建っていたと思われる。柱を建てる枘穴の間には、土壁のための「間渡穴」が各３か所掘られており、残っていた土台部分は全て土壁であったことがわかる。南側の土台（IK0259）を実測し図示した。土台の下には礎石が置かれており、土台は、礎石の凸部分に合わせて削られていた（光付）。図示した土台の中央部の枘穴には、柱のホゾが残っていた。西側の土台は、板間３の西側でほぼ元の位置を保った状態で残っており、板間３の東側では、東側にW字状に折曲がった状態で残っていた。全長はおそらく6.1m前後であったと思われる。土台の幅は15㎝の角材である。柱を受ける枘穴は、板間３の西側は約153㎝離れた場所、そこから南は97㎝前後離れた場所の枘穴があり、そこから南は残りが悪く確認できない。柱を建てる枘穴の間には土壁のための「間渡穴」が、板間３の東側の土台では４か所掘られていたが、板間２の東側部分では残りが悪く確認できない。板間３と板間２の東側の土台（IK0038）と（IK0018）を実測し図示した。土台の下には礎石が置かれており、土台は、礎石の凸部分に合わせて削られていた（光付）。

南側の土台、南側1.5mの場所に建物に沿って雨落溝が確認されている。土台から雨落溝までの距離が離れすぎており、下屋等の存在が想定できる。下屋柱の礎石と思われる石が、土間と板間との境部分、南出入口東側で、土台部分から60㎝離れた場所から出土している。他の部分では残ってなったが、礎石の想定される場所は一段低くなっているので、存在していたと思われる。

（４）板間

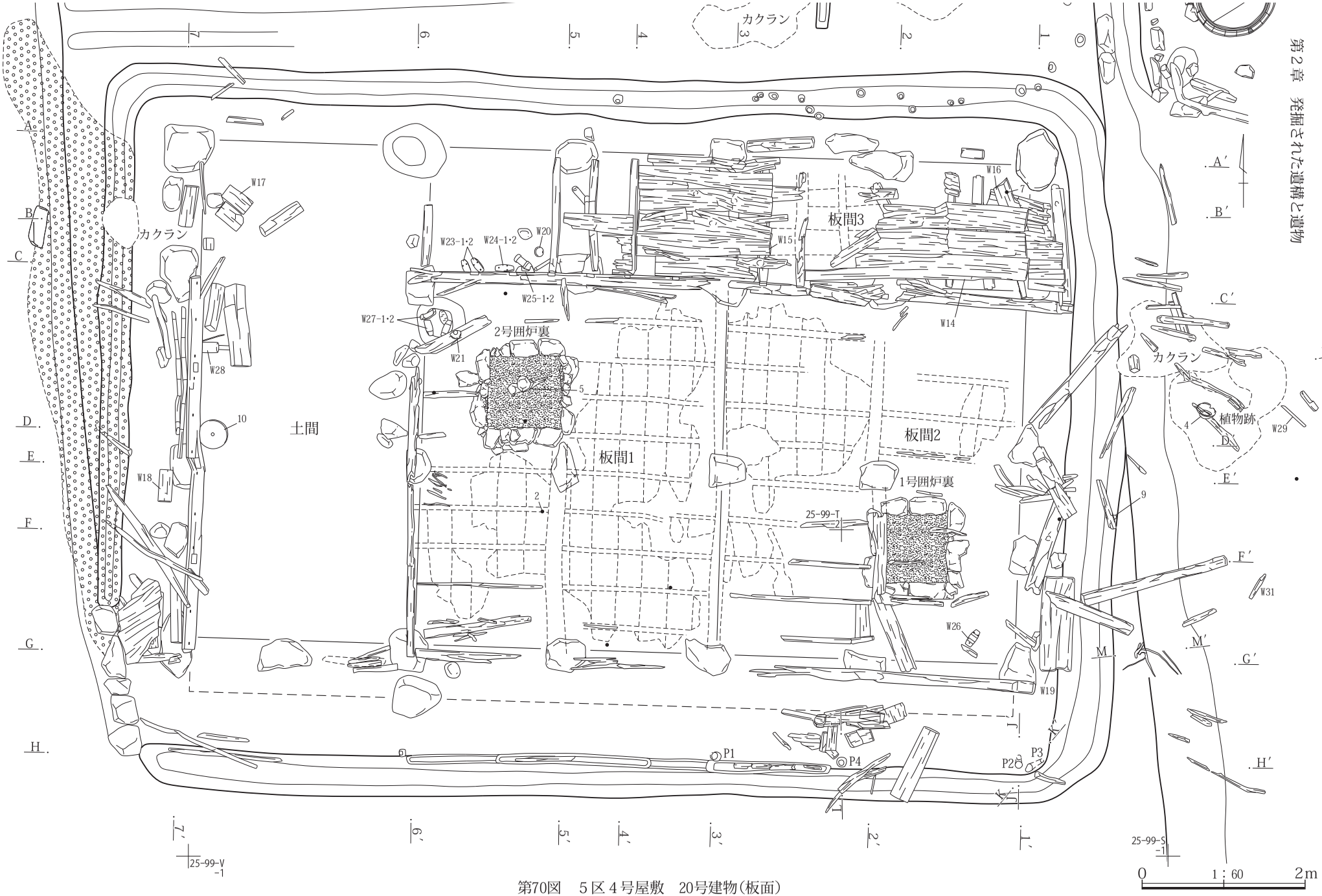
板間は東西と北側の３間ある。前述のように土間に近い西側を板間１、東側を板間２、板間１と板間２の北側の細長い板間を板間３と呼称した。板間１には２号囲炉裏、板間２には１号囲炉裏が造られていた。板間３に囲炉裏はなかった。

板間１と板間２には、大引や根太はほとんど残っていなかったが、床全体が泥流の重み等で床下土間にめり込むように落ちており、大引やネタの痕跡が明瞭に残っていた。さらにその上にあった床板も残っていなかったが、腐食した床板の植物繊維が褐色の色でほぼ全面に残っており、床板の幅や方向を知ることが出来た。大引痕は、1.84㎝間隔に南北方向に３本、根太痕は45㎝間隔に東西方向に９本、床板は幅約30㎝で根太痕に直行する南北方向に１間幅内に６枚、東に板間は残っていなかったが、全体で24枚あったものと思われる。板の厚さは不明である。

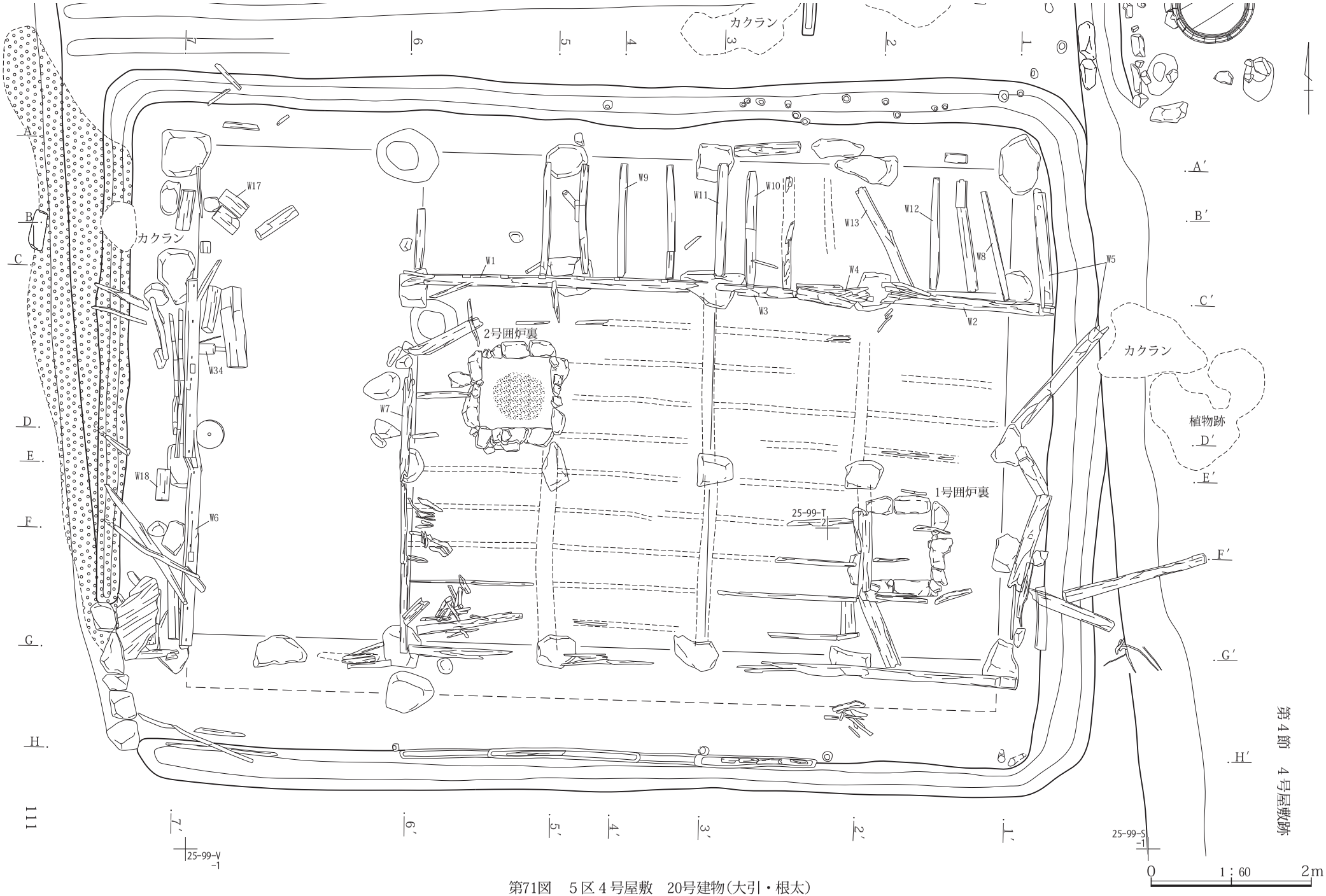
板間３は、東西7.36m（４間）、南北1.53m（５尺）で、東西方向に細長い板間であった。南北方向に11本の根太が残っており、東端は土台（IK0038）が残っていた。東西方向の土台（IK0024）に刻まれた根太の間隔は45㎝である。根太を受けるホゾ穴は幅７㎝、奥行３㎝、深さ７㎝前後である。根太の長さは150㎝、太さ12㎝で両端部を７㎝前後で細く削っている。北側の根太を受ける土台は残っていなかった。板は長さ214㎝、幅27㎝、厚さ2.3㎝前後である。板は両面を鋸で切ったものと、片面鋸で切り、片面が手斧削りの板がある。いずれも厚さ2.3㎝前後である。床板は21号建物・27号建物で多く出土しているが、厚さは両方とも1.0～1.5㎝で20号建物の床板の半分の厚さである。

板間３の西端部分には、根太が残っていなかった。その部分の土間からは下駄が、４組計８個まとまって出土している。この部分は当初床であったが、床板・根太が外され、土間となり北側は裏口となっていたのではないだろうか。

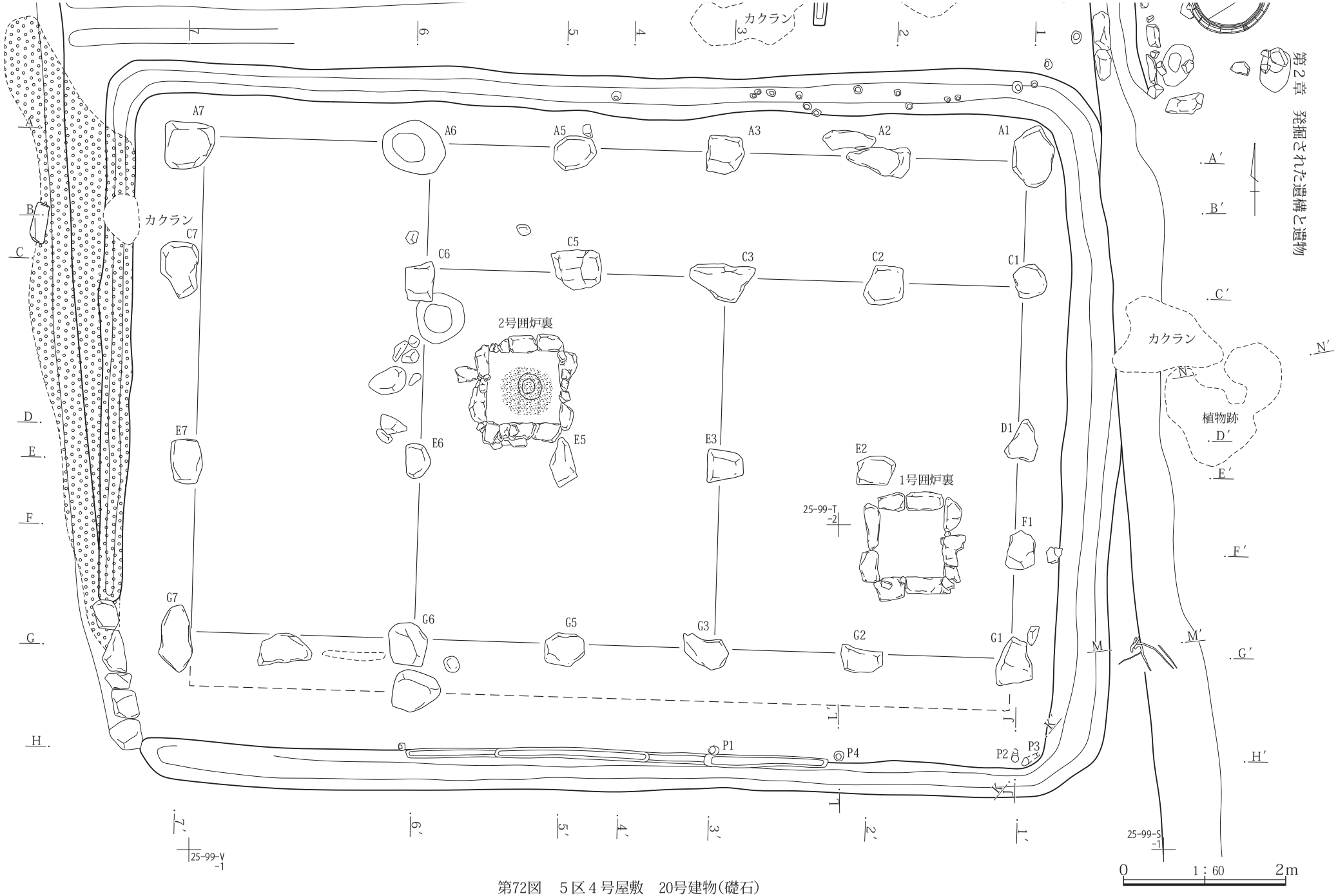
板間１と板間２に床板が残っていないが、板間３には良好に残っていた。その理由は、建物床下の土間の高さの違いかと思われる。建物中央部、上屋柱部分の土間は高く、南と北の下屋部分の土間は低くなっている、板間３の土間部分は標高538.57mで、板間１と板間２の土間



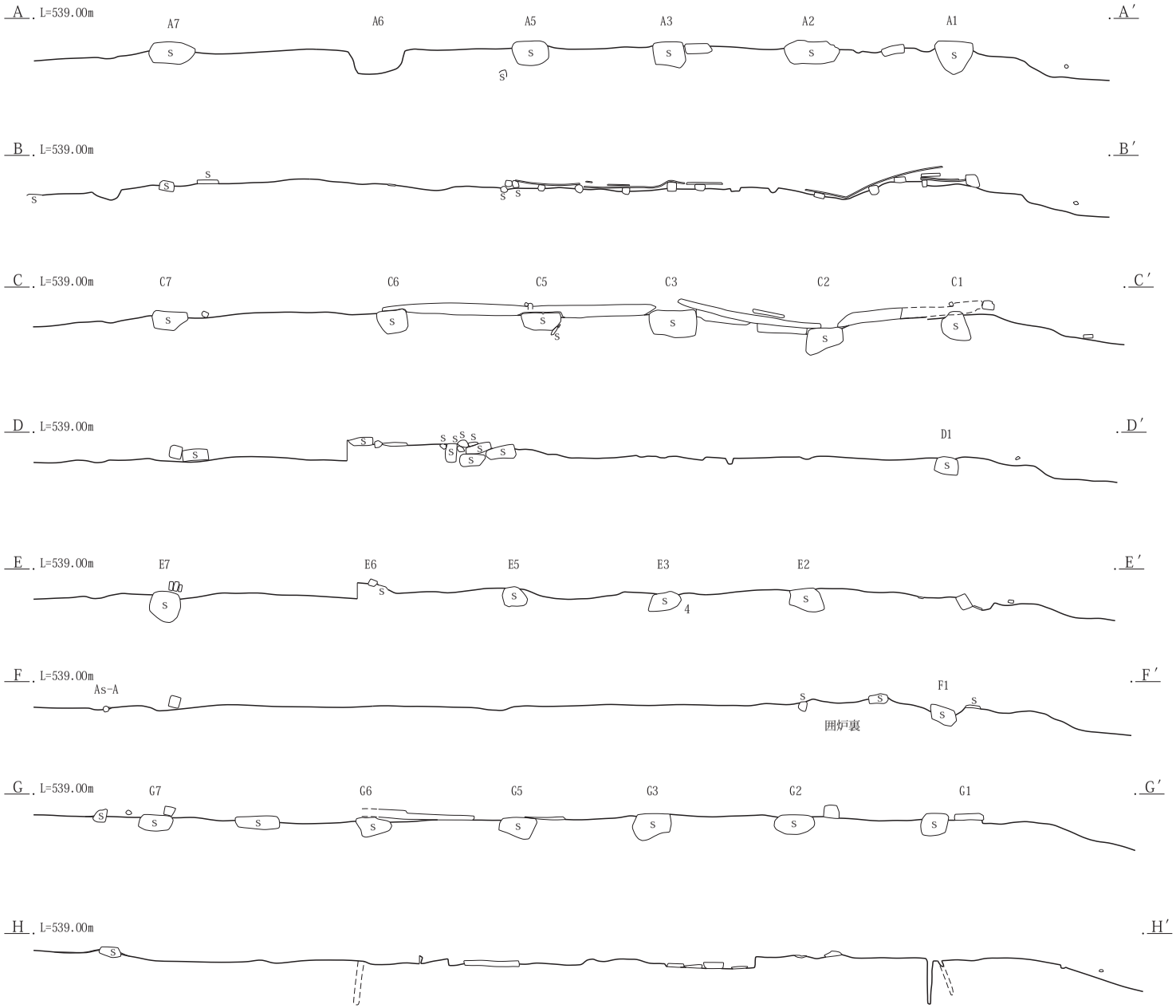
第70図　５区４号屋敷　20号建物（板面）



第71図　５区４号屋敷　20号建物(大引・根太)

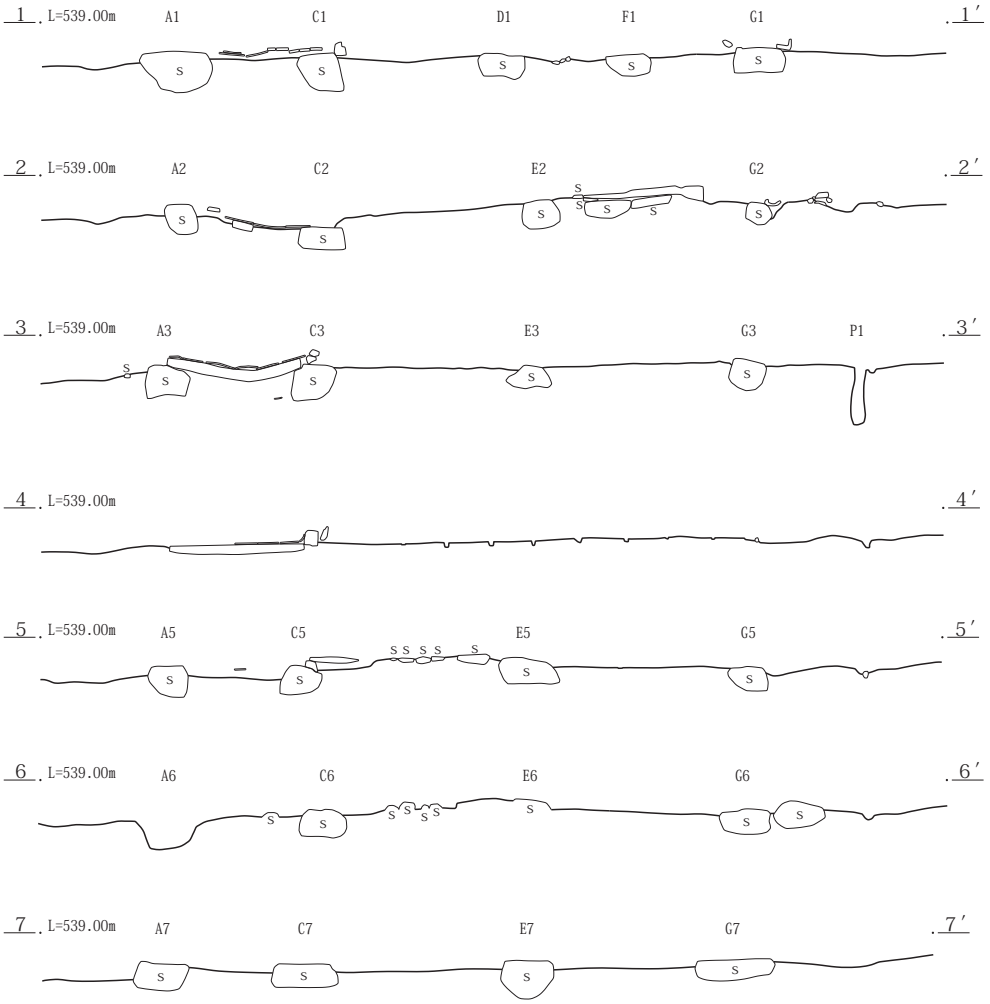


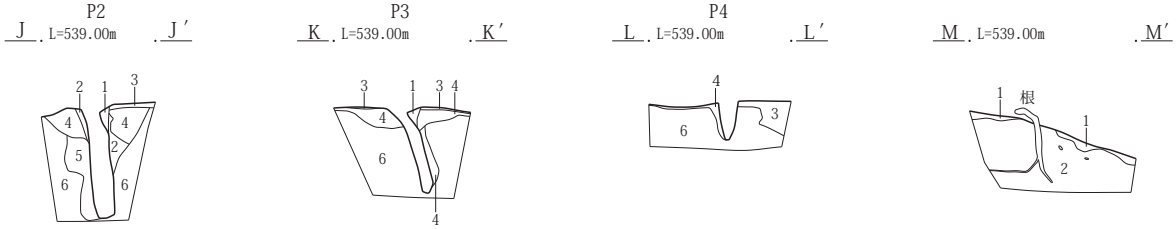
第72図　５区４号屋敷　20号建物(礎石)

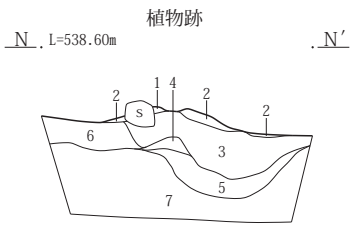


0　1：80　2m

第73図　５区４号屋敷　20号屋敷断面（１）







20号建物　J-J′～M-M′

1　灰黄褐色土　天明泥流堆積物
2　黒褐色土　黄・橙色粒子の混入がほとんどない　やや柔らかい
3　暗褐色土　小礫・砂粒、白・黄色粒子が多く含まれる　畑や道などの上層にしばしば見られる土
4　暗褐色土　黄色微小軽石僅少　径２～４㎜程の小礫目立つ　炭化物・橙色粒子(微細な土器片か)僅少　鉄分付着
5　黒褐色土　黄・橙色などの混入粒子が極めて少ない　やや柔らかい　径５㎝程の礫目立つ
6　暗褐色土　白・橙色粒子僅少　鉄分付着

４号屋敷　植物跡　N-N′

1　灰黄褐色土　天明泥流堆積物
2　黒色土　微細な繊維状の炭化物が多量に混入
3　暗オリーブ褐色土　灰白色粘土がブロック状に混入
4　灰白色粘土　部分的に明赤褐色(2.5YR5/6)（酸化鉄の付着か）
5　黒色土　細粒でやわらかくふかふかした感触　混入物はほとんど見られない
6　暗褐色土　褐色粒子僅少　鉄分少し付着
7　明黄褐色土砂礫層　地山　ロームと砂礫が混じりあった土層

0 1：40 1m

第74図　５区４号屋敷　20号建物断面（２）

部分の高さは538.66ｍで、約10㎝板間３の土間部分が低くなっている。この低い部分に根太とともに落下した床板が、水に浸かった状態で残ったのではないだろうか。

板間に板が残っていた建物は、東に接している21号建物と、北東約30ｍに位置する２号屋敷18号建物と、南東約20ｍに位置する27号建物である。18号建物の床板も南側の囲炉裏部分より約10㎝低い床下の土間となっており、床板が残っていた。わずか10㎝前後の差であるが、この低い場所に水が溜まり、床板や根太等を保存したものと思われる。

（５）壁（土壁）

建物内外に土壁は残っていなかった。しかし、東西の土台に柱を差し込む枘穴の間に木舞を固定する間渡穴（約2.5×0.5㎝）の存在から、土壁の建物であったものと思われる。この間渡穴は、西側では柱を建てる枘穴の間（115㎝）に３個（約45㎝間隔）、東側では柱を建てる枘穴の間（150㎝）に４個（約40㎝間隔）に刻まれていた。東側の土台で間渡穴が確認できたのは、板間３の東側であり、西側の土台はこの部分の土台が残ってなかった。また西側で間渡穴が確認できた場所は、東側板間２の東側になるが、この部分では柱を受ける枘穴や間渡穴は確認できなった。西壁面と東壁面で、柱の位置と間渡穴の位置を比較することはできない。

（６）雨落溝

建物を囲むように雨落溝が造られていた。建物礎石からの距離は、東西約90㎝、北側60㎝、南側では、現存する上屋柱に伴う礎石から、南1.5ｍの位置となる。前述のように南の土台から約60㎝南側に下屋が造られていたと考えたい。雨落溝北側に雨落溝と並行して木材が埋められていた。さらに小穴（Ｐ１～Ｐ４）が北側にある。この場所は建物の床下土台部分より10㎝前後低くなっているので、土留め等の目的で材木が埋められた可能性も考えられるが不明である。

第３項　囲炉裏（第74・75図、PL.58・59）

板間２に１号囲炉裏が、板間１に２号囲炉裏がある。両囲炉裏とも内径90㎝四方で、囲炉裏の外側を長さ30㎝、幅20㎝前後の大きな自然石を約３個方形に並べて囲炉裏を造っている。この石の上に方形の囲炉裏枠を載せて囲炉裏としている。囲炉裏枠は、１号囲炉裏で西側と南側に一部残っていたが、２号囲炉裏には残っていなかった。板間の中央部に造られる囲炉裏は、板間の高さに合わせて、囲炉裏の使用面を土間より高く造っている。そのために床束等を用いている高い板間では、囲炉裏を囲む石を２段以上高く積み上げている。20号建物の囲炉裏は、石を積み上げているが、囲炉裏面の高さは土間より20㎝前後高い程度であり、低い床板用の囲炉裏であると思われる。

（１）１号囲炉裏

板間２の中央部分南寄りに造られていた。東西南北の４辺に細長い石を各２個、方形になるように並べて、内部に10㎝前後の厚さでロームに似た黄褐色土を持ち込んで囲炉裏が造られていた。断面図では石を２段に積んでいるように表現されているが、持ち込まれ積まれた石は１段である。持ち込まれたローム上面の一部が焼土化しているので、少しは火を炊いたと思われるが、灰の層が全く認められない。囲炉裏としての使用は、ほとんどなかったのではないだろうか。

規模は石組外径で南北1.2m、東西1.1m、石組内径南北80㎝、東西80㎝、持ち込まれたロームの厚さ15㎝前後である。西側の石の上に残っていた囲炉裏枠と思われる木材は、残りが悪いが現状で長さ1.1m、幅15㎝である。加工痕や仕口等は不明。

（２）２号囲炉裏

板間１の中央部分北寄りに造られていた。囲炉裏中心部に１個の石が置かれていた。東西南北の４辺に細長い石や、丸く小さな石を方形になるように並べている。内部に10㎝前後の厚さでロームと思われる赤褐色の土を持ち込んで囲炉裏が造られていた。断面図では石を２段に積んでいるように表現されているが、持ち込まれ積まれた石は１段である。

１号囲炉裏は灰や焼土の堆積が少なく、ほとんど使用されていなかったと思われるが、２号囲炉裏では厚さ５～14㎝の厚い灰層、灰層の下には厚さ５㎝前後の焼土層が存在し、長時間使用されていたと思われる。灰層の上には、灰を中心とし、暗褐色土や炭等を混じる層が堆積していた。焼土の下には持ち込まれたロームに似た土があるが、大部分焼土化していた。ロームに似た土の下は地山となっている。

規模は石組外径で南北1.3m、東西1.2m、石組内径南

北90㎝、東西90㎝、持ち込まれたロームの厚さ10㎝前後である。

第４項　前庭と集積火山灰

建物南側に東西約11ｍ、南北約４ｍの広さの小さな前庭がある。前庭の南に東西方向の27号道がある。前庭と27号道との境は明瞭でない。

前庭にAs-A軽石はほとんど残っていなかった。

As-A軽石は、庭の南西コーナー部分に集められていた。調査担当は集積火山灰と呼称して調査した。大きさは長軸2.7m、短軸1.2m、高さ18㎝である。

第５項　屋敷東端の段差と垣根

西側に位置する４号屋敷の敷地は、東側の５号屋敷より50㎝前後高くなっており、両屋敷の境界部分には、段差が南北方向に存在している。段差部分には、多くの杭が北西方向から南東方向に倒れており、さらにオガラと思われる植物・竹等が部分的に残っていた。段差上の多くの場所には、垣根が造られていたものと思われる。特に多く出土している場所は、20号建物東側と南東部分である。特に南東部では苧殻と思われる植物がまとまって出土している。苧殻の周辺に竹が４本横たわっている。竹と苧殻のまとまりは、51号建物の草壁の存在と共通する。屋敷東側の一段低い段差部分の上に、南北方向の段差に沿って、多くの杭を打ち込み、竹で苧殻の両側を固定した垣根等が、20号建物東側に造られていたのではないだろうか。全面に造られていたのか、通路を残して造られていたのかの確認は出来なかった。

第６項　56号建物(第77図、PL.61・62)

25-99-Ｓ-３・４グリッドに位置する。

(１)概要と規模

20号建物北東部に接して位置する823号と824号土坑がある。823号土坑は桶、824号土坑には木製の箱状の物が埋まっていたようである。調査担当はこの遺構を建物としてではなく、土坑として調査した。これまで多くの屋敷に、厠等の付属建物存在することが多く、主屋の北東部に位置する付属建物の調査例は、ほとんど例がないが、整理担当は20号建物に付属する厠等の建物であると考え、56号建物として報告する。

２つの土坑は、西側と北側に小穴があり、その外側に雨落溝と思われる溝が存在している。東側は一段低くなっており、雨落溝は残っていない。南側に溝は確認できなかった。両土坑の掘られている場所は西・北・東面より一段高くなっている。両土坑の接する付近と遺構外の西・北・東部分を比較すると、北側の畑面より20㎝以上高く、西側の畑面とは15㎝前後高い。東側の石列部分とは27㎝前後高くなっている。南側ではほぼ同じ高さである。このように少し盛土されて、桶等が埋められていたようである。建物の規模は不明であるが、雨落溝等から推定すると、東西南北とも2.7m前後の正方形の建物であったと思われる。内部に東西方向と南北方向の小穴があるので、区画されていた可能性もあるが不明である。

(２)823号土坑

北側に埋められていた埋設桶である。桶の側板や底板は残っていなかった。内部は天明泥流で埋まっていた。大きさは底部直径65㎝、高さは現状で約40㎝であった。

(３)824号土坑

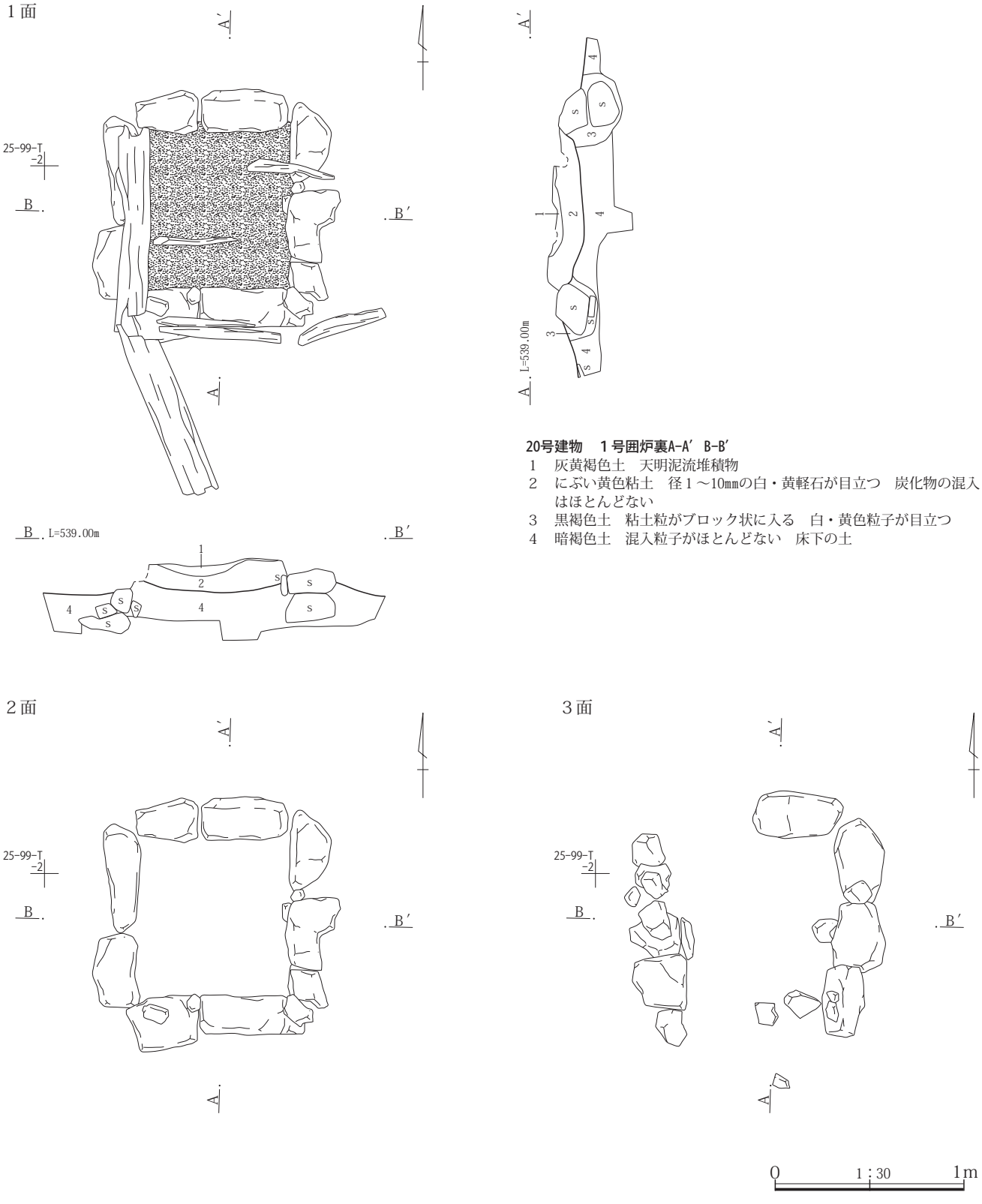
823号土坑に接した南側に埋められていた。桶ではなく東西が少し長くなっているが、正方形に近い箱が埋められたような構造である。板材は全く残っていなかった。内部は天明泥流で埋まっていた。大きさは東西86㎝、南北80㎝、高さは現状で約50㎝であった。

第７項　27号道

27号道は４号屋敷前庭の南にある道であり、27号道の南側は畑となっている。この道は、村の幹線道である７号道から北に分かれた４号屋敷西側の25号道に接続している。道の長さ約15m、幅は1.3m前後である。

第８項　出土遺物(第368・487～494図、PL.319)

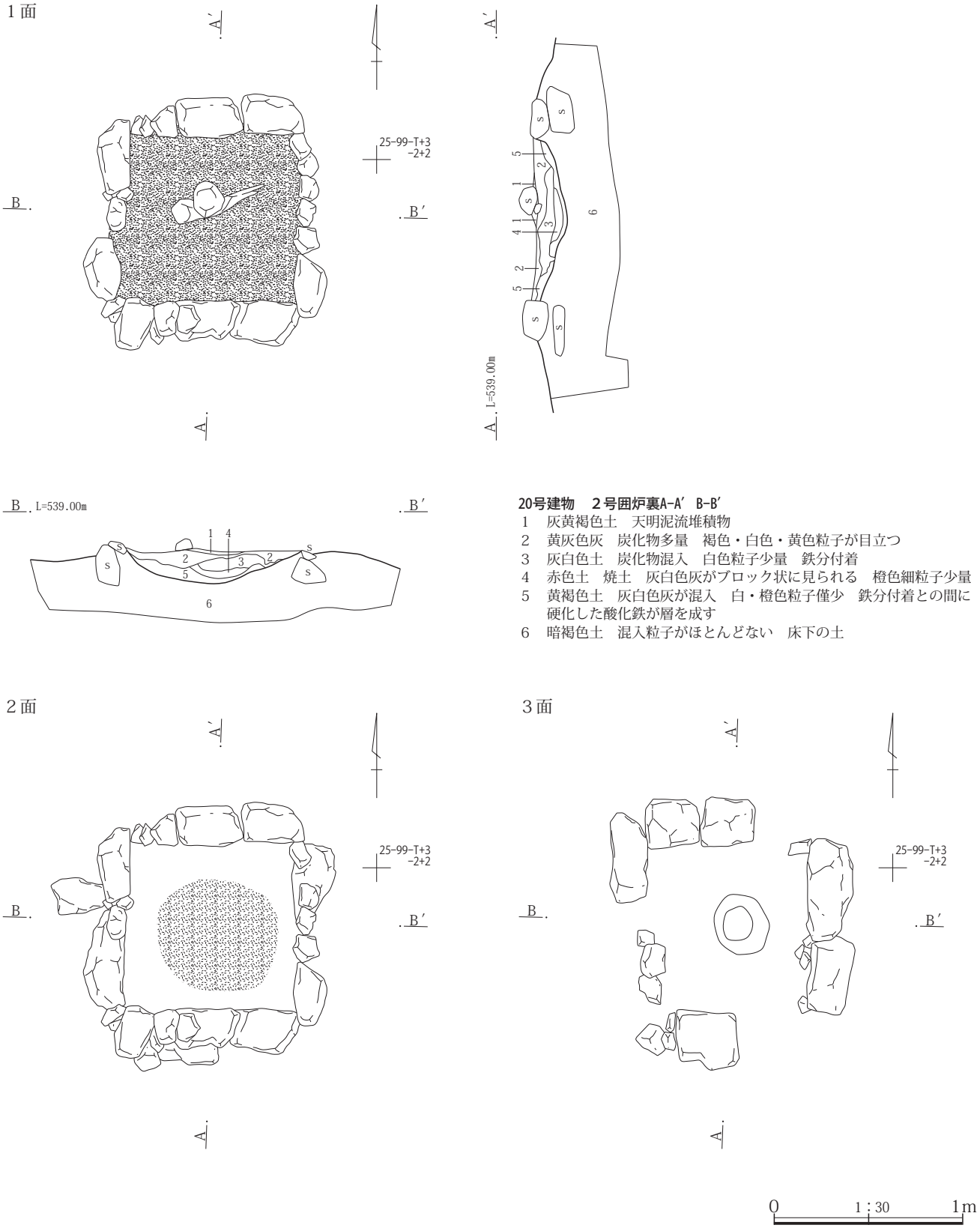
多くの木材が建築部材として、土台・根太・床板等がほぼ使われていた状態で出土している。生活用具としては、板間３の西端から下駄が４組８個まとまって出土している。全て丸下駄であり、女性用と思われる。一段低い東側の垣根部分から茶釜と踏鍬の木製部分、２号囲炉裏の中から火箸が、西側の土間部分西端から木槌と石臼が出土している。他に仏飯器・煙管・寛永通寶・砥石等も出土している。



20号建物　１号囲炉裏A-A′ B-B′

1　灰黄褐色土　天明泥流堆積物
2　にぶい黄色粘土　径１～10㎜の白・黄軽石が目立つ　炭化物の混入はほとんどない
3　黒褐色土　粘土粒がブロック状に入る　白・黄色粒子が目立つ
4　暗褐色土　混入粒子がほとんどない　床下の土

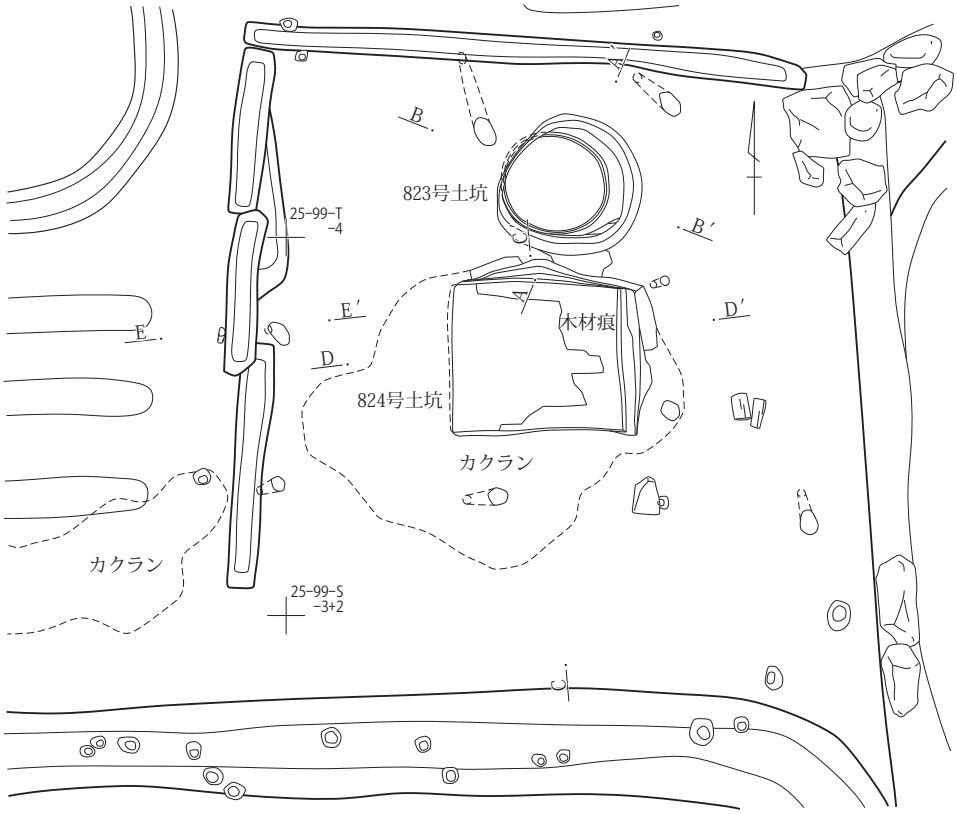
第75図　５区４号屋敷　20号建物１号囲炉裏

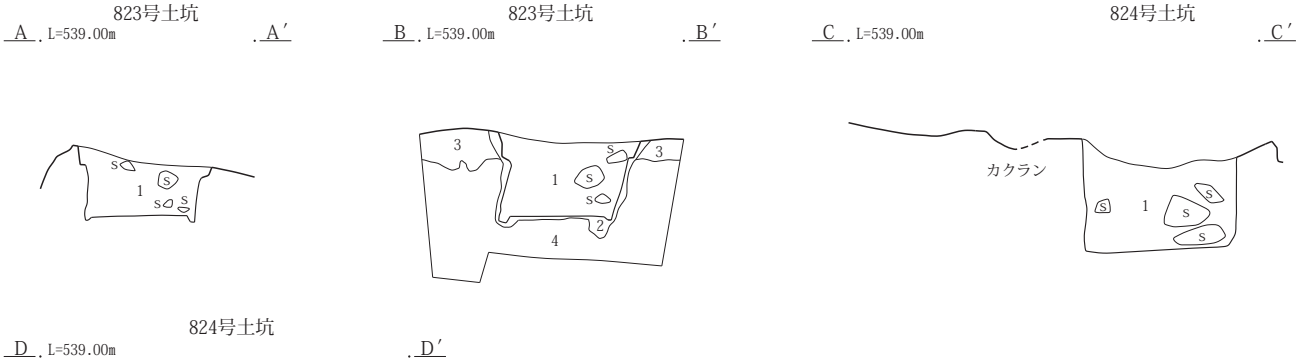


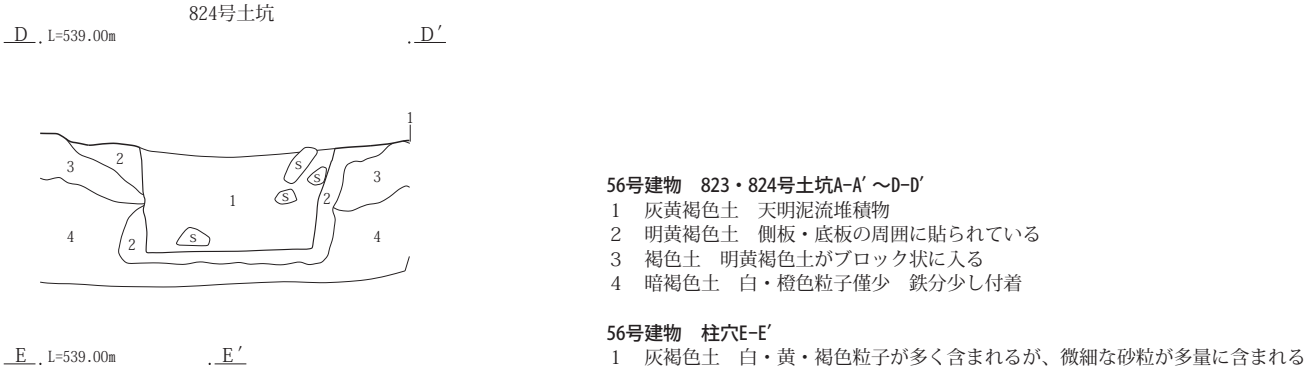
20号建物　２号囲炉裏A-A′ B-B′

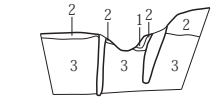
1　灰黄褐色土　天明泥流堆積物
2　黄灰色灰　炭化物多量　褐色・白色・黄色粒子が目立つ
3　灰白色土　炭化物混入　白色粒子少量　鉄分付着
4　赤色土　焼土　灰白色灰がブロック状に見られる　橙色細粒子少量
5　黄褐色土　灰白色灰が混入　白・橙色粒子僅少　鉄分付着との間に硬化した酸化鉄が層を成す
6　暗褐色土　混入粒子がほとんどない　床下の土

第76図　５区４号屋敷　20号建物２号囲炉裏









56号建物　823・824号土坑A-A′～D-D′

1　灰黄褐色土　天明泥流堆積物
2　明黄褐色土　側板・底板の周囲に貼られている
3　褐色土　明黄褐色土がブロック状に入る
4　暗褐色土　白・橙色粒子僅少　鉄分少し付着

56号建物　柱穴E-E′

1　灰褐色土　白・黄・褐色粒子が多く含まれるが、微細な砂粒が多量に含まれる
2　灰褐色土　白・黄・褐色粒子が多く含まれる　畑や道などの上層にしばしば見られる土
3　暗褐色土　白・橙色粒子僅少　鉄分少し付着

0　1：40　1m

第77図　５区４号屋敷　56号建物

第５節　５号屋敷跡(第68・78～121図､PL.64～107)

第１項　５号屋敷跡概要
第２項　21号建物構造と規模
（１)概要（２)規模（３)土間（４)土座（５)板
（ア)床板　（イ)大引３・大引１・大引２
（ウ)根太　（エ)ネコと筵　（オ)板間南の土間
（６)掘立柱
（７)土台石の配置
（８)壁　（ア)土壁　（イ)北壁　（ウ)東壁①
（エ)東壁②　（オ)東壁③　（カ)南壁①
（キ)南壁②　（ク)板間西草壁
（９)地覆
(10)雨落溝
第３項　竈と出土した釜
第４項　囲炉裏　（１)１号囲炉裏　（２)２号囲炉裏
第５項　唐臼　（１)石製唐臼　（２)杵の柄　（３)杵
（４)支脚　（５)重石
第６項　室
第７項　馬屋　（ア)飼葉桶　（イ)馬屋桶
第８項　57号建物　（１)概要と建物規模　（２)埋設桶
第９項　廃材置場
第10項　洗い場
第11項　出土遺物
（１)仏壇関連　（ア)仏壇　（イ)位牌　（ウ)戸棚内遺物・丸善・曲物・お櫃・植物容器・鉄斧・踏鍬
（エ)仏壇上遺物・文箱・硯箱・おりん
（２)収納具　（ア)１号収納箱　（イ)２号収納
（ウ)行李
（３)煮沸具　（ア)釜(イ)鍋(ウ)火打ち具
（４)食膳具(漆銭品)　（ア)漆椀(イ)膳(ウ)盆(エ)重箱　（オ)折敷(カ)箸(キ)箸入れ
（５)食膳具(陶磁器)（陶磁器　碗・皿・水柱・燈明皿・ひょうそく・仏花瓶・片口・擂鉢
（６)樽と桶　（ア)樽(イ)桶(ウ)便所桶・馬屋桶
（７)衣類関連　（ア)糸巻(イ)下駄(ウ)櫛
（エ)唐傘
（８)その他　鉈・鎌・銭・斧・柄鍬・鉄釘・鉦鼓・キセル・石臼・砥石等

第１項　５号屋敷跡概要

25-89・99- Ｏ～Ｓ -24～４グリッドに位置する。

５号屋敷は、屋敷が密集して造られている村の中心部に位置する。西側に接して４号屋敷20号建物があり、両建物は東西に長い屋敷地の西と東に分かれている。東側に位置する５号屋敷の敷地は西側の４号屋敷より50㎝前後低くなっており、両屋敷の境界部分には、段差が南北方向に存在している。段差部分には、多くの杭が北西方向から南東方向に倒れており、さらに苧殻と思われる植物や竹等が一部残っていた。段差上の多くの場所には、垣根が造られていたものと思われる。屋敷の北と東側は畑となっており、建物の北西に21号建物の付属建物と思われる57号建物があり、２個の桶(703・704号土坑)が埋められていた。21号建物の便所と思われる。21号建物南方には庭があり、庭の西南部には、洗い場がある。このように５号屋敷は主屋である21号建物と付属建物である57号建物、前庭と洗い場で構成されている。前庭にAs-A軽石の堆積はほとんど確認されていない。As-A軽石を集めて堆積した集積火山灰はなかった。

５号屋敷の出入口は４号屋敷20号建物南にある27号道と思われる。道の長さ約15m、幅約1.3mである。

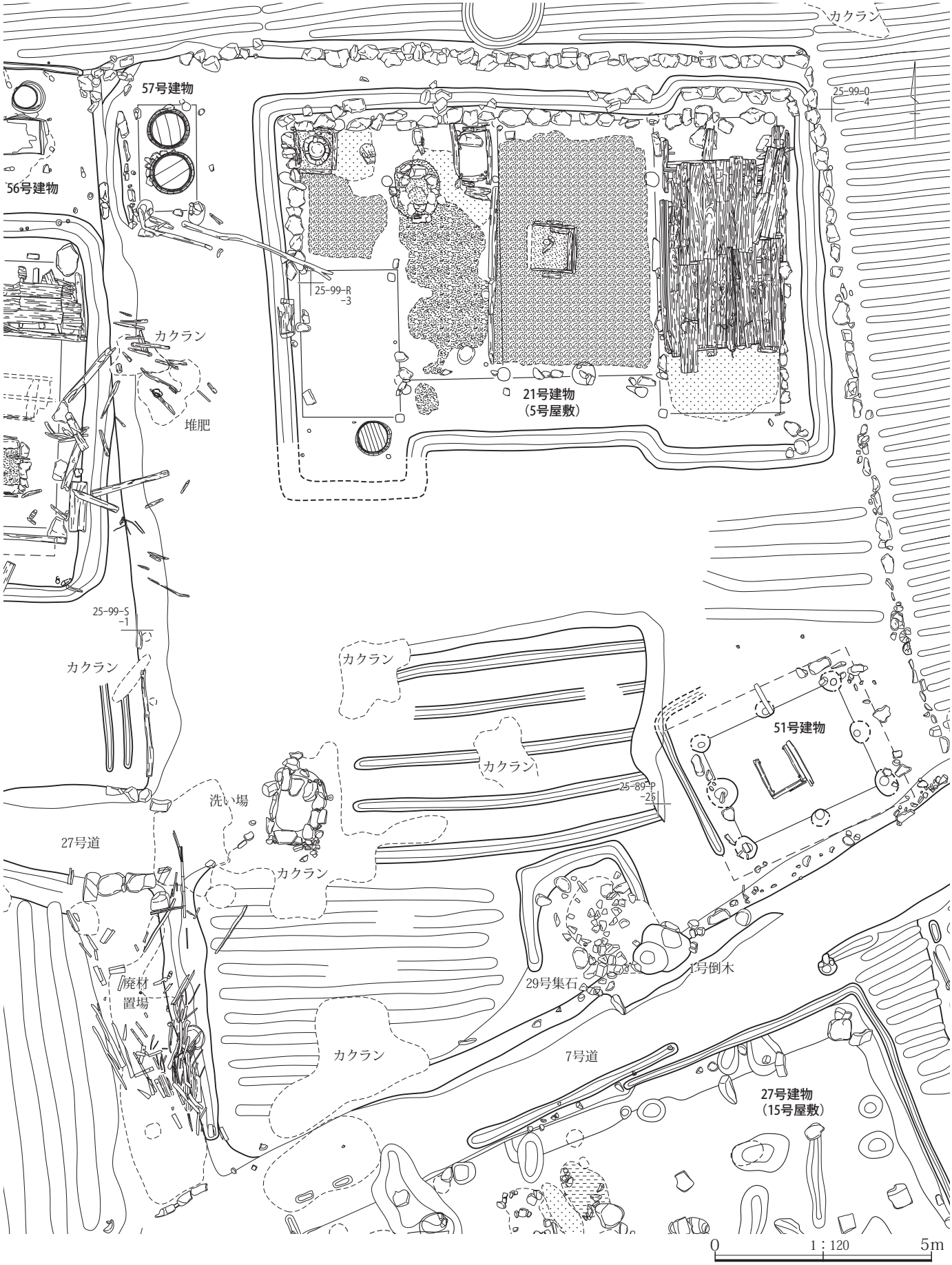
５号屋敷南東部分に位置する51号建物は、丸材の一部側面を削っただけの掘立柱の建物であり、51号建物相当の小さな建物である。５号屋敷の付属建物として建てられたと思われるが､仏壇や多量の性格用具の出土から、天明泥流により埋没した段階では、独立した主屋と思われる。

第２項　21号建物構造と規模(第79～95図、PL.64～84・91～107)

(１)概要

21号建物は、５号屋敷の主屋である。大量の木製品が出土しており、その量は15号屋敷27号建物の半数以下であるが、石川原遺跡では２番目に多い出土量である。これまで報告された遺跡の中でも、おそらく最も多い出土量と思われる。

東宮遺跡１号建物と石川原遺跡27号建物は、いずれも土台を用いた建物であり、壁を構成する柱には貫を用いた貫構造の建物であり、壁は土壁であった。今日多くの



第78図　５区５号屋敷位置図

第79図　５区５号屋敷　21号建物

民家でみられる構造に近いが、21号建物は掘立柱建物であり、柱と柱をつなぐ貫はなく、壁は草壁や竹を用いた竹壁と思われる。こうした構造の建物については、現存するものがないため明らかでない点が多く、多くの情報を知ることのできる貴重な建物である。

建物は、大きく３つの空間に分かれる。西側に土間、東側に板間､土間と板間のあいだに土座が造られている。建物の出入口は西側の土間南方で馬屋東側と思われる。

（２）規模

明瞭に遺構が残っていたわけではないが、これまでの調査から１間＝184㎝を基準として計測した。建物全体では間口11.0m（６間）、奥行5.9m（４間）であり、西側の土間は間口4.6m（２間半）、奥行6.8m（４間）。中央の土座は間口3.6m（２間）、奥行5.9m（３間半）、東側の板間は、間口2.8m（１間半）、奥行5.0m（３間）、板間南には間口2.8m（１間半）、奥行1.8m（１間）の範囲に土間が造られており、上面は固く踏み固められていた。板間に出入りするための土間と思われる。

（３）土間

【概要・規模】土間の東南部に馬屋、北部に１号竈・２号囲炉裏・唐臼が造られていた。馬屋とその北にある唐臼との間には、土座と同じような筵等が敷いてあった。これは土間に筵等を敷いて一時的な作業空間としたものと考えられる。このため土間の一部と考えた。１号竈の南側には､粘土質の黄褐色土が敷かれて､密な土間面となっていた。この土は建物出入口部分にも一部残っており、本来は土間の大部分に敷かれていたものと思われる。その範囲は、南北約５m、東西約２m、厚さ約３㎝である。馬屋北方の筵が敷かれていた部分には、この黄褐色土は敷かれていなかった。

（４）土座

【概要】建物中央部、土間と板間のあいだに土座がある。このように土間と板間の間に土座がある建物は、土間と土座の位置が東西逆ではあるが、９号屋敷14号建物で検出されている。土間と土座の境には長さ3.0m、幅15㎝前後の丸材（Ｗ９）と長さ1.1m、幅５㎝前後の短い丸材を南北方向に並べている。２本の長さは計約4.1mである。

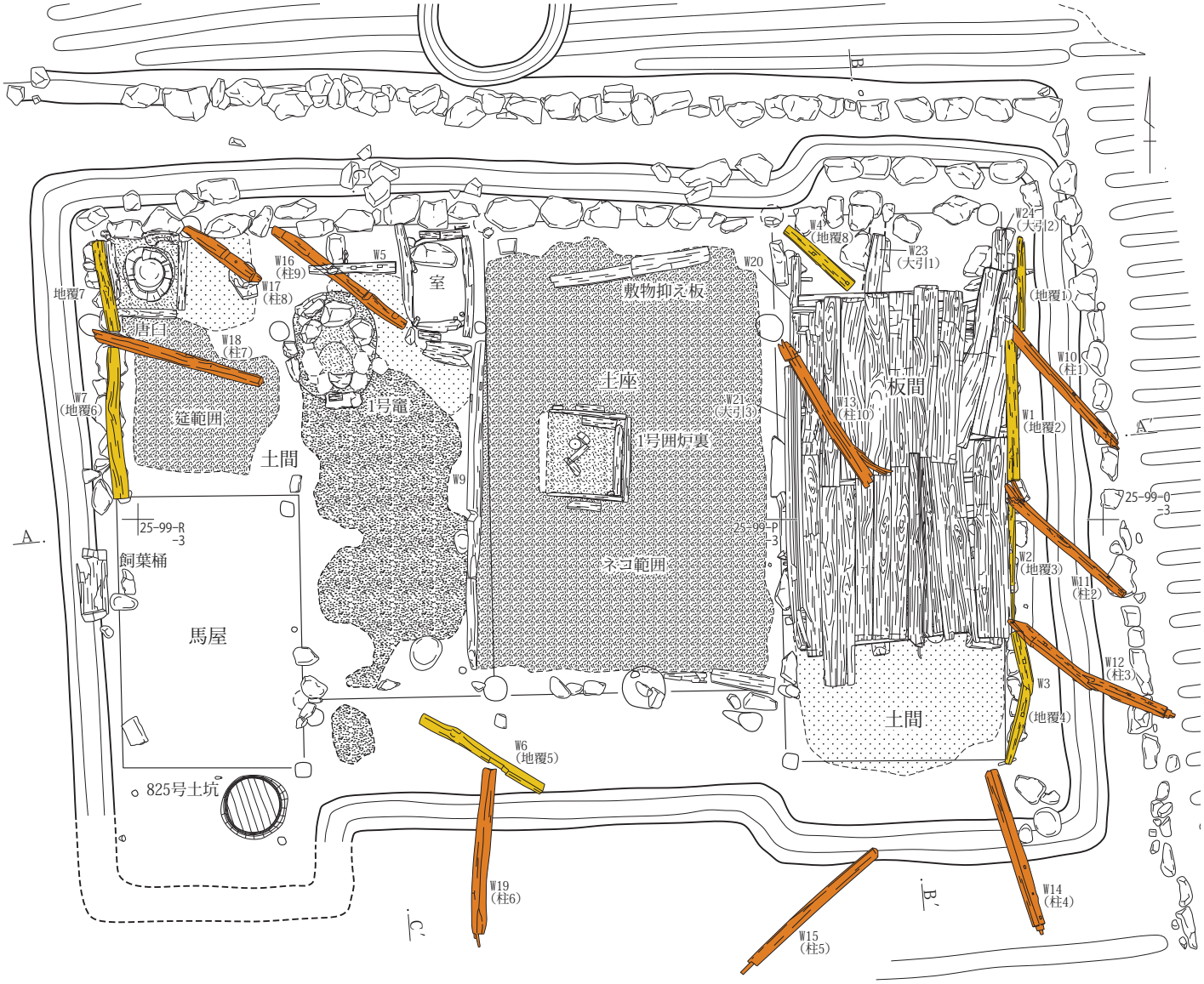
このように土座と土間の境に角材が良好に残っていた建物として12号屋敷42号建物がある。42号建物の土座と土間の境の角材は長さが約1.8mあり、角材が土間にずれて移動しないように土間部分に小さな杭が２本打ち込まれていた。21号建物では、杭は打たれていないが、下に石が置かれていた。この長い丸材（Ｗ９）は転用材であり、本来は柱であったものらしい。すなわち底部には掘立柱として埋められた根入れの腐食痕跡を残し、上端から55㎝と70㎝の２か所に長さ８㎝、幅３～４㎝の枘穴が直交した面に掘られていた。上端は一部欠損していたが、枘が造られていたことも考えられる。地上に現れている部分は上端まで2.7mと長いため、建物の上屋柱であった可能性がある。

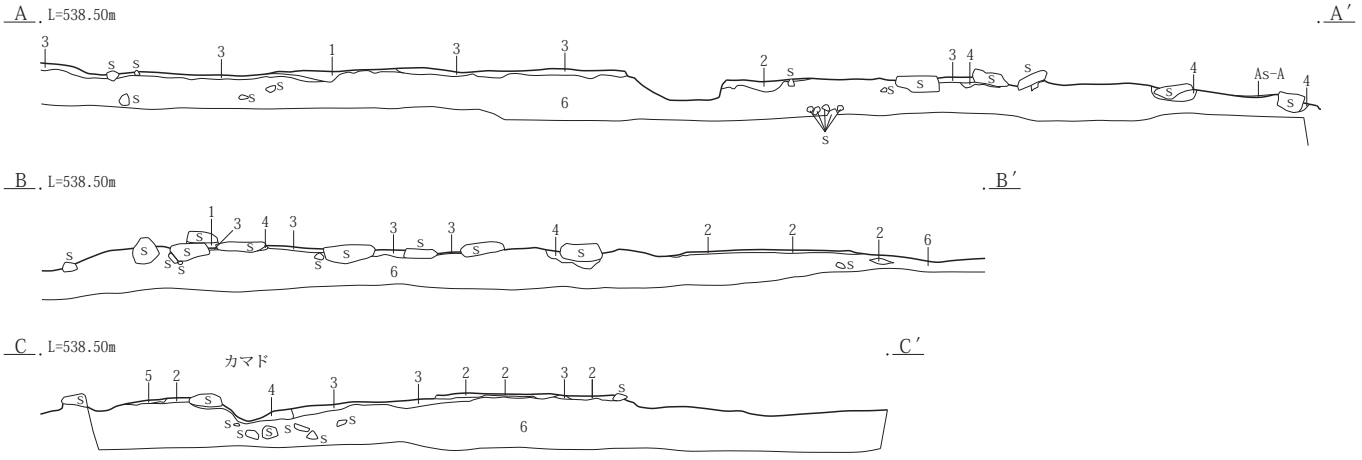
21号建物の中間の部屋を土座と解釈できたのは、土間の上に植物の茎等の痕跡がほぼ全面に残っていたからである。１号囲炉裏南方では南北方向に長い植物の茎と思われるものが、まとまってはがれた状態で多く残っていた。その茎のような植物の上にさらに別の植物質の物質が乗っていたようであるが､泥流により残りが悪かった。

囲炉裏北方の土座の北端には２枚の板が東西方向に並んで置かれていた（第80図、敷物抑え板）。その板の下には､敷物のネコが縦糸の縄まで良好な状態で残っていた。さらにその下には、ネコで使われている植物とは大きく異なる幅の広い茎や葉等が密集した植物が敷かれていた（この植物は苧殻あるいはガマの葉もしくは茎等と思われる）。このことより、土座のほぼ全面に残っていた植物の茎等はネコとその下に敷かれていた植物の茎と思われる。土座の中央部には土間を掘り込んだ囲炉裏（１号囲炉裏）が造られていた。

（５）板間

【概要・規模】掘立柱建物に伴う板間である。板間の板はほぼ全体が残っている。さらに床板を支える敷居・根太・大引、さらに敷居や大引を支える土台の石もほぼ残っている。この建物は現在まで伝統構法として残る土台建物ではないので、床の構造が土台建物と大きく異なっている。敷居と大引は、柱の内側に位置し、柱と一体の構造ではない。すなわち掘立柱の内側に置いた土台の上に造られている。土台はその下の石の上に置かれている。この土台の石は板間中央の南北にもある。掘立柱と掘立柱の間には、大引下の土台石とは別に、同様の石材を間断なく並べ、その上に壁下の地覆が間断なく置かれ、壁が築かれていた。西辺には旧敷居（W21）が転用さ



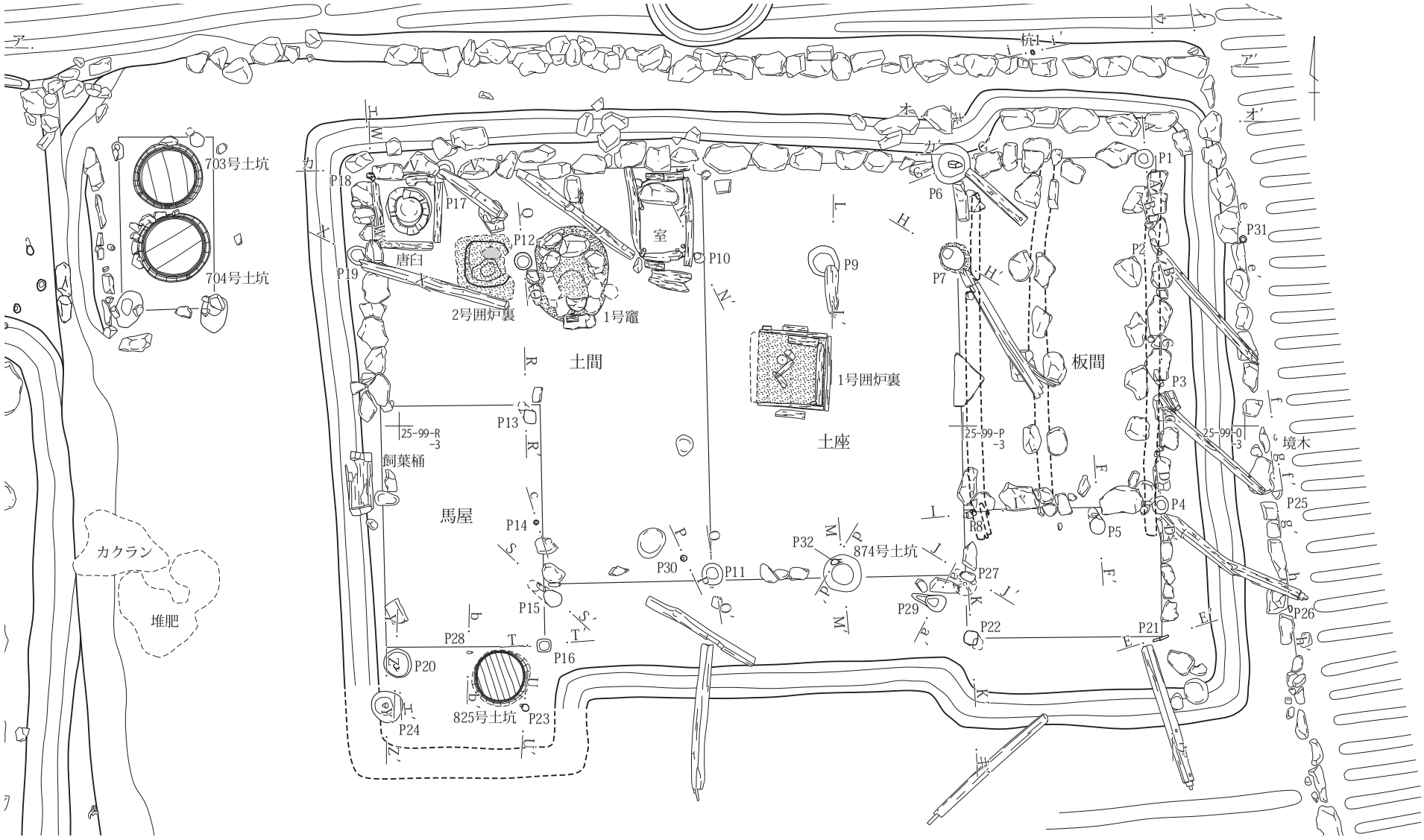


21号建物 A-A′ B-B′ C-C′

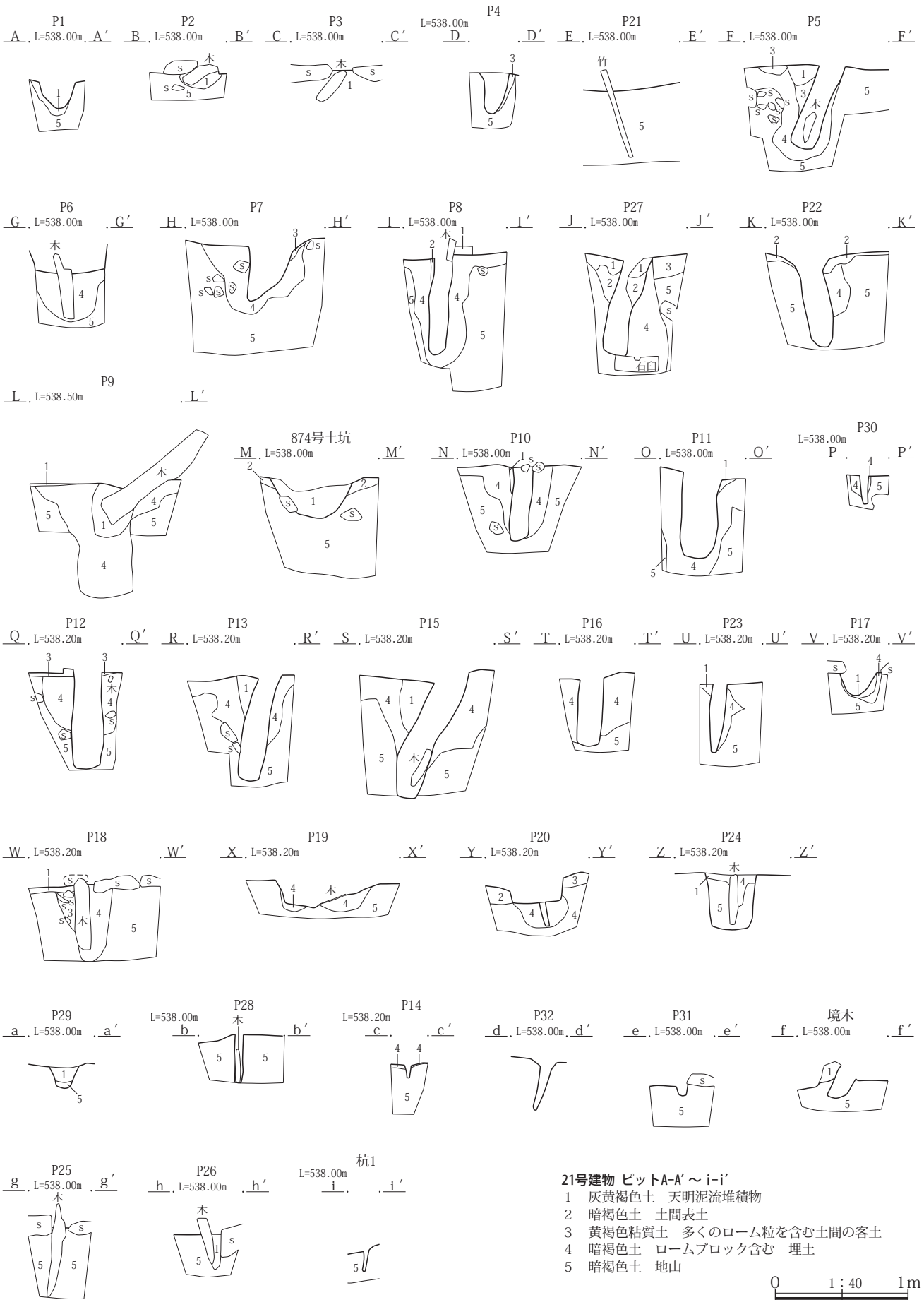
1　灰黄褐色土　天明泥流堆積物
2　黄褐色土　黄褐色土中に焼土粒・炭化物混入　土間の貼床
3　暗褐色土　橙・白・黄色粒子が多くみられる　硬くしまってる
4　黒褐色土　ロームブロック小(径0.5～２cm)を多量に含む　埋土か
5　灰白色土　灰白色土の灰と黄色の灰が層をなして重なっている　灰層か
6　地山

0　1：80　2m

第80図　5区５号屋敷　21号建物床面・柱・土台



第81図　５区５号屋敷　21号建物土台石

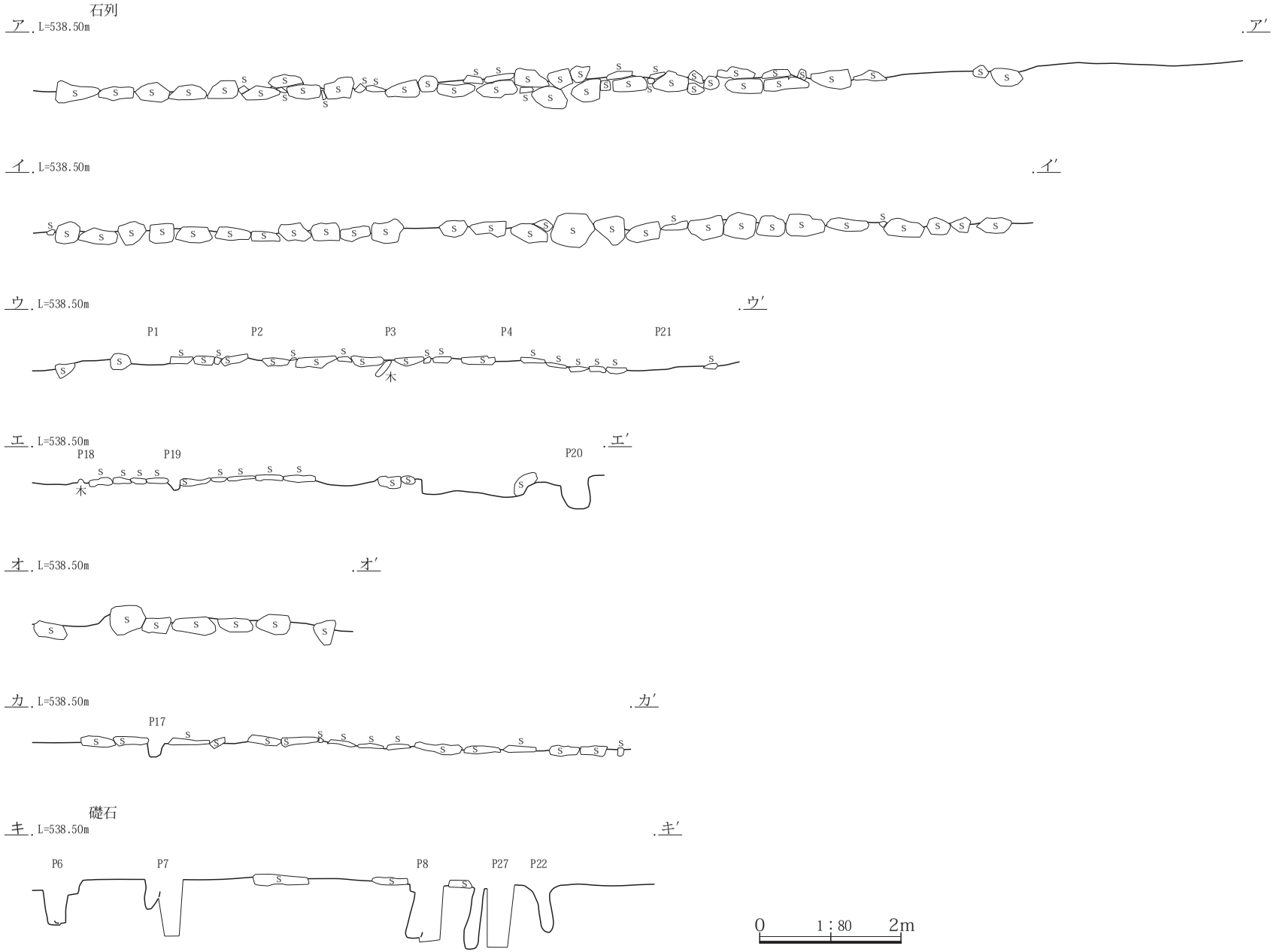


21号建物 ピットA-A′～i-i′

1　灰黄褐色土　天明泥流堆積物
2　暗褐色土　土間表土
3　黄褐色粘質土　多くのローム粒を含む土間の客土
4　暗褐色土　ロームブロック含む　埋土
5　暗褐色土　地山

0　1：40　1m

第82図　５区５号屋敷　21号建物ピット断面



第83図　5区5号屋敷　21号建物石列・土台石等断面

れていたが、その南北に掘立柱が立てられていた。21号建物は掘立柱建物であり、床は、柱筋の材に組み込まれることなく柱筋の内側に石材の上に大引・根太置等を置いて板を貼る構造であった。

床板を撤去すると､床下は天明泥流下で埋まっていた。それを撤去すると、明らかに天明泥流と異なる地表面が残っていた。その面は、全体に水平ではなく雑な感じである。部分的には地山の石と思われる小さな石がまとまっていた。土間のような密な地表面ではなく、また土座のような植物質が敷かれていた痕跡は全くなかった。したがって板は当初から造られたものであり、土間や土座が後に板間として改造されたことは考えにくい。３号屋敷18号建物や東宮遺跡５号建物は土台建物であるが、同じように柱に大引を組み込まず建物の土台とは別の土台を建物内側に配置し、大引や根太を配置し、その上に床板を張っていた。このような構造の板間を置床と仮称したい。

板間の規模は、南北約5.2m、東西は敷居部分を省いて約2.7mである。

(ア)床板

【概要・樹種・規模】床板は南北２列に配置されていた。北部に９枚、南部に12枚置かれており合計21枚である。泥流等により全体が南側に少し移動しているが、板の配置はほぼ原位置を保っている。板に釘の痕跡は全くないので、釘等により根太に固定されることはなかったようである。すべての板を取り上げて実測や樹種同定したわけではないが、現地での実測図や取り上げた板の実測や樹種同定の結果から以下の点を指摘できる。

南部の12枚の板は、長さ約251㎝、幅約22㎝で樹種同定６枚の結果はすべてクリであった。

北部９枚の板は、長さ約226㎝、幅約30㎝と北部の板より長さが短く、幅は広かった。９枚の中で、樹種同定した４枚中２枚がカツラで、他の２枚がそれぞれマツ科とクリであった。

写真(PL.69)で見ると北部東側の６枚の残りが悪く、樹種同定した西から７枚目の板はマツ科であり、劣化が小さいように見える。残りの悪い６枚中２枚はカツラであり、他の４枚もカツラであろう。ここからクリ14枚、マツ科１枚、カツラ６枚が床板として使われていたと考えられる。床板としてカツラが使われることは珍しいのではないだろうか。床板の厚さはクリが1.2㎝､マツが1.5㎝、カツラが２㎝である。樹種により厚さが異なっているようである。多くの材は両面に鋸の痕跡を残している。７枚の板の木口の端部には、幅５㎝ほど鋸で切り残した部分が残っていた(W31・W34・W36・W37・W39等第84図)。板は角材から１枚ずつ最後まで切り離すのではなく、最後の部分を残し、すべての板を切った段階で、付箋を１枚ずつ剥がすようにして作ったと思われる。板の側面は手斧で削られていた。

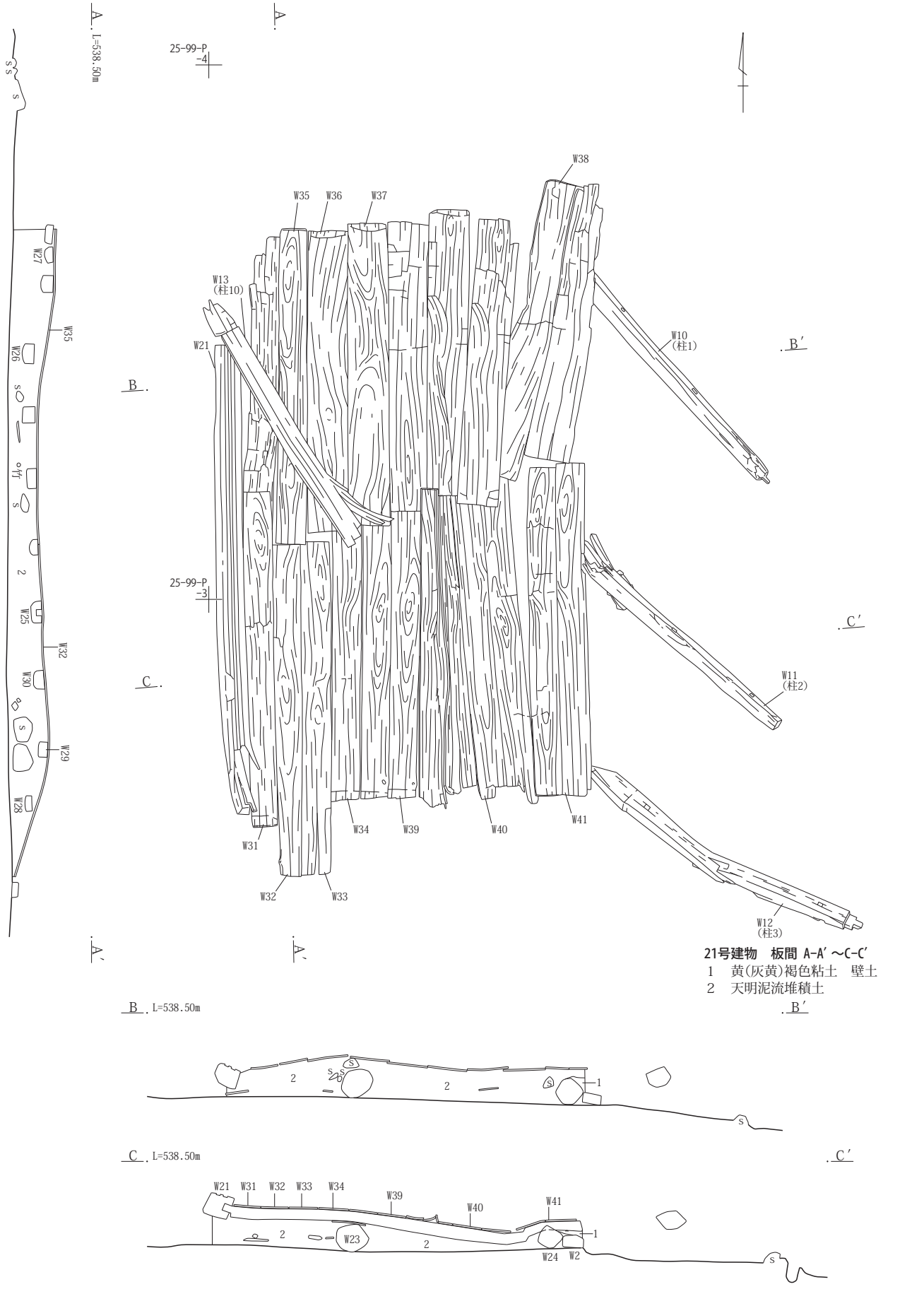
W31板は辺材部分の板である。芯材部分は鋸で切られていたが、表皮に近い辺材部分の表面は手斧等で削られていた。

(イ)大引３・大引１・大引２

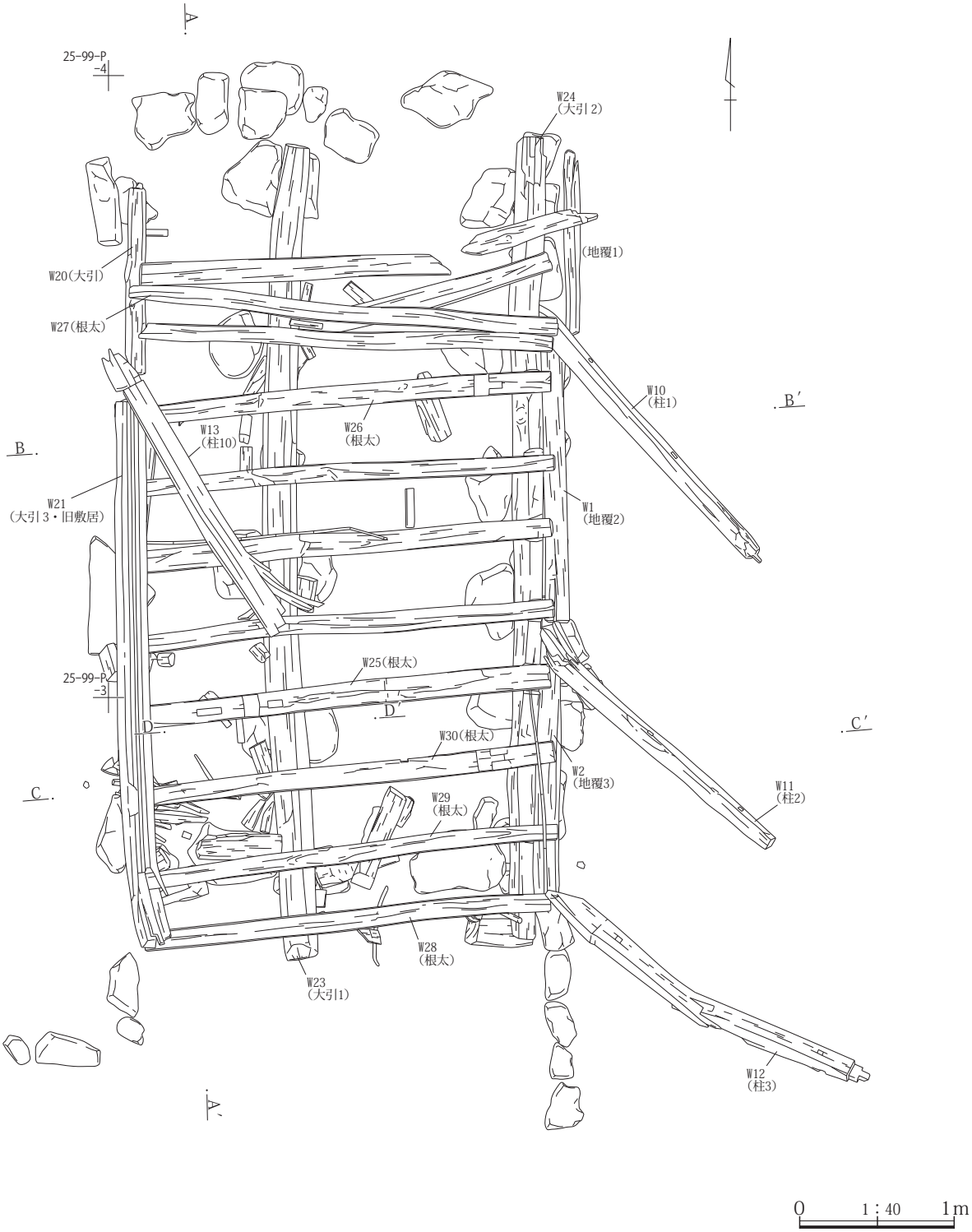
【概要・規模】大引とは「木造建築物において、最下階の床を支えるために設けられる横架材」(『図解建築用語辞典』オーム社 平成10年)、この定義によれば21号建物床下には、床を支えるための横架材が南北方向に３か所存在した。西端の旧敷居は根太を固定しており大引３とし、中央を大引１、東端を大引２と呼称した。

・大引３(W21旧敷居)　板間の西辺には長さ3.5m、幅17㎝、厚さ14㎝の方形に加工された大きな材が南北に置かれていた。上面は２本溝幅員2.5㎝が平行に彫られており、敷居としての加工が施されていた。側面には８個の枘穴が彫られている(南端２個の枘穴は残りが悪いが枘穴の痕跡が残る)。ここには６本の根太が頑丈に差し込まれ、南側２個の根太は枘穴の状態は良好ではなかったが、枘穴の位置に根太が固定されていた。枘穴の大きさは横幅８㎝、縦幅４㎝、深さ８㎝前後であり、同じ大きさではない。南北両端の木口には、枘があり、柱等に組み込まれるための加工と思われる。21号建物は掘立柱建物であり、大引や土台は柱に組み込まれないので、他の建物から転用された材と思われる。

W21の南と北には柱穴があり､北側の柱10(W13)が南東方向に床板上に倒れていた。その柱穴の北側には別の角材(W20)が置かれていた。この材は長さ60㎝､幅９㎝と東側の大引１より小さい材である。側面に枘穴はなく、根太はこの材の上に場所は少し移動していたが３本置かれていた。出土状態の北端には枘が造り出されており、この枘に組む材はないため､これも転用材であろう。W21の南端の柱穴に伴う柱は残っていなかった。



第84図　５区５号屋敷　21号建物板間の床板



第85図　５区５号屋敷　21号建物板間の柱・大引・根太

・大引１(W23)　板間の中央付近で南北に渡された大引１は、板間の東西幅１間半(約276㎝)の中間ではなく、東から約１間の位置にあり、長さ523㎝、直径20㎝前後の少し湾曲した材である。表皮を除去した程度の丸材を一部加工した材である。根太11本がこの上に置かれていた。11本中北側の２か所と南側１か所に根太を受けるための掘り込み(幅12㎝、深さ３㎝前後)があるが、中央部分５か所と北側１か所、および南側２か所に掘り込みはない。しかしこの部分にも根太は乗っていた。曲がって低くなっている南側２か所では、根太との間に薄い板を置いて不足する高さを補う飼物を入れていた(南のW29上の飼物がW22 PL.71-7)。

・大引２(W24)　東壁に接する大引２は長さ517㎝、直径20㎝前後の心持ち直材で四辺を少し削った隅丸方形断面の材である。根太11本がこの上に置かれていた。11本中、中央部の７本は根太を受けるための仕口(幅12㎝、深さ３㎝前後)があるが、北側の３か所と南側に２か所は仕口がない。この上に乗る根太の水平を保つために削る必要がなかったものと思われる。

(ウ)根太

【概要・規模】根太が東西方向に11本､ほぼ原位置を保った状態で残っていた｡根太の西側は大引３(W21旧敷居)の枘穴に差し込まれ､中央部は大引１の上､東端は大引２に置かれていた。

根太は約50㎝間隔で配置されていた。土台建物の場合は、この間隔を45㎝(1/4間)にとる例が多いので、この例はやや広い。

根太の大きさは同一ではないが､長さ約265㎝､幅12㎝､厚さ８㎝が多い。大引３(W21･旧敷居)側面の枘穴に差し込まれる部分は、その形状に合わせて枘を造り出しているが、東端で大引２の上に置かれる部分は根太が安定するように、７か所で大引２を削っている。そのため根太には特別な仕口を設けない。樹種は11本中10本がクリで１本がマツ科であった。

(エ)ネコと筵

【概要・規模】板間の床板の上にはネコや筵の痕跡が残っていた。すなわち、板間の上にはネコが、さらにネコの上の一部には筵が敷かれていたようである｡その範囲は、明確でないが、床面のほぼ全面に敷かれていたと推定される。泥流による埋没後、風触等により良好な状態では遺存していなかったものの、桶・箱・仏壇等の下ではそれらが残っていたためである。特に広い範囲で板間の中央西部を覆っていた仏壇の下には、ネコとその上には筵が良好な状態で残っていた。ネコの下に植物の茎等はないので、土間と違い板間には直接ネコを敷いていたことがわかる。このようにネコの上に筵を敷く例は、12号屋敷42号建物でも確認されている。42号建物では、土間の上に植物の茎等が厚く敷かれ、その上にネコが、さらにその上に筵ではなくゴザが敷かれ石臼が置かれていた。ゴザは石臼の下周辺に限定されており､このゴザは、筵より目が細かかった。このようにネコの上の筵は仏壇を置くための特定の場所に敷かれたものらしい。仏壇の北西に接した位置には１号収納箱(W98)が置いてあった。この箱の下にはやはりネコが良好な状態で残っていた(PL.98-8)。ネコの上に筵はなかった。

倒れた仏壇の南側にもネコと思われる植物質が残っていた。板間の項で説明したように、板間の床板は、根太の上に整然と敷き詰められていたが、釘等で固定されていなかった。このため、床板は移動しやすい。その上に敷かれた厚いネコにより床板の移動を防いだと推定する。その意味でも板間の上にはネコを敷いたと考えられる。

(オ)板間南の土間

【概要・規模】板間の南には土間がある。間口2.8m、南北１間(約180㎝)の範囲に黄褐色土が敷かれていた。その土は建物内西部の１号竈の南に敷かれていた粘土質の土によく似る。この黄褐色土は板間の下には延びないので板間と併存することは明確である。さらにこの部分は西側の土座より遺物南辺が半間ほど南に広がっている。雨落溝も同様に半間近く南側に迂回しているので、この部分に屋根が存在したことが明らかである。このように板間の南側が半間ほど突出する建物は、他に８号屋敷30号建物でも認められる。８号屋敷は、蔵を持つ大きな屋敷である。

通常の屋根より半間長くなると、屋根が90㎝前後低くなる(叉首構造の屋根勾配45度とした場合)。そのためこの部分は、主屋とは別構造の屋根が造られていたと思われる。板間は特別な部屋であり、この南に位置する土間部分は板葺の下屋等が造られていたと想定したい。

（６）掘立柱

【概要・規模】10本の掘立柱（柱１～10）が南東方向に倒れて残っていた（第80図）。すべて掘立柱であり、埋まっていた地中部分から上端の枘まで残っていた柱が２本、他の柱も唐臼北側のW17の柱以外は地中から上が大部分残っていた。南中央部分の２本の柱（W15・W19）は南側に少し移動していたが、他の柱はほぼ柱穴の位置から倒れており、各柱の位置をほぼ知ることができる。

掘立柱が良好に残っていた建物は51号建物とこの21号建物だけである。この柱の検討と、残っていた土壁、大戸と思われる板戸等の存在から、建物構造の特徴を知ることができる。

（７）土台石の配置

21号建物は掘立柱建物であるから、柱は他の柱や壁と支えあわなくても独立して立ち、土の中に60㎝前後深く埋められ固定されている。一方、土台建物の場合、１本の土台の上に数本の柱を立てる。土台と柱とは枘で結合されるが、独立柱として立つのは難しく、他の構造材・壁材（土壁）等と組み合わせることで安定する。土台は土の上に直接置かれるのではなく、大きな石の上に水平に置かれる。この土台下の土台石は、半間程度の間隔で置かれることが多い。そのために多くの土台石が必要である。

土台石の機能は、土台を直接土の上に置くと、腐朽しやすいこと、また土台の不等沈下防止と思われる。

柱と柱の間の下部に設け壁を受ける材を地覆と呼ぶ。地覆の腐朽防止や水平の確保のために置く石材を一般に地覆石と呼ぶが、ここでは他と比較するための土台石の名称を用いることとする。21号建物と同じ掘立柱建物である９号屋敷14号建物・12号屋敷42号建物・50号建物・51号建物では、土台石は使われていない。

しかし21号建物では、正面（南面）では少ないが、他の西・北・東面部分ではたくさんの土台石が使われていた（馬屋西壁部分以外）。その土台石も、建物外周の石は、密集して直線状に置かれているが、板間の大引下の石は、半間前後の間隔をあけて置かれていた。明らかに使われ方が異なる。以下、土台石の用い方について説明する（第86図）。

（ア）板間大引下の土台石

板間は、前述のように南北３本の大引、大引に直交する11本の根太、その上に直交する床板21枚が置かれていた。３本の大引の下には土台石が置かれている。大引３（W21）の下には中央部に長軸75㎝、短軸40㎝の平石が置かれ、その石の南150㎝付近には、長軸60㎝、短軸30㎝の上部が平らな土台石が置かれていた。大引３北側の柱（P7）の北の柱間北部には長軸60㎝、短軸50㎝の石が置かれていた。この上に南側では大引３、北側で短い大引（W20）が置かれていた。土台石は１列であり、その上に大引３等が置かれているのである。しかし中央の大引１（W23）の下には、大引１を左右から挟み込むように長軸40㎝、短軸30㎝前後の石が２個セットで５か所に並べられていた。石の南北の間隔は約120㎝である。大引の両側面体を２個セットの石で支える配置である。

大引２は、大引１同様に左右から挟み込むように西側には６個、東側は柱間に間断なく並べた９個の石の間に挟み込むように置かれていた。石の大きさは大引１で使われていた石と同様である。

（イ）土壁下の土台石

掘立柱の間には土台石が間断なく並べられている。柱部分にはないので、その部分だけ石列が途切れることになる。この上に、角材を半裁したような材（地覆）が東壁下ほぼ全面、北壁下の一部、西壁下の北側から出土した。地覆の下全面にこの土台石が敷かれている。

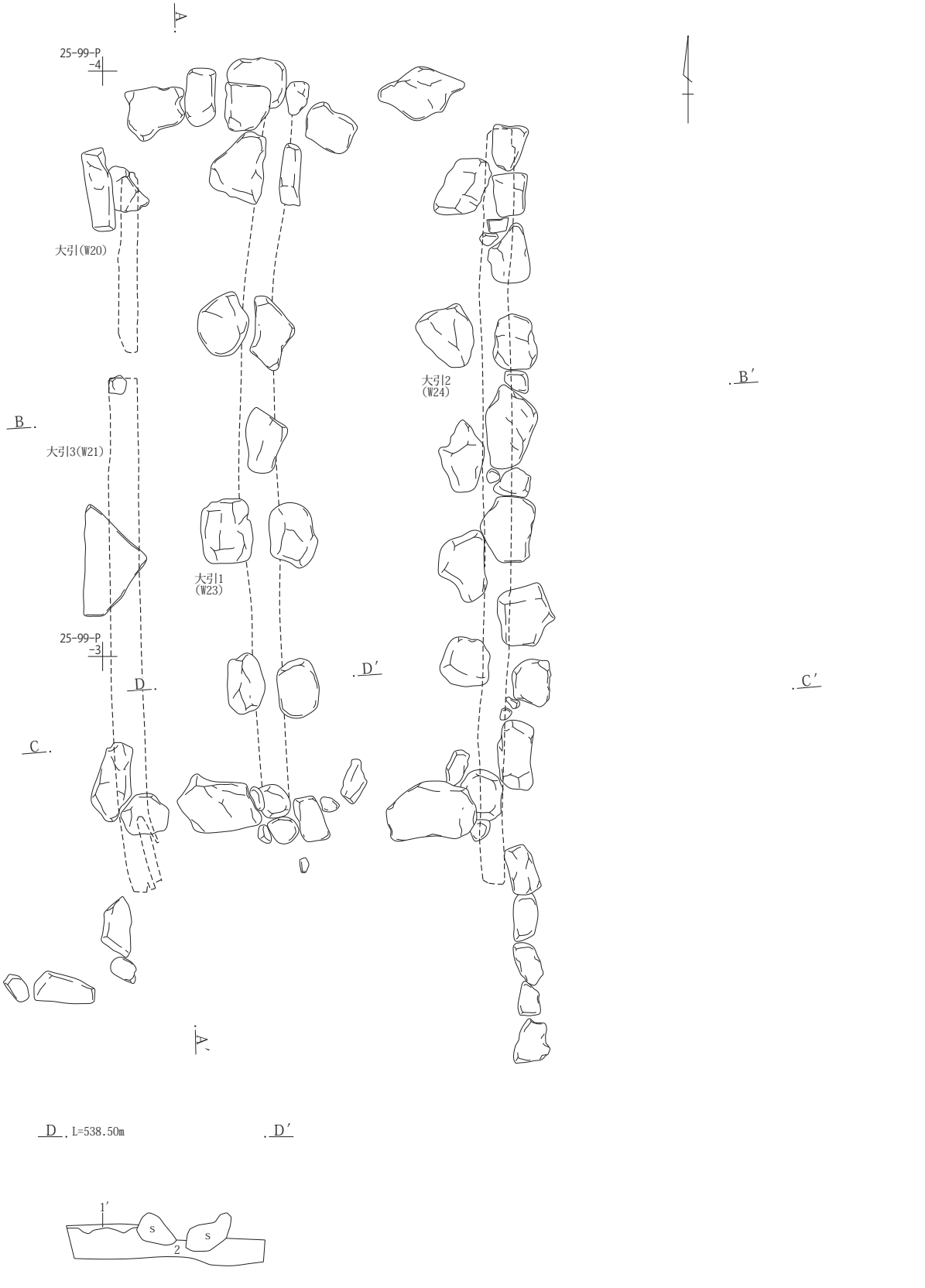
（８）壁

（ア）土壁・竹草壁

土壁の一部が良好な状態で残っている例は、東宮遺跡６号屋敷11号建物、同８号屋敷16号建物、西宮遺跡３号屋敷５号建物等があるが、数は多くない。

外壁の大部分は、土壁が泥流で倒れたため残ることが多かった。倒れる場所が、建物裏の石垣や、畑の場合は、泥流により埋まるために、残存状態は良かった。倒れる場所が土間・板間等建物内の場合は、建物内の生活用具や建築部材等と複雑に絡み、水平に倒れないためか、残りが悪かった。

そうした土壁を用いる建物は大部分が土台建物であり、下田遺跡17号建物のような掘立柱建物の類例はほとんどない。土台建物では柱どうしを横方向につなぐ複数の貫があり、柱と柱や貫と土台等の間に間渡棒を軸木として木舞を設置し、その表裏を土壁とするのが一般的である。掘立柱建物の場合、柱に貫を通さず柱と柱の間に



第86図　５区５号屋敷　21号建物土台石の配置

は太い間渡棒や間渡竹が縦横に３本以上組まれている。これらの間渡棒や間渡竹を軸木とし、多くの割竹や草等を用いて壁としている。これらの壁材の多くは、旧地表の上に倒れていた。壁土は、その痕跡が良好に残るはずであるが、全く残っていない。すなわち、これらの壁は割竹を中心に組んで、一部に草壁を組み合わせた壁であったと考えられる。ここでは、竹草壁と仮称することとする。

北西方向から押し寄せた泥流により、建物北面の竹草壁は建物内の床上に、東面の竹草壁は建物東外の雨落溝の上面付近に、南面の竹草壁は建物南外の雨落溝付近にそれぞれ倒れていた。地覆や土台石の存在から、竹草壁があったのは西面北側、北面の大部分、東面の全面、南面では、土座と土間の境南１間と思われる。このような地覆や土台石がないため、竹草壁がないと考えられる場所は、馬屋の西面と南面、土間南の出入口となる大戸部分、土座南の西半間部分、板間南面と思われる。

壁の間渡棒や間渡竹といった下地材が良好に残っていたのは、建物外周の北壁、東壁①、東壁②、東壁③、南壁①、南壁②、板間西壁の７か所である（第79図）。以下詳しく説明する。

(イ)北壁

板間の北部床面上に、南東方向に倒れ、大部分は、板間の床板から少し浮いた状態で残っていた。割竹が南北方向(壁の縦方向)に一定間隔に20本以上平行に並び、それを３分する位置に、やはり縦方向の間渡棒(間柱)が２本組み込まれていた。その下面(室内側)には割竹に直交する横方向の丸竹が上・中・下の３か所に配置されていた。横方向の間渡竹であろう。上面(室外面)の縦方向の割竹の下(室内面)には、後述する南壁①のような横方向の割竹は配されてはいなかった。そこには萱や苧殻に似た細長い植物の茎と思われるものが、小さな束となって横方向に並べられていた。縦方向には割竹、室内側には横方向の植物の茎の束が直交して壁の下地材を構成していたようである。壁の範囲は東西約170㎝、南北約160㎝である。

(ウ)東壁①

板間東面の北から２間目の壁面である。１間目の壁は残っておらず詳細は不明である。２本の倒れた柱の間から出土した。北側の柱１(W10)は根入れ部分から上端の重ね枘まで残っている。柱の南北両側面には３個の枘穴がある。南側の柱２(W11)は、根入れ部分は残っていないが地上部分と上端の重ね枘まで残っている。柱の南北両側面には２個の枘穴が残っているが、欠損した下部に１個の枘穴があったと思われ、両面３個の枘穴があったと思われる。この２本の柱の間に上面(室内側)には横方向の割竹、その下(室外側)には、縦方向の割竹が並べられていた。割竹の下には壁土として用いたと思わせるローム等を主とした土はなかった。底部には板材の地覆２(Ｗ１：長さ約173.0㎝、幅約16.0㎝及厚さ6.0㎝)が１本置かれていた。上面には３か所の枘穴(両端円形、中央は方形)を彫り、そこに縦方向の間渡棒を立て、一方両側の柱側面に差し込む横方向の間渡棒３本を軸木として、室内側は草壁、室外側は竹壁が造られたものと思われる。残っていた割竹の範囲は幅約170㎝、高さ約130㎝であった。

(エ)東壁②

板間東面の北から３間目の壁面である。２本の倒れた柱の間から出土した。北側の柱２(W11)は先述のように柱の南北両側面に３個の枘穴があったと思われる。南側の柱３(W12)は土中の部分から上端の重ね枘部分までほぼ全体が残っており、柱北側面には３個の枘穴がある。この２本の柱の間に格子状に組んだ割竹が残っていた。割竹は上面に横方向の割竹、その下には、縦方向の割竹が並べられていた。その割竹の下にはローム等を主とした土壁はなかった。底部には板状の地覆３(Ｗ２：長さ約166㎝、幅約15㎝、厚さ7.5㎝)があり、この上面には枘穴３か所(両端円形中央部は長方形)が設けられていた。これらの様相は東壁①と同じであり、東壁①と同じ仕様の壁が設けられていたと考えられる。柱間のほぼ中央の位置には、柱と同じ方向に丸断面の間柱(長さ約18㎝、太さ約６㎝)が倒れていた。残っていた割竹の範囲は幅約120㎝、高さ約180㎝であった。

(オ)東壁③

板間南の土間東面に位置し、２本の倒れていた柱の間から出土した。北側の柱３(W12)は先述のように土中部分から上端の重ね枘まで残り、柱の南側面には４個の枘穴がある。南側の柱４(W14)は、土中部分は残っていないが地上部分および上端の重ね枘まで残っている。柱４の北側の面には枘穴が４個ある。

倒れていた壁は、上面に割竹はなく、苧殻に似た茎が横方向に大量に残っていた。これをここでは苧殻等と仮称する。苧殻等の上には２本の柱を繋ぐように細い木が２本残っていた。苧殻等を除去すると、その下には、割竹が縦方向に密集して並べられていた。割竹の下には壁土に用いたと考えられるローム質の土はなかった。この柱間の底部には板状の地覆４長さ約170㎝、幅約12㎝、厚さ未計測、上面に枘穴３か所(PL.78-5)が置かれていた。この地覆４の上面に差し込む縦方向の間渡棒３本と、両側の柱側面に差し込む横方向の間渡棒４本を下地材として、室内側は苧殻等を並べた草壁、室外側は竹壁が造られたものと思われる。竹壁の間には割竹と同じ縦方向の細い木材が３～４本が設けられている。また苧殻等は２本の細い木で外側から押さえられていたものだろう。このような壁の構造は、これまで全く想定していなかった。残っていた範囲は幅約170㎝、高さ約170㎝である。

(カ)南壁①

土座南の雨落溝からその外側の前庭部分に倒れた状態で残っていた。割竹や丸竹が上面(室内側)では横方向、外面(室外側)では縦方向に並べられた状態で、良好に残っていた。上面(室内側)の竹は大部分が割竹であるが、横方向に上・中・下に３本の丸竹が含まれていた。下面(室外側)の竹は大部分が割竹であるが、西に丸竹、中央部に丸断面の木材が含まれていた。東には遺存していなかったが、丸竹があったものと思われる。これらは、いずれも間渡材で横方向では３本とも丸竹、縦方向では中央部分に木の棒が丸木、両端を丸竹としていた。地覆５(Ｗ６)には両端部に枘穴があるが、中央にあるはずの枘穴はみえない。他の地覆は３か所の枘穴をもち、両端が丸い枘穴で、中央部が長方形の枘穴をもつものがある(Ｗ１・Ｗ２)等。縦方向の間渡材は東壁③のように中央は竹でなく木材を使い、壁の重量を支持する間柱の役割を担っていたと考えられる。

組まれた竹の範囲は東西170㎝、南北250㎝であり、東西幅は土座南の柱間(Ｐ27-Ｐ32)の寸法とほぼ一致する。高さ250㎝は、地覆と上屋桁までの高さであり、この高さからみて上屋柱間に設けられた壁と考えられる。すなわち、上屋柱の長さは250㎝と考えられる。

(キ)南壁②

土間南の建物出入口付近から南側の雨落溝上に倒れた状態で残っていた。南壁①同様、壁の残りは悪いが、割竹や丸竹を上面(室内面)では横方向、下面(室外面)では縦方向に並べた状態で残っていた。南壁①と大きく異なるのは、南壁①では竹を主とし、板材等は全く出土していないのに対し、南壁②では東側が割竹であるが、西側は、板戸と思われる板材が多く残る点である。割竹と板戸は板戸が室内側、割竹が室外側となり中央の幅50㎝前後の範囲で重なっていた。この板戸の横木(桟木)の長さは、1.2ｍ以上ある。一般的な板戸の横幅は約90㎝であるので、残りが悪いが、この板戸は、幅150㎝前後の大戸であった可能性がある。室内側に設置されていた大戸が、室外側の壁とともに天明泥流により南側に押し倒されたものと思われる。残っていた割竹の中に丸竹を確認することはできなかった。割竹の遺存範囲は幅約１ｍ、高さ約140㎝であった。

(ク)板間西草壁

板間の西面で、土座と板間の境部分から板戸と思われる建材と大量の草壁が大引３(W21)にもたれかかって東側の板間に覆い被さるような状態で出土した。壁材は柱10(W13)の南側にあり、北側からは出土してない。板戸と思われる建材は、太い横方向の桟木(長さ約120㎝)と細い縦方向の桟木が方形に組まれていた。その外側に幅30㎝前後の縦方向の薄い板が太い横方向の桟木で固定されていた。最下部は土座に接している。その内側(東側)には、東壁③と類似する同様な草壁が良好な状態で残っていた。

厚い草壁は、西側に草壁を押さえるための丸竹が水平方向に配されていた(草壁外側)。この丸竹を固定し、草壁を押さえる丸棒が草壁の内側に想定されるが、この丸棒は確認していない。この草壁の構造は、東壁③に近く、また51号建物西壁の草壁と共通する。ここで確認された板戸と思われる建材と草壁は、板間西面を仕切る壁ではなくて、本来の草壁が、泥流により押されて板間西面の大引３(W21)部分まで移動したものと考えられる。これが妥当であるなら、21号建物は、草壁と竹壁が混在した壁から成る建物であった。草壁と板戸と思われる建材が密着した例はこれまでにない。草壁の外側に建材が固定されていたのか、あるいは近くに板戸が存在しており、泥流で移動した段階で重なったかについては不明である。大引３(W21)は旧敷居だが、この建物では、これ

を利用したわけではなさそうである。

（9）地覆

掘立柱の間には土台石が連続して並べられている。その上に角材を半裁したようなゴヒラの材(壁を受ける地覆)が東壁下ほぼ全面、北壁下の一部、西壁下の北側から８個出土した。材の上面は丁寧に加工されており、２～３か所の枘穴があけられている。東壁中央部分の地覆２(Ｗ１、長さ172㎝、幅16㎝、厚さ６～８㎝)では、上面に３個の枘穴があり、両端は丸形で中央部は長方形である。丸い枘穴は直径３㎝、深さ1.2㎝前後、長方形の枘穴は９×４㎝前後、深さ1.2㎝前後である。下面は割肌的で加工なく波打っている。この材は同様の枘穴がある壁下地の間渡棒を受ける枘穴でこの南の地覆３(Ｗ２)も同様と思われる。地覆２の両端に立っている掘立柱１(W10)と柱２(W11)には、向かい合う側面に３か所の枘穴が彫られている。柱により異なるが、この枘穴は全て方形であるものや長方形と円形のものが組み合わさったものもある。地覆と両端の柱にはそれぞれ３個前後の枘穴があり、桁は残っていないが、おそらくその下面にも同様の枘穴があり、縦方向３本、横方向３本の壁下地となる間渡棒が差し込まれていたと考えられる。

(10)雨落溝

建物を囲むように雨落溝が造られていた。側柱から雨落溝中央部までの距離は、東西南北とも約60㎝である。北面東部は、50㎝前後北側にせり出しているが、この部分は地形的に土間部分より約20㎝低いので、補強して積まれた石列の外側に雨落溝が造られた結果と思われる。南面東部の板間部分で、南側に50㎝前後せり出している。馬屋部分には明瞭な雨落溝は残っていなかったが、馬屋桶(825号土坑)の上に簡単な屋根が架けられていたと思われる。板間部分は、その南に約１間×１間半の土間が造られている。馬屋東隣の土間部分の出入口とは別の出入口が造られていたと考えたい。それに伴い主屋の屋根とは別の屋根が架けられていたと思われる。

第３項　竈と出土した釜(第91図、PL.79・80)

【位置・概要】１号竈が土間北部に造られていた。石とロームを用いており、他の多くの竈と同じ構造である。この竈の西に接して囲炉裏に似た方形の遺構があり、多くの灰が残っていた。調査担当は２号竈としたが、石を積み上げた形跡はなく、構造からみて炉に近い。この遺構は竈に接して造られており、同時存在していたと思われる。用途や名称は明らかでないが、囲炉裏に近い構造なので、２号囲炉裏として報告する。ここでは竈について報告する。

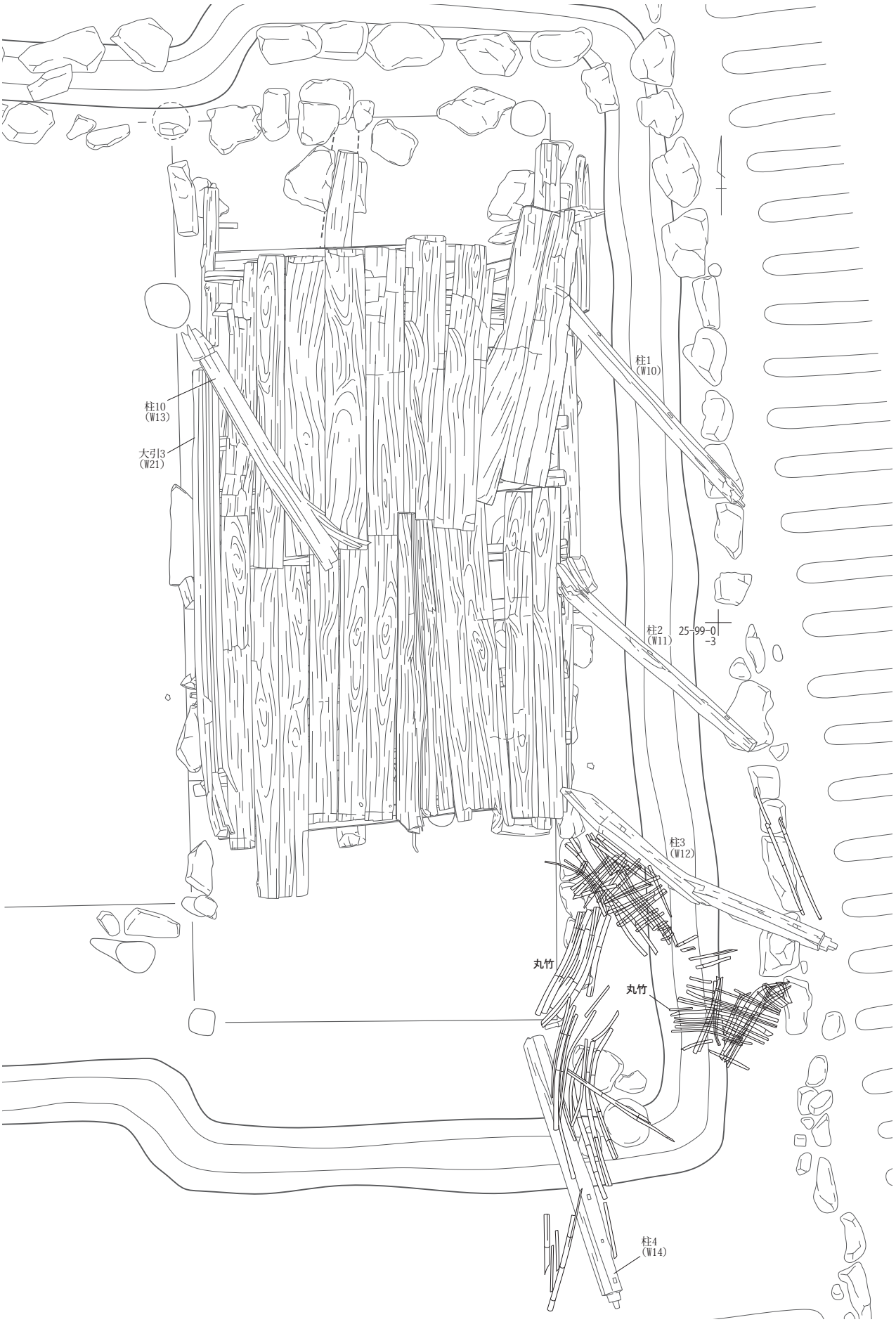
土間の中央奥に、竈が造られていた。竈の北東約50㎝の位置に室、西約50㎝の所に２号囲炉裏、南東約２ｍに囲炉裏がある(第81図)。竈の左袖部分に接して建物上屋柱が立っていたであろうＰ12の柱穴が掘られている。竈は細長い自然石を左右袖石として各３個、奥壁部分に大きな石を１個置いて、基本的な構造材としている。多くのロームを石のまわりから竈上面まで積み上げ、釜を据えられる構造としていたようである。竈は泥流により北側から土間のある南側に押されて崩れかけていたが、基本的な構造を知ることができる。竈に架けられた状態で鉄釜No.47が残っていた。この釜は接合後ほぼ完形となった。口径59.2㎝、高さ33㎝、底径33㎝、頸部の幅45㎝、頸部からの深さ21㎝である。竈に架かる頸部の大きさが45㎝あるので、鍋を架ける竈天井部の広さはこれ以上の径であったことがわかる。

【規模・形状】竈を作るため積まれていた石の残りが悪く、竈の高さは不明である。竈の外側は両袖方向１ｍ前後、内側50㎝前後、奥壁方向外側で1.5ｍ、前後内側60㎝前後と思われる。

燃焼部下には、焼土粒が残っていたが灰はほとんど残っていなかった。

【所見】これまで多くの遺跡で、竈の調査は行われてきた。しかし大部分の竈は竈上部が天明泥流等により壊されており、竈の上にどのような釜が架かっていたかについて知ることはできなかった。また天明泥流により、埋没する段階で全ての竈に釜が架かっていたわけではないことが、最近の西宮遺跡や東宮遺跡の発掘で確認できている。しかし、21号建物や３号屋敷16号建物・14号屋敷41号建物の調査例から、竈には頸部径50㎝、深さ25㎝の大きな鉄釜で口縁部が大きく「く」の字状に外反し、取っ手がなく、底部に３か所「トチン」の突起を持たない鉄釜であることが確認された。頸部下の容量は40リットル前後と思われる。建物からの出土は、基本的に１個である。この釜は囲炉裏からの出土はなく、竈専用と思われる。

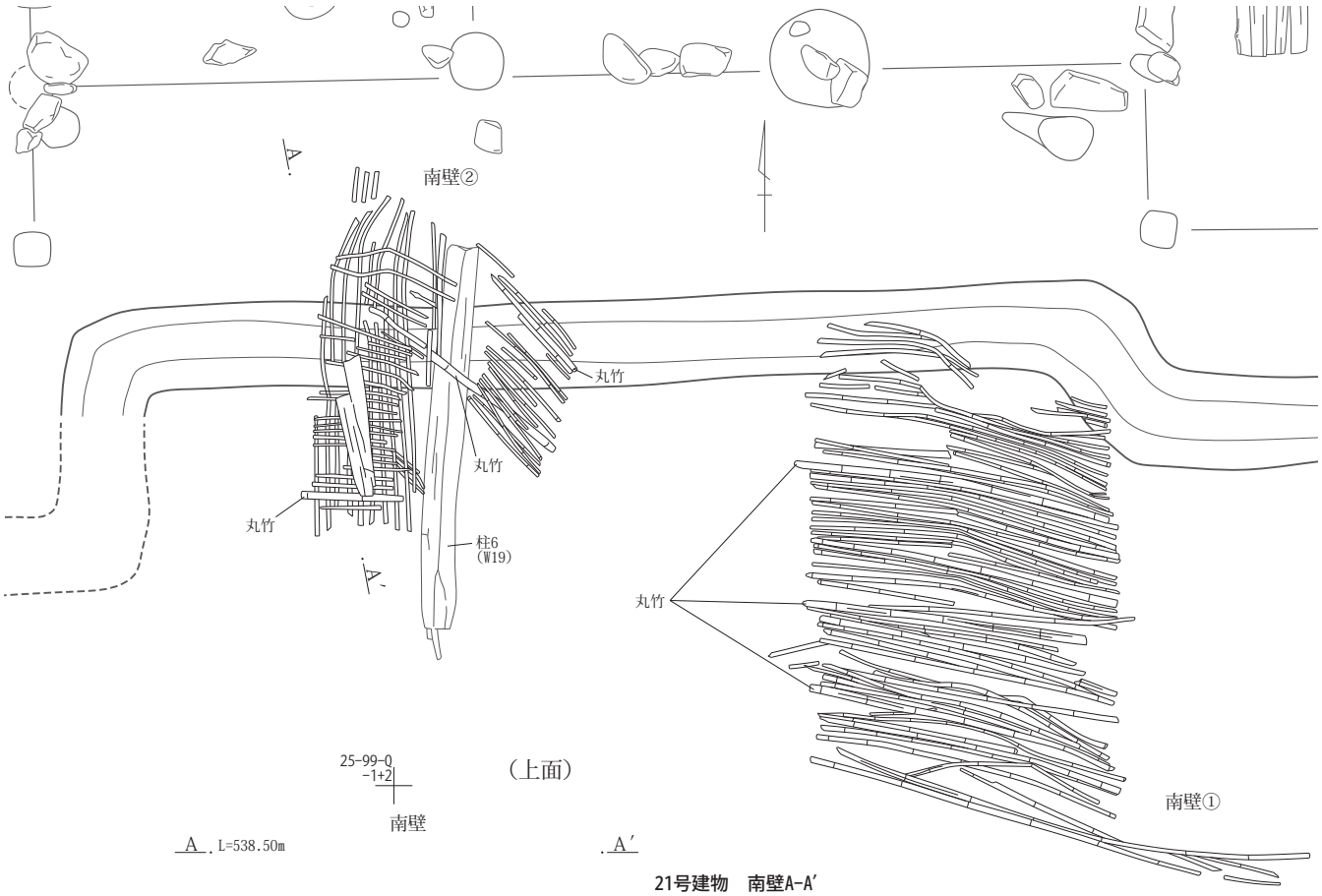
囲炉裏で使用された鉄鍋は、囲炉裏の上に自在鉤等で



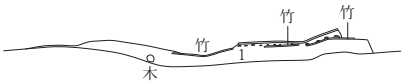
第87図　５区５号屋敷　21号建物壁材１

第88図　５区５号屋敷　21号建物壁材２（上面）

第89図　５区５号屋敷　21号建物壁材３（下面）



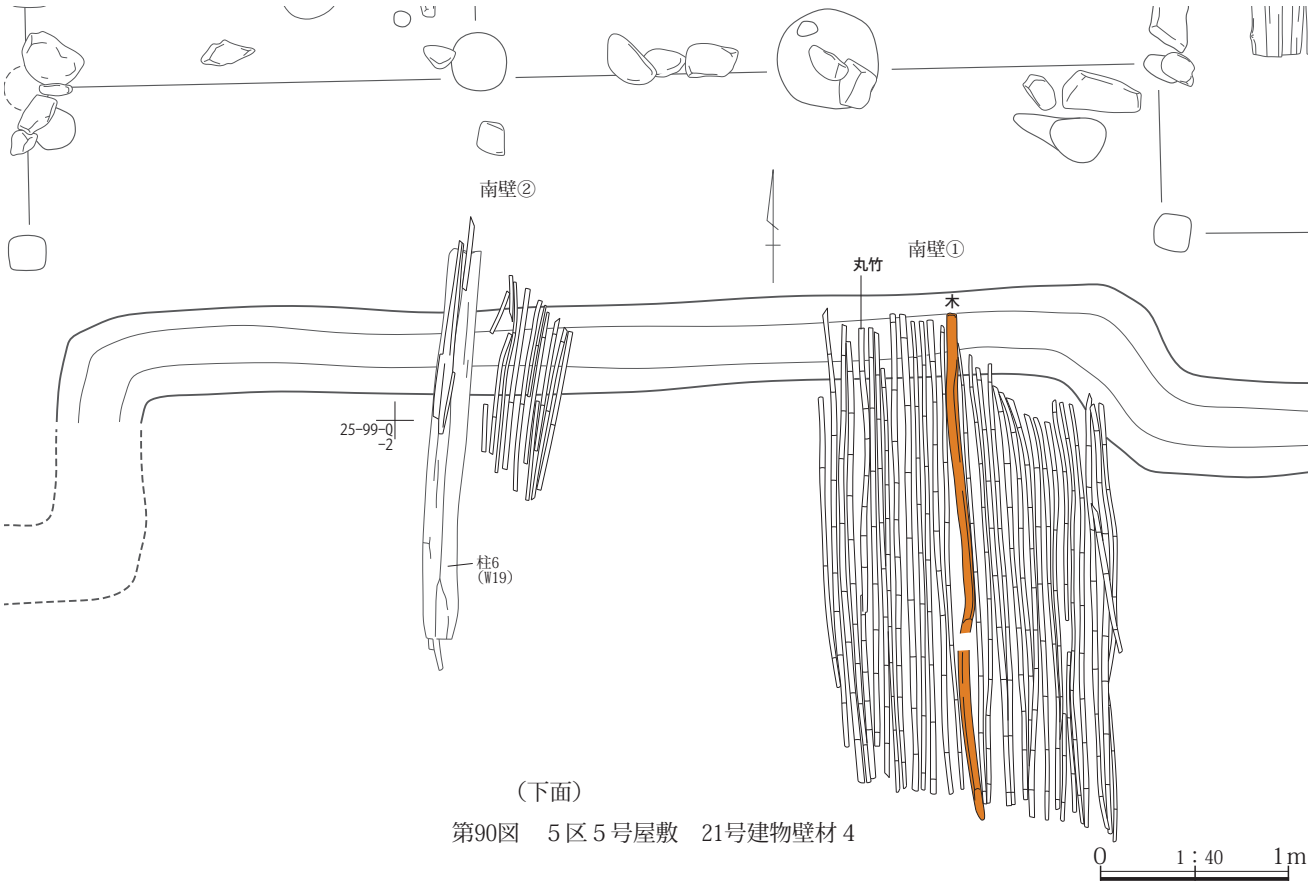
（上面）



21号建物　南壁A-A′

1　灰黄色土　天明泥流堆積物に暗い灰黄色土またはそのブロックを非常に多く含む　周囲に比して黄色い土色

※南壁の一部の壁土が含まれる　小舞や間渡しなどの心材に厚く付着するように出土



（下面）

第90図　５区５号屋敷　21号建物壁材４

0　1：40　1m

吊るすために取っ手が口縁部に付き、吊るすことのできる重量の大きさであること、さらに囲炉裏から外して置くとき安定させるために底部に３か所「トチン」に似た突起を持つ形状であり、竈に架けて使用する釜とは大きく形態や重量が異なっている。口径は40㎝、深さ20㎝が多いようである。煮炊き用に囲炉裏に架けて使用する鉄釜と、竈の上か常時移動を前提にしない釜は使い分けられていたものと思われる。囲炉裏で使用される取っ手付きの鉄鍋は21号建物では２個、27号建物では４個出土している。これまで調査した竈で釜が架けられた状態で残っていた調査例は、石川原遺跡では、先述した16号建物と41号建物だけである。他の遺跡では西宮遺跡の５号建物と７号建物、下田遺跡の22号建物、東宮遺跡の５号建物と９号建物で確認されているが、竈内からの出土が確認されているのは、西宮遺跡７号建物だけであった。

釜は、筆者の子供のころの経験では、竈でお湯を沸かすために使用されており、日常の煮炊きに使用したことはなかった。竈から外すことはほとんどなかった。竈で沸かしたお湯は、料理用、洗い流用等に使用されていた、現在の湯沸かし器等の機能を果たしていたのではないだろうか。

第４項　囲炉裏（第92図、PL.80～82）

（１）１号囲炉裏

【概要】建物中央部、土座のほぼ中央部に造られていた。確認段階では、囲炉裏の枠木が北・東・南側は残っており、西側の枠木は痕跡のみで残っていなかった。枠木の内側は10㎝の厚さで天明泥流が堆積していた。泥流を除去すると厚さ５㎝前後の灰を中心とし、焼土や炭が混入した面があり、その下は厚さ５㎝前後の灰を中心とした層となっていた。灰層の下は、囲炉裏の中心部で直径40㎝前後の円形内に厚さ３㎝前後の焼土層があり、その下は地山となっていた。囲炉裏内にローム等は持ち込まれていない。囲炉裏枠木の内側を深さ20㎝前後掘り込み、そこで火を炊いて囲炉裏として使用していたようである。

【規模】囲炉裏枠木外側で東西南北とも105㎝前後、枠木内側で東西南北とも95㎝前後の正方形である。枠木の長さは105㎝、断面は10×５㎝で幅広の面を立てて深さ10㎝の囲炉裏としている。枠木は残りが悪く取り上げて実測していない。写真等から観察すると、南北方向の枠木は端部に枘穴を掘って、東西方向の枠木は端部に枘をつくり出し両方向に組み合わせているようである。南東方向に直行する枠木は枘を用いて組んでいる。東西方向の枠木は枘穴があり南北方向の枠木の枘により正方形に組まれているようである。

【所見】囲炉裏の枠木は、以下４つの種類がある。①～④は、簡単な加工から丁寧で複雑な工程の違いがある。①丸材を方形に並べて枠木がずれないように内側に杭で固定する。（51号建物）②丸材を２つに割って内側を竈面位向け、枘で組んで方形に固定する。（42号建物）③長方形に近い角材を枘で組んで固定する。（21号建物）④方形の角材を用いて枘で組んで固定する。（27号建物）

21号建物の枠木は③に該当する。

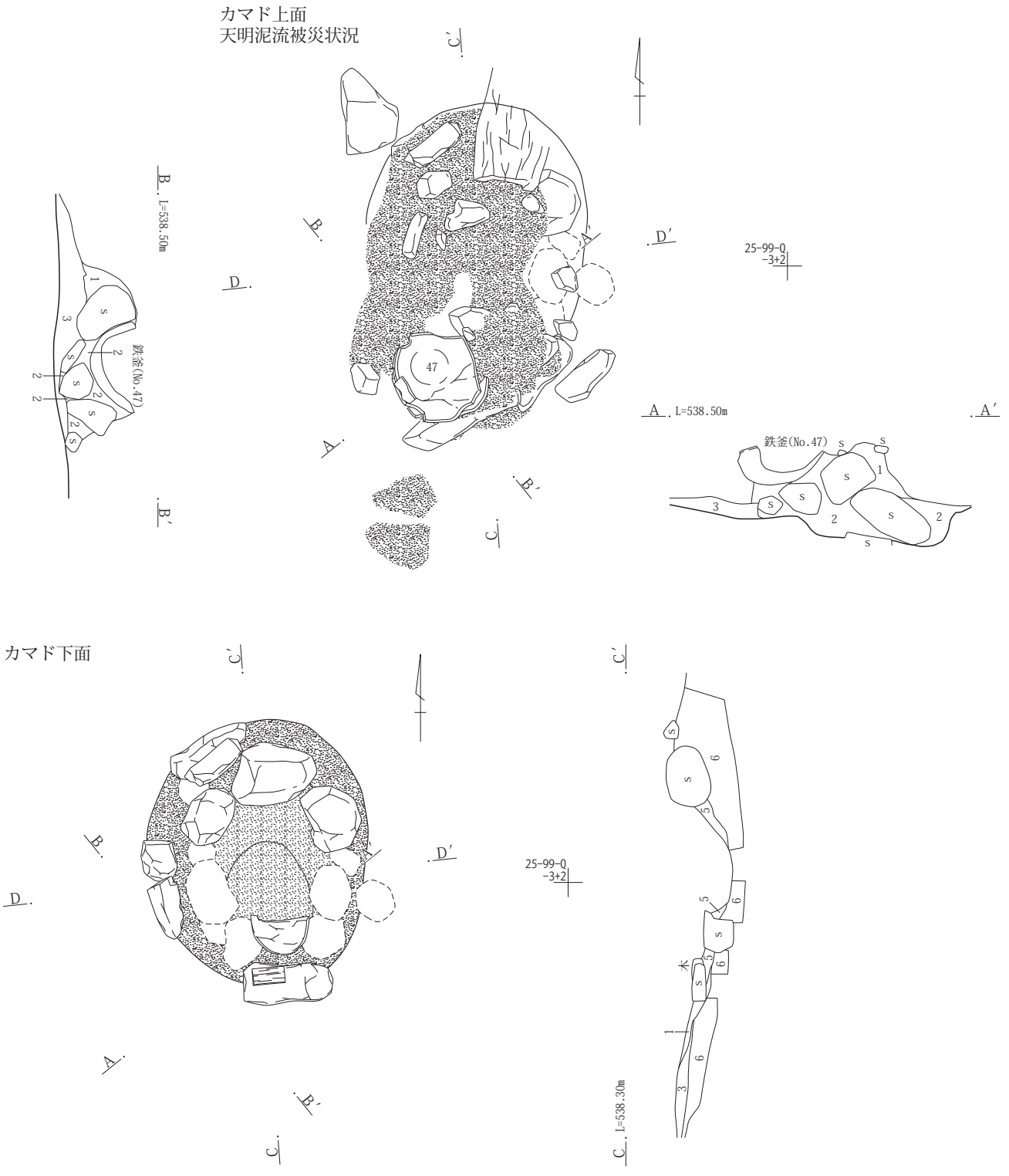
（２）２号囲炉裏

【概要・規模】竈西に接して、囲炉裏に似た方形の遺構があり多くの灰が残っていた。調査担当は２号竈としたが、構造からみて炉に近い。この遺構は竈に接して造られており、同時存在していたと思われる。用途や名称は明らかでないが、囲炉裏に近い構造なので、２号囲炉裏として報告する。２号囲炉裏と竈の間には上屋柱が建つと思われるＰ12の柱穴がある。北側に近接して唐臼の支脚が埋まっていた。

灰の範囲はほぼ方形で東西80㎝、南北90㎝である。内側が東西南北とも60㎝範囲で方形に６～７㎝低くなっている。内側中央部付近の焼土範囲は東西25㎝、南北15㎝である。灰と焼土の厚さは２㎝前後と薄い。これまでの調査例から、土間奥の竈と接する場所にこのような遺構調査例はほとんどない。竈に付随する施設であると思われるが、名称や用途不明である。

第５項　唐臼（石製の唐臼・杵・杵の柄・支脚・重石）

【概要】土間北側奥の壁面に沿って東西方向に唐臼が設置されていた。建物北西コーナー部分に唐臼が埋められており、東約1.2ｍの所に杵の柄を支える支脚、支脚の上には杵の柄が乗っていた。柄先端部分は欠損していたが、先端の手前部分には柄と垂直方向に杵が固定された状態で残っていた。杵は唐臼の中に入った状態であった。杵の上に乗る重石は、支脚付近北側に飛ばされていた。重石の中央部には、杵の柄の部分が石に差し込まれた使用



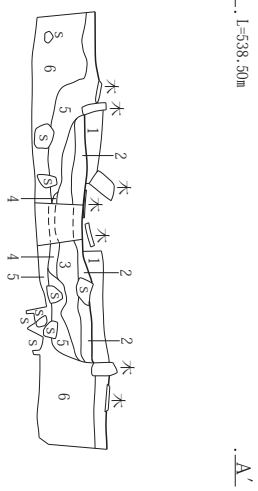
21号建物　１号竈A-A′ B-B′

1　明黄褐色土　黄褐色粘土を主とした層　竈石組外側に貼り付けた層
2　暗灰黄色土　天明泥流を主とした層　粘土等も一部混入
3　暗褐色土　暗褐色土を主とし小量の褐色土や粘土を含む　土間の表土に近い
4　明黄褐色土　多くのロームブロックを含む層
5　暗褐色土　焼土・灰・炭を含む
6　暗褐色土　暗褐色土中に多くのローム小ブロック含む

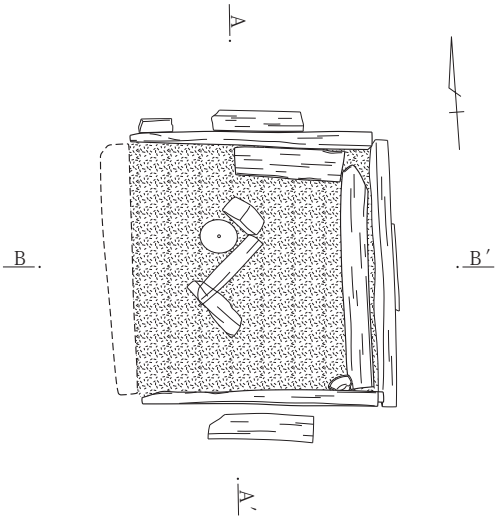
0　1：30　1m

第91図　５区５号屋敷　21号建物１号竈

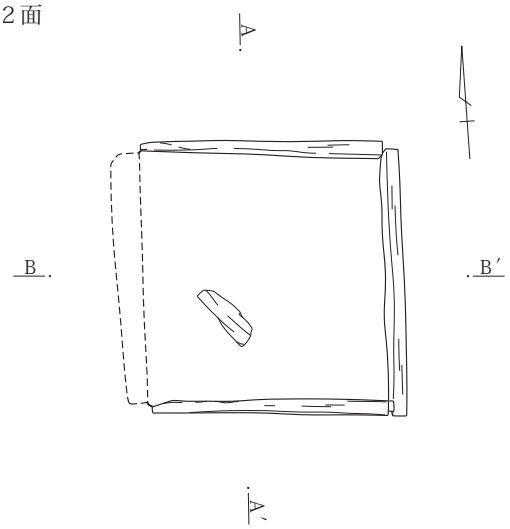
１号囲炉裏

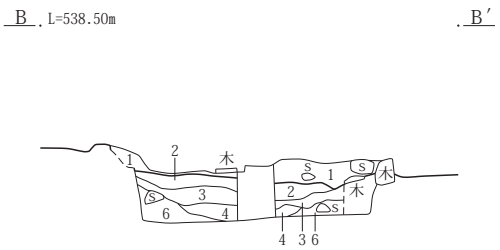


１面



２面

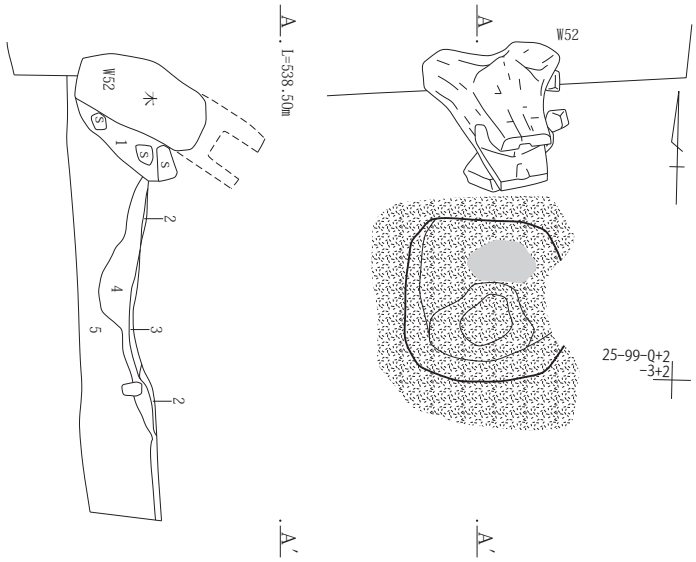




21号建物　１号囲炉裏A-A′ B-B′

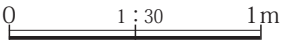
1　天明泥流
2　灰白色土　灰・焼土・炭が混入している層
3　青灰色土　灰を主とした層
4　赤褐色土　焼土を主とした層
5　暗褐色土　少量の焼土粒を含む地山層
6　地山層

２号囲炉裏



21号建物　２号囲炉裏A-A′

1　暗灰黄色土　褐・白・黄色粒子が多量に混入　ローム(粘土？)ブロックが目立つ　炭化物が目立つ　唐臼支脚を埋めた覆土
2　灰白色灰　縁辺に広がる白く見える灰　多量に炭が混入
3　淡黄色灰　中央に広がる褐色がかった白い灰　炭が多量に混入　褐色・橙色の部分もある
4　暗褐色土　黄・橙・白・褐色粒子が多く見られる　1に似るがロームブロックが細かく、各粒子がより多い
5　暗褐色土　小礫・炭化物が目立つ　白・黄色など粒子が少し混入　地山層



第92図　５区５号屋敷　21号建物１号・２号囲炉裏

時の状態で残っていた。唐臼の口縁部上には、唐臼とほぼ同じ口径の木を輪切りし、中心部の芯材を刳り抜き、幅厚さとも10㎝前後の輪状の製品を造り、それが唐臼の上に乗っていた(円形木枠と呼称する)。木の樹種はクリであった。このように21号建物の唐臼は、ほぼ完形の状態で、使用状況を良好に残していた。このように良好に残っていた遺構は、近接する27号建物と東宮遺跡１号建物で確認されている。これ以外の建物では、石製の唐臼は出土しているが、他の木製の部材はほとんど残っていなかった。杵や柄さらに支脚が唐臼とともに残っていたこの３つの建物が、この時代の唐臼の使用状況を把握できる貴重な発掘例である。

（１）石製の唐臼

【概要・規模】21 号建物の西北端に埋められていた。

高さは50㎝、口縁部の外径は65㎝、内径は40㎝、口縁部の幅は12㎝で、口縁部はほぼ水平に加工されていた。その唐臼を囲むように黄褐色の粘土質の土が方形に貼られていた。この土を東西南北から囲むように長さ75～95㎝、幅10㎝、厚さ３～６㎝の薄い板が枠木のように置かれていた。枠木内面の大きさは、約80㎝四方である。粘土質の土は、建物の壁にあたる西と北側は枠木の上にも貼られていたが、土間側にあたる西と南側は枠木の上にほとんど貼られていなかった。この粘土質の土は厚さ10㎝前後であり、唐臼の上に乗せられた円形木枠の下部約５㎝まで粘土質の土により埋められ、円形木枠が固定されていた。円形木枠は上縁内側半分が、内側に向かった斜めに削られており、脱穀等により円形木枠上に落ちた穀類等が、臼の中に落ちるように工夫されていた。

写真に写っている唐臼西側の南北に並べられている長さ120㎝、幅12㎝、厚さ10㎝の大きな薄い材木は、土台石の上に置かれており、中央に枘穴が掘られている。これは壁下の地覆であり、枘穴は壁下地となる間渡棒を固定するためのものと思われる。唐臼の粘土質の土はこの土台の材木部分まで貼られており、その上に西側の枠木が乗っていた。

（２）杵の柄

【概要・規模】柄(W51)は杵が取り付けられる枘穴から先端部分は欠損しているが、欠損している枘穴から先の長さを、27号建物から出土した柄と同じ23㎝として全体の長さを想定すると230㎝となる。柄の根元部分から支脚部分までの距離が90㎝、支脚から杵中心部までの距離が122㎝、杵中心から先端部分までの距離が18㎝である。支脚部分を中心に踏む根元部分と杵が付く部分との距離を比較すると、根元の長さが、杵までの長さより32㎝短い(支脚から根元までの長さ43％、支脚から杵までの長さ57％)。さらに杵の上には重石(10.1kg)が付属するので、杵を持ち上げるにはかなりの力が必要であったと思われる。柄の太さは幅12㎝、高さ15㎝であり縦向に長くなっている。踏んだ時に地面に接触する根元部分は長さ45㎝の距離で半分近くまで薄く削られている。

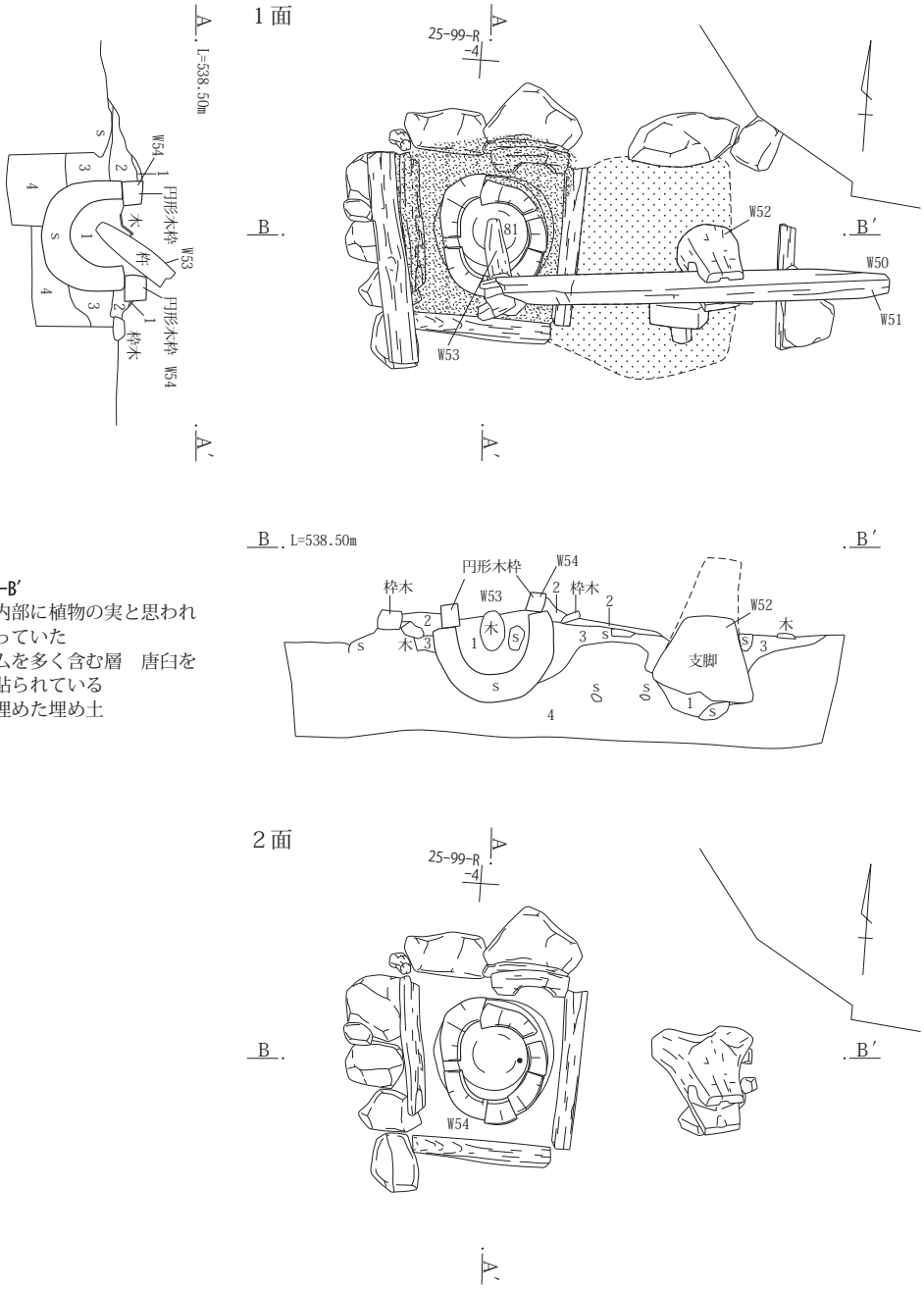
支脚と柄は、柄に取り付けられた軸木が、支脚上端部に掘り込まれている軸木受(W52)に差し込まれることにより、セットされる。軸木(長さ約16㎝、太さ約３㎝)は柄に掘られた方形の枘穴に打ち込まれている。柄に打ち込まれる枘穴は方形であるが、支脚に差し込まれる軸木は回転を伴うので丸く整形されている。軸木は支脚の上面から約５㎝下で固定され、大きな柄が支脚の上に直接乗ることなく３㎝前後浮くように固定している。

（３）杵

【概要・規模】杵(W53)が柄と組んだ状態で唐臼から出土した。柄から先の部分は外れて重石とともに支脚付近から出土した。柄から下は断面円形で、柄から上は断面長方形である。全体の長さは不明であるが、柄から下の円形部分は長さ46㎝、柄の厚さ15㎝、重石の厚さ11㎝、重石の上に残っていた杵の頭部の長さ11㎝で全長は83㎝となる。柄から下の丸く整形された部分は、上で直径25㎝、先端付近で直径12㎝であった。柄から上の重石の上に残る長方形の板状の部分は、幅約10㎝、厚さ約４㎝である。近接する27号建物出土の杵は完形であり、全長は76㎝であった。

（４）支脚

【概要・規模】唐臼の約122㎝東に、杵の柄が組み込まれ、北側に少し傾いていた状態で出土した。この支脚は杵の柄を上端に組み込み、杵を支えている。幹の太さ23㎝前後の木が二股に分かれている部分を利用し、長さ80㎝の材を確保している。表皮部分は削っているが、角材のように平らにしていない。二股に広がる端部を杵の柄と平行に埋められており、力の加わる方向に二股が広がるように配置しているので使用段階で安定する。杵の柄を組み込むために、上部から両端を５㎝ほど残して中央部分



21号建物　唐臼A－A′ B-B′

1　天明泥流堆積物　内部に植物の実と思われるものが大量に入っていた
2　灰黄褐色土　ロームを多く含む層　唐臼を囲むように表面に貼られている
3　暗褐色土　唐臼を埋めた埋め土
4　地山

0　1：40　1m

第93図　５区５号屋敷　21号建物唐臼

を幅13㎝、深さ15㎝程掘り込む。そこを支点として柄がシーソーのように上下するので、掘り込まれた部分の中央部を残して、左右両側を長さ約10㎝切り取る。この山形頂部の角度は約105度である。この掘り込み部分に杵の柄が組み込まれる。しかし、山形の上に杵の柄が直接置かれることはない。切り残された両側の袖中央部分に、上から幅４㎝、深さ７㎝前後の溝を掘りその溝に杵側面に打ち込まれた軸木をセットする。この軸木により杵の柄は、支脚の掘り込み底面に接することなく、３㎝前後浮いた状態で固定される。

【所見】設置されていた位置で杵の柄とともに出土した例はこの21号建物だけである。27号建物では、杵の柄、杵・支脚・重石が組み込まれた状態で出土しているが、天明泥流により南約２ｍ移動して南側に倒れた状態であった。21号建物の支脚は、木の二股部分を加工して製作しているが、27号建物の支脚は、長さ1.1ｍほどの木材を断面25×28㎝の角材に成形し、さらに頭部を加工している。

西宮遺跡（２）１号建物(434)や２号建物(145)出土の支脚は、丸材を切って表面を平らに加工することなく使用している。東宮遺跡１号建物では丸材の表面を少し削って長方形の角材として、隅を少し削った材を使用している。このように、遺跡によって使う材は異なっているようである。

（５）重石

杵の上半分が長方形の枘として加工され、柄に直交方向に差し込まれ、柄の上に置かれた長方形の重石の中央部に差し込まれ、さらに石の上まで延びていた。石を貫通した杵は石との接点部分に穴をあけて、細い棒が差し込まれ石が落ちないように固定していた。発掘調査段階ではこの細い棒は固定され残っていた。棒が固定される部分の石には細い溝が掘られていた。石の大きさは長さ27㎝、幅16㎝、厚さ11㎝、重さ10.1kgであった。27号建物の重石は8.8kgであり、この石より重い。石材は粗粒輝石安山岩である。

第６項　室(第94図、PL.84)

【概要】竈の北東に近接した土間の東北隅に、土間面を20㎝程掘り込み、南北に大きな石を各１個、東西辺に角材を置いた南北に長い遺構が確認された。この角材は内側に落ち込まないように杭が打ち込まれていた。内部は天明泥流で埋まっていた。この遺構は、土間の１号竈と土座あるいは板間の囲炉裏との間の土間部分に造られており、これまで調査例から室と思われる。

【規模】石で仕切られた南北方向は長さ約70㎝、角材で囲まれている東西方向は60㎝である。北辺の石は長さ57㎝、幅30㎝、厚さ25㎝前後、南辺の石は長さ58㎝、幅12㎝、厚さ15㎝前後である。西辺に置かれていた角材は、長さ123㎝、幅12㎝、東辺に置かれていた角材は、長さ126㎝、幅12㎝。東西辺の角材が内部に落ち込まないように打たれた杭は西側に２本、東側に１本残っていた。東側の杭の長さは40㎝、太さは５㎝前後であった。

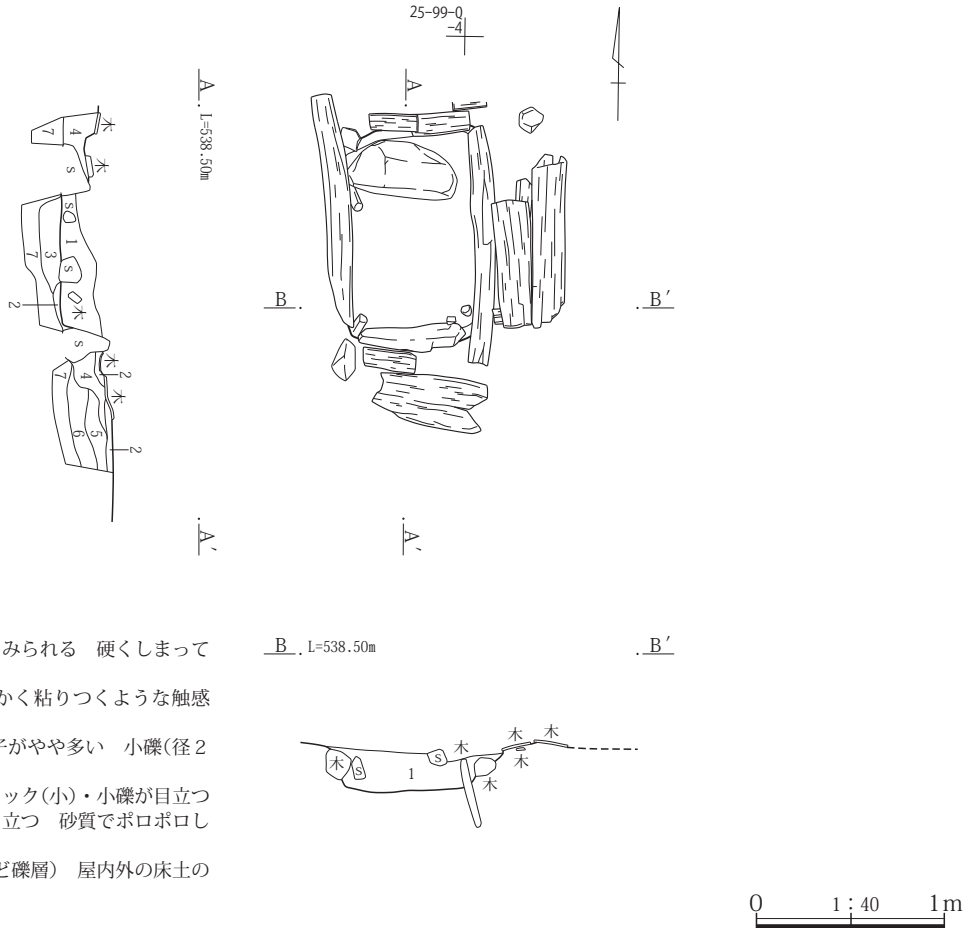
第７項　馬屋(第95図、PL.84)

【位置・概要】土間西端の南半分が馬屋となっている。馬屋を区画する明瞭な図面はないが、残された写真と断面図から馬屋部分が、長方形に一段低くなっていることを確認できる。１号竈から南の土間部分には、ロームと思われる黄褐色の土が貼られている。北側は２号囲炉裏があり、そこから南約１ｍ付近から馬屋部分が低くなっている。馬屋西側建物西辺より西では、馬屋部分より高くなっている。南側は馬屋桶(825号土坑)の南側で少し高くなっている。このように馬屋土間面は周辺より10㎝前後低くなっていた。馬屋西側で建物西辺より外側に飼葉桶が１個埋まった状態で出土した。馬屋西辺には、建物の壁下地覆の下に連続して並べられている土台石が並べられていない。西壁・北壁・東壁の下には並べられていたので、この馬屋部分の壁構造は他と異なっていたと考えられる。馬屋の南には屎尿等を集めたと考えられる大きな楕円形の桶(825号土坑・馬屋桶)が埋まっていた。

【規模・形状・構造】馬屋の範囲は、東辺に柱穴と思われるＰ13～Ｐ16の４基、南辺にＰ20・Ｐ28の２基が掘られていた。これらの柱穴と建物の西辺で区画された範囲が馬屋となる。その規模は東西が約2.1ｍ、南北が約3.4ｍである。

(ア)飼葉桶

馬屋西側雨落溝の内側に、飼葉桶と思われる刳り抜き式の方形の木製容器が馬屋と並行して南北方向に埋められていた。口縁部が地表面より５～６㎝低い位置にあり、ほぼ埋められていた。内部には天明泥流に暗褐色土が混



21号建物　室A-A′B-B′

1　灰黄褐色土　天明泥流堆積物
2　暗褐色土　橙・白・黄色粒子が多くみられる　硬くしまっている
3　暗褐色土　基質の粒子が非常に細かく粘りつくような触感　白色粒子僅少　ややしまっている
4　暗褐色土　３に似た触感　白色粒子がやや多い　小礫(径２～４㎝)が少し見られる
5　褐色土　白・褐色粒子・ロームブロック(小)・小礫が目立つ
6　暗褐色土　４に似る土色　小礫が目立つ　砂質でポロポロした触感
7　暗褐色土　非常に礫が多い(ほとんど礫層)　屋内外の床土の下などに見られる

第94図　５区５号屋敷　21号建物室

入した土で埋まっていた。飼葉桶は取り上げていない。遺構図から計測すると外面長軸92㎝、内面長軸72㎝、外面短軸30㎝、内面短軸25㎝、深さ外面24㎝、内面20㎝である。飼葉桶の西側には建物雨落溝があり、雨水の流れ込みもあったものと思われる。この飼葉桶は、移動式でなく埋められた状態で使用されており、水を溜めていたと思われる。その水を馬が飲んだかについては不明である。このように、馬屋に伴う埋設された飼葉桶は、21号建物の他に３号屋敷16号建物、15号屋敷27号建物でも確認されている。また飼葉桶でなく桶が馬屋に沿って埋められていた例として、２号屋敷９号建物で確認されている。

(イ)馬屋埋設桶(825号土坑)

【位置・概要】馬屋の南側に馬屋桶(825号土坑)が掘られていた。土坑内部は天明泥流で埋まっていた。土坑内部には桶板材の痕跡が明瞭に残っていた。桶の南側には柱穴Ｐ23とＰ24が掘られており、この柱穴に柱が立ち、主屋の屋根とは異なる簡単な屋根が造られていたものと思われる。建物のまわりの雨落溝も馬屋部分で南側に広がっていた。

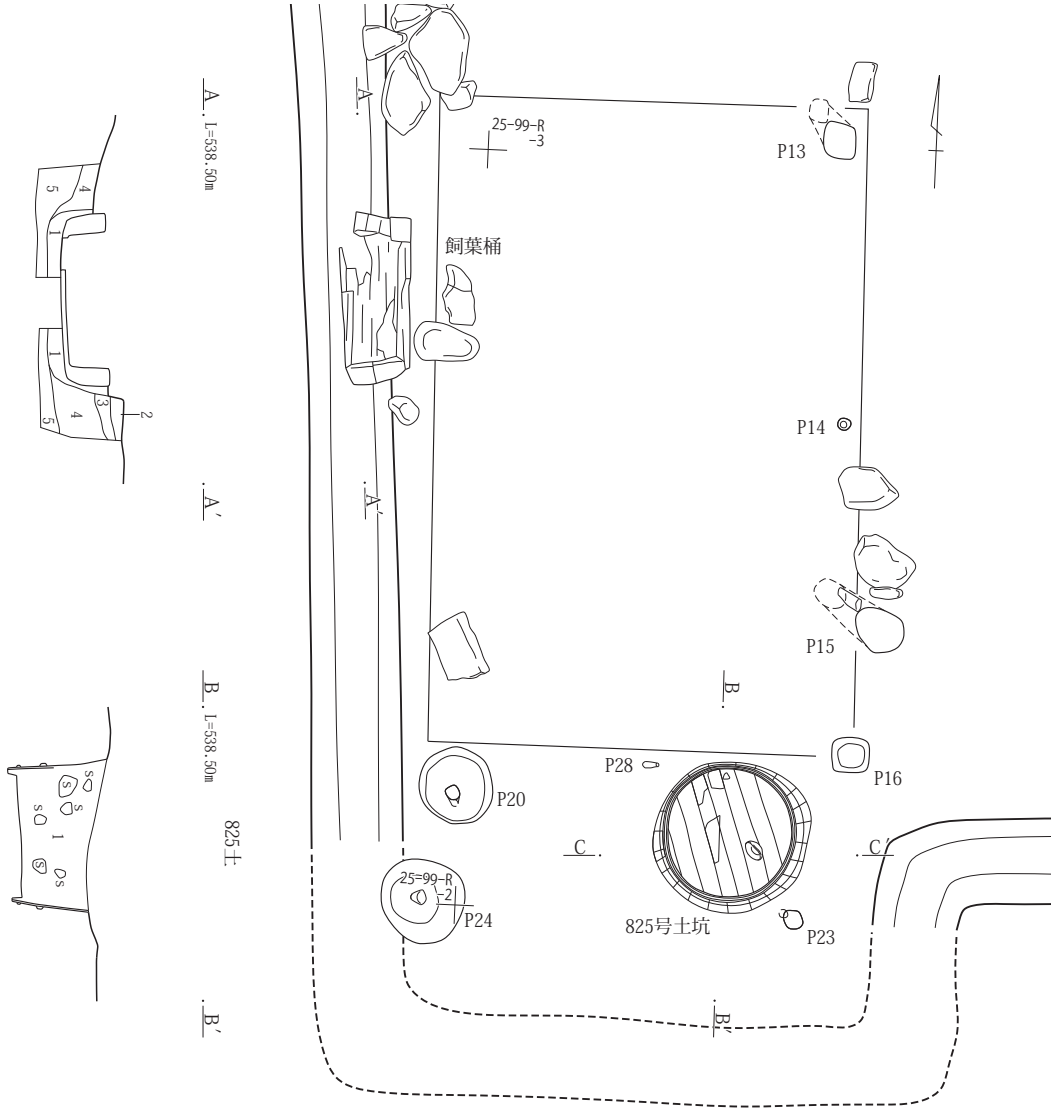
【規模・構造】桶は、口径80㎝、底径72㎝、高さ48㎝であった。タガの痕跡が底板部分と底板から上10㎝のところに残っていた。

第８項　57号建物(第95図、PL.84・85)

25-99-R-３グリッドに位置する。

(１)概要と建物規模

21号建物の西約２ｍの位置に703号と704号土坑が南北方向に並んで掘られていた。土坑には桶が埋められており(埋設桶)、桶の板等の木材は残っていなかったが、側板の多くの痕跡とタガの痕跡が２本明瞭に残っていた。これまで多くの屋敷に厠等の付属建物が存在しており、この遺構も21号建物に付属する厠等の建物であると考え、57号建物として報告する。57号建物の西側に接し

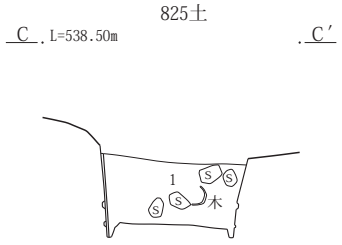


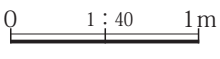
21号建物　飼葉桶A-A′

1　暗褐色土　粘土(ローム？)ブロック(小)が多く見られる
　小礫目立つ　白・黄色などの粒子の混入は僅少　礎石や
　柱などの埋め土として区内各所でしばしば見られる土
2　灰黄褐色土　天明泥流に暗褐色土が混入した層相　飼葉
　桶内にはこの土が詰まっていた
3　暗褐色土　褐・白色粒子目立つ　小礫の混入が少ない
　屋内床面にしばしば見られる土
4　暗褐色土　白・褐色粒子僅少
5　黒褐色土　多量の礫が入る(ほとんど礫層)　屋内外床面の
　土の下にしばしばみられる層

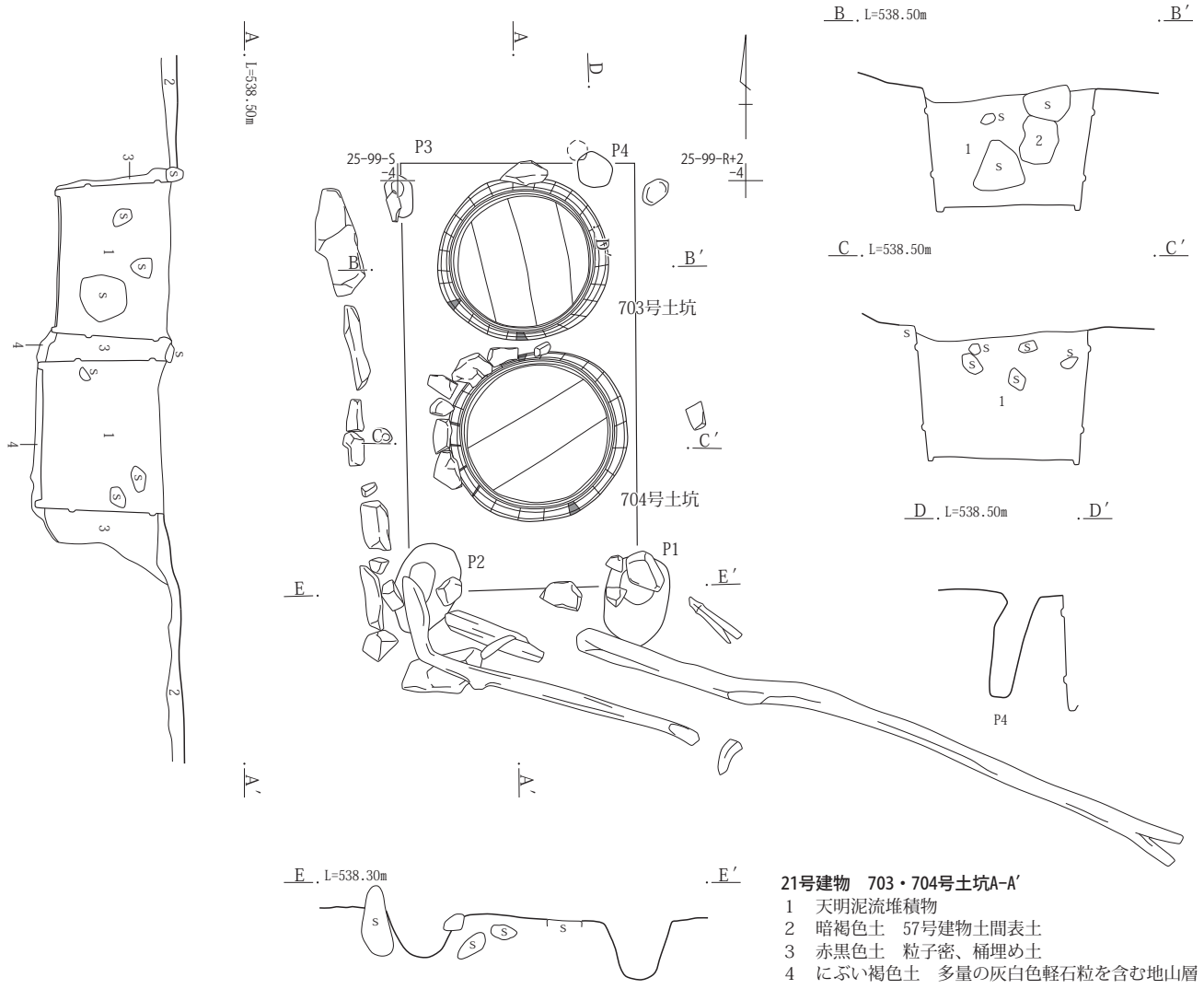
21号建物　825号土坑B-B′C-C′

1　灰黄褐色土　天明泥流堆積物





第95図　５区５号屋敷　21号建物馬屋



第96図　５区５号屋敷　57号建物厠

て、４号屋敷の付属建物と思われる56号建物が造られている。56号建物は埋設桶１個と方形の箱状のものが埋められた遺構で、同じく厠と思われる。両建物の間には共有の雨落溝が存在する。

埋設桶の南と北側に東西方向に各２個、計４個の柱穴が掘られていた（Ｐ１～Ｐ４）。埋設桶は天明泥流により埋まっており、桶内部から出土品はなかった。南側２基の柱穴（Ｐ１・Ｐ２）には、柱が南東方向に倒れた状態で良好に残っていた。北側２個の柱穴（Ｐ３・Ｐ４）に柱は残っていなかった。残っていた２本の柱は、丸材の表皮を除去した状態であった。東側の柱は長さ3.7m、太さ10㎝前後のほぼ完形であり、柱穴から抜けて倒れていた。西側の柱は一部柱穴（Ｐ２）に埋まった状態で、底部から50㎝の所で折れて倒れていた。長さ2.2m、太さ８㎝前後のほぼ完形である。両柱とも上端部分はＹ字状になっており、この部分に屋根を支持する桁が乗せられていたと思われる。柱穴の深さは、東側の材の観察から約60㎝、西側の柱穴の深さは、折れた柱の長さから約50㎝と思われる。この柱は、東西約130㎝離れた位置で埋められている。西北隅の柱穴（Ｐ３）と西南隅の柱穴（Ｐ２）は北約230㎝の地点に掘られていた。東北隅の柱穴（Ｐ４）は斜めに倒れた状態で確認されており、柱穴の位置は少し西側に寄った位置で確認された。Ｐ１の北約230㎝、Ｐ３から東1.2mの位置である。 この柱穴の位置から建物規

模を推定すると、東西1.3m、南北2.4mの長方形の平面形を呈する建物であり、東側の柱の高さは3.1m、西側の柱の高さは1.7mの片流れ屋根の建物と思われる。屋根の角度は約45度の傾斜を持つ。この角度は主屋の屋根の角度と共通している。柱穴の大きさは不揃いであるが、口径30㎝前後、深さは残されたＰ１・Ｐ２の柱から東側が約60㎝、西側が約50㎝と想定できる。

ピット一覧表参照

No.	長径㎝	短径㎝	深さ㎝
Ｐ１	52	36	38
Ｐ２	53	36	16
Ｐ３	25	16	39
Ｐ４	22	20	63

Ｐ１・Ｐ３の柱穴から西約60㎝の場所に雨落溝があり、軒の出が60㎝前後あったものと思われる。東側に雨落溝はない。

（２）埋設桶（703号土坑・704号土坑）

【概要・規模】２つの桶は建物中央部で南北方向に２個並べられた状態で埋められていた。２つの桶の間隔は10㎝と狭かった。桶の板材は痕跡を残す程度であった。２つの桶の規模はほぼ同じであったと思われる。確認された規模は、703号土坑の桶は口径89㎝、底径84㎝、深さ63㎝、タガの位置は底部から15㎝と58㎝の２か所、704号土坑の桶は口径88㎝、底径84㎝、深さ70㎝、タガの位置は底部から20㎝と63㎝の２か所であった。タガの位置は異なるが、ほぼ同じような桶が使われていたものと思われる。桶は地山を掘り込み、桶を埋めた後に、地山と同じような土で桶のまわりは埋められていた。

第９項　廃材置場（第97図、PL.85～87）

25-89-Ｒ・Ｓ-22～24グリッドに位置する。

４号・５号屋敷の境南端に南北方向の細長い道のような区画がある。南端は７号道、北端は西側に直角に近い角度で曲がって25号道に繋がっている。調査担当はこの遺構を27号道として調査した。４号屋敷南側の東西方向の遺構は道であると思われる。

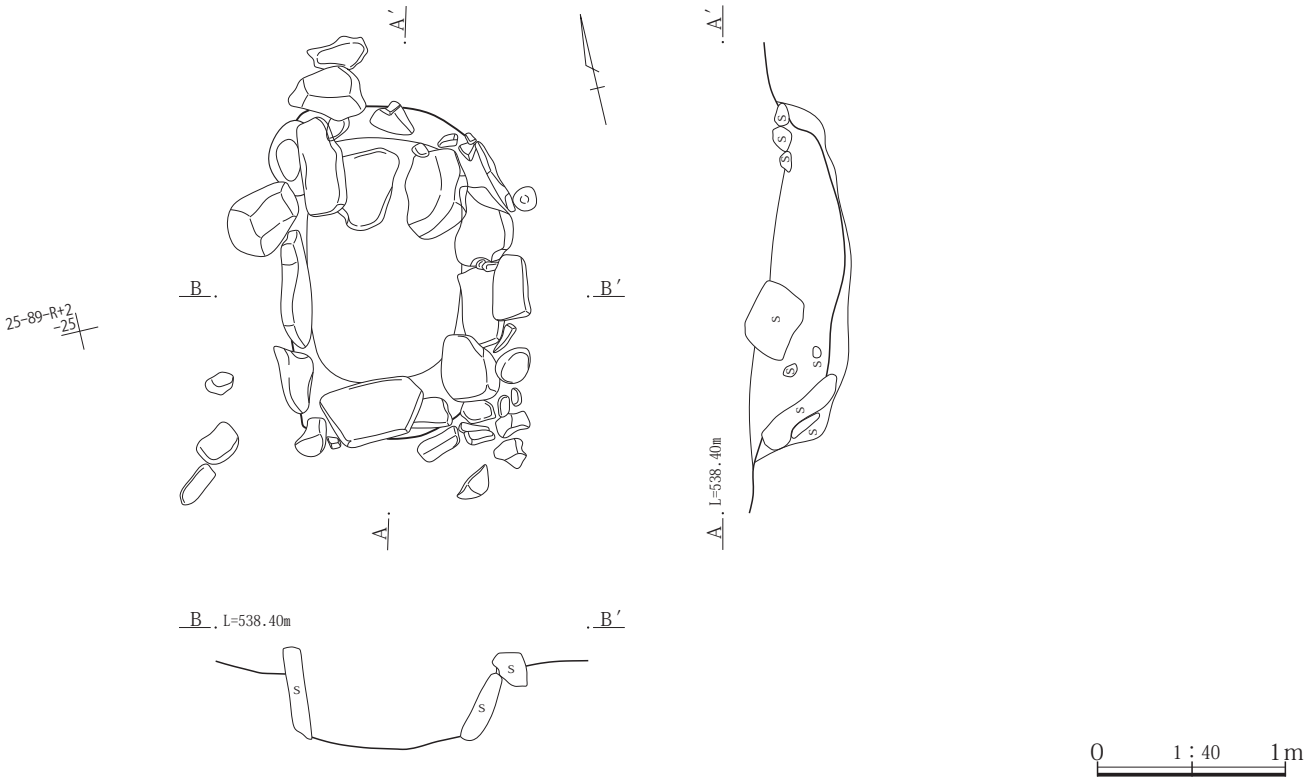
南北方向の遺構は、両側が畑となっており、幅約２m、長さ約7.5mであり遺構は両側の畑より30㎝前後低くなっている。道の特色を示している。しかしこの遺構の北端には遺構を区画するように長さ40～70㎝、幅40㎝前後の大きな石が横方向に３個並べられ、南端の７号道との境にも、長さ40㎝、幅20㎝前後の石が横方向に３個並べられ他の遺構と区画されていた。さらにこの場所には、厚さ15～20㎝程の土（密な土で天明泥流とは全く異なる）が盛られ、その上には多くの材木が置かれていた。盛土されていない西端には建築部材の一部と思われる角材も置かれていた。盛土されていた西側や北側には、下駄・桶・鍬・人形の首等が出土している。盛土の上に置かれた材木を除去すると、盛土の表面には多くのはAs-A軽石が堆積していた。おそらく材木の上や周辺に降ったAs-A軽石が堆積したものと思われる。これらの材木は、天明泥流で埋まる前に、この場所に置かれていたことがわかる。それらの建築部材や盛土等を除去すると割れた唐臼の口縁部が地表面から５～10㎝低い場所から確認された。割れてはいるが、底部までほぼ完形の形で埋まっていた。唐臼は貴重な生活用具であり、廃屋になった場合でも掘り起こして再利用するのが一般的であるが、割れてしまったのでその場所に埋めた状態で放置したと思われる。これらの調査結果から、この遺構は一時南北方向の道として使われていたが、その後道は廃棄され、廃土や廃材置場として利用されたものと思われる。唐臼が埋まっていたのは、この場所に主屋等が建てられていた時期があり、その後廃屋となり、屋敷地は畑となったものと考えたい。

第10項 洗い場（第98図、PL.87）

【概要】５号屋敷21号建物南側には庭があり、庭の南西部には、４号洗い場がある。調査担当は４号屋敷洗い場として調査した。しかし５号屋敷庭の南西部に位置しているので、５号屋敷の洗い場として報告する。

全ての屋敷に洗い場があるわけではないが、２・３・６・９・10・11・12・14・15号屋敷等多くの屋敷に洗い場は造られていた。井戸は掘られていないので、水路の脇に水場を掘ることにより、水は確保できたものと思われる。５号屋敷に伴う洗い場は、水路近くではない。水路は20m以上北側に掘られていたと思われるが確認されていない。この場所を掘って水を常時確保できたのか疑

第97図　５区５号屋敷　廃材置場



第98図　５区５号屋敷　洗い場

問である。しかし規模や構造から洗い場である可能性があるので、洗い場として報告する。

【構造・規模】この５号屋敷洗い場は、南北方向に長い長方形に地面を掘り込んでいる。掘り込まれた壁面が崩れないように、多くの洗いでは、大きな石を２段前後積み、石の平らな面が洗い場内側となるように積んでいる。積まれた石は奥行の厚さもあり、組んだ石の上に人が乗っても洗い場内側に石が倒れないようになっている。さらに積まれた石の一部には平らで大きな石が置かれ、作業台として使われた痕跡を残している。このような洗い場と５号屋敷の洗い場を比較すると使われている位置や石の積み方が大きく異なっていることがわかる。側壁の石は、石垣のように積まれてはいなく、壁面に平らな石を貼りつけるように立てかけている。長辺部で４枚、短辺部で２枚並べているだけである。そのため使用している段階で、側壁の石が内側に倒れる可能性が非常に高い。実際発掘段階では、３石が洗い場内部に倒れていた。当然ながらこの石の上に乗って作業することは全くできない、このような簡単な造りの洗い場である。洗い場表面には、長さ15㎝、幅５㎝前後の多くの石が残っていた。並べられた側壁石の周辺には、多くの石が並べられていたものと思われる。

規模は側面の石の内側で計測する。長辺140㎝、短辺80㎝、深さ20㎝前後である。側壁の石は、長さ50㎝、幅30㎝、厚さ15㎝前後である。

【所見】水路の近くでないことや、簡単な構造の洗い場であること等から、一定時期には湧水があり、使ったと思われるが、常時水を確保できる恒常的な洗い場であったかは疑問である。

第11項 出土遺物（第369～384・495～559図、PL.319～328）

21号建物では、大量の建築部材や生活用具が27号建物とともに、最も多く出土している建物である。八ッ場ダム関連で発掘された建物の中でも最も多いと思われる。天明泥流により多くの生活用具は押し流されて、元の場所から移動しているものが多いが、それらの出土遺物から、当時の建物や生活用具について多くの情報を残している。特にこの建物は掘立柱建物であり、これまで分からなかった、建物の様子を良好に残しており、注目され

る建物である。

建物構造物として柱や壁下の土台､床板・草壁や竹壁、板戸と思われる部材や障子等があり、生活用具としては、板間に置かれていた仏壇、多くの収納箱、桶・樽・鍋・文箱・硯等である。また、土間に設置されていた遺物では､唐臼が注目される。21号建物では、石製の唐臼、杵・柄・重石が組み込まれた杵、杵が上下に移動するための支脚がそろった状態で出土している。これは27号建物とこの21号建物だけである。

板間東に縦障子が２枚重なって出土している(取上実側なし)。大きさは幅約80㎝、高さは90㎝前後残っていたが、障子下部は残っていなかった。

柱や壁下土台及び壁についてはすでに説明済みであるので、以下は生活用具を中心に説明する。

(１)仏壇関連

板間中央西寄に、仏壇が北から南側に倒れた状態で残っていた。仏壇は板間に厚いネコが敷かれ、その上に南側を正面にした状態で置かれていたようである。天明泥流により仏壇の後ろ側である北側から押し倒されてたものと思われる。確認段階では仏壇背後の背板はなく、左右の側板と仏壇下の戸棚内に置かれていた丸善等が仏壇とともに南側に倒れていた。仏壇内から５個の位牌が一部重なった状態で乱雑に出土した。位牌の上部には仏壇の上部に欄間と思われる部材が残っていた。

仏壇下の戸棚にはほかに曲物・お櫃、重箱・植物で編んだと思われる収納器が出土した。曲物とお櫃の底部付近から鉄斧・鉄製の踏鍬の一部等が出土した。それら品物の下からは戸棚の引き戸が２枚出土した。引き戸の上下には、戸棚の敷居と鴨居が出土した。それら仏壇の左右には､仏壇の骨組となる角材が多く残っていた。また、天井部南側には天井板と思われるものも残っていた。仏壇下の戸棚は引き戸、上の仏壇は鴨居と敷居が無い。観音開きと思われる。位牌は51号建物のように、位牌が一段高い中段に置かれていたと思われるが、残りが悪く中段の確認はできなかった。出土状況を示し写真や図面等を用い、51号建物出土仏壇を参考にして復元した図等で図示した。

(ア)仏壇

規模は東西約83㎝、高さ125㎝、奥行き約43㎝、下の戸棚は高さ約40㎝、上の仏壇は高さ約83㎝である。

(イ)位牌

位牌の大きさは、高さ24～30㎝、幅６～８㎝であり、厚さは0.8～1.4㎝である。基本的に下部に板の台が付き、位牌の枘が台部の枘穴に差し込まれていた。位牌には全て戒名等が書かれていた。６個の位牌に書かれていた年号は、元文３(1738)年～天明２(1782)年までの年号であった。樹種は全て松である。

(ウ)戸棚内遺物

・丸善　10枚が重ねられた状態で残っていた。乾燥や歪みにより完全な形で残すことはできなった。底部には高さ２㎝前後の差し込み式の脚が３か所付けられていた。丸い底板は直径30㎝、厚さ１㎝であり、底板の縁辺部には高さ2.5㎝、厚さ0.6㎝の細長い側板が丸い底板を巻き込み一周していた。側板上面は底板上面から1.5㎝の高さとなるように固定されていた。底板と側板は釘で固定されていた。内外面とも薄い黒漆が塗られていた。樹種は檜が多い｡27号建物からも９個の丸善が出土してるが、底板の直径は23.5㎝前後であり、21号建物出土品より直径で７㎝前後小さい。

・曲物　直径16㎝前後、高さ9.2㎝の曲物である。底板はほぼ完形、側板は歪んでいるがほぼ完形に近い状態で出土した。

・お櫃　直径20㎝、高さ8.5㎝であり、底板と曲物である側板が残っていた。

・重箱　曲物の上部、植物の容器の上付近から蓋と２段の重箱が出土している。側板外面に金蒔絵と思われる装飾あり。

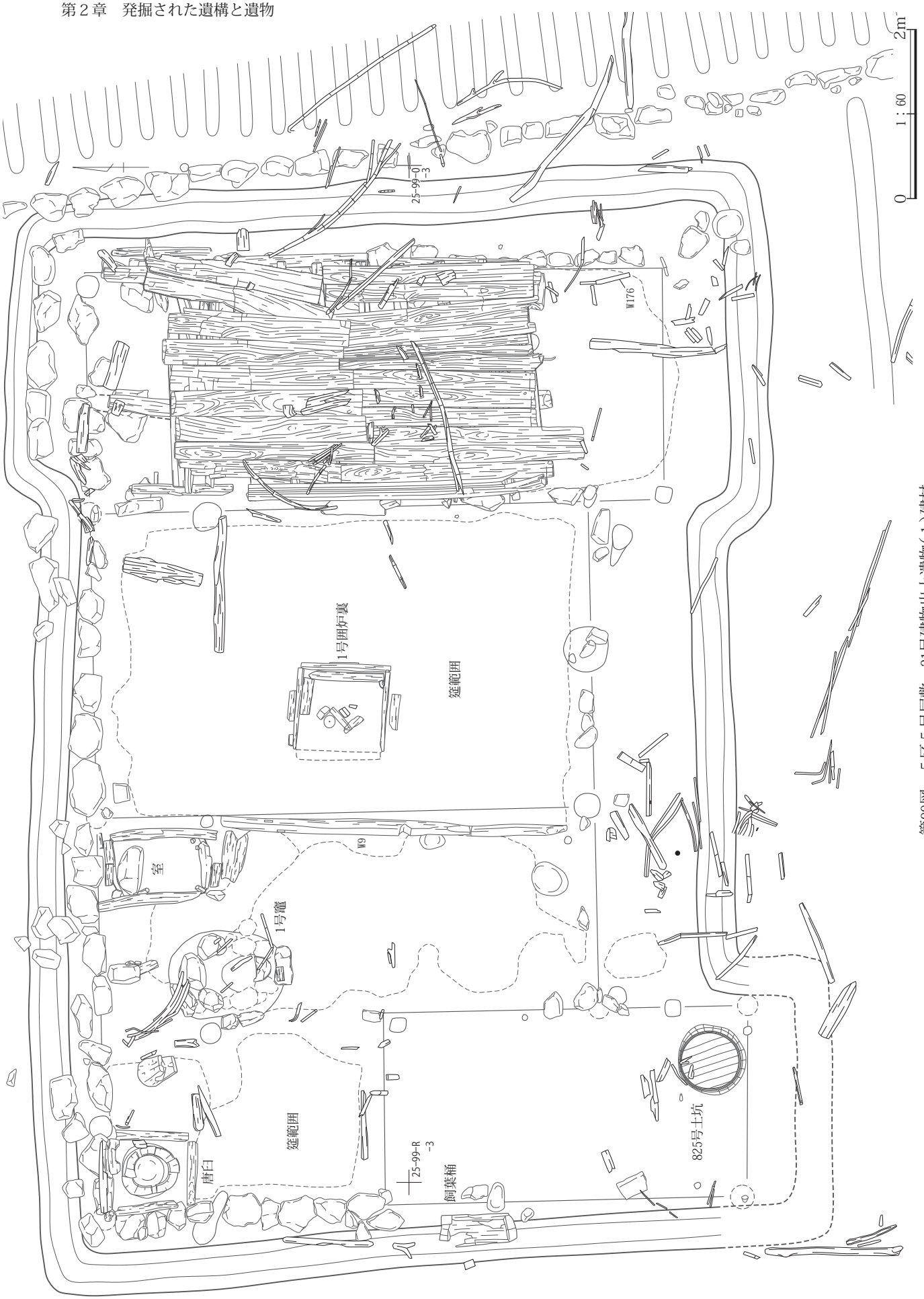
・植物容器　写真では、曲物とお櫃の上部に植物で編んだと思われる収納器と思われる品物が撮影されている。実測図は掲載していない。

・鉄斧　曲物底部付近から出土している。柄は付いていない。

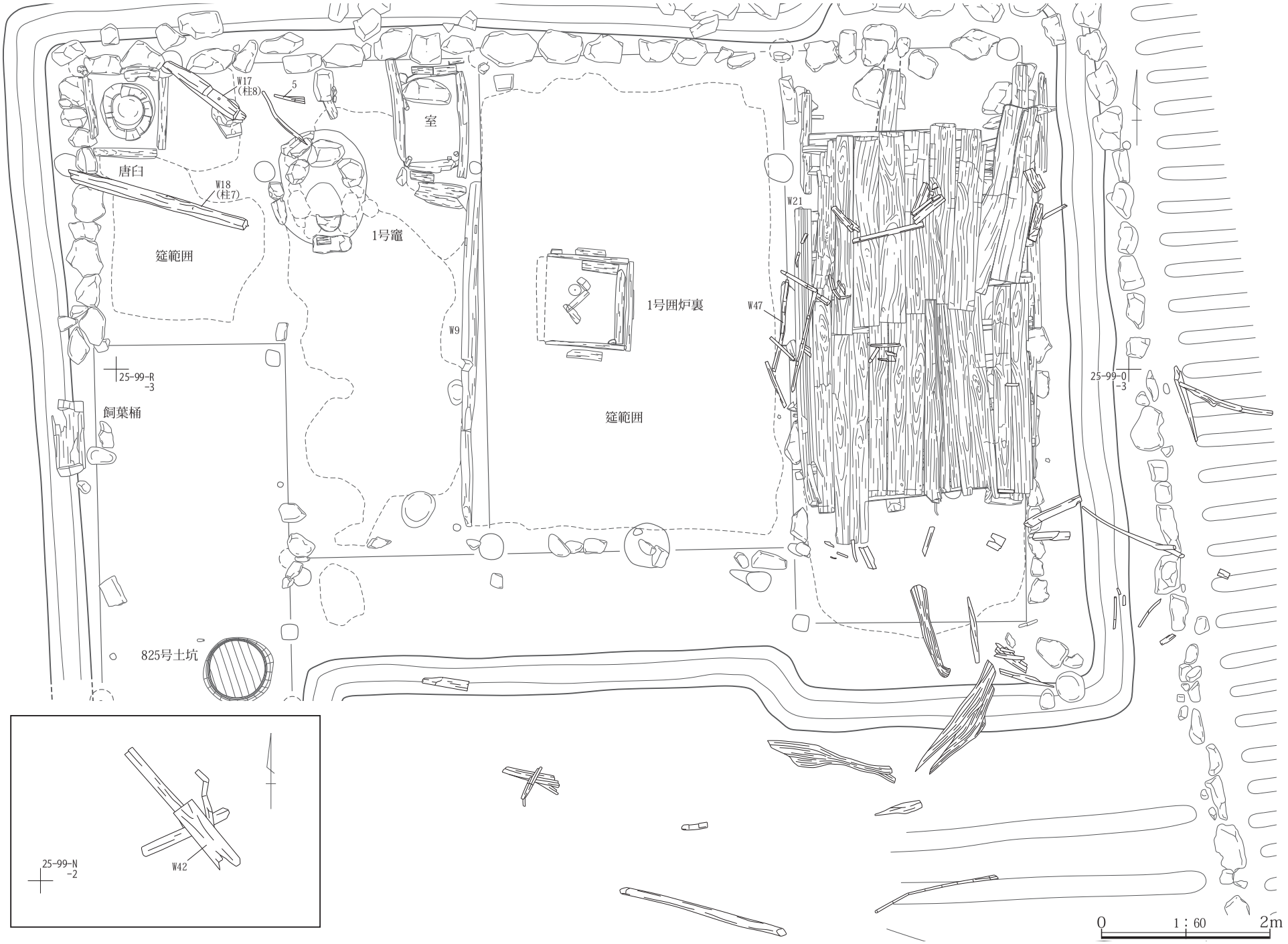
・踏鍬　お櫃の底部付近から出土している。完形ではなく、一部欠損している。

(エ)仏壇上遺物

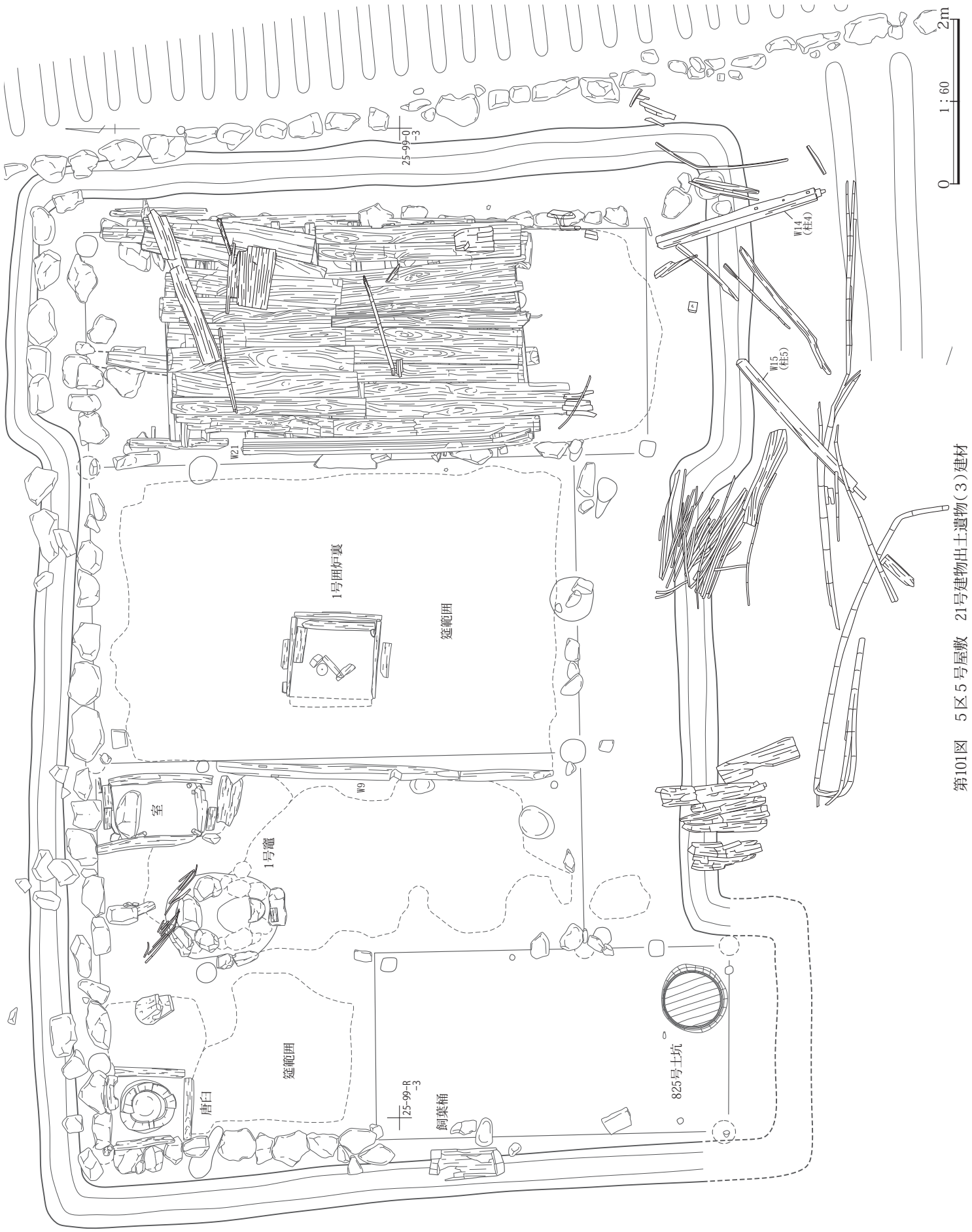
南側に倒れていた仏壇天井部付近の床面から、文箱、硯箱、おりんが出土した。仏壇と文箱等は重なっていないが、他の板材の上に倒れている仏壇より、低い位置から文箱等が出土している。仏壇の上に載せてたあった文箱等が、仏壇の倒壊とともに床面に落ちたようである。



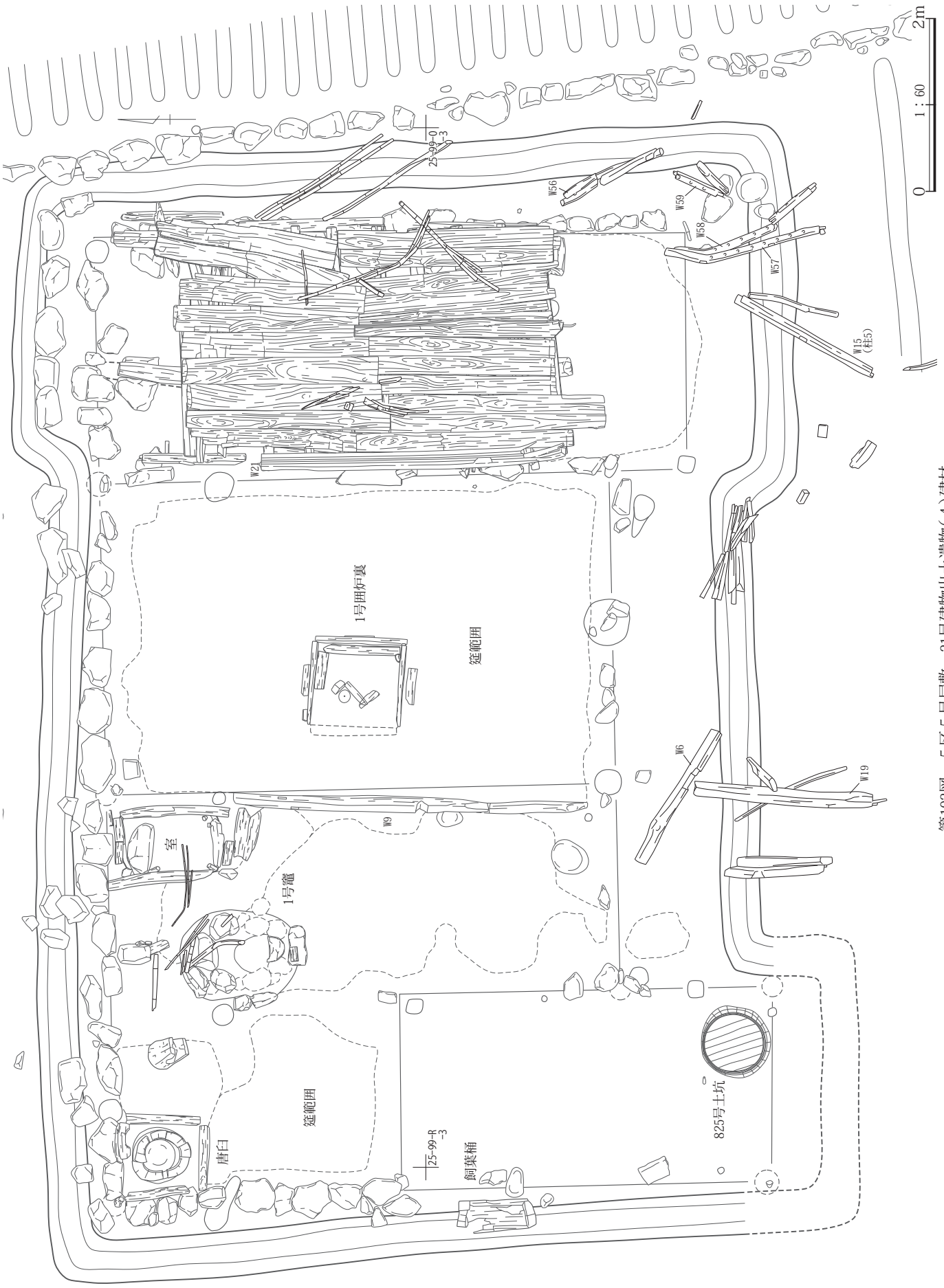
第99図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物（１）建材



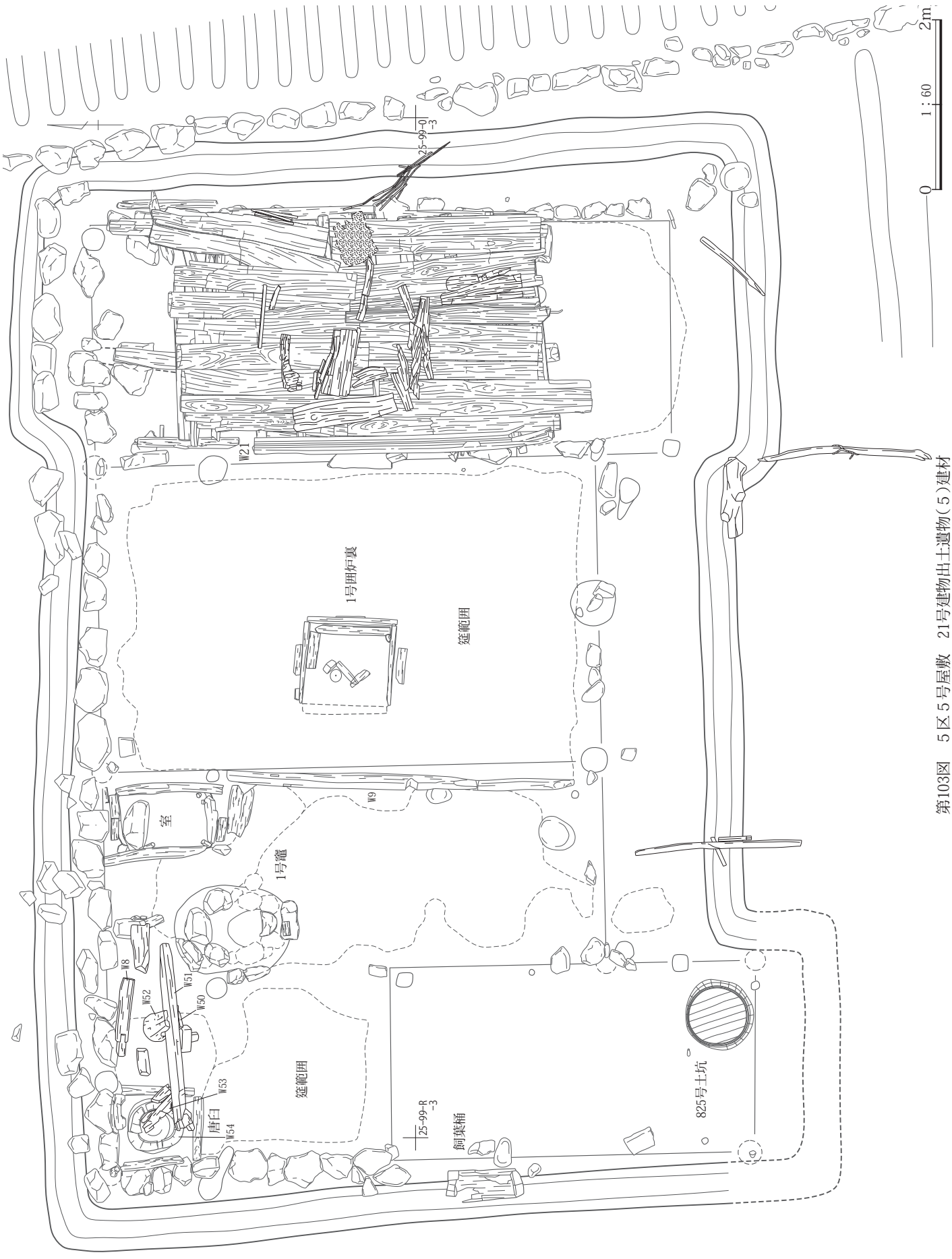
第100図　5区5号屋敷　21号建物出土遺物(2)建材



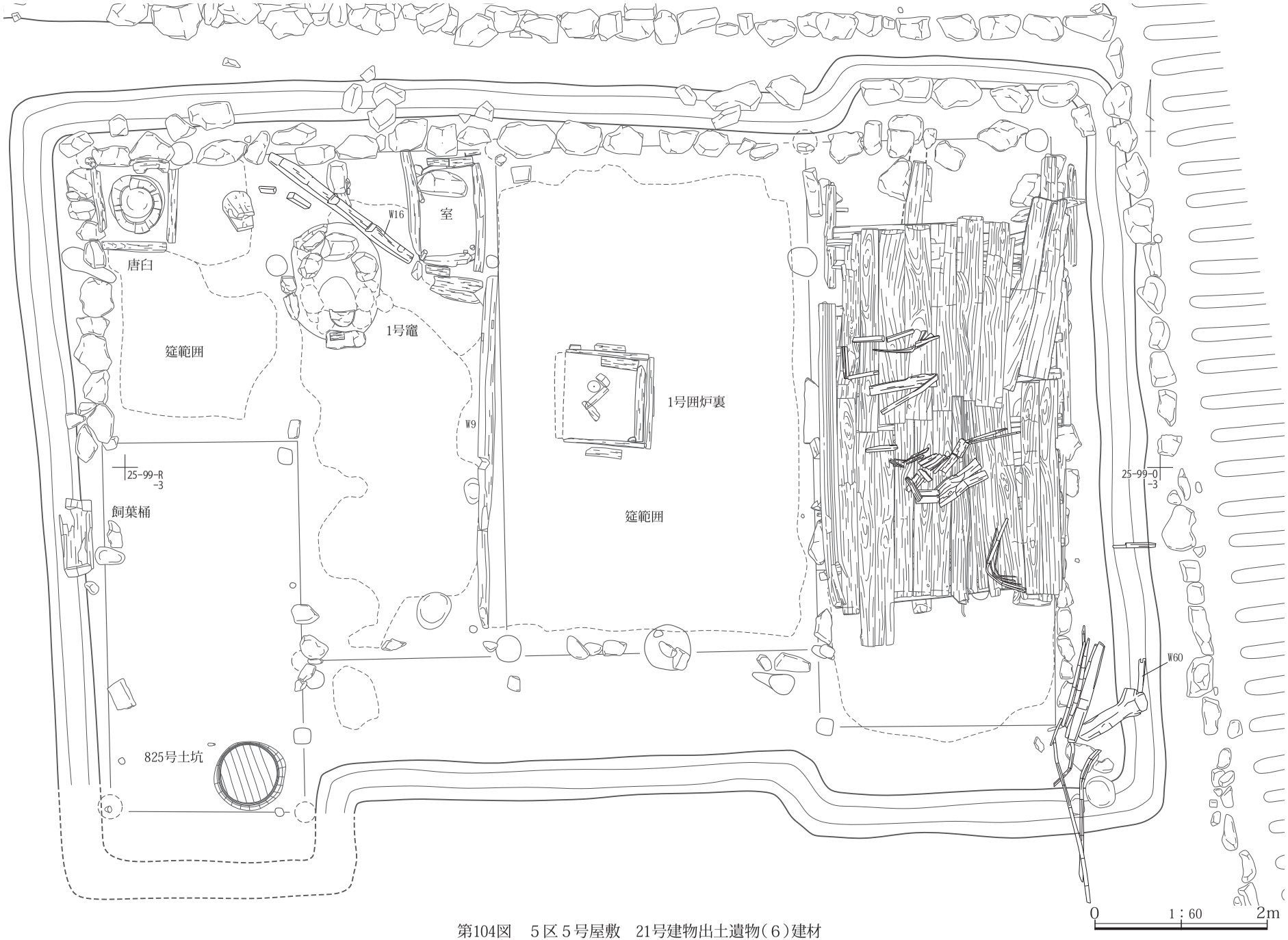
第101図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物（３）建材



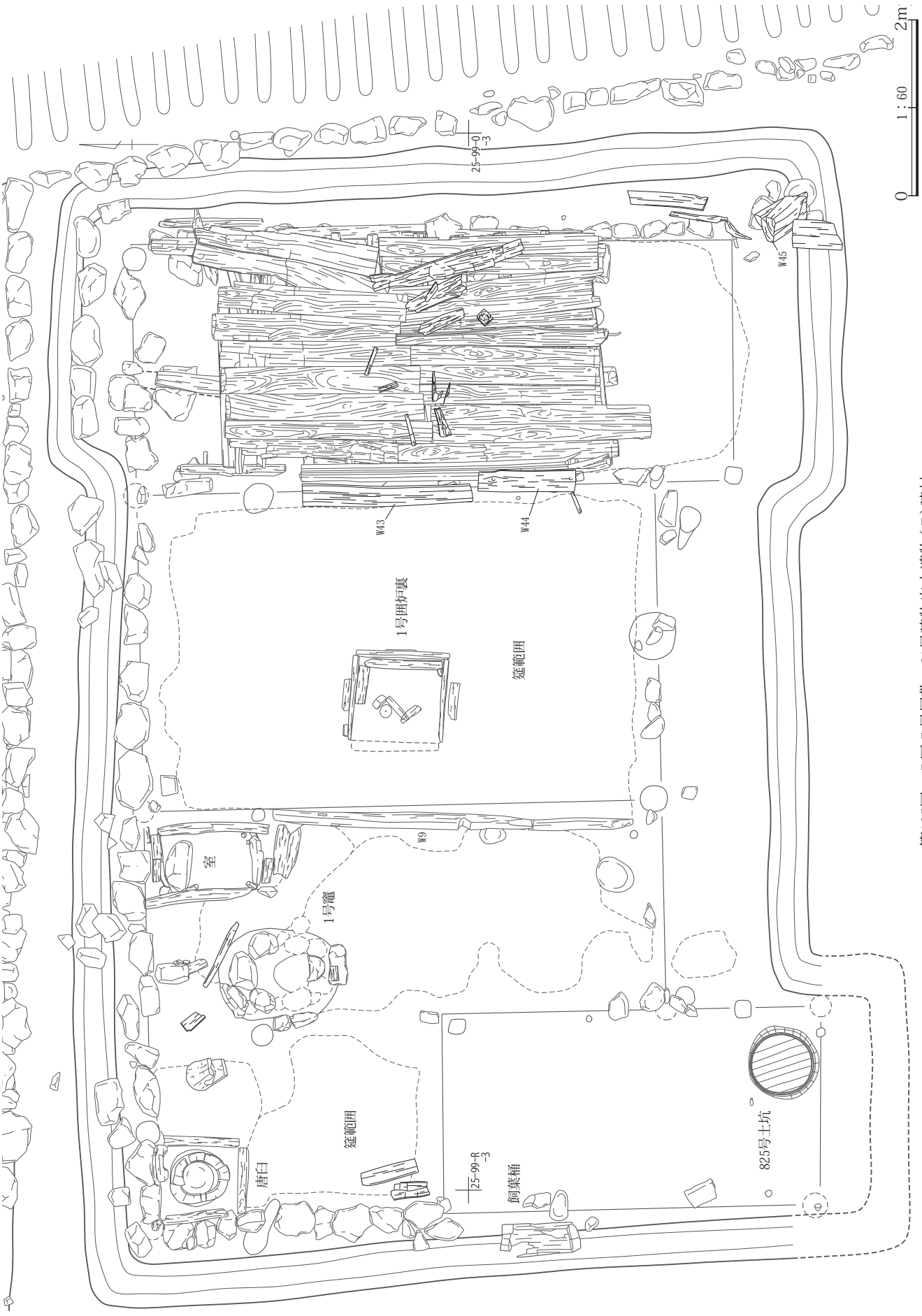
第102図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物（４）建材



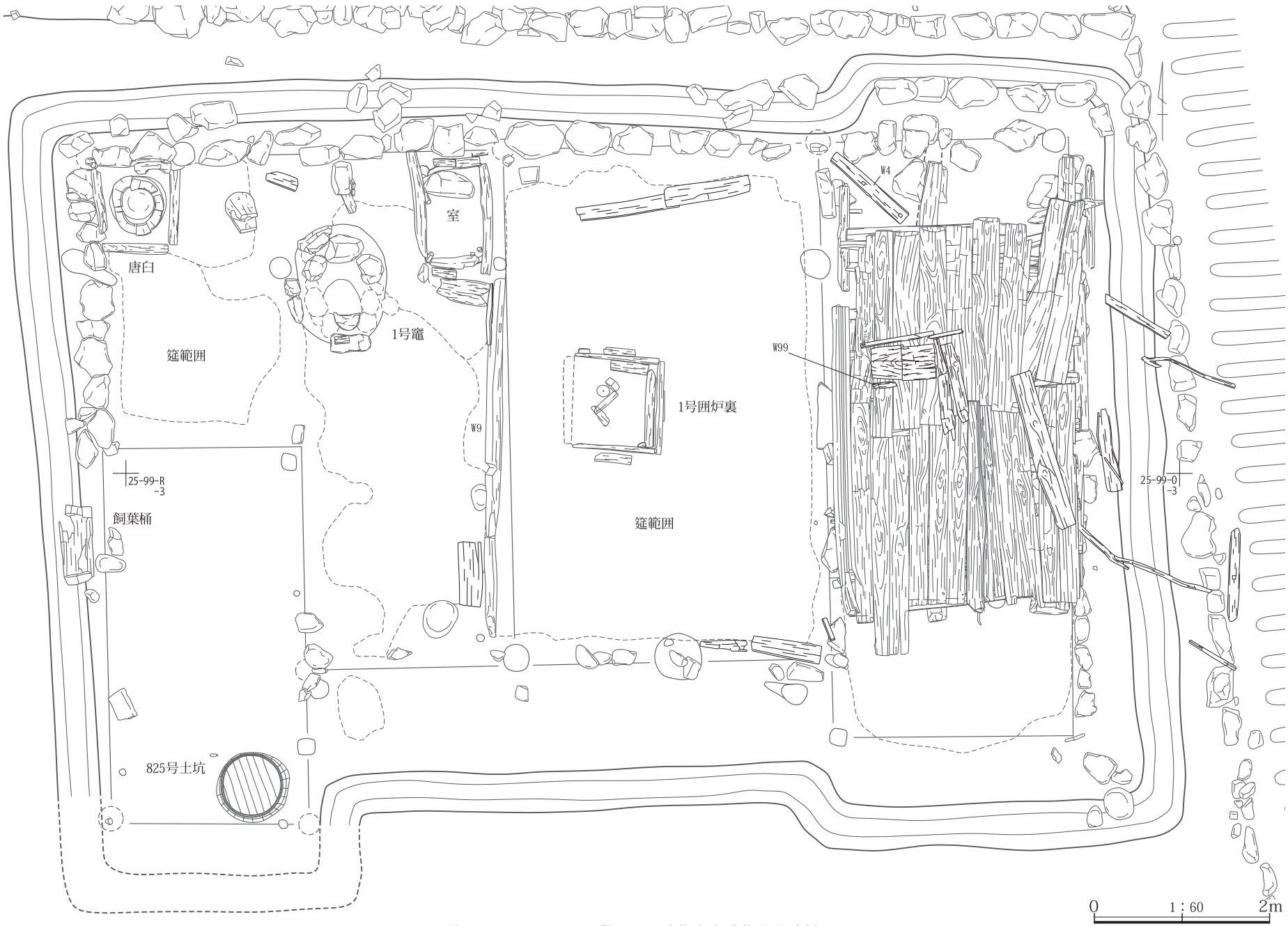
第103図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物（５）建材



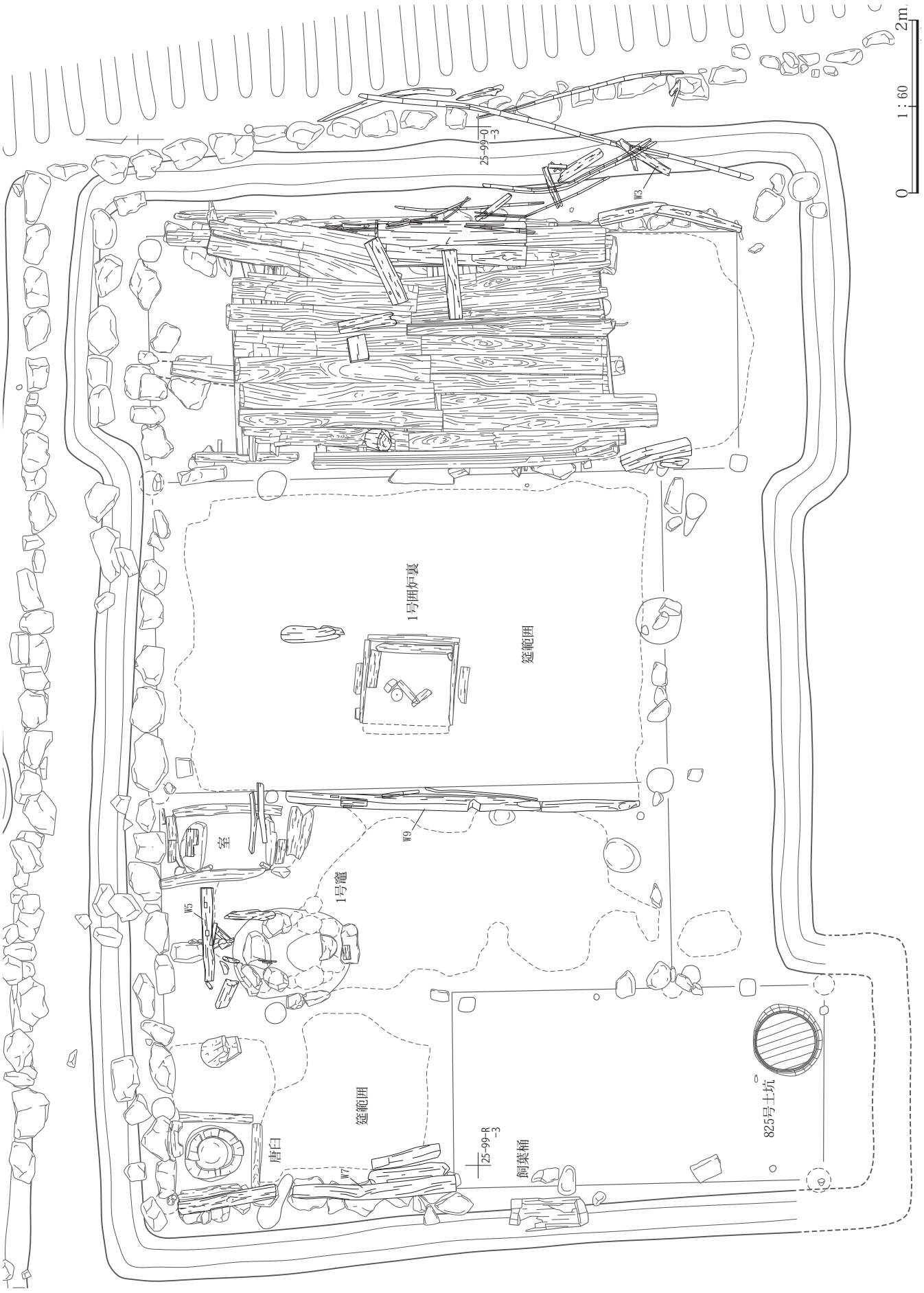
第104図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物（６）建材



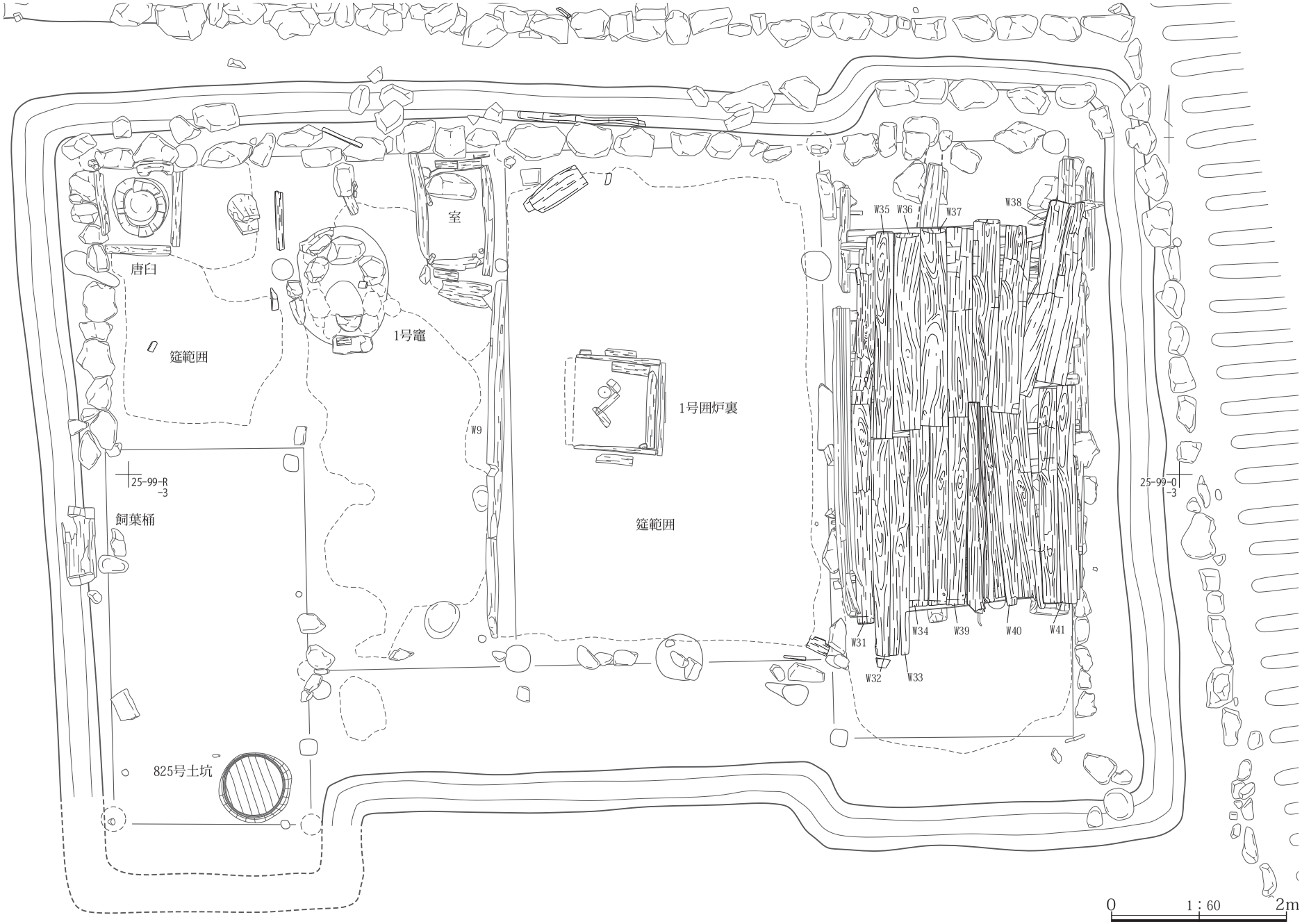
第105図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(７)建材



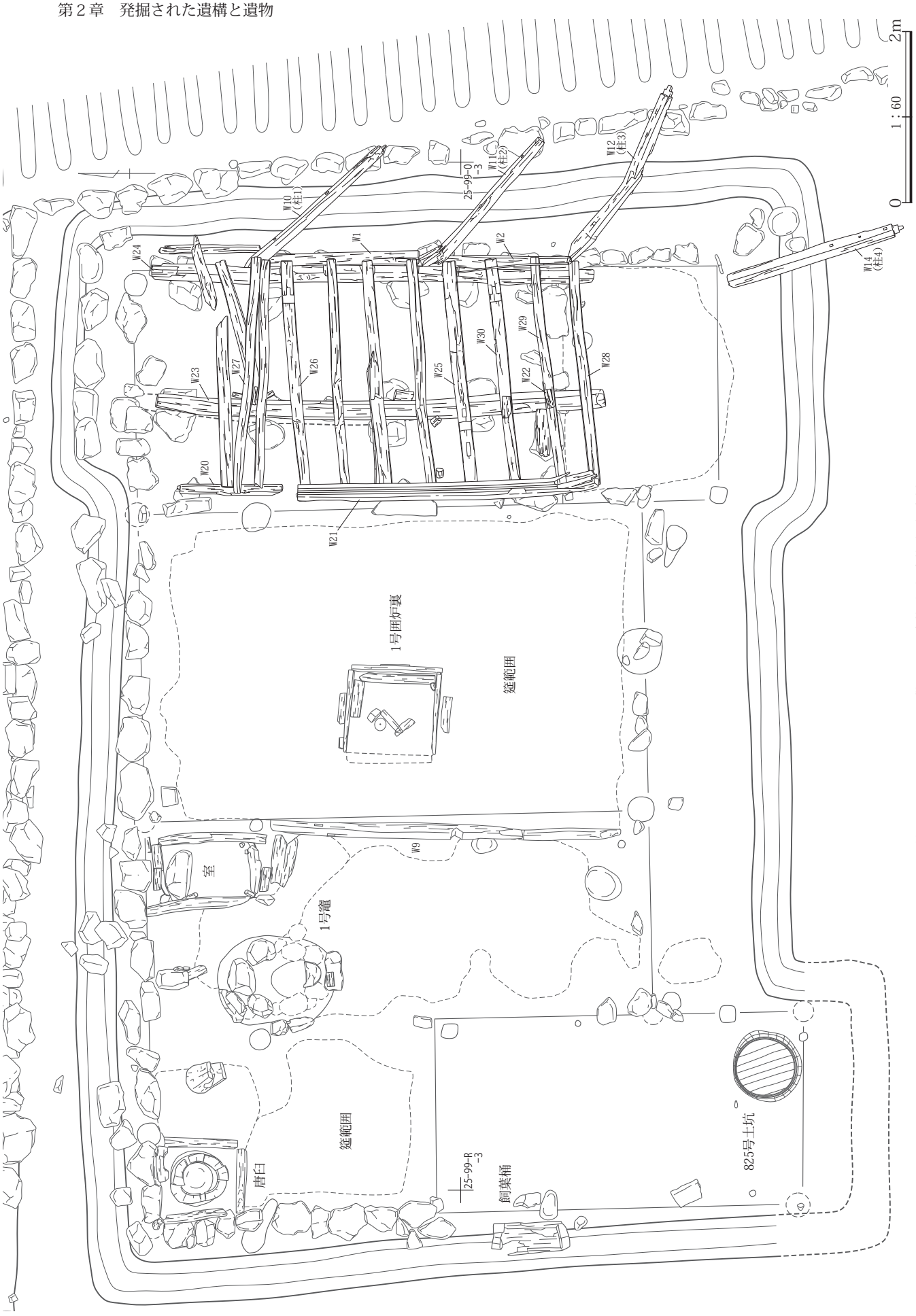
第106図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物（８）建材



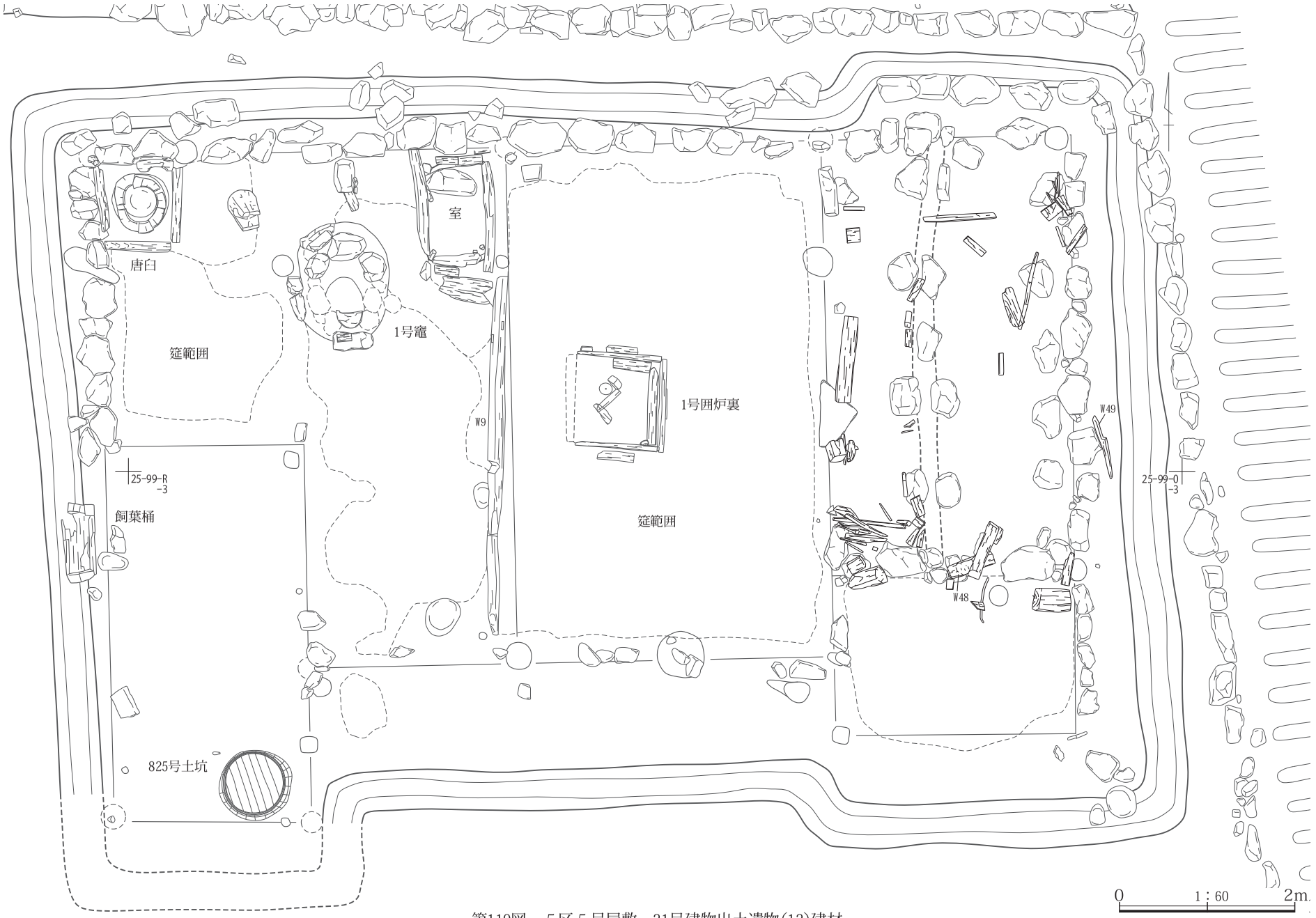
第107図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物（９）建材



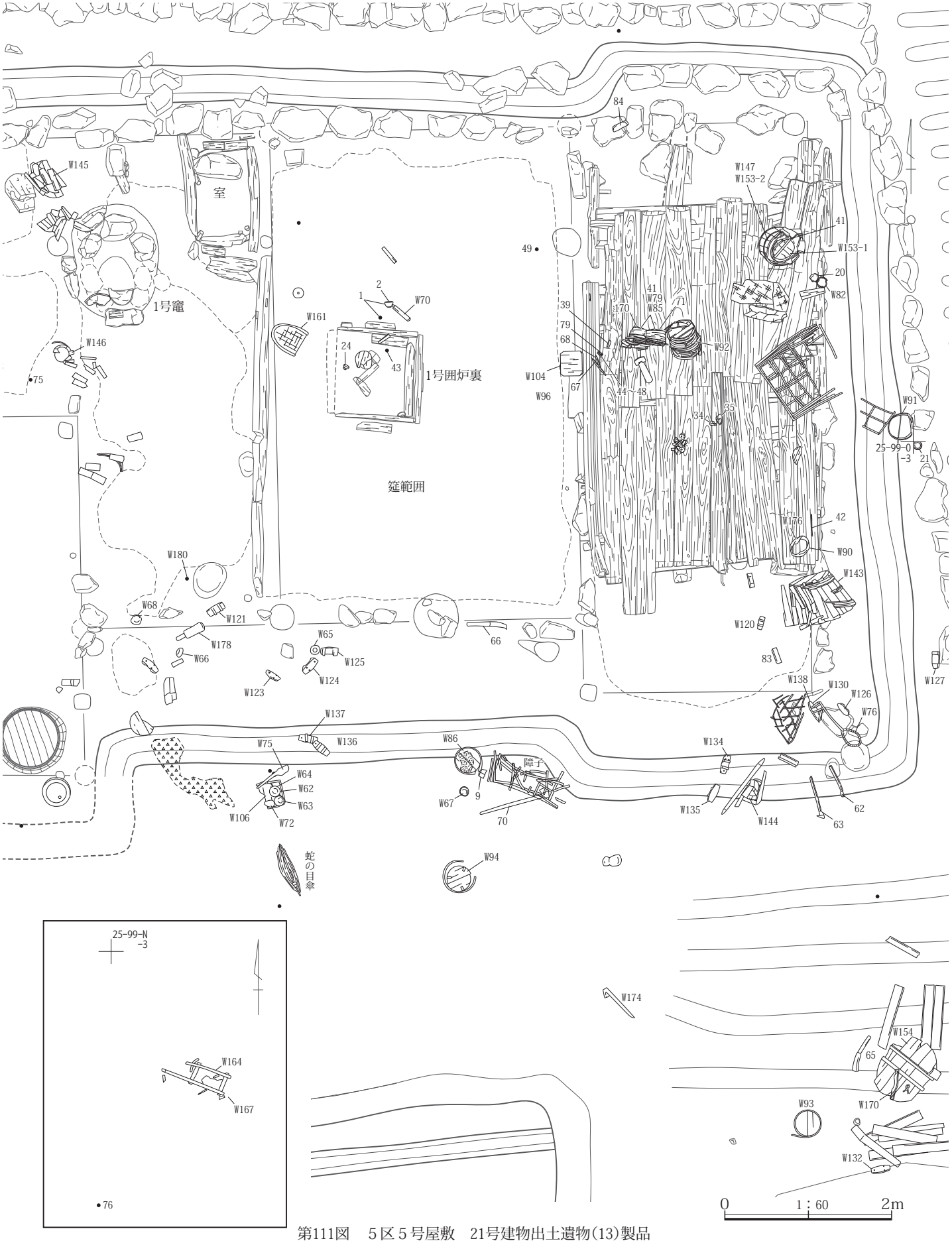
第108図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(10)建材



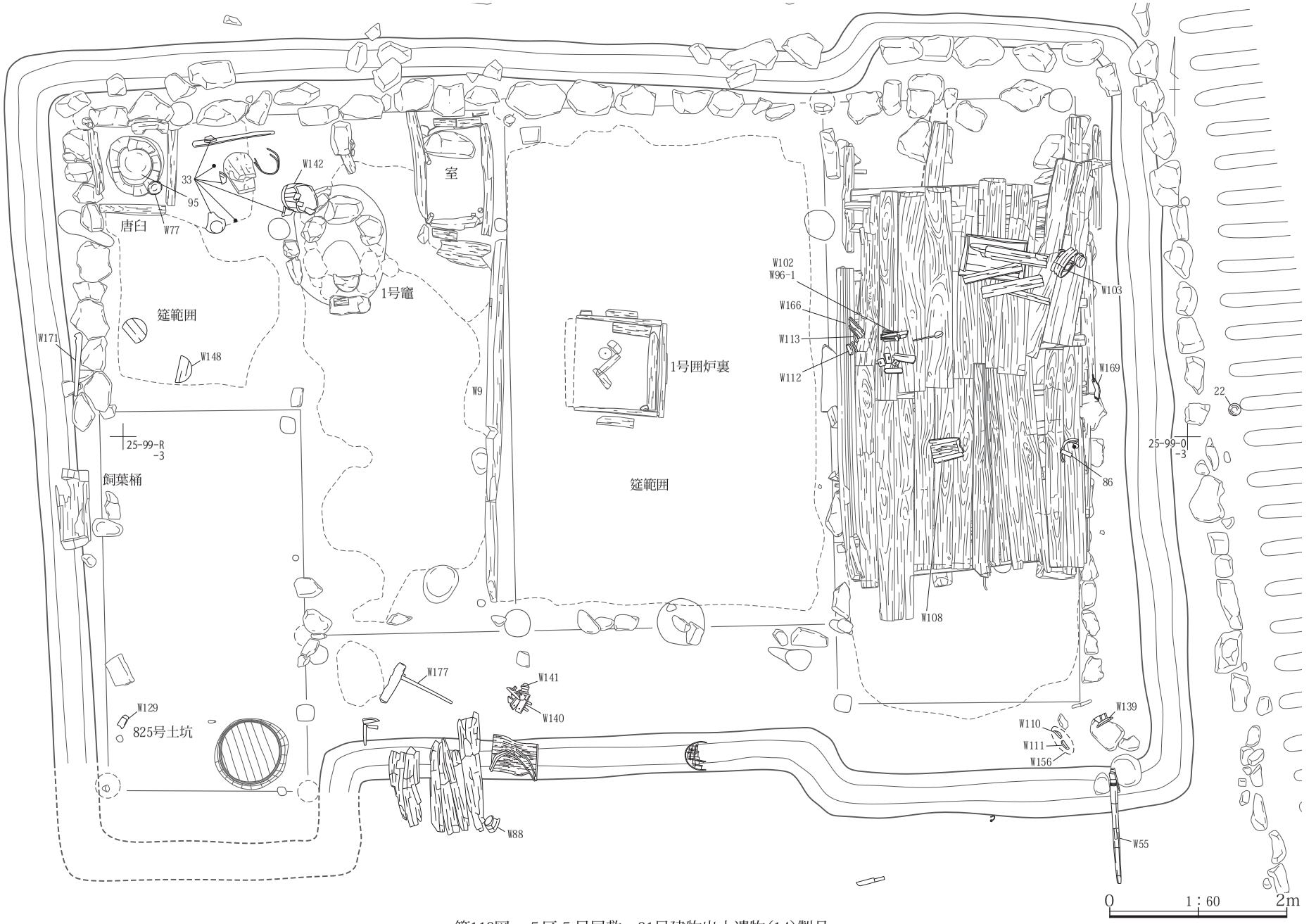
第109図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(11)建材



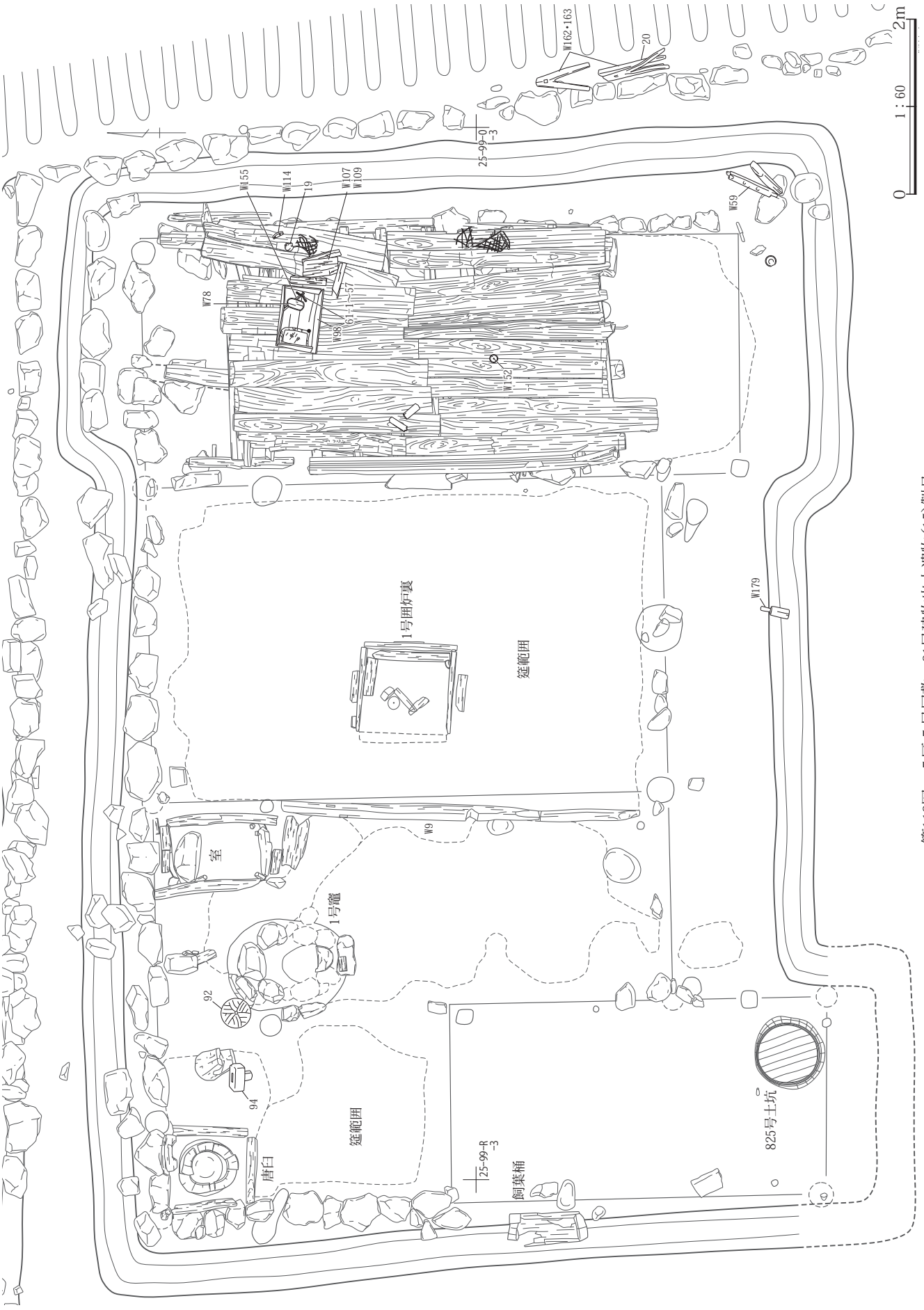
第110図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(12)建材



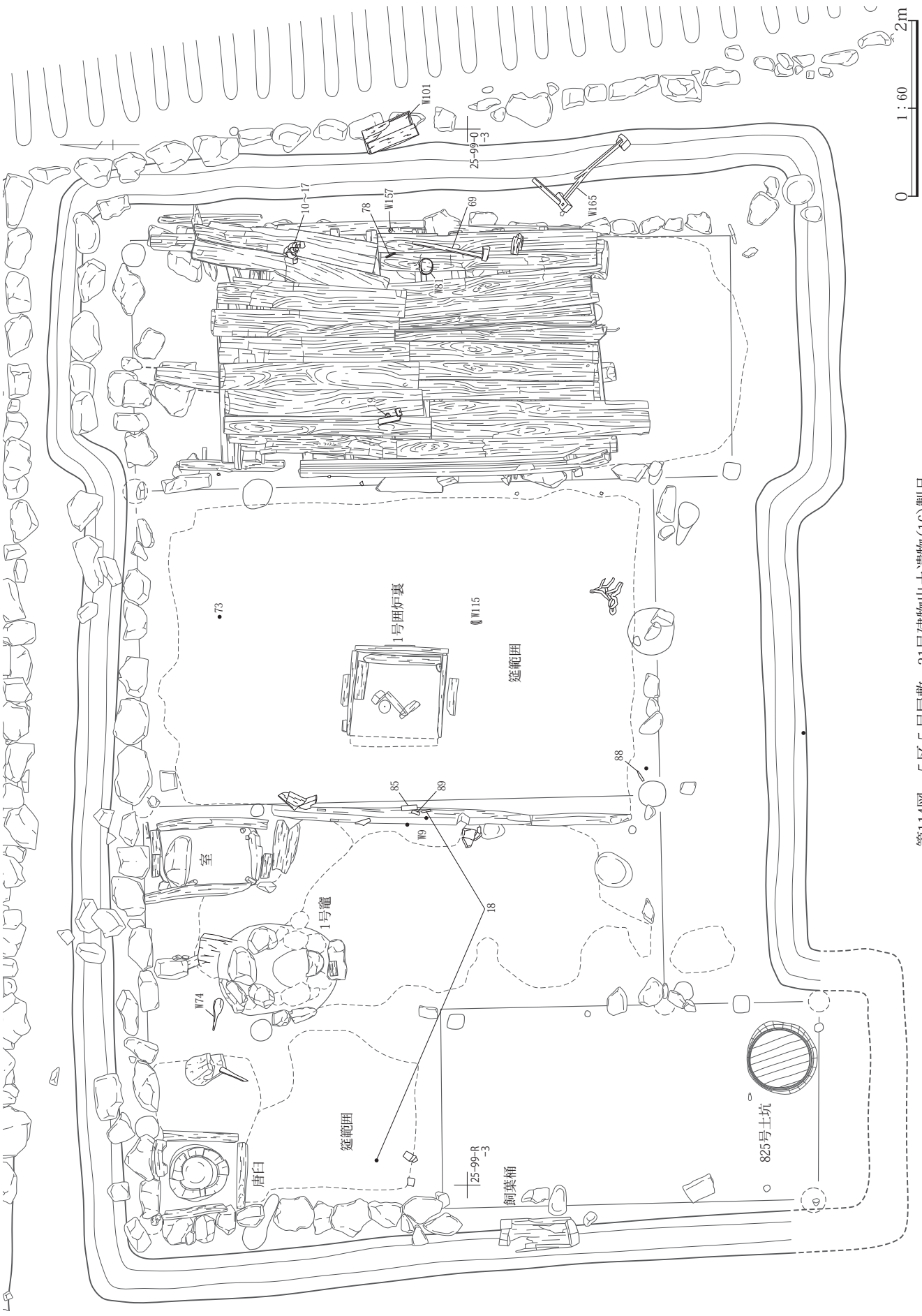
第111図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(13)製品



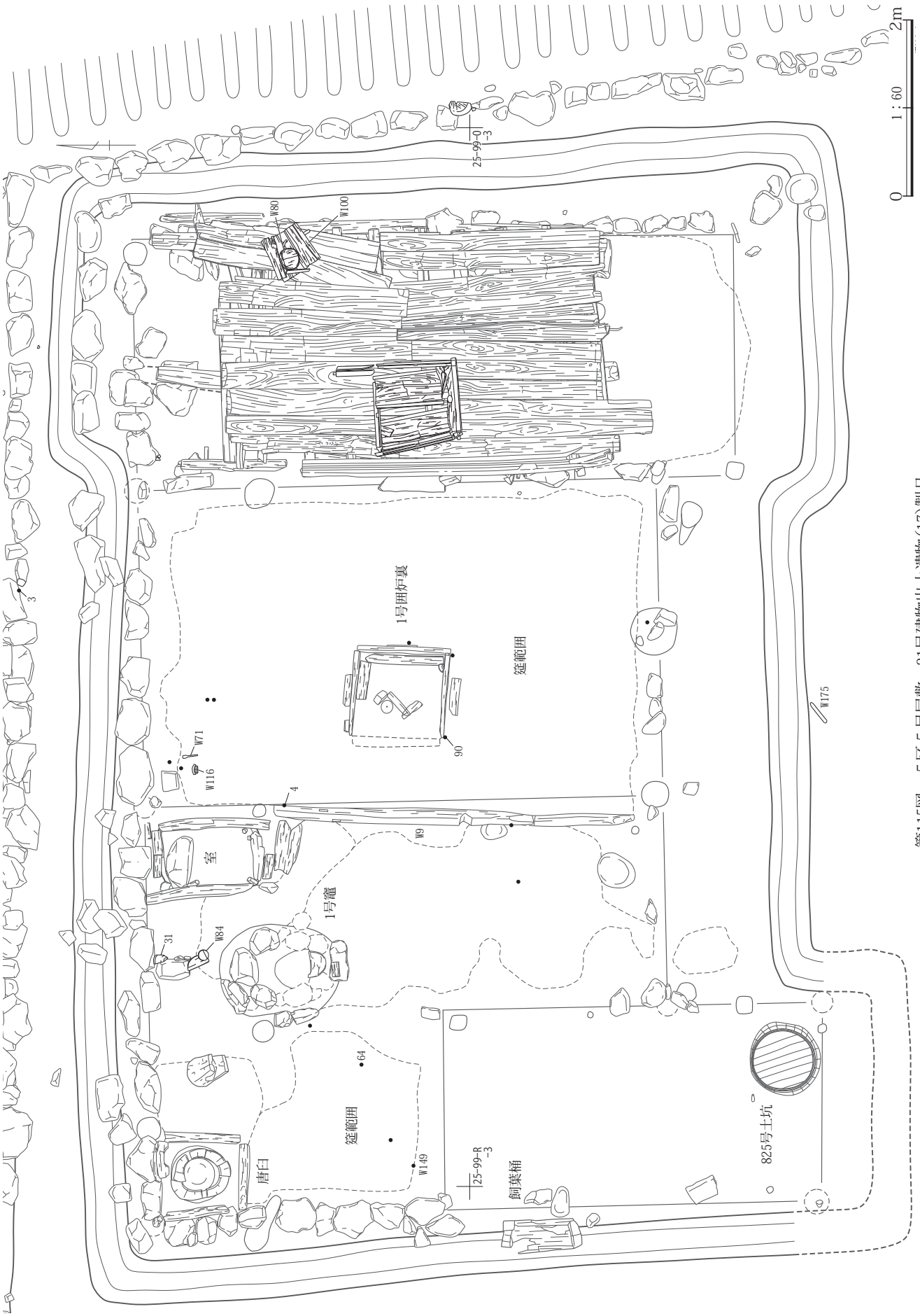
第112図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(14)製品



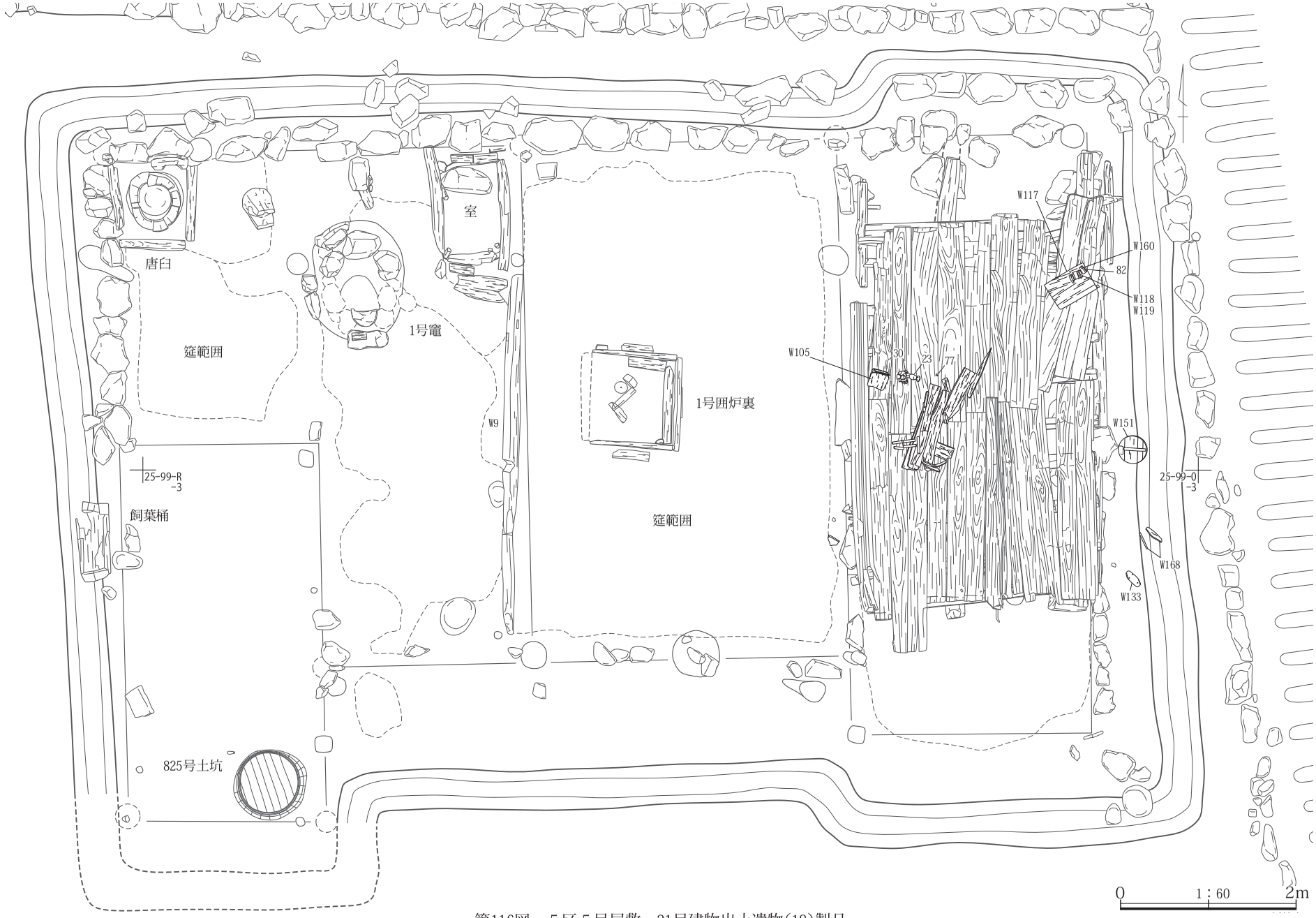
第113図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(15)製品



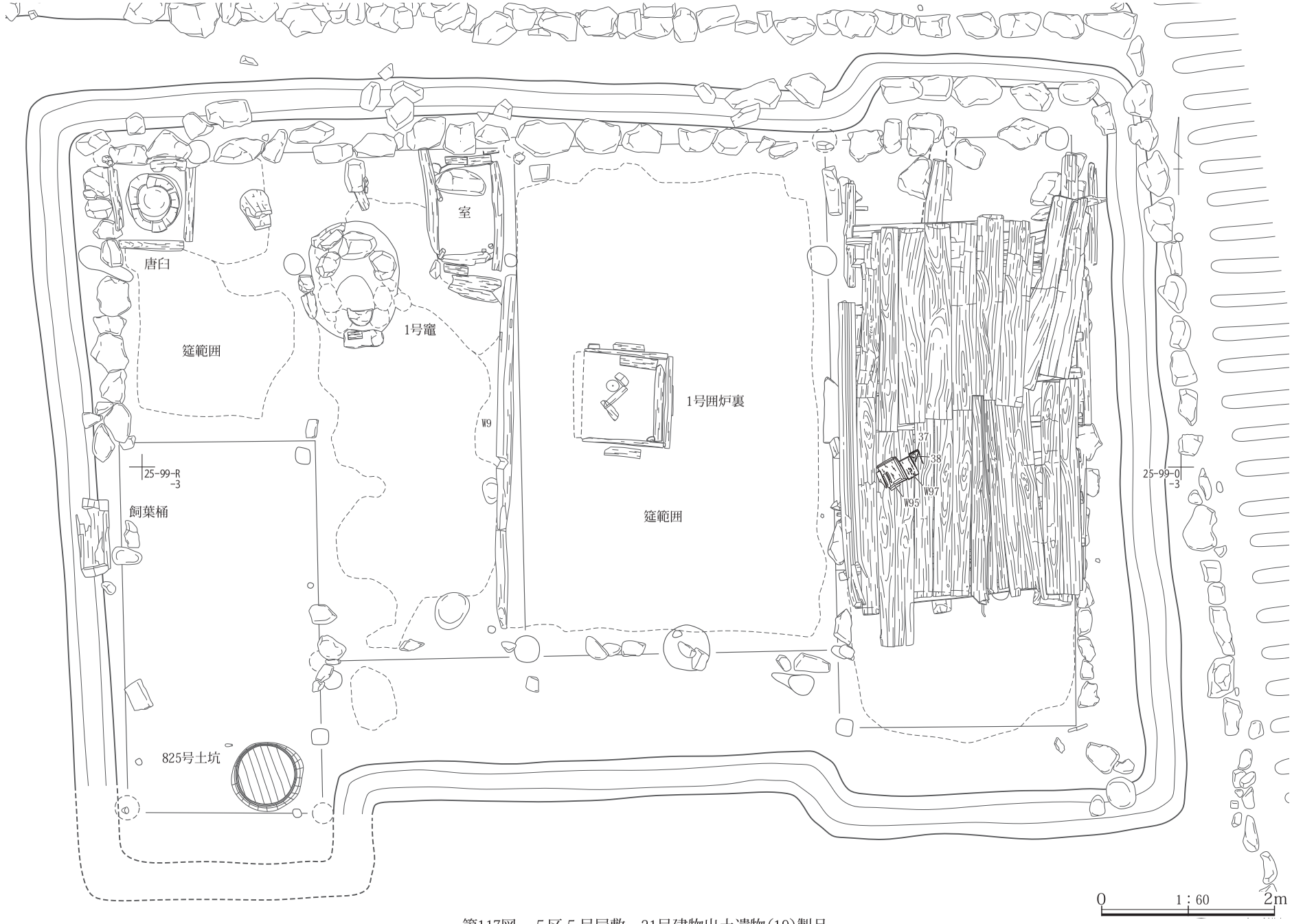
第114図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(16)製品



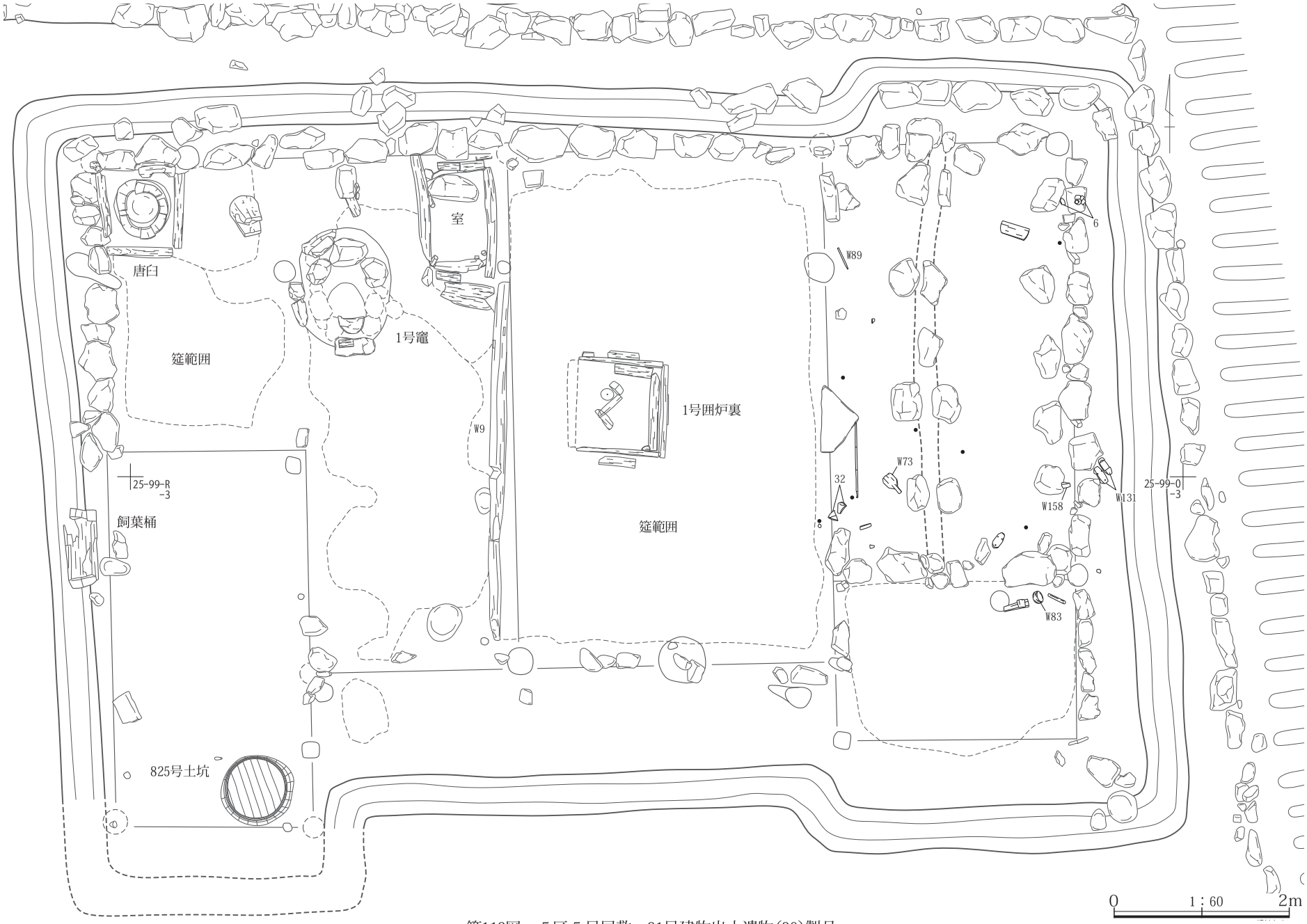
第115図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(17)製品



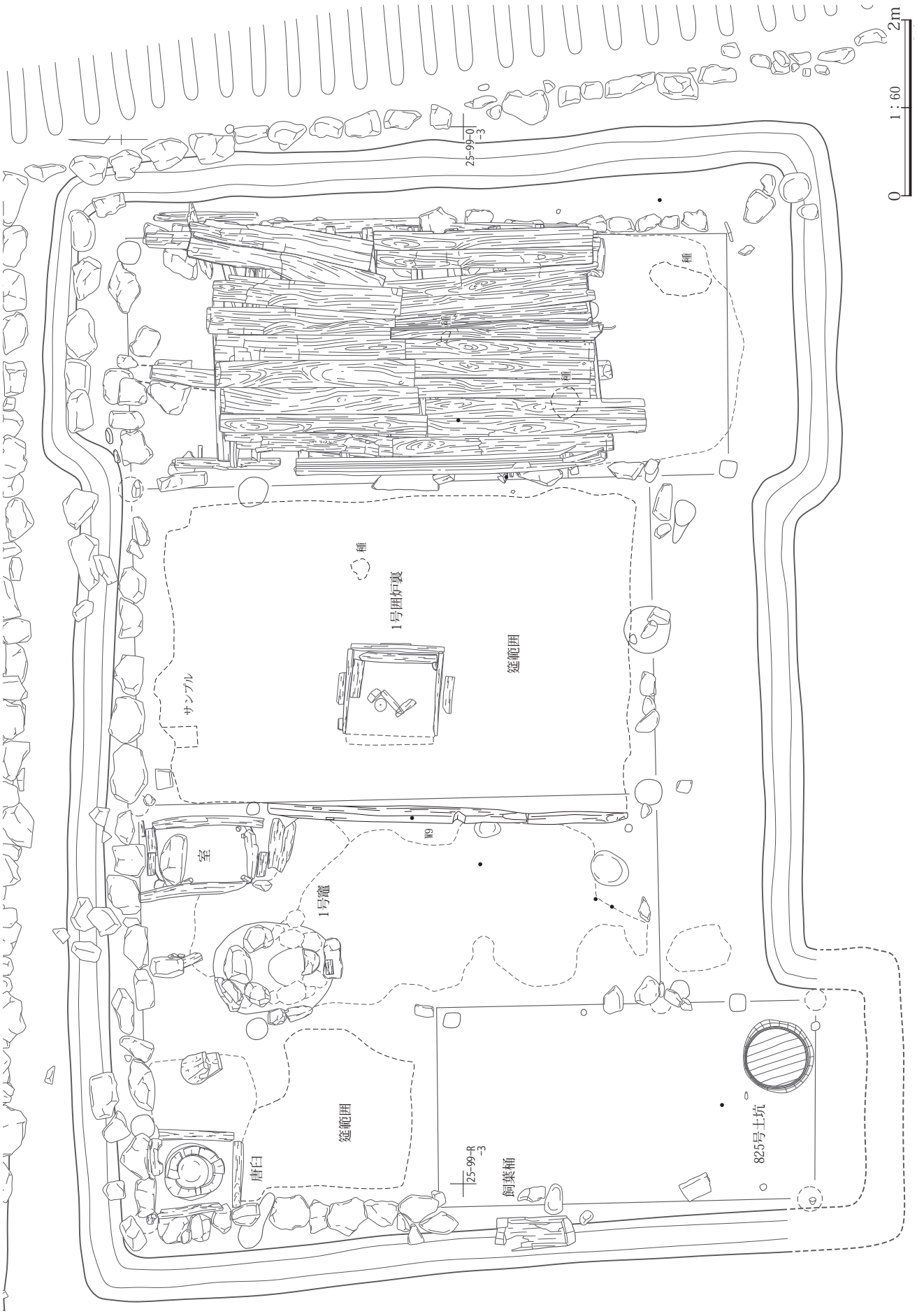
第116図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(18)製品



第117図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(19)製品



第118図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(20)製品



第119図　５区５号屋敷　21号建物出土遺物(21)その他

・文箱　文箱の蓋と思われる。長辺29.6㎝、短辺22.7㎝、高さ7.3㎝である。蓋のかぶさる身の部分は不明である。天井板上面は亀腹状を呈し、黒漆を塗った後に文様が描かれている。筆者の手元にある現在の文箱蓋の大きさは、長辺30.3㎝、短辺22.8㎝、高さ4.5㎝である。蓋は下までかぶっていないので高さは異なるが、縦横の大きさはほとんど同じである。

・硯箱　ほぼ完形である。長辺23㎝、短辺14.5㎝、高さ3.5㎝である。内面朱漆、外面黒漆、蓋上位面は鋸歯文、羽状文、内部に硯、墨、筆が入っていた。

・おりん　植物で編まれた長方形の入れ物の中からおりんと細い鉄の棒が出土した。おそらくセットで入れられていたものと思われるおりんの大きさは、直径4.6㎝、高さ5.6㎝である、厚さは口縁部で0.4㎝ほどあるが、そのほかは1.1㎝前後と薄い。底部中央に0.2㎝前後の穴が開けられている。ここに芯棒が通されていたものと思われる。おりんをたたく鉄の棒は、長さ10.2㎝、太さは底部付近が太くなっており、0.4㎝前後である。上部は丸く加工されている。

（２）収納について

21号建物に押し入れや戸棚は確認されていない。おそらくこの時代に押し入れはなく、戸棚もほとんどなかったと思われる。出土した戸棚が確認されたのは27号建物の１個だけである。家の中の食器や衣類等はどこに収納していたのであろうか。21号建物では、仏壇の他に収納に関するものとして、箱２個(ほかにもあったと思われるが、確認出来ていない)と行李および、多くの樽やざる等の竹製品が出土している。これまでの出土例からざるの中に漆椀が入っていた例があり、ざる等も収納に使われてた。現在の生活から見ると、収納に関するものは少ないようである。21号建物では。板間に生活用品が収納されていた箱が２個確認されている。ほかにも多くの箱が出土しているが、小さいものが多く、それらは整理して収納するための戸棚としての役割ではなく、収納するための小さな箱類に近いものではないだろうか。仏壇の北東部に箱３、曲物、行李、桶が密集して出土した。行李の中に何が入っていたかは不明である。行李の中には陶磁器や木製品の出土はないので、衣類が入っていたと考えたい。箱２つの中には曲物や櫛さらに麻挽の道具等が入っており、大きな曲物の中には桝や陶器、瀬戸美濃の水注、竹製品や陶磁器、桶の中には、大小２つの鍋が重なるように入っており、最も上には木製の蓋が乗っていた。これらは、使われている場所に置かれていたものもあると思われるが、大部分は保管されていたのではないだろうか。収納するための特別な戸棚などなく、簡単に収納できる身近な箱や籠、曲物や桶等に収納していたと思われる。42号建物は生活の様子を良好に残している建物である。ここも生活用具は、囲炉裏北で、北側の寝間と思われる部屋との境に多く置かれていた。わずかな収納場所で、充分であったことを示していると思われる。以下、品物を収納していた箱２つと行李と思われる出土品について説明する。

（ア）１号収納箱

仏壇に近接した北東方向の板間から出土した東西方向に長い長方形の箱である。上から行李が出土している。出土写真では、蓋に使われたと思われる板も３枚出土している。長辺70㎝、短辺43㎝、高さ26㎝である。収納箱としては最も大きいようである。高さ26㎝あり、横板を２段重ねている。中から楕円形の曲物、その脇から束になった差銭の状態で新旧の寛永通寶、楕円形の曲物の下から扇子が出土している。曲物の反対側に植物の茎等で編んだ長方形の器と思われる品物が出土したが、詳しくは不明である。

（イ）２号収納箱

１号収納箱の東に接して出土した。この箱の上には大きな曲物がありその中には、桝・瀬戸美濃の水注・竹製品・陶磁器等が入っていた。曲物が収納箱を兼ねていたようである。この曲物を撤去すると下から２号収納箱が出土した。長辺29㎝、短辺18㎝、高さ16.5㎝である。１号収納箱から見ると約半分の大きさである。中から麻の繊維を引き出すための麻挽２個と櫛１個および、梳櫛１個が出土している。

（ウ）行李

これまでの発掘で行李が出土した例はあるが、全体の大きさを想定できる状態での出土例はほとんどないと思われる。残っていたのは底面と東側面及び、南側面の一部であった。側面が開くように押しつぶされたような状態で出土した。大きさは長辺約50㎝、短辺約30㎝、高さ約20㎝である。現在残っている行李の大きさは様々あるが、筆者の手元の行李は、長辺約74㎝、短辺約40㎝、高

さ約22㎝である。編んでいる材質は、幅の広い割竹ではなく、幅の狭い篠竹のような細長い材３本を一組として籠のように斜めに編み込んでいる。

（３）煮沸具

煮炊きに使用するものとして、鍋２個・釜１個が出土している。薬缶と茶釜は出土していない。

（ア）釜

竈の中から出土している。割れていたが、復元の結果ほぼ完形に近い形となった。石川原遺跡では最も残りの良い釜である。口径約59.2㎝、頸部径45㎝、底径33㎝、高さ33㎝、底部から頸部までの高さ21㎝である。この釜が竈に架けられた状態で出土した。釜の頸部径45㎝の所に鍋（口径39㎝と33㎝）を載せることは難しいので、竈で鍋は使われなかったものと思われる。釜には鍋と異なり、吊るすための取っ手や丸底の釜を平らな場所に置くための底部３か所の突起等はない。

（イ）鍋

鍋２個が板間の桶の中から出土した。口径が33㎝の鍋が39㎝の大きな鍋の中から出土し、その上に口径約30㎝の鍋蓋がつまみを上にした状態で出土している。

（ウ）火打ち具

火打ち金が倒れている仏壇西側に接した状態で出土している。ほぼ完形である。両脇には完形の櫛が２個出土している。

（４）食膳具（漆製品）

数多くの丸善や曲物等が出土しているが、食事用の漆椀と蓋は８個と数が少ない。深椀２個と浅椀５個と蓋が１個である。土間と土座の境界付近の南に倒れていた大戸と思われる部材や土壁の上から、折敷と思われる板の上に、深椀２個と浅椀１個が板の上に伏せた状態で出土した。深椀の内側には浅椀が置かれていた。折敷の南側は欠損しており、そこに漆椀が置いてあったか不明である。この折敷の東・北・北西の２ｍ前後の位置から漆椀３個と漆蓋１個が出土している。他の１個は板間南から出土している。このように土座と土間の境界付近の南からまとまって出土している。すべてが折敷の上にあったとは言えないが、それに近い形で保管されていたものと思われる。

（ア）曲物

曲物は大小多く出土している。曲物の側板は上から見ると全て右回転で、最初の側板に、一周した側板が、外側に重なるようになっている。重なる部分は上下を少し狭く加工している。重なった部分はサクラ等の樹皮で編み固定されている。21号建物から15個出土している。直径は９～15㎝、高さ５～11㎝と様々である。側板と底板は釘で３か所前後固定されている。樹種の分析は少ないが、側板はスギと確認されているものがある。

（イ）膳

丸善が仏壇下の戸棚から10枚まとまって出土している。

（ウ）盆

南壁１の上から直径30.3㎝、側板の高さ3.3㎝の製品が出土している。大きさは丸善とほぼ同じである。しかし、底面に３個の脚が付かない。側板戸底板は多くの釘で止めている。今日のお盆の相当するものではないだろうか。ほかにも盆の可能性のある製品としてW86の曲物がある。

（エ）重箱

仏壇と仏壇下の戸棚の境部分から壊れた状態で蓋付２重の重箱が出土している。おそらく戸棚に収納されていたものと思われる。ほかに重箱は出土していない。内面朱漆外面黒漆、側板外面に枝垂れ桜文の金蒔絵あり。箱部分の大きさは、長軸19.8㎝、短軸17.9㎝、高さ3.5㎝である。長軸方向が木材の上下方向であり、短軸方向が木材の横方向である。２本の脚が底部両端についているが、脚は全て短軸方向の底面についている。歪みや割れを防ぐ手目と思われる。蓋も同じである。

（オ）折敷

方形で21㎝四方の大きさで、四隅を落とした板上に高さ1.2㎝の側板を巡らせている折敷と思われる。倒れた仏壇の戸棚付近の下から１個、その西側で敷居にもたれた状態で出土している。

（カ）箸

箸は多くの建物から複数出土している。竹筒の中から複数出土することが多い。21号建物でも竹筒の中から黒漆が塗られた２本１組（61765）が板間南側から、赤色漆が塗られた２本１組（62001）が土座の囲炉裏北に接した場所から出土した。板間南出土の箸（W69②）の長さは24.6㎝、囲炉裏北出土の箸（61765）の長さは18.5㎝である。上端部分は欠損している。他の51号建物では、竹筒

の中から長さ24.5㎝と23.2㎝の赤褐色漆が塗られている２本セットの４本が出土している例がある。

(キ)箸入れ

箸が入っていた竹筒である。板間南から出土した竹筒の長さは27.5㎝､太さ3.9㎝｡上下両端が節となっており、上部の節は割っている。上部の節上には半裁した取っ手が付いている。取っ手の中央に穴はない。囲炉裏北から出土した竹筒の長さは23㎝、太さ3.6㎝である同じように上下両端が節となっており、上部の節は割っている。上部の節上には半裁した取っ手が付いている。取っ手の中央に穴はない。

(５)陶磁器

椀・皿・水柱・燈明皿・ひょうそく・仏花瓶・片口・擂鉢

(ア)椀

肥前と瀬戸美濃の碗が９個出土している。出土位置は囲炉裏周辺から３個、他は、板間北、南壁の上、その他であり一定していない。囲炉裏周辺から出土した碗は全て肥前染付椀であり、そのうちの１個(２)は囲炉裏北の竹筒に入っていた箸の脇から出土している。それらは日常の生活の中で使われていたものと思われる。漆椀の出土範囲とは少し異なるが、木製漆椀と、陶磁器椀の違いからほぼ同じように使われていたことも考えられる。周辺から皿は全く出土していないので、日常の食器としては、漆椀(深椀と浅椀)・陶磁器碗(茶椀)・折敷(食器を並べる)・箸がセットで使われ、皿はその中に入っていないようである。

(イ)皿・水柱

瀬戸美濃の皿(直径16㎝)８枚が収納箱２の上のかごの中からまとまって出土している。この皿は全て同じ文様である。近接して瀬戸美濃の水注が２個出土している。おそらく、これらは収納箱２の上に置かれた籠の中に保管されていたものと思われる。北西方向に接した場所には、桶がありその中に鍋２つと鍋蓋１個が入っていた。この陶磁器類の上には曲物があり、その中には桝が入っていた。

(ウ)ひょうそく・燈明皿

ひょうそく(瀬戸美濃・完形)１個が倒れていた仏壇の内部で位牌の隣から出土している。仏壇では、燈明皿でなく、ひょうそくが使われていたようである。

燈明皿が３個出土している。出土位置は、土座北西端に１個、ほかは建物東側畑中である。

(エ)水注・仏花瓶

水注３個中２個は、８枚の陶磁器皿とともに板間からまとまって出土している。他の１個は、仏壇の仏花瓶の隣から出土している。

(オ)片口・擂鉢

各１個出土している。出土場所は土間北側唐臼周の北と南で近接して出土している。産地は瀬戸美濃である。出土地点周辺は、唐臼・桶・樽等が出土した場所で台所の一部と思われる。

(６)樽と桶

桶と樽は当時の生活の中で、最も多く使われた生活用具必需品であった。桶と樽の基本的な違いは、難しいようであるが、水・酒・みそ等を貯蔵保管し、蓋を伴うものが樽、一時的に溜めて使用し、移動を前提とし、蓋が付かないものを桶とした。しかし、桶や樽の様々な形態があるので分類は難しい。両者は､作られる形や大きさ、作り方や木材の加工方法が異なっていることが多い。樹種はスギが多いが、便所桶・馬屋桶の場合、常に地中にあるために、クリが使われている。

樽は側板と底板が板目、底板が側板より倍以上厚い。タガが胴部中央から下だけでなく、口縁部端についている。桶は側板が柾目、底板は柾目と板目がある。

側板と底板の厚さに大きな差はない。全体に樽より薄く軽い。タガは底部から胴部までが中心であり、口縁部にはほとんどない。軽いものが多い。桶の中や上で作業をする。また、一時的に水等を保管あるいは移動するために使用している。

便所桶・馬屋桶は人間の糞尿を溜めて、移動を前提とするものは便所桶と呼称される。しかし、人間や馬の糞尿を溜めておくために地中に埋めてある大きな桶も便所桶又は馬屋桶とこれまでは呼称してきた。矛盾しているが、これまで通りとした。

樽や桶は､底板のまわりに細い側板を縦方向に並べて、竹製のタガで結って固定したものである。桶の場合口縁部が開いているので、特に残りが悪い。樽は蓋が固定されていることが多いので、良好な状態で発掘されることがある。図示したほかにも多くの樽や桶はあったと思われるが､壊れており一部の計測となった。樽が板間南側、

桶が土間奥付近から多く出土している。

(ア)樽

取り上げて実測したのは３個であり、２個が板間南の土間出土であり、１個が馬屋北土間から出土している。W144は蓋と取っ手の付いた樽である。W143は崩れているが､側板が板目であり､タガの痕跡が口縁部に複数残っているので、樽と思われる。馬屋北の樽は、底板だけが残っているが、厚い板目取であるので、樽と思われる。

(イ)桶

取り上げて実測したのは３個であり、２個は土間北の唐臼付近であり、他の１個は竈左袖付近である。

(ウ)便所桶・馬屋桶

土間出入口西側、馬屋南側に桶が埋められている。21号建物では他に埋設された桶はないので、これが、人間や馬の糞尿を集めたものと思われる｡大きさは口径80㎝、高さ48㎝である。樹種は、このように埋められている便所桶や馬屋桶はクリが多いが確認していない。

(７)衣類関連

衣類の出土はない。以下糸車、下駄、櫛、傘について説明する。

(ア)糸車(W165)

糸車の一部が、板間東側の東壁２の上から出土している。糸を巻き付ける竹で出来ている丸い部分と糸によりをかけるための針は出土していない。糸車を固定する台部と針を固定する台部との距離は約70㎝、高さ40㎝である。現在伝わっている糸車の場足は距離が60㎝、高さ40㎝であり同じような大きさである。

(イ)下駄

下駄が25個出土している。これまで東宮遺跡１号建物で41個、石川原遺跡27号建物で19個、西宮遺跡７号建物で13個、石川原遺跡20号建物で９個等である。下駄を平面形で角下駄(男下駄)と丸下駄(女下駄)と区別するなら､４個が角下駄で他は全て丸下駄である。出土位置は、大きく２か所である。土間と土座に境付近の南側南壁②北側からまとまって７個、板間の東・南・南東方向で15個出土している。板間の上からの出土はない。他の３個は、南の畑中からである。角下駄(男性)の高下駄が土間と土座の南側から出土しているが、丸下駄(女性)の高下駄が板間南側から出土している。この高下駄は黒漆が塗られていた。このような違いはあるが、出土地点による大きな傾向は認められないようである。

(ウ)櫛

櫛が10個出土している。２個が土座の囲炉裏南東を北東から、他の８個は板間の上から２個、板間の南の南壁①付近から２個、板間の２号収納箱の中から３個出土している。

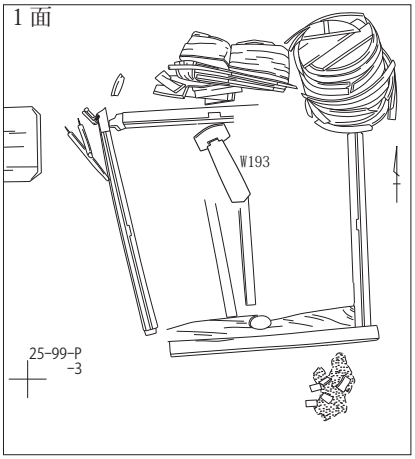
(エ)唐傘

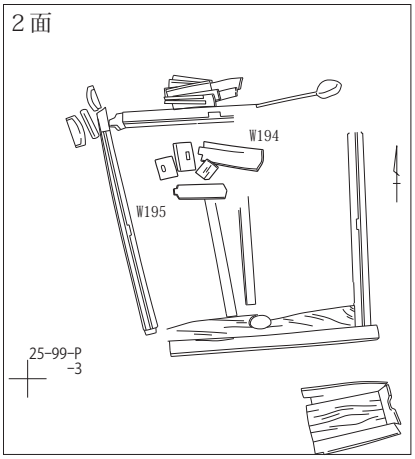
南壁②の上から唐傘が折りたたんだような状態で出土している。軸の一部と骨の多くが残っていた。紙は残っていなかった。骨の長さは約60㎝であり、現在まで伝わる唐傘とほぼ同じで長さである。全体に残りが悪く取り上げることはできなかった。

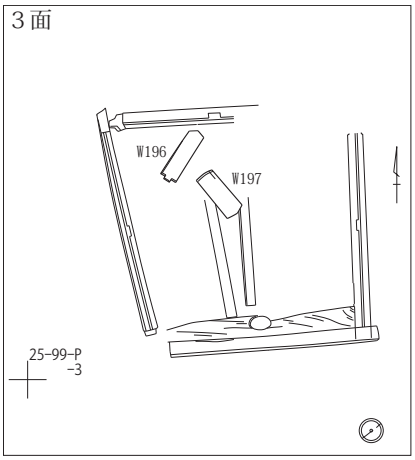
(８)その他

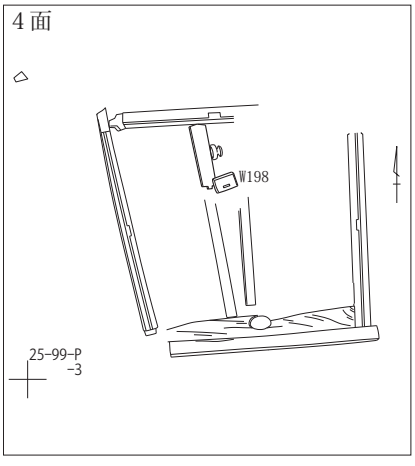
外に以下の遺物が出土している。

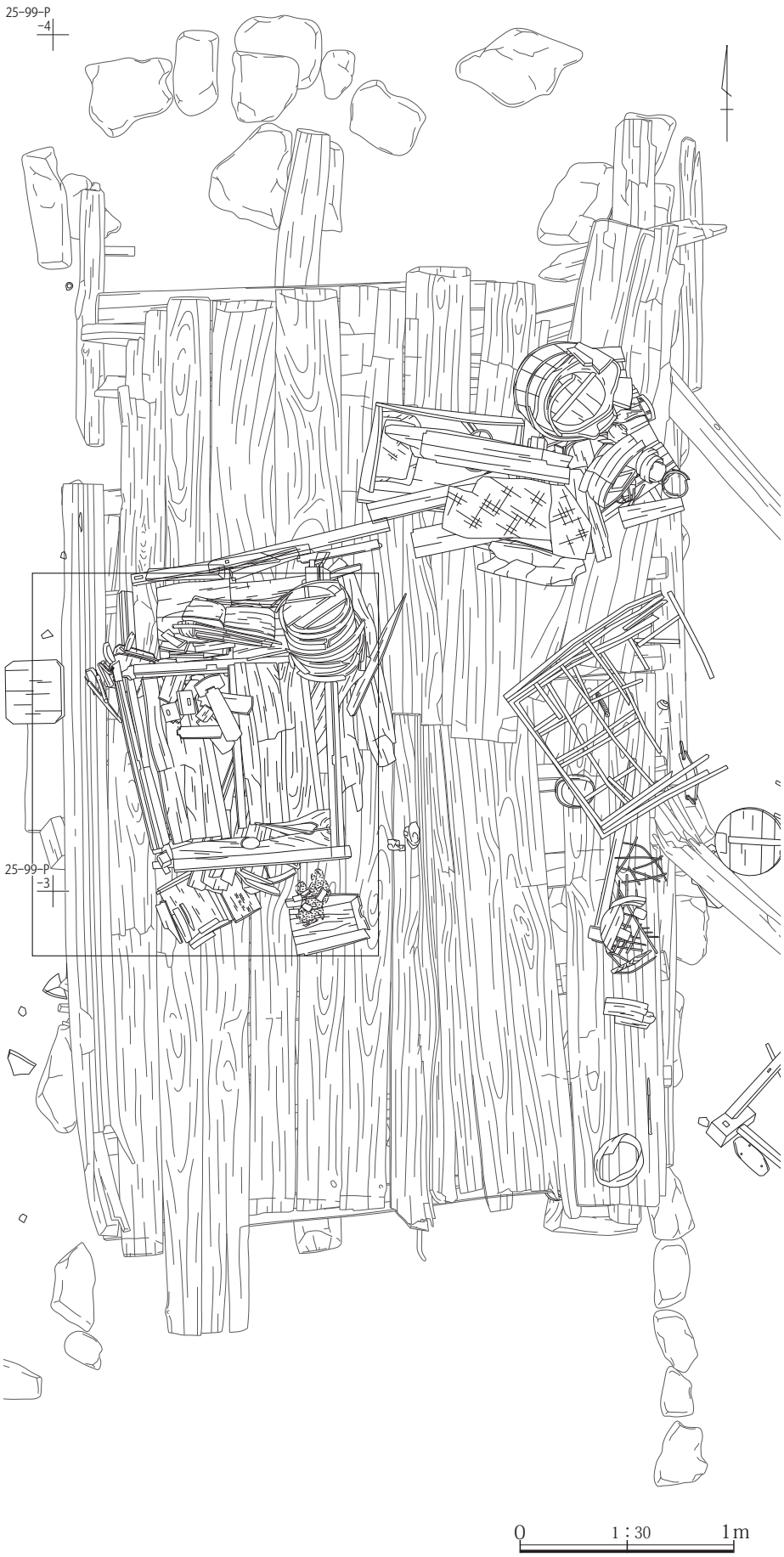
鉈・鎌・銭・斧・柄鍬・鉄釘・鉦鼓・キセル・石臼・砥石・人形等。



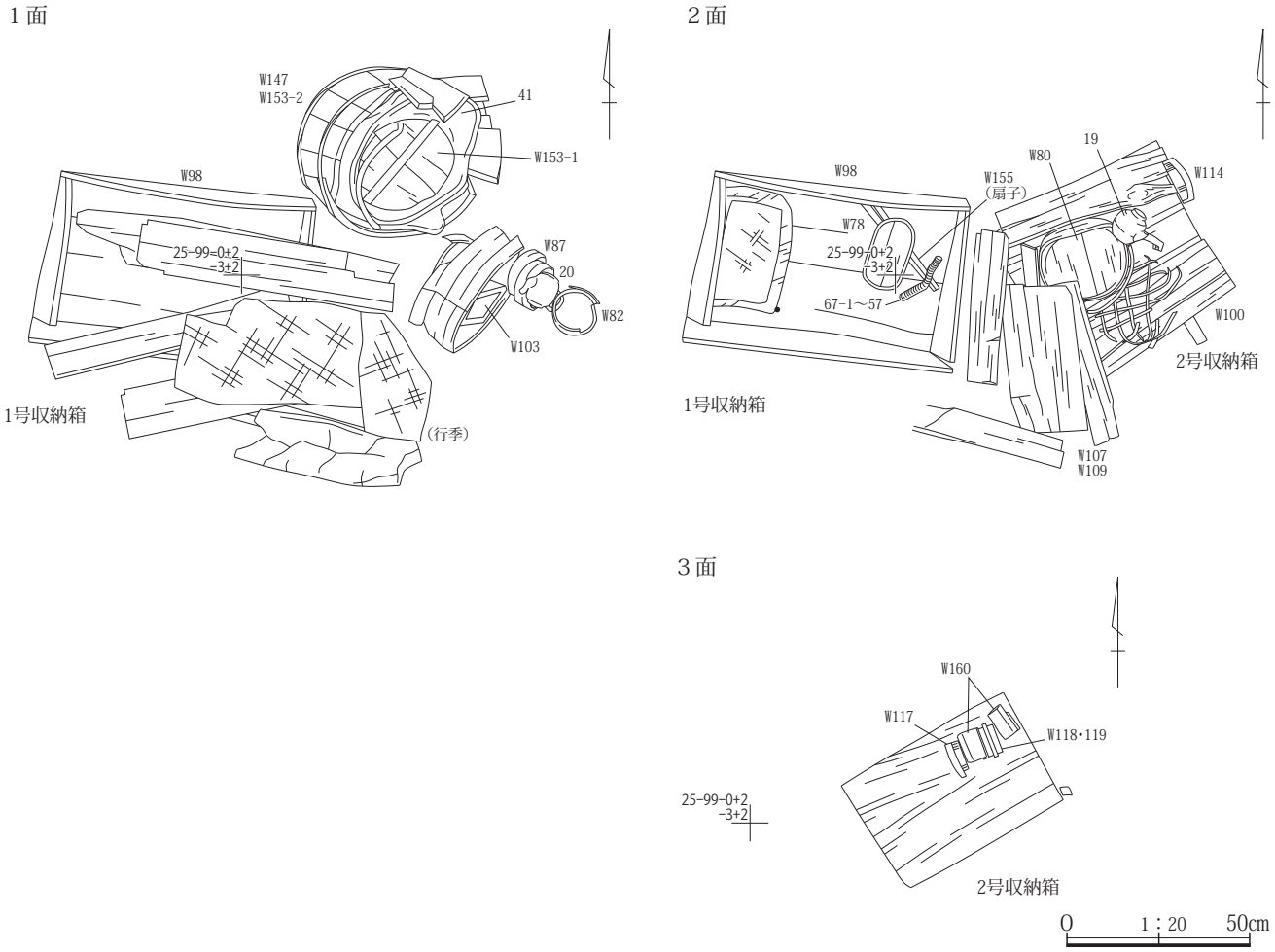








第120図　５区５号屋敷　21号建物仏壇出土遺物



第121図　５区５号屋敷　21号建物仏壇北出土遺物

第６節　６号屋敷跡(第122～133図､PL.108～118)

第１項　６号屋敷跡概要
第２項　15号建物　(ア)土台石　(イ)建築部材
(ウ)下屋柱　(１)竈　(２)１号囲炉裏
(３)室(1210号土坑)
(４)馬屋　(５)埋設桶　(６)土間
(７)屋敷整地に伴う配石
第３項　54号建物
第４項　洗い場
第５項　石橋
第６項　出土遺物

第１項　６号屋敷跡概要

６号屋敷跡は、北側の吾妻川に向かって低くなる緩やかな傾斜面に造られている。南東方向に近接する１号屋敷との間には５号溝がある。この溝は村の幹線道である21号道に沿って造られている53号溝から、北側にＴ字状に分岐した溝である。この５号溝は、６号屋敷に入るための道の脇に造られている。この道は庭先部分までで終了している。５号溝は、村の中でやや低い地形である６号屋敷周辺と、高い地形である１号屋敷周辺との間で、地形が変わる場所の境界部分にある。６号屋敷16号建物の床面標高537m、１号屋敷１号建物の床面標高538.4mで、６号屋敷は1.4m程低くなっている。21号道と６号屋敷との間には、22号建物が造られている。６号屋敷は21号道より約3.75m低い。21号道の標高は540.8mであり、15号建物床面より3.8m程低くなっている。屋敷は地形的に集落の中で最も低い場所である。

屋敷の西側と北側は畑となっており、屋敷は西側の畑より40㎝低く、北側の畑より100㎝程高い。屋敷の南側には、三角形に近い狭い庭があり、庭の大きさは東西長14m、南北幅14m前後である。

６号屋敷は、主屋である15号建物と、建物南の庭に建てられている付属建物である、54号建物がある。

As-A軽石は、15号屋建物西側の雨落溝幅20㎝の範囲、北側は雨落溝および、地形的に低くなっている雨落溝北側50㎝の範囲に残っていた。東側は５号溝に向かって低くなっているので、明瞭な雨落溝はなく、As-A軽石は雨落ち部分から５号溝まで、幅140㎝の範囲に残っていた。前庭のAs-A軽石は除去され、東側の水路に近い場所に集められ、庭南東部では、As-A軽石が楕円形状に高く集められていた。As-A軽石の厚さ等は３か所で図示した。

第２項　15号建物(第124～132図、PL.108～115)

25-99・100-Ｎ～Ｑ-25～３グリッドに位置する。

【概要・規模】屋敷の主屋である15号建物は、出土した土台や､建物ほぼ全面に配置されていた土台石の存在から、礎石建物である。

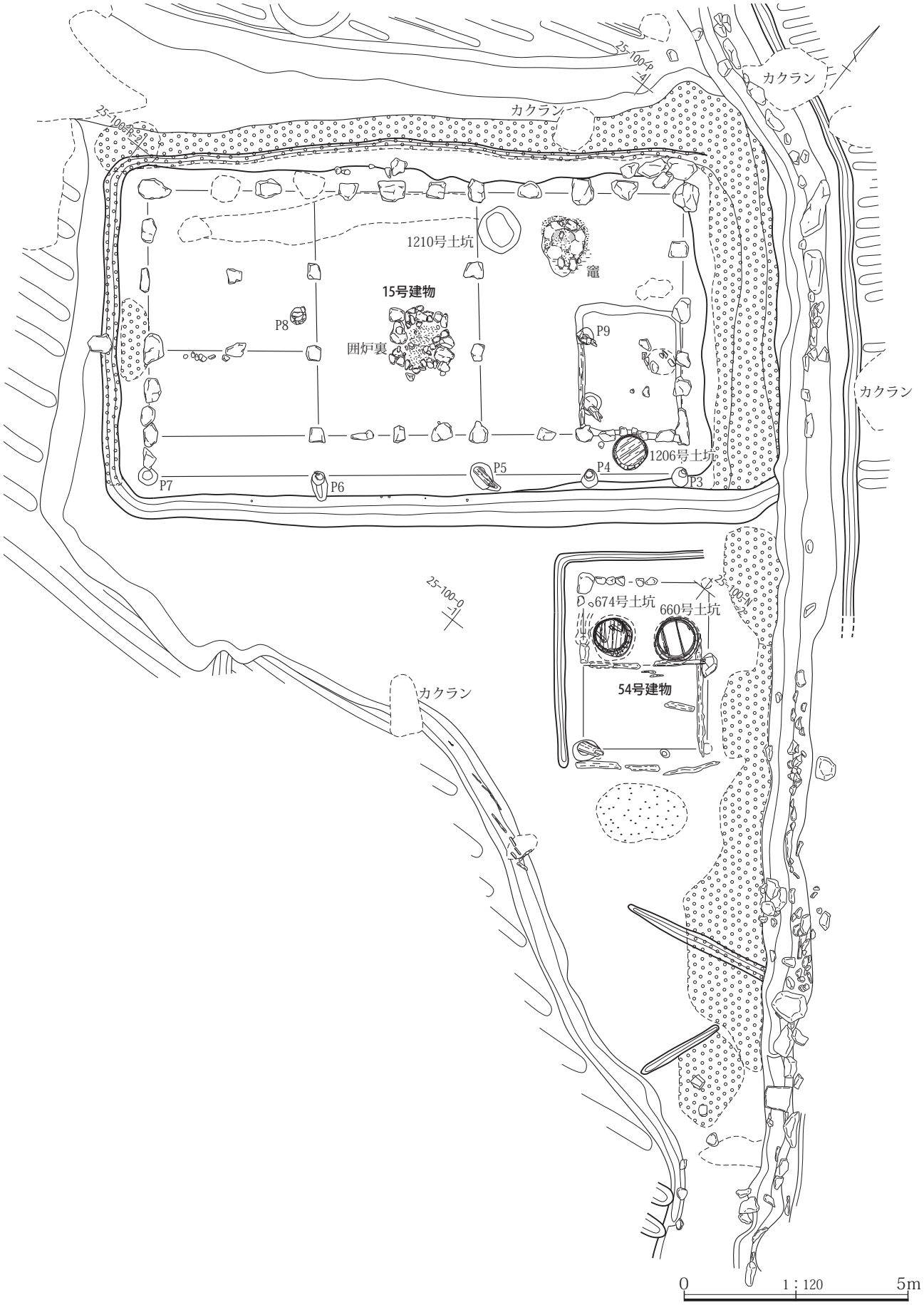
東西方向に長い建物であり、棟方向(東西方向)11.96m(６間半)、奥行き(南北方向)5.52m(３間)、南側に0.92m(半間)の下屋を持つ建物と思われる。東側間口4.6m(２間半)が土間、西側間口7.36m(４間)が板間となっている。板間は東西の２部屋に分かれる。分かれる中間部分に､大引と思われる建築部材が出土している。土間に近い板間は、南壁から北壁迄の広い空間を持つ１間であり、西側の板間は、南北２つの空間に分かれる。板間は､北側の間口奥行とも２間四方の部屋と思われる。南側の間口２間奥行１間は、土間と思われる。土間の南側は下屋となり土間が繋がっている。下屋の南には、Ｐ６とＰ７の掘立柱が建てられている。土間の南側を区画する土台石は存在していないので、土台等はなかったものと思われる。土台を用いない構造の壁等の存在も考えられるが、痕跡は残っていない。

この部分を土間と考えたのは、主屋の南に並ぶ土台石がこの部分で途切れており、土台石が外された痕跡はない。下屋部分の床下地表面が、主屋部分の床下地表面と同じように整地されて、同じ高さとなっている（H-H′参照）。土間面と思われる表面は北側の板間下の土間面と異なり、硬く踏み固められたようになっていた等からである。

土間南東部分に馬屋、北側に竈がある。唐臼はない。竈西で囲炉裏北東部に、1210号土坑として調査した浅い掘り込みがある。室と思われる。囲炉裏は土間に近い板間中央部分に造られている。

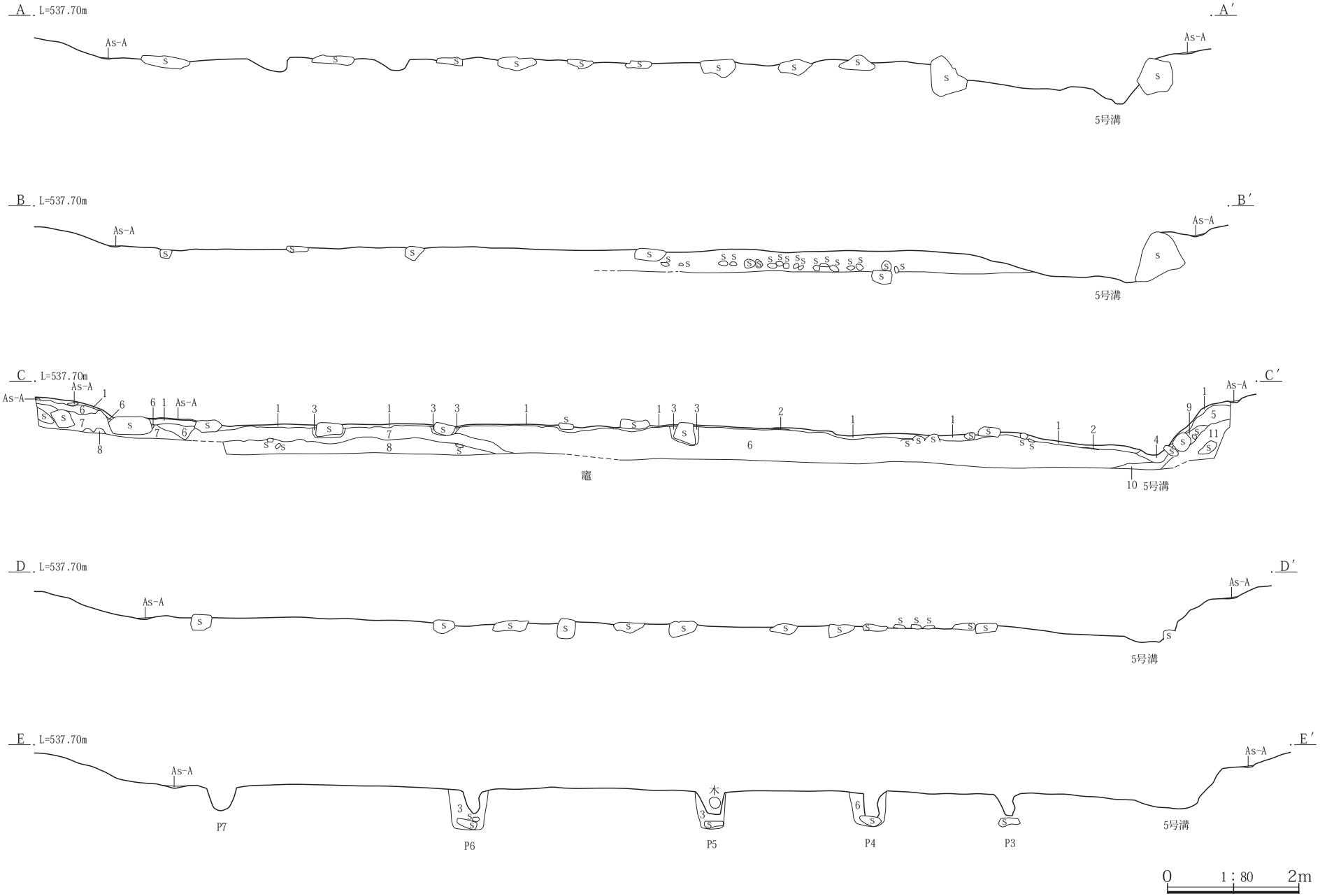
建物出入口は建物南側で、板間と馬屋の間であり、その部分には土台が少し南側にずれていたが､残っていた。残っていた土台の長さは2.4mである。その土台の脇に薄い板が出土している。大戸の土台の可能性が考えられ

第122図　６区６号屋敷位置図

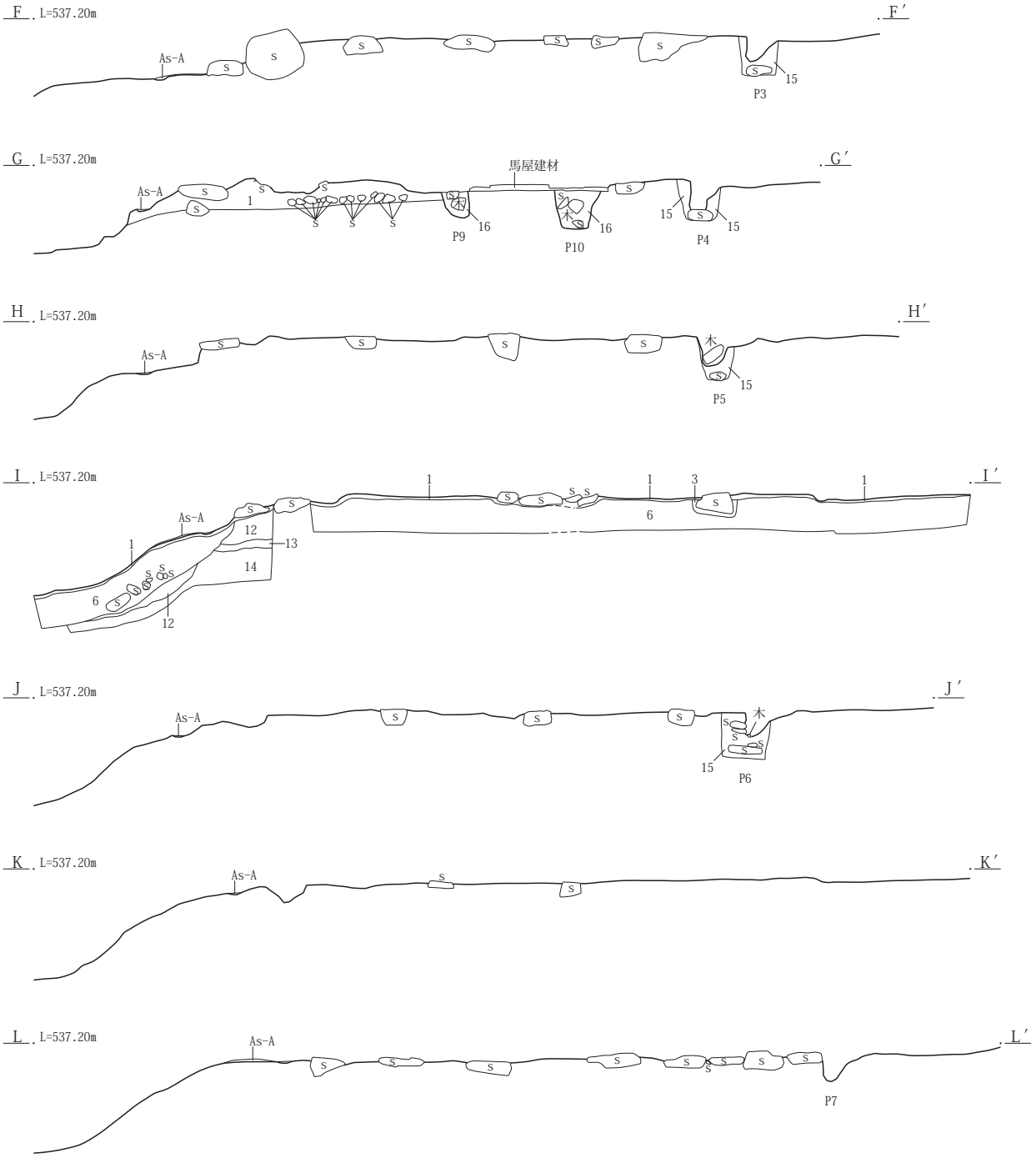


第123図　６区６号屋敷

第124図　６区６号屋敷　15号建物



第125図　６区６号屋敷　15号建物断面（１）

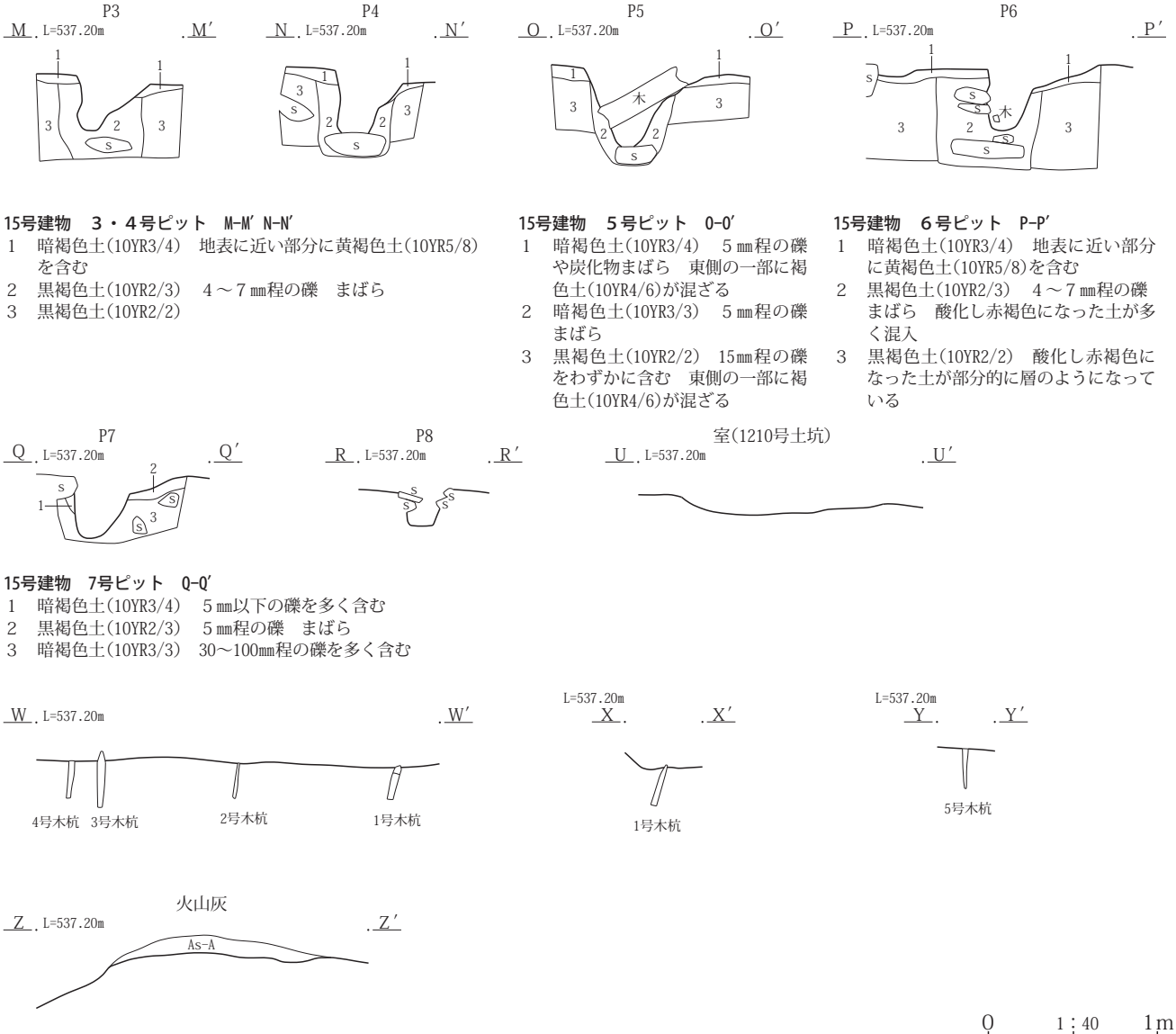


15号建物　C-C′～J-J′

1　暗褐色土(10YR3/4)　地表に近い部分に黄褐色土(10YR5/8)を含む
2　明黄褐色土(10YR6/6)　ねばりあり
3　黒褐色土(10YR2/3)　４～７㎜程の礫　まばら
4　黒褐色土(10YR2/2)　酸化し赤褐色になった土を多く含む　５～10㎜の礫を多く含む
5　黒褐色土(10YR2/2)　酸化し赤褐色になった土が筋状に入る　10～20㎜の礫　まばら
6　黒褐色土(10YR2/2)　30～50㎜程の礫　まばら
7　黒褐色土(10YR2/2)　30～70㎜程の礫を多く含む
8　灰黄褐色土(10YR6/2)　砂礫層　５～10㎜程の礫も多く含む
9　黒褐色土(10YR2/2)　100～200㎜程の礫を多く含む
10　黒褐色土(10YR2/2)　50～100㎜程の礫を多く含む　酸化し赤褐色になった土をわずかに含む
11　黒褐色土(10YR2/2)　５～10㎜程の礫を多く含む　酸化し赤褐色になった土をわずかに含む
12　黒褐色土(10YR2/2)　５～10㎜程の礫や30～100㎜程の礫をわずかに含む　酸化し赤褐色になった土をわずかに含む
13　黒褐色土(10YR2/2)　褐灰色砂(10YR4/1)がブロック状に多く含まれる　酸化し赤褐色になった土をわずかに含む　洪水層？
14　黒褐色土(10YR2/2)　20㎜程の礫をわずかに含む　酸化し赤褐色になった土をわずかに含む
15　暗褐色土(10YR3/3)　５㎜程の礫まばら(下屋柱覆土)
16　暗褐色土(10YR3/4)　20～30㎜の礫を多く含む(馬屋柱覆土)

0　1：80　2m

第126図　６区６号屋敷　15号建物断面(２)



15号建物　３・４号ピット　M-M′ N-N′
1　暗褐色土(10YR3/4)　地表に近い部分に黄褐色土(10YR5/8)を含む
2　黒褐色土(10YR2/3)　４～７㎜程の礫　まばら
3　黒褐色土(10YR2/2)

15号建物　５号ピット　O-O′
1　暗褐色土(10YR3/4)　５㎜程の礫や炭化物まばら　東側の一部に褐色土(10YR4/6)が混ざる
2　暗褐色土(10YR3/3)　５㎜程の礫まばら
3　黒褐色土(10YR2/2)　15㎜程の礫をわずかに含む　東側の一部に褐色土(10YR4/6)が混ざる

15号建物　６号ピット　P-P′
1　暗褐色土(10YR3/4)　地表に近い部分に黄褐色土(10YR5/8)を含む
2　黒褐色土(10YR2/3)　４～７㎜程の礫まばら　酸化し赤褐色になった土が多く混入
3　黒褐色土(10YR2/2)　酸化し赤褐色になった土が部分的に層のようになっている

15号建物　7号ピット　Q-Q′
1　暗褐色土(10YR3/4)　５㎜以下の礫を多く含む
2　黒褐色土(10YR2/3)　５㎜程の礫　まばら
3　暗褐色土(10YR3/3)　30～100㎜程の礫を多く含む

第127図　６区６号屋敷　15号建物ピット・室(1210号土坑)・木杭

る。馬屋の南側には馬屋桶が埋められている。

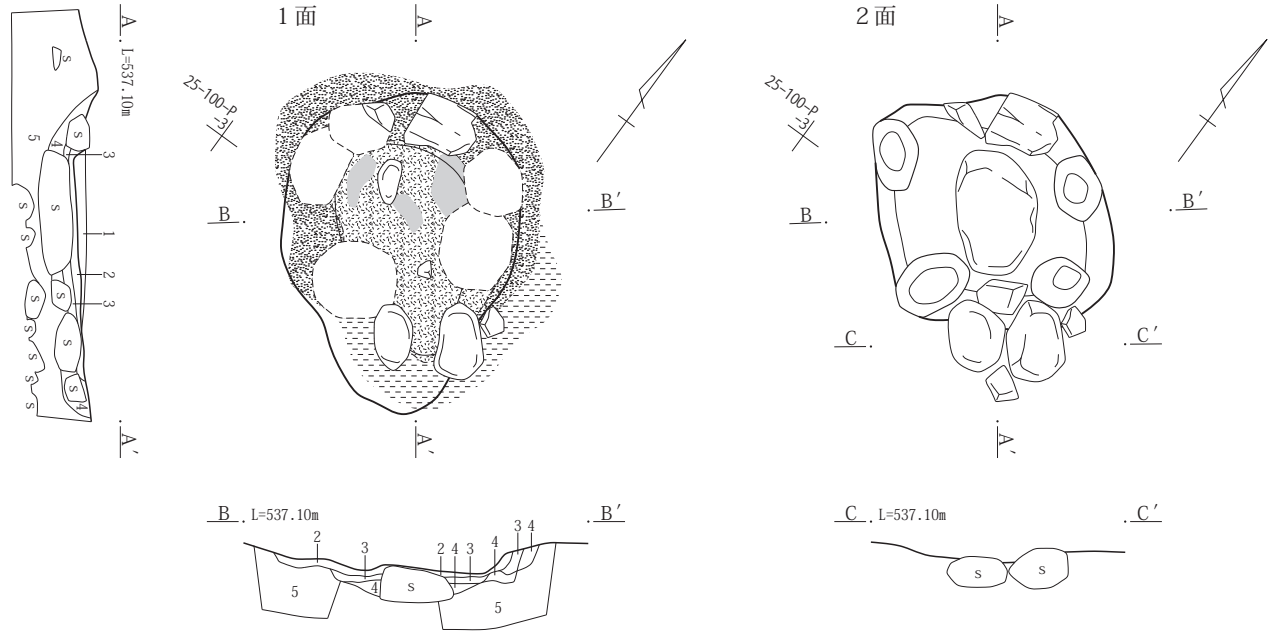
(ア)土台石

土台石は、平石および川原石が多用されていた。建物外壁部分で、土台の上に柱が建てられていた場所には、建物内部の土台および、床束が建てられていたと思われる場所の石より、大きな土台石が使われていた。また地形的に低く、盛土して宅地造成している北側に使われている土台石は大きいものが多く、南側の土台石は小さいものが多い。

(イ)建築部材

建築部材として、土台や大引・根太等が残っていた。部材は組み込まれていた状態で、屋敷内から南側の庭に向かって、0.5～１ｍ程押し流された状態であった。板間には、南北方向に大引が２本(№16・17)、大引の間には根太が残っていた。

囲炉裏を囲んでいた大引は、東側に15㎝、南側に約１ｍずれていた。囲炉裏南と東側を囲んでいた枠木も、大引とともに南へ約１ｍ、東側に15㎝移動していた。板間南側に土台１本(№18)、土間南の出入口部分に土台(№19)があり、土台には大戸の敷居が釘で打ち付けられていた。一部欠損しているが、他の出土例から３ｍ前後の長さであったと思われる。南側の雨落溝北側には、６本の木杭(１～５号木杭)が落ち込まれて、杭の北側には２本の材木が置かれていた(№21・22)。雨落溝に伴う土留めの役割を果たしていたのではないだろうか。№21は、馬屋の出入口に建てられた掘立柱(馬栓棒を受ける枘穴



15号建物　竈　A-A′ B-B′
1　暗褐色土(10YR3/4)　20～30㎝の礫を含む
2　暗黄褐色土(10YR7/6)　所々に明褐色(7.5YR5/8)の灰が混入、南部に炭化物を多く含む、粘土を主とした層
3　灰黄褐色土(10YR5/2)　２層の粘土粒を少量含む
4　明褐色土(7.5YR5/8)　２層の粘土を主とした層に近いが褐色が濃い
5　黒色土(10YR2/1)　２～４㎜の粒状の礫多く含む(地山層)

0　1：30　1m

第128図　６区６号屋敷　15号建物竈

と鍵取り付け枘穴２か所あり)である。掘立柱がここまで飛ばされていたとは考えにくいので､転用であろうか。

(ウ)下屋柱

建物南側に半間の下屋がある。主屋部分は土台石が用いられ、土台の上に柱が建てられていたが、下屋部分は掘立柱である。下屋柱は馬屋南東のＰ３から、南西コーナー部分のＰ７まで５本あり、Ｐ５・Ｐ６には、南東方向に倒れた柱の底部が残っていた。Ｐ７には、柱は残っていなかったが、南東方向に柱が倒れた痕跡が残っていた。Ｐ５の柱は直径13㎝、長さ53㎝の丸材であった(№29)。底部は、礎石の形に合わせるための光付けのように削られていた。柱穴底部には、幅25㎝、厚さ10㎝の平らな石が埋められていた。Ｐ６の柱は直径約13㎝、長さ約110㎝の材であった(№23)。柱穴底部には幅44㎝、厚さ10㎝の平らな石が埋められていた。さらに、底面の平らの石の脇に小さな石が１個、柱の北側には、柱の脇に石が２個埋められていた。下屋柱は主屋柱と異なり、板間南部分では、368㎝(２間)間隔で３本、土間部分では、460㎝(２間半)の距離を２分割した227㎝間隔で２本であった。板間部分南の下屋柱は、主屋部分の柱間隔184㎝(１間)の柱を、１本省略して建てられている。このような例は、これまで調査してきた東宮遺跡や西宮遺跡と共通する。

ピット一覧表参照

№.	長径㎝	短径㎝	深さ㎝
Ｐ３	43	37	36
Ｐ４	42	35	36
Ｐ５	60	45	37
Ｐ６	31	27	32
Ｐ７	42	37	28
Ｐ８	38	36	18

(１)竈(第128図、PL.111)

【位置・概要】土間の奥に造られていた。残りが悪く、竈を築くために燃焼部を囲むように積まれていた石は、ほとんど残っていなかった。土間の床面から下面に位置する燃焼下部が残っていた。

【規模・形状】残っていた竈燃焼下部は、地山を方形に直

径90㎝四方、深さ18㎝程掘り込み、燃焼部に50㎝×30㎝、厚さ10㎝程の平らな石を底部に据えて、燃焼部下面としていた。その平石を囲むように西・東・奥壁面部分に、細長い石を各面２石前後建て壁面としていた。奥壁に割れて残った２石、東西壁面には抜かれたと思われる側壁の掘り込みが２か所残っていた。炊口外側床面には、平石が２個並べるように埋め込まれていた。燃焼部壁面周辺には多くの粘土が、炊口周辺には多くの炭が残っていた。燃焼部中央の平石の上には、灰が堆積していた。燃焼部平石の高さは536.82m、建物床面高さは537.0mであり、燃焼部面の高さは床面より約18㎝低く凹んでいる。

（２）囲炉裏（第129図、PL. 112・113）

【概要・構造・規模】建物ほぼ中央部、土間に面した床面の南側に造られていた。大きな石で方形に囲み、その内側に小さな石を充填し、暗褐色土を盛り、その面で火を炊いている。中から多くの灰と少量の炭が出土している。囲炉裏西側には、床を貼るための南北方向に設置されていた大引が、泥流により西側の石組から東側に約20㎝押され、移動した状態で出土した。

【構造・規模】床面で使用するために囲炉裏を築いている。床面に約1.1m前後の正方形を基本とし、４面に長さ35～50㎝、幅15～30㎝の大きな石を各３個程度並べる。石は安定するために、５㎝程掘り込んで固定している。方形に囲んで積まれた石垣は２段で、高さは約25㎝である。内部には長さ15㎝、幅10㎝前後の石を全面に２段程詰め込んでいる。積まれた小さな石の高さは15㎝前後で、方形に囲んで並べられた石より10㎝前後低い。大量に持ち込まれた小さな石の上は、地表面の土に近い暗褐色土が５～10㎝盛られている。その面を囲炉裏の使用面とし、そこに多くの灰が堆積していた。残っていた灰は、最も厚いところで10㎝である。炭はほとんど残っていなかった。

【所見】方形に積まれた大きな石の表面はほぼ平らになっており、ここに約90㎝前後の囲炉裏の枠木が置かれていたものと思われる。

（３）室（1210号土坑）

竈西側で囲炉裏北東部に、1210号土坑として調査した浅い掘り込みがある。底面に多くの炭が残っていた。他の建物でも、同じような位置に底面に多くの炭があり、浅く掘り込まれている遺構が調査されている。石や木材で囲まれていることが多く、室として報告している。この土坑も室と同じ目的で造られたものと思われる。

規模は長さ幅とも１m前後、深さ10㎝前後である。

（４）馬屋（第130図、PL. 113・114）

【位置・構造・規模】15号建物の南東部に位置する。建物外壁部分である東側と南側には、多くの礎石が使われていた。建物内部の北西コーナー部分に礎石は残っていなかったが、礎石が据えられていたような落ち込みがあり、そこには大きな礎石があったものと思われる。出入口である西側部分には、礎石の上でなく、礎石の間の土の上に、土台が置かれたような状態で残っていた。その土台の東側に２本の掘立柱があり、地中部分に柱が残っていた。この柱間隔は153㎝あり、ここに出入口用の馬栓棒が設置されていたのではないだろうか。北側のＰ９の掘立柱は、底部に石があるが、平石ではない。まわりを石で固め、内部に直径10㎝、長さ21㎝の丸く整形された柱が、南東方向に倒れ込むように残っていた。南側のＰ10は、底部に幅18㎝の平らな石が埋められ、その上には厚さ１㎝程の薄い板が置かれていた。直径８㎝、長さ20㎝の丸く整形された柱が、南東方向に倒れ込むように残っていた。Ｐ９は深さ28㎝、Ｐ10は深さ54㎝であった。馬屋の南側には、埋設桶（便槽）が埋められていた。

馬屋の規模は南北276㎝、東西230㎝で、南北方向に長い。馬屋部分の標高は536.86mであり、主屋の土間部分の標高は537.0m、馬屋部分は主屋土間部分より0.14m程低くなっている。馬屋中央部には、多くの植物繊維が残っていた。堆肥等であったと思われる。

（５）埋設桶埋設桶（便槽）

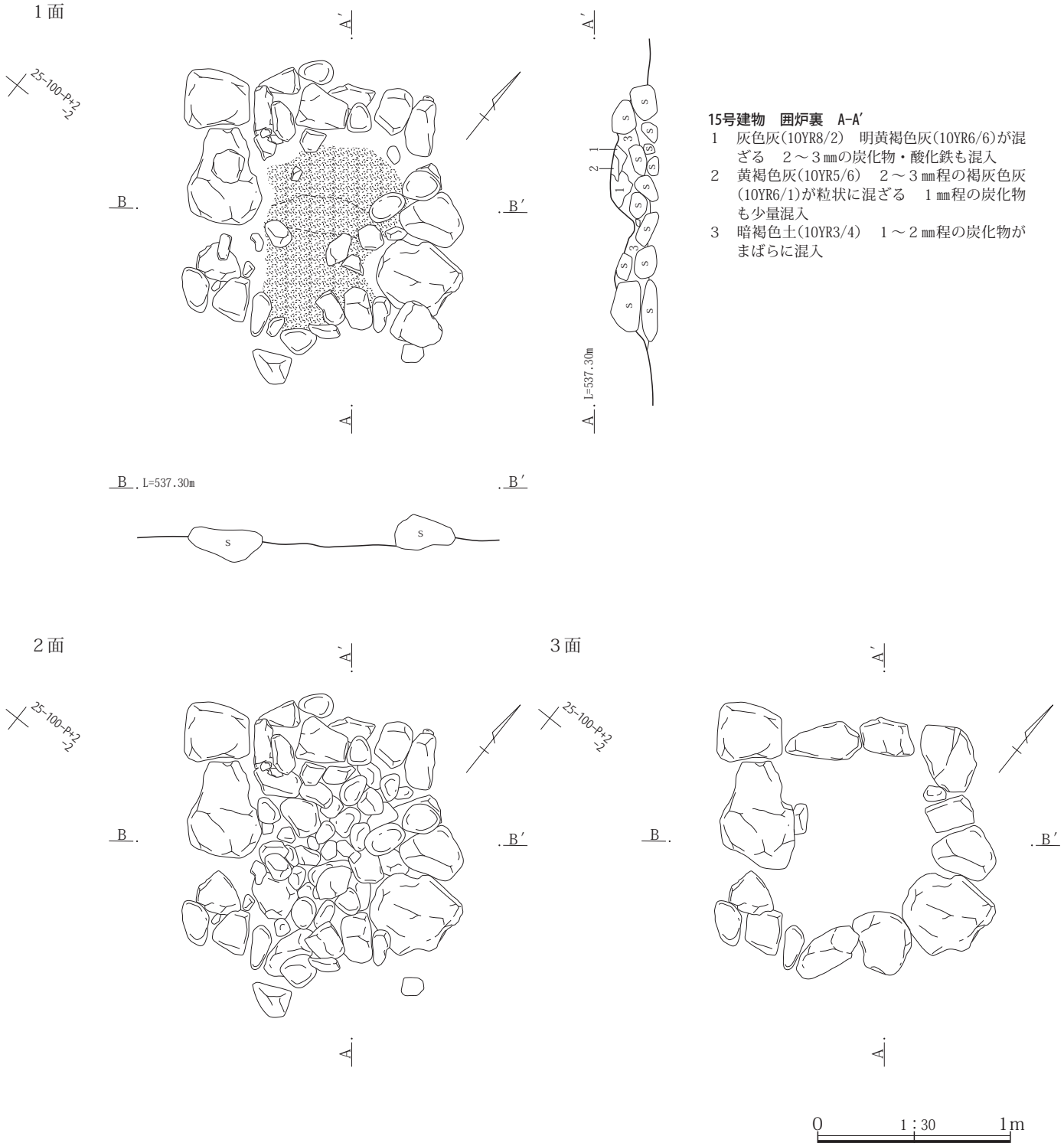
【概要・規模】馬屋の南側に接して桶が埋められていた。桶は底板４枚と、側板下約2/3部分が残っていた。桶の大きさは口径77㎝、底径67㎝、高さ57㎝である。側板外側に、タガ跡が底面から20㎝と40㎝の位置に２か所残る。桶は土坑状に掘り込まれた中に、掘り出した土で埋められており、東宮遺跡や西宮遺跡等で見られたように、ロームを桶のまわりに持ち込んではいない。

（６）土間（第124図参照）

出入口から竈周辺までの土間西側が硬く踏み固められていた。粘土等を持ち込み平らに固められてはいない。

（７）屋敷整地に伴う配石（第131図、PL. 115）

15号建物は６号屋敷概要で説明したように、建物が造



15号建物　囲炉裏　A-A′

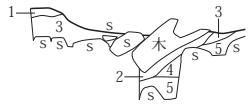
1　灰色灰(10YR8/2)　明黄褐色灰(10YR6/6)が混ざる　２～３㎜の炭化物・酸化鉄も混入
2　黄褐色灰(10YR5/6)　２～３㎜程の褐灰色灰(10YR6/1)が粒状に混ざる　１㎜程の炭化物も少量混入
3　暗褐色土(10YR3/4)　１～２㎜程の炭化物がまばらに混入

第129図　６区６号屋敷　15号建物囲炉裏

馬屋

P9

S . L=537.20m　　. S′



15号建物　９号ピット　S-S′

1　黒褐色土(10YR2/3)　酸化鉄混入
2　暗褐色土(10YR3/3)　ねばりあり
3　黒褐色土(10YR2/3)　５㎜程の礫　まばら
4　暗褐色土(10YR3/4)　20～30㎜の礫を多く含む
5　黒色土(10YR2/1)　10～20㎜程の礫まばらねばりあり

馬屋

P10

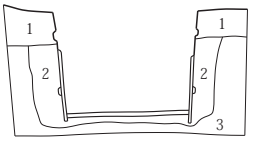
T . L=537.20m　　. T′

15号建物　10号ピット　T-T′

1　暗褐色土(10YR/3)　ねばりあり
2　黒褐色土(10YR2/3)　酸化し赤褐色になった土が混入
3　暗褐色土(10YR3/4)　20～30㎜の礫を多く含む
4　黒色土(10YR2/1)　10～20㎜程の礫　まばら　ねばりあり

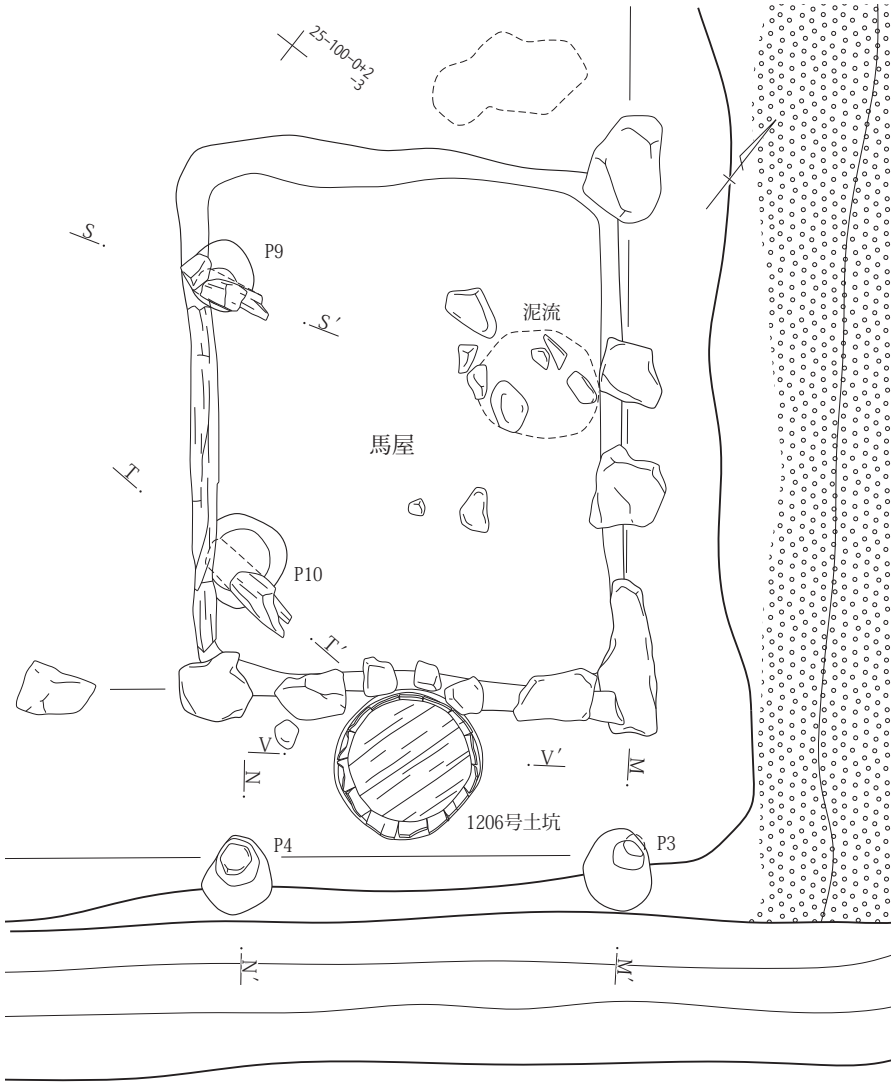
1206号土坑

V . L=537.20m　　. V′



15号建物　1206号土坑　V-V′

1　暗褐色土(10YR3/4)　地表に近い部分に黄褐色土(10YR5/8)を含む
2　黒褐色土(10YR2/3)　30～50㎜程の礫　まばら
3　黒褐色土(10YR2/2)　北東側に30㎜程の礫をわずかに含む



0　1：40　1m

第130図　６区６号屋敷　15号建物馬屋

られる前の地形は北東コーナー部分が最も低い緩やかな傾斜面であった。最も高い建物南西部分の畑面標高は537.4m、低い北東面建物北西部分の畑面標高は536.0mであり、その差は1.4mである。そこで南西部分を削り、北東部分に盛土して平らな屋敷地を確保している。盛土した北東部分の土間下に、長さ10～25㎝程の大量の小さな石が、まとまって埋められていた。東西方向４m、南北方向約3.5mで、平面形が三角形となる範囲であった。敷かれていた石の標高は上面536.8m、下面536.7mである。建物竈手前床面の標高は537.0mであるので、床面より20～30㎝低いところに位置する。敷かれていた石の上に、20㎝程土を盛って床面としている。15号建物北側、礎石の東端部分の礎石の下にも、同じような礎石が埋められていた。発掘調査担当は、この遺構を15号建物とは別に37号建物として調査したが、15号建物の屋敷地整地工事に伴う遺構と考え、37号建物は欠番とした。整地に伴う盛土工事の中で、高い盛土部分に石を埋め盛土を強度し、その上には盛土して土間が造られ、そこに竈等が造られていた。敷かれていた石の北側、土手部分に多くの石が出土した。石垣のように意図的に積まれていない。この多くの石は、不要となった石の処分と、土手の補強を兼ねて置かれたものと考えたい。

第３項　54号建物(第133図、PL.116)

25-90・100-M・N-25～２グリッドに位置する。

【概要・位置】６号屋敷内の南東部、主屋である15号建物の南東側に位置する。南北方向に長い建物であり、南北２つの部屋に区切られていた。北側に２個の桶が埋められており、南側は平坦の土間面となっている。建物の北と南の部屋の境には、材木が置かれ区画されていた。

桶の埋められている北側の部屋の北側と西側には、土台が載せられていたと思われる土台石が置かれていたが、他の面には残っていなかった。南側の部屋の南東コーナーに掘立柱が掘られており、中に長さ83㎝、幅20㎝前後の加工された角材の柱下部分が、南東方向に倒れるような状態で残っていた。これは主屋の下屋柱が残っていたＰ５・Ｐ６の柱と同じように、北西方向から押し寄せた天明泥流により、建物が押しつぶされた状態がわかる。他に掘立柱はない。南壁面と思われる部分の中央付近にＰ２が掘られていたが、大きさや深さが極端に小さいために、掘立柱ではないと思われる。南東コーナー部分にＰ１と同じような掘立柱は掘られていなかった。

北側の部屋を囲むように並べてある土台石は、柱が建つと思われるコーナー部分には大きな石が置かれ、掘立柱はないために、敷土台の上に柱が建てられたと考えられる。南側の部屋には、土台石が全く出土していない。土台が置かれたであろう場所には、多くの木材の痕跡が地面にめり込んだ状態で残っていた。これまでの調査例から、土台が土台石を使わないで直接土間の上に置かれた例はない。しかしここでは、そのようにも考えられるのではないだろうか。南西コーナーのＰ１が掘立柱と考えられるが、他に柱穴がないので掘立柱として無理があると思われる。いずれにしても上屋構造は不明である。

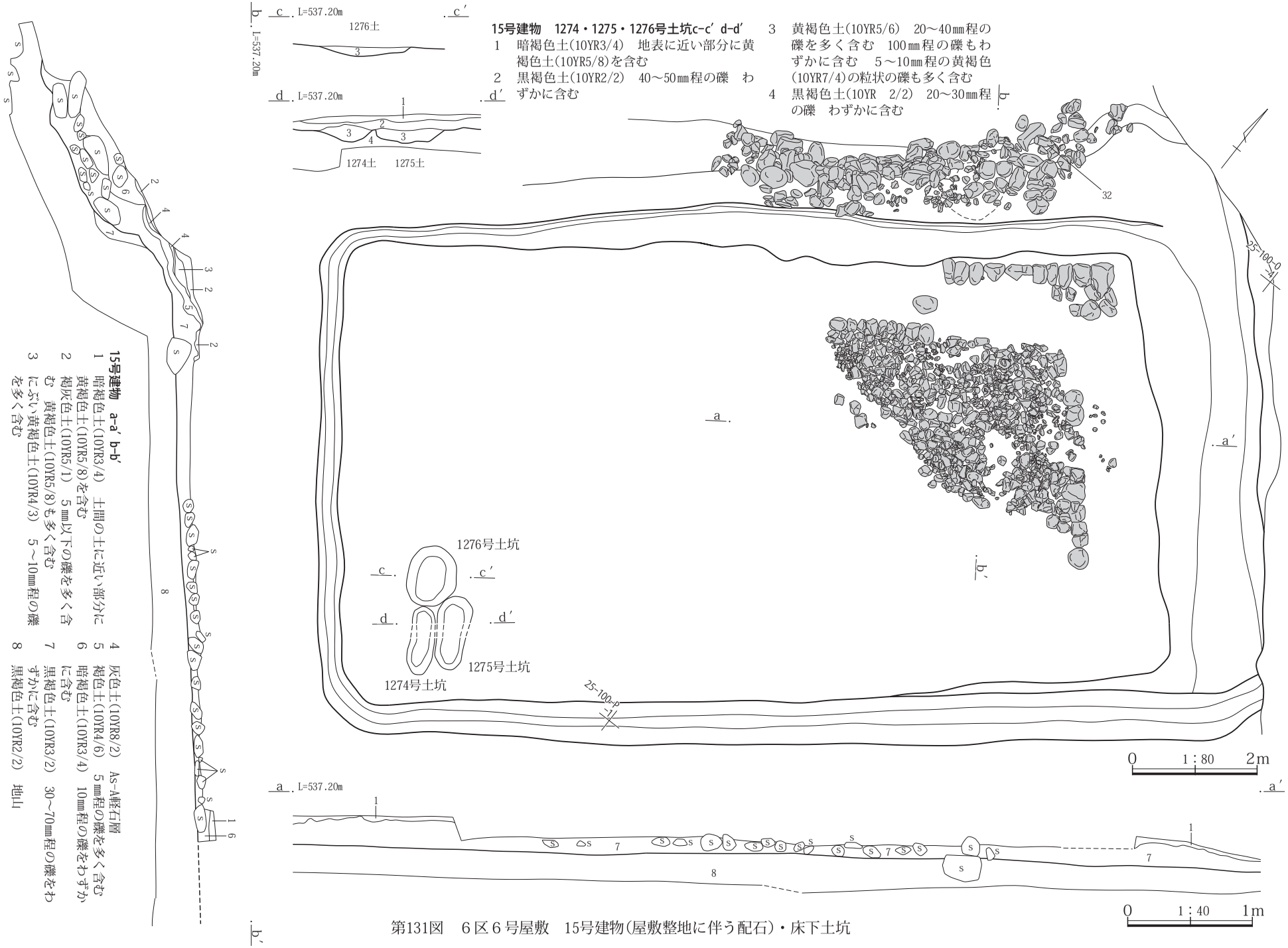
雨落溝は礎石の北側と西側に残っていたが、地形的に低くなる南側と東側には残っていなかった。建物内にAs-A軽石はなく、雨落溝内にもほとんど残っていなかった。

発掘調査担当者は、この建物を15号建物外便所と呼称し、２個の埋められた桶の西側を674号土坑、東側を660号土坑として調査した。整理段階で54号建物として報告する。674号土坑中の桶は、底面の板３枚と側板の多くが残っていた。660号土坑中の桶は、底面の板３枚と、多くの側板の痕跡が残っていた。

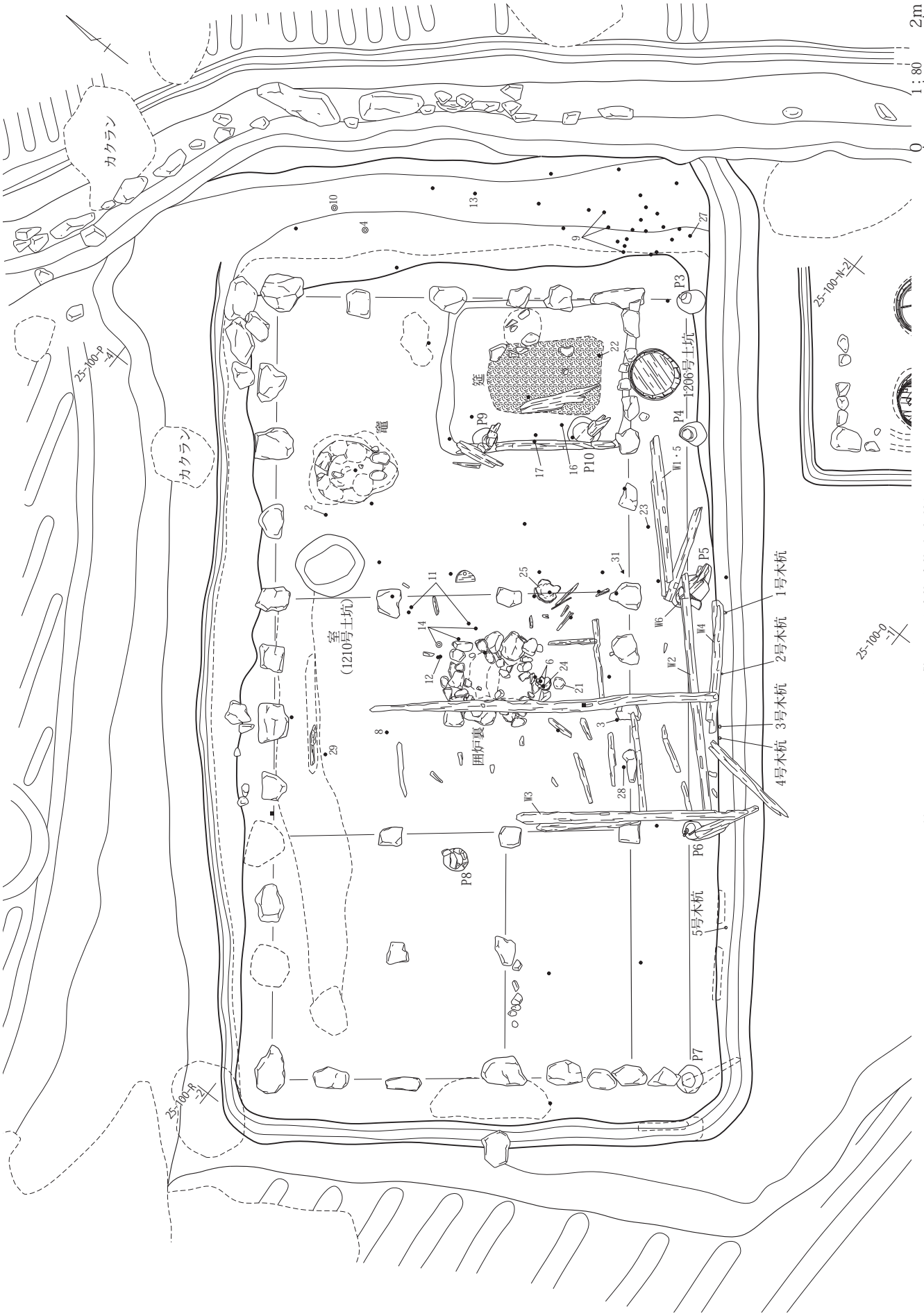
【構造・規模】建物は桶の埋められていた北側と、埋められていない南側の部屋に分かれる。これまで西宮遺跡や東宮遺跡で、調査してきた２個の埋設桶がある建物(厠と呼称)では、多くの場合、北側の桶が埋められていた部屋が東西方向１間半、南北方向１間で、南側の部屋が東西南北とも１間半の正方形であった。しかしこの外便所は、桶の埋められている部屋と、そうでない部屋の広さは、ほぼ同じである。

建物の規模は、礎石の位置、南東コーナー部分の掘立柱、残っていた材木の配置、雨落溝の存在等から推定した。東西方向280㎝、南北方向380㎝、柱穴から雨落溝までの距離は55㎝前後、雨落溝の深さは２㎝前後である。掘立柱の埋められていた小穴Ｐ１は、直径は25㎝前後、深さ65㎝である。小穴Ｐ２は、直径は20㎝前後、深さ18㎝である。

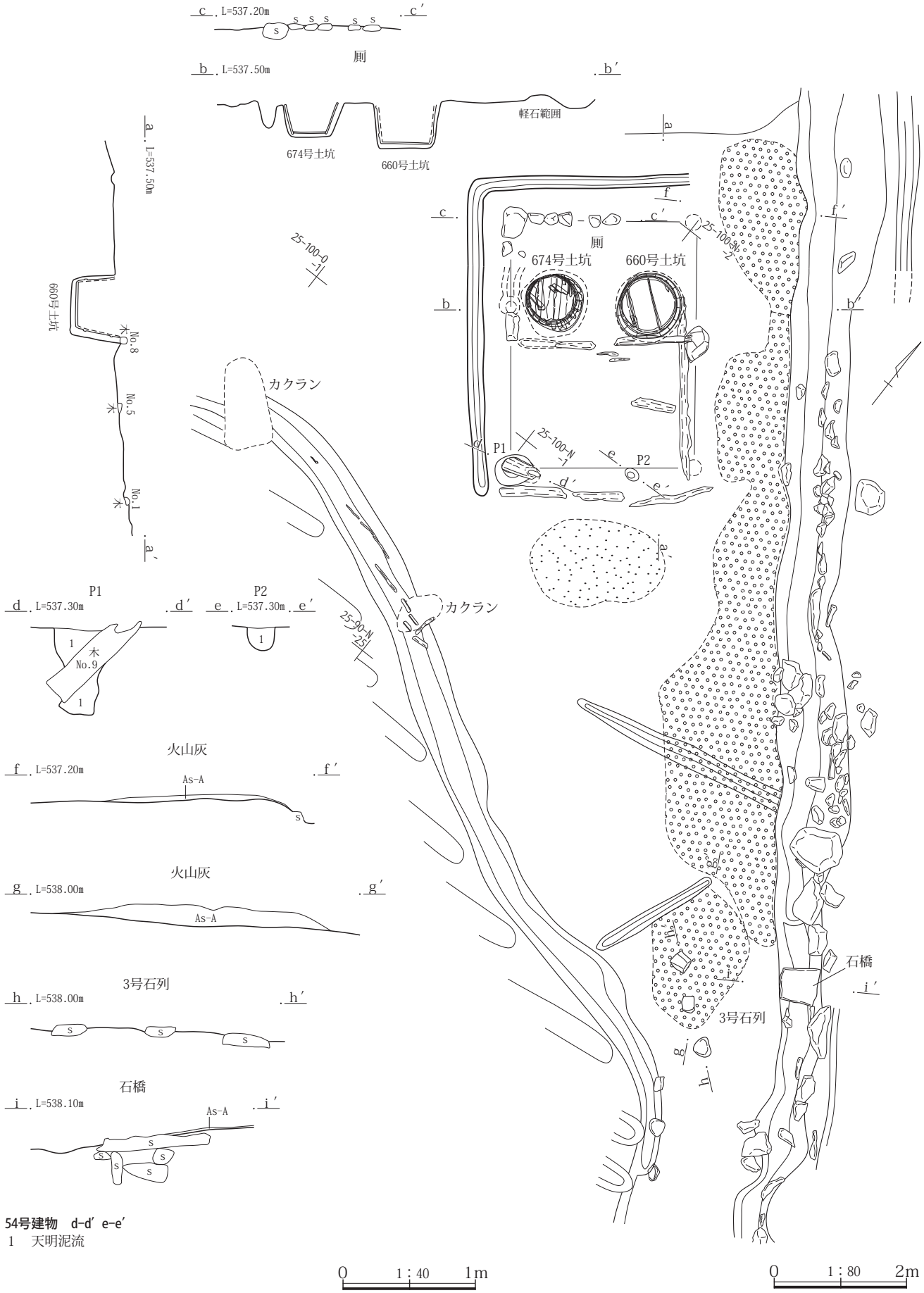
北側に埋められていた西側の674号土坑と、東側の660号土坑は、東側の660号土坑が口径・深さとも少し大き



第131図 6区6号屋敷 15号建物(屋敷整地に伴う配石)・床下土坑



第132図　６区６号屋敷　15号建物遺物出土状況



54号建物　d-d′e-e′

1　天明泥流

第133図　６区６号屋敷　54号建物厠・庭周辺

い。660号土坑は底径85㎝、口径約97㎝、深さ68㎝である。674号土坑は底径70㎝、口径不明、高さ53㎝前後と思われる。674号土坑には多くの桶の底板と側板が残っていた。660号土坑の桶の外側にタガの痕跡が、底部から15㎝と55㎝の位置に２か所残っていた。

埋められている桶のまわりは、掘り出した土であり、西宮遺跡や東宮遺跡で見られたように、ローム等を用いることはしていない。

第４項　洗い場

【概要】６号屋敷に入る道の東側には５号溝があり、水の確保は容易であったと思われる。しかし、他の３・４・５・９・10・11・14号屋敷に存在している洗い場は、造られていなかった。この洗い場は水路の脇を少し掘り込み、石で方形に囲い、水路の水を供給源とする、湧水による飲料水等の確保が目的であったと思われる。６号屋敷では､飲料水は別な方法で確保していたのであろうか。

第５項　石橋

25-90-Ｋ・Ｌ-24・25グリッドに位置する。

６号屋敷東側に５号溝がある。６号屋敷15号建物馬屋前の下屋柱から南14m東側に、５号溝を渡る石橋が造られていた。石橋を渡ると１号屋敷１号建物の西側部分に繋がっている。５号溝の東側と西側では、地形的に東側が50㎝程高くなっており、溝の東側に多くの石垣が積まれていた。石橋は東西両岸および溝底面に平石を置き、左右岸面の高さを揃え、その上に東西方向60㎝、南北方向55㎝、厚さ10㎝前後の天井石が架けられていた。石橋部分の溝の規模は、内径で幅23㎝、高さ10㎝である。溝としては規模が小さい。

第６項　出土遺物(第385～387・560・561図、PL.328・329)

主屋である15号建物には、土台・大引・根太の一部が良好に残っていた。他に馬屋や南の埋設桶及びそれらについては本文中で説明している。

囲炉裏周辺から陶磁器や鉄製品がまとまって出土している。陶磁器類は、肥前磁器染付碗や瀬戸・美濃陶器碗・肥前磁器筒型香炉等が出土している。使用していた様子を示していると思われる。馬屋西側から肥前磁器色絵が出土している。建物東側の５号溝との間から肥前磁器白磁猪口や肥前磁器染付碗・瀬戸・美濃陶器碗が出土している。建物内にあったと思われる遺物が、建物南東方向の前庭部分ではなく東側から出土している。このことは、天明泥流が北西方向から南東方向に押し寄せたのではなく、西から東方向に押し寄せたのではないだろうか。

囲炉裏の南側の枠木部分に接して茶釜が、囲炉裏南東方向約60㎝から鍋が出土している。泥流により押されたことを考えると、この２つは囲炉裏で使われていたことが考えられる。このように、囲炉裏周辺から鍋や茶釜の出土は、当然と思われるが、出土例としては多くないので、良好な出土例である。銭が16号建物内や建物南東部分から出土している。銭種不明の銭もあるが、多くは新寛永通寶である。土間と板間の間付近の土間から砥石、覆土中から石臼が出土している。

第７節　７号屋敷跡(第134～140図､PL.119～125)

第１項　７号屋敷跡概要
第２項　13号建物　（１)竈　（２)囲炉裏
（３)１号囲炉裏　（４)２号囲炉裏　（５)唐臼
（６)土間と土座
第３項　55号建物
第４項　洗い場
第５項　出土遺物

第１項　７号屋敷跡概要(７区)

７号屋敷跡は村の南西部分で、西に接する大きな屋敷である８号屋敷の北東部分に位置する。建物は主屋である13号建物と付属建物である55号建物(整理段階で650号土坑を55号建物とした)の２棟からなる。屋敷の南東側は幹線道である21号道があり、21号道に沿って53号溝が造られていたものと思われる。しかしその部分は撹乱により削られており、21号道から屋敷に入る部分は不明である。小さな屋敷であり、13号建物南側の前庭は狭い。As-A軽石は屋敷北東部分と東側および、55号建物北側に一部残っていたが、他の部分は確認できなかった。13号建物は掘立柱建物と思われる。掘立柱建物の柱穴と思われるピットが、建物西側と土座や土間部分の一部に残っていたが、多くの柱穴は不明である。13号建物の中で詳しく説明するが、この建物は浅間泥流に埋もれる前に既に壊され、再利用可能な柱等は持ち去られたと思われ、唐臼の石製臼は掘り出されていた。不要な建築部材は、土坑状に掘り込まれた穴の中で焼却処分されていたと思われる(661号土坑)。またその他の建築部材も焼かれており、土間の多くの面に炭が残っていた。抜かれて空洞となっていた柱穴の中に、多くの炭が覆土の一部として埋まっていた。柱が抜きとられて空洞となっていたことを示す明瞭で重要な証拠である。

このように13号建物は、天明３年の浅間泥流に埋もれる前に意図的に壊されていた痕跡を明瞭に残す貴重な建物である。55号建物(650号土坑)には大きな桶が１個埋められていた。

第２項　13号建物(第135～139図、PL.119～123)

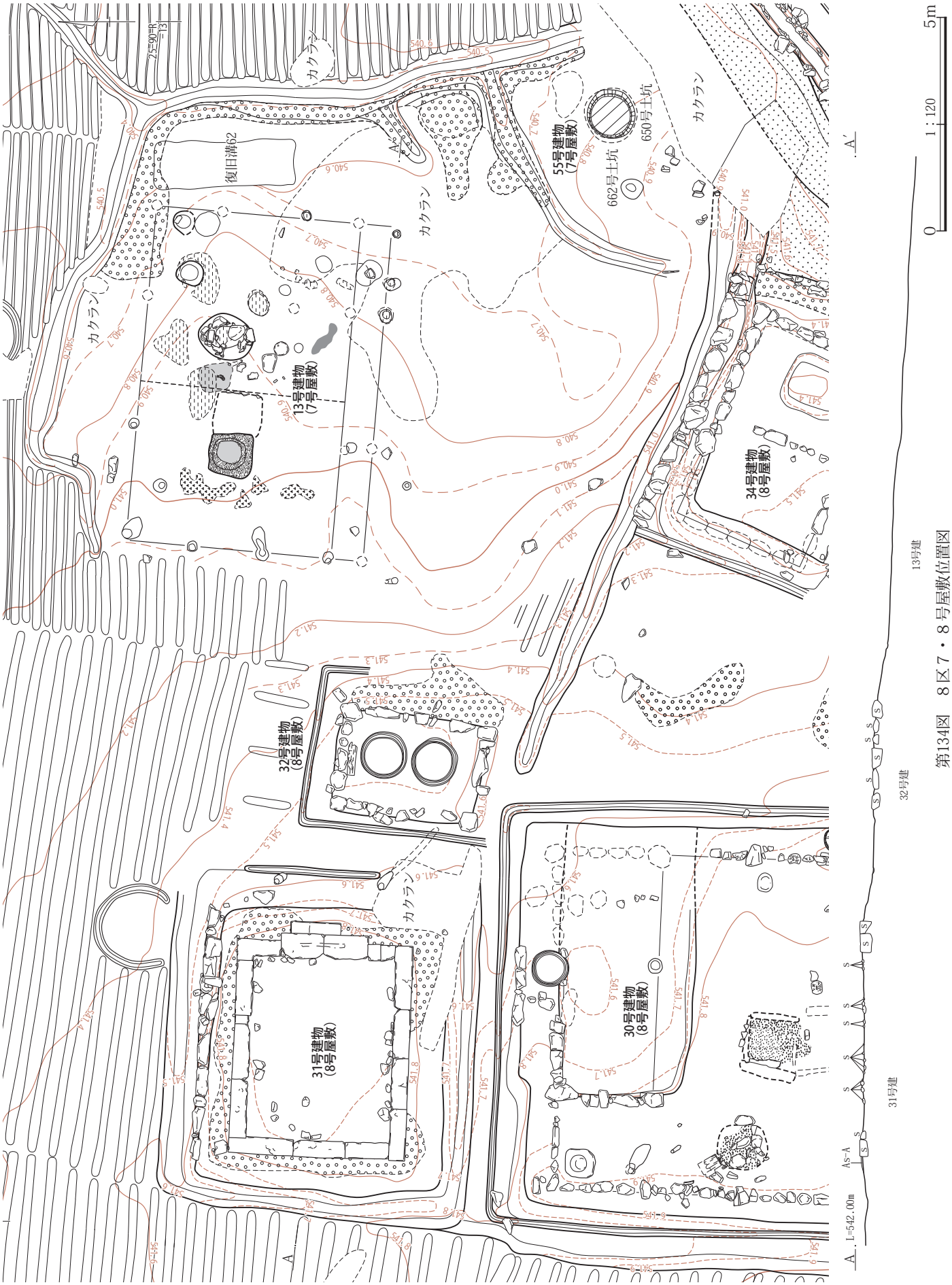
25-90-Ｒ～Ｕ-11～13グリッドに位置する。

【概要・規模】屋敷の主屋である13号建物は土台石は全く出土していない。残された柱穴の存在から掘立柱建物であると思われる。柱穴の一部は抜き取られた状態で残っていたが、柱穴の多くは確認できないものが多かった。浅間泥流に埋もれる前にすでに壊され、柱等はすでに抜き取られ、土間等は一部削られていたと思われる。残りが悪く、住居規模や建物内部の構造等は13号建物だけでは不明な点が多い。同じような構造の建物が12号屋敷42号建物にある。42号建物は残りが良好で、土間・土座の筵・上屋柱・埋まった状態の掘立柱・下屋部分の小さな柱穴・囲炉裏・唐臼等が良好な状態で残っていた。13号建物は掘立柱建物である42号建物と平面構造が非常によく似ている。そこで42号建物を参考として、規模や構造について推定復元して以下報告する。なお東側の雨落溝が、13号建物東壁面から２ｍ以上離れている。この部分に下屋等が存在したかもしれないが不明である。

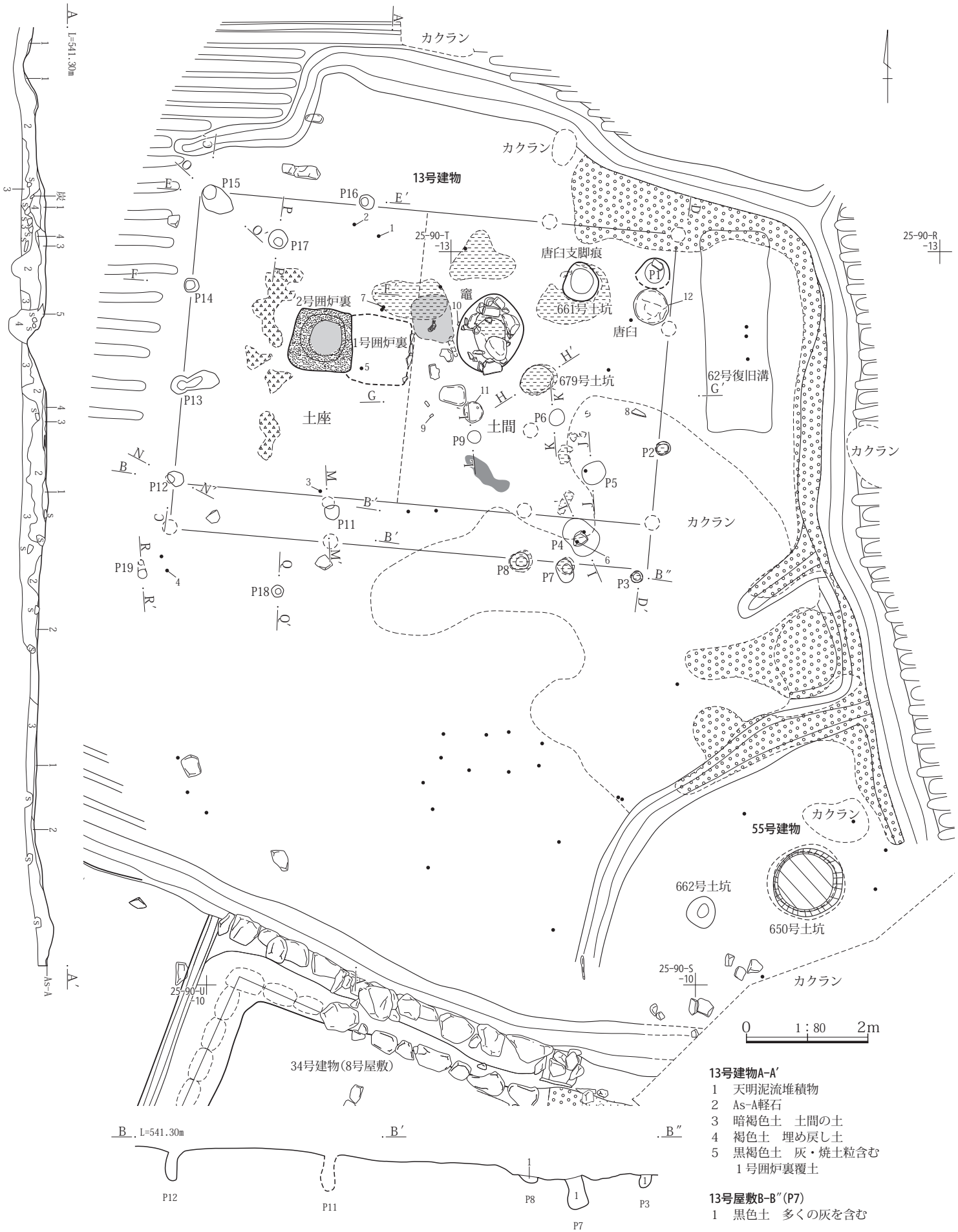
東西方向に長い建物であり棟方向(東西方向)約7.8m、奥行き(南北方向)約4.8m、出入口部分である南側に0.8m幅の下屋を持つ建物である。東側約4.2mが土間、西側幅3.7mが土間にネコ等を敷いたと思われる土座となっている。土座部分はネコと思われる織物が多くの面に残っていた。縦糸は幅が厚い植物を使用している。土間と土座を仕切る木材等は痕跡を含めて確認できなかった。

42号建物を参考にすると、土座にある１号囲炉裏の東端部分が土間と土座の境部分となっていると想定した。土間南東部分に馬屋が造られることが多く、馬屋の土間部分は土間面より20㎝前後低くなっていることが多い。13号建物では大きく撹乱を受けており、土間面より10㎝程低くなっていたが、馬屋としての遺構は残っていなかった。馬屋はなかったものと思われる。土間面の北東部分に唐臼がある。竈は土間西側で囲炉裏に近い場所に造られていた。

【構造・規模】確認できた柱は全て掘立柱である。掘立柱を詳しく調べると、42号建物では直径約30㎝、深さ約60㎝前後の大きな上屋柱と思われる柱穴が南北方向(間口)に２列あり、その上屋柱の柱穴列を東西両側から囲



第134図　８区７・８号屋敷位置図



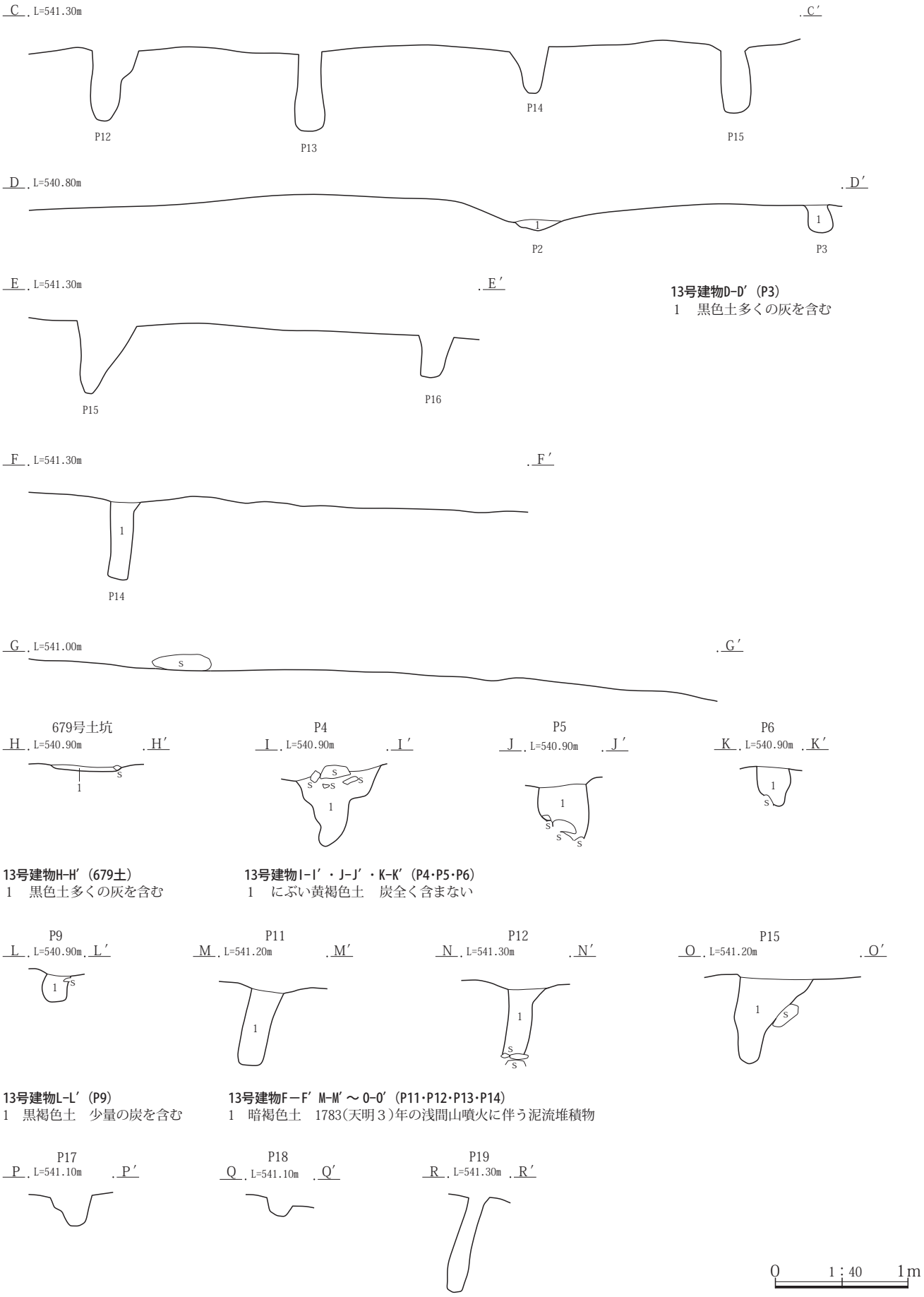
13号建物A-A′

1　天明泥流堆積物
2　As-A軽石
3　暗褐色土　土間の土
4　褐色土　埋め戻し土
5　黒褐色土　灰・焼土粒含む
　１号囲炉裏覆土

13号屋敷B-B″(P7)

1　黒色土　多くの灰を含む

第135図　８区７号屋敷　13号建物



13号建物D-D′（P3）
1　黒色土多くの灰を含む

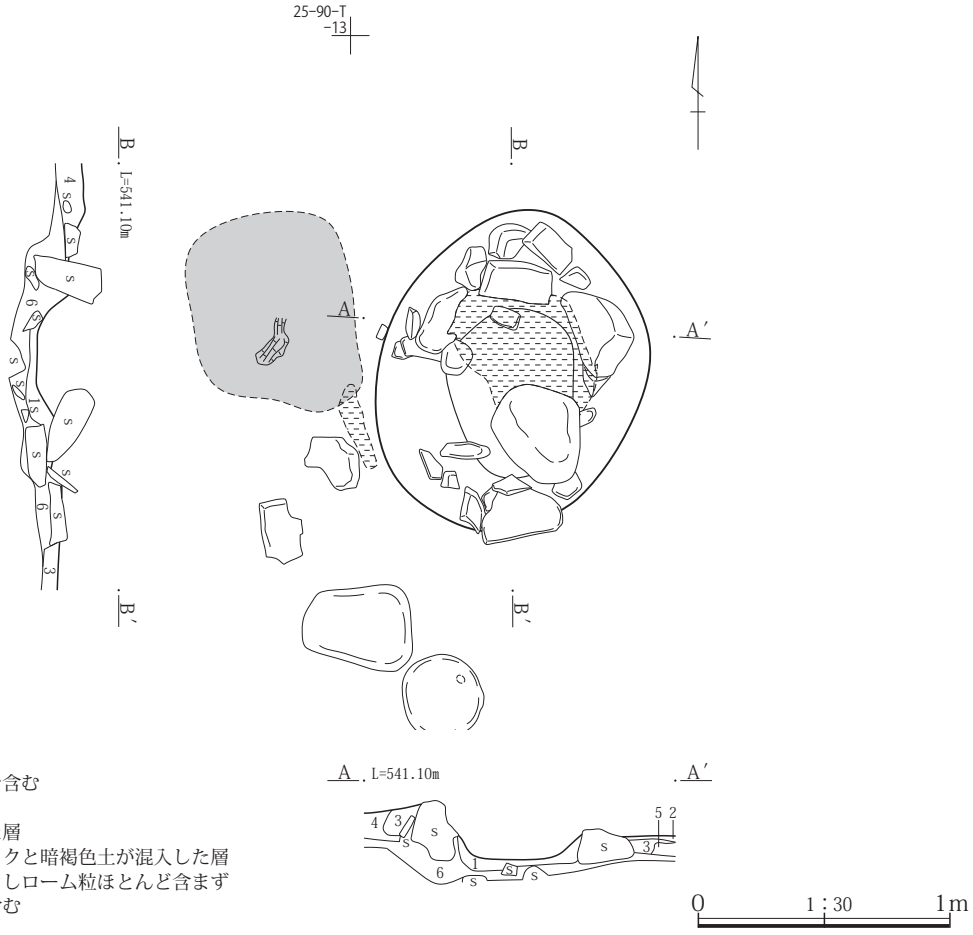
13号建物H-H′（679土）
1　黒色土多くの灰を含む

13号建物I-I′・J-J′・K-K′（P4・P5・P6）
1　にぶい黄褐色土　炭全く含まない

13号建物L-L′（P9）
1　黒褐色土　少量の炭を含む

13号建物F－F′ M-M′～O-O′（P11・P12・P13・P14）
1　暗褐色土　1783(天明３)年の浅間山噴火に伴う泥流堆積物

第136図　８区７号屋敷　13号建物ピット断面



第137図　８区７号屋敷　13号建物竈

むように直径20㎝、深さ35㎝前後の下屋柱と思われる柱穴列が掘られていた。

しかし、13号建物では柱穴の残りが悪く、42号建物のような明確な特色を読み取ることはできない。

残された柱穴から、42号建物のような上屋柱と下屋柱の区別ができない。平面規模は似ているが建物構造は異なるかもしれない。

【建築部材】構造材は出土していない。

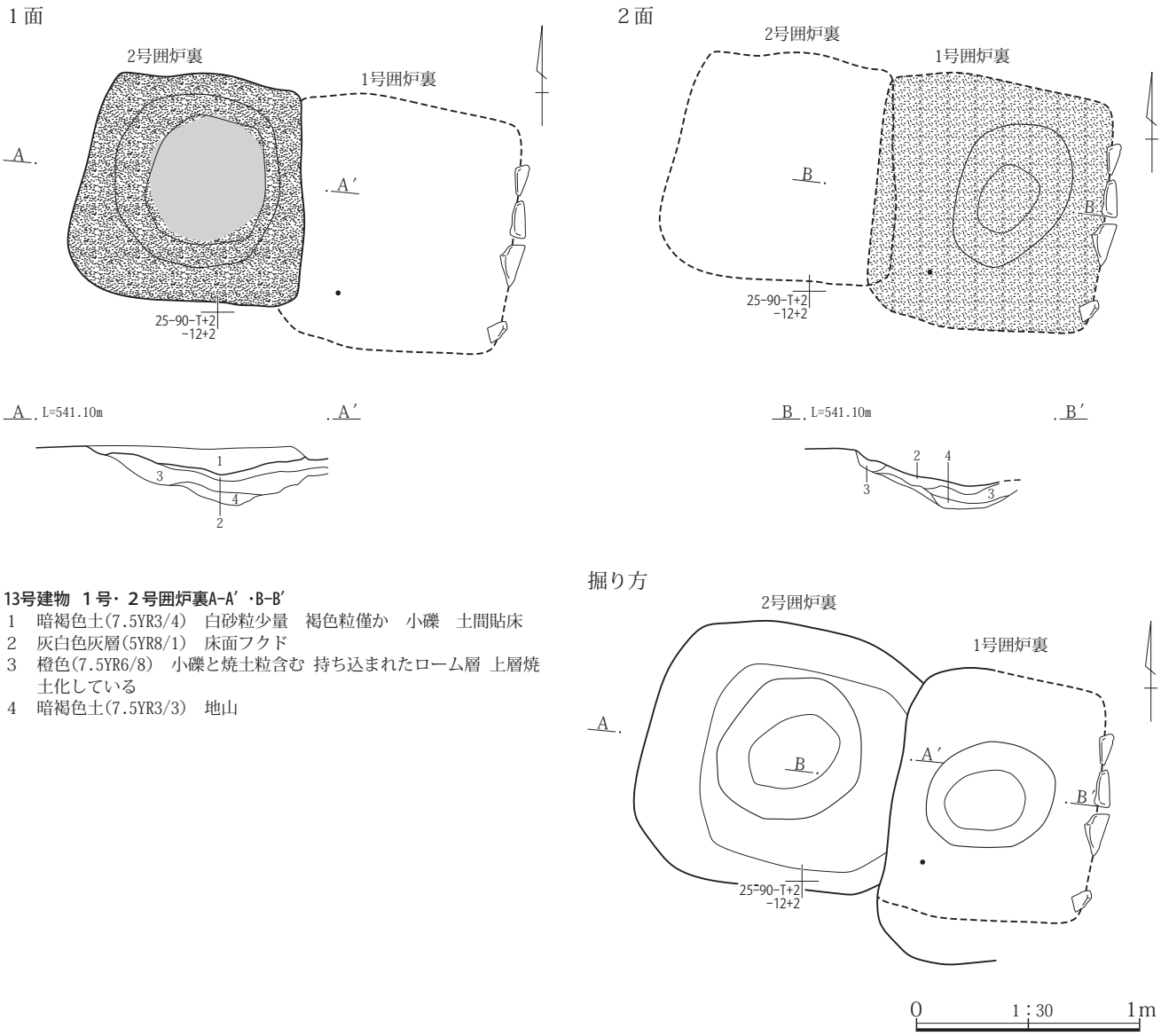
（１）竈（第137図、PL.119・120）

【位置・概要】土間の奥に造られていた。竈の残りは悪いが、竈を築くために燃焼部を囲むように積まれていた奥壁の石と、奥壁手前の左右部分の側壁の石が使用された位置で残っていた。竈内燃焼部底面には多くの灰が残っていた。炊口付近の燃焼部上に大きな石が置かれたような状態で出土した。

【規模・形状】竈は地山を直径100㎝、深さ約20㎝の円形に近い形で掘り込み、燃焼部を円形に囲むように石を奥壁・側壁に並べて竈が造られたものと思われる。炊口部

ピット一覧表参照

No.	長径cm	短径cm	深さcm
P 1	37	32	92
P 2	25	21	51
P 3	20	19	54
P 6	27	25	53
P 7	38	27	87
P 8	31	28	41
P 9	23	22	44
P 11	26	24	61
P 12	29	23	47
P 13	80	31	27
P 14	26	23	57
P 15	58	40	49
P 16	26	23	37
P 17	33	31	26
P 18	20	20	19
P 19	17	15	53



13号建物　１号・２号囲炉裏A-A′・B-B′
1　暗褐色土(7.5YR3/4)　白砂粒少量　褐色粒僅か　小礫　土間貼床
2　灰白色灰層(5YR8/1)　床面フクド
3　橙色(7.5YR6/8)　小礫と焼土粒含む 持ち込まれたローム層 上層焼土化している
4　暗褐色土(7.5YR3/3)　地山

第138図　８区７号屋敷　13号建物１号・２号囲炉裏

分に組まれていたと思われる石は残っていなかった。燃焼部下面に多くの炭の破片を含む灰層が厚く残っていた。焼土粒はほとんど出土しなかった。多くの竈では竈を囲むようにロームに近い粘土が使われ、竈のまわりに残っていることが多いが、この竈には残っていなかった。燃焼部灰層の上面の高さは土間面の高さより14㎝低く凹んでいる。

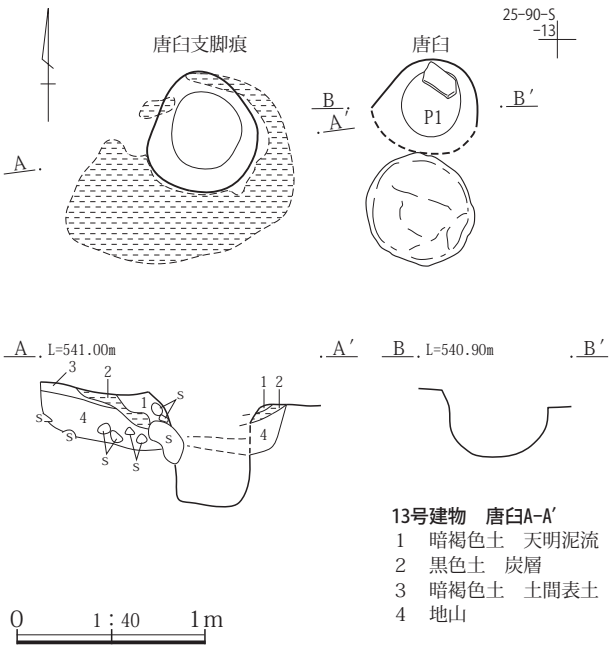
（２）囲炉裏（第138図、PL. 123）

【位置・検出状況】13号建物は１号・２号囲炉裏と囲炉裏が２個ある。１号囲炉裏は２号囲炉裏の東側に接した位置に造られていた。２号囲炉裏が使われた段階で廃棄されたもので、土間面より約８㎝下まで灰層が残っていたが、表面は埋まり土間として使われ、平面調査ではわずかに囲炉裏の範囲を確認できる程度であった。２号囲炉裏は最後まで使われていた囲炉裏である。囲炉裏の枠木は残っていなかったが、枠木の痕跡が明瞭に残り、枠木内面には全面に厚くロームが持ち込まれ、中央部分は焼土化していた。

（３）１号囲炉裏

【規模】２号囲炉裏より古い囲炉裏であり、表面は土間となっていた。掘り方調査で確認できた規模は南北方向1.3m、東西方向は東側が不明であるが、1.3m前後と思われる。内部に約８㎝灰層が残っていた。灰層の下に役５㎝前後の厚さでロームが持ち込まれローム表面が焼土化していた。

（４）２号囲炉裏



第139図　８区７号屋敷　13号建物唐臼

【規模】２号囲炉裏は１号囲炉裏の東側に位置し、１号囲炉裏より新しい囲炉裏である。囲炉裏を囲むように木製の枠木の痕跡がほぼ４面に残っていた。東側で１号囲炉裏と重複している部分には４個の石が枠木の下と思われる場所に置かれており、その上に枠木が置かれていたものと思われる。

枠木の置かれていた場所はＵ字状に深さ10㎝前後窪んでいた。窪んでいた面の外側で計測すると105㎝四方、内側で計測すると90㎝前後の規模となる。枠木が残っていないので枠木からの深さは不明。枠木に近い囲炉裏縁辺部は土間面より６㎝、中央部は８㎝前後低くなっている。囲炉裏中央部には灰と炭がわずかに残っていた。その下に厚さ10㎝の焼土層､その下はロームとなっていた。

（５）唐臼（Ｐ１・661号土坑）

【概要・規模・所見】土間北東コーナーの土間部分に、石製の臼が口縁部を下にして伏せた状態で置かれていた。さらに口縁部の下に２個の石が置かれ、臼の口縁部が少し浮いた状態となっていた。このような状況は泥流によりもたらされた現象ではなく、明らかに泥流で埋まる以前に人為的になされた行為である。臼は埋まっていた場所から掘り出され、南側の土間の上に伏せた状態で置かれた。次に使うために掘り出され現地に保管されていたものと思われる。口縁部を下にして置かれていた唐臼の北側にＰ１が掘られており、大きさがほぼ唐臼と同じである。唐臼はＰ１に埋められており、その後掘り出されＰ１の南側に置かれたと思われる。

唐臼の杵を支える支脚穴は、掘り出された臼の西側約120㎝にある661号土坑中に埋められていたことが考えられる。支脚を掘り出した穴が661号土坑であり、その土坑を利用してごみが燃されたと思われる。661号土坑の深さは約60㎝である。

（６）土間と土座（土間と土座に残る焼土。炭･ネコ等）（第135図参照）

【概要】13号建物はこれまでの報告のように、浅間泥流に埋もれる前に廃棄され、柱は抜き取られ、また不要となった建材は穴(661号土坑)を掘り燃し、その他のごみ等は土間面で焼却処分したようである。そのために土間の多くの面に炭が残っており、この炭が引き抜かれ、柱穴覆土中に多く入っている（Ｐ３・Ｐ７・Ｐ８）。また、引き抜かれた柱穴は埋められたものもあると思われ、多くの柱穴が確認できなかった。しかし、近い規模を持つ42号建物を参考にして、残された遺構から本来の形を検討した。東側約半分が土間、西側が土座である。土座部分には多くの植物痕が残っていた。それは21号建物や42号建物の調査例からネコあるいはオガラに似た植物の茎等と思われる。それらが全面に敷かれていたと思われる。

土間面が残っている場所は多くなかったが、竈南側の石臼が出土した付近では土間面にローム等が持ち込まれ、硬く踏み固められていた。

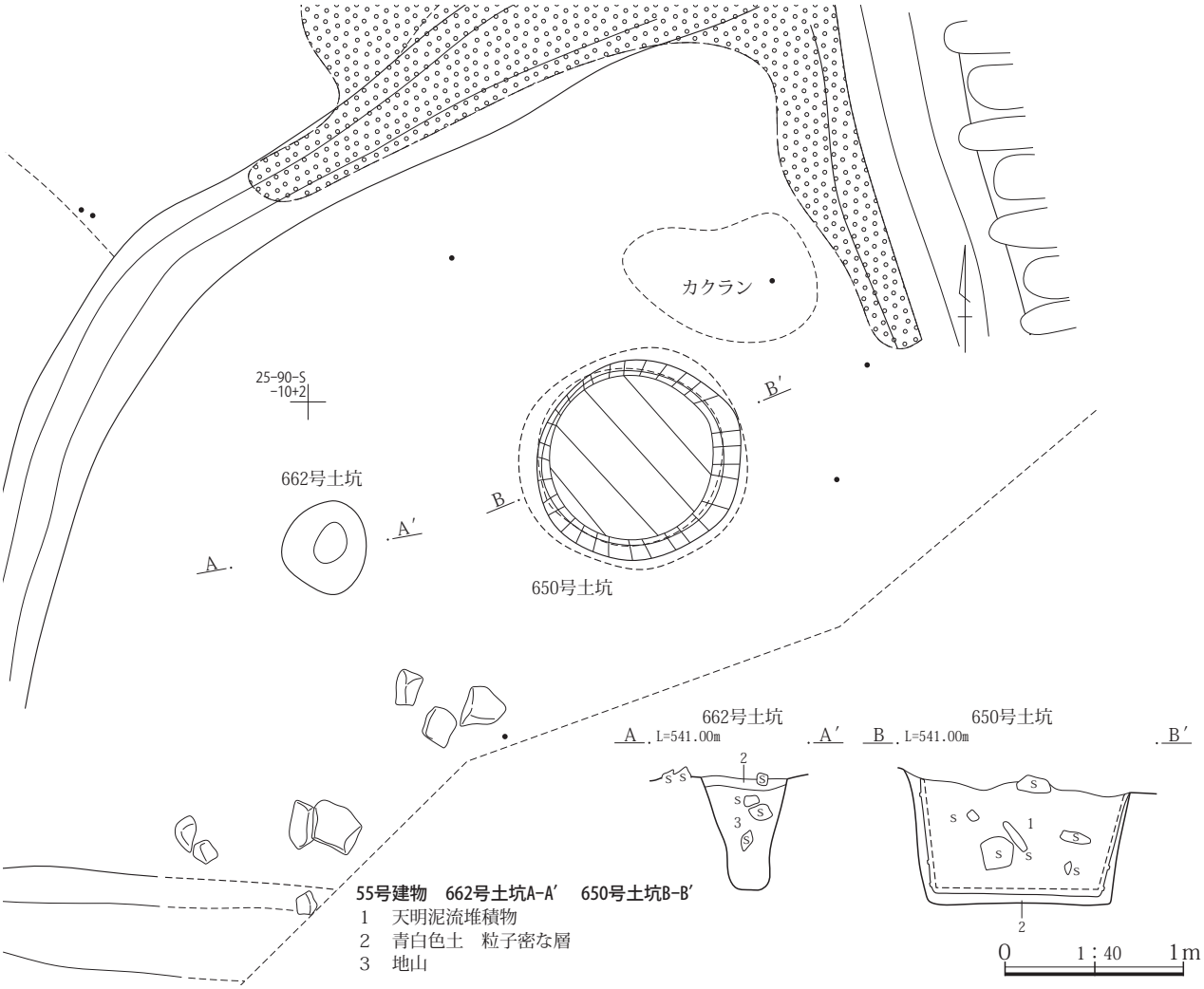
第３項　55号建物(650号土坑)(第140図、PL.124)

25-90-Ｒ・Ｓ-10グリッドに位置する。

【概要・位置・構造】13号建物南東部に位置する建物であり、調査担当は650号土坑として調査した。

７号屋敷地内の建物であり、これまでの調査例から13号建物の付属建物であると考えられる。これまでこのような建物について外便所・厠等呼称してきたが、整理段階で55号建物として報告する。

建物中央に桶が１個埋められており(660号土坑)、その桶の西側に662号土坑として調査した掘り込みがある。662号土坑を写真で確認すると土坑としては疑問である。55号建物の東側と北側から西側にかけて溝が回っている。南側は撹乱により溝の存在は不明である。上屋構造は不明である。



第140図　８区７号屋敷　55号建物

埋められていた桶付近は、北と東側の地表面より８㎝程高くなっており、桶に周辺からの雨水が入らないようになっている。桶が埋められていたであろう650号土坑は、内部に埋められていた木製桶の側板の痕跡と底部にも多くの木質部が残っていた。主屋の柱等は掘り出されていたと思われるが、この桶は掘り出されることなく埋められた状態であった。

【規模】建物規模は不明である。中央には口径115㎝、底径92㎝、深さ60㎝の木製の桶(650号土坑)が埋められていた。タガの痕跡が底板付近底面から15㎝と54㎝高い位置に３本残っていた。柱穴と思われる662号土坑は直径48㎝、深さ52㎝である。

第４項　洗い場

【概要】７号屋敷の洗い場は屋敷南東端、21号道および21号道沿いで53号溝に接した部分に造られていたと思われる。しかし、その部分は撹乱により削り取られていた。そのため、屋敷の出入口部分を含めて不明である。

第５項　出土遺物(第387・388図、PL.329)

13号建物出土遺物は少ない。主屋である13号建物の上屋が壊され、焼却されていたためか、木製品は残っていなかった。付属建物である55号建物(650号土坑)桶が埋められていたが、取り上げて実測できる状態ではなかった。

13号建物より肥前磁器染付碗と皿・丹波陶器すり鉢・煙管・石臼・砥石・釜等が出土している。

注目される遺物として唐臼がある。本文中で詳しく説明しているが、廃屋となった13号建物から掘り出され、口縁部を下にして土間に置かれていた。唐臼の再利用の様子がわかる貴重な出土例である。

第８節　８号屋敷跡(第141～162図､PL.126～139)

第１項　８号屋敷跡概要
第２項　30号建物　(１)竈　(２)囲炉裏
　(３)１号囲炉裏
　(４)２号囲炉裏　(５)３号囲炉裏
　(６)唐臼　(７)室
　(８)馬屋　(９)馬屋桶(1228号土坑)
　(10)便槽(1227号土坑)
第３項　31号建物(蔵)
第４項　32号建物(肥溜)(1208号土坑・1209号土坑)
第５項　34号建物
第６項　洗い場(1340号土坑・1486号土坑)
第７項　石橋(53号溝５号石橋)
第８項　出土遺物

第１項　８号屋敷跡概要

８号屋敷跡は村の南西部分に位置する。北東に７号屋敷13・55号建物(浅間泥流埋没以前にすでに廃屋となり焼却処分されていると思われる)、南に９号屋敷が接している。屋敷の東側は幹線道である21号道があり、道の西脇には53号溝がある。８号屋敷は主屋である30号建物のほかに、付属建物として主屋北に接して蔵と思われる31号建物、北東コーナー部分に２個の埋設桶がある肥溜と思われる32号建物、東側の庭には床面にロームを貼ったような34号建物の３棟がある。大きな屋敷であり、蔵を持つ建物は村の中ではほかに２号屋敷と３号屋敷の３軒だけであり、村の中心的な屋敷の一つであると思われる。主屋である30号建物南東コーナーに近い前庭部分に、調査担当が1340号土坑・1486号土坑として調査した土坑がある。53号溝に沿って掘られており、洗い場等に関する遺構と思われる。しかし、浅間泥流下の確認段階では埋まっており、1340号土坑の表面にはAs-A軽石が堆積していた。遺構の性格は明らかでない。1486号土坑北東約３ｍの場所に、53号溝を渡って、８号屋敷に入るための石橋が架けられていた。この石橋を境として、21号道の西側を流れる53号溝は、21号道を横切り、21号道の東側に流路を変更している。この場所付近を境に、21号道より西側が高かった地形が、逆に東側が高くなってくる。道より標高の高い場所に水路を造らないと、水が低い地形に沿って流失してしまう。そこで地形変換点であるこの場所で、53号溝の位置を変更したものと思われる。53号溝の位置を変更した場所、西側の８号屋敷前庭付近の等高線は、７号屋敷や８号屋敷34号建物部分を巻き込むような、Ｕ字状の等高線の谷頭となっている。この場所から北に向かって低くなる、低地となっていたものと思われる。低くなっている部分に造られている７号屋敷13号建物の土間面標高は540.9ｍで、８号屋敷34号建物の土間面標高は541.5ｍである。30号建物の土間標高541.9ｍであり、30号建物より７号屋敷13号建物は１ｍ以上、８号屋敷34号建物は0.4m程低くなっている。８号屋敷は東側の21号道より少し低い位置に建物が造られている。建物土間の高さは、前庭より0.4m高く、21号道面より0.1m程低く、53号溝底部より0.1m程高い。南側の畑面より南側0.2m北側で、0.6m程低くなっている。屋敷地を造るため､高い南側を0.4m前後掘り込んで、石垣を積んでいる。南東部分は21号道がほぼ平らに造られているが、道の北西に位置する前庭は、北西方向に向かって次第に低くなっている。北に向かって高低差が大きくなり、北端部分では１ｍ前後屋敷地が低くなっており、段差部分に14号石垣を積んでいる。屋敷出入口付近は、高低差が少ないので、なだらかな傾斜面としている。

As-A軽石は、前庭の21号道に接した幅1.2m前後の範囲、31号建物土台切石外側、21号道面に残っていた。前庭には、30号建物と34号建物の間に、２か所残っていたが、高く積み上げられてはいなかった。ほかにはほとんど残っていない。As-A軽石降下後、21号道付近に集めたのであろうか。

第２項　30号建物(第144～153図､PL.127・137・138)

25-90-Ｖ～Ｙ-６～11グリッドに位置する。
【概要】この建物は、南側の板間とそれ以外の板間と土間においては､柱間寸法が異なっている。南側の板間２が、他の板間１や土間空間と区別して設計されているように見られる。この南側の板間２は、東側に他の部分と別構造の屋根が造られ、土間にある出入口とは別な出入口があったものと思われる。雨落溝とこの出入口との境には、通常の屋敷出入口には見られない、細長い長方形の石が５個並べられ、他の建物の出入口部分とは明らかに異な

第141図　8区8号・9号・10号・12号屋敷位置図

る構造となっている。

さらに、この平らで細長い石は、建物南側の土台石の外側にも連続して並べられている。東側の南出入口に並べられた石列と西側の石列は、西側の石列の一部が残っていないために繋がっていないが、おそらくＬ字状に繋がっていたものと思われる。

石川原遺跡で、このような構造を持つ建物は、大きな敷地や多くの建物を持つ２号屋敷９号建物や、不動院の庫裏等で確認されている。

30号建物はさらに以下の特色を持つ。

①柱間寸法が板間２(桁行方向184㎝、梁行方向225㎝)とそれ以外の板間１や土間部分(桁行・梁行方向225㎝)で異なる。

②これまで調査してきた主屋の大部分は出入口部分に下屋が存在した。しかし、30号建物下屋は板間１の東側に想定されるが、土間や板間２の東側にはないと思われる。

③出入口部分の下屋から雨落溝までの距離は、これまでの調査例では、奥行きの小さな建物では50㎝前後、大きな建物では80㎝前後が多い。しかし、30号建物は、土間や板間１では120㎝と幅広い。これは大きな屋根が架けられていたことを示す。従来の民家と異なる屋根構造の建物と思われる。

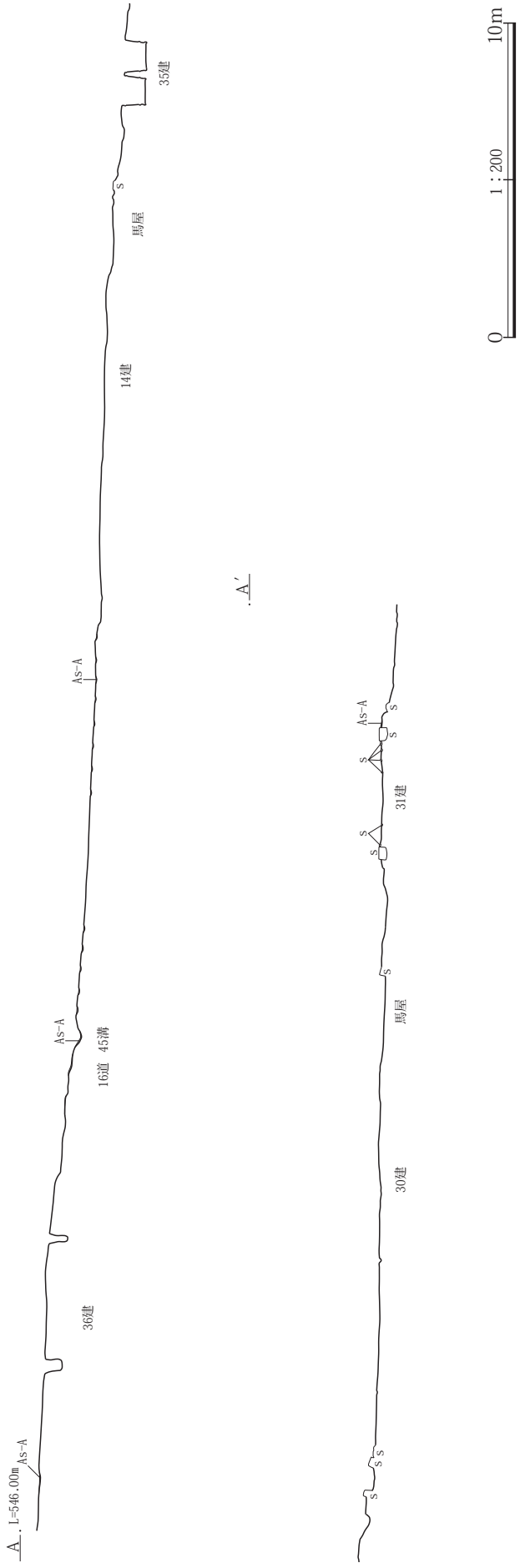
【構造・規模】屋敷の主屋である30号建物は、土台建物である。建物外周部分の石は、土台石と土台石の間を埋めるように、ほぼ全面に石が並べられている。内部の土台石は単独で置かれている。土台石は建物北東コーナー部分で残っていなかった。その部分は全体が削られ、土間部分より約20㎝低くなっていた。

南北方向に長い建物であり、棟行方向(南北)約15m、梁行方向(東西)約８ｍである。

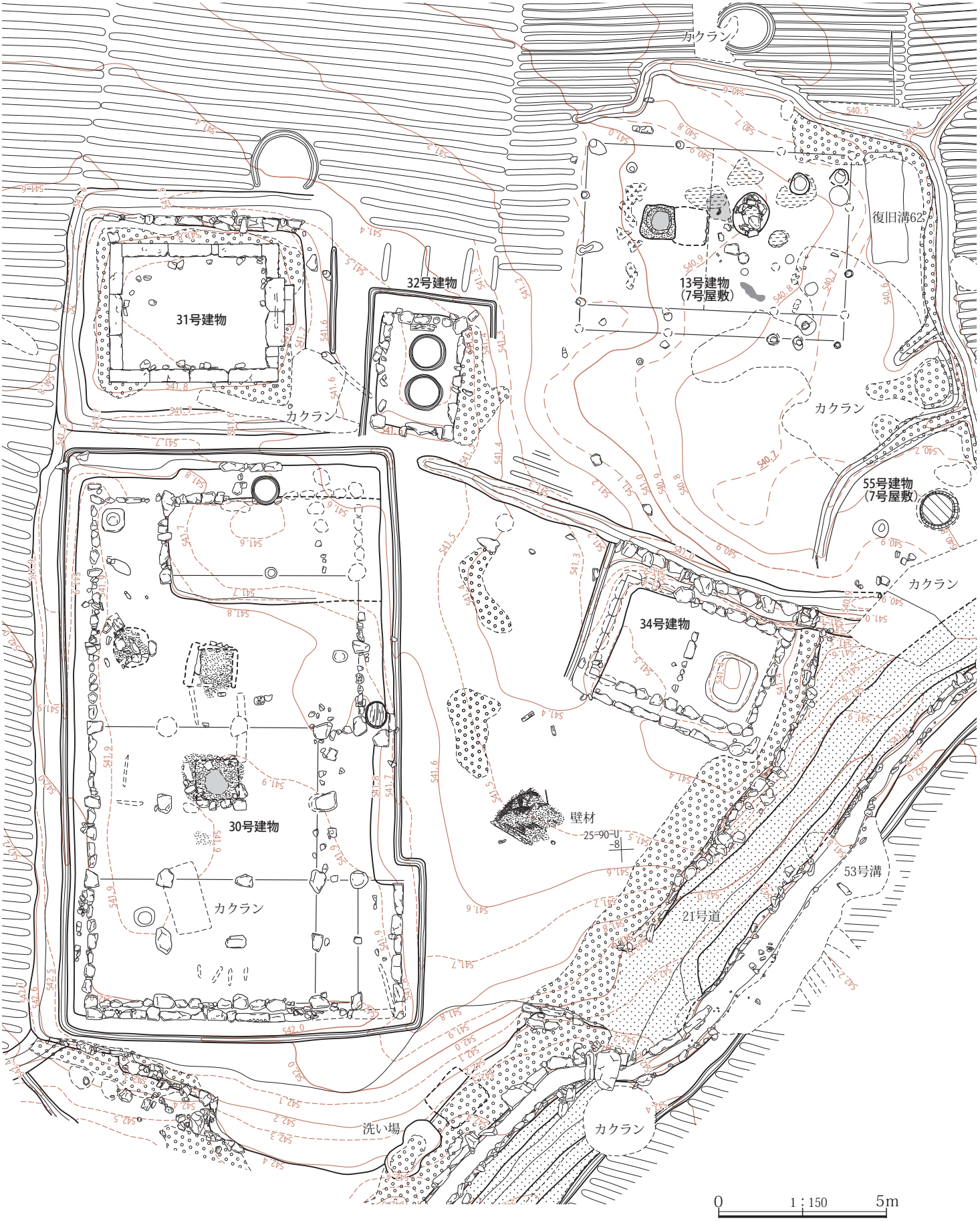
建物は北側6.8mが土間、南側8.2mが板間となっている。板間は土間に面した北側の部屋が板間１であり、南側が板間２である。

板間１は間口約4.5m、奥行約6.7ｍで囲炉裏を持つ板間。板間２は、間口約3.7m、奥行約6.7mの板間となっているようである。土間に面した出入口部分である約1.2mの範囲は、部屋ではなく式台等を想定した。

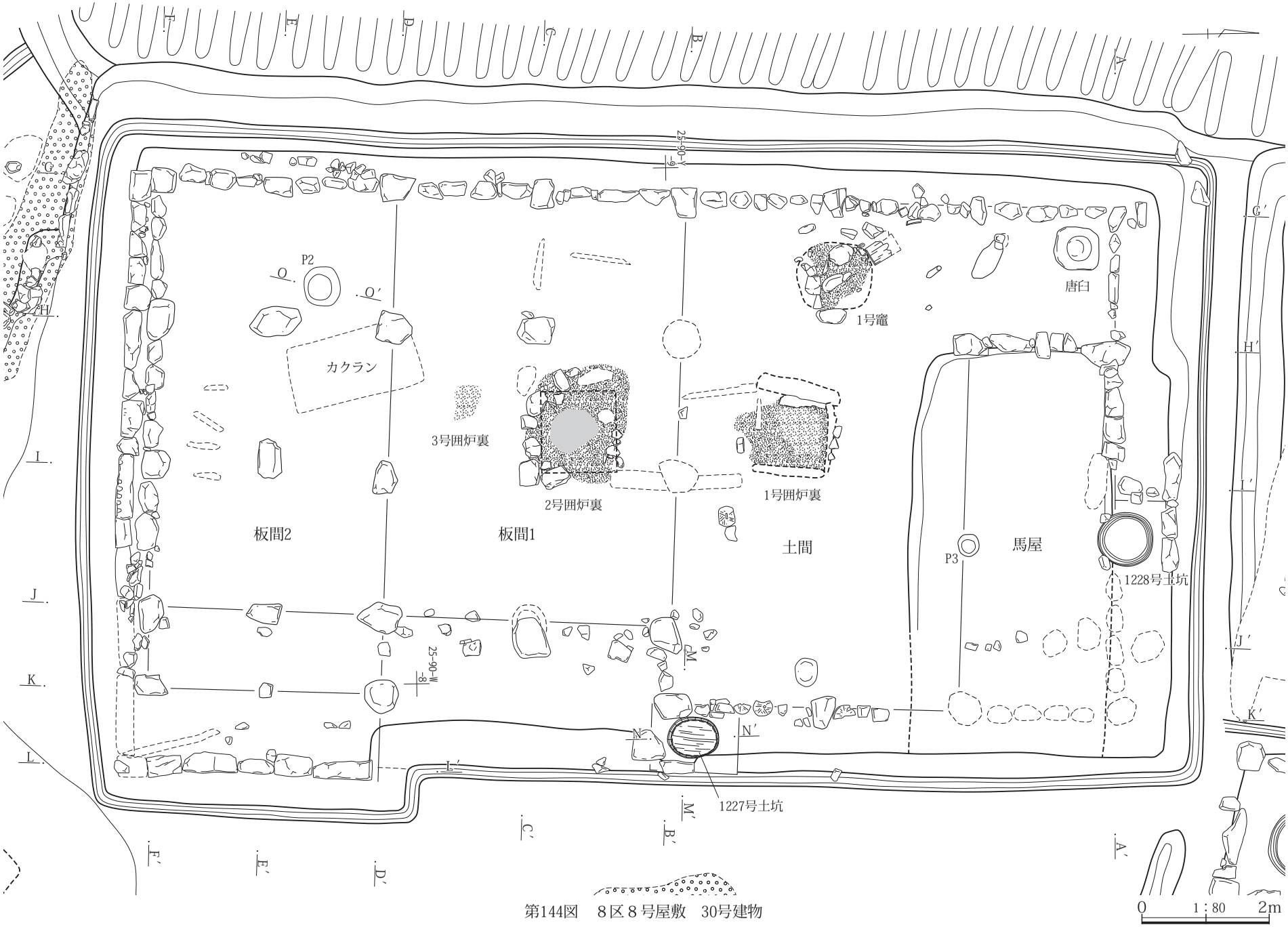
【建築部材】土台建物であり、土台石の上には土台が置かれ、板間には大引や根太、床板が貼られ、土台の上には柱が建てられ、外壁の柱間は土壁となり、大きな梁の上



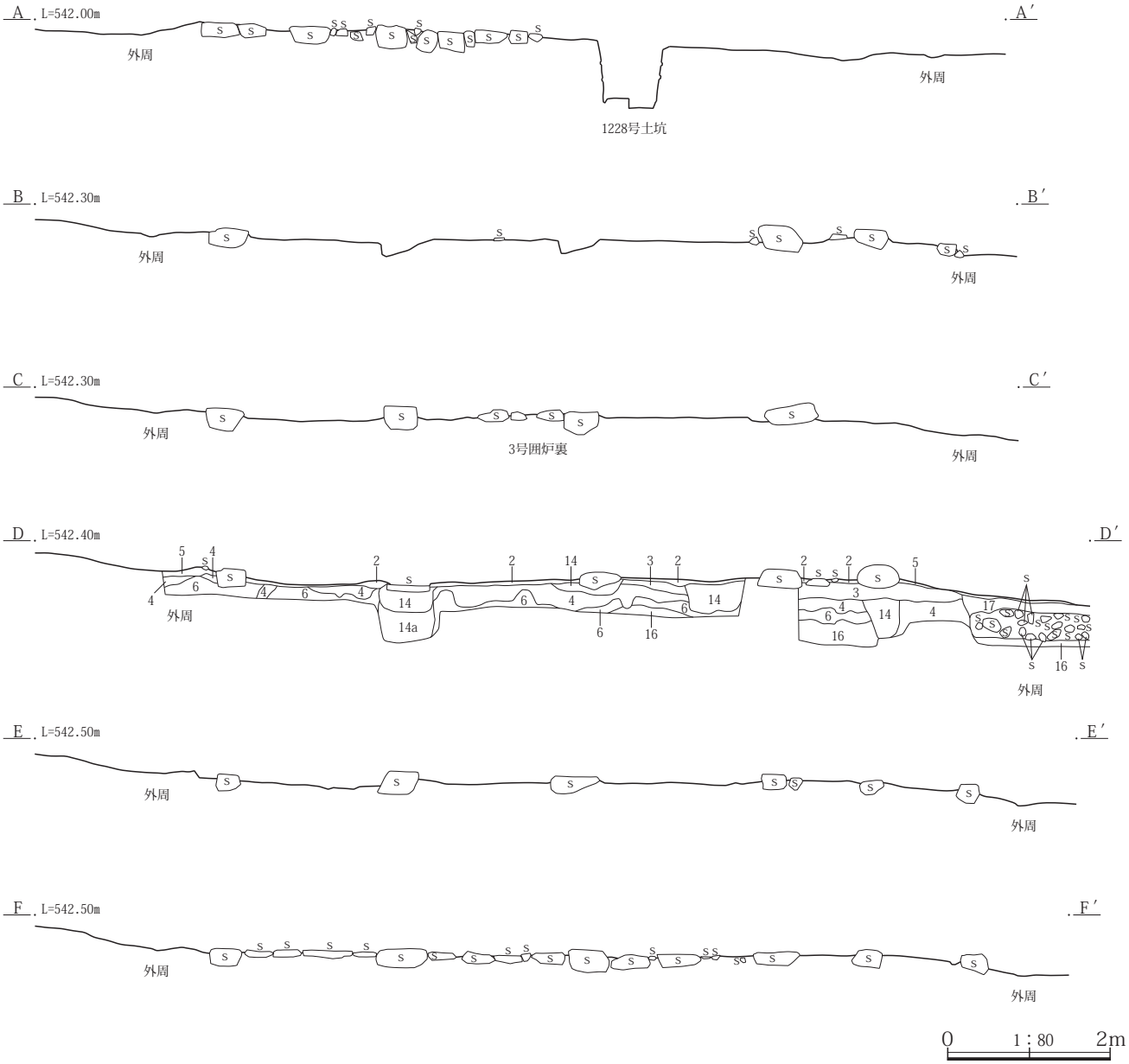
第142図　８区断面



第143図　８区８号屋敷位置図



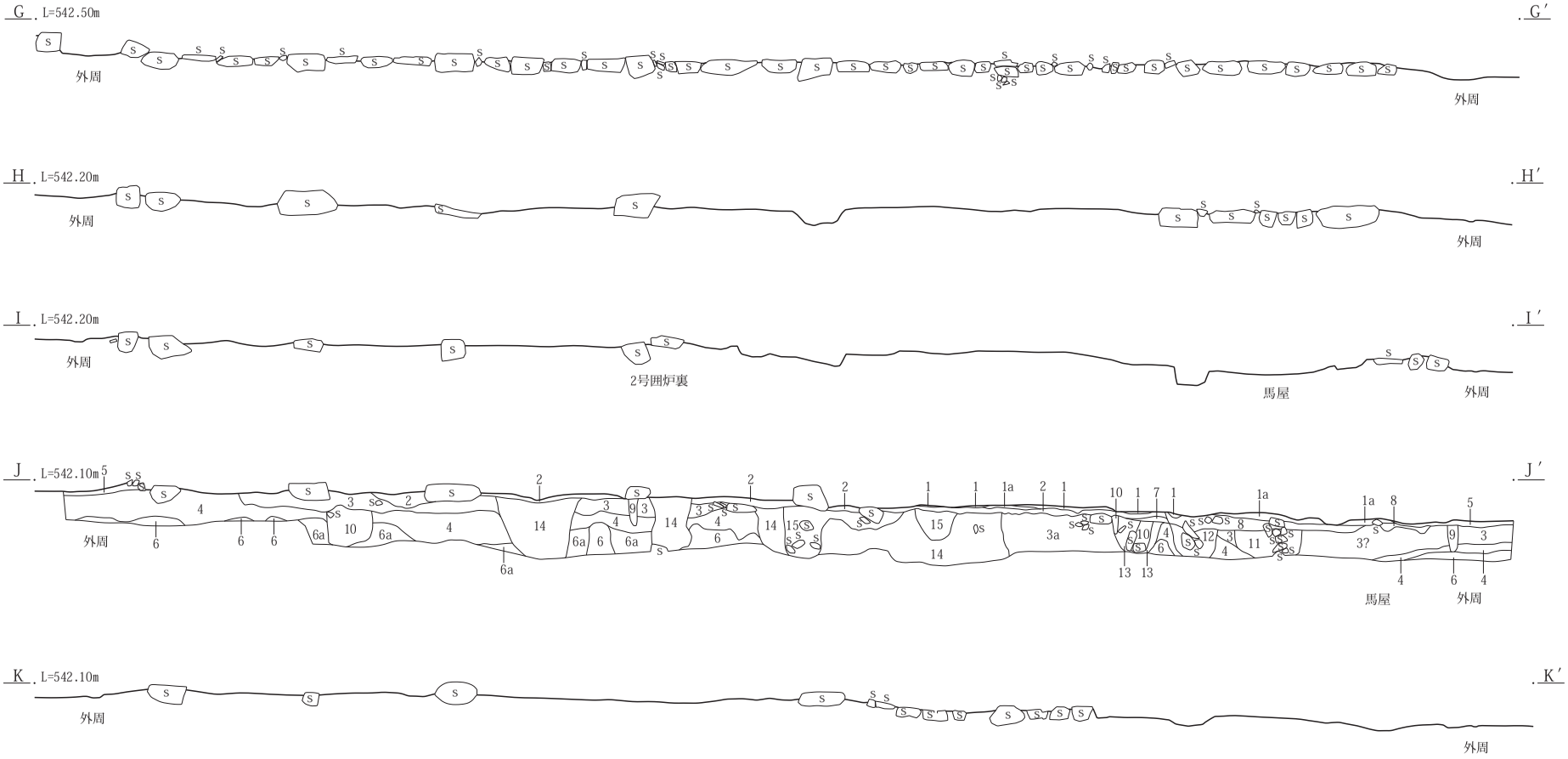
第144図　8区8号屋敷　30号建物

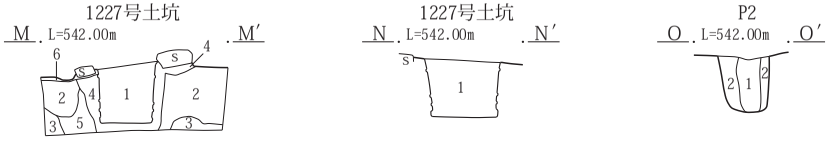


30号建物　D-D′・J-J′

1　明黄褐色土　白色粒多　小礫　炭化粒僅　踏み固められ固い　貼床
1a　暗褐色土　白色粒　褐色粒　小礫　鉄分付着　貼床
2　暗褐色土　白色粒　褐色粒　小礫　炭化粒僅
3　暗褐色土　白色粒少含　褐色粒僅含
3a　暗褐色土　白色粒含　炭化粒僅含　しまり有
4　黒褐色土　白色粒少含　褐色粒僅含　橙色粒僅含　小礫僅含
5　暗褐色土　白色粒　褐色粒　小礫　鉄分付着
6　黄褐色土　砂礫層　径５～10㎝　一抱え程礫含
6a　褐色土　　６層に４層がブロック状に混入
7　黄褐色ブロック多　大き目の焼土ブロック　白色粒
8　暗褐色土　白色粒　褐色粒　褐色ブロック　焼土粒僅
9　暗褐色土　白色粒　褐色粒　焼土粒　炭化粒
10　褐灰色土　炭化粒多　白色粒僅　ボロボロ感有
11　暗褐色土　白色粒　褐色粒　小礫　黒色土ブロック
12　暗褐色土　白色粒僅　褐色粒僅　焼土ブロック含　鉄分付着
13　暗褐色土　白色粒僅　褐色粒僅　焼土ブロック含
14　暗褐色土　白色粒　褐色粒　炭化粒僅　小礫　やわらかい
14a　暗褐色土　白色粒　褐色粒　炭化粒僅　焼土ブロック　小礫　やわらかい
15　褐灰色土　焼土ブロック　褐色ブロック多　炭化物　小礫
16　黒褐色土　小礫多含　砂礫層
17　暗褐色土　白色粒　褐色粒　小礫含

第145図　８区８号屋敷　30号建物断面（１）





30号建物　M-M′・N-N′

1　明黄褐色土　1783(天明三)年の浅間山噴火に伴う泥流堆積物
2　暗褐色土　白色粒　褐色粒　小礫
3　明黄褐色土　砂礫層　拳大
4　暗褐色土　白色粒　褐色粒　小礫　埋戻し土
5　褐色土　白色粒　褐色粒多　小礫
6　暗褐色土　白色粒　褐色粒　小礫　鉄分付着　上面As-A有

30号建物　0-0′(P2)

1　暗褐色土　白色粒僅　褐色粒僅　小礫　炭化物僅　ボロボロ感有
2　暗褐色土　白色粒僅　褐色粒僅　拳大以上の礫含　やわらかい

0　1：80　2m

第146図　８区８号屋敷　30号建物断面(２)

には屋根が架けられていたものと思われる。しかしこの建物では、土台や柱はほとんど残っていなかった。それらの一部の土壁が建物南東部に残っていた。これは、30号建物が南西方向から押し寄せてきた浅間泥流により、東側に倒れた柱・貫・木舞・土壁の一部と思われる。これらの部材を観察することにより、建物構造の一部を知ることができると思われる。

観察から以下の事が想定される。

①柱は角材であり、直径12㎝で、おそらく４寸角である。

②柱に直行する材は柱を貫通している。貫構造の建物である。

③泥流により土壁が前庭部分まで運ばれていた。

土壁は土台と柱と思われる部材に囲まれ、中央に貫とも思われる板材が組み込まれていた。木舞と思われる割竹は、倒れていた上の部分が貫と直行、貫の下の割竹は貫と並行方向であった。割竹部分は多くの土壁が残っていた。

土間は標高541.85m前後の高さにほぼ平らに造成されていた。地山の土を中心に固めているが、ローム等の褐色土を土間部分に持ち込んだ様子は認められなかった。

【土間断面調査】土台石の位置に合わせて、間口と奥行に直行するトレンチ調査を実施した。その結果土台に近い場所から、掘立柱の柱穴とも思える小穴が多く確認された。柱穴の間隔は180㎝前後であり、225㎝間隔の土台石と間隔が異なる。２本のトレンチ調査だけであるが、土台建物以前に掘立柱建物が存在した時期があるのではないだろうか。

（１）竈（第147・148図、PL.129）

【位置・概要】土間の奥に造られていた。

泥流により押され倒れかけていたが、竈を構成する細長い石や、その石の外側を覆うように積み上げられていた粘土（ローム）が、大きな塊として残っていた。それらの倒壊した竈を構成する石や粘土等を撤去すると、炊口部に敷かれていた平らな石が使用時の状態で残り、左袖部分の側壁石２個、右袖部分の側壁石１個が一部欠損していたが、竈内に据えられた状態で残っていた。右袖石奥の石は、移動し元の位置には残っていなかった。奥壁部分の２個の石は、埋められていた痕跡は残すが、元の位置に残っていなかった。おそらく奥壁部分の方向からの泥流により、竈内に押し倒され、移動したものと思われる。それらの炊口石・両側壁石・奥壁石に囲まれた燃焼部には、多くの灰が残っていた。

これらの残っていた竈燃焼部の石の配置を観察すると、円形ではなく長方形である。切石でない細長い石を使って築かれる竈の場合、これまでの調査ではほとんど円形であったが、この竈では方形であったと思われる。なお、燃焼部底面の高さは541.63mであり、床面の高さより約22㎝低い面となっている。

【規模・形状】残っていた石や抜き取られたであろう石の痕跡から規模を推定する。燃焼部の規模は奥壁方向0.55m、両袖方向0.4mと狭い。外形は不明であるが、残された粘土や石から推定すると、奥壁方向100㎝、両袖方向110㎝である。

・２号竈

調査担当が２号竈として調査した遺構は、１号竈の南東方向にある、土坑状の掘り込みである。竈としての石組や焼土がないために、竈ではないと思われる。

（２）囲炉裏（第149・150図、PL.130）

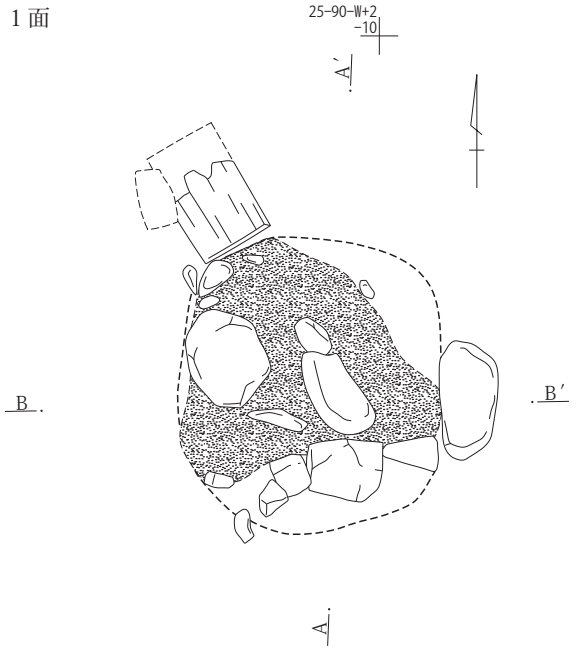
30号建物で囲炉裏が１～３号囲炉裏まで３基調査されている。１号囲炉裏は土間にある囲炉裏、２号囲炉裏は土間に近い板間１にある囲炉裏で、両者とも天明泥流で埋まる段階まで使用されていたものと思われる。３号囲炉裏は２号囲炉裏の南側に近接し、灰とその下に焼土が板間の下となる土間面にある。板間を造る以前に使われた旧囲炉裏と思われる。囲炉裏は土間面と板間面にあり、これまでの調査から土間面の囲炉裏より板間面の囲炉裏の平面規模が大きい傾向を示している。30号建物でも板間１の囲炉裏は、土間の囲炉裏より平面規模が大きい。

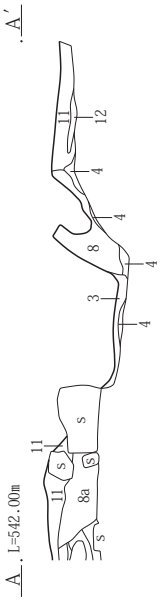
【所見】主屋に板間が２つある場合、それぞれの板間に囲炉裏が造られることが多い。（１・９・16・20・38号建物等）しかし、30号建物と15号建物では奥の板間に囲炉裏はない。この建物は竈や馬屋のある大きな土間とは別に、奥の板間専用と思われる独立した小さな土間が造られている。このような建物には奥の板間に囲炉裏は造られないのであろうか。

（３）１号囲炉裏

【位置・検出状況】30号建物土間のほぼ中心部、竈炊口手前部分に位置する。床面はほとんど掘り込むことなく、囲炉裏の外側を方形に囲むように角材を並べて枠木が置かれていたようである。その中に明黄褐色の粘土質の土

１面

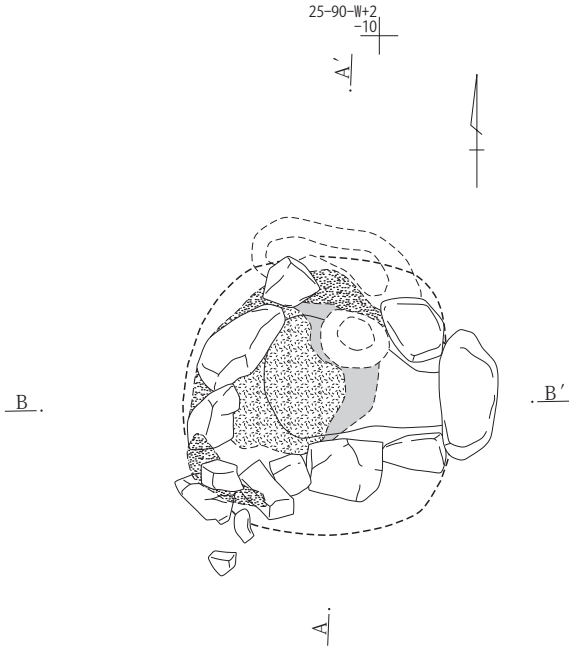




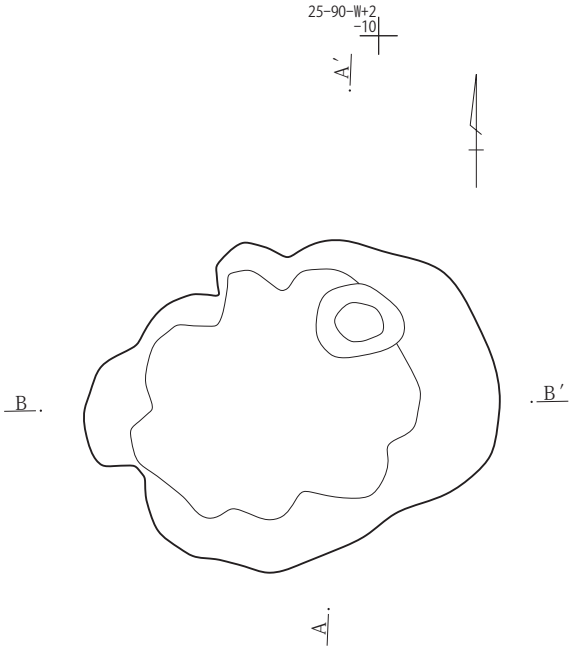
30号建物　１号竈A-A′・B-B′

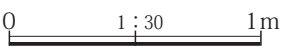
1　灰白色土　焼土粒僅　褐色粒僅　灰層
2　暗青灰色土　焼土粒僅　灰白灰僅　灰層
3　灰白色土　焼土粒　焼土ブロック　暗青灰含　灰層
4　黒褐色土　白色粒僅　焼土粒僅
5　灰白色土　焼土粒僅　暗青灰僅　灰層
6　橙色土　灰白灰　暗青灰含む　焼土層
7　暗褐色土　焼土粒　炭化粒僅　小礫　褐色粒僅　鉄分付着
8　明黄褐色土　白色粒僅　焼土粒僅　炭化粒僅　粘質土
8a　暗褐色土　白色粒僅　焼土粒僅　炭化粒僅　褐色粒　褐色ブロック多含
9　暗褐色土　小礫　白色粒僅　焼土粒僅　炭化粒僅　鉄分付着
10　暗褐色土　1783(天明３)年の浅間山噴火に伴う泥流堆積物
11　暗褐色土　焼土粒僅　白色粒僅　炭化粒僅　褐色粒　褐色ブロック多　踏み固められ固い　貼床
12　赤色土　白色粒僅　暗青灰僅　鮮やかな赤色焼土

２面

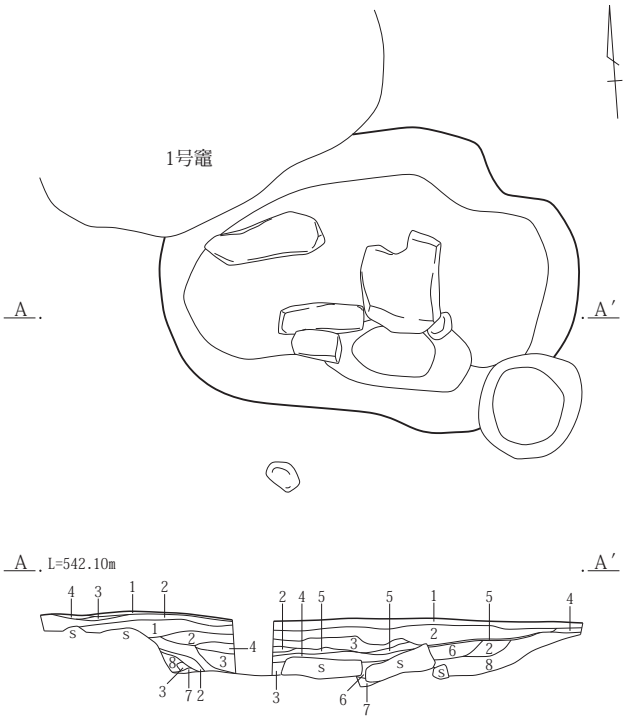


掘り方





第147図　８区８号屋敷　30号建物１号竈



30号建物　１号囲炉裏A-A′・B-B′
1　暗褐色土　焼土粒僅　白色粒僅　炭化粒僅　褐色粒褐色ブロック多　　踏み固められ固い　貼床
2　明黄褐色土　白色粒僅　焼土粒僅　炭化粒僅　粘質土
3　赤褐色土　白色粒僅　焼土粒僅　炭化粒僅　焼土層
4　灰白色土　焼土粒僅　褐色粒僅　灰層　焼土層
5　赤黒色土　炭化物多含　暗青灰含
6　暗褐色土　白色粒　焼土粒僅　褐色粒　灰
7　黒褐色土　白色粒　灰　焼土粒僅
8　暗褐色土　炭化粒　灰　大き目の褐色ブロック多

0　1：30　1m

第148図　８区８号屋敷　30号建物２号竈

を入れ、囲炉裏としていた。囲炉裏内の明褐色土が、枠木に沿って直線的に残っていた。囲炉裏中央部分には多くの灰が残っていた。焼土は竈中央部分灰層の下に５㎝程の厚さで残っていた。このように、枠木の内部を囲炉裏とし、床面はほとんど掘り込まない囲炉裏である。

【規模】枠木は残っていなかったが、残っていた粘土(明黄褐色)の範囲で計測すると、外形110㎝四方であり、深さは５㎝前後である。

（４）２号囲炉裏

【位置・検出状況】土間に近い板間１の中央部に造られている。泥流等により壊され残りは悪いが、囲炉裏中央部に粘土(明黄褐色)と焼土が残っていた。囲炉裏の南側に長径20～30㎝の石が４個、西側と東側に１個置かれていたが､全体を囲んではいない。それらの石は１段であり、石垣のように数段積み上げることはしていない。これまで調査してきた板間の囲炉裏は土間面に1.2m前後の方形に２段前後石を積み上げ、その中に軽石・土・石等を詰めて土間より20㎝前後高い位置を確保し、その面を使用面としていた。

２号囲炉裏は、囲炉裏を囲む石等はほとんど残っていなかった。粘土(明黄褐色)や焼土面が土間面より13～22㎝高い位置にあった。

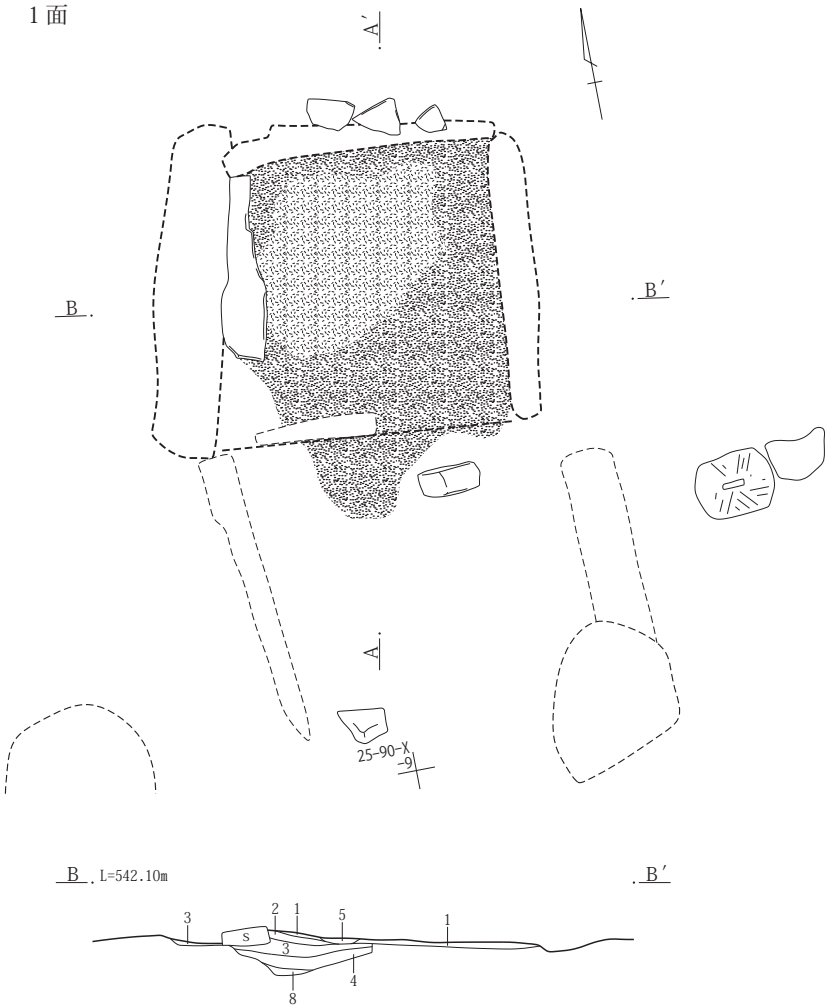
【規模】枠木は残っていなかったが、残っていた石や粘土(明黄褐色)の範囲を計測すると、外形130㎝四方が囲炉裏の範囲と推定した。

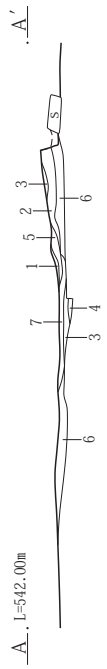
（５）３号囲炉裏

【位置・検出状況】２号囲炉裏の南側に近接し、灰とその下に焼土が囲炉裏のように土間面に残っていた。その規模は40×50㎝、深さ12㎝である。残りが悪く上面はほとんど残っていない。板間を造る以前に使われた旧囲炉裏であろうか。

（６）唐臼（第151図、PL. 130）

【概要・規模・所見】土間北西コーナーの土間部分で、馬屋の裏側に石製の唐臼が埋まっており、唐臼から南約1.3m南に杵を支える支脚穴が掘られていた。木製の杵は残っていなかった。唐臼は北東方向に少し傾いた状態であったが､ほぼ元位置を保っていた。唐臼は直径76㎝、深さ26㎝で大部分が土間に埋められているが、口縁部が８㎝前後土間より高い位置に出ていた。南側に位置する支脚穴は直径18㎝、深さ60㎝と深い。支脚は残っていなかった。支脚穴は垂直ではなく東側に支脚が倒れたような状態で掘り込まれていた。泥流により押されて傾いたものと思われる。





30号建物　１号囲炉裏A-A′・B-B′
1　灰白色土　炭化物少量　しまり有
2　明黄褐色土　小礫　白色粒僅
3　黒色土　炭化物層
4　灰白色土　灰層
5　明赤褐色土　小礫含
6　暗灰色土　灰層
7　暗褐色土　白色粒　小礫　灰含

第149図　８区８号屋敷　30号建物１号囲炉裏

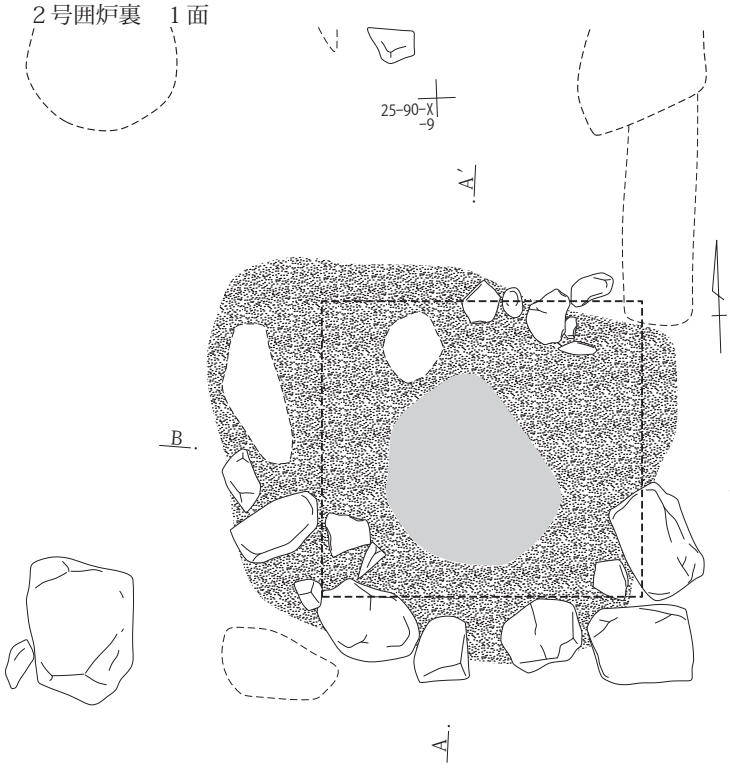
（7）室

多くの主屋には、竈と囲炉裏の間に室が造られている例が多い。30号建物では、室が造られたであろう場所は広い土間となっていた。しかし、明瞭な掘り込みは確認できなかった。室の存在は不明である。

（8）馬屋（第152図、PL. 131）

【位置・概要・規模】30号建物土間出入口右側に位置する。残された痕跡から馬２匹分の馬屋と思われる。この部分は、土間面より25㎝前後低くなっている東西約5.5m、南北約2.1mの範囲であり、中央部付近に小穴Ｐ３が掘られている。馬屋の西端は６個の大きな石で区画され、北側は30号建物土台石列で区画されている。その石列の外側にあたる北側には、馬の糞尿等を集める桶が１個埋められている（1228号土坑）。30号建物北東コーナー部分は削られており、建物の土台石は全く残っていなかった。馬屋は土台石が本来あったであろう北東コーナー部分までが馬屋であったと思われる。馬屋の規模は、小穴Ｐ３

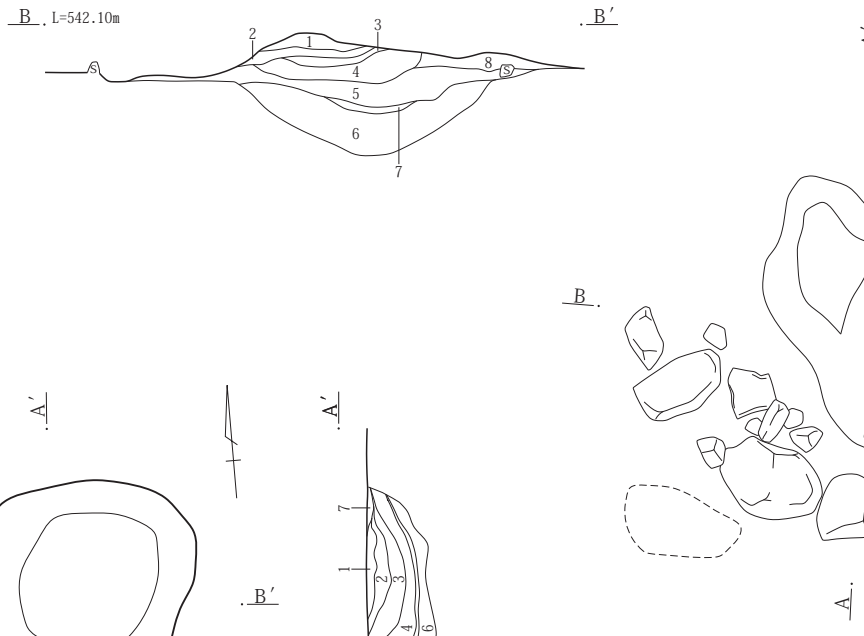
２号囲炉裏　１面



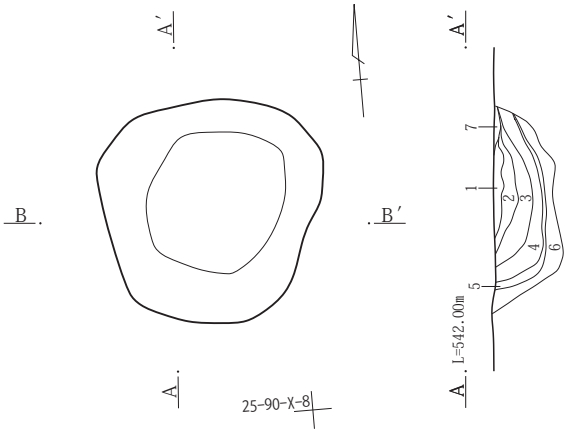
30号建物　２号囲炉裏A-A′

1　にぶい赤褐色土　灰白灰ブロック　黄褐色ブロック　黒色粒僅
2　暗褐色土　黄褐色粒僅　焼土ブロック・粒　小礫　炭化物　ボロボロしまり無し
3　灰褐色土　小礫
4　暗褐色土　黄褐色粒僅　焼土ブロック・粒
5　褐色土　白色粒僅　黄褐色粒僅　灰
6　黒褐色土　小礫　灰　黄褐色粒僅
7　橙色土　細かい焼土層

２号囲炉裏　２面



３号囲炉裏

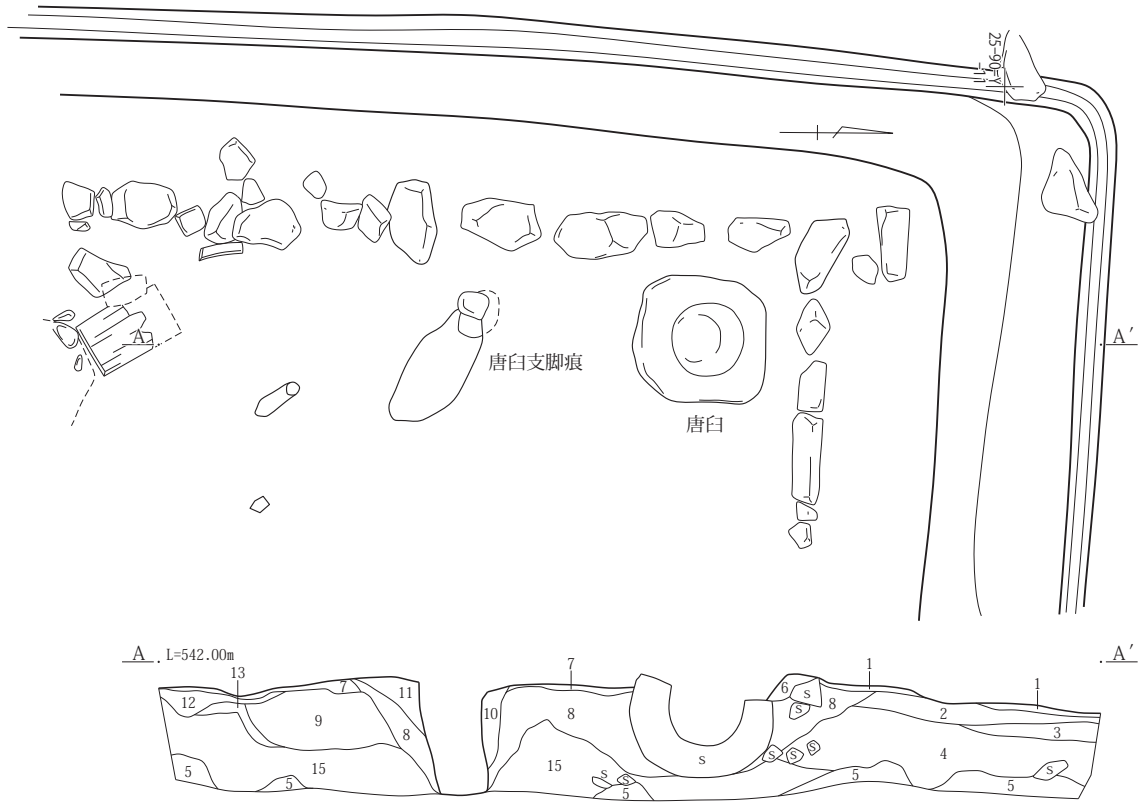


30号建物　３号囲炉裏A-A′・B-B′

1　灰白色土　焼土粒僅
2　明赤褐色土　白色粒僅　小礫僅　焼土層
3　暗赤褐色土　白色粒僅　小礫僅　褐色粒僅
4　赤褐色土　白色粒僅　小礫僅　青灰多含
5　明褐灰色土　灰色灰が幅１㎝未満でレンズ状堆積
6　明黄褐色土　礫の少ない砂礫層
7　暗褐色土　白色粒僅　褐色粒僅　小礫僅　床　踏み固められ固い

0　1：30　1m

第150図　８区８号屋敷　30号建物２号・３号囲炉裏



30号建物　唐臼A-A′

1　暗褐色土　白色粒　褐色粒多　小礫　炭化粒僅　鉄分付着　踏み固め固い
2　黒褐色土　白色粒　褐色粒　小礫　炭化物僅
3　暗褐色土　白色粒　褐色粒　褐色ブロック　小礫
4　暗褐色土　白色粒　褐色粒　小礫
5　明褐色土　砂礫層
6　橙色土　白色粒　鉄分付着　粘質土
7　暗褐色土　白色粒　褐色ブロック　小礫　貼床
8　暗褐色土　白色粒　褐色粒　小褐色ブロック　小礫　炭化粒僅　焼土ブロック僅
9　暗褐色土　褐色ブロック多含　小礫　白色粒　炭化粒僅
10　暗褐色土　1783(天明三)年の浅間山噴火に伴う泥流堆積物
11　暗褐色土　白色粒　褐色粒　小礫多　鉄分付着　泥流堆積物に近い
12　暗褐色土　白色粒　褐色粒　小礫　焼土ブロック
13　暗褐色土　白色粒僅　褐色粒僅　小礫　細かい暗褐色粒層
14　暗褐色土　白色粒　褐色粒　小礫　４層に近いがしまり有
15　黒褐色土　白色粒少　褐色粒僅　橙色粒僅　小礫僅

0　1：40　1m

第151図　８区８号屋敷　30号建物唐臼

の西側の広さは東西３m、南北2.1m、東側の広さは東西2.5m、南北2.1mと思われる。東側の馬屋部分の中央付近に石が南北方向に並んでいるが、この石は小さく配列も整然としていない。地山の石と思われる。馬栓棒等の柱を埋めたであろう穴は見つかっていない。

これまで調査した屋敷で、馬２頭分の馬屋を持つ建物は数少ない。

（９）馬屋桶（1228号土坑）

【概要・規模】馬屋北側軒下部分に1228号土坑(馬屋桶)がある。内部は浅間泥流で埋まっていた。２頭の馬の糞尿等が溜められていたものと思われる。この部分は、主屋の柱から雨落溝までの長さが140㎝と長くなっている。馬屋桶(1228号土坑)はこの長い軒の下に位置する。桶を囲むように南側には30号建物の壁面、西と北側には大きな細長い石が土台石のように置かれていた。おそらく南・西・北側面は壁により囲まれており、長い軒の下に位置した馬屋桶は雨水等の侵入はなかったものと思われる。内部に桶の底部や側板が痕跡として残っていた。規模は底径68㎝、口径78㎝、高さ70㎝である。タガの痕跡が底面から高さ22㎝と40㎝の位置に２か所残っていた。

桶は、土坑状に掘り込まれた中に埋められ、掘り出した土で埋められていた。

(10)便槽(1227号土坑)(第153図、PL.132)

【位置・概要】30号建物土間出入口部分左側(南側)で下屋部分に便槽(1227号土坑)が埋められていた。内部は浅間泥流で埋まっていた。

この部分は柱から雨落溝までの長さが120㎝と長くなっている。便槽(1227号土坑)は、この長い軒の下に位置する。桶を囲むように西側には30号建物の壁面、南と東側には大きな細長い石が土台石のように置かれていた。おそらく西・南・東側面は壁等により囲まれており、長い軒の下に位置した桶は雨水等の侵入はなかったものと思われる。

内部に桶の底部や側板が痕跡として残っていた。規模は底径68㎝、口径78㎝、高さ90㎝である。タガの痕跡が底面から高さ16㎝・25㎝・50㎝の位置に３か所残っていた。桶は土坑状に掘り込まれた中に埋められ、掘り出した土で埋められていた。

【所見】便槽が馬屋桶と別に土間入口に造られている建物は、これまでの調査では東宮遺跡１号建物、石川原遺跡９・16号建物で確認されている。これらの建物は大きな規模を持つ建物でありすべて２間以上の板間を持つ。奥の板間と手前の板間で柱間が異なっており、２つの板間を区別している。他の屋敷の主屋とは異なった役割を持つ建物と思われる。

第３項　31号建物(蔵)(第154図、PL.132・133)

25－90－W・X-11・12グリッドに位置する。

【概要・位置】８号屋敷30号建物北３ｍに近接した蔵と思われる建物である。基壇状に盛土され、その上に切石が長方形に配置されて土台石としている。切石の内側全面には、長さ５～15㎝の石が厚さ30～60㎝程大量に敷詰められていた。南側中央部分の２個の切石は特に幅が厚い。その石の南側に接して、石材の色が異なる幅の狭い切石が添えられたような状態で置かれていた。この部分は建物出入口になると思われる。切石の外側には多くのAs-A軽石が残っていた。雨落溝にAs-A軽石は残っていなかった。

【規模・構造】建物中央部分の高さは主屋である30号建物とほぼ同じである。地形の低い北側面より30㎝高く、西側より10㎝高く、東側より30㎝程高い。東西6.5m、南北5.8ｍの範囲を基壇状に整地し、地形の低い北側には高さ40㎝前後の石垣を積み、西・東・南側は土手状に積み上げ上面に平地面を確保している。その平地面に蔵の基礎部分となる切石が長方形に並べられている。切石の範囲は外形東西５ｍ、南北4.14m、内径東西4.2m、南北3.35ｍである。切石の幅は40㎝前後、厚さ20～25㎝、長さは一定ではなく20～150㎝である。出入口部分の切石の長さ100㎝、幅58㎝、厚さ28㎝である。この切石の上に蔵の土台が置かれたものと思われる。蔵の規模は、東西約4.6m(15尺)、南北約3.7m(12尺)の規模と思われる。

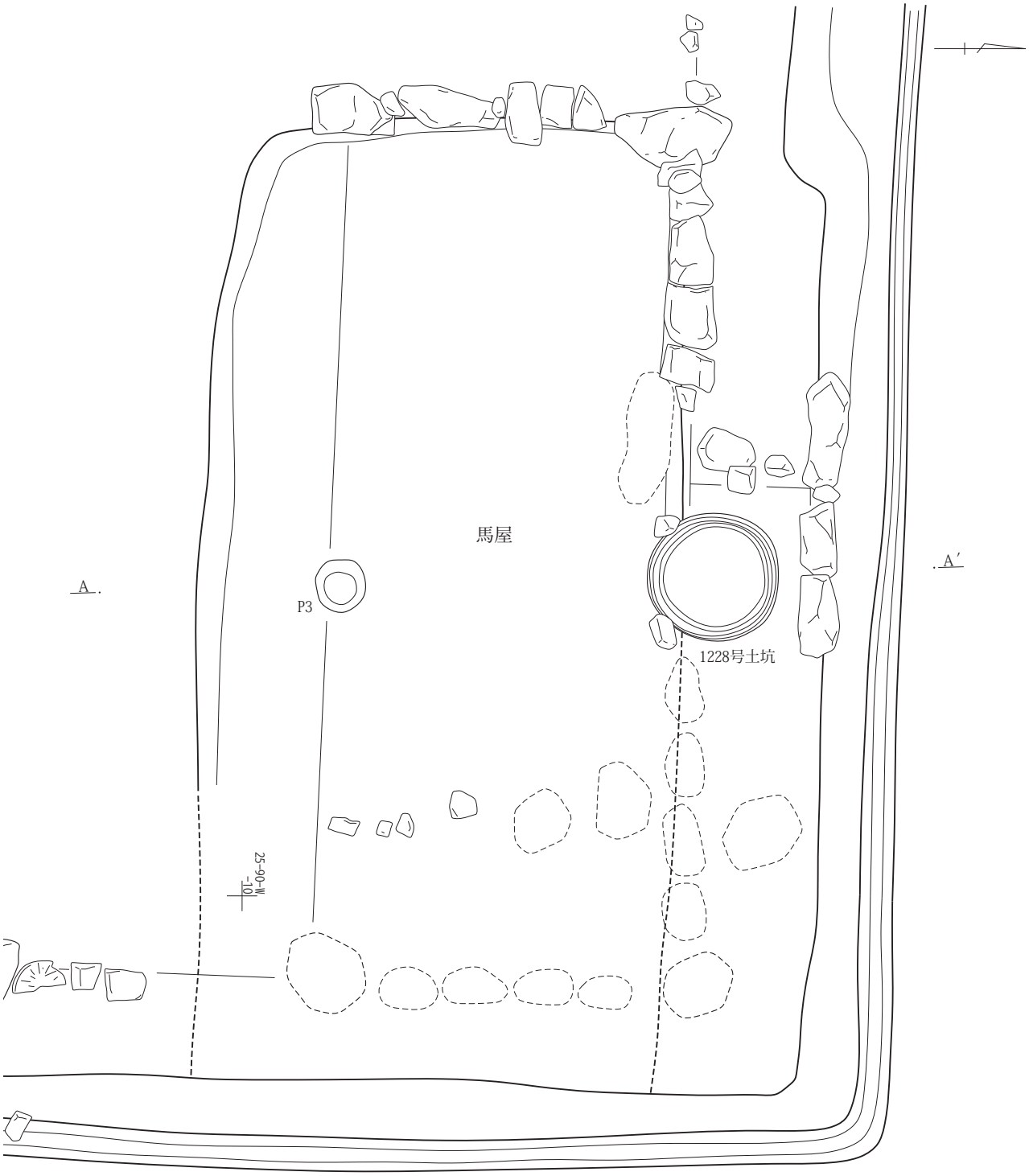
蔵の平面から雨落溝までの距離は、主屋である30号建物では出入口部分で120㎝、裏側と南側で90㎝であったが、31号建物では出入口部分で180㎝、出入口左右面約120㎝、奥側約120㎝である。通常の庇より長いことがわかる。出入口部分が120㎝でなく180㎝と広いのは、下屋等の別構造の屋根がかかっていたことによるものと思われる。

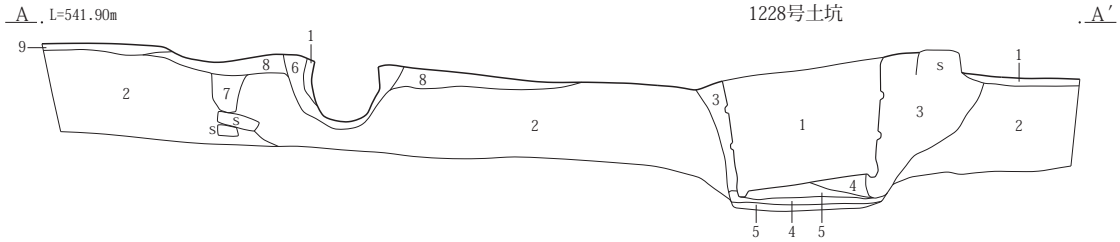
【所見】このように基壇状の上に切石が並べられている建物は、石川原遺跡では２号屋敷11号建物で確認されている。さらに切石は残っていなかったが、基壇の存在と内面に大量の石が敷かれていた建物として、２号屋敷17号建物が同じような特色を持つ蔵と考えられる。

いずれの屋敷も規模が大きく、村を代表すると思われる。３つの屋敷の蔵を比較すると、31号建物と11号建物は東西方向に建てられており、規模は11号建物が31号建物の２倍である。17号建物は南北方向に建てられており、規模は東西南北とも少し大きい。

屋根の庇部分を長くすることは、土壁に当たる雨水を少なくするためであり、さらにこれらの雨落溝は基壇状の高まりの全て外側に位置する。屋根より落ちた雨水が地上ではねかえり、土壁に当たって土壁が崩れないように工夫しているものと思われる。

蔵は厚い土壁で覆い、火事の時燃えない。厚い壁により盗難を防ぐ。一定の温度と湿度を保ち、米等穀類の保存をする等の働きがあると思われる。土台の切石から上は、大きな土台と土壁により守られるが、地下からの小動物の侵入を防ぐには、切石の土台内側の土間部分全面に小動物が撤去できない大きさの石を厚く敷くことが、



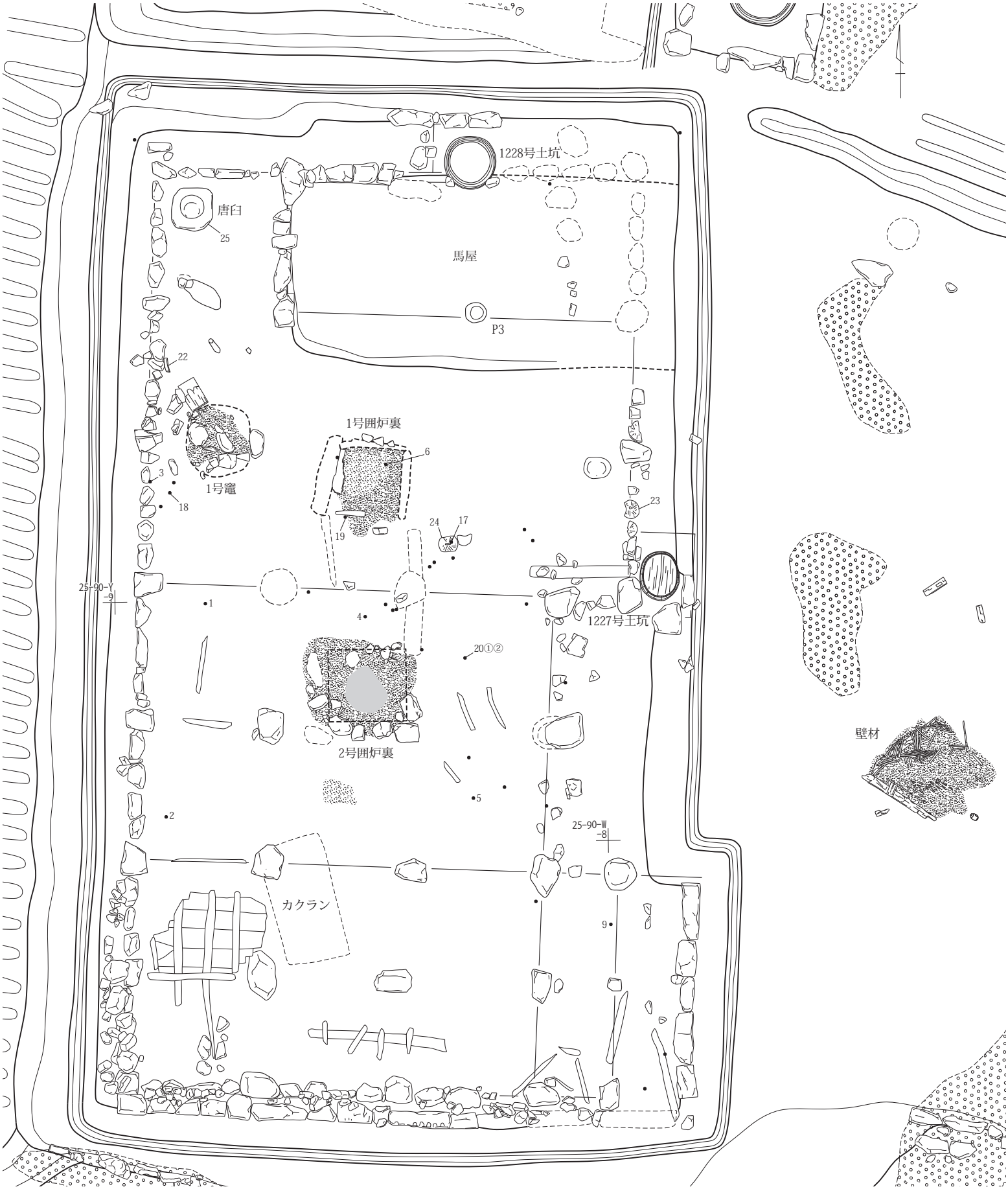


30号建物　1228号土坑（馬屋）A-A′

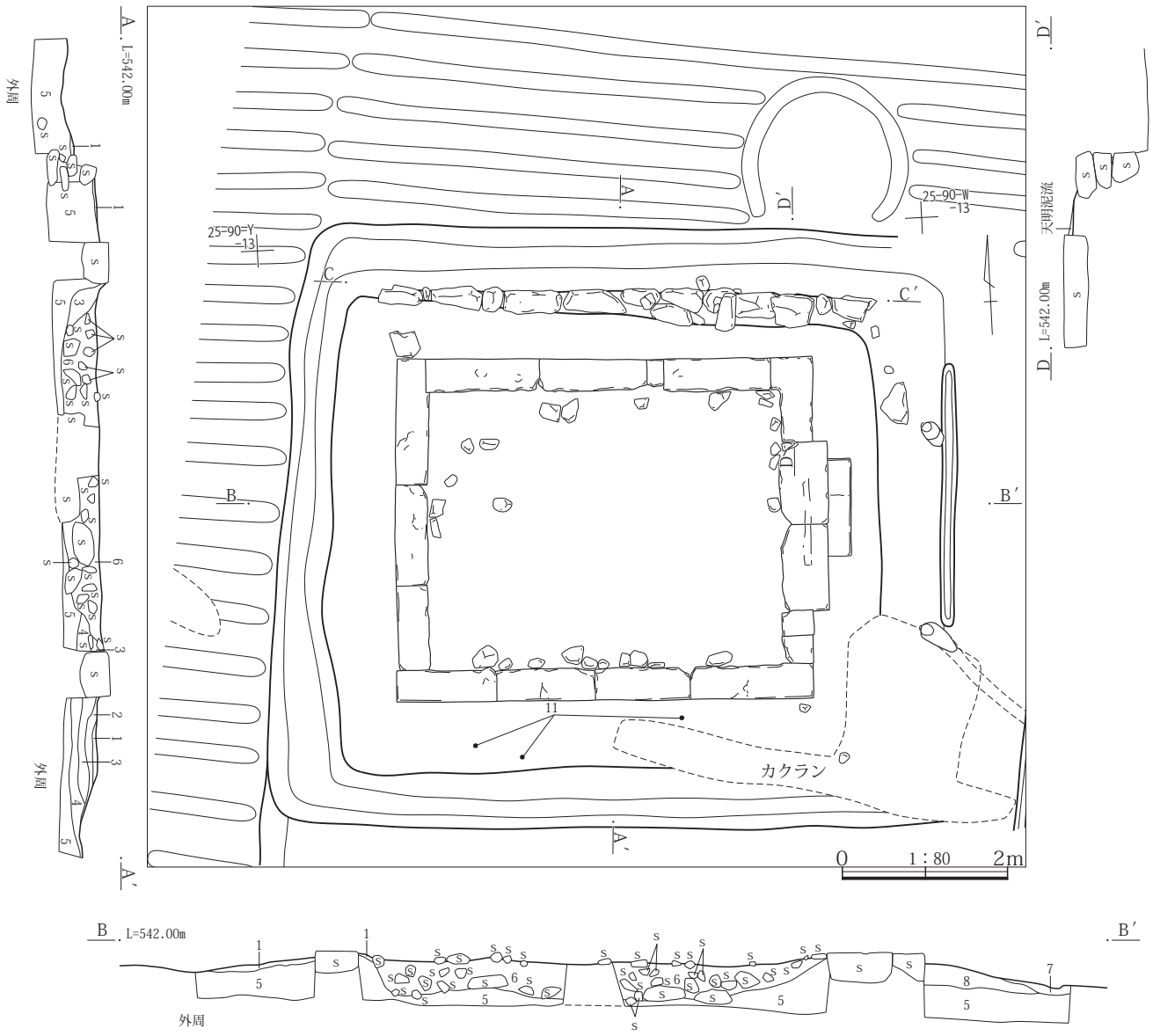
1　暗褐色土　1783（天明３）年の浅間山噴火に伴う泥流堆積物
2　暗褐色土　白色粒　褐色粒　小礫　明黄褐色ブロック含
3　暗褐色土　白色粒　褐色粒多含　小礫　炭化物僅　埋戻し土
4　橙色土　　白色粒　褐色粒僅　鉄分付着
5　暗褐色土　白色粒　褐色粒僅　小礫　炭化粒僅
6　褐灰色土　白色粒　褐色粒僅　鉄分付着
7　橙色土　白色粒　褐色粒僅　焼土ブロック含　鉄分付着
8　橙色土　白色粒　褐色粒　鉄分付着下面に灰層
9　暗褐色土　白色粒　褐色粒僅　小礫　踏みしめられ固い　床

0　1：40　1m

第152図　８区８号屋敷　30号建物馬屋



第153図　８区８号屋敷　30号建物遺物出土



31号建物　A-A′・B-B′

1　暗褐色土　焼土粒・炭化物を含む　踏みしめられて硬い層　主屋との境の通路か
2　暗褐色土　白色粒と褐色粒含む　踏みしめられて硬い　下面に台石に加工した削りが１㎝程水平に堆積
　建物出入口
3　橙色土　焼土粒わずかに含む。踏みしめられて硬い
4　暗褐色土　大小の礫を多量に詰めた礫層　厚さ40～70㎝
5　暗褐色土　白色粒少含　褐色粒・橙色粒僅含
6　暗褐色土　一抱え程の礫を下面上面に拳大の礫を詰めた礫層
7　褐灰色土　白色粒僅　小礫鉄分付着多　踏みしめ硬い
8　暗褐色土　白色粒・褐色粒僅　踏みしめ硬い

第154図　８区８号屋敷　31号建物

最も効果的であると思われる。31号建物(蔵)の土台切石内部に厚く敷き詰められた石は、地表面より大部分が高い位置となっている。湿気を防ぐ意味でも大きな効果が発揮されたと思われる。

第４項　32号建物(肥溜)(1208号土坑･1209号土坑)(第155図、PL.134)

25-90-Ｕ・Ｖ-11・12グリッドに位置する。

【概要・位置】８号屋敷30号建物北東コーナー部分に位置する。桶が２個埋められ、その桶のまわりを土台石と思われる石で長方形に囲んでいる。桶は浅間泥流で埋まっていた。調査担当は肥溜として調査した。桶の埋められている地表面の高さは周辺とほぼ同じ高さであり、周辺部より高く整地してはいないようである。As-A軽石が地形的に低い東側に残っていた。

【規模・構造】土台の石配列から計測すると、東西210㎝(約７尺)、南北310㎝（約10尺)の土台建物であったと思われる。桶は痕跡を残すが、板等の部材は全く残っていなかった。1208号土坑の桶は底径94㎝、口径105㎝、深さ82㎝、1209号土坑の桶は底径94㎝、口径105㎝、深さ92㎝でほぼ同じ大きさである。タガの痕跡が底面から８㎝・20㎝・70㎝の位置に３か所残っていた。桶は地山を掘り込みそこに桶を埋め、掘り出した土で埋めているようである。

第５項　34号建物(第156図、PL.135)

25-90-Ｓ～Ｕ-８～10グリッドに位置する。

【概要・位置・規模】８号屋敷北東コーナー部分の前庭北東部に位置し、東側は21号道と接している。建物北側は雨水等の排水路を境に７号屋敷13号建物である。

８号屋敷30号建物の付属建物であると思われる。

屋敷の中で最も地形が低い場所であり、屋敷内の雨水がこの建物北側の配水溝に集まったものと思われる。そのために34号建物は､北側の排水溝との境に石垣を積み、南側にも石垣を積んで東側は土手としている。このように建物を建てる場所を基壇状に高く盛土している。盛土の範囲は東西６ｍ、南北4.6ｍである。その基壇状の上に、土台石を並べて建物が建てられていたものと思われる。並べられた土台石の中心部を計測すると、東西方向５ｍ、南北方向3.1ｍとなる。中央部に南北方向に土台が並べられており、西側と東側の２つの土間に区切られていたことが考えられる。

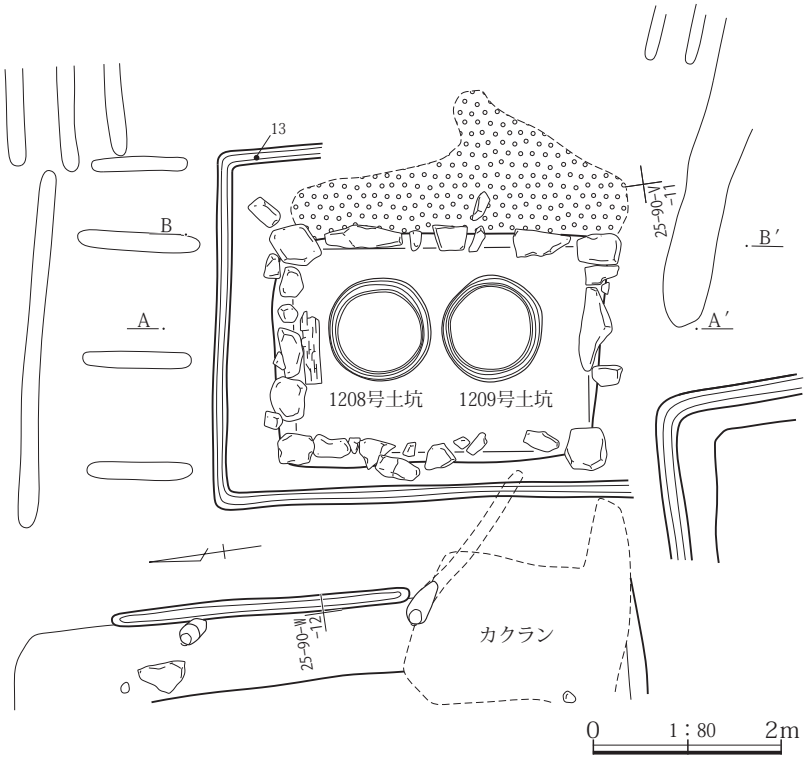
２つに区切られた建物内土間部分全面に、橙色のロームに似た粘性の土が６㎝前後の厚さで、さらにその下には、10㎝前後の厚さで暗褐色土が貼られた２層からなる貼床となっていた。その下の土層は地山の土と橙色のロームに似た土層状に盛られている。土間に貼られている橙色のロームに似た粘性の土は、土台石手前部分まで褐色土が直線的に貼られているので、建物の敷居の内側に厚く貼ったものと思われる。橙色の土の表面は固く踏み固められており、光沢をもつようである。出入口は主屋のある西側である。西側の土間部分に橙色土の固く踏み固められた土間の土は残っていたが、土台下にあったであろう土台石は残っていなかった。おそらく奥の土間部分は建設当時の建物であったが、手前の土間部分は出入口の土台等も撤去されていたのではないだろうか。このように土間面に褐色土を張り、踏み固められたような建物は、東宮遺跡30号建物(4.65ｍ×3.68ｍの土台建物で、褐色土の固く踏み固められた土間部分の規模は、南側の2.3ｍ×3.68ｍの範囲)、西宮遺跡３号建物(4.65ｍ×3.06ｍの掘立柱建物で、褐色土の固く踏み固められた土間部分の規模は、北側の2.3ｍ×3.06ｍの範囲)でも確認されている。いずれも大きな屋敷の中の付属建物である。どのような目的で造られたのか、現段階では分からない。今後調査を進める中で確認していきたい。

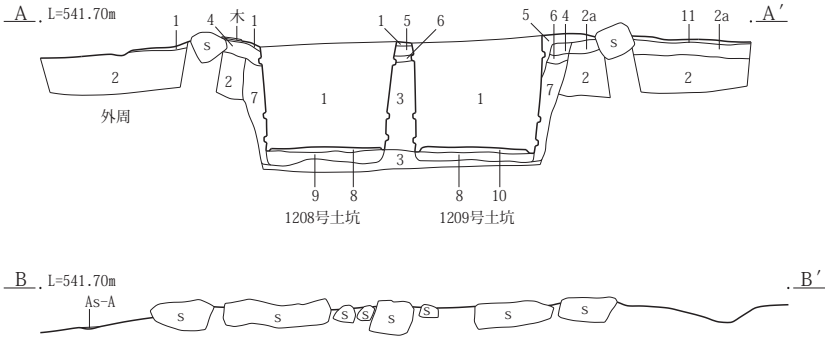
第６項　洗い場(1340号土坑・1486号土坑)(第157～159図、PL.136)

25－90－Ｖ-５・６グリッドに位置する。

【概要・位置】生活用水を確保するために、ほとんどの屋敷には洗い場が造られている。しかし、８号屋敷では、これまで確認されてきたような水路の隣を長方形に掘り窪め、そこに水路から水を引くかあるいは、地下からの湧水を溜めて洗い場(水場)としたような施設(洗い場の上は屋根等があったとしても開放的で石や土等で覆われていない)は確認されていない。８号屋敷は集落を代表するような大きな屋敷であり、他の家の洗い場(水場)を利用していたとは考えられないので、これまでとは別な遺構の洗い場(水場)が存在していたのであろうか。

屋敷南東コーナー部分(53号溝上流側)に天明Ａ軽石





32号建物　A-A′
1　暗褐色土　白色粒　褐色粒　鉄分付着多
2　暗褐色土　白色粒　褐色粒　小礫
3　にぶい褐色土　径３～５㎝の礫を含む　礫層
4　暗褐色土　褐色粒　小礫　炭化粒僅
5　灰褐色土　白色粒　炭化粒　鉄分付着
6　橙色土　粘性強い
7　暗褐色土　褐色粒　白色粒　小礫含　埋戻し土
8　橙色土　炭化物・焼土粒僅　鉄分付着
9　灰色土　砂粒土層
10　黒褐色土　褐色粒・炭化粒僅　小礫

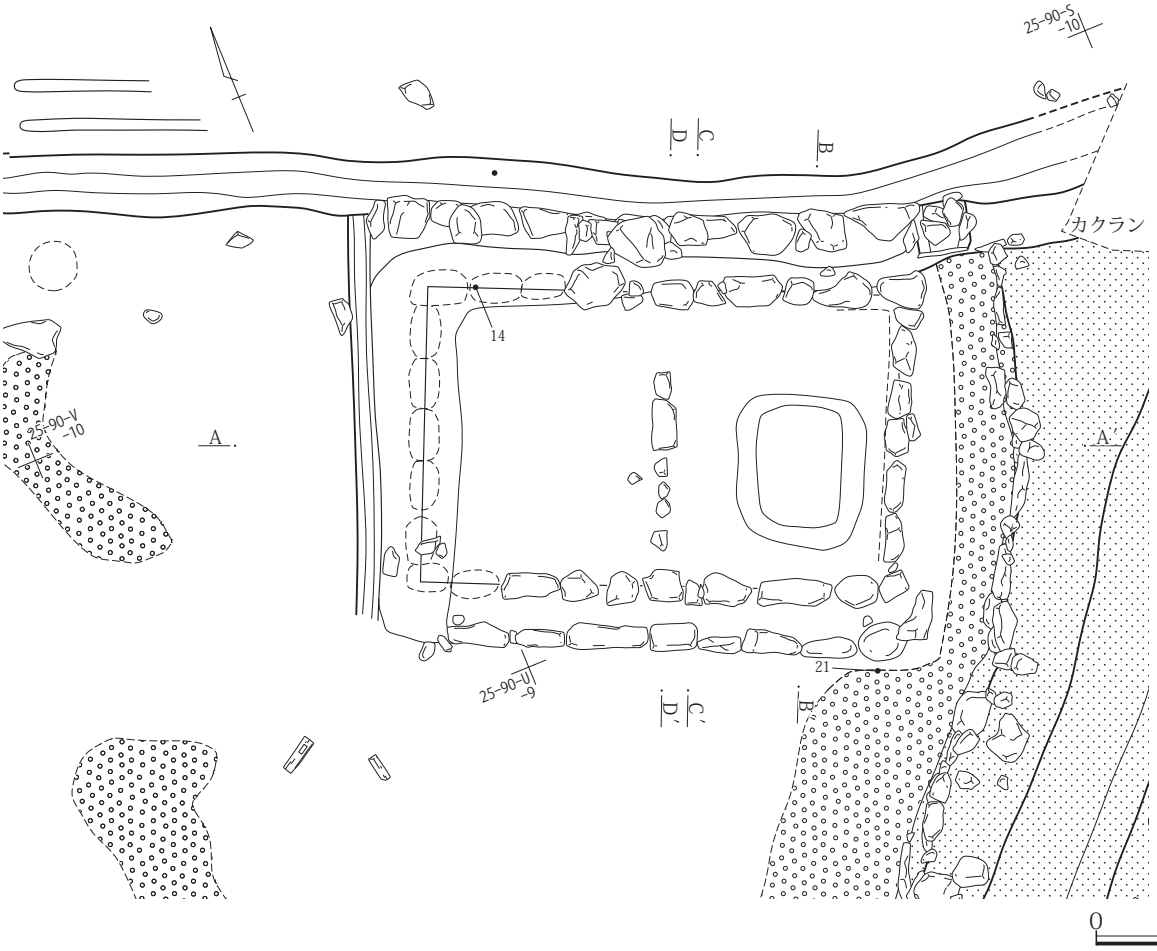
0　1：60　2m

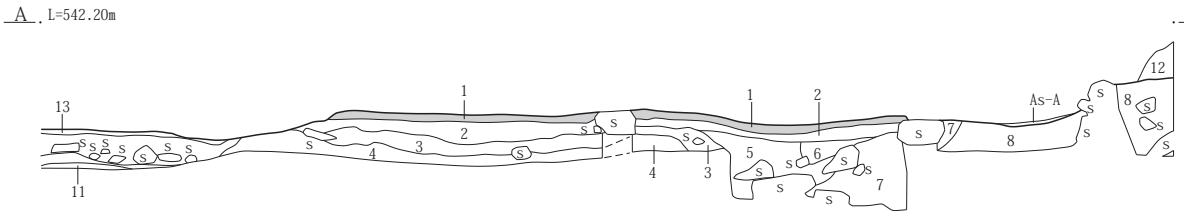
第155図　８区８号屋敷　32号建物

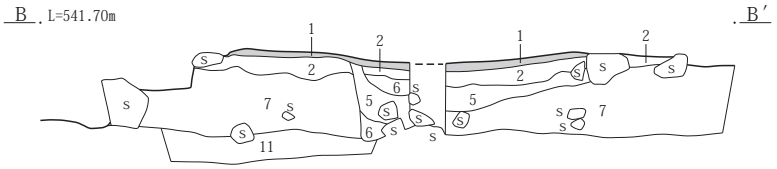
が、長さ約82㎝、幅約60㎝の範囲で８の字状に浅く堆積していた。低く埋没していた部分であったと思われる。さらにその北側に約1.3m四方の範囲で、地表面とやや異なる表土面が確認された。

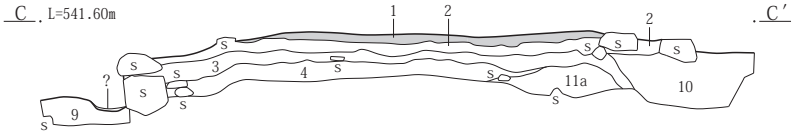
南側のAs-A軽石が堆積していた下に掘られていた土坑が1340号土坑であり、北側の方形の表面とやや異なる表土面の下に掘られていた土坑が1486号土坑である。この二つの土坑は天明泥流が押し寄せた段階では、大部分が埋まっていたものと思われる。２つの土坑は４壁面を板等により囲まれており、1340号土坑では底部にも板が敷かれていたようである。天井部に板が存在していたか不明であるが、存在していたなら、底板・側板・天井板に囲まれた箱状の空間が造られた遺構であった可能性が指摘できそうである。天井部の上には土が載せられていたかもしれない。箱状の空間に、隣の53号溝からの湧水が溜り、洗い場としていたのではないだろうか。覆土の観察から1340号土坑と1486号土坑は重複しており、1340号土坑は、1486号土坑が埋められた後で、新たに造られた土坑と思われる。

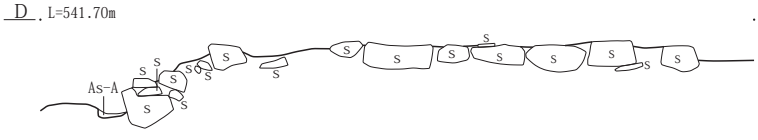
このように洗い場に関連した遺構であるなら、同じように板等により囲まれた洗い場と思われる遺構が確認されているのは、１号屋敷の入り口に掘られていた、１号木枠として調査された遺構がある。この遺構は天井に木製の蓋が存在していた。











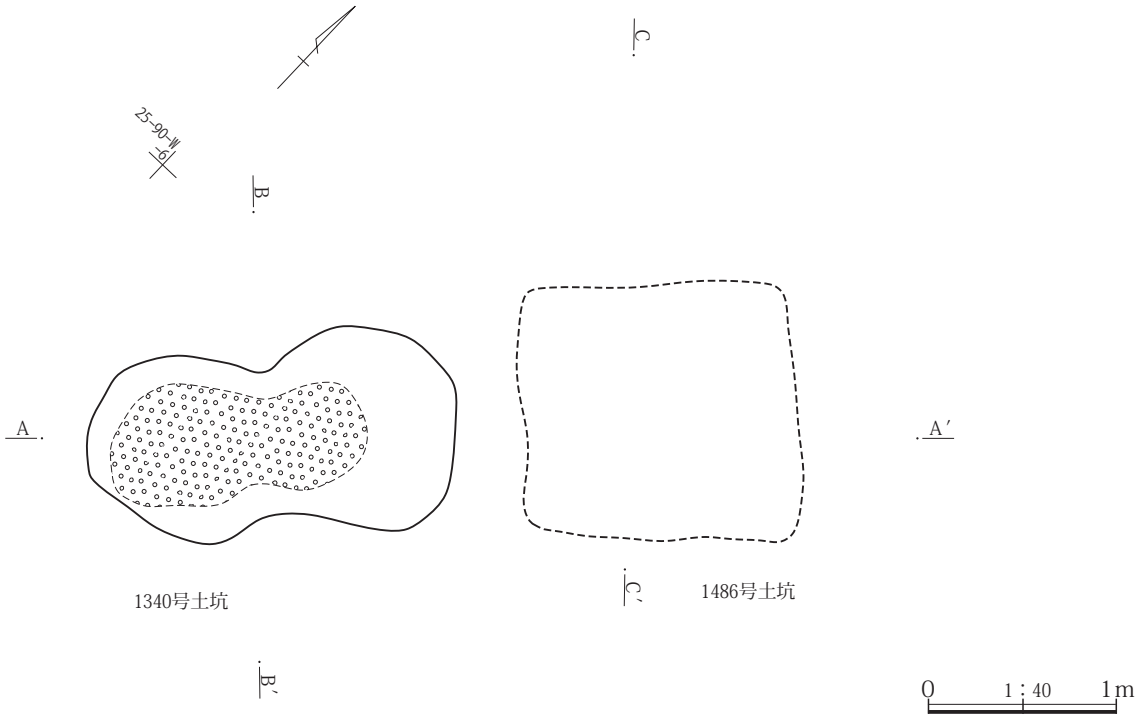
0　1：60　2m

34号建物　A-A′～C-C′

1　橙色土　白色粒　褐色粒　鉄分付着　東側２層に分層貼床　踏みしめ硬い
2　暗褐色土　褐色粒　褐色ブロック多く含　鉄分付着　やわらか
3　暗褐色土　白色粒僅　褐色粒僅　鉄分付着　やわらか
4　暗褐色土　白色粒　褐色粒　小礫　鉄分付着
5　明黄褐色土　白色粒　鉄分付着　一抱え程石　やわらか　床下土坑？
6　暗褐色土　褐色粒　小礫　炭化物僅　やわらか　床下土坑？
7　暗褐色土　炭化物僅　小礫　褐色ブロック僅
7a　暗褐色土　炭化物僅　小礫　褐色ブロック僅　拳大以上の礫多含
8　暗褐色土　白色粒僅　褐色粒僅　小礫多含　鉄分付着
9　黒褐色土　白色粒少含　褐色粒僅　橙色粒僅　小礫
10　暗褐色土　白色粒　褐色粒　小礫　鉄分付着　　やわらか
11　明黄褐色土　砂礫層
11a　明黄褐色土　砂粒多含　礫僅
12　暗褐色土　1783(天明３)年の浅間山噴火に伴う泥流堆積物
13　灰白色土　As-A粒多含　鉄分付着
14　褐灰色土　多量の礫含径20～10cm　白色粒僅
15　暗褐色土　白色粒　褐色粒　小礫　鉄分付着　踏みしめ硬い

第156図　８区８号屋敷　34号建物

洗い場１面



第157図　８区８号屋敷　洗い場１

【構造・規模】1340号土坑は53号溝西約１ｍの位置にあり、1486号土坑と重複している。1340号土坑は1486号土坑の北東側を埋め、南西側を掘り込み、一部1486号土坑の上に新たに造られている。1486号土坑より新しい土坑である。

土坑底面の標高は541.72ｍで、53号溝底面標高は542.49ｍであるので、53号溝より80㎝前後低い。53号溝から1486号土坑との間は砂礫層となっているため、1340号土坑には53号溝の水が湧水として多く貯まっていたものと思われる。1340号土坑は、断面図観察から東西南北の４壁面に板材と思われる木材が存在していたことがわかる。おそらく、４面板に囲まれた貯水槽としての機能を持っていたものと思われる。平断面図の記録から規模は南北1.75m、東西0.75m、深さ0.60mであったと思われる。1486号土坑より幅が少し狭くなっている。天井部に木製の蓋が存在した痕跡は認められない。

1486号土坑は、1340号土坑より古い土坑である。土坑底面の標高は541.55ｍで、53号溝底面標高は542.49ｍであるので、53号溝より90㎝前後低い。53号溝から1486号土坑との間は砂礫層となっているために、1486号土坑には53号溝の水が湧水として多く貯まっていたものと思われる。1486号土坑は断面図観察から、壁面に板材と思われる木材が存在していたことがわかる。さらに、壁面に沿って底面に横板を抑えたであろう杭を打ち込んだと思われる小穴が３か所写真に記録されている。おそらく、４面板に囲まれた貯水槽としての機能を持っていたと思われる。平断面図の記録から規模は南北1.7m、東西1.1m、深さ0.65mであったと思われる。

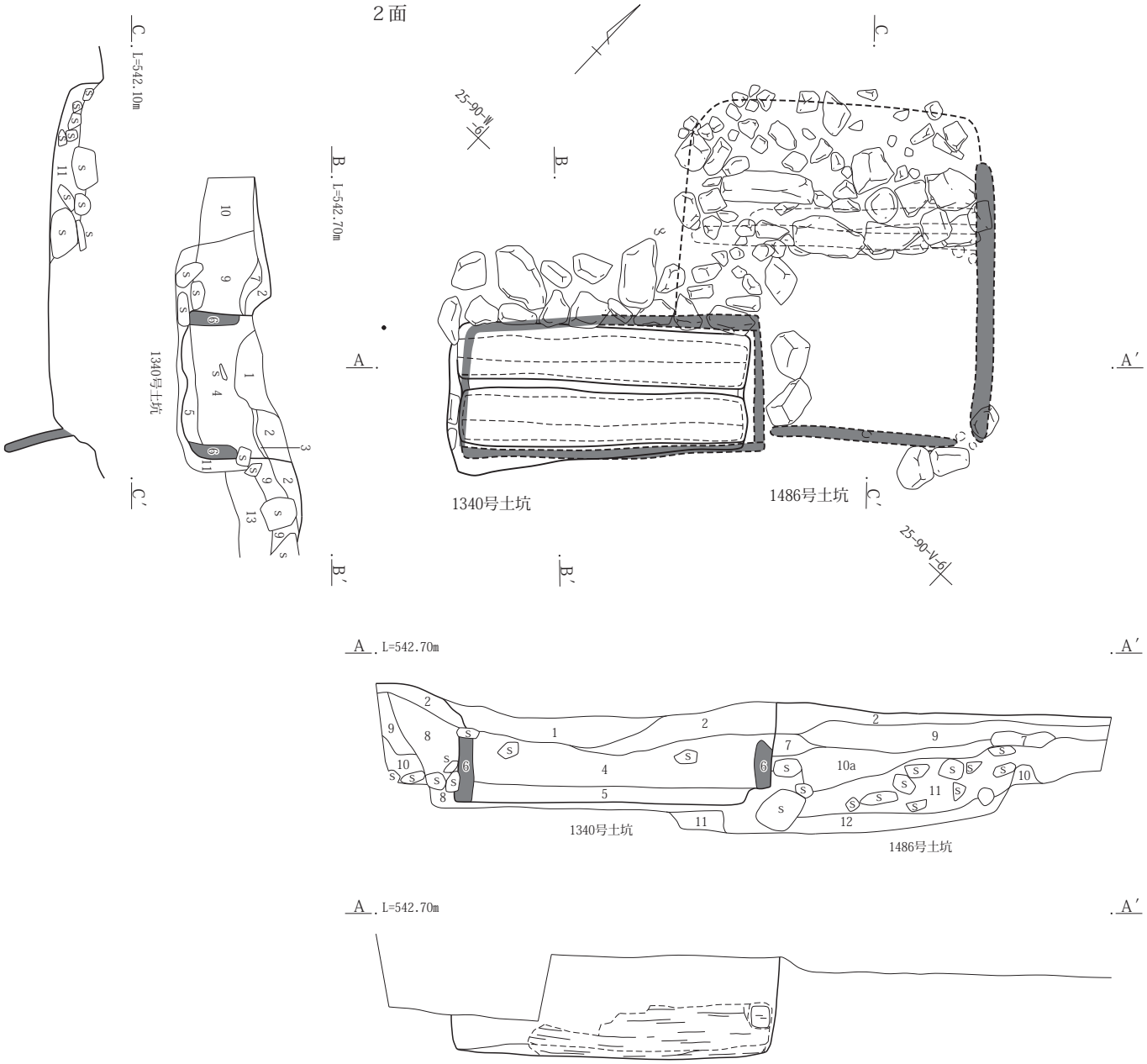
【所見】２つの土坑は53号溝から水を確保し、生活用水として利用するための施設であったと思われる。しかし、土坑の脇に使われている側板の存在・底板の存在等があり、他の洗い場で見られる大きな石で囲まれる様子がなく、さらに作業用平石等の存在も確認されていない。どのように利用したのかわからない。

第７項　石橋(53号溝５号石橋)（第160図、PL.137）

25-90-U-６グリッドに位置する。

【概要・位置】洗い場(1340号土坑・1486号土坑)北東約３ｍの場所に、53号溝を渡って８号屋敷に入るための石橋が架けられていた。この石橋を境として、21号道の西側を流れる53号溝は21号道を横切り、21号道の東側に流路を変更している。

石橋の天井石は、西側８号屋敷前庭部分より80㎝前後

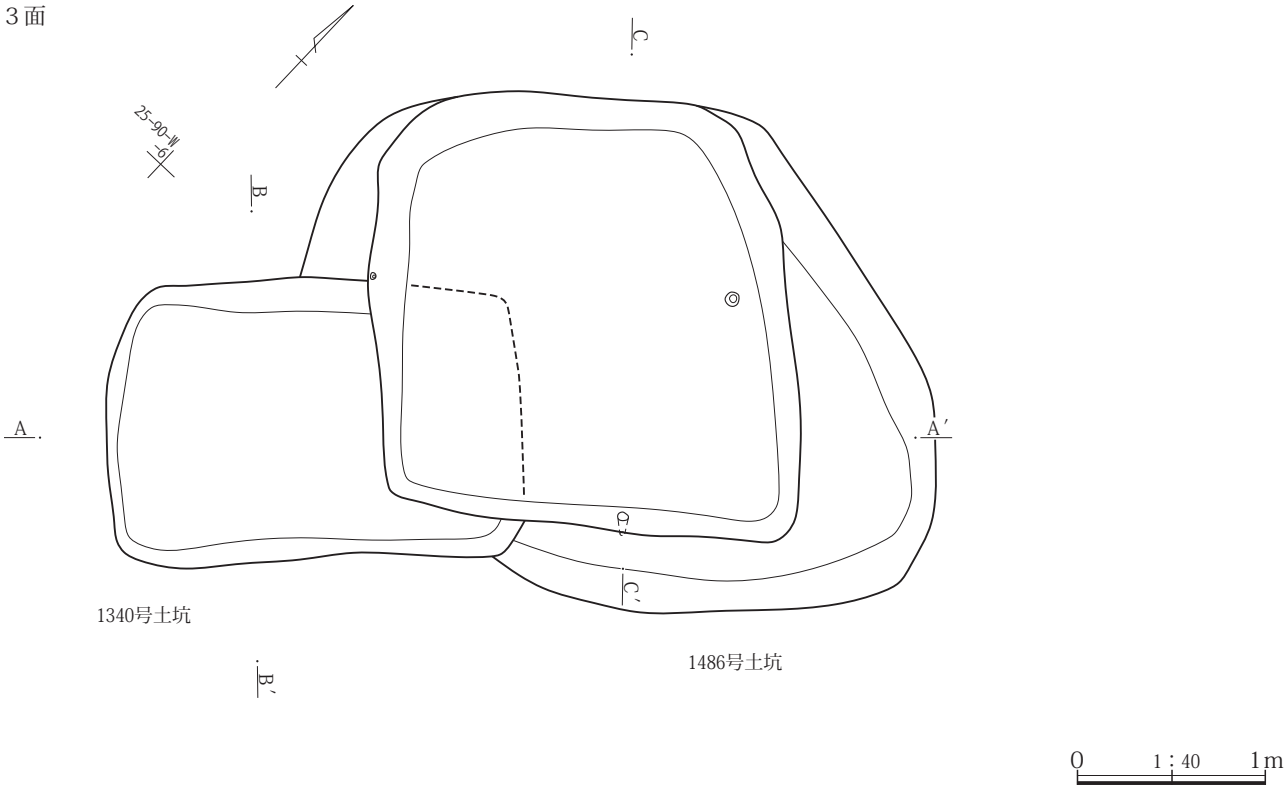


８号屋敷　洗い場A-A′～C-C′

1　灰白色土　　As-A層　窪地へのＡ軽石投棄？
2　暗褐色土　白色粒僅　褐色粒僅　炭化粒僅　礫僅　鉄分付着　上面地表面
3　黒褐色土　白色粒・褐色粒僅　小礫少含
4　暗褐色土　白色粒・褐色粒僅　炭化粒僅　大き目礫少含　鉄分付着
5　明黄褐色土　砂粒層　鉄分付着
6　木材腐食による空洞
7　浅黄橙色土　径１cm位白色粒含　砂粒含
8　褐色土　多量の礫含　径５cm以上有　裏込めか？
9　褐色土　白色粒僅　褐色粒僅　礫僅
10　黒褐色土　白色粒少含　褐色粒少含　径５cm少含　明褐色ブロック僅含
10a　黒褐色土　白色粒少含　褐色粒少含　橙色粒少含む
11　にぶい褐色土　多量の礫含　径10cm以上有
12　灰色土　小礫含む砂礫層
13　明褐色土　砂礫層

0　1：40　1m

第158図　８区８号屋敷　洗い場２



第159図　８区８号屋敷　洗い場３

高い位置になっている。21号道から高い４号石橋を渡り、８号屋敷の低い庭に繋がっている。

【構造・規模】石橋は溝の側石を１～２段積み上げた上に天井平石を載せている。天井石は長さ120㎝、幅70㎝、厚さ14㎝の大きな石と、長さ90㎝、幅30㎝の小さな石の２個が架けられていた。天井石下溝幅38㎝、深さ35㎝である。

第８項　出土遺物（第389・390・561図、PL.330・331）

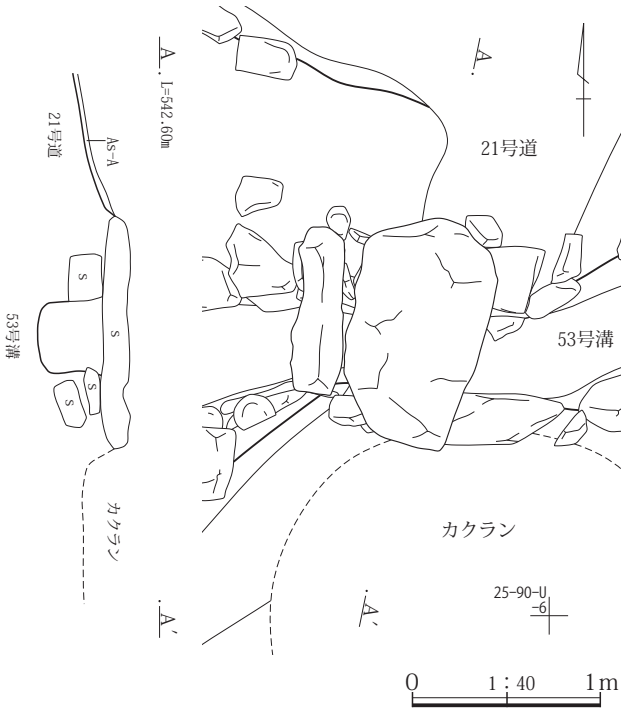
８号屋敷の主屋である30号建物内部から、建築部材や木製品は出土していない。30号建物東側の前庭部分から土壁が柱・貫・縦横木舞とともに出土している。その脇から瀬戸・美濃陶器水注が出土している。前庭東にある21号道東側の畑中から建材や生活用具である漆碗（Ｗ１）、しゃもじ（Ｗ２）、踏鍬（Ｗ３）等が出土している。これら漂着物は９号屋敷に属する可能性もあるが、８号屋敷の物としたが７区漂着物として掲載した。

30号建物１号囲炉裏の中から肥前磁器仏飯器と南皮枠木付近から火打鉄が出土している。

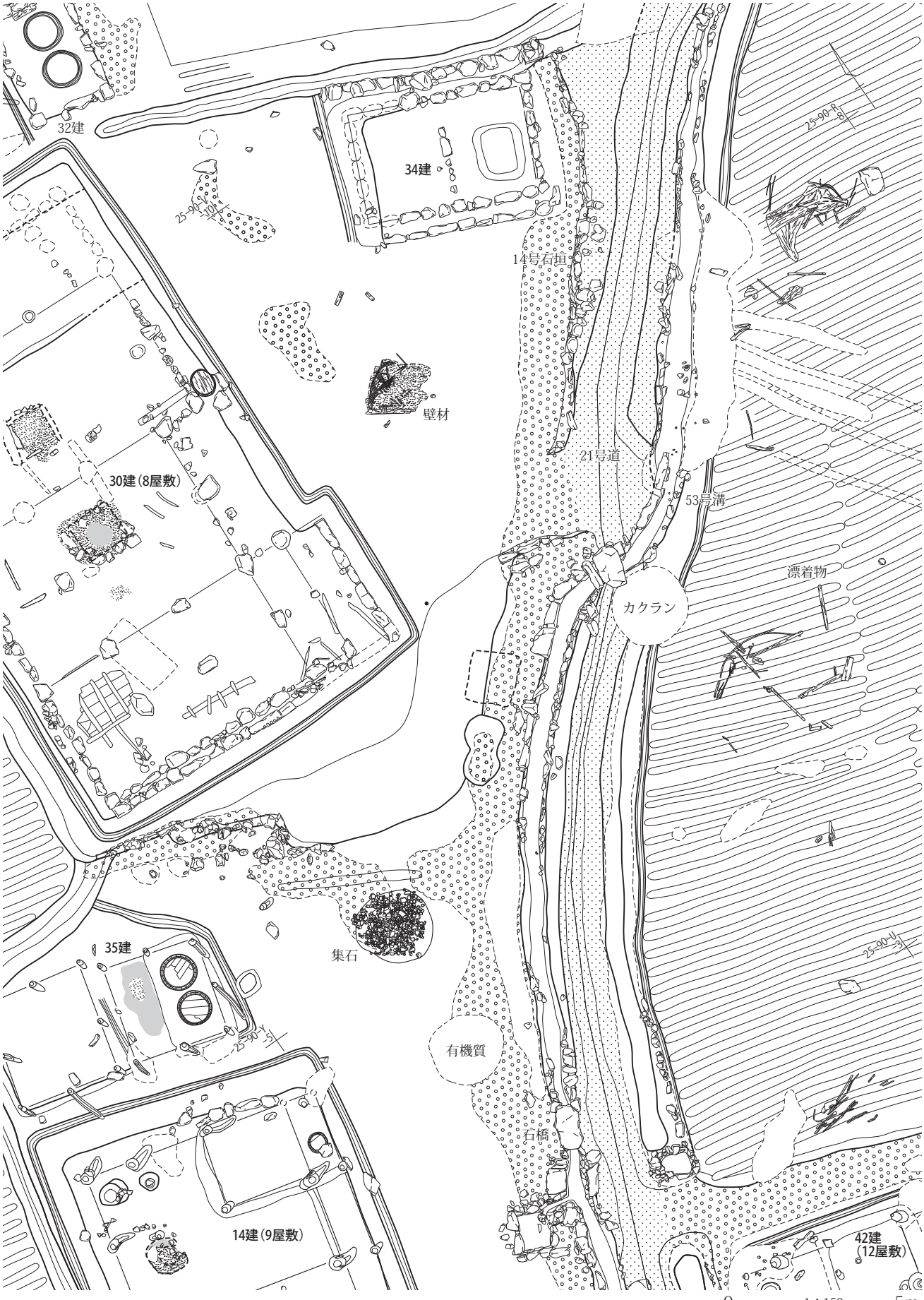
建物出入口に近い土台の下に並べられて、土台石の中に破損している石臼が２個使われている。当時から破損した石臼は転用して使われていた。

建物北西コーナー部分に唐臼が設置されていた。

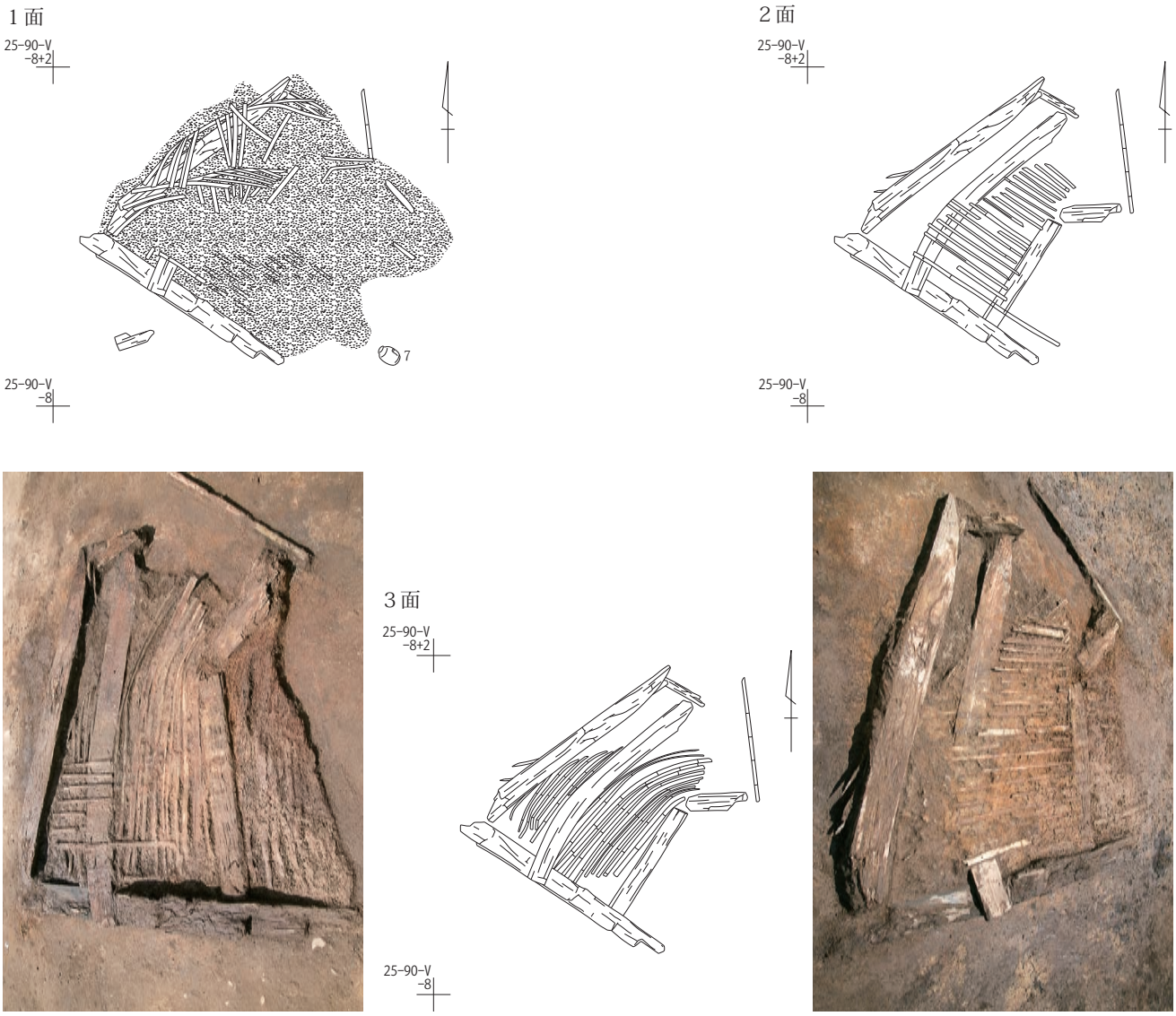
銭が２号囲炉裏東側から重なった状態で出土している。



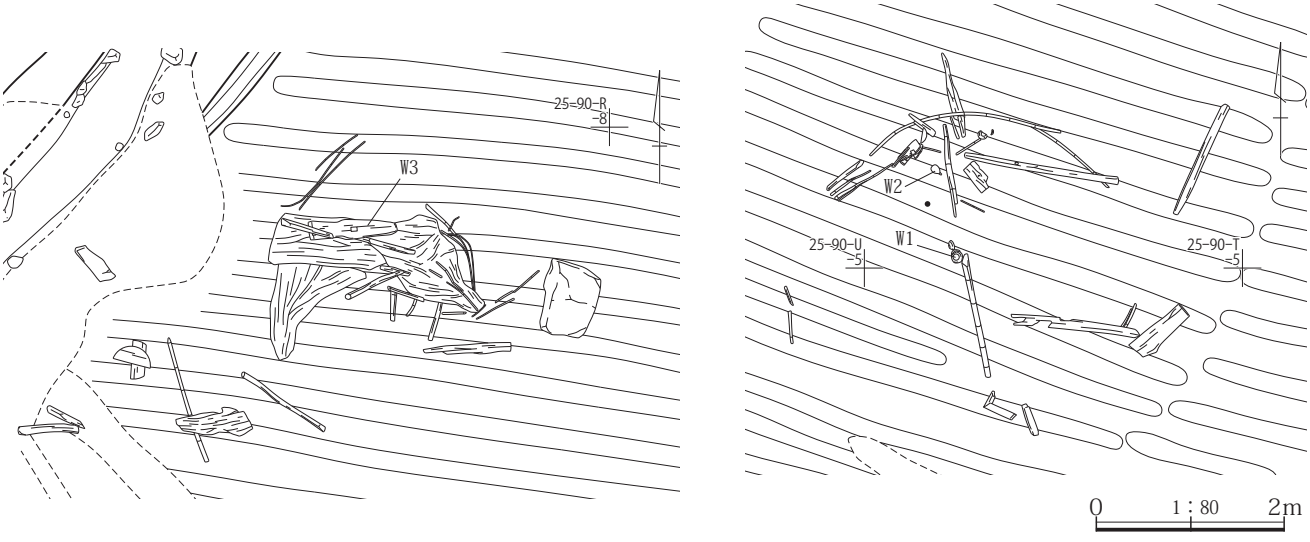
第160図　８区８号屋敷　石橋（53号溝５号石橋）



第161図　８区８号屋敷壁材・７区漂着物



８区30号建物前庭出土壁材



第162図　８区30号建物前庭出土壁材、７区漂着物

第９節　９号屋敷跡(第163～171・180図、PL.139～147)

第１項　９号屋敷概要
第２項　14号建物　(１)竈　(２)１号竈
(３)旧２号竈　(４)旧３号竈　(５)１号囲炉裏
(６)焼土　(７)唐臼　(８)馬屋
(９)馬屋桶(1231号土坑)　(10)土間　(11)土座
(12)土座２(想定)と東側の土間(想定)
第３項　35号建物(９号屋敷・1229号土坑・1230号土坑)
(１)35－１号建物　(２)35－２号建物
第４項　洗い場　(１)作業用平石
第５項　石橋(53号溝４号石橋)
第６項　集石
第７項　その他の遺構
第８項　出土遺物

第１項　９号屋敷跡概要(７区)

９号屋敷跡は村の南西部分に位置する。屋敷の東側は幹線道である21号道があり、道の西脇には53号溝がある。道を挟んだ反対側には12号屋敷がある。９号屋敷は、主屋である14号建物と主屋の北に接して建てられている35号建物である。屋敷の東側に庭がある。53号溝に接して洗い場が造られており、洗い場の北東側に53号溝を渡るための石橋がある。この石橋から主屋である14号建物の出入口までは最短距離の位置である。屋敷・庭・道・水路、屋敷周辺の畑との高低差は以下である。14号建物の土間標高543.3m(南側の土間標高543.45m)、西側の庭543.0m、21号道面543.0m、53号溝底部542.6m。建物土間の高さは前庭より0.3m、溝底部より0.7m高く造成されている。南側の畑面543.6mで、南側の土間標高543.45mより0.15m程高い。そこで0.2m前後掘り込んで土手状の段差を造り、水平な宅地面を造成し、南の畑からの雨水の侵入を防いでいる。南側の畑との境にできた段差の一部に石を１段並べている。

As-A軽石は屋敷建物周辺にほとんど残っていなかった。21号道道路面・屋敷前庭で53号溝に沿った部分に残っていた。

第２項　14号建物(第164～168図、PL.139～145)

25・26-90・81-Ｘ～Ｂ－１～５グリッドに位置する。

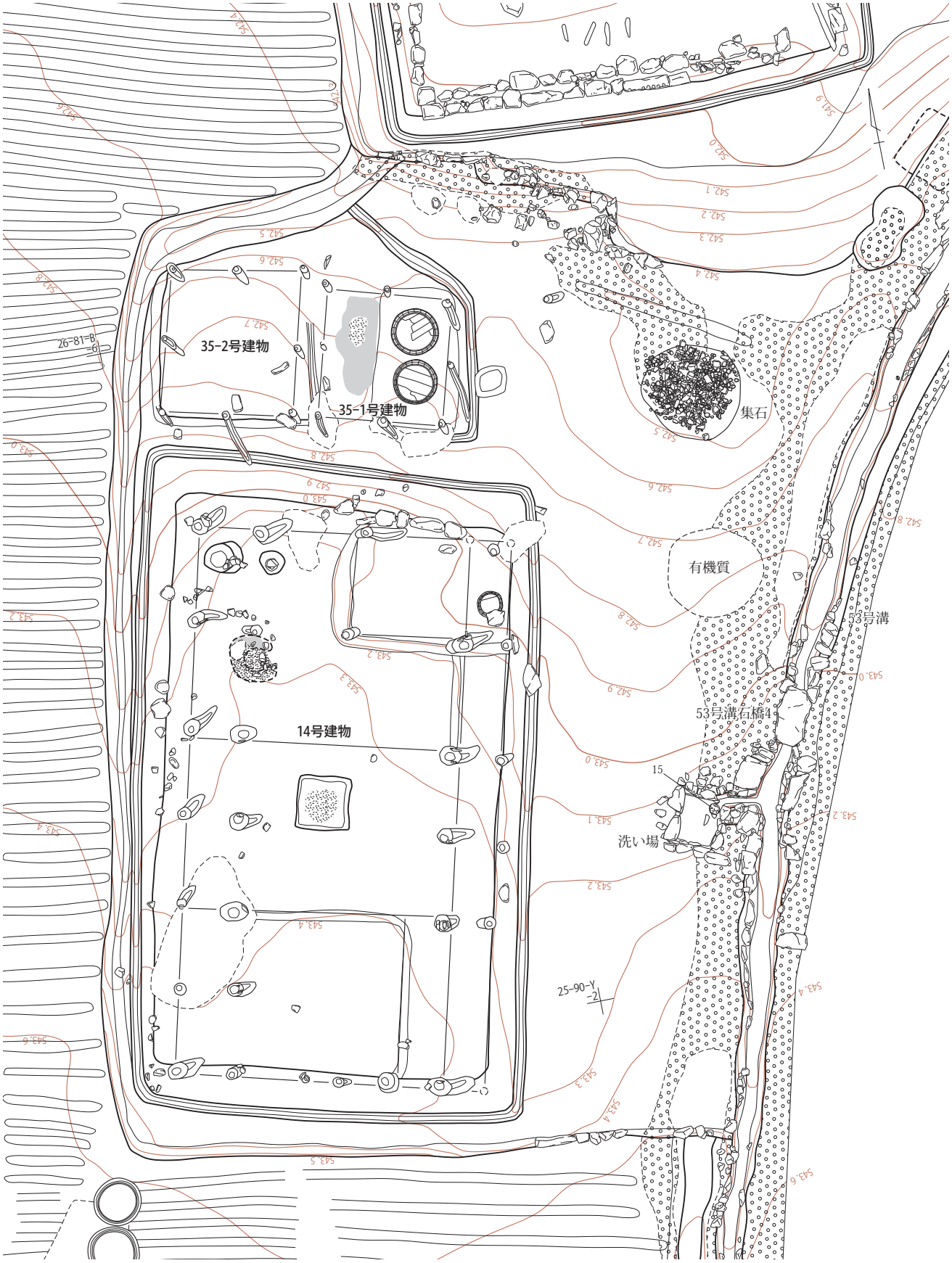
【概要・規模】屋敷の主屋である14号建物は掘立柱建物である。全体に残りが悪く、建物に関する建築部材や床面に敷かれたであろう筵等は残っていなかった。これまで調査した掘立柱建物の中では、上屋柱と下屋柱と思われる柱を持つ大きな建物であり、土間の他に２間が造られていた。規模の近い掘立柱建物である21号建物では、土間＋土座＋板間となっていた。土座部分にはネコ、板間部分には大引・根太・床板が残っており、多くの土台石が残っていた。14号建物は21号建物と規模や配置が似ているが、土座部分にネコは残っていない。さらに、板間部分に土台石が全く残っていない。21号建物同様な土間＋土座＋板間とは異なった間取りであったと思われる。おそらく、中央の部屋は他の調査例から土座であったと思われるが、南側の部屋を板間と想定するには無理がある。

南側の部屋は北側の土座より15㎝前後高く整地されている。また、表側には21号建物同様に土間とは別な土間が造られている。この部屋も土座であった可能性があるが、中央の土座とは異なり、格式の高い部屋として考えられていた部屋であったと考えたい。

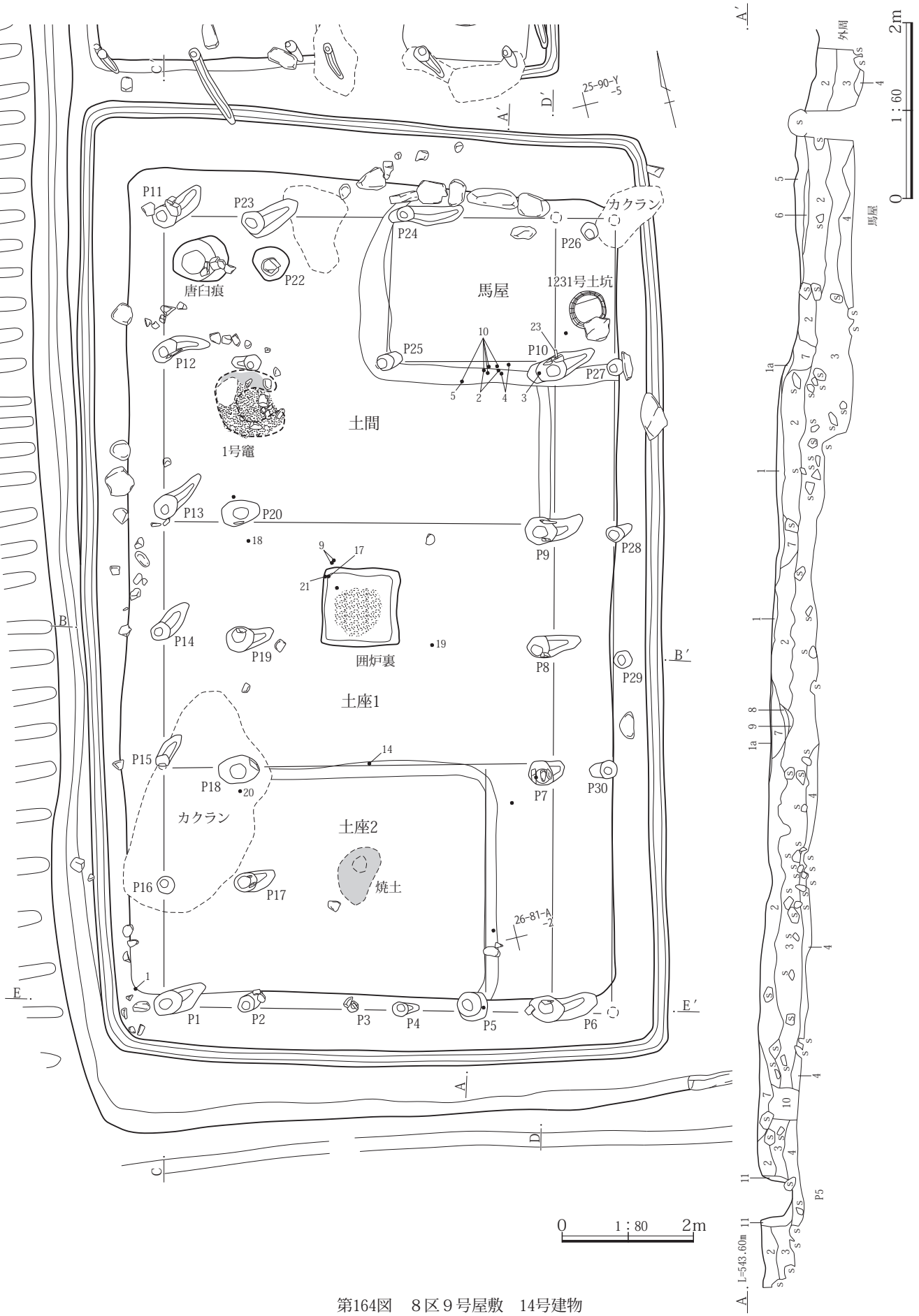
中央を土座１、南を土座２と呼称する。この建物は以下説明するが、天明泥流段階では既に主屋として使われてはいなかったようである。土間＋土座＋板間に先行する間取り例ではないだろうか。

南北方向に長い建物であり、棟行方向(南北)約12m(６間半)、奥行方向(東西)約5.80m(４間)、出入口部分である東側に幅約0.9mの下屋を持つ建物と思われる。これまでの調査から、北側約4.6mが土間、建物中央部で囲炉裏のある間口約3.7m、奥行約5.8mの部屋は、ネコ等が敷かれていたと思われる土座１。土座南側で土座部分より約15㎝高い間口約3.7m、奥行約4.9mの部屋が土座２、板間の東側南北幅約3.7m、東西幅約0.9mの部分が土座２に伴う土間と考えられる。

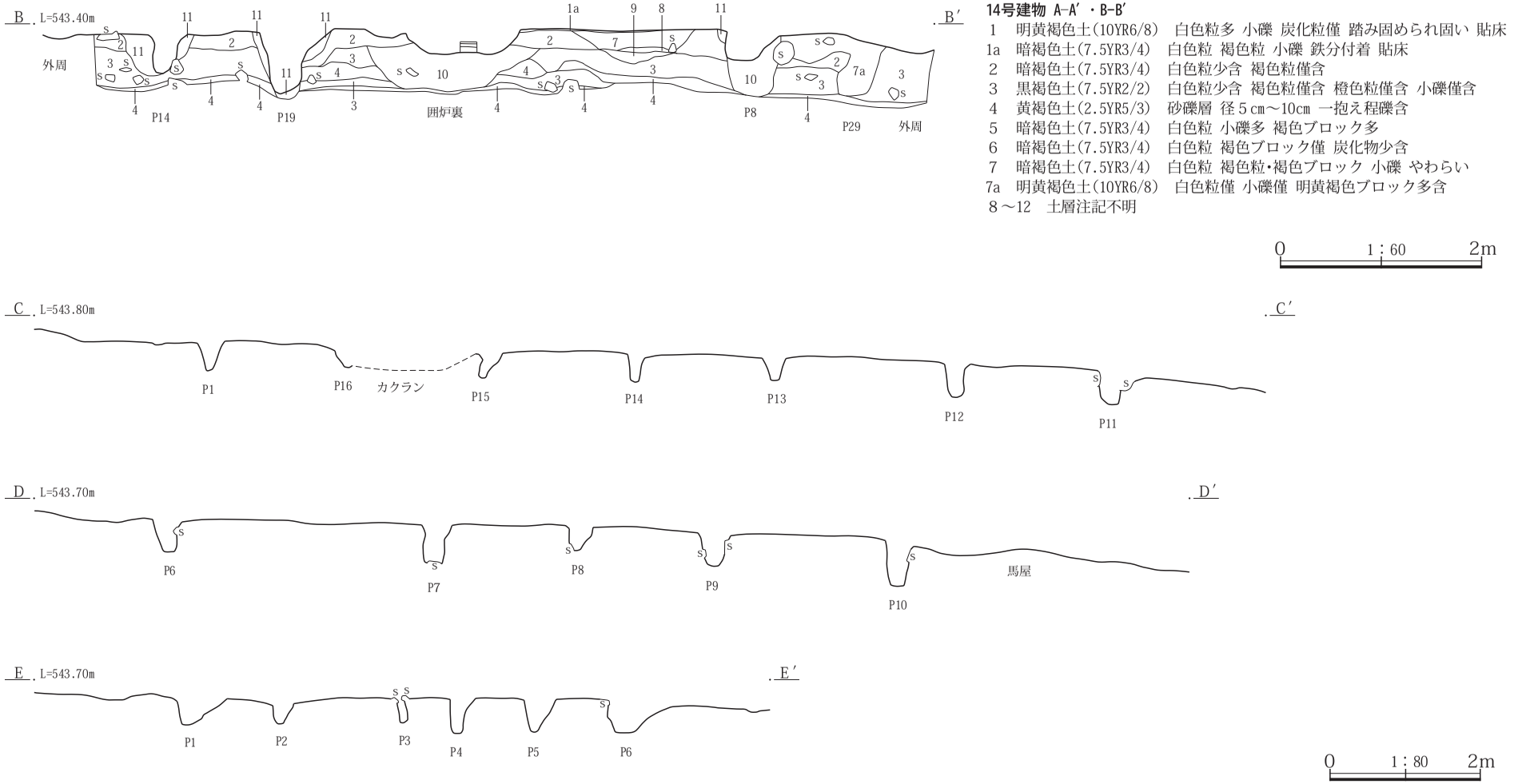
【構造・規模】柱は全て掘立柱である。掘立柱を詳しく調べると、直径約40㎝、深さ約45㎝前後の大きな上屋柱と思われる柱穴が南北方向(間口方向)に２列ある。その上屋柱の東西両側に直径30㎝、深さ30㎝前後の下屋柱と思



第163図　８区９号屋敷位置図



第164図　８区９号屋敷　14号建物



14号建物 A-A′・B-B′

1　明黄褐色土(10YR6/8)　白色粒多 小礫 炭化粒僅 踏み固められ固い 貼床
1a　暗褐色土(7.5YR3/4)　白色粒 褐色粒 小礫 鉄分付着 貼床
2　暗褐色土(7.5YR3/4)　白色粒少含 褐色粒僅含
3　黒褐色土(7.5YR2/2)　白色粒少含 褐色粒僅含 橙色粒僅含 小礫僅含
4　黄褐色土(2.5YR5/3)　砂礫層 径５㎝～10㎝ 一抱え程礫含
5　暗褐色土(7.5YR3/4)　白色粒 小礫多 褐色ブロック多
6　暗褐色土(7.5YR3/4)　白色粒 褐色ブロック僅 炭化物少含
7　暗褐色土(7.5YR3/4)　白色粒 褐色粒・褐色ブロック 小礫 やわらい
7a　明黄褐色土(10YR6/8)　白色粒僅 小礫僅 明黄褐色ブロック多含
８～12　土層注記不明

第165図　８区９号屋敷　14号建物断面

われる柱穴列がある。上屋、下屋柱とも底面に平石は埋められていなかった。

上屋柱は梁間(奥行)２間半相当である。出入口部分に、上屋柱から約123㎝離れたところに下屋柱。

裏側は92㎝離れたところに下屋柱があり、奥行の規模は約5.8m(２間半相当)となっている。

出入口部分の下屋は室外で、裏の下屋部分は室内となっている。それは残されている土間や、建物の周辺に残っている雨落溝の存在から明らかである。

【建築部材】構造材は出土していない。

ピット一覧表参照

No.	長径 ㎝	短径 ㎝	深さ ㎝
P 1	46	34	21
P 2	27	26	19
P 3	18	16	17
P 4	24	23	32
P 5	37	37	31
P 6	53	41	30
P 7	42	36	47
P 8	34	32	30
P 9	47	43	50
P11	38	33	68
P12	42	28	58
P13	40	35	36
P14	30	28	39
P15	22	17	33
P16	28	26	17
P17	35	28	59
P18	62	42	60
P19	42	40	59
P20	57	38	49
P21	27	24	43
P22	54	51	37
P23	36	29	39
P28	26	23	32
P29	29	27	24
P30	28	25	24

【所見】泥流により建物が壊されており、全体に残りが悪い。竈は壊され使用できない状態であった。唐臼は抜き取られ残っていない。土座に敷かれたであろう植物は残っていない。板間の建築部材は全く残っていない。掘立柱が、南西方向から北東方向に倒れた痕跡を多くの柱穴部分で残している。このような状況から、この建物は天明泥流で埋まる以前に建物として立ってはいたが、屋敷としての機能はなく、物置あるいは廃屋となっていたのではないだろうか。陶磁器等の遺物が出土しているが、それらは生活していた段階で使われていたものが残されたものと考えたい。

(１)竈(第166図、PL.141)

【位置・概要】土間の奥に造られていた。調査担当はほぼ同じ位置に３→２→１号竈の順番に３個の竈が存在したとして調査を進めた。しかし、検討の結果１号竈は、左袖石や燃焼部の存在から竈であると思われるが、他の２・３号竈は竈としての根拠が認められないので、竈ではないものと考えられる。２・３号竈は旧２・旧３号竈として報告する。残っていた竈は残りが悪く、土間面より下には多くの焼土が残っていたが、土間面付近は土間の土と同じような土で埋まっていた。おそらく天明泥流以前に壊され、埋められていたものと思われる。

(２)１号竈

【概要】残りが悪く、竈を築くために燃焼部を囲むように積まれていた石は、左袖部分と奥壁部分に少し残っていたが、竈を馬蹄形に囲むような状態ではなかった。炊口は建物出入口のある東側であったと思われる。竈部分全体に粘土が残っており、竈底面および袖石を巻き込むように明黄褐色土(粘土)が使われていたものと思われる。燃焼部底面にも明黄褐色土(粘土)が敷かれて、少量の焼土粒や炭化粒が残っていた。なお、燃焼部底面の高さは543.10mであり、床面の高さより約20㎝低い面となっている。

【規模・形状】残っていた石や抜き取られたであろう石の痕跡から規模を推定する。外形炊口方向1.3m、両袖方向1.3m。内径炊口方向0.9m、両袖方向0.7m。燃焼部高さは、床面より約18㎝低く凹んでいる。

(３)旧２号竈

【概要】調査担当が２号竈として調査した遺構は、上屋柱の柱穴であるP21北側の小穴である。この小穴は調査最終段階で確認された掘り込みである。竈としての根拠はないために竈ではない。

(４)旧３号竈

【概要】調査担当は３号竈として調査した。１号竈左袖付近から南東方向に位置し、１号竈より20㎝深い土坑状の遺構である。燃焼部や袖石等はない。覆土中に少量の炭や焼土を含み、上面は床面と同じ土で埋まっている。竈ではないと思われる。

(５)１号囲炉裏(第167図、PL.142)

【位置・検出状況】14号建物のほぼ中心部に土間部分を掘り込んで囲炉裏が造られている。このように建物中央部に囲炉裏が造られている建物は、石川原遺跡では５号屋敷21号建物で確認されている。土間と板間の位置は逆

であるが、両建物とも中央に土座がある建物である。囲炉裏は灰層の上に10㎝前後の暗褐色土で埋まっていた。この土は天明泥流に近い粒子の土である。囲炉裏枠木は残っていなかった。

調査段階では上面を１号囲炉裏、下面を２号囲炉裏とした。しかし、同じ囲炉裏と思われるので１号囲炉裏として報告する。２号囲炉裏は欠番とする。

【規模】暗褐色土を取り除くと、幅105㎝四方、深さ10～15㎝の方形の落ち込みが確認できた。方形の内部は円形に灰が厚く堆積しており、表面には細片となっている炭が残っていた。灰を中心とした円形の周辺部は、囲炉裏を造る段階で埋められた明黄褐色(ロームに近い)となっていた。

【構造】以下の順番で造られていると思われる。

・床面を110×110㎝、深さ25～30㎝程掘り込む。

・底面に明黄褐色土を厚さ３㎝前後、その上に明黄褐色土と黒色土が混じった土を３㎝前後、その上に明黄褐色土を厚さ15㎝前後版築状に盛る。

・枠木を据えて、枠木の外側を明黄褐色土で固める。

この囲炉裏の使用面は土間から15㎝前後低い位置である。枠木は木材の痕跡も残っていないので、腐って残っていないのではなく、埋没前に外されていたことも考えられる。

(６)焼土

【位置・検出状況】想定される建物南側板間部分の土間の下から多くの灰と焼土、少量の炭が確認された。上部は削られているためか残りが悪い。規模は最大幅90㎝前後の楕円形に近い。調査担当は焼土として調査した。

上部が削られているとのことから、当初は囲炉裏であったことも考えられる。その場合、土座が中央部と南側の２間となり、南側の土座の囲炉裏が埋められたものと考えられないだろうか。

(７)唐臼

【概要・規模・所見】建物北西コーナーの土間部分で、馬屋の裏側に直径60㎝前後、深さ11㎝の大きな土坑状の掘り込みと、馬屋に近い東側約1.2ｍの位置に直径50㎝前後、深さ30㎝の大きな土坑状の掘り込みがある。これらはこれまでの調査例から、西側の大きな掘り込みには石製の唐臼、東側の幅は狭いが深く掘られている掘り込みには、唐臼に伴う支脚が埋められていたものと思われる。石製の唐臼は持ち去られ、木製の支脚も持ち去られたか、あるいは腐って残っていなかったものと思われる。２つの掘り込みの深さは、床面の高さから比較すると唐臼部分の掘り込みの深さは31㎝、支脚部分の掘り込みの深さは37㎝となり、他の調査例に近い数字となっている。

(８)馬屋(第168図、PL. 143)

【位置・構造・規模】】14号建物出入口右側(北)に位置する。馬屋全体が土間面より約30㎝低くなっている。南西(Ｐ25)・南東(Ｐ10)・北西部分(Ｐ24)に柱穴があるが、北東部分には確認されていない。Ｐ10とＰ25は北東の方向に倒れており、泥流が南西方向から押し寄せたことを示している。出入口は土間に面した南側と思われるが、柱間2.6ｍ間に馬栓棒を設置したもう１本の柱穴が確認されていない。馬屋東側に1231号土坑(馬屋桶)がある。馬の糞尿や人間の人糞等が溜められていたものと思われる。

(９)馬屋桶(1231号土坑)

【概要・規模】馬屋の東側に接して馬屋桶(便槽)が埋められていた。内部は天明泥流で埋まっていた。桶の南側に幅35㎝前後の大きな石が、桶上面に置かれたような状態で出土した。内部に桶の底部や側板が痕跡として残っていた。規模は底径48㎝、口径53㎝、高さ54㎝である。タガの痕跡が、底面から高さ13㎝と48㎝の位置に２か所残っていた。桶は土坑状に掘り込まれた中に埋められ、掘り出した土で埋められていた。

ピット一覧表参照

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm
Ｐ10	45	37	76
Ｐ24	26	23	41
Ｐ25	28	25	44
Ｐ26	28	23	60
Ｐ27	27	27	34

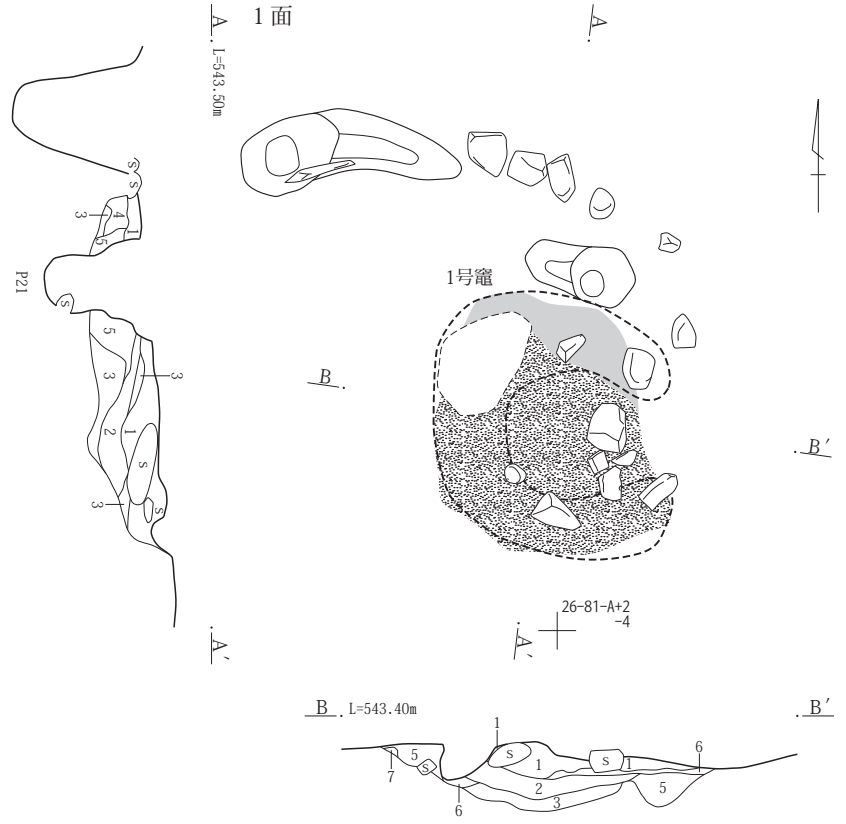
(10)土間(第164図、PL. 144)

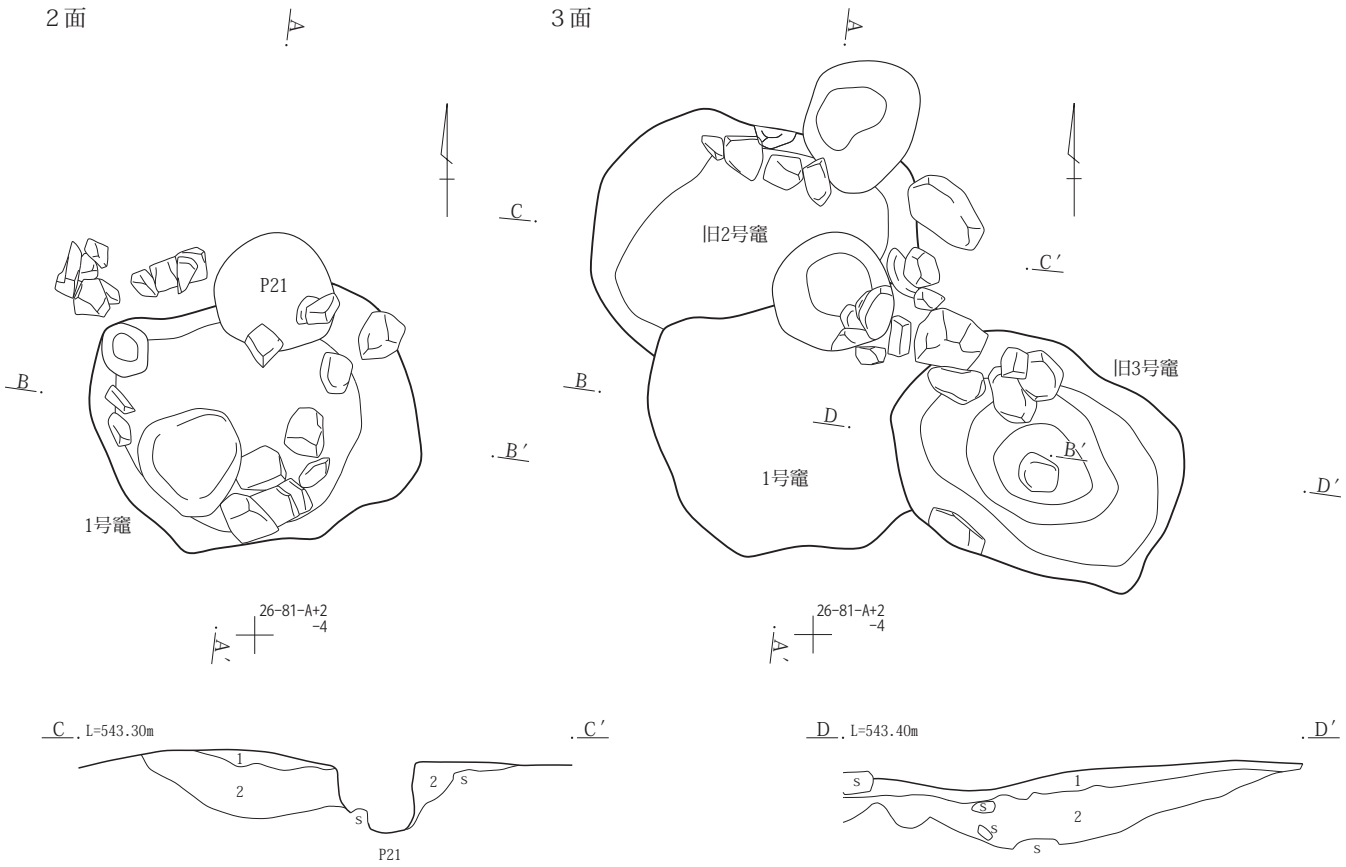
【概要】土間は標高543.3ｍ前後の高さにほぼ平らに造られていた。地山の土を中心に固めているが、褐色土が出入口付近・竈周辺・馬屋西側付近等部分的に残っているので、それらの土は床面整地段階で持ち込まれたものと思われる。

(11)土座１(想定)(第164図、PL. 144)

【概要】北側の土間と南側の板間と思われる空間の中間に位置し、中央に土間を掘り込んで造られている囲炉裏の

14号建物　１号竈A-A′・B-B′
1　土間面　覆土
2　にぶい橙色土(7.5YR6/4)　炭化物 焼土ブロック 灰
3　赤色土(10R4/8)　炭化粒僅 焼土
4　青黒色土(5BG2/1)　褐色粒僅 灰層
5　にぶい褐色土(7.5YR5/4)　明褐色ブロック 焼土ブロック 白色粒 炭化ブロック 小礫 石の抜けた跡?
6　暗赤褐色土(5YR3/2)　炭化物 焼土粒 褐色粒 やわらかい
7　黒褐色土(7.5YR2/2)　白色粒 褐色粒僅 小礫 やわらかい

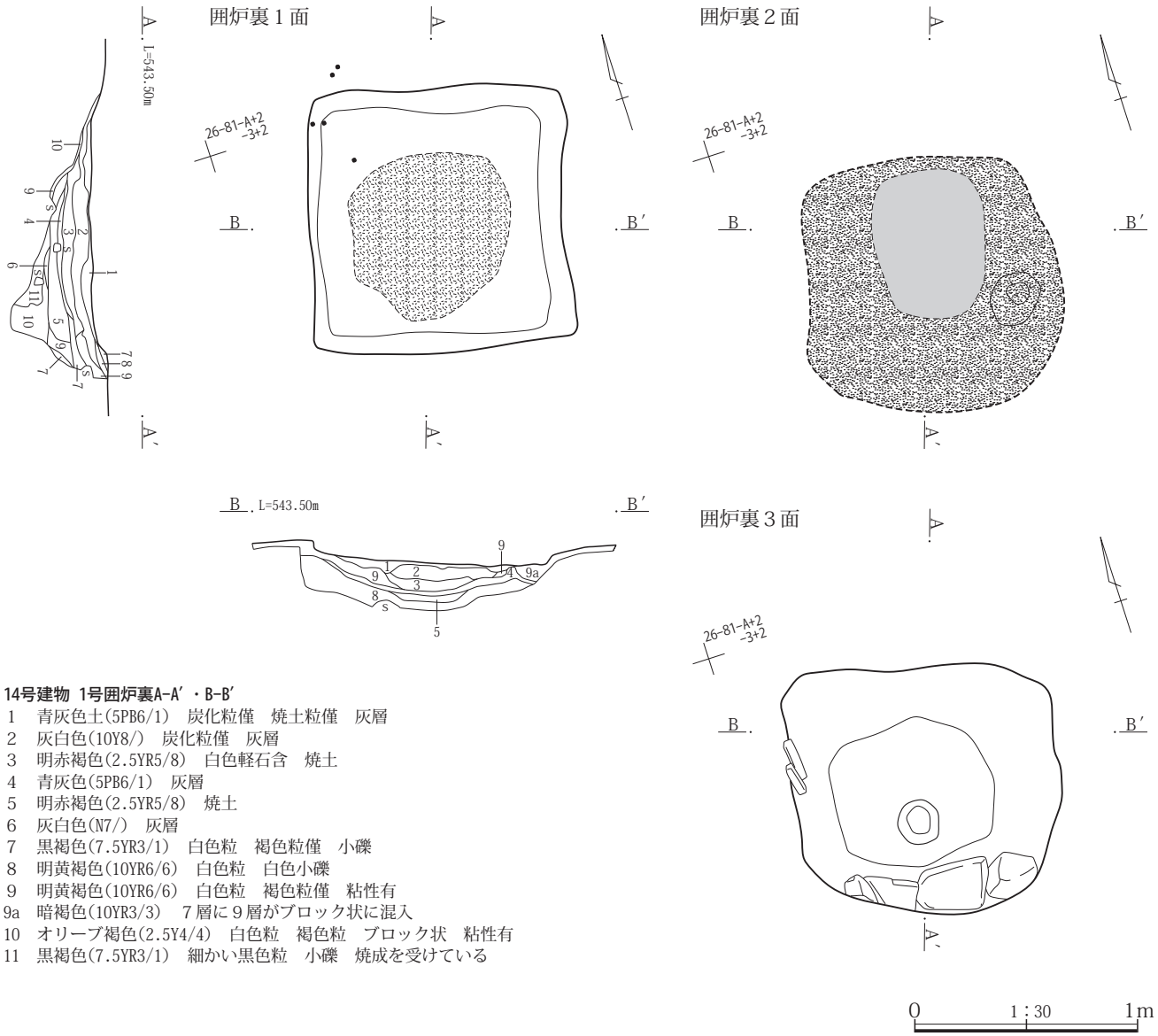




14号建物　旧２号３号竈C-C′・D-D′
1　土間面　覆土
2　暗褐色土　ローム小ブロック 炭の小片と僅かに焼土粒含む

0　1：30　1m

第166図　８区９号屋敷　14号建物竈



14号建物 1号囲炉裏A-A′・B-B′

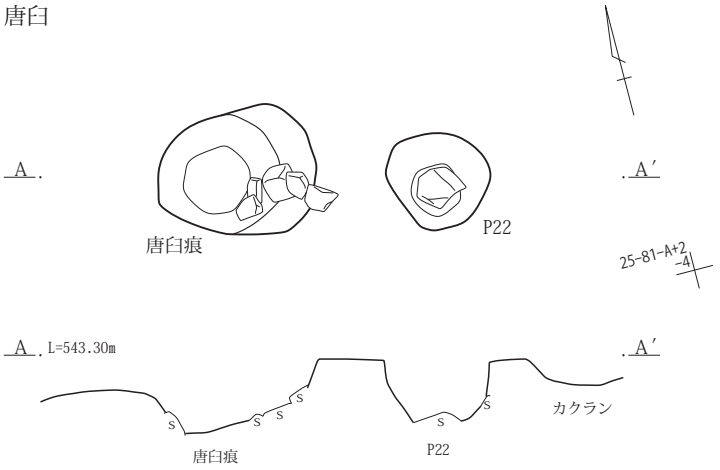
1　青灰色土(5PB6/1)　炭化粒僅　焼土粒僅　灰層
2　灰白色(10Y8/)　炭化粒僅　灰層
3　明赤褐色(2.5YR5/8)　白色軽石含　焼土
4　青灰色(5PB6/1)　灰層
5　明赤褐色(2.5YR5/8)　焼土
6　灰白色(N7/)　灰層
7　黒褐色(7.5YR3/1)　白色粒　褐色粒僅　小礫
8　明黄褐色(10YR6/6)　白色粒　白色小礫
9　明黄褐色(10YR6/6)　白色粒　褐色粒僅　粘性有
9a　暗褐色(10YR3/3)　７層に９層がブロック状に混入
10　オリーブ褐色(2.5Y4/4)　白色粒　褐色粒　ブロック状　粘性有
11　黒褐色(7.5YR3/1)　細かい黒色粒　小礫　焼成を受けている

14号建物　焼土A-A′・B-B′

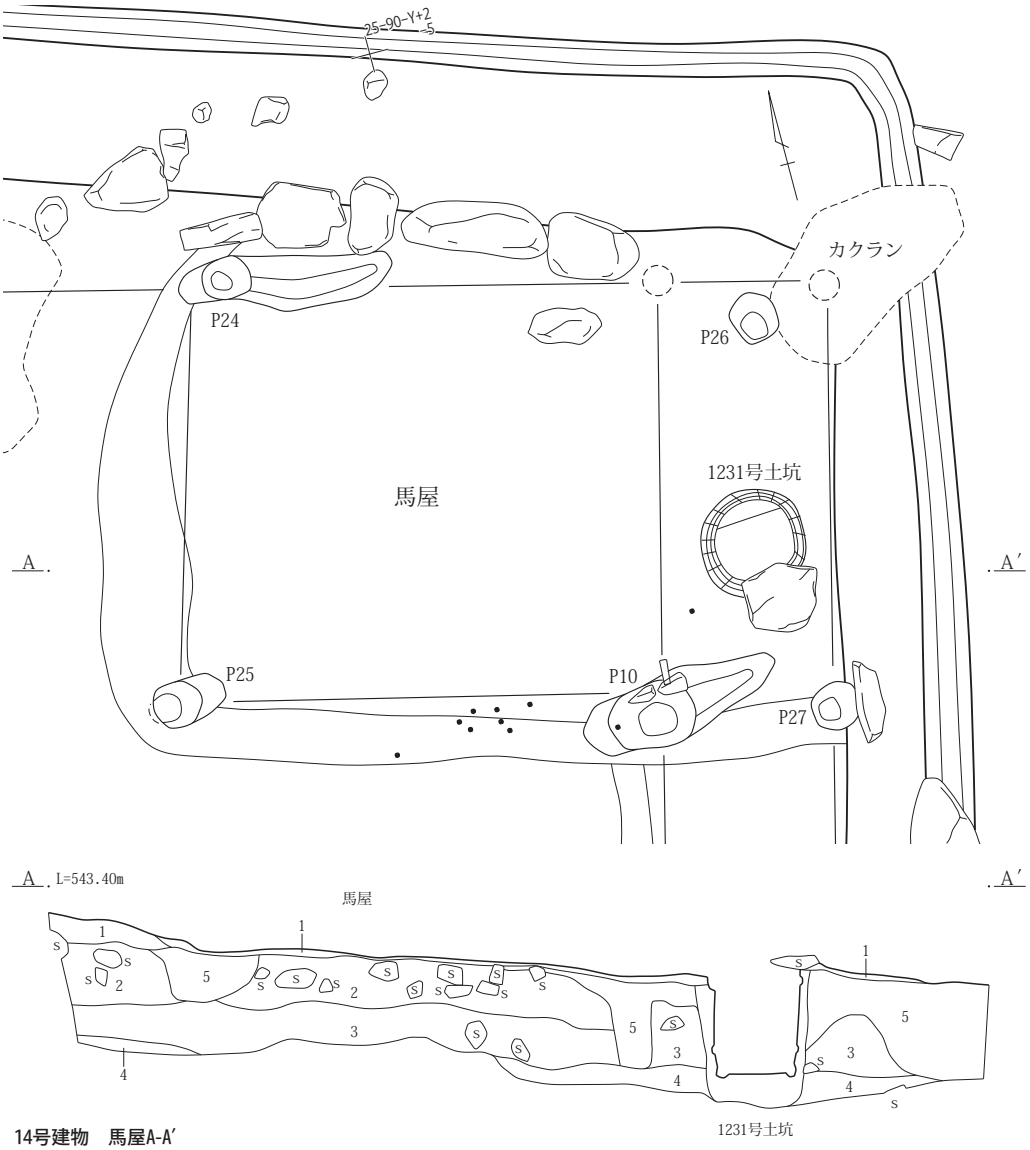
1　暗褐色(7.5YR3/4)　白色粒　褐色粒　黄褐色ブロック多　焼土粒僅　鉄分付着　貼床
2　暗褐色(7.5YR3/4)　白色粒　褐色粒　炭化粒
3　暗赤褐色(2.5YR3/3)　白色粒僅　炭化粒僅　多くの焼土粒を含む

第167図　８区９号屋敷　14号建物囲炉裏・焼土

唐臼



馬屋



14号建物　馬屋A-A′

1　暗褐色土(7.5YR3/4)　貼床白色粒　褐色粒　小礫　鉄分付着
2　暗褐色土(7.5YR3/4)　白色粒少含　褐色粒僅含
3　黒褐色土(7.5YR2/2)　白色粒少含　褐色粒僅含　橙色粒僅含　小礫僅含
4　黄褐色土(2.5YR5/3)　砂礫層　径５～10cm　一抱え程礫含
5　暗褐色土(7.5YR3/4)　白色粒　褐色粒・褐色ブロック　小礫　やわらかい

0　1：40　1m

第168図　８区９号屋敷　14号建物唐臼・馬屋

ある間口方向3.68m、奥行方向5.83mの空間をネコ等は残っていなかったが土座１と想定した。土間と板間の配置は逆であるが､21号建物では同じような規模と配置で、囲炉裏のある建物中央部分全面にネコが敷かれていた土座であった。

土間との境はＰ９とＰ20および、Ｐ13の柱穴を結ぶ直線状の部分と思われる。21号建物ではその部分に直径12㎝前後の角材が置かれ、土間部分と土座を仕切っていた。14号建物ではその部分に角材等の痕跡も残っていなかった。

(12)土座２(想定)と東側の土間(想定)(第164図、PL.144・145)

【概要・規模】土座南側で間口方向3.68m、奥行方向4.91mの長方形の場所は、土座１より15㎝程高い。その場所の東側(表側)幅南北幅184㎝、東西幅0.92mの土間部分は、土座２より10㎝程低い。土座２の出入口と思われる表側には、土座２専用と思われる土間が造られている。土座２の中央付近に、焼土が確認されている。囲炉裏が存在していたのであろうか。土座２は格式の高い部屋であったのではないだろうか。

第３項　35号建物(９号屋敷・1229号土坑・1230号土坑)(第169図、PL.145・146)

25・26-90・81-Ｘ～Ａ-５・６グリッドに位置する。

【概要・位置】９号屋敷北端、14号建物北側に接した位置にある。東西に並ぶ２間×２間の２棟の建物である。調査担当は２棟の建物に対して､35号建物として調査した。そこで報告段階では、東側の便槽桶２個(1229・1230号土坑)と、その西側に灰が集められていた建物を35－１号建物､西側の建物を35－２号建物と呼称して報告する。いずれも９号屋敷14号建物の付属建物と思われる。２つの建物は規模は少し35－１号建物が大きいが、いずれも２間×２間の建物である。しかし、建物内部の違いから異なった目的のために造られた建物である。建物の東西に雨落溝、北側に雨落溝からの水路があり、水は標高の低い８号屋敷方向に流れている。35－１号建物と35－２号建物の間には、水路らしき落ち込みもあるが明瞭ではない。雨落溝にAs-A軽石は残っていなかった。

(１)35－１号建物(1229号土坑・1230号土坑)

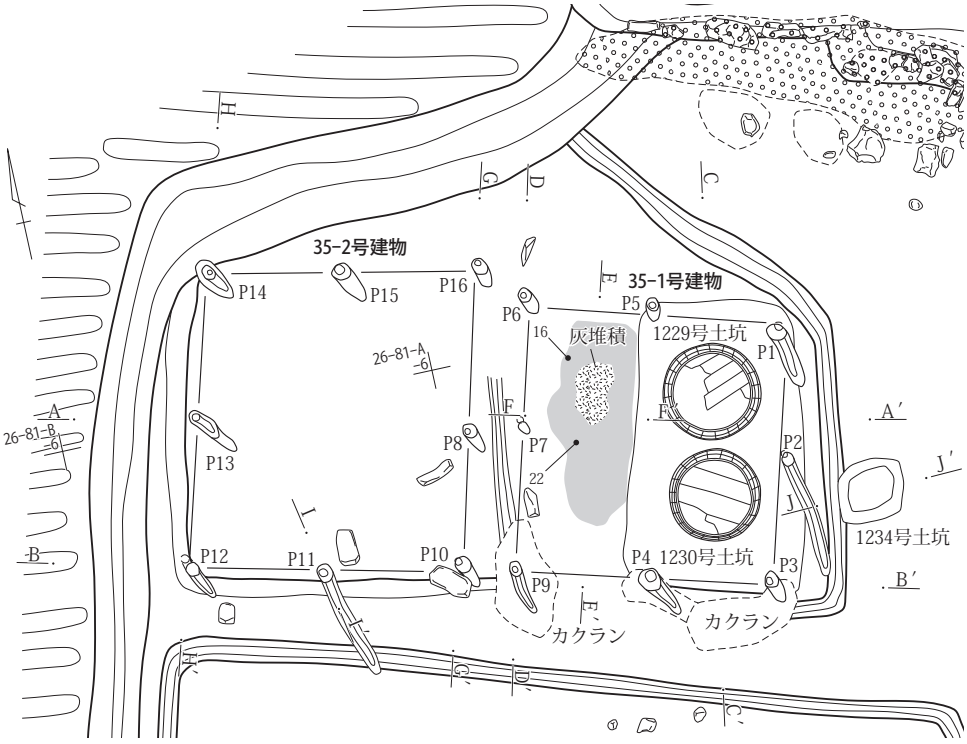
【概要・構造】35－２号建物に接した東側にある間口２間、奥行き２間の方形の建物であり、柱は８本の掘立柱である。

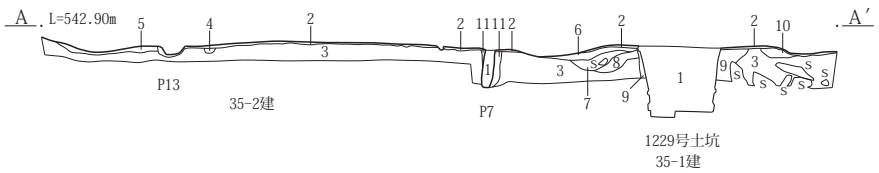
方形の建物であるが、建物内は西側と東側に２分して使い分けられている。東側は西側より10㎝程高い土間に２個の桶が埋められており、一段低い西側には大量の灰が貯蔵されていた。この建物は、糞尿の貯蔵と囲炉裏や竈等で出来た灰を貯蔵するための建物であったと思われる。出入口は明らかでないが、雨落溝の確認されていない14号建物北側部分と思われる。

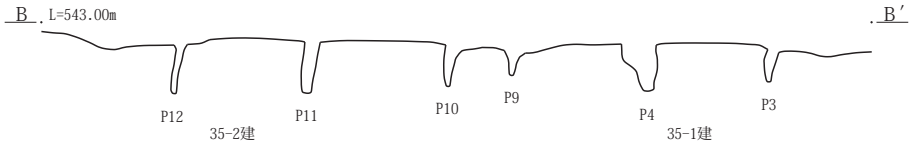
【規模】間口２間276㎝×奥行２間276㎝の方形の建物である。東西方向の２つの空間に分かれ、東側空間は西側空間より40㎝程横幅が広く、10㎝程床面が高い土間として整形している。そこに２個の桶が埋められている。内部は天明泥流で埋まっていた。北側の桶を1229号土坑、南側の桶が1230号土坑である。土坑には桶が埋められており、底面と側面には、底板と側板の痕跡が残っていた。1229号土坑は底径90㎝、口径103㎝、深さ70㎝、底面から20㎝と63㎝の位置にタガの痕跡が残る。1230号土坑は底径84㎝、口径95㎝、深さ73㎝、底面から18㎝と62㎝の位置にタガの痕跡が残る。北側の1229号土坑の桶が少し大きい。２個の桶が埋められている西側の土間部分は、床面が少し掘り込まれており、そこに大量の灰が貯蔵されていた。灰の中には少量の炭や焼土が含まれていたが、基本的には灰である。置かれていた範囲は南北幅２m、東西幅約80㎝、灰はレンズ状に堆積しており、灰の厚さは最も厚い場所で13㎝であった。

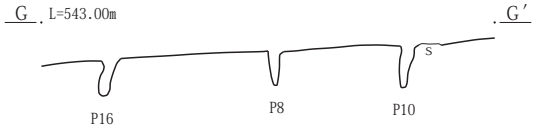
２間×２間の掘立柱建物であり、柱穴が８本確認されている。柱穴は幅10㎝前後、深さ40㎝前後である。柱間は138㎝前後である。

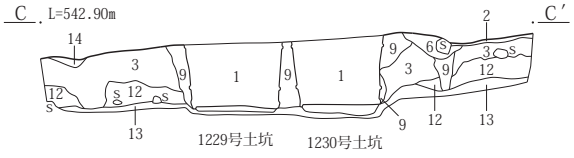
【所見】これまで調査してきた東宮・西宮遺跡では、主屋に伴う付属建物が多く調査されている。それらの建物は、２個の埋設桶を埋設した３尺×９尺の部屋と、平らな土間を持つ９尺×９尺からなる間口９尺、奥行12尺の建物が基本であった。その埋設桶を伴う付属建物の他に、規模はさまざまで大きな建物は間口10尺、奥行15尺、小さな建物は９尺四方等の建物が確認されている。それらの建物から、貯蔵された灰がまとまって出土したことはなかった。農家にとって灰や肥料はあく抜き等に使える貴重な資源である。これが見つかったことは大きな発見で

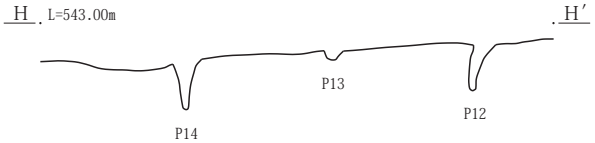


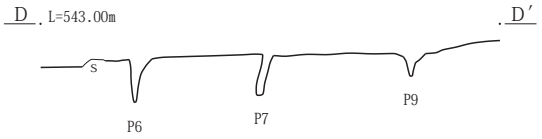


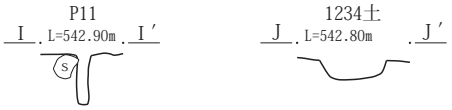


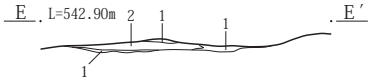


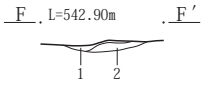


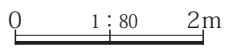












35-1・35-2号建物A-A′・C-C′

1　暗褐色(7.5YR3/4)　1783(天明３)年の浅間山噴火に伴う泥流堆積物
2　暗褐色(7.5YR3/4)　白色粒 褐色粒 小礫 鉄分付着 踏み固められ固い
3　暗褐色(7.5YR3/4)　白色粒やや多含 褐色粒 小礫
4　暗褐色(7.5YR3/4)　白色粒 褐色粒 灰含
5　暗褐色(7.5YR3/4)　白色粒 褐色粒 小礫 鉄分付着　凹み部の上面As-A有
6　暗褐色(7.5YR3/4)　白色粒 褐色粒 僅 炭化粒僅 焼土粒僅
7　褐灰色(7.5YR4/1)　白色粒 褐色粒 炭化粒僅 灰がレンズ状に複数層堆積
8　暗褐色(7.5YR3/4)　白色粒僅 褐色粒 炭化粒僅 鉄分付着
9　暗褐色(7.5YR3/4)　白色粒 褐色粒 小礫 埋戻し土
10　暗褐色(7.5YR3/4)　白色粒 褐色粒 多含 炭化粒僅 小礫
11　暗褐色(7.5YR3/4)　白色粒 褐色粒 小礫多含 埋戻し土
12　黒褐色(7.5YR2/2)　白色粒少 褐色粒僅 橙色粒僅 小礫僅
13　明黄褐色(10YR6/8)　砂礫層
14　暗褐色(7.5YR3/3)　炭化粒 炭化物 褐色粒 小礫 下部に灰層有
15　黒褐色(7.5YR2/2)　小礫多 褐色土と互層状 踏み固められ固い

35号建物　灰置場E-E′・F-F′

1　暗褐色(7.5YR3/4)　炭化物　焼土粒 小礫僅　灰層
2　灰白色(7.5YR8/1)　炭化物　焼土ブロック含　焼土層

第169図　８区９号屋敷　35-１号建物(厠)・35-２号建物

ある。

（２）35－２号建物

【概要・構造】35－１号建物西約90㎝に位置する。間口２間、奥行き２間で、南北方向にわずかに長い方形の建物であり、柱は８本の掘立柱建物である。東側の35－1号建物と方向や大きさが近い建物である。建物内は平らに整地されていた。

【規模】間口（東西）２間276㎝×奥行（南北）２間322㎝の方形の建物である。柱穴は幅10㎝前後、深さ40㎝前後である。柱間は138～170㎝前後である。

ピット一覧表参照

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm
P１	22	17	42
P２	15	12	33
P３	18	15	36
P４	26	20	47
P５	17	13	64
P６	15	14	52
P７	16	9	50
P８	17	14	37
P９	17	12	30
P10	19	15	36
P11	20	15	25
P12	15	13	25
P13	40	16	10
P14	17	12	62
P15	20	17	62
P16	19	15	47

第４項　洗い場（第170図、PL.147）

25-90-X-２・３グリッドに位置する。

【概要・位置】生活用水を確保するために、ほとんどの屋敷には洗い場が造られている。９号屋敷では、屋敷と21号道に沿って53号溝の手前部分に洗い場が造られている。洗い場のすぐ北東には53号溝を渡って屋敷に入るために石橋が架けられている。53号溝から洗い場に水を引き込む水路脇には、平らな大きな石が置かれている。おそらく水路で流れる水を利用して、調理や洗濯等を行うための作業用の平石であったと思われる。

洗い場を含む53号溝から西側約1.5ｍの範囲には、多くのAs-A軽石が残っていた。

【構造・規模】53号溝に沿った南北方向がやや長い長方形であり、石を３～４段程積みあげて作っている。４壁面に積まれている石は同じではなく、次のような特色がある。

屋敷に近い西側壁面と底部に使われている石は４個で小さいが、最も上面に積まれている石は、大きな石２個である。２個の石は洗い場内面となる面は平らに加工され、２個の石が洗い場内側で直線となるように工夫されている。また地表面となる面も平らになるような石を選んでいる。他の３面に使われている石は、洗い場内側の面は平らな面としているが自然石を使い、特に大きな石を選んではいない。屋敷寄りの大きな２石は、他の３面の石垣とは異なった目的で積まれている。この２石の大きさは長さ60㎝、奥行35㎝前後である。石の上に載っても崩れないと思われる。他の北・南・東壁面に積まれている石は、幅30～40㎝、奥行20～23㎝のやや小さな石を使って積み上げている。

洗い場の規模は石垣内面で長軸100㎝、短軸75㎝、深さ50㎝である。底面の標高は542.77ｍであり、東側の53号溝底面の標高は542.84ｍであり、洗い場が約12㎝低くなっている。53号溝から水を引くために、洗い場端部分に細い水路を造っている。水路の幅は38㎝である。

（１）作業用平石

【概要】洗い場に水を引くための細い水路北側で、53号溝西壁面部分に長径125㎝、幅60㎝の平らな石が置かれていた。このように、大きくて表面が平らな石は53号溝側壁に使われることはない。この平石はおそらく洗い場で炊事や洗濯等、作業段階で使われる平石と思われる。

第５項　石橋（53号溝４号石橋）（第170図、PL.147）

25-90-W-３グリッドに位置する。

【概要・位置】21号道から53号溝を渡り、９号屋敷に入るために平石１石（天井石）を53号溝上に架けて造られた橋である。他の石橋の天井石は長辺を溝に架けているが、４号石橋は短辺を溝に架けている。天井石は、東側21号道と西側の９号屋敷前庭部分より30㎝前後高い位置になっている。21号道から高い４号石橋を渡り、９号屋敷の低い庭に繋がっている。

【構造・規模】石橋は溝の側石を２～３段積み上げた上に天井平石を載せている。他の石橋ではないが、天井石の下に溝を横断する細長い石が１石置かれて、その上に天井石が設置されていた。天井石の大きさは長さ63㎝、幅128㎝、厚さ15㎝、天井石下溝幅30㎝、深さ35㎝である。

第170図　８区９号屋敷　洗い場・石橋

第６項　集石(第171図、PL.147)

25-90-W・X－４・５グリッドに位置する。

【概要・位置】９号屋敷前庭北東部表土下で、直径約２ｍの範囲から石がまとまって出土した。石は１段で積まれてはいない。天明泥流下ではわずかに地表面に出ていた程度であったが、掘り進めるとまとまって埋められていた。この場所は屋敷内で最も低い場所であり、屋敷土間の標高543.3m、石が多く出土した面の標高は542.55mで、0.7m前後この場所は低くなっている。９号屋敷造成時に出土した石等を敷地内で低く埋めて整地する必要があった。同じように低いこの場所に埋めたものではないだろうか。

第７項　その他の遺構

1234号土坑(第169図) 25-90-X－５グリッドに位置する。

９号屋敷 庭集石A-A′・B-B′
1　暗褐色(7.5YR3/4)　白色粒僅 小礫 下面鉄分付着 一部洪水層か?
2　灰色(5Y5/1)　As-A層 小暗褐色ブロック僅 As-Aの灰かき山か?
3　暗褐色(7.5YR3/4)　As-A層 小暗褐色ブロック多含

0　1：40　1m

第171図　８区９号屋敷　集石

【概要】35－1号建物東側に位置し、雨落溝を掘り込んで造られた土坑である。規模は東西南北60㎝、深さ18㎝である。覆土は天明泥流に近い土である。後世の撹乱土坑と思われる。

第８項　出土遺物(第392・393図、PL.331)

９号屋敷の主屋である14号建物内部から、建築部材や木製品は出土していない。

14号建物囲炉裏の北西部分から煙管・銭・瀬戸・美濃陶器碗等が出土している。建物土間と馬屋との境付近からまとまって、瀬戸・美濃陶器碗・肥前陶器陶胎染付碗が出土している。建物北西コーナー部分に、唐臼が埋められていたと思われる掘込が確認された。しかし、唐臼はなかった。屋敷西側の洗い場の石組み中から、口縁部が欠損している瀬戸・美濃陶器すり鉢が出土している。

第10節　10号屋敷跡(第172～179図､PL.148～151)

第１項　10号屋敷跡概要
第２項　36号建物　（１)竈　（２)囲炉裏　（３)馬屋
第３項　前庭の「有機質範囲」(推定堆肥置場)
第４項　洗い場　(ア)唐臼　(イ)作業用平石
第５項　石橋(２号石橋)
第６項　出土遺物

第１項　10号屋敷跡概要(７区)

10号屋敷跡は村の最も南西部分に位置する。９号屋敷南側、43号建物北側に位置する。屋敷の東側に幹線道である21号道があり、道の西脇には53号溝がある。屋敷の北側は少し低くなっており、屋敷北側に積まれた石垣の北に、21号道から分かれて北西の吾妻川方向に向かって造られている16号道がある。16号道の北側に46号溝があるが、53号溝と繋がっていないために、53号溝から分水された溝ではなく、屋敷等から流れ出た水が畑に流れ込まないように区画された溝と思われる。46号溝は屋敷北西部で消えている。

10号屋敷には９号屋敷のような付属建物はない。屋敷の東側に庭があり、53号溝に接して洗い場が造られている。洗い場の北東約９ｍ離れた位置に、53号溝を渡るための２号石橋がある。36号建物は床面が水平でなく残りが悪い。特に土間部分の北側が低くなっている。土間部分の代表的な標高を545.3ｍとすると、北東部分の標高は544.8m前後であり、0.5m前後低くなっている。また北西部分は撹乱を受け削られていた。屋敷・庭・道・水路、屋敷周辺の畑との高低差は以下である。

36号建物の土間標高545.3ｍとする。西側の洗い場付近の標高545.3m、石橋付近の21号道面544.6m、53号溝底部544.29ｍで、建物土間の高さは洗い場付近と同じで、溝底部より１ｍ高く造成されている。屋敷南側は545.6ｍで、土間標高545.3ｍより0.3m程高くなっている。屋敷地との境の段差部分に土手等は明瞭に造られていない。西側の畑面の標高はほぼ同じ高さである。北側は46号溝があり、溝に向かって地形が低くなっている。そこで、溝と屋敷地の間に20㎝前後盛土して斜面部分に石垣を積んでいる。46号溝の底部標高は544.1m前後であり、床面より1.2m前後低くなっている。

As-A軽石は、石橋から洗い場に繋がる道部分と洗い場全面、および建物北東部分の前庭、さらに建物北側の16号道に残っていた。36号建物出入口部分の前庭には残っていなかった。

第２項　36号建物(第173～177図、PL.149・150)

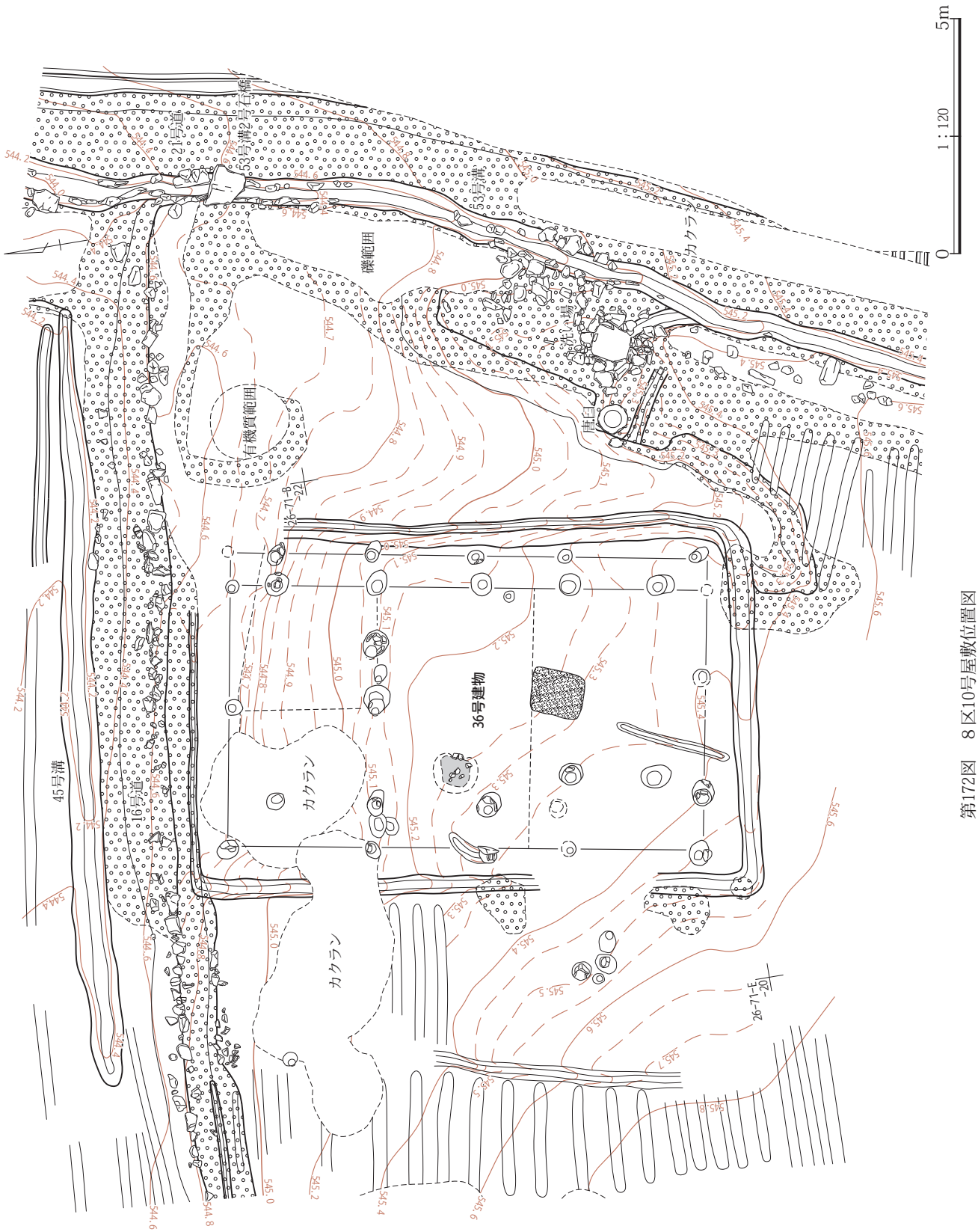
26-71-Ｂ～Ｅ-20～22グリッドに位置する。

【概要・規模】屋敷の主屋である14号建物は掘立柱建物である。全体に残りが悪く、建物に関する建築部材や床面に敷かれたであろうネコ等は残っていなかった。

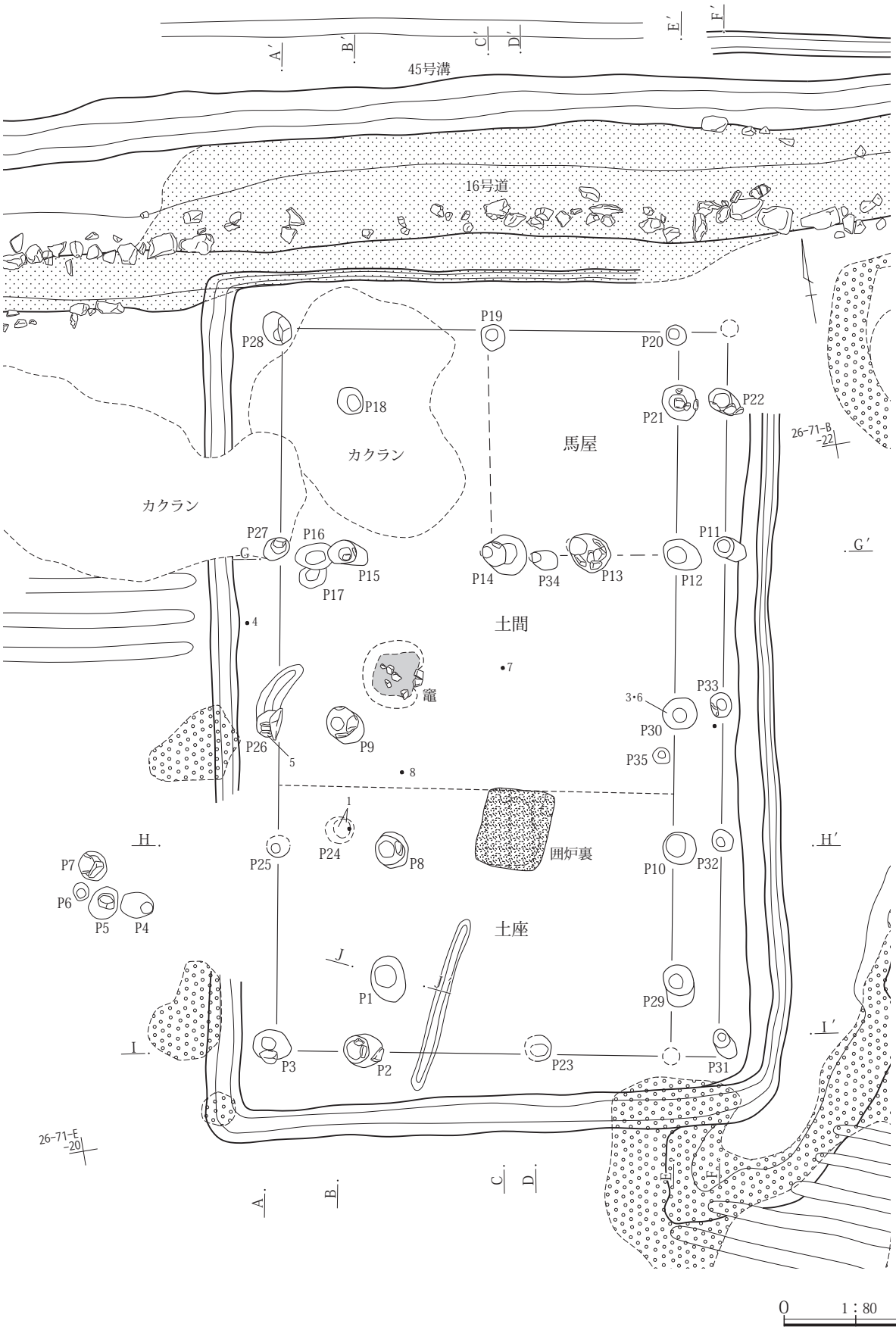
南北方向に長い建物であり､間口方向(南北)約10.1m、奥行方向(東西)約5.5m、出入口部分である東側に幅約0.6ｍの下屋を持つ建物である。残っていた地表面から土間・土座・板間の区別はつかない。しかし、これまで調査してきた結果から推定すると、北側が土間で南側が土座であった可能性が考えられる。土間と土座の境も不明であるが、42号建物例から囲炉裏の北端を土間と土座の堺と考えた。土間部分に竈、土間北東部分に馬屋、馬屋南側に建物出入口があったものと思われる。馬屋西側の土間部分には、多くの屋敷で唐臼があるが、その部分は撹乱を受けて､土間部分より50㎝前後低くなっている。おそらくこの付近にあったと思われるが不明である。土間は間口方向(南北)約6.4m、土座は間口方向(南北)約3.7ｍと考えられる。

【構造・規模】柱は全て掘立柱である。土台に使われたであろう石は全く出土していない。柱穴を詳しく調べると建物内側にある直径約40㎝、深さ約50㎝前後の大きな上屋柱と思われる柱穴と、建物外側にある直径約30㎝、深さ約30㎝の下屋柱と思われる柱穴がある。上屋柱の梁間間隔は、土座部分で２間(４ｍ)、土間部分２間半(4.6m)であり、梁間間隔が異なっている。土間の空間を広く確保する工夫がなされているものと思われる。建物東側幅60㎝の下屋は室外で、西側幅約150㎝の下屋部分は室内となっているものと思われる。柱等の建築部材は出土していない。

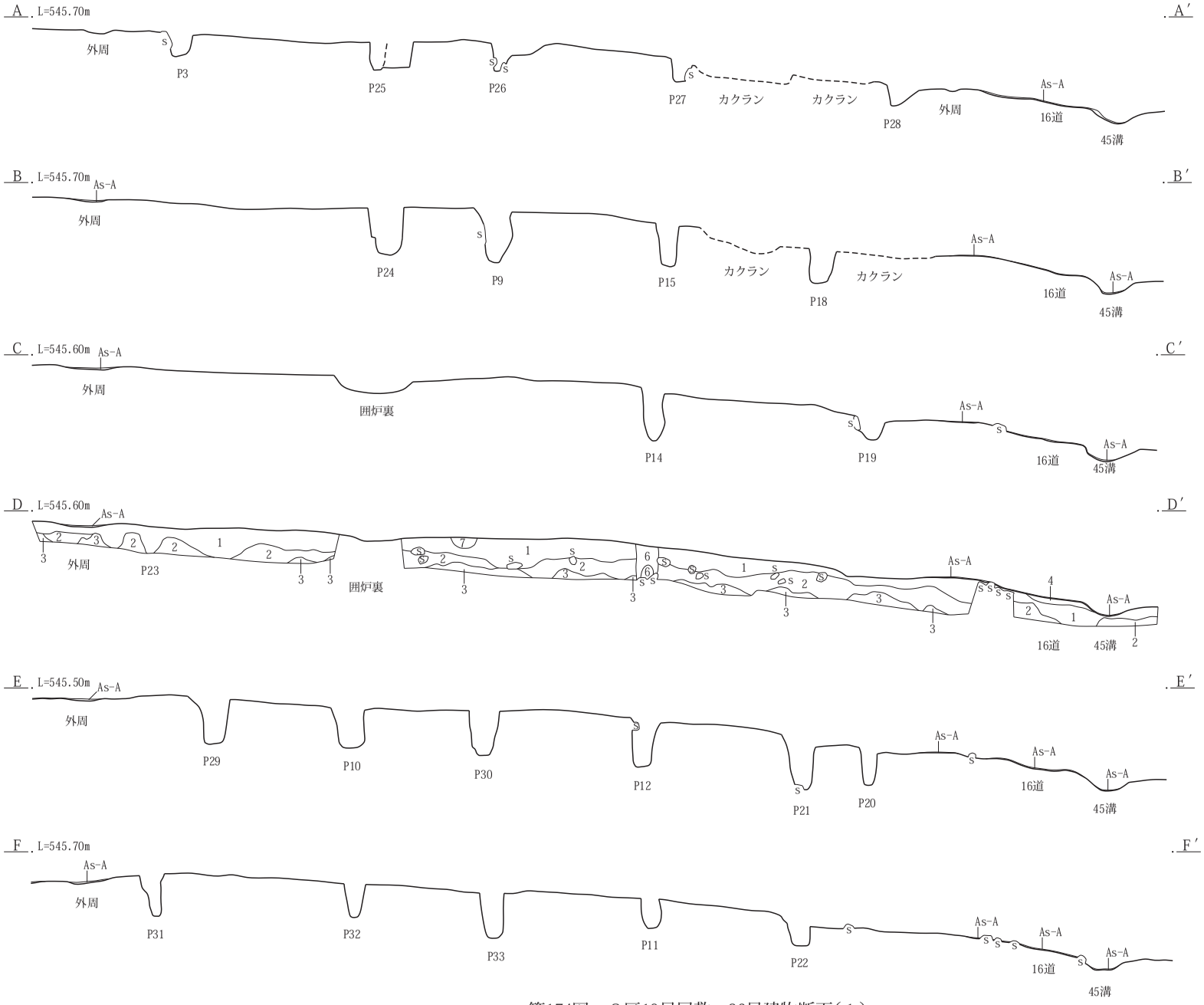
【所見】天明泥流で埋もれた段階で竈は壊され埋められていた。また囲炉裏も表面に薄い暗褐色土で覆われており、泥流ではないボロボロに近い土で埋まっていた。As-A軽石は、建物内には堆積がなく、建物の南・西・北の側溝



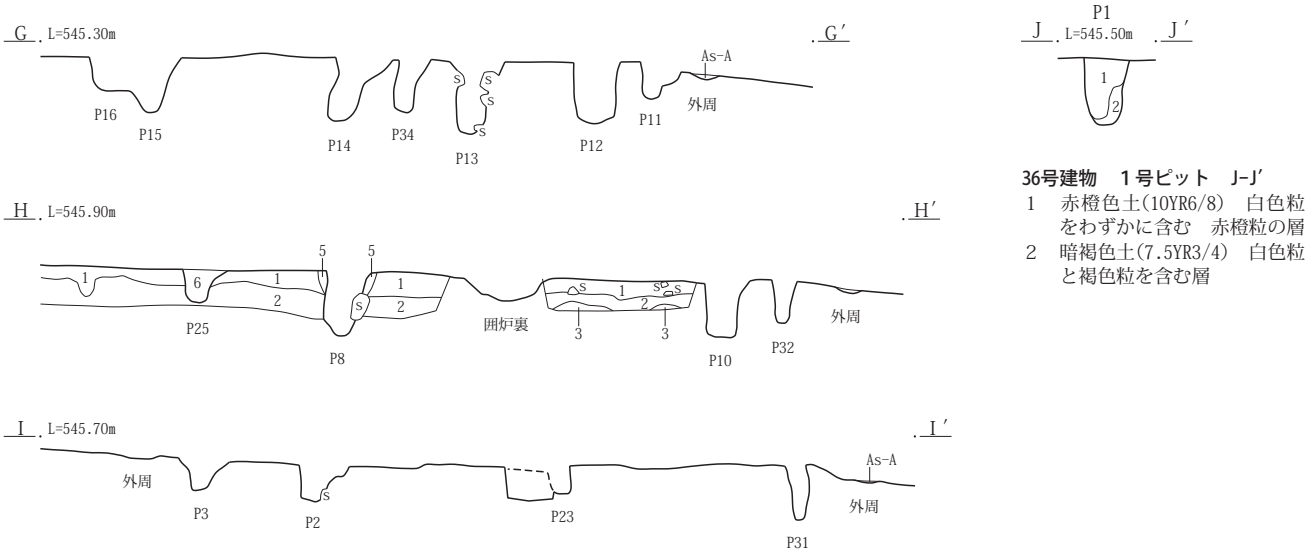
第172図　8区10号屋敷位置図



第173図　８区10号屋敷　36号建物



第174図　8区10号屋敷　36号建物断面（1）



36号建物　１号ピット　J-J′
1　赤橙色土(10YR6/8)　白色粒をわずかに含む　赤橙粒の層
2　暗褐色土(7.5YR3/4)　白色粒と褐色粒を含む層

36号建物　A-A′～H-H′
1　暗褐色土(7.5YR3/4)　白色粒僅　褐色粒僅　小礫　地山の層
2　黒褐色土(7.5YR2/2)　白色粒少含　褐色粒僅　橙色粒僅　拳大以上の礫多　地山の層
3　橙色土(2.5YR6/8)　拳大以上の礫含　砂礫層　地山の層
4　暗褐色土(7.5YR3/4)　白色粒　褐色粒　鉄分付着　しまり有　16号道
5　にぶい褐色土(7.5YR4/1)　白色粒僅　褐色粒僅　小礫多　鉄分付着　固い　柱穴掘方
6　暗褐色土(7.5YR3/4)　1783(天明３)年の浅間山噴火に伴う泥流堆積物　柱穴痕跡
7　褐色土(7.5YR4/3)　白色粒僅　褐色粒多　褐色ブロック僅　炭化粒僅　やわらか

0　1：80　2m

第175図　８区10号屋敷　36号建物断面(２)

付近、東側の前庭、および前庭の有機質(堆肥置場)を囲むように残っていた。これらのことから36号建物は、屋根は架けられていたが生活するための屋敷ではなく、物置等として使われていたものと思われる。

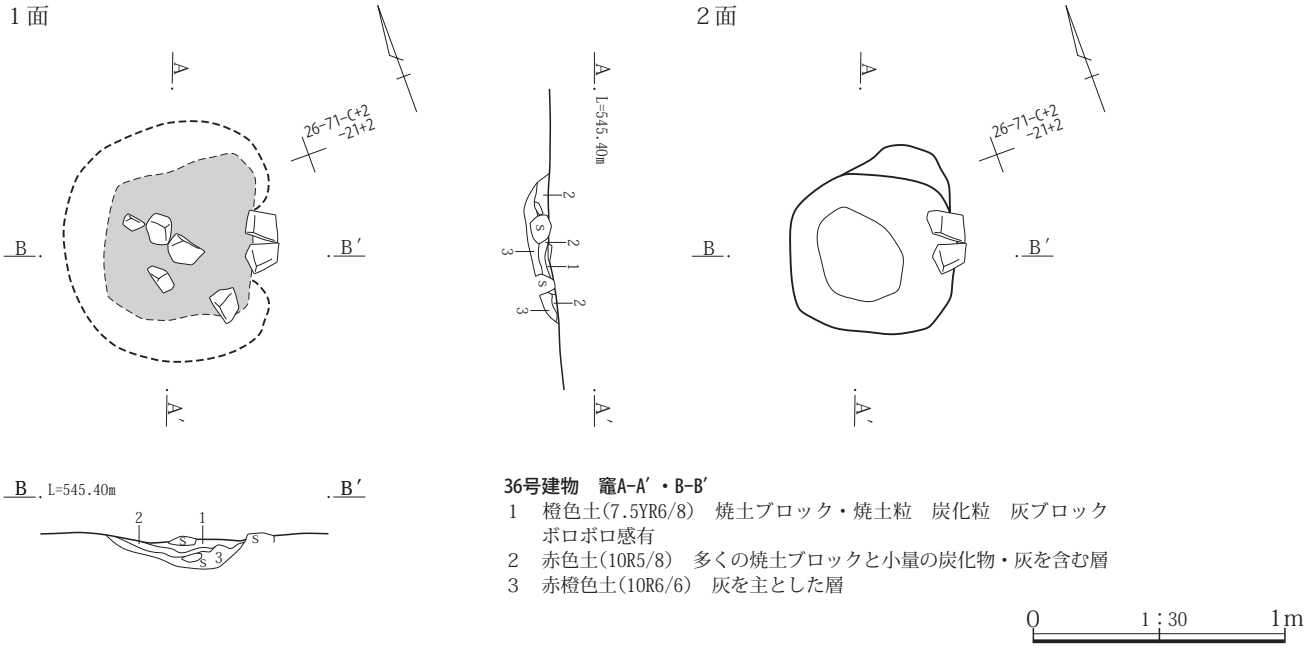
(１)竈(第176図、PL.149)

【位置・概要】土間の奥に造られていた。

残りが悪く、竈を築くために燃焼部を囲むように積まれていた石は残っていない。竈内に竈を築くために使われたであろう焼けた石が、竈内に落ち込むように５個出土したが､おそらく使われていた場所から移動しており、あたかも壊されて竈内に投げ込まれたような状況である。その石のまわりの覆土中には、焼土・炭化粒・灰ブロック等がブロック状に撹乱を受けたような状態で残っていた。その石の下には焼土や灰の層が残っていた。使用されていた状態で浅間泥流により壊されたのではなく、それ以前に意図的に壊されていたのではないだろうか。炊口付近に平らな石が２個、床面覆土に一部埋められたような状態で残っていた。おそらく、この２石は炊口部分に置かれていた石であり、使用時の場所であると思われる。なお、燃焼部底面の高さは543.2mであり、土間の高さより10㎝程低い。

ピット一覧表参照

No.	長径cm	短径cm	深さcm
P 1	64	47	79
P 2	39	34	35
P 3	54	42	25
P 4	45	37	22
P 5	47	39	24
P 6	26	23	7
P 7	42	36	30
P 8	41	38	77
P 9	43	43	81
P 10	38	37	73
P 11	30	28	73
P 12	58	41	94
P 13	59	49	111
P 14	37	31	98
P 15	40	33	86
P 16	53	37	63
P 17	41	34	51
P 18	42	35	109
P 19	37	33	97
P 20	28	25	125
P 21	54	45	131
P 22	47	32	97
P 23	39	37	29
P 24	40	38	69
P 25	33	32	43
P 26	37	28	45
P 27	38	30	58
P 28	48	39	93
P 29	46	43	67
P 30	48	42	82
P 31	27	22	59
P 32	35	29	60
P 33	33	29	89
P 34	39	28	84
P 35	26	23	48



第176図　８区10号屋敷　36号建物竈

【規模・形状】掘り込み面や焼土範囲から竈内燃焼部の大きさを計測すると、東西南北とも約60㎝である。

（２）囲炉裏（第177図、PL. 149）

【位置・検出状況】36号建物南側の土座と思われる場所にあり、土座と土間の境部分に位置すると思われる。囲炉裏の北端は土間に、他の３辺は土座に面しているものと想定した。囲炉裏を囲むように置かれている枠木は残っておらず、外した枠木の痕跡もなかった。土間より低い部分に囲炉裏の灰が大量に残っていた。灰層の下には、熱を受けて明褐色に焼土化した層が明瞭に残っていた。

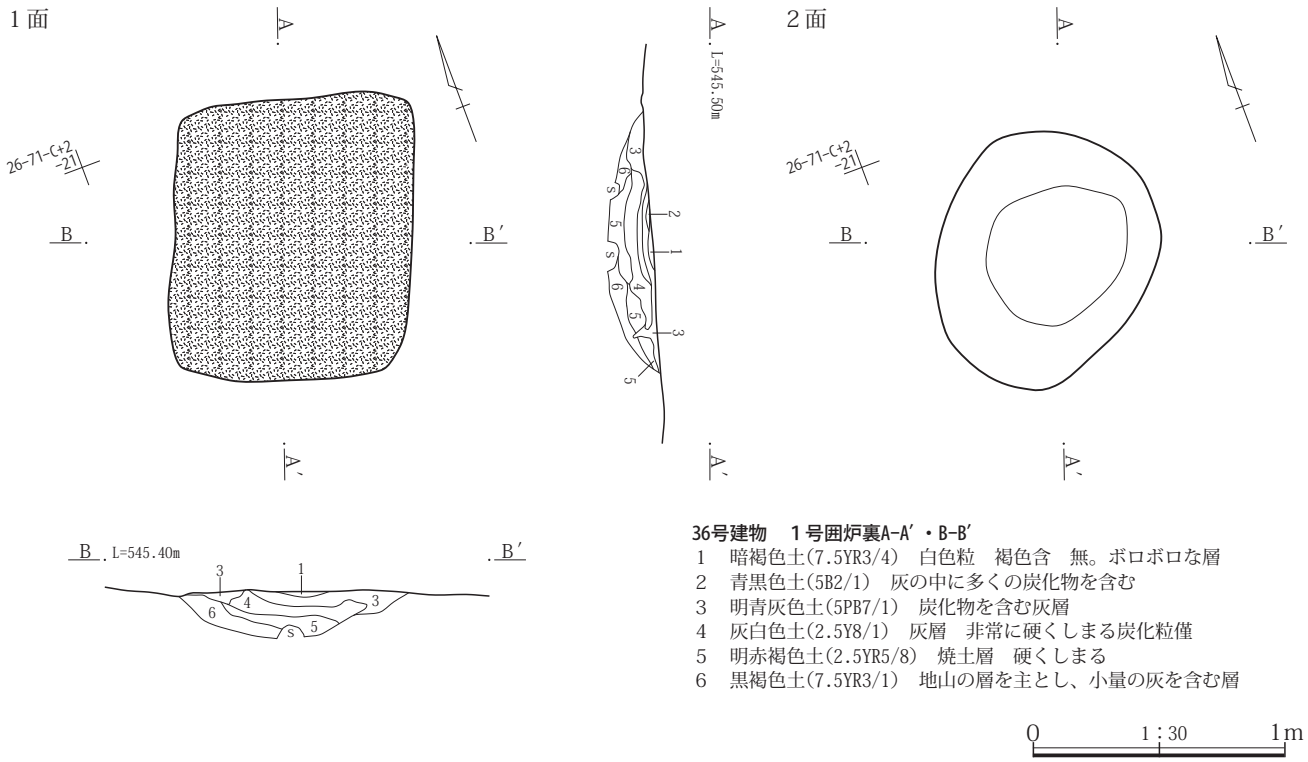
【所見】囲炉裏の枠木は外されたと思われる。枠木の埋められていた痕跡も残っていない。囲炉裏の表面の土は薄い暗褐色土で覆われており、泥流ではないボロボロに近い土で埋まっていた。おそらく、埋められ土間として使われていたものと思われる。天明泥流で埋まった段階では囲炉裏としての機能はなくなっていたと思われる。

【規模・構造】土間面より少し低い場所に残っており、炭や表土等が混入し、灰を中心とした暗褐色の範囲が囲炉裏と思われる。その範囲で規模を推定すると、南北100㎝、東西90㎝で、やや南北方向に長い方形を呈している。表面の灰層は不純物を含む少量の灰層となっているが、その下の灰層は灰白色の灰の純層となっており、中央部になると次第に厚くなり、最も厚い中央部では10㎝程になっている。厚く堆積している灰層の範囲は囲炉裏中央部にあり、直径約60㎝の円形範囲である。その灰層の下には、明褐色に焼土化した厚さ５㎝前後の焼土層が、直径40～50㎝程の範囲に存在した。

（３）馬屋（第173図）

【位置・構造・規模】36号建物北側の土間部分は、北西部分が撹乱、北東部分は竈周辺の土間より30～40㎝前後低くなっていた。北に接する９号屋敷14号建物では、この北東部分が馬屋となっていた。36号建物では、この部分は土間より30～40㎝前後低くなっており、馬屋で多く見られるような土間部分より30㎝前後凹状に低くなる遺構面は、良好に残っていなかった。また馬屋桶もないことから、調査担当はこの場所に馬屋の存在を認識しなかった。遺構写真で詳しく検討した結果、その部分が東西南北約250㎝前後の方形の範囲で凹状に低くなっていることが観察できた。そこで、この場所に馬屋が存在していたことが想定できるので、点線でその範囲を図示した。

土間に面した馬屋の南側が馬の出入口であると思われる。その部分には４個の小穴があり、東西部分東側（Ｐ12）、西側（Ｐ14）は馬屋の南東と南西コーナーの柱穴であり、中央の２柱穴中の中央部分の柱穴（Ｐ13）が根固め石等の存在から、馬の出入口部分の馬栓棒等を固定する柱が埋められたものではないだろうか。なお、馬屋に接して埋められている桶（馬屋桶）は確認できなかった。



36号建物　１号囲炉裏A-A′・B-B′
1　暗褐色土(7.5YR3/4)　白色粒　褐色含　無。ボロボロな層
2　青黒色土(5B2/1)　灰の中に多くの炭化物を含む
3　明青灰色土(5PB7/1)　炭化物を含む灰層
4　灰白色土(2.5Y8/1)　灰層　非常に硬くしまる炭化粒僅
5　明赤褐色土(2.5YR5/8)　焼土層　硬くしまる
6　黒褐色土(7.5YR3/1)　地山の層を主とし、小量の灰を含む層

0　1：30　1m

第177図　８区10号屋敷　36号建物１号囲炉裏

第３項　前庭の「有機質範囲」(推定堆肥置場)

【概要・位置】庭の北側、馬屋(想定)の前に有機質が直径1.5m前後の円形の範囲で確認できた。そのまわりを囲むようにAs-A軽石が堆積していた。前庭の多くは人が歩いて平らになっていたが、その部分は凹凸があり、他の前庭部分と異なって踏み固められていない。この遺構は筆者の生活体験から、馬屋で造られた堆肥を運び出し、山積にして保管していた場所ではないかと推測した。堆肥が山積にされていたために、降下したAs-A軽石が円形の内側には堆積することなく、「有機質範囲」を取り囲むように外側に堆積したと思われる。

第４項　洗い場(平石・唐臼)(第178図、PL.150・151)

26-71-A-20グリッドに位置する。

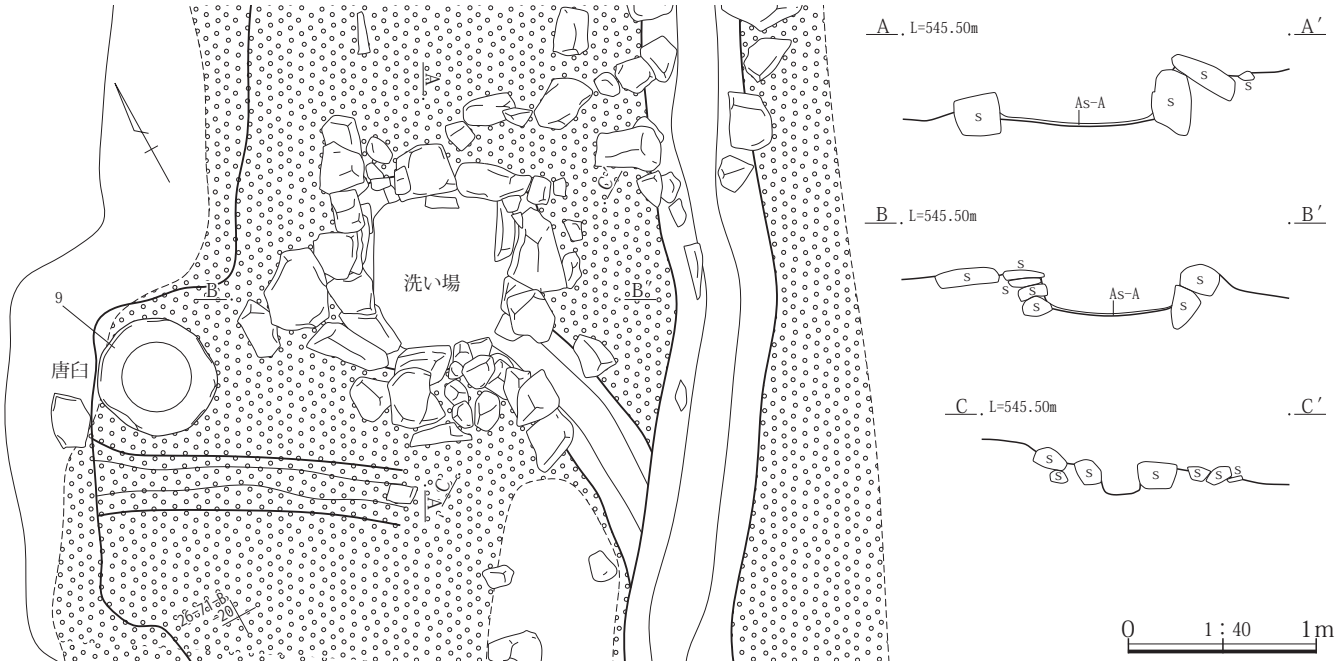
【概要・位置】生活用水を確保するために、ほとんどの屋敷には洗い場が造られている。10号屋敷では、屋敷東側の前庭で53号溝に接した部分に造られていた。53号溝から洗い場に水を引き込むために、洗い場南西部分53号溝上流寄りに細い水路が造られ、水を引き込んでいる。水路は両側を石で囲み細長い石が蓋石として使われていた。水路と反対側の洗い場北側には平らな大きな石が置かれている。おそらく、水路で流れる水を利用して調理や洗濯等を行うための作業用の平石であったと思われる。

【構造・規模】多くの石を２段前後積み上げ、長方形の浅い井戸のように積み上げて造った遺構である。53号溝に沿って南北方向にやや長い長方形を呈している。洗い場の規模は、積まれた石の内面で南北方向80㎝、東西方向71㎝、深さ20㎝前後である。底面の標高は545.02ｍであり、東側の53号溝底面より洗い場が約６㎝低くなっている。53号溝から水を引くために、洗い場南西コーナー部分から細い水路を造って53号溝と繋げている。水路の長さは１ｍ前後、幅20㎝、深さ15㎝である。水路の天井部には幅20㎝、長さ75㎝の細長い石が天井石として置かれていた。

(ア)唐臼

【概要】唐臼が洗い場の西端に置かれていた。この唐臼に屋根は架けられていない。唐臼の大きさは外側の直径63㎝、内側直径38㎝である。口縁部から下約30㎝の所で欠損しており底部は残っていなかった。出土状況から唐臼は天明泥流により移動した様子はないと思われる。底部欠損の状況でここに置かれていたものと思われる。口縁部は平らで内側が低くなる様に整形されている。

(イ)作業用平石(洗濯石)



第178図　８区10号屋敷　洗い場

【概要】洗い場に水を引くための細い水路と反対側の北側に長径82㎝、幅61㎝の平らな石が置かれていた。このように大きくて表面が平らな石は53号溝側壁に使われることはない。この平石は、洗い場で炊事や洗濯等の作業段階で使われる平石と思われる。

第５項　石橋（２号石橋）（第179図、PL.151）

25-80-Ｙ-22グリッドに位置する。

【概要・位置】10号屋敷に入るために、53号溝上に石橋（２号石橋）が架けられている。さらに、北６ｍの地点にも石橋（３号石橋）が架けられている。２号石橋は10号屋敷に入るための石橋であるが、３号石橋は一段低い屋敷北側の16号道、および屋敷北側の畑を耕作する等の目的に架けられたものと思われる。

２号石橋は21号道から53号溝を渡り、10号屋敷に入るために平石を53号溝上に架けて造られた石橋である。

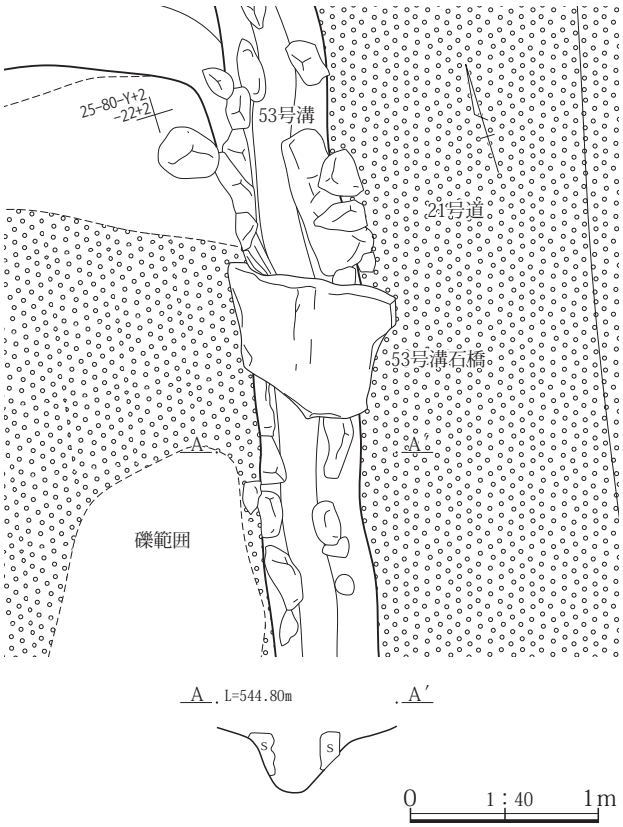
【構造・規模】石橋は溝の側石２～３段積み上げた上に天井平石を載せている。天井石の大きさは長さ90㎝、幅71㎝、天井石下溝幅20㎝、深さ35㎝である。

第６項　出土遺物（第394図、PL.332）

10号屋敷の主屋である36号建物内部から、建築部材や木製品は出土していない。陶磁器や石製品も出土量は少ない。

土間から瀬戸・美濃陶器髪盥・砥石等が出土している。異質な遺物として陶磁器の２次加工品が３個出土している。用途等不明である。

前庭の洗い場近くから、底部が欠損している唐臼が出土している。



第179図　８区10号屋敷　石橋

第11節　12号屋敷跡(第180～192図､PL.152～165)

第１項　12号屋敷跡概要
第２項　42号建物　（１）１号囲炉裏　（２)唐臼
（３)室（２号囲炉裏）　（４)馬屋
（５)埋設桶(1332号土坑・便槽)
（６)1335号土坑　（７)1383号土坑
（８)土座　(ア)ネコの大きさと敷かれた範囲
(イ)石臼周辺のゴザについて
（９）床下から検出された遺構
(ア)竈(旧６号囲炉裏)
(イ)３・４号囲炉裏概要
(ウ)３号囲炉裏　(エ)４号囲炉裏
(オ)５号囲炉裏　(カ)７号囲炉裏
(キ)床下１号集石　(ク)1468号土坑
第３項　44号建物
第４項　洗い場(1341号土坑)
第５項　出土遺物

第１項　12号屋敷跡概要

12号屋敷跡は村の最も南西部分に位置する。屋敷の西側は幹線道である21号道があり、道の西脇には53号溝がある。道を挟んだ反対側には９号屋敷がある。12号屋敷は、主屋である42号建物と42号建物北東部に接して建てられている44号建物である。21号道から屋敷に入るために屋敷北側に道があり、狭い庭が42号建物東、44号建物南に造られている。42号建物の土間標高543.5mで、北側の道の標高とほぼ同じであり、53号溝底部の標高は543.3mで、溝底部が0.2m程低くなっている。42号建物と21号道との間は60～70cm程空間があり、そこに多くの石が土塁を築くように南北方向に細長く積まれていた。42号建物雨落溝西壁側部分には、積まれた石が崩れ落ちないように、大きな石が縦方向に置かれていた。積まれていた石の高さは30cm前後である。また、屋敷地より標高の高い南側の畑との間には､高さ50cm程の段差があり、その部分には２～３段の石垣が積まれていた。

21号道に接する建物裏側以外の３面は全て畑となっている。21号道の南西側には、10号屋敷36号建物と43号建物がある。この場所が村の最も南西部に位置し、村の出入口部分であったと思われる。

As-A軽石は、42号建物西・南側の雨落溝部分と、建物北の道部分および、44号建物雨落溝部分に残っていた。44号建物南西部にはAs-A軽石が集められ、多く残っていた。

第２項　42号建物(第182～190図、PL.152～161・163～165)

25-80・90-Ｕ～Ｘ-24～１グリッドに位置する。

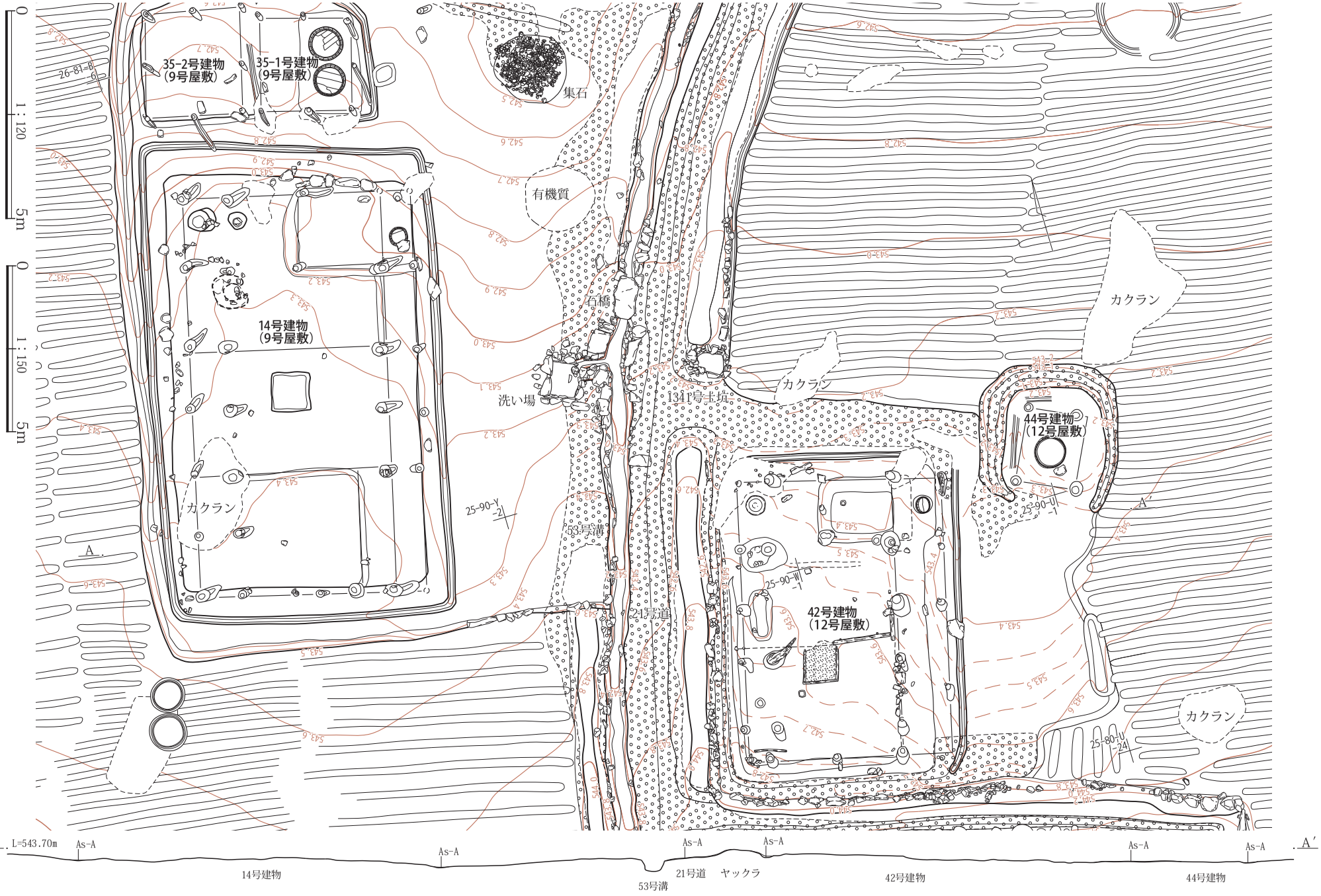
【概要・規模】屋敷の主屋である42号建物は掘立柱建物である。掘立柱と掘立柱の間にも石は全く置かれていなかった。

建物は南北方向に長く、間口方向(南北)約8.3m(４間半)、奥行き方向(東西)約4.6m(２間半)、出入口部分である東側に約1.5mの下屋を持つ建物である。北側約4.7mが土間、南側約3.7mが土座となっている。土座にはネコ等が全面に敷かれてあった。土間と土座を仕切る目的で、土座に敷かれていた植物の葉や茎等、その上に敷かれていたネコが土間に出ないように、太さ９cm角、長さ180cmの角材(仕切り材)が、囲炉裏東側に元位置を保った状態で出土した。角材が土間面に移動しないように、２か所小さな杭が打たれ固定されていた。角材は囲炉裏を挟んだ西側にも置いてあったと思われるが残っていなかった。土間と土座の間に板戸や壁等はなかったようである。

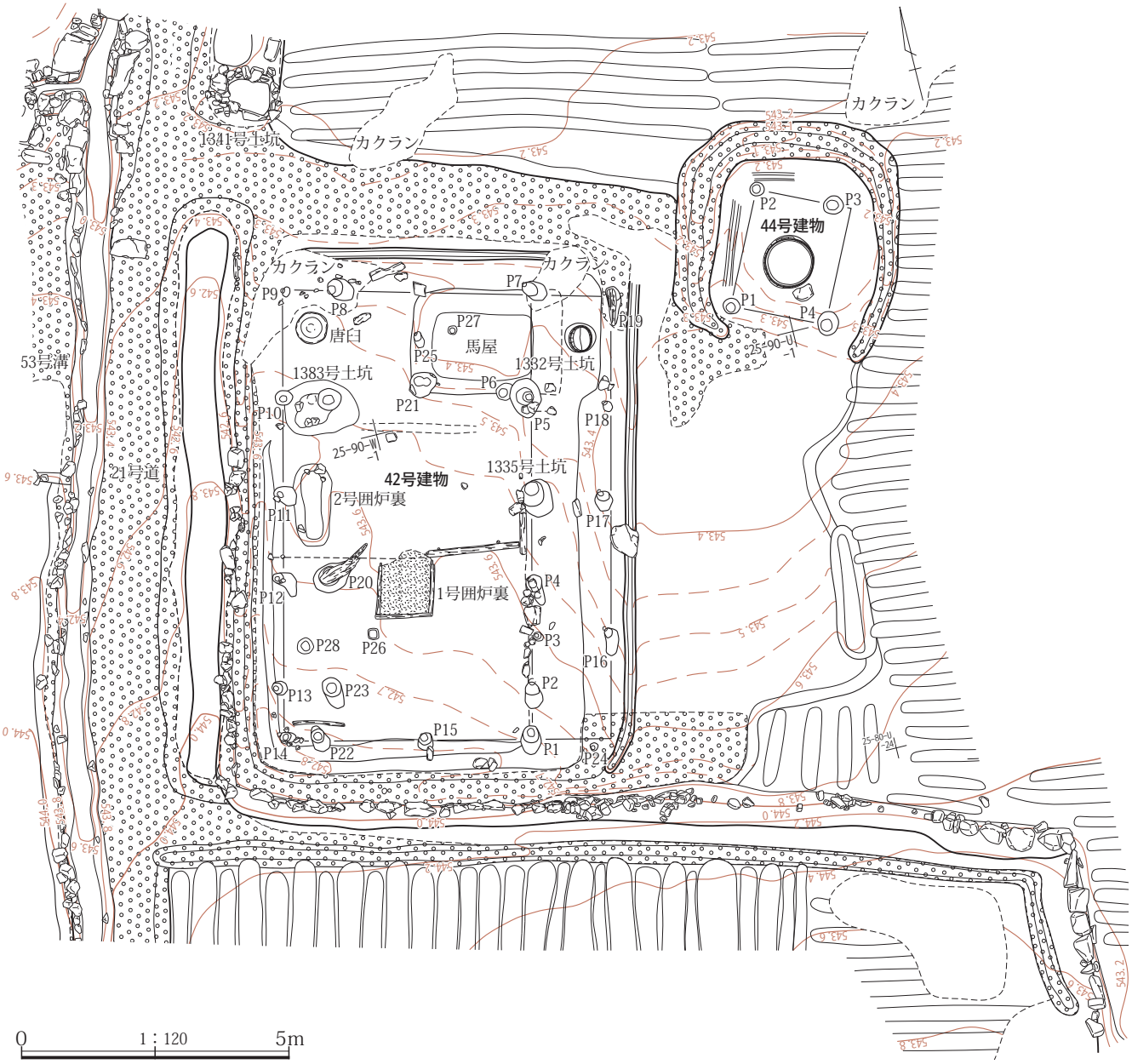
土間北東部分、馬屋北西部分に唐臼がある。竈は泥流で埋没した段階では廃棄され埋められていた。

【構造・規模】柱は全て掘立柱である。掘立柱は直径約30cm、深さ約60cm前後の大きな上屋柱と思われる柱穴が南北方向に並行して２列並ぶ。その上屋柱の柱穴列を東西両側から囲むように直径20cm、深さ35cm前後の下屋柱と思われる柱穴列が並行して掘られている。柱穴の大きさは、上屋柱が下屋柱より直径で10cm太く、深さで25cm深く掘られている。上屋柱は屋根材・棟木・梁桁等を支える主要な構造材で、下屋柱は下屋部分だけを支える構造材であることを物語っているものと思われる。このように、上屋柱の柱穴が大きく、下屋柱の柱穴が小さい掘立柱建物は、14・36・41号建物でも認められる。これらの主屋の中で、42号建物は最も小さな建物である。

奥行方向の柱間は、上屋柱が3.68m(２間)、下屋柱が



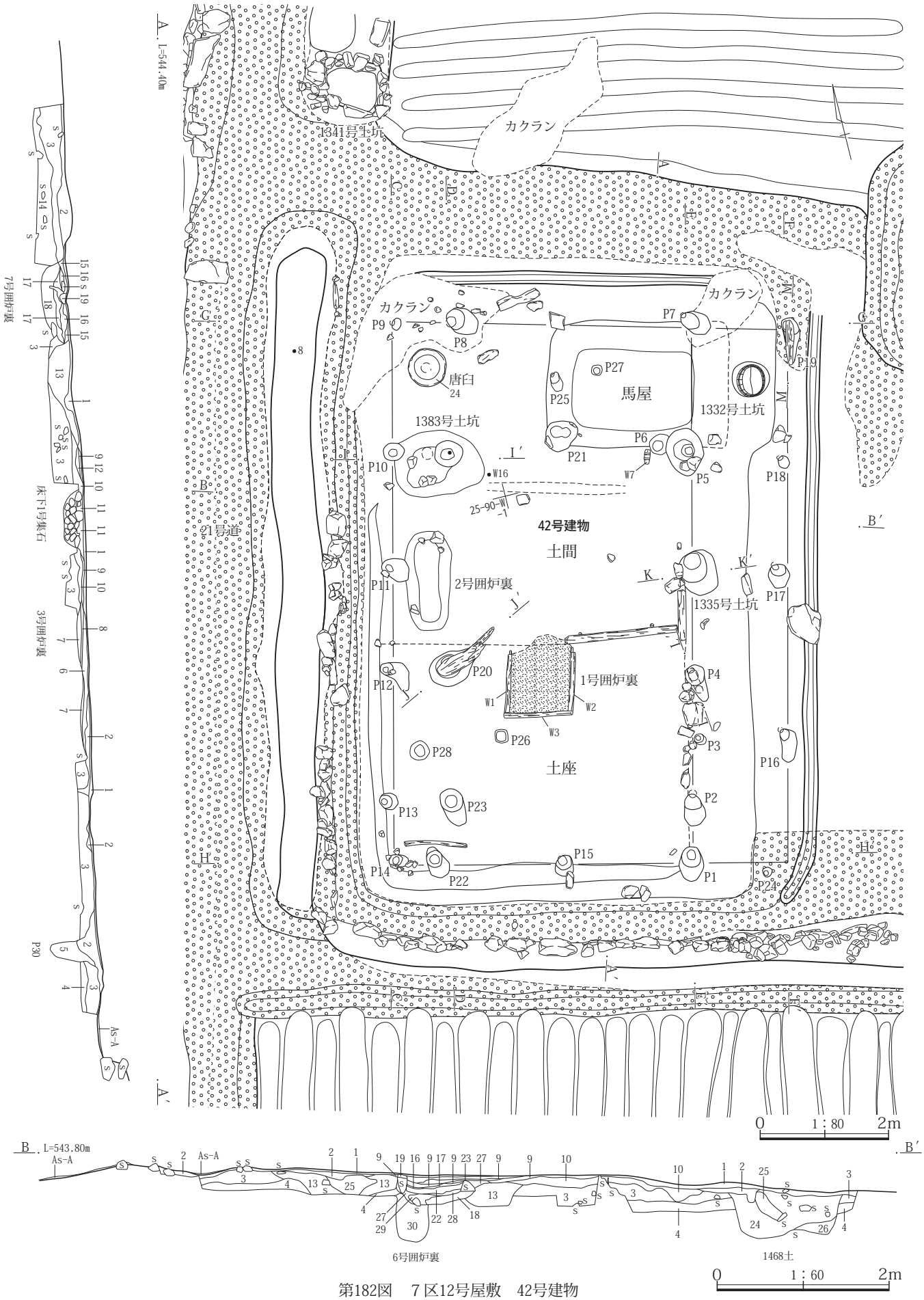
第180図　8区9号屋敷・7区12号屋敷位置図



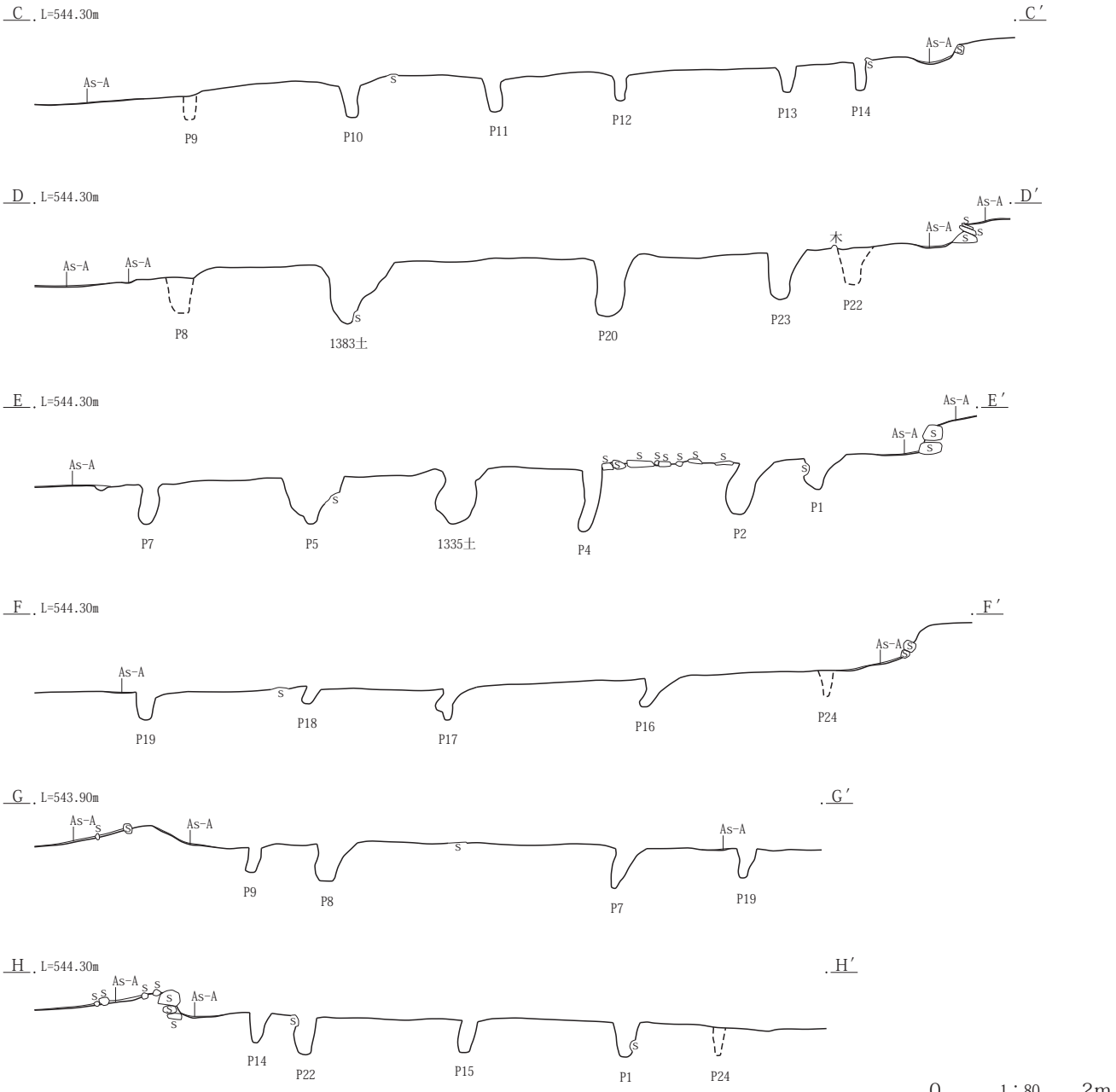
42号建物　A-A′・B-B′

1　暗褐色土(7.5YR3/4)　白色粒・褐色粒僅　炭化粒僅　鉄分付着　張り床部
2　暗褐色土(7.5YR3/4)　白色粒僅　褐色粒僅　小礫含　鉄分付着　しまり有
3　黒褐色土(7.5YR3/2)　白色粒僅　褐色粒僅　橙色粒僅含
4　黒褐色土(7.5YR2/2)　白色粒少含　褐色粒僅含　橙色粒僅含　小礫僅含
5　暗褐色土(7.5YR3/4)　白色粒僅　大き目の褐色粒含　小礫含　ピット覆土　やわらか
6　暗褐色土(7.5YR3/4)　白色粒・褐色粒僅　灰僅含
7　灰白色土(7.5YR8/2)　灰層
8　橙色土(7.5YR6/8)　白色粒僅　灰僅　径５㎜位の黄褐色ブロック多含
9　黄橙色土(7.5YR7/8)　細かい黄橙色粒の層　硬い
10　明褐色土(7.5YR5/6)　白色粒僅　小礫僅　炭化粒僅
11　明褐色土(7.5YR5/6)　白色粒僅　褐色ブロック含　多量の礫含径５cm以上も　床下１号集石覆土
12　暗褐色土(7.5YR3/3)　上面焼土　下部灰多　炭化粒僅
13　褐色土(7.5YR4/4)　白色粒僅　小褐色ブロック含　灰・炭化粒含　礫含
14　黒褐色土(7.5YR3/1)　白色粒僅　褐色粒僅　橙色粒僅含　礫含
15　褐灰色土(7.5YR4/4)　炭化物・灰・焼土粒・焼土ブロック含　やわらか
16　灰白色土(7.5YR8/1)　炭化粒・焼土粒僅　灰層
17　黄橙色土(7.5YR8/8)　白色粒僅　焼土層
18　褐灰色土(5YR4/1)　礫・灰を全面に含
19　赤色土(10R5/8　焼土ブロック
20　にぶい褐色土(7.5YR5/3)　灰・焼土粒・炭化粒僅　やわらか
21　暗褐色土(7.5YR3/4)　白色粒・褐色粒僅　径３～５cm礫含　柱穴埋め土
22　褐灰色土(7.5YR4/1)　焼土粒・焼土ブロック・炭化粒含　多量の灰層
23　黒色土(7.5YR2/1)　多量の細かい炭化物片層　焼土粒・灰含
24　明褐色土(7.5YR5/6)　礫、炭化物、砂粒を多含
25　暗褐色土(7.5YR3/4)　白色粒僅　炭化物片多　やわらか
26　明褐色土(7.5YR5/6)　砂礫層
27　褐灰色土(7.5YR4/1)　明褐色ブロック、灰、炭化物、焼土粒含
28　褐灰色土(5YR4/1)　灰白色の灰を全面に含　白色粒僅　礫含
29　明褐色土(7.5YR5/6)　白色粒僅　径５cm礫含　灰白色灰含　黒褐色ブロック含
30　明褐色土(7.5YR5/6)　白色粒僅　径５cm礫小僅　ぼそぼそ　しまりなし

第181図　７区12号屋敷位置図



第182図　7区12号屋敷　42号建物



42号建物　1335号土坑・P19(K-K′ M-M′)

1　暗褐色土(7.5YR3/4)　1783(天明３)年の浅間山噴火に伴う泥流堆積物

第183図　７区12号屋敷　42号建物断面

上屋柱東側約1.5m、上屋柱西側約0.9mの位置に建てられている。室内は上屋柱と西側の下屋柱部分までで、4.6m（２間半）。上屋柱から東側約1.5mの下屋柱までの空間は室外となっている。それは残されている土間や、土座に敷かれている筵の存在から明らかである。

上屋柱がＰ20の中に残っていた。柱穴底に平石等は埋められていなかった。他の柱穴の中にも平石は埋められていなかった。

【建築部材】Ｐ20に上屋柱が南西方向から北東方向に45度前後の角度で、倒れた状態で柱の下部が出土している。残っていた柱の長さは142㎝、地中に埋まっていた深さは55㎝、地上には87㎝程出ていたものと思われる。柱の直径は21㎝で、地中に埋められていた部分の表皮は除去されていたが、表面は平らに削られていない。地表面に出ている面は割れており、残りは悪いが方形に整形されていた。枘穴等は確認できない。樹種は不明であるが、他の調査例では大部分がクリであるので、クリが使われていたと思われる。

Ｐ４の上屋柱の場所にも、木材と思われる中央が空洞化した柱状の遺構が残っていた。

ピット一覧表参照

No.	長径㎝	短径㎝	深さ㎝
Ｐ１	32	29	32
Ｐ２	27	24	63
Ｐ３	16	14	14
Ｐ４	32	30	86
Ｐ５	21	19	75
Ｐ６	34	28	48
Ｐ７	32	24	77
Ｐ８	32	28	66
Ｐ９	21	13	54
Ｐ10	32	26	49
Ｐ11	47	33	44
Ｐ12	20	19	31
Ｐ13	22	18	19
Ｐ14	21	18	17
Ｐ15	26	22	27
Ｐ16	18	15	46
Ｐ17	24	19	63
Ｐ18	20	17	41
Ｐ19	31	23	61
Ｐ20	36	34	70
Ｐ21	50	47	51
Ｐ22	26	25	30
Ｐ23	39	36	50
Ｐ24	16	13	32

（１）１号囲炉裏（第184図、PL. 159）

【位置・検出状況】主屋の土間と土座境部分の土座面に１号囲炉裏が造られている。囲炉裏の西・東・南の３面が土座、北の１面が土間に面している。囲炉裏を囲むように木製の枠木が、土間に面した１か所以外に据えられた状態で残っていた。残っていなかった枠木部分には枠木が据えられていた痕跡が残り、東西の枠木のホゾが、北側の枠木に差し込まれていたことを物語るように良好に残っていた。その枠木に沿って、土座と土間の間に置かれた角材である仕切り材が置かれていた様子が残っていた。この枠木と仕切り材は両方とも残っていなかった。枠木に囲まれた囲炉裏内には、天明泥流が厚さ７～14㎝程で堆積しており、天明泥流で埋没した段階では、４面とも枠木は存在していたと思われる。

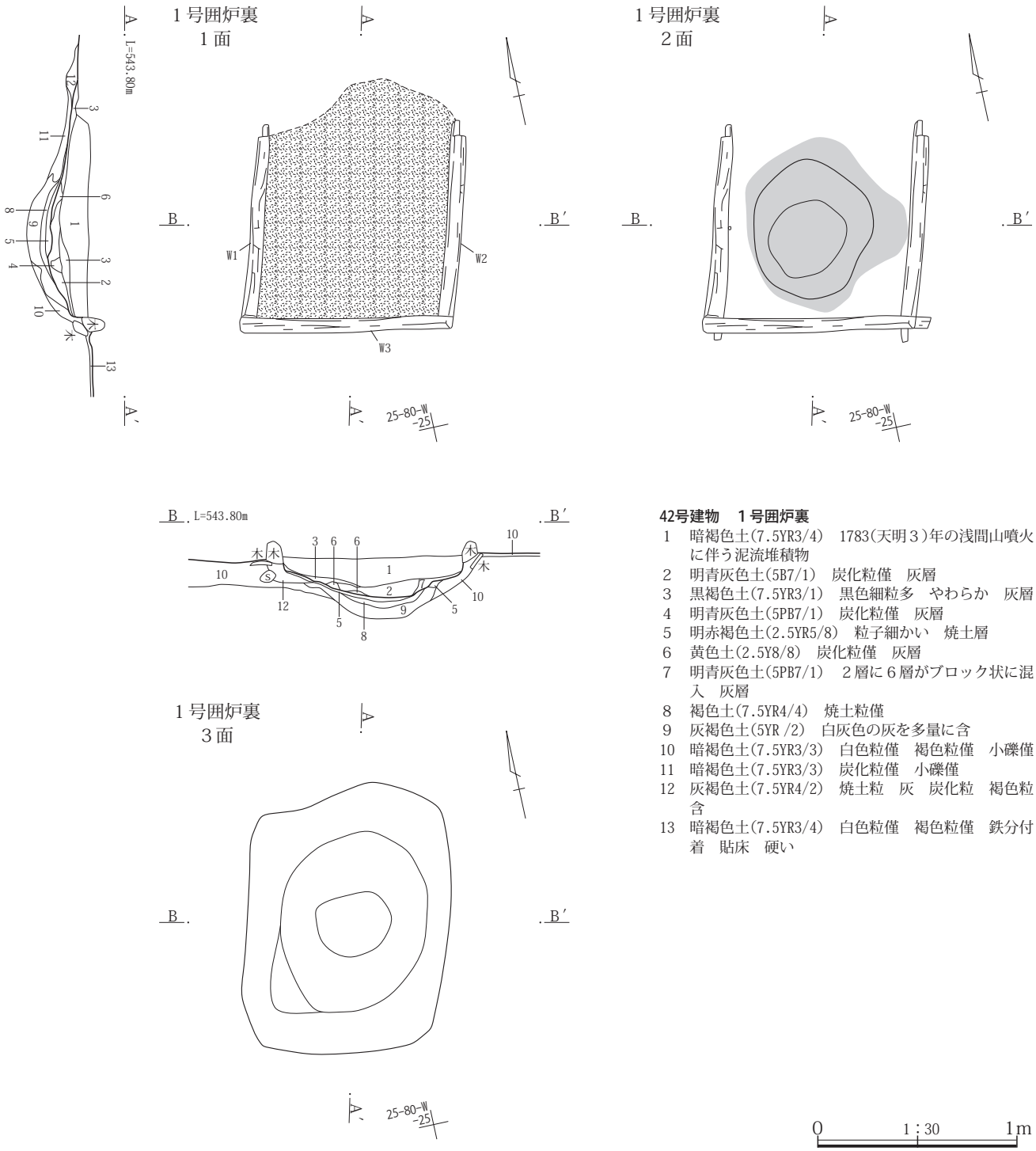
【規模】枠木で囲まれた囲炉裏の枠木内径90㎝、枠木外径105㎝。枠木上端からの深さは縁辺部で10㎝前後、囲炉裏中央部で14㎝前後と中央部が深くなっている。囲炉裏内部は天明泥流で埋まっていた。この枠木は太さ直径７～12㎝であり、土間に３㎝前後埋められ土間面より７㎝前後高くなるように設置されていたようである。

枠木は直径７～12㎝、長さ104～113㎝の丸材を半裁して、両端部分に枘穴とホゾを造り方形に組んでいる。土間と土座奥の２本は枘穴で、残っていた材の長さは113㎝、直交する枠木２本はホゾが造られており、長さは113㎝および109㎝で、枘穴のある材が少し長くなっている。枠木は丸太材を半裁されており、表面を外側、内側を囲炉裏内面に向けて組まれていた。外側は削って滑らかに加工しているが、囲炉裏内面に位置する割られた内面は加工されていない。その面の上部は焦げて黒くなっているのが確認できる。

【構造】枠木で囲まれた囲炉裏内部は天明泥流で埋まっており、泥流を除去することにより囲炉裏使用状況がわかる。枠木内側縁辺部は土間面より７㎝前後深く、囲炉裏中央部は土間面より14㎝深い。囲炉裏は土間面から15～30㎝低い面まで、多くの灰と少量の焼土が層状に堆積していた。これらの灰層や焼土層は、これまで調査してきた西宮・東宮遺跡でも、囲炉裏の下部に残っていた調査例がある。それらの例から、この囲炉裏の使用面は土間から15㎝前後低い位置であり、そこから下に堆積している多くの灰層や少量の焼土層は、囲炉裏を効率よく使用するために保存していたものと思われる。

（２）唐臼

【概要・規模・所見】土間北西コーナーの土間部分に石製の臼が、口縁部が土間面より約10㎝高い状態で埋められ



42号建物　１号囲炉裏

1　暗褐色土(7.5YR3/4)　1783(天明３)年の浅間山噴火に伴う泥流堆積物
2　明青灰色土(5B7/1)　炭化粒僅　灰層
3　黒褐色土(7.5YR3/1)　黒色細粒多　やわらか　灰層
4　明青灰色土(5PB7/1)　炭化粒僅　灰層
5　明赤褐色土(2.5YR5/8)　粒子細かい　焼土層
6　黄色土(2.5Y8/8)　炭化粒僅　灰層
7　明青灰色土(5PB7/1)　２層に６層がブロック状に混入　灰層
8　褐色土(7.5YR4/4)　焼土粒僅
9　灰褐色土(5YR /2)　白灰色の灰を多量に含
10　暗褐色土(7.5YR3/3)　白色粒僅　褐色粒僅　小礫僅
11　暗褐色土(7.5YR3/3)　炭化粒僅　小礫僅
12　灰褐色土(7.5YR4/2)　焼土粒　灰　炭化粒　褐色粒含
13　暗褐色土(7.5YR3/4)　白色粒僅　褐色粒僅　鉄分付着　貼床　硬い

0　1：30　1m

第184図　７区12号屋敷　42号建物１号囲炉裏

ていた。臼の出土位置や出土状態から唐臼と思われる。唐臼の杵を支える支脚穴は、通常1.3m前後離れた場所に掘られている。発掘段階では明瞭な支脚穴は確認していないが、南の1383号土坑の中に２つの小穴があり、東側の掘り込みは上屋柱、西側の掘り込みはＰ10の下屋柱であり、その中間部分の深さ40㎝程の掘り込み面に支脚が埋められていたものと思われる。

【規模・形状】石製の臼の大きさは外側高さ40㎝、内面深さ25㎝、外側幅62㎝、内側幅38㎝、口縁部幅11㎝。内面の最大幅は口縁部の少し下の部分であり、口縁上端部付近で少し内傾し狭くなっている。口唇部はわずかに内傾している。臼は水平に埋められたのではなく、支脚が埋められていたと思われる南面が少し高くなるように埋められていた。このような事例は、30・39・41号建物や東宮遺跡Ⅳ区７号屋敷13号建物でも認められる。

（３）室（２号囲炉裏）（第185図）

【位置・構造・規模】南の土間に２号囲炉裏として調査された遺構がある。土間から１号囲炉裏に向かうと右側（西）に位置する。そこに、長さ140㎝前後、太さ５～６㎝の材木が６本まとまって置かれていた。その下には長さ1.6m、幅65㎝、深さ10㎝程の掘り込みがあった。土坑の上面の一部には天明泥流が堆積し、その下の覆土中にわずかな焼土粒と炭化粒が含まれていた。灰は検出されていない。

【所見】ほかに多く調査されている囲炉裏は長方形で、多くの焼土粒や灰、少量の炭等が出土しているが、この２号囲炉裏ではそのような特色がない。

他の主屋では竈と囲炉裏の間に位置し、長方形に浅く掘り込まれている遺構を室と呼称した。42号建物では、本来室と同じような用途であったが、天明泥流で埋まる段階では多くの材木がまとまって置かれており、囲炉裏の燃木を貯蔵しておくための施設であったと考えたい。

（４）馬屋（第186図、PL. 157）

【位置・構造・規模】42号建物出入口右側に位置する。柱穴が３本確認されているが、北西コーナー部分の柱穴は確認できなかった。建物正面の東側のＰ５とＰ７（両柱とも上屋柱）の柱穴距離は約190㎝、Ｐ５（上屋柱）とＰ21（上屋柱ではない）の柱穴距離は210㎝、Ｐ５と埋設桶（1332号土坑）までの距離は約150㎝である。これらの範囲が馬屋とすると、間口方向190㎝、奥行き方向260㎝前後の奥行方向に細長い馬屋と思われる。Ｐ５とＰ７の東側に下屋柱であるＰ18とＰ19がある。この柱の中間付近が埋設桶の西側付近である。埋設桶に近接した場所に掘立柱はないが、Ｐ５とＰ７の柱とＰ18とＰ19の柱を利用して、馬屋と埋設桶を仕切る簡単な構造物の存在を想定したい。

馬屋土間部分の標高と東側の馬屋桶（1332号土坑）周辺の標高は543.38m前後であり、ほぼ同じ高さである。このことからも、馬屋はおそらく馬屋桶西端までの範囲であったと思われる。このように考えると、馬屋は下屋部分に50㎝前後飛び出る状態で造られており、口径約53㎝の埋設桶はさらに東側に位置する。下屋の幅は約1.5mと広いので、馬屋と埋設桶は、下屋の下からはみ出すことはなかった。

（５）埋設桶（1332号土坑・便槽）（第186図、PL. 157）

【概要・規模】調査段階で1332号土坑とした。桶は底板と側板は大部分腐って植物繊維部分が残っていた。桶の大きさは口径53㎝、底径45㎝、高さ41㎝で埋設桶としては小さい。側板外側にタガの痕跡が、底面から22㎝と28㎝の位置に２か所残っていた。桶は土坑状に掘り込まれた中に埋められ、掘り出した土で埋められていた。

（６）1335号土坑

調査段階で1335号土坑として調査した、主屋出入口部分左側（南側）の上屋柱の柱穴である。

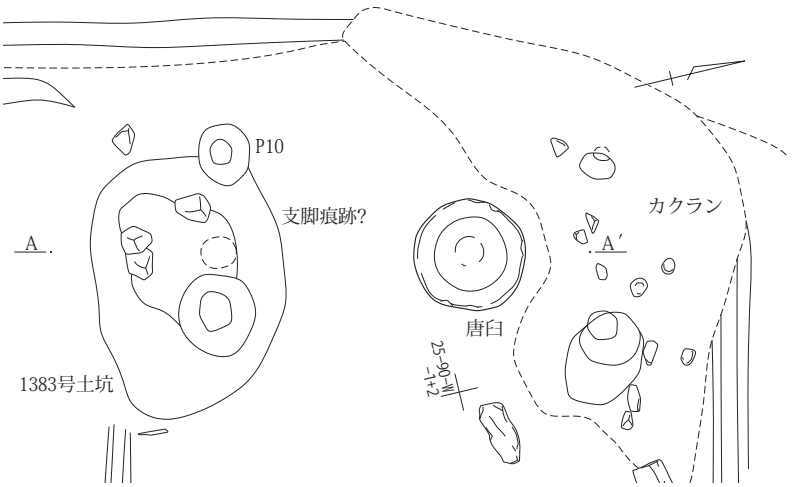
直径60㎝、深さ64㎝である。

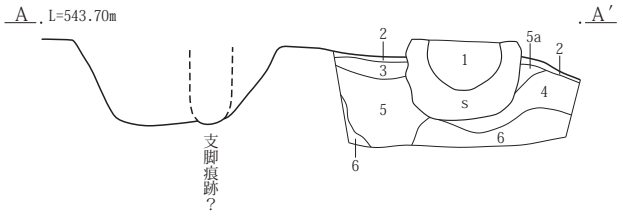
（７）1383号土坑

他の屋敷で竈が造られている場所に掘り込みがあり、浅間泥流で埋まっていた。調査担当は1383号土坑として調査した。内部から焼土や炭は全く出土していない。土坑の東側の掘り込みは上屋柱、西側の掘り込みはＰ10の下屋柱であり、その中間部分の幅30㎝、深さ38㎝程の掘り込み部分に支脚が埋められていたことが考えられる。唐臼から約1.3m離れている。

（８）土座（第187図、PL. 153・155・158）

主屋は北側約半分が土間、南側が土座となっており、板間はない。土座とは、土間にヨシ・アサ・ガマ等の植物を厚く敷き、その上にネコ等を敷いた部屋を呼称した。これまで、平成28（2017）年度頃まで調査してきた西宮・東宮遺跡では、土座の存在は明らかでなかった。その後、西宮遺跡や石川原遺跡で存在が確認されるように



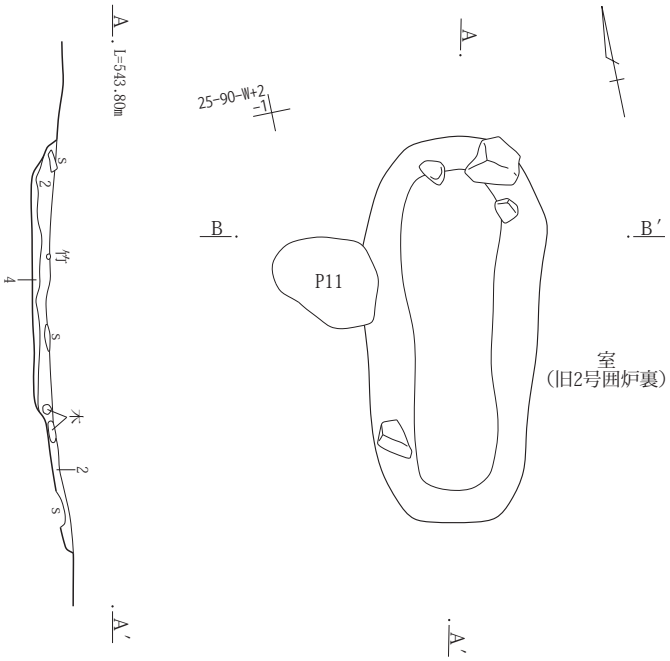


42号建物　唐臼

1　暗褐色土(7.5YR3/4)　1783(天明３)年の浅間山噴火に伴う泥流堆積物
2　暗褐色土(7.5YR3/4)　白色粒･褐色粒僅　鉄分付着　硬い　貼床？
3　暗褐色土(7.5YR3/4)　白色粒・褐色粒僅　炭化粒僅　下面鉄分付着　硬い
4　褐色土(7.5YR4/4)　白色粒僅　径２～３㎝礫含
5　褐色土(7.5YR4/4)　褐色粒多含　小礫含　やわらか
5a　褐色土(7.5YR4/4)　明褐色ブロック含　やわらか
6　黒褐色土(7.5YR2/2)　白色粒少含　褐色粒僅　橙色粒僅　拳大以上の礫多

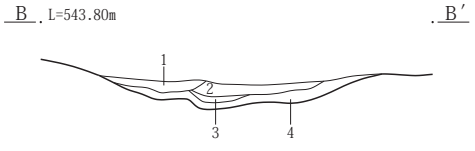
0　1：40　1m

室(旧２号囲炉裏)



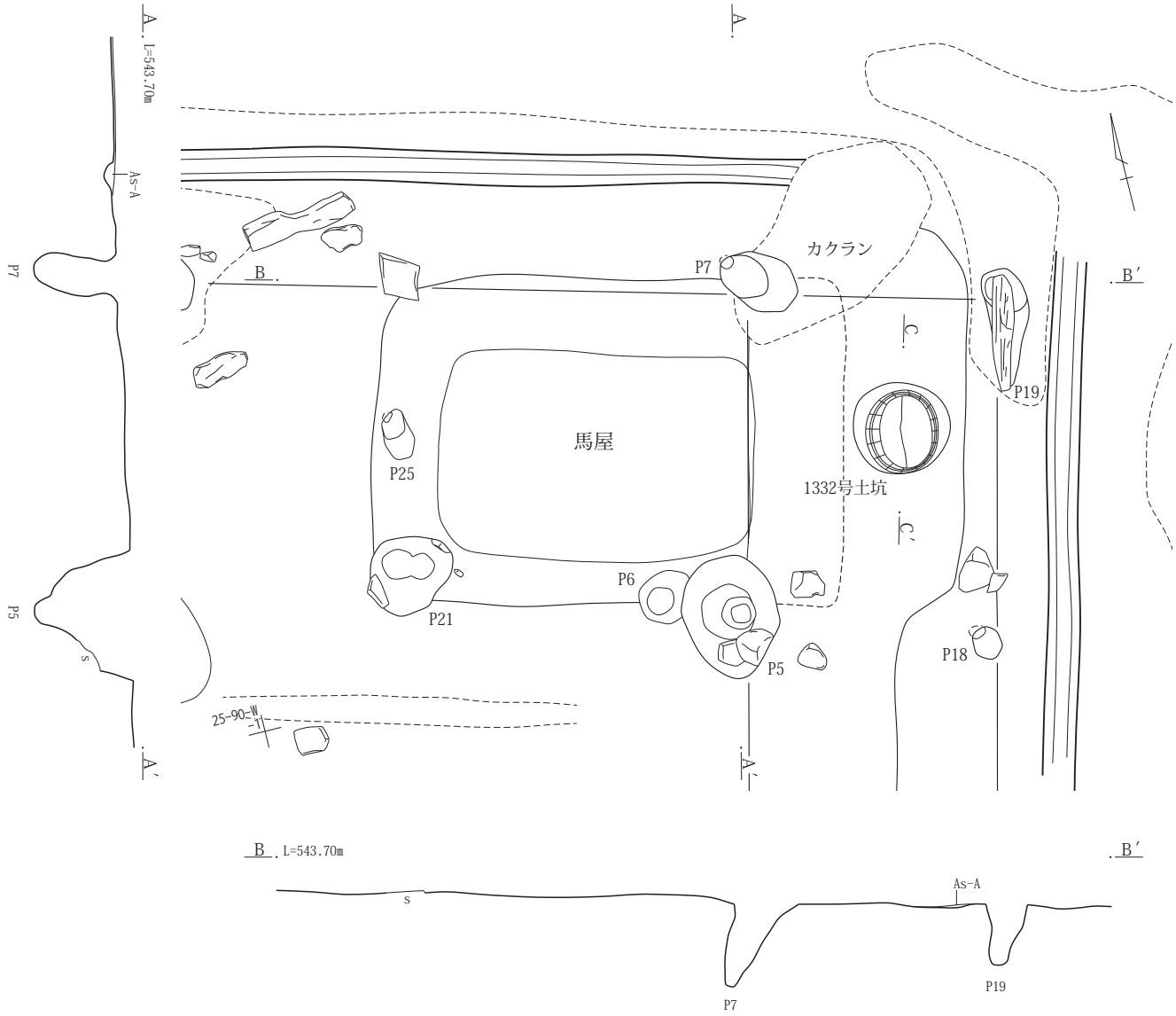
42号建物　室（２号囲炉裏）

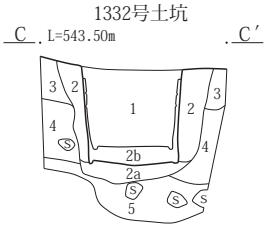
1　暗褐色土(7.5YR3/4)　1783(天明３)年の浅間山噴火に伴う泥流堆積物　鉄分付着
2　黒褐色土(7.5YR3/1)　褐色粒僅　炭化粒僅　焼土粒僅
3　褐色土(7.5YR4/4)　焼土粒少量　褐色粒僅　炭化粒僅
4　褐灰色土(7.5YR4/1)　白色粒僅　褐色粒僅　小礫僅



0　1：30　1m

第185図　７区12号屋敷　42号建物唐臼、室(旧２号囲炉裏)





42号建物　1332号土坑

1　暗褐色土(7.5YR3/4)　1783(天明３)年の浅間山噴火に伴う泥流堆積物
2　暗褐色土(7.5YR3/4)　白色粒･褐色粒僅　礫　黄色ブロック含　鉄分付着　埋め土
2a　暗褐色土(7.5YR3/4)　白色粒・褐色粒僅　礫　砂粒多
2b　暗褐色土(7.5YR3/4)　白色粒・褐色粒僅　礫僅　砂粒多
3　黒褐色土(7.5YR3/2)　白色粒僅　褐色粒僅　橙色粒僅
4　黒褐色土(7.5YR2/2)　白色粒少　褐色粒僅　橙色粒僅　小礫僅
5　明黄褐色(10YR6/6)　白色粒僅　礫含　砂礫層

0　1：40　1m

第186図　７区12号屋敷　42号建物馬屋

なった。

土座は囲炉裏を持つ上屋柱部分の約２間四方の部屋と、奥になる西側の半間×２間の下屋柱部分の狭い部屋に分かれるようである。東側の囲炉裏を持つ部屋の土間ほぼ全面に縦糸が明瞭に残る敷物が残っていた。敷物は基本２層構造であり、土間面にヨシ・アサ・ガマ等と思われる植物の葉や茎を厚く敷き、その上にネコが敷かれていた。石臼の下や周辺には、ネコの上にさらに目の細かい現在の畳表と非常に似ているゴザが敷かれていた。敷かれた植物の厚さは圧縮されていて、現状では1.5㎝前後と薄くなっている。当時の厚さを知るために、現在残っているネコの厚さと、出土したネコの厚さを比較すると、出土したネコの厚さは1/3であった。この考え方から推定すると、土座に敷かれている植物やネコの厚さは、現状の厚さ1.5㎝の３倍の厚さで4.5㎝となる。ヨシ・アサ・ガマ等を敷き、その上にネコを敷いて、厚さ５㎝前後の植物の敷物がほぼ全面敷かれた土座であったことが考えられる。ネコの下のヨシ・アサ・ガマ等は置かれているだけであり、縄等で織られていないので、固定されていない。そのために、実際の厚さはさらに厚かった可能性がある。土間と土座の境界に置かれていた約９㎝角の角材は、それらの植物の葉が土間に出ないための仕切り材である。この角材が土座に敷かれた植物により押されて土間方向に移動しないように、土間側に２本の杭で固定されていた。この角材の高さを超えない程度の厚さに土座の植物やネコ等が敷かれていたことが考えられる。

囲炉裏枠木の東と南の土座部分に、枠木に沿って枠木とほぼ同じ幅でネコの織り目が押しつぶされたような状態となっていた。材は残っていなかったが、枠木に沿って角材等が置かれていたことが考えられる。

枠木は、丸材を半裁して内面を囲炉裏側に向けて置かれており、枠木上面は基本的に丸材である。その外側に並行して角材が置かれたならば、食器等を置くのに非常に便利である。周辺から多くの食器類が出土している。またこの角材は、囲炉裏を囲むように敷かれていた植物の茎やネコ等を上から押さえつける役割も果たしていたのではないだろうか。

(ア)ネコの大きさと敷かれた範囲

敷かれていたネコは、囲炉裏周辺部分に良好に残っていた。良好に残っていなかった範囲は、南側の壁面付近と、西側上屋柱付近から西側壁面付近である。ネコ等が良好に残っていなかった部分では植物痕が残っていたが、経糸は全く残っていなく、ネコが敷かれていたことは確認できない。ゴザが明瞭に残っていた囲炉裏周辺からは、石臼・桝・火起こし・木製品等の生活用具が多く出土しているが、残っていない奥の下屋柱部分から生活用具の出土は少ない。同じ土座でも使われ方が異なっていたようである。

土座に敷かれたネコは、囲炉裏を挟んで西・東に各１枚(ネコ１・２)、囲炉裏南側の土間面で東西２枚(ネコ３・４)、長方形のネコを土間と平行になるように東西方向に敷いている。土座南側壁面の狭い範囲は、それらのネコと直行する方向で西側に２枚(ネコ６・７)、並行する方向で東側に１枚(ネコ５)短いネコが敷かれていた。ネコの横幅の大きさを最も良好に残しているのは、囲炉裏東側の１枚である。土間との境の角材から土座南側のネコの範囲の幅は144㎝である。ネコの長さを推定できるのは囲炉裏南側の１枚である。西側は残りが悪いが、囲炉裏枠木東側付近までが１枚のネコの痕跡を残している。長さ約200㎝、幅140㎝の大きさのネコが使われていた可能性が指摘できる。縄で出来ている縦糸の数は48本まで確認できる。縦糸の間隔は３㎝である。

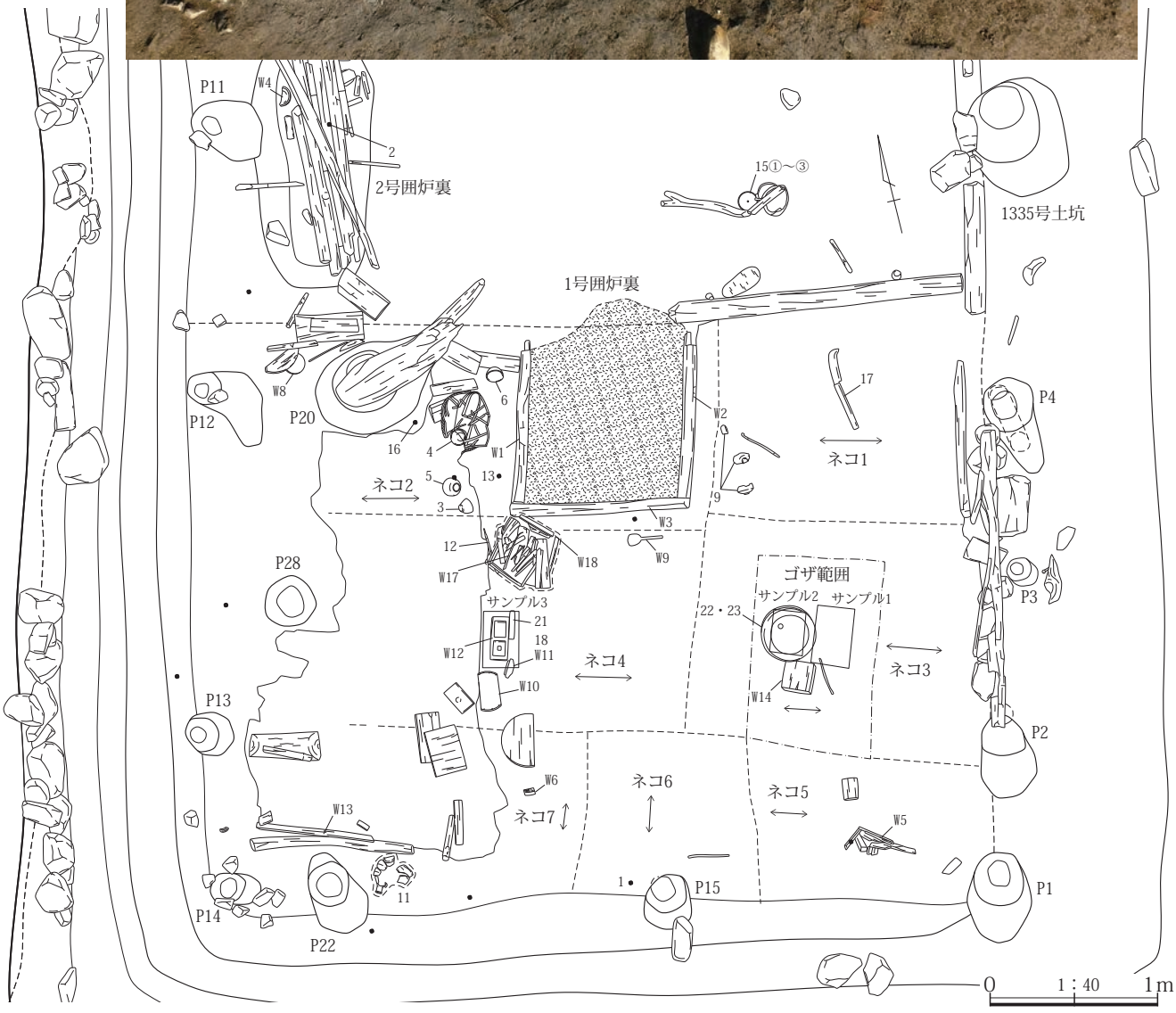
しかし、これらのネコは一部が重なリ、折り曲げて使用していることが考えられ、重複していないネコはもう少し大きい。ネコは縦糸に縄、横糸に束ねた藁を用いて編んでいる。

このネコとよく似た製品を筆者は小さいころ使っていた。麦を干すときに使用しており、ネコと呼称していた。大きさは長さ212㎝(７尺)、幅152㎝(５尺)、厚さ約２㎝である。縦糸(縄)は内側51本＋両脇２本(２本１組)、計53本であった。出土したネコと比較すると、重ね合わせや、折りたたまれて使用されていたことを考慮すると、ほぼ同じような製品であったことが考えられる。

火打ち箱の下で、良好に残っていたネコとネコの下の植物をサンプルとして取り上げ、真空凍結乾燥して保管した。

(イ)石臼周辺のゴザについて

囲炉裏南西の土座部分から、石製臼が置かれた状態で出土した。この臼のまわり約90㎝の方形の範囲には、ネ



第187図　７区12号屋敷　42号建物ネコの大きさと敷かれた範囲

サンプル１

サンプル２

サンプル３

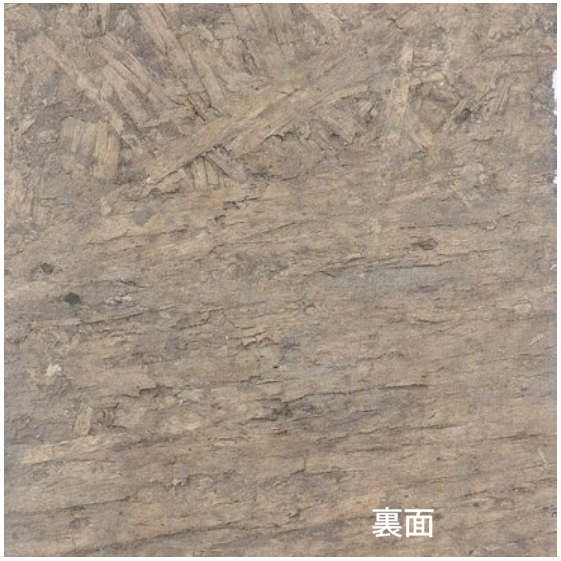


写真１　７区12号屋敷　42号建物土座ネコのサンプル

コの上に畳表と非常によく似たゴザが敷かれていた。臼の下は非常に残りが良好であり、石臼に接した東側をサンプル１、石臼の下をサンプル２として取り上げ、真空凍結乾燥して保管した。このゴザは石臼周辺にだけに敷かれており、石臼で穀類を粉にした粉を回収するために敷かれていたものと思われる。最近までこのように石臼で粉を引くときは、臼の下にゴザを敷いていた。このゴザの繊維は幅・厚さとも１㎜前後で、細長い光沢をもつ繊維であり、井草とよく似ている。縦糸の間隔は1.5㎝であり、現在の畳表のゴザと全く同じである。この植物が井草であったなら､この地域では生産していないので､陶磁器と同じように他地域の製品が持ち込まれ使われていたものと思われる。

（９）床下から検出された遺構

床面の調査終了後床下を調査した。その結果、天明３年泥流埋没以前に不要となり、埋められていた遺構が多く確認された。

（ア）竈（旧６号囲炉裏）（第188・189図、PL.160）

【概要・構造・規模】これまで屋敷の主屋相当として調査してきた建物には、必ず囲炉裏と竈は造られていた。しかし、天明泥流により埋没した段階で竈は存在していなかった。

土間中央部で、馬屋と１号囲炉裏の中間部分の床下部分に石を馬蹄形に並べ、内部にローム層や炭層・灰層が残り少量の焼土粒が混入していた。発掘担当は６号囲炉裏として調査した。しかし、土間に造られる囲炉裏の場合、馬蹄形に石を並べることはなく、囲炉裏の場合規模は90㎝前後であるが、この囲炉裏は石で囲まれた内側の大きさは75×45㎝である。石が並べられている囲炉裏は３号囲炉裏もあるが、使われている石の大きさが６号囲炉裏は長さ45㎝前後と大きく、３号囲炉裏では15㎝前後と小さい。おそらく、竈として一時期使われており、廃棄され、その後埋められて竈の上は土間となっていたものと思われる。

（イ）３・４号囲炉裏（第189・190図、PL.160・161）

【概要】３・４号囲炉裏は、泥流で埋まる段階では廃棄され埋められていた囲炉裏である。３号囲炉裏は１号囲炉裏の東側に接しており、４号囲炉裏は１号囲炉裏の南東部・３号囲炉裏の南西部に位置し、１・３号囲炉裏により上面を掘り込まれている。新旧関係は４→３→１号囲炉裏である。

（ウ）３号囲炉裏（第188・189図、PL.160）

【概要・規模】３号囲炉裏は西側で１号囲炉裏と接しており、１号囲炉裏より古い囲炉裏である。

３号囲炉裏は東西方向約80㎝、南北方向約90㎝の方形の範囲に、長さ15㎝以下の小さな石を１辺に10個前後方形に並べて、囲炉裏の範囲としている。東西方向が狭いのは、その部分で１号囲炉裏と重複しており、撹乱を受けているためと思われる。囲炉裏内面にはほぼ全面に灰層が堆積していた。灰層の厚さは５㎝である。灰層の下はにぶい黄橙色のロームである。焼土粒はほとんどなかった。

（エ）４号囲炉裏（第188・190図、PL.160・161）

【概要・規模】４号囲炉裏は１・３号囲炉裏の南側に位置し、両囲炉裏により上面が掘り込まれているが、下面は残っていた。両囲炉裏と重複していない南側では、囲炉裏を囲む角材の枠木のように、ロームが長方形に整形されていた。その内側には、板状の枠木が置かれたと思われる溝状の掘り込みが残っていた。また、囲炉裏全体にロームが持ち込まれていた。囲炉裏東西外側の幅93㎝、内側の幅84㎝、南北方向は残っていた囲炉裏下面で約85㎝である。囲炉裏上層は廃棄された段階で埋められていた。埋められた土の下には薄く灰層が全面に残っていた。その下には、囲炉裏を造るときに持ち込まれたロームが８㎝前後の厚さで堆積していた。囲炉裏中央部では、ロームが焼けて焼土化していた。

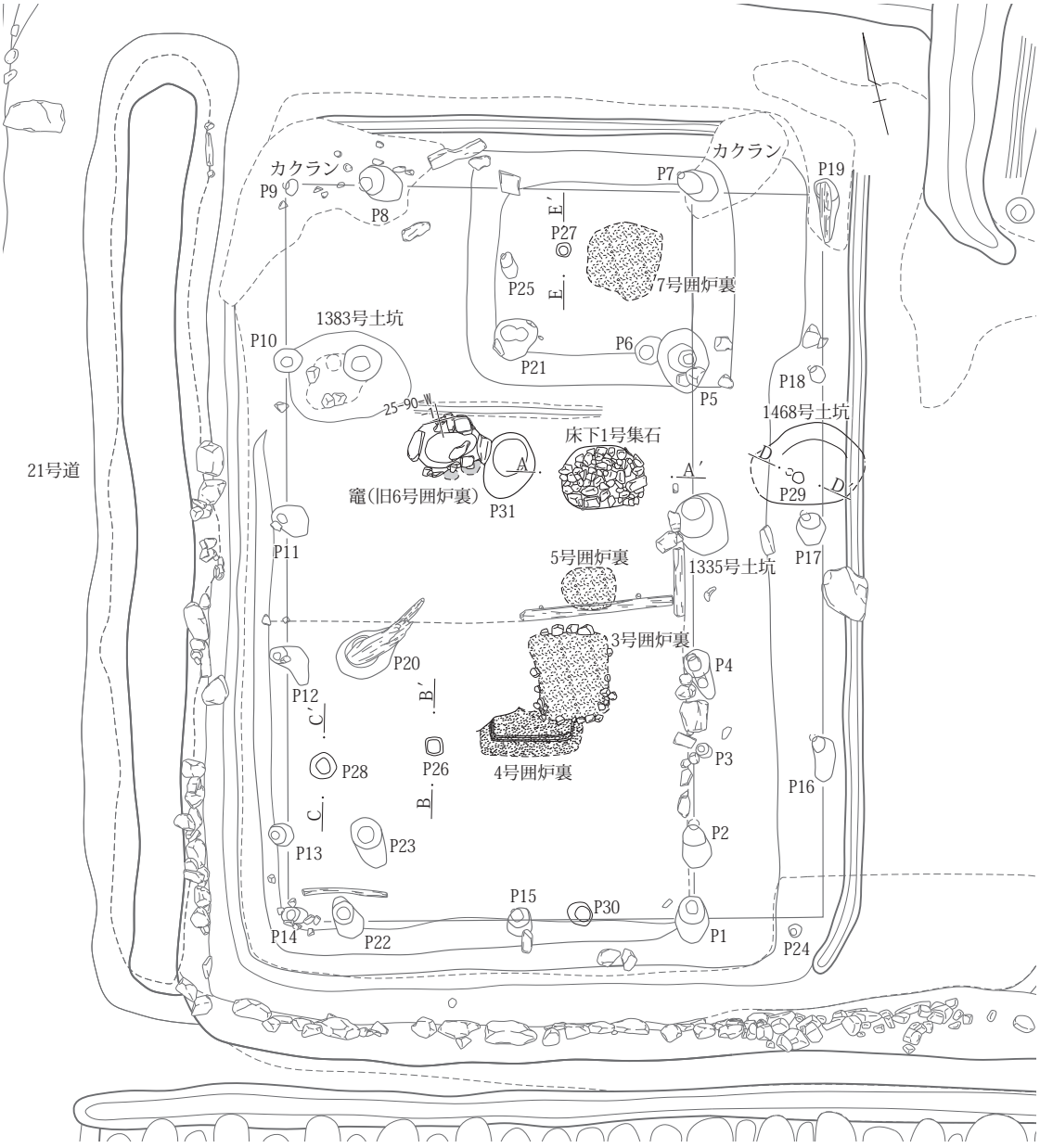
（オ）５号囲炉裏（第188・189図、PL.161）

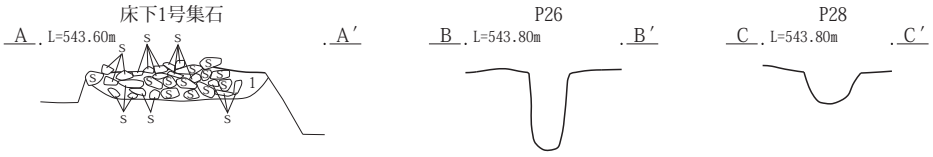
【概要・規模】１・３・４号囲炉裏北側に近接して造られていた。囲炉裏の範囲を示す方形の枠組は全く残っていない。直径50㎝、厚さ５㎝の灰層と、その下に５㎝前後の厚さの焼土層が残っていただけであった。これらの灰層や焼土層は撹乱を受けていない。囲炉裏は使用状況に近い状態で埋められ、廃棄されたものと思われる。

（カ）７号囲炉裏（第188・190図、PL.161）

【概要・規模】馬屋の下に位置する。残っていた範囲は少し円形に近いが、90㎝四方の方形に近い状態であり、表面には厚さ10㎝の灰の層、その下には厚さ50㎝前後の黄橙色のロームが堆積していた。一部焼土があるが、囲炉裏としては疑問である。

（キ）床下１号集石（第188図、PL.161）



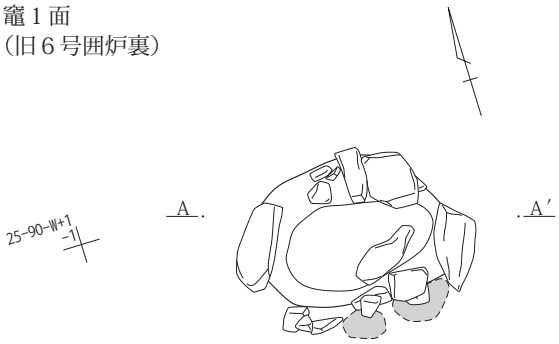


42号建物　床下１号集積

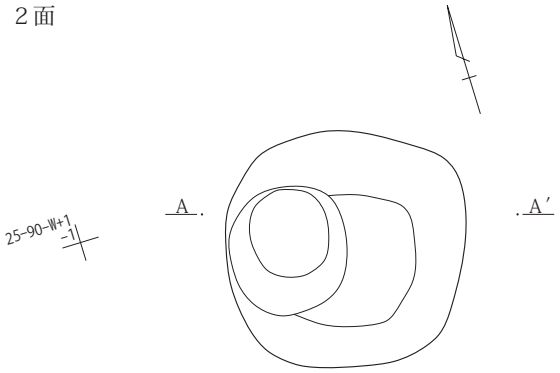
1　明褐色土(7.5YR5/6)　白色粒僅　褐色ブロック含
　多量の礫含径５cm以上も

第188図　７区12号屋敷　42号建物床下遺構

竈１面
（旧６号囲炉裏）

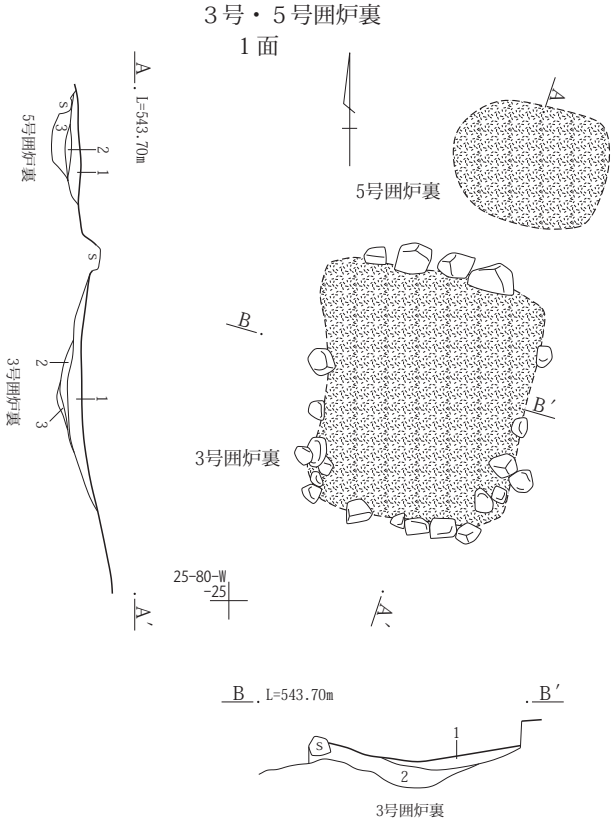


２面

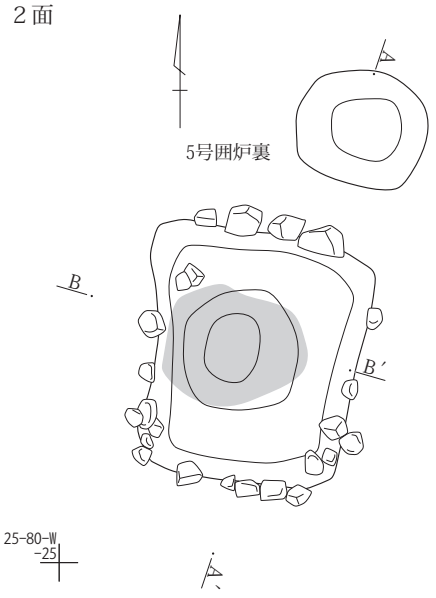


42号建物　竈（旧６号囲炉裏）
1　暗褐色土　土間の土に近い層
2　灰赤褐色土　灰と焼土混入層
3　黒色土　炭を主とした層
4　赤色土　焼土粒を主とした層
5　灰白色土　灰を主とした層
6　黒色土　多くの炭を含む層

３号・５号囲炉裏
１面



２面



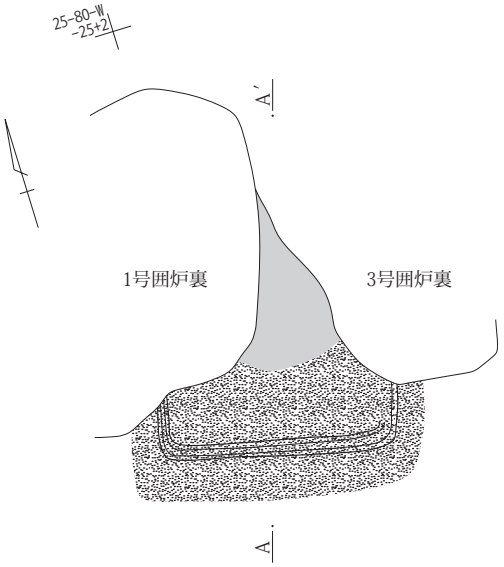
42号建物　３・５号囲炉裏
1　灰白色土　灰を主とした層
2　赤色土　焼土を主とした層
3　暗褐色土　地山層

0　1：30　1m

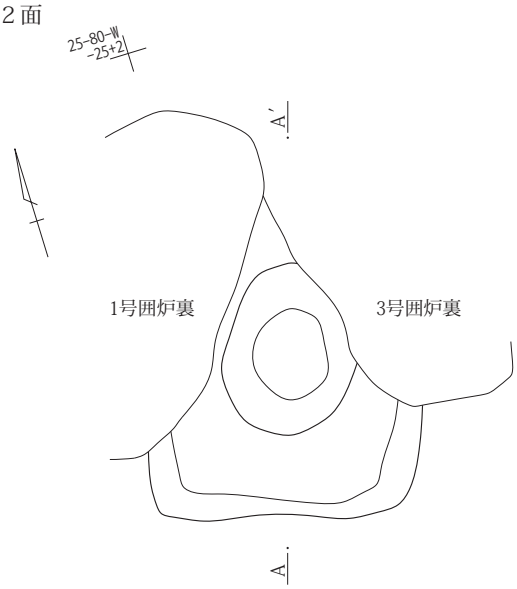
第189図　７区12号屋敷　42号建物竈（旧６号囲炉裏）、３号・５号囲炉裏

４号囲炉裏

１面



２面

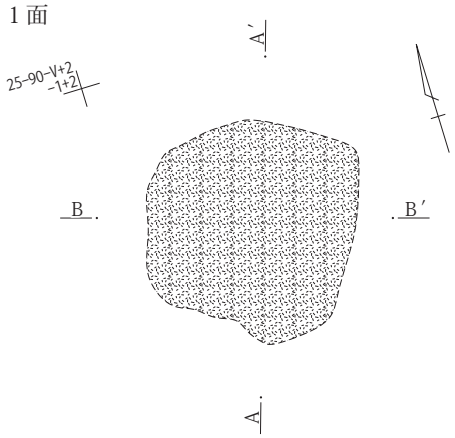


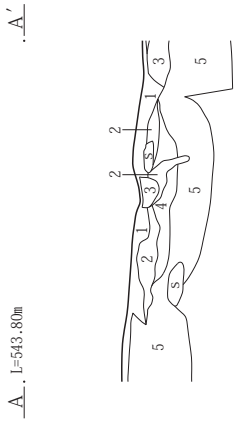
42号建物　４号囲炉裏

1　暗褐色土　土間の土に近い層
2　灰白色土　灰層
3　赤白土　焼土層
4　暗褐色土　地山層

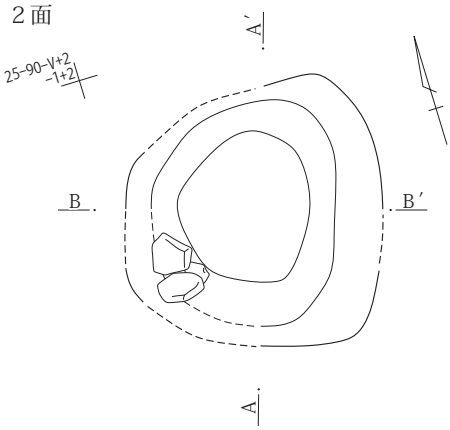
７号囲炉裏

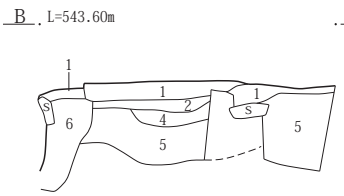
１面





２面





42号建物　７号囲炉裏

1　褐灰色土(7.5YR4/4)　炭化物・灰・焼土粒・焼土ブロック含　やわらか
2　灰白色土(7.5YR8/1)　炭化粒・焼土粒僅　灰層
3　赤色土(10R5/8)　焼土ブロック
4　黄橙色土(7.5YR8/8)　白色粒僅　焼土層
5　褐灰色土(5YR4/1)　礫・灰を全面に含
6　暗褐色土(7.5YR3/4)　白色粒・褐色粒僅　径３～５㎝礫含　柱穴埋め土

0　1：30　1m

第190図　７区12号屋敷　42号建物４号・７号囲炉裏

【概要・規模】土間中央部で建物出入口部分付近の土間の下に、多くの石がまとまって埋められていた。天明泥流下の42号建物床面では全く確認できなかった。規模は１ｍ×0.7m、深さ0.25m前後で、床面より下５～25㎝の深さの範囲である。これらの石は直径10㎝と大きさがほぼ一定であり、周辺部と中央部で埋め方に差はなかった。中に焼土・炭・灰・ローム等は全く含まれていない。何の目的で埋められたのか不明である。

(ク)1468号土坑(第188図、PL.161)

【概要・規模】建物出入口の下屋部分に掘られていた。土坑の規模は、長さ1.3m×幅0.9m前後、深さ0.5m前後である。掘り込み面は建物床面に近い。内部から多くの炭化物が出土しているが、42号建物と関係する土坑なのか不明である。

第３項　44号建物(12号屋敷・1334号土坑)

(第191図、PL.162)

25-80・90-Ｔ・Ｕ-25・１グリッドに位置する。

【概要・位置】12号屋敷北東部分に位置する建物であり、調査担当は44号建物として調査した。12号屋敷地内の建物であり、これまでの調査例から42号建物の付属建物であると考えられる。これまで、このような建物について外便所・厠等呼称してきたが、調査段階の呼称44号建物として報告する。

建物中央に桶が１個埋められており(1334号土坑)、その桶を囲むように４本の柱が建てられている。柱の外側には雨落溝が存在する。雨落溝の一部にはAs-A軽石が堆積していた。雨落溝は、出入口と思われる南側以外の東西北の３辺に明瞭に残っていた。出入口であると思われる南側の雨落溝部分は、明瞭な掘り込みは残っていないが、少しくぼみがあり、地山の石が多く露出していることより、雨水が落ちていたものと思われる。通常の建物の雨落溝は、柱から60㎝前後離れた場所であるが、この建物は90㎝前後離れている。４本柱は方形ではなく、台形に近い形で配置されている。この建物は、中央の埋められている桶を、雨水等から守るための簡単な構造であったと思われる。埋められていた桶(1334号土坑)の南東コーナー部分に石が１個置かれていた。

【構造・規模】掘立柱の配置から測定する規模は、南北方向225㎝、東西方向北側145㎝、南側180㎝。南北方向に少し長い長方形に近い。中央に幅92㎝、深さ55㎝の木製の桶(1334号土坑)が埋められており、中は浅間泥流で埋まっていた。桶の側板・底板は痕跡を残す程度残っていたが、取り上げることはできなかった。タガの痕跡が底面から５㎝と17㎝の位置に２本残っていた。

掘立柱である４本の柱穴は直径20～30㎝、深さ25～35㎝である。柱が深く埋められていなかったためか、柱が泥流により北西方向に押し倒されたような掘り込みはなかった。周溝は幅40～60㎝と幅が広く、深さは５～10㎝である。周溝中の雨水が埋められている桶に流れ込むことはないように工夫されている。

ピット一覧表参照

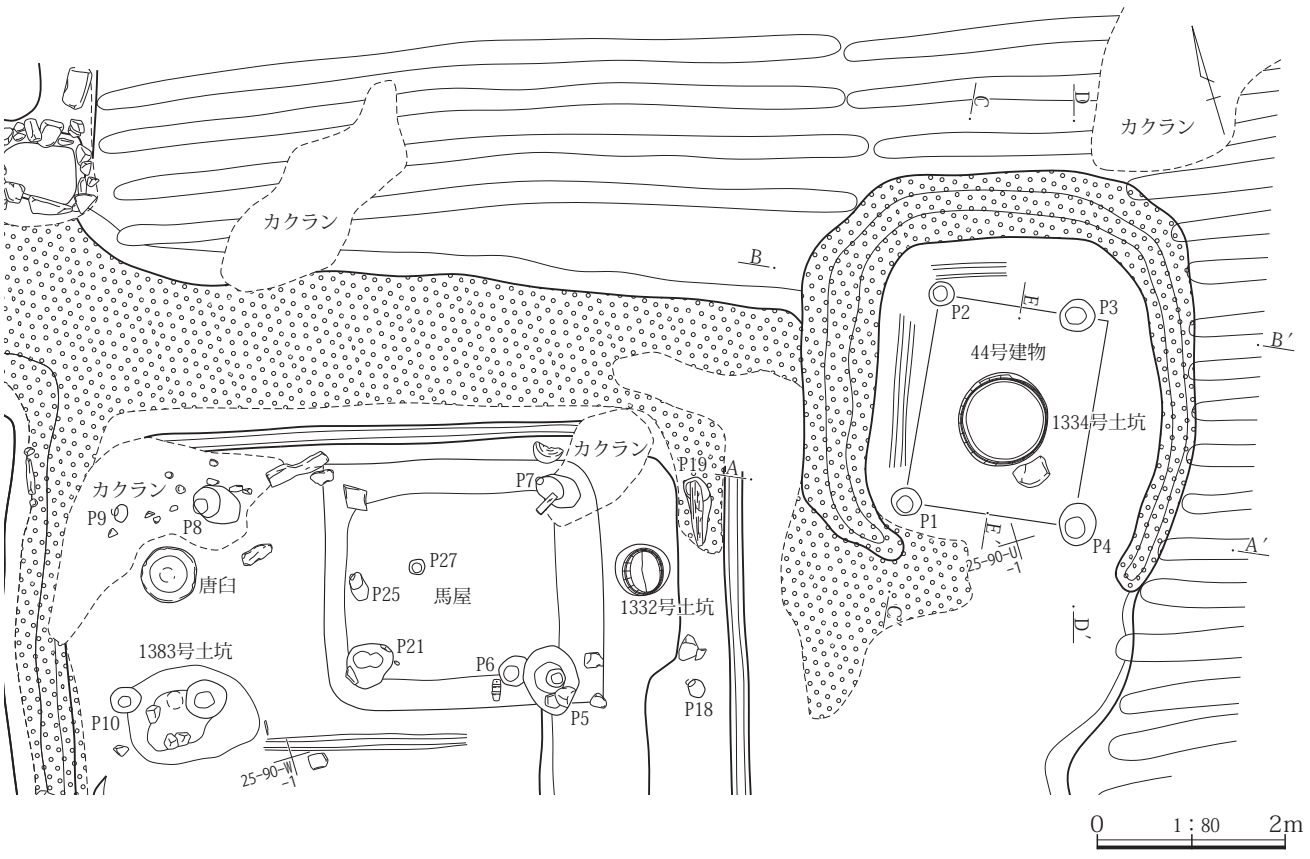
No.	長径cm	短径cm	深さcm
Ｐ１	32	29	25
Ｐ２	26	26	31
Ｐ３	38	35	28
Ｐ４	44	39	26

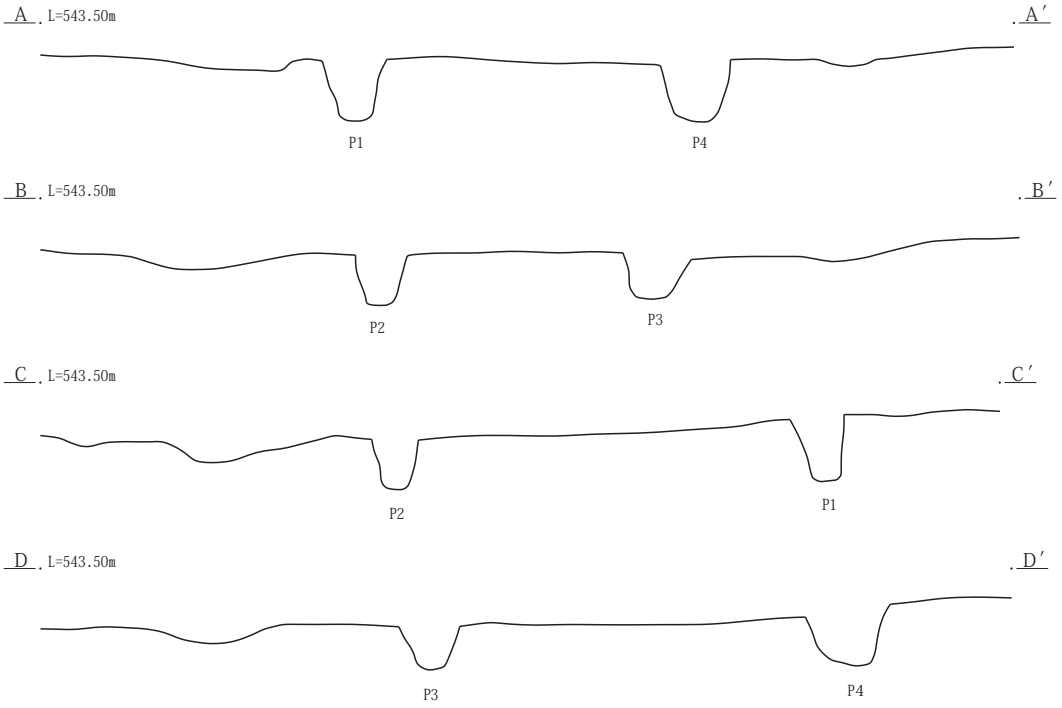
第４項　洗い場(1341号土坑)(第192図、PL.162)

25-90-W-２グリッドに位置する。

【概要】12号屋敷は21号道の東側に接しており、21号道の西側には53号溝がある。42号建物北側に21号道からＴ字路状に分岐した道が造られ、21号道から42号建物の北側を通り、南の庭に繋がっている。屋敷に入るために分岐した道の北側に洗い場(1341号土坑)が造られていた。洗い場の西は21号道で、道の西側は53号溝であり、常時水が流れていたと考えられる。溝の西側には９号屋敷の洗い場が造られている。この洗い場の道を隔てた反対側に造られたのが、12号屋敷の洗い場(1341号土坑)であったと思われる。10号屋敷の洗い場と同様に53号溝より少し深く掘り、長方形に石を組んでいる。おそらく、53号溝に流れる水がこの洗い場(1341号土坑)に湧水することにより、洗い場として利用したものと思われる。洗い場底面にはAs-A軽石が堆積しており、浅間泥流で埋まる前まで、洗い場として機能していたものと思われる。

【構造・規模】大きな石を用いて長方形に組んでいる。組まれた石組の内径は長径70㎝、短径58㎝、深さ32㎝である。底面の深さは標高542.82mで、東側に流れる53号溝底面の標高は532.92mとなっており、洗い場(1341号土坑)が溝より10㎝低くなっている。この石組は、長辺部分と短辺部分で石の組み方が異なっている。長辺部分は、

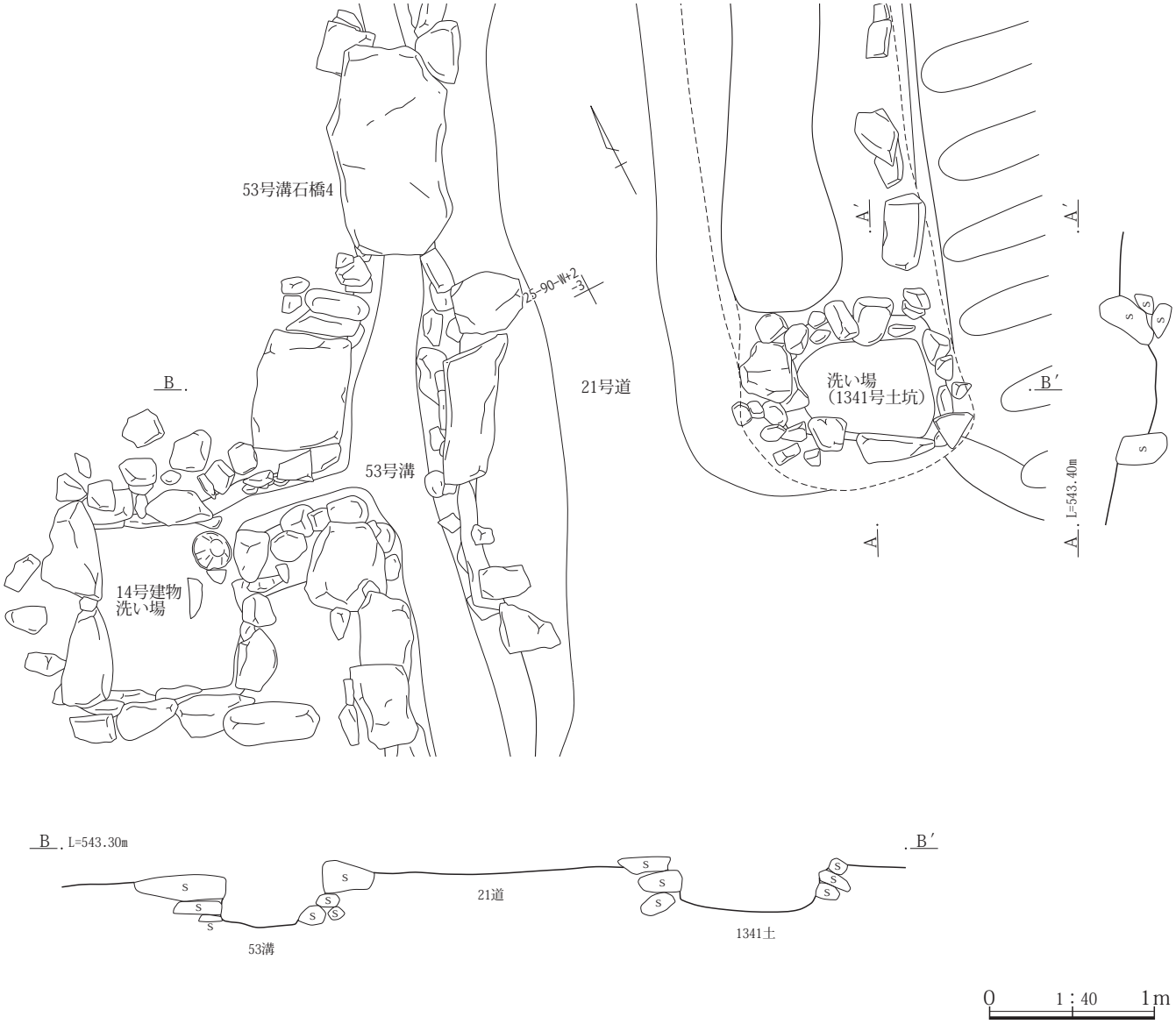




44号建物　1334号土坑

1　暗褐色土(7.5YR3/4)　1783(天明３)年の浅間山噴火に伴う泥流堆積物
2　暗褐色土(7.5YR3/4)　地山の土に近い層(埋土)
3　黄褐色土(7.5YR5/8)　ローム粒を主とした層(埋土)
4　暗褐色土　地山層

第191図　７区12号屋敷　44号建物(便所)



第192図　７区12号屋敷　洗い場

細長い石の側面が洗い場の内側になるように横方向に積んでいる。一方、短辺部分の石組は、小口が洗い場の内側になるように小口積みとしている。長辺部分に使われている石の大きさは奥行30～55㎝、横幅17～37㎝、石の厚さ15～20㎝。短辺部分に使われている石の大きさは横幅22～46㎝、高さ30～37㎝、石の厚さ17～18㎝である。

第５項　出土遺物(第394～397・562～567図、PL.332・333)

建物の掘立柱は一部残っていたが､良好ではなかった。土間と土座の境に角材が置かれていた。囲炉裏の枠木３本が良好な状態で残っていた(Ｗ１～３)。土座に近い土間部分から薬缶が出土している。土座部分にはネコやゴザ等が良好に残っており、本文中で詳しく説明した。土間北西コーナー部分に唐臼、土間からは下駄が出土している。土座の囲炉裏北側から、多くの生活用具が南北方向に一直線に並べられたような状態で出土している。その北側からは生活用具等の遺物は出土していない。

囲炉裏北に31×24㎝高さ16㎝の箱(W18)と直径30㎝前後の竹製のかごが置かれており、かごの中には肥前磁器碗が入っていた。周辺からも肥前磁器碗が３個出土している。箱の南側には火打箱と火打金が置かれていた。その南にはお櫃が出土している。囲炉裏東に鉈、南に接して茶渋が付着したせんじ碗、南東方向に石臼が上下で置かれていた。建物南西部からは櫛が出土している。小さな屋敷の生活状態を良好に残している建物である。

第12節　11号屋敷跡(第193～205図、PL.166～172・176)

第１項　11・14号屋敷跡概要
第２項　11号屋敷跡概要
第３項　38号建物
（１)天明泥流段階の囲炉裏　(ア)１号囲炉裏
(イ)６号囲炉裏
（２)天明泥流段階では廃棄されていた竈と囲炉裏
(ア)竈　(イ)２号囲炉裏　(ウ)３号囲炉裏
(エ)４号囲炉裏　(オ)５号囲炉裏
(カ)７号囲炉裏
（３)唐臼　（４)馬屋　（５)便槽　（６)土間
第４項　48号建物(厠)
第５項　47号建物
第６項　洗い場
第７項　出土遺物

第１項　11・14号屋敷跡概要(６区)

11・14号屋敷跡は村の中央部北側に位置する。両屋敷の主屋は南北約35m、東西約20mの南北方向に長い、同じ敷地内の西側に、ほぼ同じような規模の建物として、南北方向に並べて建てられている。両屋敷の間に明瞭な境界となるような溝や段差等は存在しない。北に11号屋敷、南に14号屋敷が造られている。両屋敷とも敷地西側に主屋、東側に庭があり、11号屋敷は庭の北端に厠(48号建物)と付属小屋と思われる、床面にロームを貼った47号建物(浅間泥流埋没時点では小屋はなくなっていたものと思われる)が造られている。14号屋敷では庭の東端に厠(49号建物)が造られていた。両屋敷の東端は、幹線道である21(７)号道から南北方向に分岐した25号道があり、道の西脇には57号溝がある。57号溝の水は南側の分岐点から北側の吾妻川に向かって流れている。57号溝の手前(西側)には２個の洗い場があり、11・14号屋敷で使用した洗い場と思われる。57号溝東側にも洗い場が造られている。これは、蔵を持つ大きな屋敷である３号屋敷で使用した洗い場と思われる。

25号道の西側は両屋敷とも地表面の残りは良好ではない。地表面にAs-A軽石は南東コーナー部分の庭の一部と47・48号建物西側に一部残っていただけであり、主屋の雨落溝の中にはほとんど残っていなかった。

地形は21号道の分岐点付近の標高540.0m前後で、屋敷東端の洗い場付近の標高538.0mとなっており、北側に向かって低くなっている。25号道の東側に位置する２号屋敷16号建物庭部分の標高は537.4m前後で、高低差は少ないが、11・14号屋敷部分がやや高い地形となっている。

第２項　11号屋敷跡概要

主屋が38号建物で、前庭に付属建物である48号建物(厠)と47号建物(付属小屋)、および２号洗い場で構成されている屋敷である。

第３項　38号建物(第195～202図､PL.166～169・172)

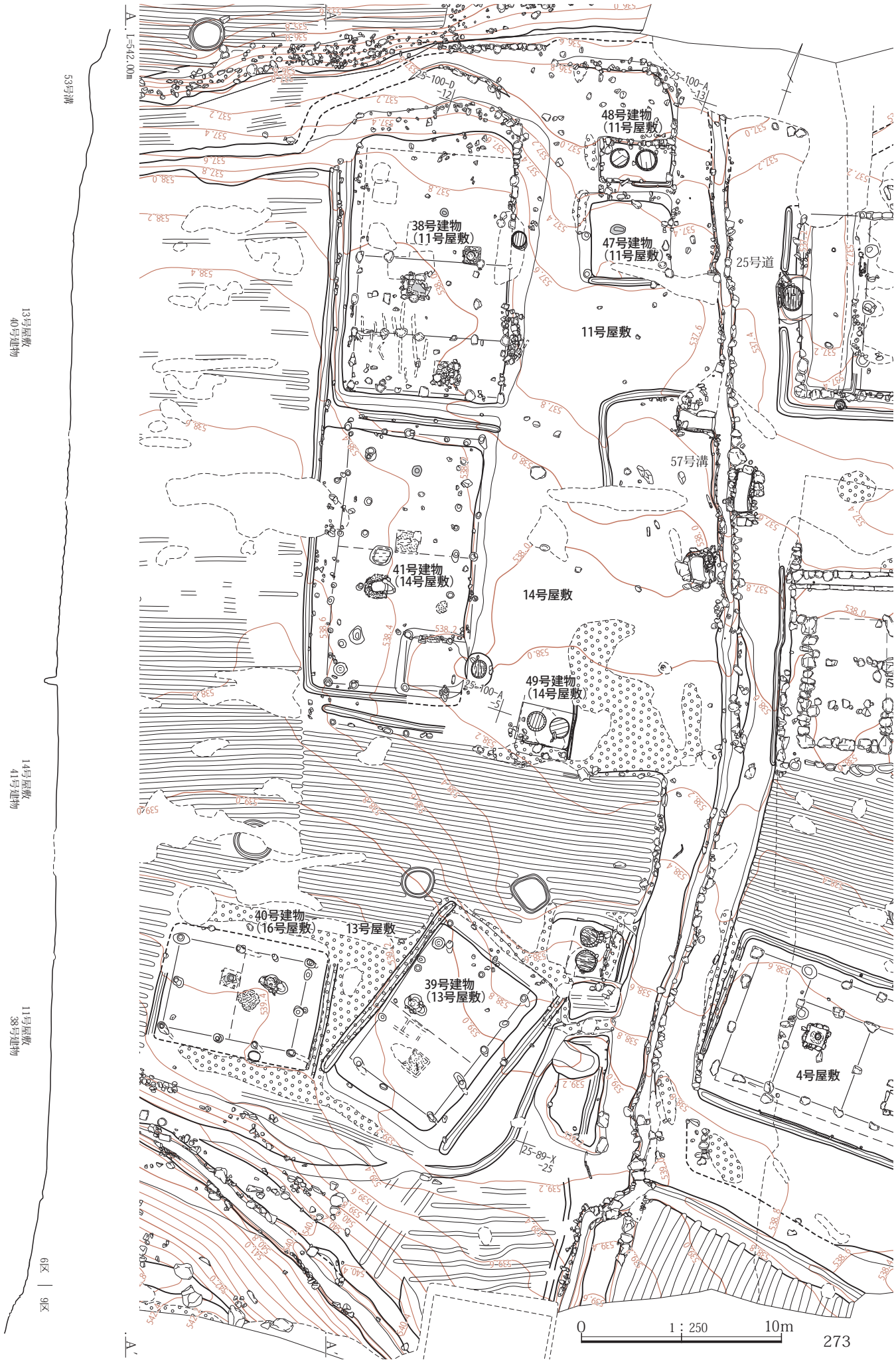
25-100-Ｂ～Ｄ-８～11グリッドに位置する。

【概要・特色】(分類：土間上屋柱梁間４間相当)

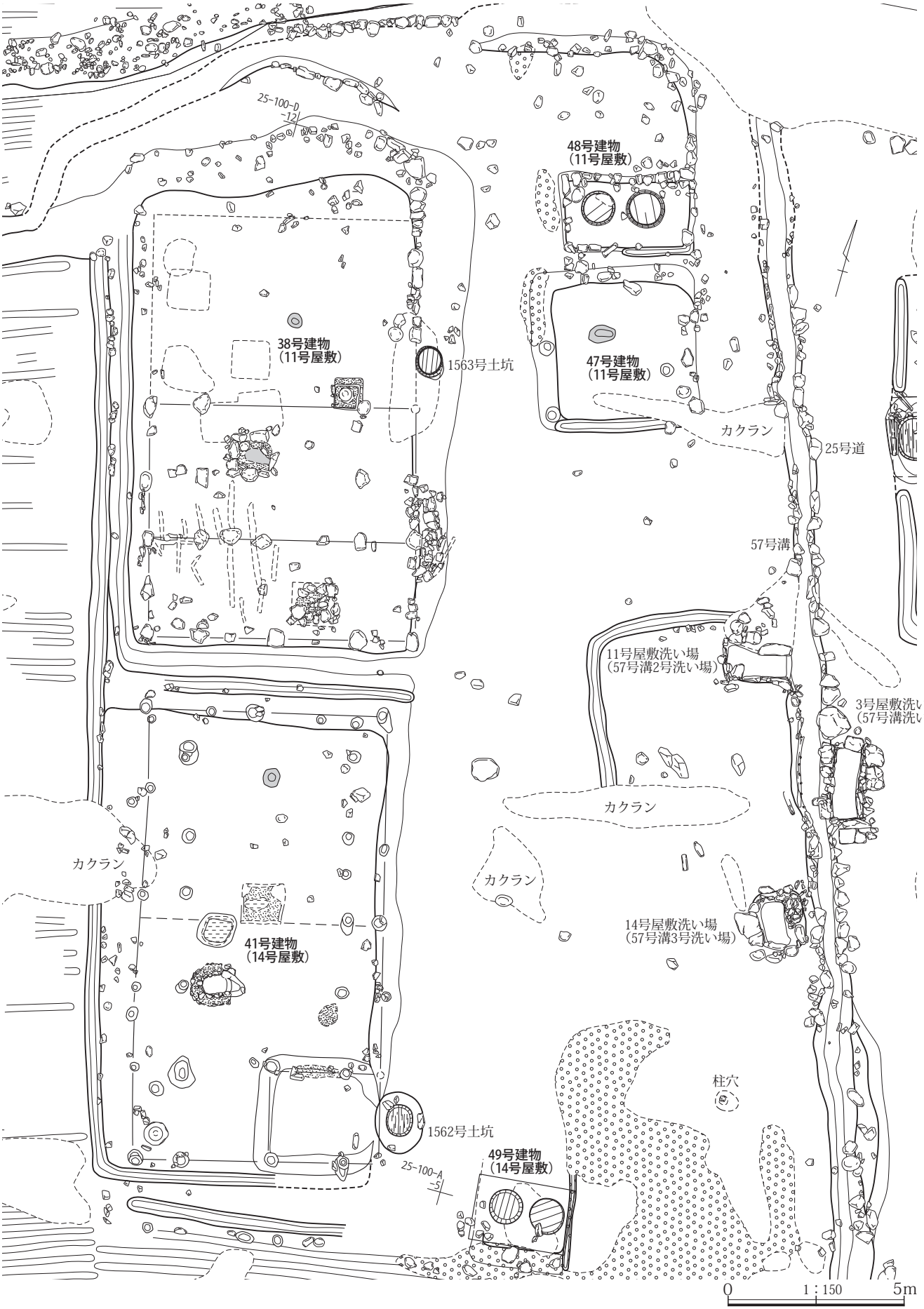
この建物は土台建物であると思われる。北側が土間で、南側が板間となっていた。板間である南側の土台石の大部分は残っていたが、土間部分と思われる北側の土台石は、出入口である東側以外全く残っていなかった。その部分は残りの良い土間や、板間下の土間部分より20～30㎝程低く削られており、土間面の多くは残っていなかった。同じ建物でも南側の板間面下部分では、土台石はほとんど残り、南東部分の床下部分には、床板を支えた梁や根太の痕跡が明瞭に残っていた。泥流で埋まるまで床板が貼られていたことを物語っている。

北東コーナー部分には、通常の建物では馬屋が造られているが、確認できなかった。竈については発掘段階では確認できなかったが、３号囲炉裏の南側に竈の痕跡らしき遺構が調査されており、おそらくこの位置に竈が造られていたが、泥流で埋没以前の段階で廃棄されていた。板間部分に１号囲炉裏と６号囲炉裏(旧１号集石)があり、板間の下に４・５号囲炉裏、土間部分に２・３・４・７号囲炉裏(７号囲炉裏は２号囲炉裏北東部分で焼土土坑として調査した囲炉裏と思われる遺構)の合計７個の囲炉裏が造られていたと思われる。板間部分の１号囲炉裏・６号囲炉裏は天明泥流により埋没する段階まで使われていたものと思われるが、土間部分の囲炉裏はすでに廃棄されていたものと思われる。

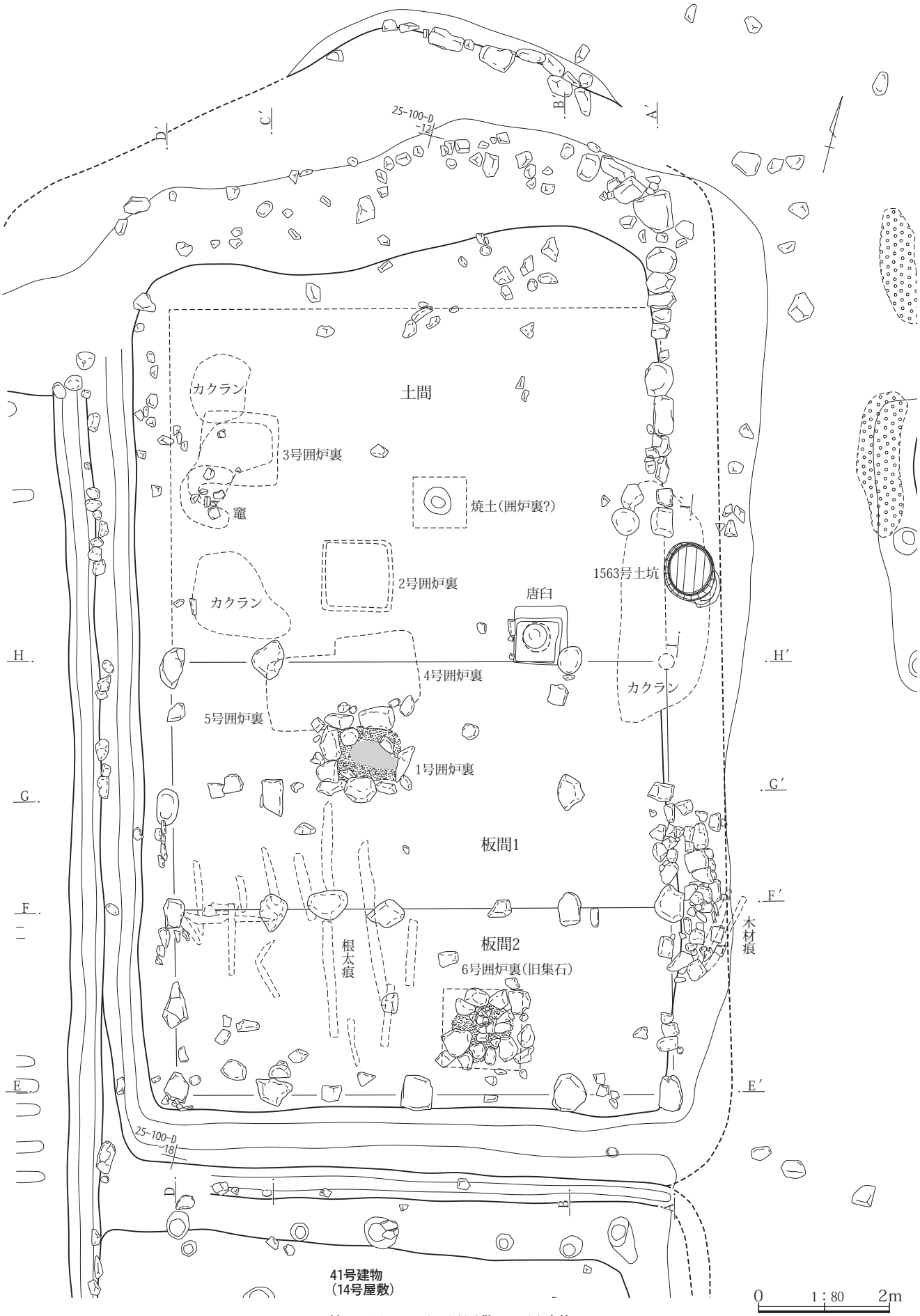
このような特色から、土間部分は炊事等を行うための



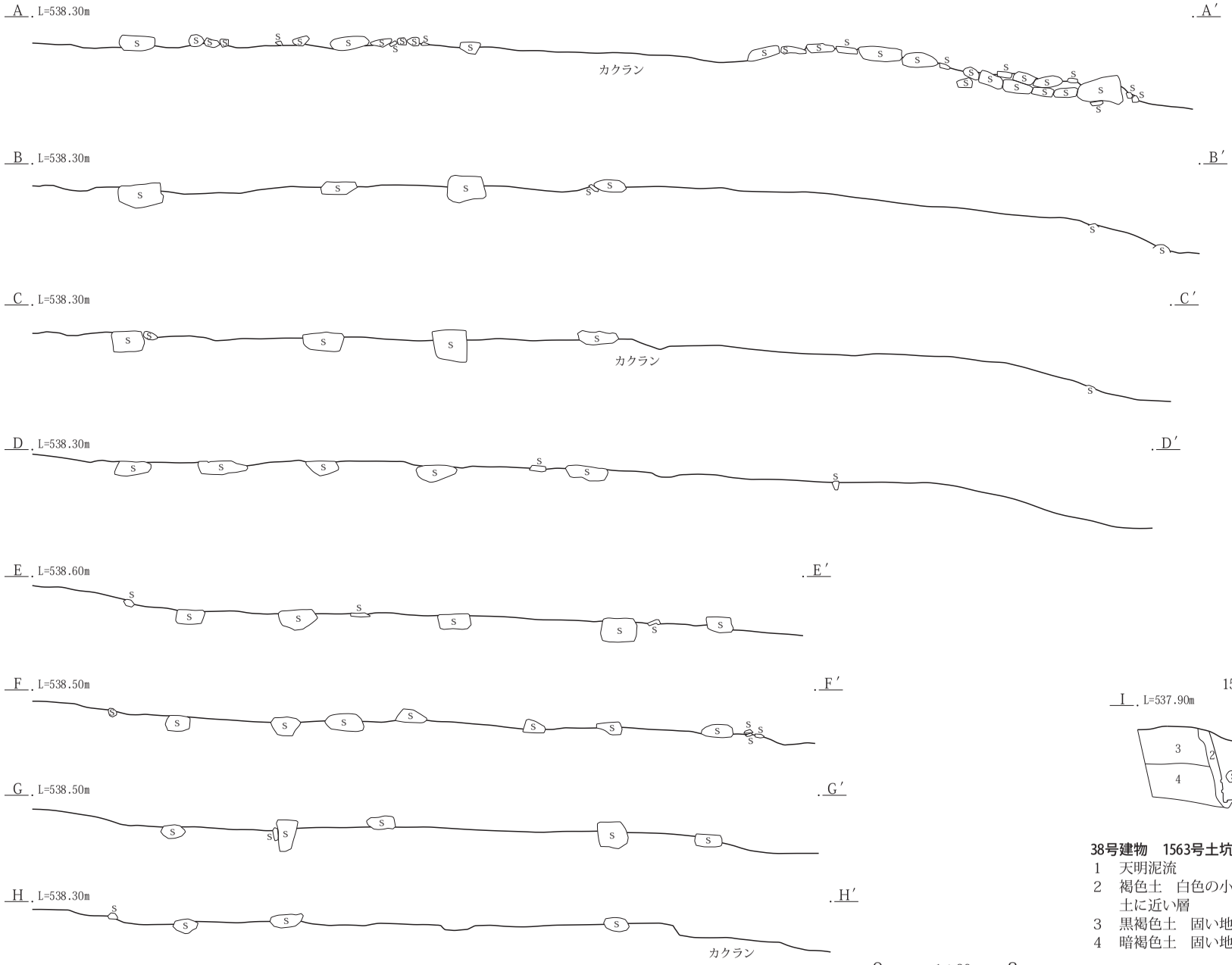
第193図　6区11号・14号・13号屋敷位置図

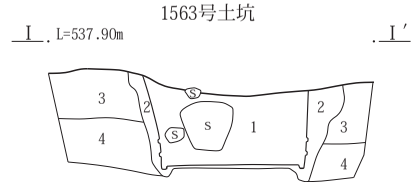


第194図　６区11号・14号屋敷



第195図　6区11号屋敷　38号建物





38号建物　1563号土坑A-A′

1　天明泥流
2　褐色土　白色の小ブロック小量含む。土間の表土に近い層
3　黒褐色土　固い地山の層
4　暗褐色土　固い地山の層

第196図　６区11号屋敷　38号建物断面

機能は失われ、削られ、別な目的で使用されたと思われる。建物の南側の板間部分に多くの土台石が残っており、床下部分には大引や根太の痕跡が残っていた。板間および１号囲炉裏や６号囲炉裏（１号集石）部分は使われていたものと思われる。板間の東側下屋部分に多くの石が並べられている。他の調査例ではないので目的は不明である。

【構造・規模】建物北側の土台石はなく、その北側に先に積まれていたと思われる石垣も崩れており、建物の北端が明瞭ではない。屋根がどの範囲までかかっていたのかも不明である。建物出入口である東側に残る土台石や北側の段差、さらにほぼ同じ規模で造られ、南側に建てられている41号建物の規模等を参考にして、規模や構造を推定した。

南北方向に長い建物であり、間口方向（南北）約12m、奥行方向（東西）約7.4mである。

北側の間口方向約5.5m、奥行方向約6.4mの範囲が土間で、南側部分の間口方向約6.4m、奥行方向約7.4mが板間である。板間部分がやや広い。

板間は南北２つの部屋に区切られると思われ、土間に近い北側を板間１、南側を板間２とする。板間１は間口約3.7m、板間２は間口約2.8mである。それぞれの部屋に囲炉裏が造られていた。板間１の１号囲炉裏は残りが良好で多くの灰や焼土が残っていた。板間２の６号囲炉裏はたくさんの石を方形に囲むように並べられており、内部にはロームと思われる土が詰められて焼土化していた。調査担当は１号集石として調査した。板間は床下面に残されていた次の痕跡から南北の２部屋に区画した。残された土台石と床下の大引と根太の痕跡から推定すると、１・２号囲炉裏の間に大きな土台石が並べられており、ここに大引が置かれ部屋が南北に区画されたことを想定した。１号囲炉裏南西部の床下に残っていた根太の痕跡は、南北方向に45㎝前後の間隔で６本前後残っていた。根太の太さは６～９㎝であり、内部に木材の痕跡が残っていた。

北側の部屋の囲炉裏は大きくて常に使用されていたようであるが、南側の６号囲炉裏は石組がやや雑であり、常時使用していたのではないと思われる。このような奥の座敷の囲炉裏は、この遺跡や対岸にある東宮遺跡で多く調査されている。建築部材は全く残っていなかった。

（１）天明泥流段階の囲炉裏

（ア）１号囲炉裏（第197図、PL.167）

【位置・検出状況】板間１の西側奥に造られていた。約1.3mの正方形の範囲の内側に長さ50㎝、幅30㎝、厚さ20㎝前後の大きな石を各２個並べて囲炉裏の外側を方形に区画している。内面には床面と同じような土を高さ５㎝詰め、さらにその上にロームを15㎝の高さまで詰めて囲炉裏面としている。囲炉裏内面の規模は約80㎝四方となっている。囲炉裏の中央部には少量の炭と灰が残り、灰層下のローム面中央部、幅40㎝の範囲のロームは焼土化していた。

【規模】大きな石で囲まれた囲炉裏の内径は約80㎝四方、深さ約20㎝である。

（イ）６号囲炉裏（旧１号集石）（第200図、PL.167）

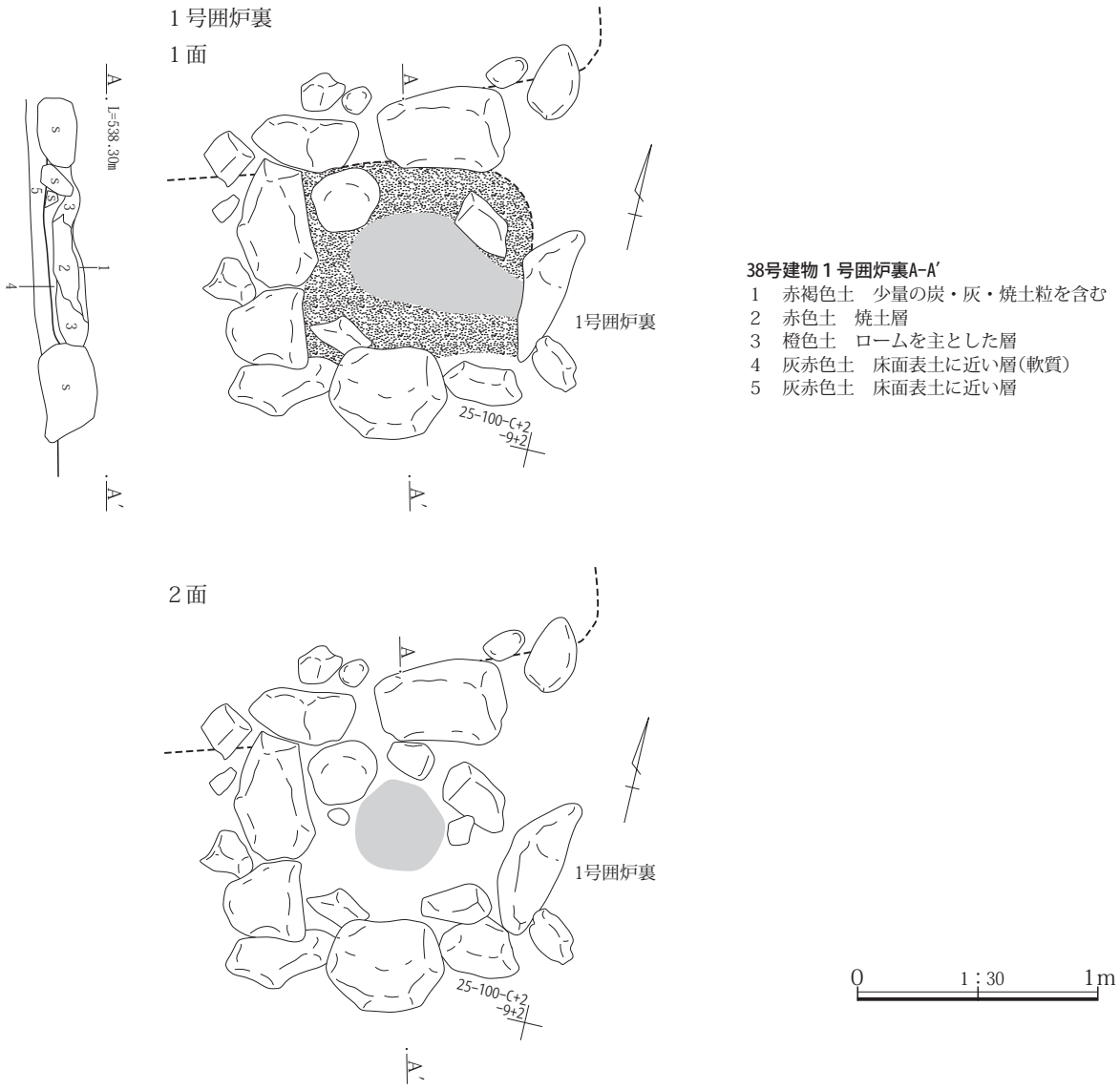
【位置・検出状況】１号囲炉裏南東に方形に石組された遺構があり、内部にはロームと思われる土が詰められていた。調査担当は１号集石として調査した。この遺構は、これまで多くの調査例から囲炉裏と思われるので、６号囲炉裏とした。約1.2m四方の正方形の範囲の内側に長さ30㎝、幅25㎝、厚さ15㎝前後の大きな石を４辺に３個並べて囲炉裏の外側を囲んでいる。囲炉裏内面の規模は約80㎝四方である。内面には外側の石より一回り小さな石が10個前後持ち込まれていた。囲んでいる大きな石の内側に15㎝程の厚さにロームを詰めていた。ロームは焼土化しており、使われていたことがわかる。

【所見】この建物では、１号囲炉裏と６号囲炉裏が天明泥流で埋没する段階まで使用されていたと思われる。１号囲炉裏と６号囲炉裏は同じ板間の囲炉裏であるが、使い分けられていたものと思われる。１号囲炉裏は造りが６号囲炉裏より頑丈でやや大きい。土間に近接しており、おそらく年間を通して常時使用されている囲炉裏であり、６号囲炉裏は、これまでの東宮遺跡や西宮遺跡等の調査例と同じように、造りが貧弱で使用頻度も低いと思われる。寒い冬季や臨時の人寄せ等のときに使用された囲炉裏ではないだろうか。

（２）天明泥流段階では廃棄されていた竈と囲炉裏

（ア）竈（第199～201図、PL.168）

【位置・概要】竈については発掘段階では確認できなかったが、３号囲炉裏の南側に竈の痕跡らしき遺構が調査されている。竈があったと思われる場所は石が馬蹄形に配



第197図　６区11号屋敷　38号建物１号囲炉裏

置されており、中央部には焼土とロームが残っていた。それらの焼土とロームは床面とほぼ同じ高さで埋められ、上面は土間と同じような土が埋められていた。竈は壊されて埋められていたようである。

なお焼土の残っていた面の高さは537.85㎝前後であり、床面の高さ538.0ｍより約15㎝低い面となっている。

【規模・形状】残りが悪く計測不可能である。

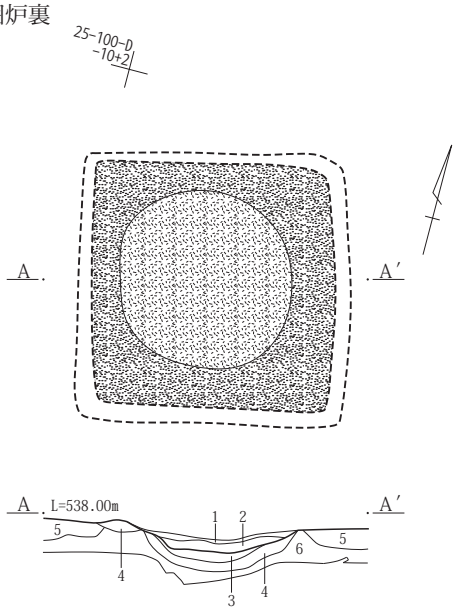
(イ)２号囲炉裏(第198図、PL.168)

【位置・検出状況】板間に近い土間南側に造られている。床面に90㎝四方の方形にローム面があり、その内側、直径約60㎝の円形の範囲に灰層がある。灰層の中央部に多くの炭の小片が残っていた。灰層の下面は直径約40㎝、厚さ４㎝前後の焼土層がある。このような状況から囲炉裏であると思われるが、囲炉裏を囲んでいたと思われる木製の枠の痕跡は残っていない。この囲炉裏は一時期使用されていたが、天明泥流により埋没する段階では、既に使われていなかったのではないだろうか。

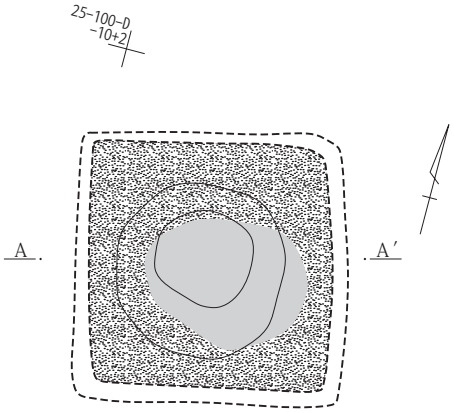
(ウ)３号囲炉裏(第199図、PL.168)

【位置・検出状況】土間面の最も奥に当たる西側に、80×100㎝の楕円形の掘り込みがあり、内部に灰が堆積していた。調査担当は３号囲炉裏として調査した。その３号囲炉裏の南西部に、３号囲炉裏と重複して竈と思われる遺構がある。竈と思われる遺構や３号囲炉裏は、壊され埋められていたと思われ、規模や性格は不明である。

２号囲炉裏
１面

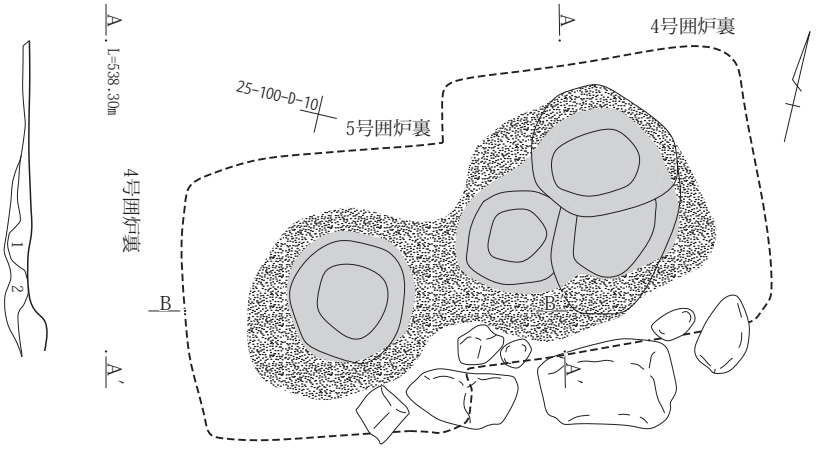


２面



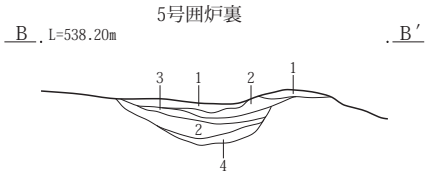
38号建物　２号囲炉裏A－A′
1　灰白色土　灰色の中に多くの炭の小片を含む
2　灰白色土　灰を主とした層
3　赤色土　焼土層
4　橙色土　ロームを主とした層
5　暗褐色土　土間表土
6　暗褐色土　地山

４号・５号囲炉裏
１面

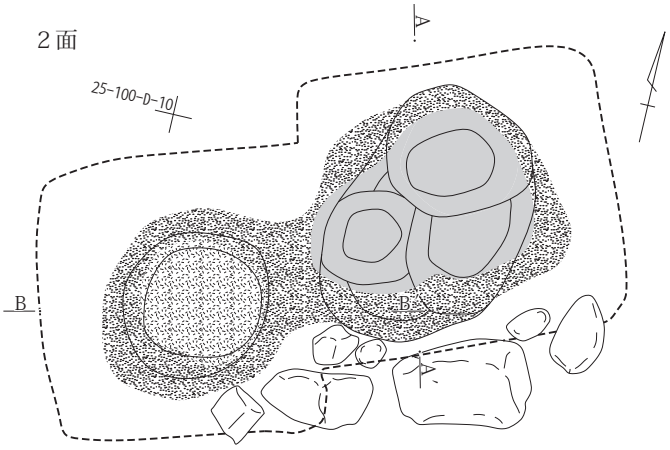


38号建物４号囲炉裏A-A′
1　灰赤色土　床面表土に近い層
2　褐色土　ロームを主とした層

38号建物５号囲炉裏A-A′
1　暗褐色土　土間の表土を主として、下層に多くの灰を含む(灰層は除去されたためか残っていない)
2　赤色土　焼土層
3　灰白色土　灰層
4　暗褐色土　地山の層

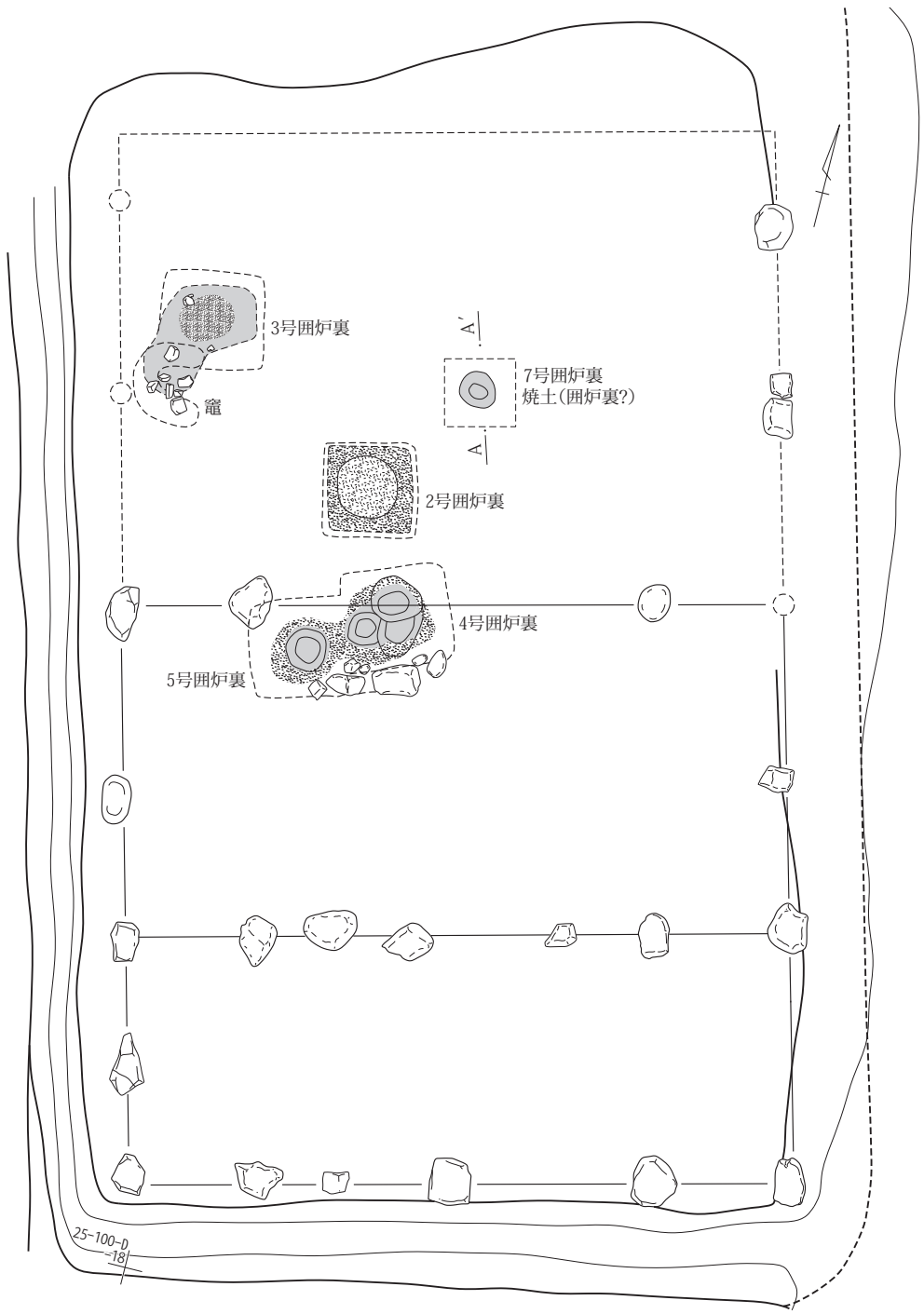


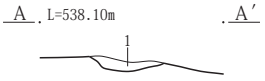
２面



0　1：30　1m

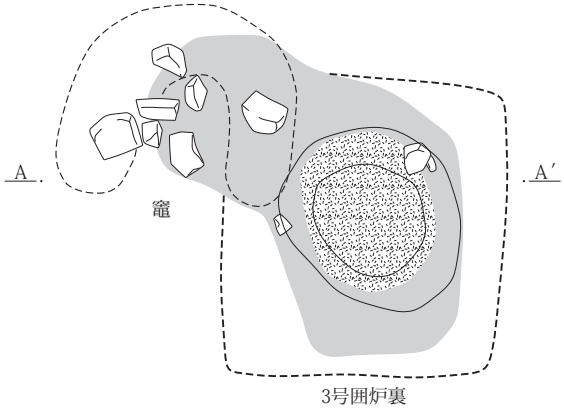
第198図　６区11号屋敷　38号建物２号・４号・５号囲炉裏

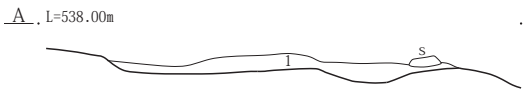




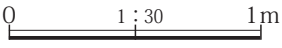
38号建物　焼土A－A′
1　灰白色土　灰を主とした層、下層に焼土層あり

竈・３号囲炉裏

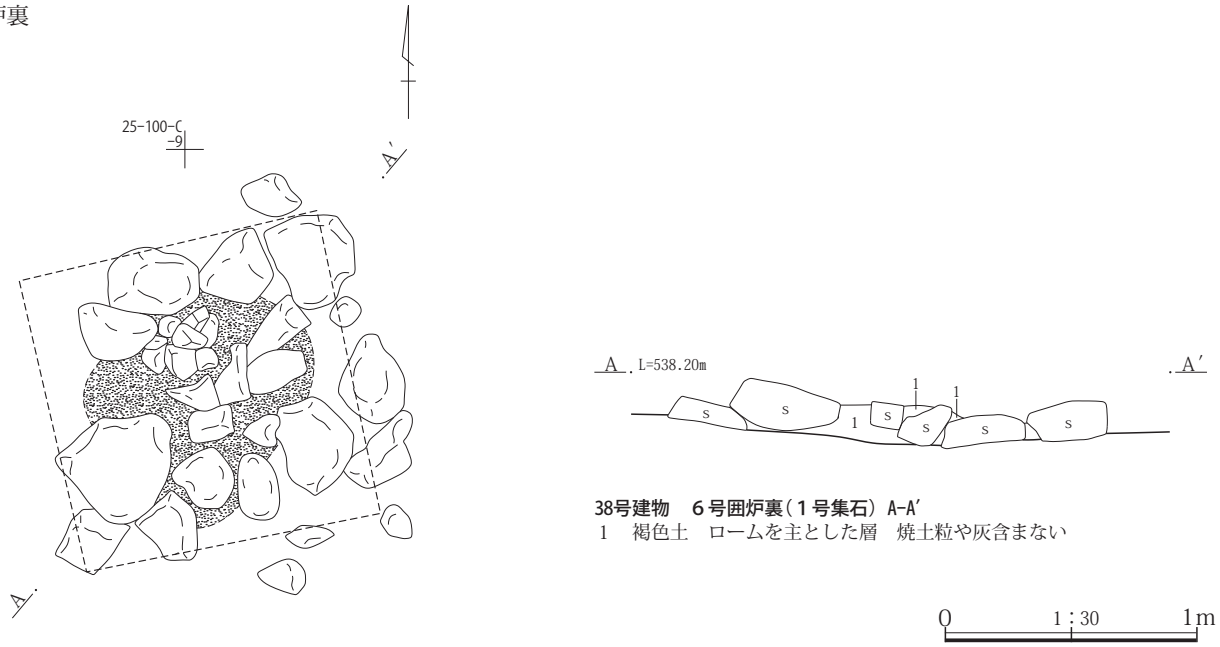




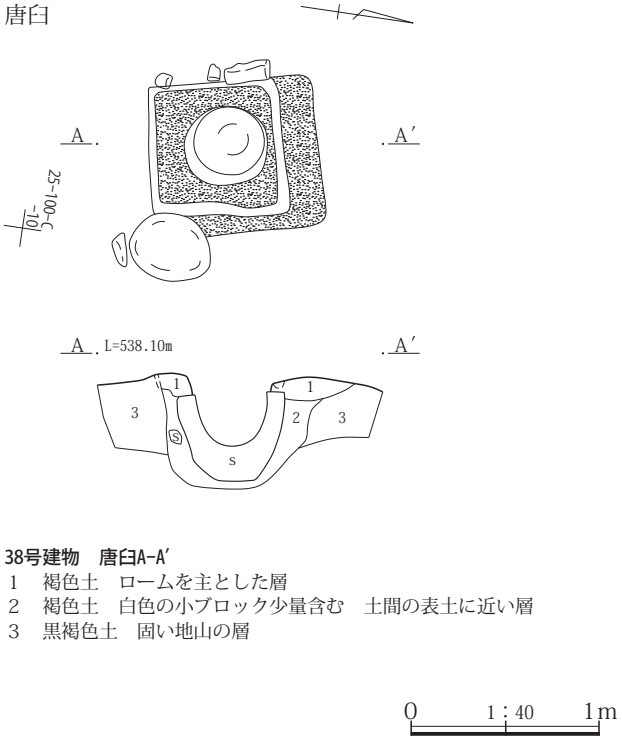
38号建物　竈（３号囲炉裏）A－A′
1　にぶい赤褐色土　ローム小ブロック・焼土粒・炭の小ブロックを含む(竈を解体して埋められた層と思われる)



第199図　６区11号屋敷　38号建物床下遺構・竈・３号囲炉裏



第200図　6区11号屋敷　38号建物6号囲炉裏（1号集石）



第201図　6区11号屋敷　38号建物唐臼

（エ）4号囲炉裏（第198図）

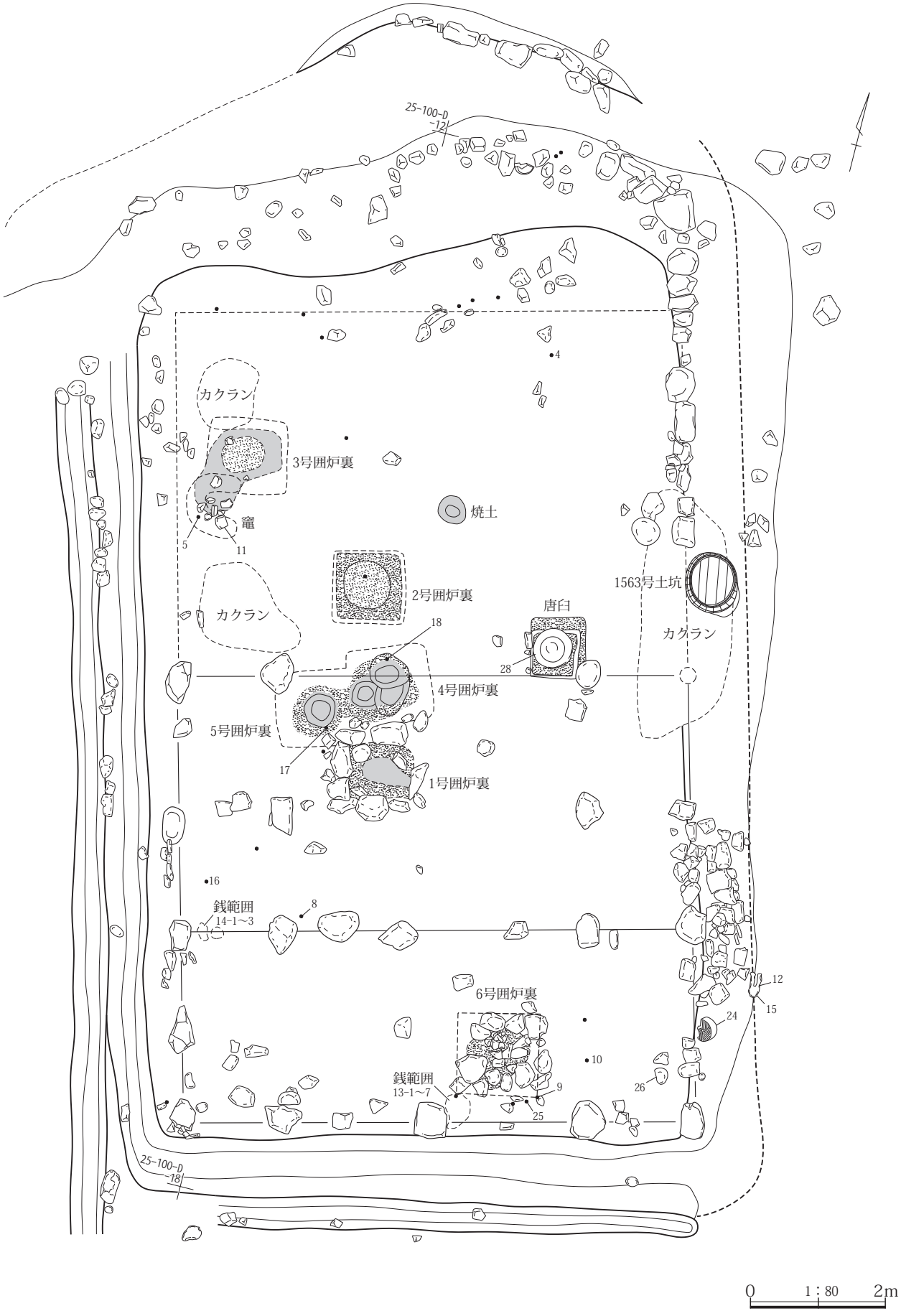
【位置・検出状況】1号囲炉裏と2号囲炉裏中間の土間面の下から、ロームと少量の焼土が確認された。調査担当者は4号囲炉裏として調査した。残りが悪く囲炉裏としての範囲も不明である。調査段階での囲炉裏とした範囲を点線で図示した。

（オ）5号囲炉裏（第198図、PL.168）

【位置・検出状況】1号囲炉裏の北西部、4号囲炉裏の南西部の土間の表土下からほぼ方形に区画された範囲にロームがあり、中央部付近は、ロームが焼けて焼土化している遺構が確認された。調査担当は5号囲炉裏として調査した。厚さ5㎝の焼土層の下には厚さ3㎝の灰層、その下には厚さ7㎝の焼土層、その下が地山の土となっていた。1号囲炉裏が造られる段階で廃棄され床下に埋められた古い囲炉裏と思われる。規模はロームの範囲110㎝四方、焼土範囲は円形で直径50㎝、中央部の焼土と焼土を埋めている炭混じりの床面の土の厚さは5～8㎝である。

（カ）7号囲炉裏（旧焼土）（第199図、PL.168）

【位置・検出状況】土間中央部分、2号囲炉裏北東部分に直径36㎝、深さ5㎝の土坑状の掘り込みがある。調査段階では焼土として調査した。中に厚さ5㎝以上の灰白色の灰層があり、灰層の下は焼土層となっていた。この遺構を囲むように灰の堆積が認められる。廃棄された囲炉



第202図　６区11号屋敷　38号建物遺物出土状態

裏と思われる。

（３）唐臼（第201図、PL.169）

【概要・規模・所見】土間南東部、南側の板間に接したところに石製の唐臼が埋まっていた。この位置は出入口に近い場所であり、３号屋敷16号建物と同じような位置である。他の主屋で確認される多くの唐臼は、土間奥のコーナー部分に位置しているので、埋められている位置が異なる。多くの唐臼では、唐臼から1.3m前後離れた場所に杵を支える支脚穴が掘られているが、支脚穴は掘られていなかった。唐臼の口縁部は、土間面より10cm低い位置まで本体を土間面に埋め込んでいる。口縁部の上に約10cmロームを盛り上げて、土間面とほぼ同じ高さとしている。臼を囲むように、約70cm四方の方形の枠木が組まれていた痕跡が明瞭に残っており、その内側を中心にロームが貼られていた。

【規模・形状】唐臼は口唇部がほぼ水平に成形されており、この上にロームが約10cmの高さに盛られていた。口縁部が地上に出ている30・39・41号建物等の唐臼の場合は、口唇部が厚く内側に傾斜しているが、38号建物の唐臼のように、口唇部の上にロームが盛られている場合の唐臼口縁部は、やや細く口唇部が水平に加工されていることが多い。唐臼は外形58cm、口径38cm、外面高45cm、内面高27cm、口縁部の厚さ10cmであった。盛られていたロームの高さ10cmを加えると、内面高は37cmとなる。

（４）馬屋

【位置・概要】多くの主屋では、土間出入口のコーナー部分に馬屋が造られ、その部分は方形に床面より20cm前後低くなっている。38号建物では、その部分は土間面より20～40cm程低く削られており、馬屋の痕跡は残っていなかった。糞尿等を集める桶も埋められていなかった。馬屋が造られていたかの確認はできなかった。

（５）便槽（1563号土坑）（第203図、PL.169）

【位置・概要】38号建物土間出入口部分、左側（南側）の下屋部分に便槽（1563号土坑）が埋められていた。内部は天明泥流で埋まっていた。地表面の残りが悪く、雨落溝は残っていないので、便槽の上に下屋の屋根がかかっていたと思われるが不明である。便槽のまわりの囲いの存在も不明である。

内部に桶の底部や側板が痕跡として残っていた。桶の規模は底径77cm、口径約80cm、高さ40cmである。タガの痕跡が底面から高さ17cmと13cmの位置に２か所残っていた。桶は土坑状に掘り込まれた中に埋められ、掘り出した土で埋められていた。

（６）土間（第195図）

土間は板間に近い付近で残りが良好であるが、北側の大部分は削られており、土間面はほとんど残っていなかった。残りの良い土間面の標高は、538.0m前後であり、北側の床面は20～40cm程深く削られていた。

第４項　48号建物（厠）（第203図、PL.170）

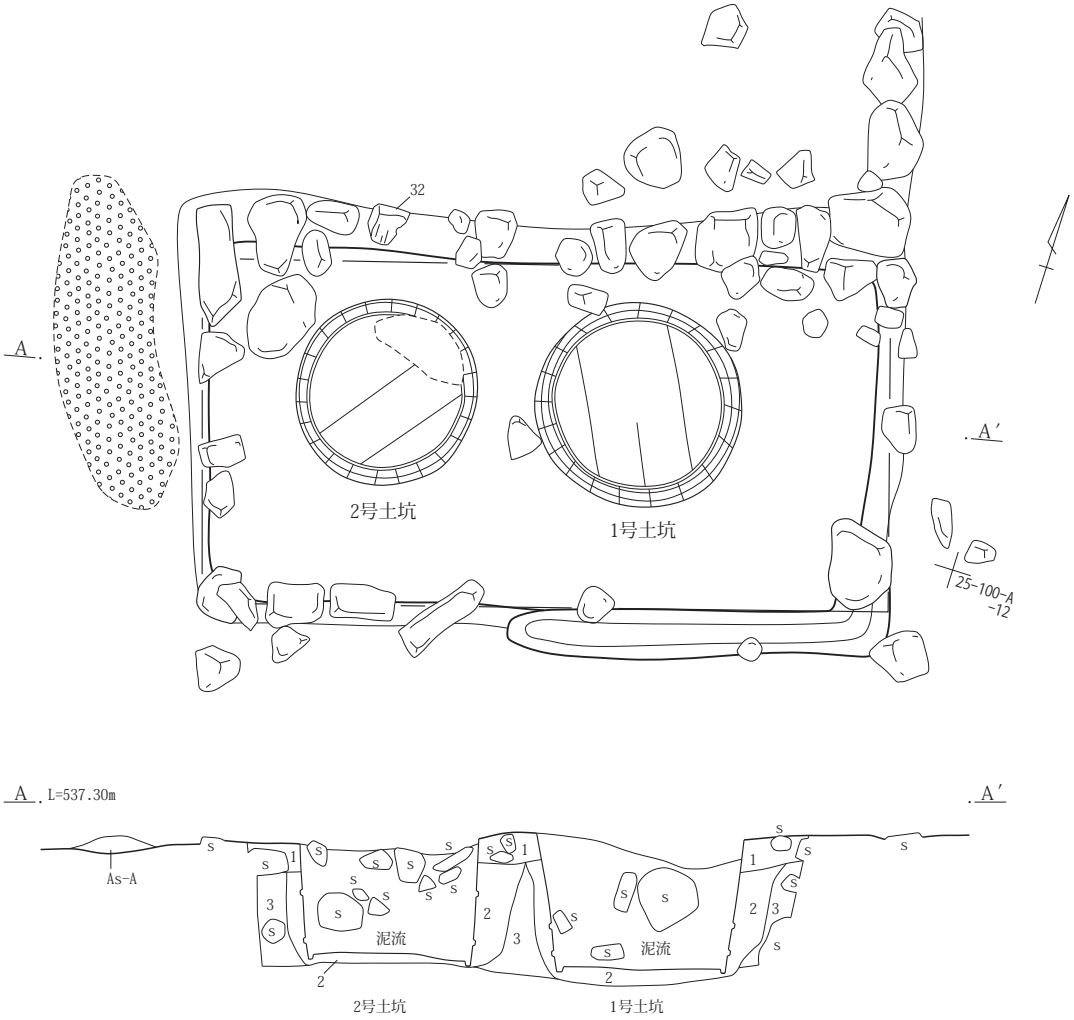
25-100-A-11・12グリッドに位置する。

【位置・概要】主屋である38号建物東の庭部分に位置する。南側に接して47号建物がある。47号建物は天明泥流で埋没する以前に壊されていたと思われるので、38号建物の付属建物は48号建物（厠）だけであったと思われる。

長方形の建物で内面に２つの桶が埋められており、天明泥流により埋まっていた。主屋出入口右側に位置しており、石川原遺跡６・８・12号屋敷や、東宮遺跡７・８号屋敷、西宮遺跡４・５号建物等、多くの屋敷でもこのような位置関係に厠があることが多い。建物内には２個の桶が埋められていた空間があるだけで、他の屋敷の厠に多く存在した別の空間は造られていなかった。雨落溝は確認できなかった。建物西側にAs-A軽石が一部残っていた。

【規模・構造】建物中央部分の高さは、主屋である30号建物より90cm程低い場所である。建物は土台石の内側が周辺部より高くなっている。建物は東西3.60m、南北1.80mの範囲に長方形に石が並べられており、主屋同様に土台石の上に土台を用いて、柱を建てた構造と思われる。土台石の大きさは長さ30cm、幅20cm前後で主屋の土台石より小さい石が用いられている。規模は東西3.60m（約２間）、南北1.80m（約１間）の１間×２間の建物と思われる。

２つの桶は東側の桶を１号土坑、西側の桶を２号土坑と呼称して調査した。１号桶の規模は底径90cm、口径107cm、高さ70cm、タガの位置は、底面から８cmと23cmの位置に２本、２号桶の規模は底径86cm、口径95cm、高さ60cm、タガの位置は、底面から８cmと33cmの位置に２本残っていた。１号桶が２号桶より少し大きい。桶は土坑状に掘り込まれた中に埋められ、掘り出した土を用いて埋められていたようである。



48号建物１・２号土坑A-A′
1　暗褐色土　大小の石少量含む、２層より密な層
2　暗褐色土　大小の石ほとんど含まず、桶の埋め土
3　暗褐色土　地山層　大小多くの石含む

0　1：40　1m

第203図　６区11号屋敷　48号建物(厠)

第５項　47号建物(第204図、PL.170)

25-99・100-Ｙ・Ａ-10・11グリッドに位置する。

【概要・位置】48号建物南側に接して建てられていた。47号建物は天明泥流を除去した段階では、礎石の一部と土間面に貼られていたロームが一部残っていただけであり、多くの土台石や雨落溝等全く残っていなかった。また遺物としては粉引臼の上臼と下臼が置かれていただけであった。このような発掘結果から、建物は解体され上屋は撤去されていた建物であったと思われる。土間部分を掘り下げると、図で示したような雨落溝と思われる掘り込みが建物の周辺から確認された。また、土間中央部付近に焼土が確認された。囲炉裏等が存在していたものと思われる。

【規模・構造】残りが悪く規模等は明らかでないが、残された痕跡から計測すると、東西南北とも、3.6m(約２間)の正方形の建物であったことが考えられるが不明である。このように２間四方の付属建物は９号屋敷35号建物でも建てられていた。埋められた土間の下から確認された焼土の範囲は東西70㎝、南北50㎝であった。

ピット一覧表参照

No.	長径cm	短径cm	深さcm
Ｐ１	43	41	59
Ｐ２	44	40	52
Ｐ３	37	34	27

第６項　洗い場(旧57号溝２号洗い場)

(第205図、PL.171)

25-99-Ｘ・Ｙ-９グリッドに位置する。

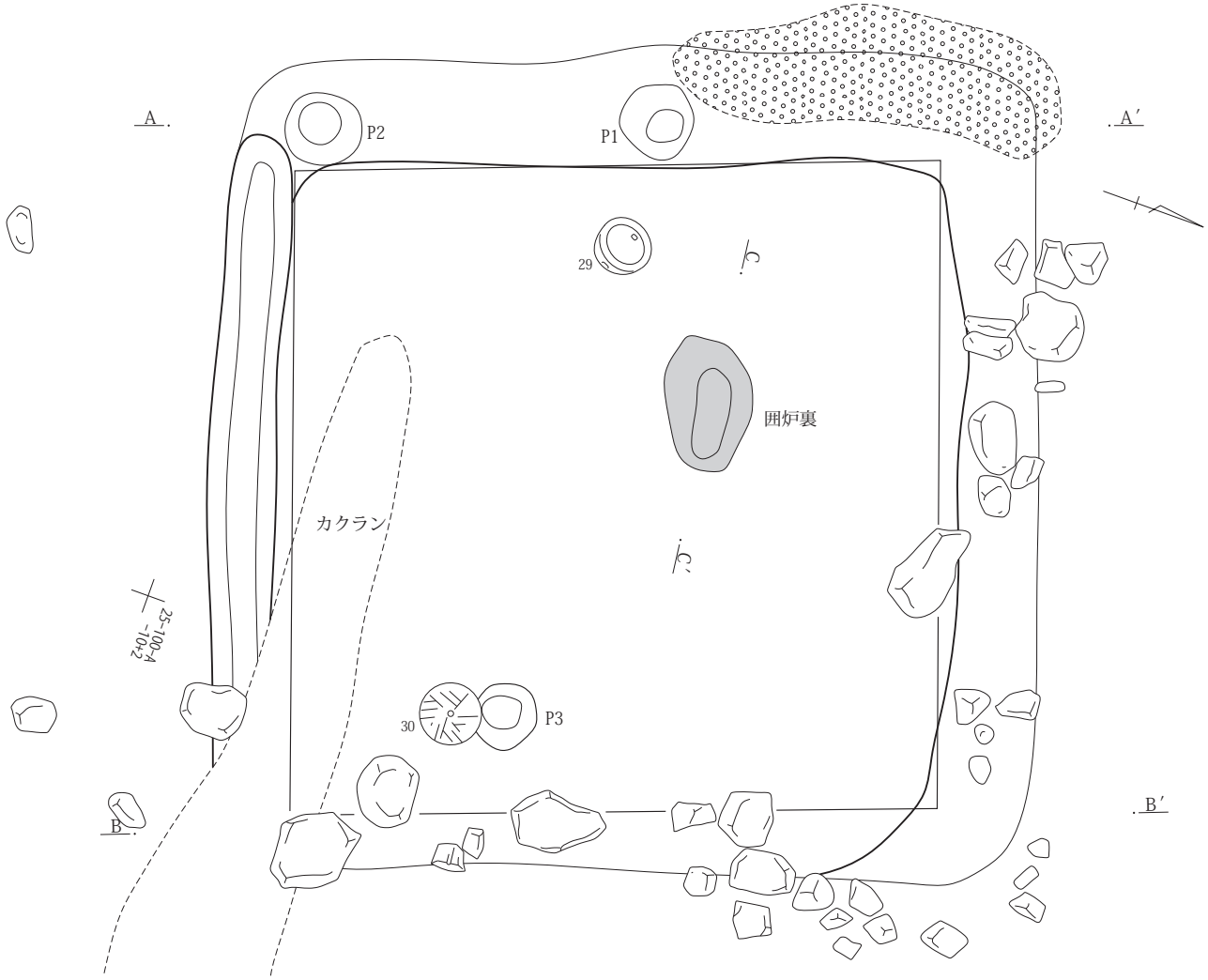
【概要・位置】生活用水を確保するためにほとんどの屋敷には洗い場が造られている。11号屋敷では庭の東に57号溝があり、その手前に水路と直行する方向で、長方形に掘り込んで洗い場が造られていた。水路との境部分は残りが悪く、特に北側部分は撹乱を受けて残りが悪かった。洗い場と57号溝との境部分を区画する石積は残っていなかった。しかし、近接した南側に造られている57号溝１・３号洗い場や他の洗い場では、水路との間に石が積まれており区画されているので、おそらく11号屋敷に伴うと考えられるこの洗い場(旧57号溝２号洗い場)も、57号溝との間に石積み等が築かれ、区画されていたものと思われる。57号溝より洗い場の底は深くなっているので、地下からの湧水を溜めて洗い場としたと思われる。

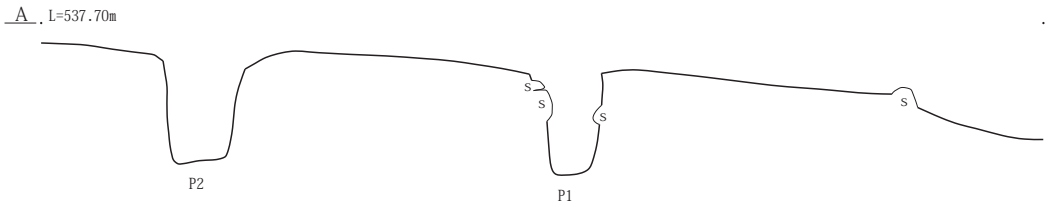
【構造・規模】洗い場は、現状では57号溝に面した東側の壁面に石積みはないが、おそらく４面とも石積みがあったものと思われる。東面の石積がない段階での計測であるが、東西方向の長さ1.8m、南北方向の幅60㎝、深さは、残りの良い南側壁面で計測すると50㎝である。

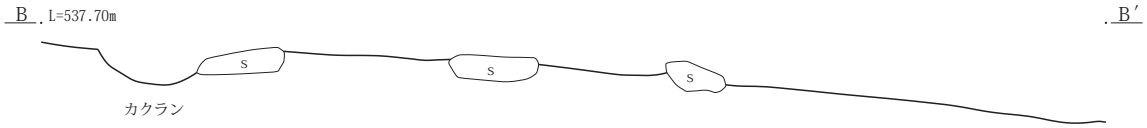
第７項　出土遺物(第398～401図、PL.334・335)

建物は、土台建物であり、根太の痕跡から南側に板間１と板間２が作られていたことがわかる。木製品の残りは悪く、柱や根太さらに生活用具の木製品は残っていなかった。土間の出入口部分外側に桶が埋まっていた(1563号土坑)。桶の木質部は残っていたが、板は残っていなかった。唐臼が出入口に近い土間で、板間１に接した場所に埋められていた。唐臼を中心に60㎝四方の範囲にロームを厚さ10㎝ほど積み上げ、ロームは唐臼口縁部上にも積み上げられていた。マンホールの蓋を外した外枠のような状態である。唐臼は土間面より深く埋められている。同じように口縁部の上に追加されている唐臼は、輪状に中抜きした木の幹(21号建物)・石を並べた状態の唐臼(16号建物)で確認されている。唐臼の口縁部は水平に加工されている。

建物は北東の土間部分が低く、残りが悪かった。北東側の雨落溝も残っていなかった。その部分からの出土遺物は少ない。出土遺物は竈周辺と１号囲炉裏と６号囲炉裏周辺から多く出土している。竈付近から瀬戸・美濃陶器碗と茶釜の蓋と思われる鉄製品、１号囲炉裏の近くからは銭、６号囲炉裏周辺からは多くの銭と煙管の雁首２個が出土している。囲炉裏周辺から煙管の出土例が多いが、この建物でも同じである。板間１と板間２の東側から銭と踏鍬が出土している。出土した銭は、新寛永通寶が多いが、古寛永通寶や渡来銭および11波の四文銭が出土している。



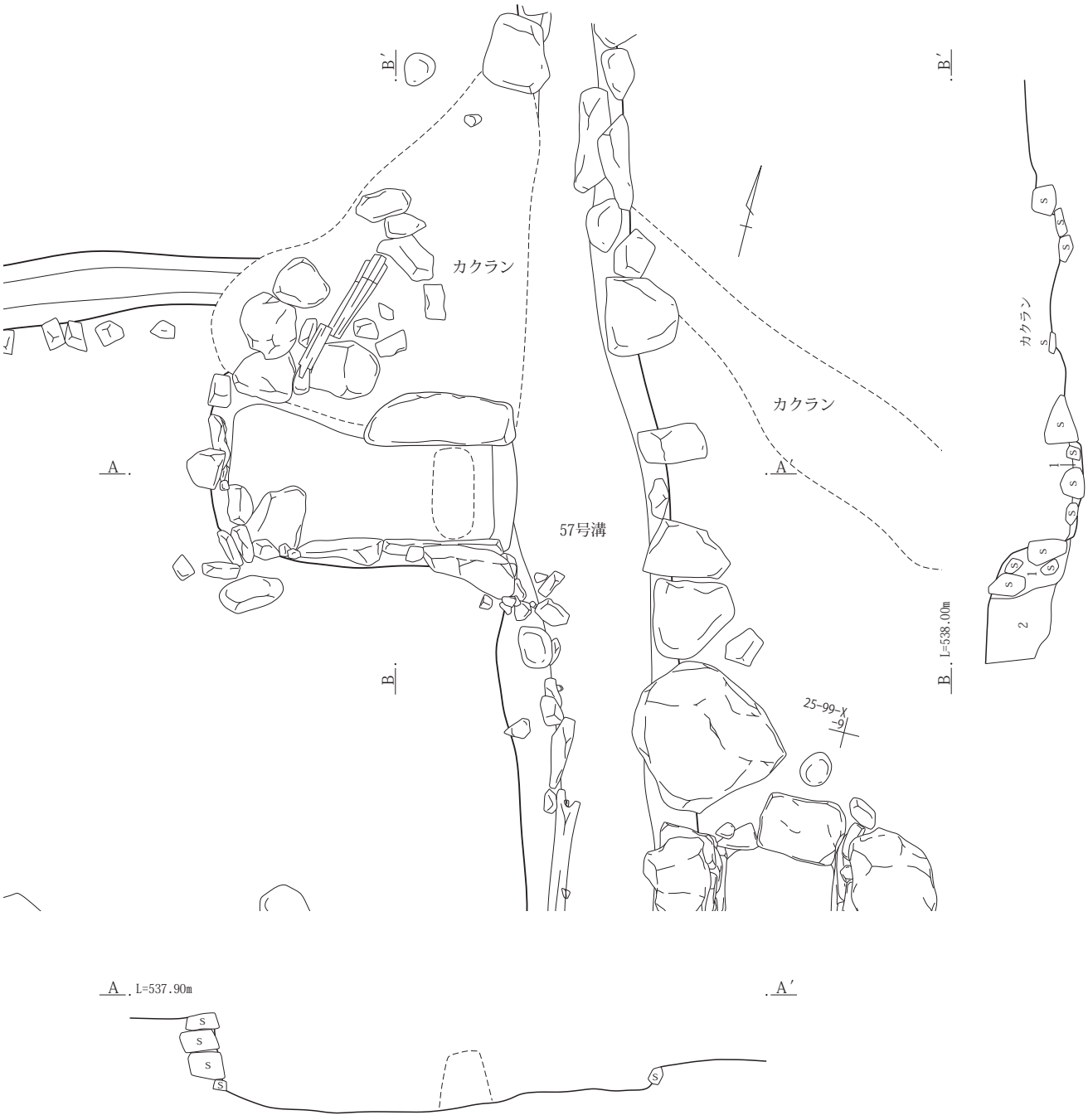




47号建物囲炉裏C-C′
1　黄橙色土　ロームを主とした層

0　1：40　1m

第204図　６区11号屋敷　47号建物



57号溝２号洗い場A-A′・B-B′
1　にぶい黄橙色土　砂質の層
2　灰黄褐色土　洗場石積フクド

0　1：40　1m

第205図　６区11号屋敷　洗い場

第13節　14号屋敷跡(第193・194・206～213図、PL.173～177)

第１項　11・14号屋敷跡概要
第２項　41号建物　(１)柱穴　(２)竈　(３)囲炉裏
(４)焼土　(５)唐臼　(６)室　(７)馬屋
(８)埋設桶
第３項　49号建物(厠)
第４項　洗い場
第５項　柱穴(庭)
第６項　出土遺物

第１項　11・14号屋敷跡概要

11・14号屋敷跡は村の中央部北側に位置する。両屋敷の主屋は、南北約35m×東西約20mの南北方向に長い同じ敷地内の西側に、ほぼ同じような規模の建物として、南北方向に並べて建てられている。両屋敷の間に明瞭な境界となるような溝や段差等は存在しない。２つの屋敷の概要については11号屋敷の稿で説明してある。ここでは14号屋敷について記述する。14号屋敷は主屋である41号建物と、41号建物南東部の庭に位置する付属建物である49号建物、および庭の東端に位置する57号溝３号洗い場として調査した洗い場から構成されている。屋敷地全体の残りが悪く、As-A軽石は南東の庭の一部に残っていただけであった。

第２項　41号建物(第206～211図、PL.173～176)

25-100-Ａ～Ｄ- ４～７グリッドに位置する。

この建物は掘立柱の建物である。土台石は全く使用していない。北側に接して、同じ時期に存在していた11号屋敷主屋である38号建物が、土台石を用いた土台建物であるので、両者には大きな違いがある。しかし実寸の規模は違うが、両主屋とも間口６軒、奥行４間の建物である。

建物中央部に囲炉裏があり、囲炉裏の南側に馬屋・竈・唐臼がある。この面が土間と思われる。囲炉裏の北側には特別な遺構はなく、遺物として銭や石臼等が出土している。この部分に敷かれていたと思われるネコ等の痕跡は残っていないが、12号屋敷42号建物等の調査例から土座であったことが考えられる。42号建物では、土間と土座の間には材木が置かれ、土座部分にはネコや筵等の織られた敷物が全面にわたって敷かれていた。41号建物は、囲炉裏位置に土間と土座を区分するような材木は残っていない。

土間面と土座面の高さは538.25～538.50m前後で、ほぼ同じ高さである。土座中央部分に直径50㎝、深さ８㎝の土坑状の掘り込みがあり、中に焼土と灰が堆積していた。囲炉裏の痕跡であろうか。囲炉裏であるなら、土座に２つの囲炉裏の調査例はこれまでなかった。

【構造・規模】掘立柱の柱穴は、内側の上屋柱と外側の下屋柱の２列平行存在しており、この柱穴は土間と土座部分で変化はない。このような建物は、42号建物とこの41号建物だけである。土間の梁間は２間であり、最も単純な構造の建物であると思われる。

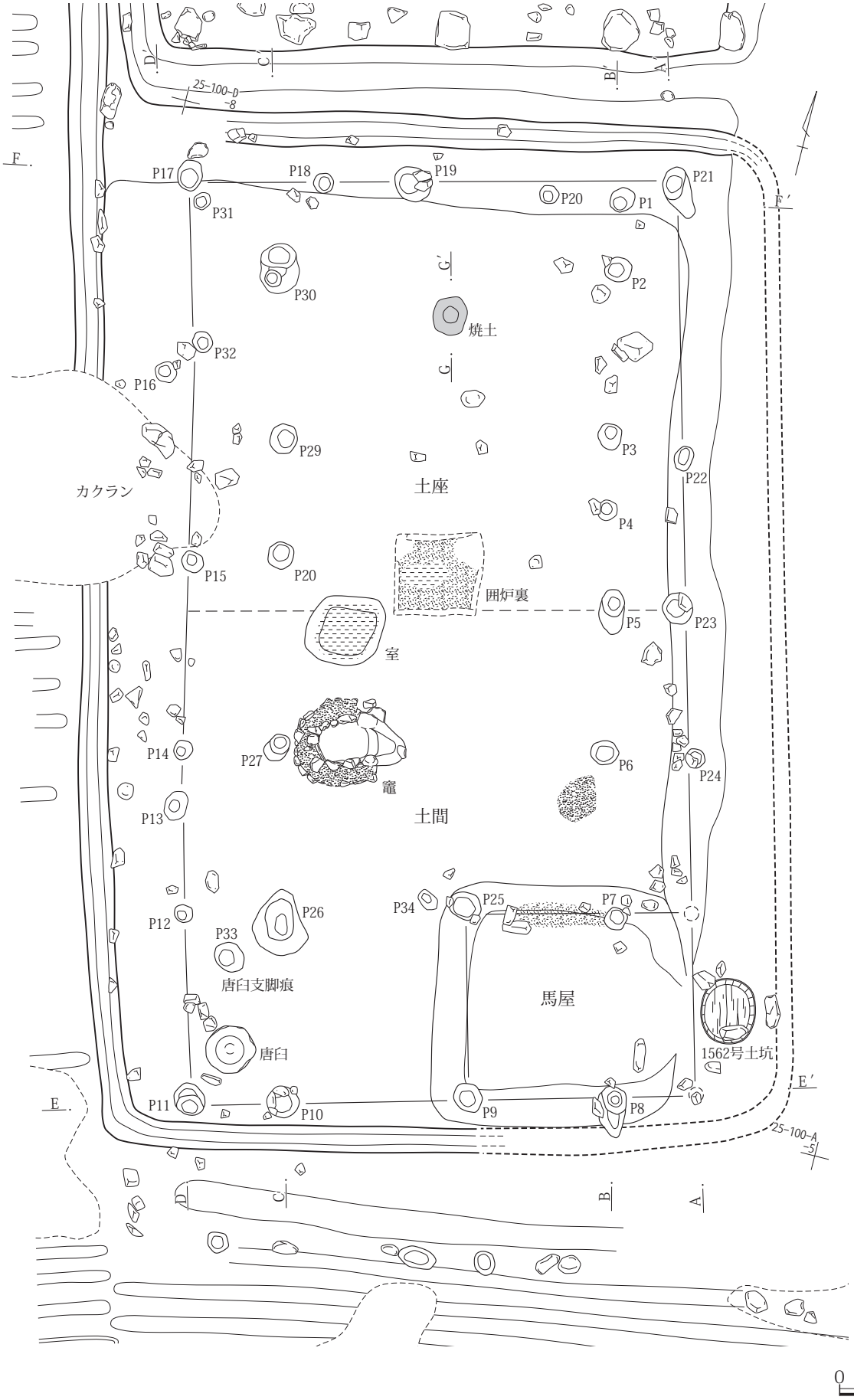
南北方向に長い建物であり、棟行方向(南北)12.7m(５間半)、梁行方向(東西)6.8m(３間半相当)である。

想定される南側の土間部分が7.5m、北側の土座部分が5.2mである。土間部分がやや広いようである。囲炉裏と竈の間に土間を凹状に掘り込み、中に少量の炭の破片が残っていた遺構がある。土間南西コーナー部分には唐臼が埋められており、唐臼から北約1.3mの位置に、唐臼に伴う支脚を埋めていたと思われるＰ33が掘られていた。土間南東部分には馬屋が造られていた。馬屋は３m前後の範囲で深さ30㎝に方形に掘り込まれ、４本の掘立柱と出入口である東側の下屋部分に、埋設桶(便槽)が埋められていた。

(１)柱穴

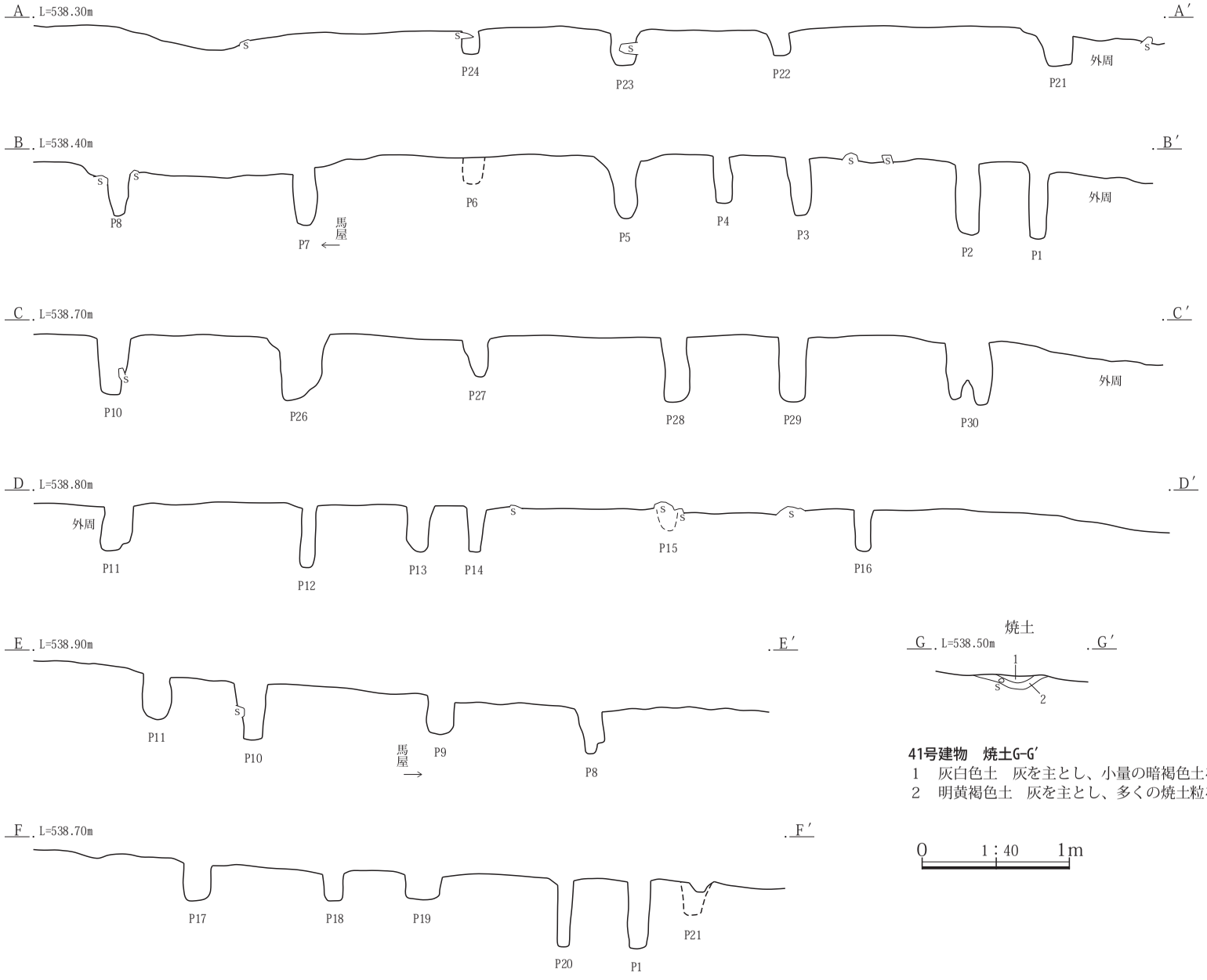
【配置と規模】41号建物は掘立柱建物である。全部の柱穴が確認できたわけではないが、柱穴と思われる大小の掘り込みがＰ1～Ｐ32まで調査されている。これら柱穴の大部分は、建物の柱を建てるために掘られていたものと思われる。残された柱穴から建物構造の一部を知ることが出来そうである。

柱穴の配置から上屋を支える内側の上屋柱と、下屋を支える外側の下屋柱が存在しているようである。上屋柱は深さ80㎝前後、下屋柱は深さ50㎝前後となっている。柱穴の直径は30～40㎝であり、上屋柱の柱穴が平均的に大きい。上屋柱と思われる柱は、奥行約4.6m(2.5間)間隔で土間と土座の区別なく、棟方向に沿って２列掘られている。下屋柱は、上屋柱東側(出入口側)約90㎝(半間)



0　1：80　2m

第206図　6区14号屋敷　41号建物



41号建物　焼土G-G′

1　灰白色土　灰を主とし、小量の暗褐色土を含む

2　明黄褐色土　灰を主とし、多くの焼土粒を含む

第207図　６区14号屋敷　41号建物断面

離れた東側と、上屋柱西側(裏口側)約135㎝(４尺５寸)に掘られている。上屋柱から下屋柱までの距離は表側が狭く、裏側が広くなっている。このように距離が表側と裏側で異なっている建物は多い。

ピット一覧表参照

No.	長径cm	短径cm	深さcm
P１	38	30	121
P２	37	34	116
P３	36	32	89
P４	30	28	74
P５	38	30	94
P６	40	33	49
P７	33	33	104
P８	40	33	91
P９	43	25	64
P10	45	43	71
P11	40	28	44
P12	27	23	64
P13	43	29	43
P14	28	26	44
P15	32	28	15
P16	29	29	43
P17	42	34	55
P18	29	27	57
P19	50	45	56
P20	28	24	119
P21	46	28	76
P22	34	26	59
P23	42	42	75
P24	28	26	60
P25	46	37	49
P26	57	39	78
P27	29	27	49
P28	39	35	80
P29	42	39	81
P30	49	33	85
P31	27	21	61
P32	30	27	50

(２)竈(第208図、PL.173・174)

【位置・概要】土間中央部やや北西寄りに石組の竈が造られていた。竈は泥流により上の部分が大きく壊されていたが、石組の構造は比較的良好な状態で残っていた。竈内の南側覆土中は多くのロームで埋まり、北側は泥流で埋まっていた。竈内には架けられていた鍋が割れて破片として埋まっていた。

竈の石組は、骨格となる部材の積み方で以下の３種類に大きく区分できると思われる。

①切石積で方形に積み上げる

②細長い石を縦方向に並べて馬蹄形に組む

③炊口両袖部分に大きな石を縦方向に並べ、奥は小さな石を馬蹄形に石垣のように組む

いずれの竈とも炊口の袖石の上には天井石を載せ、これらの石を芯として、石のまわりは大量のロームを巻いて、炊口部分と竈の上に鍋を載せるための逆台形の受け部が造られ、内部は空洞となっている。

41号建物の竈は、③に該当すると思われる。左右の袖部分に縦方向の大きな石を建て、その奥は小さな石を横方向に重ねて竈壁面を積み上げている。左袖石は上半分が欠損、右袖石は残っていなかったが、痕跡から細長い袖石の存在がわかる。③の造りが良好な調査例は、西宮遺跡７区７号建物で確認されている。

【規模】両袖幅外側120㎝、内側54㎝、燃焼部高さ35㎝である。燃焼部の高さは35㎝と低い。竈の上に架けられる鍋の頸部から下の深さは22㎝前後で、この竈に鉄鍋を掛けた場合、鍋底面までの燃焼部の高さは13㎝前後と低い状態となってしまう。竈内面の高さは、さらに10㎝程高い位置まで石やローム等で高く盛り上げ、鍋を載せるための逆台形の受け部が造られていたものと思われる。

(３)囲炉裏(第209図、PL.174・175)

【位置・検出状況】建物中央部で、土間と土座と思われる境部分に囲炉裏が造られていた。囲炉裏を囲む枠木が痕跡で残っていた。囲炉裏内の全体に灰が残っていたが、灰の量はわずかであり、中央部60×30㎝の範囲には、深さ４㎝の灰白色の灰層が良好に残っていた。焼土や炭の破片はほとんど残っていなかった。良好である竈と比較すると、残りは非常に悪い。天明泥流埋没段階で使われていたのかについては疑問である。

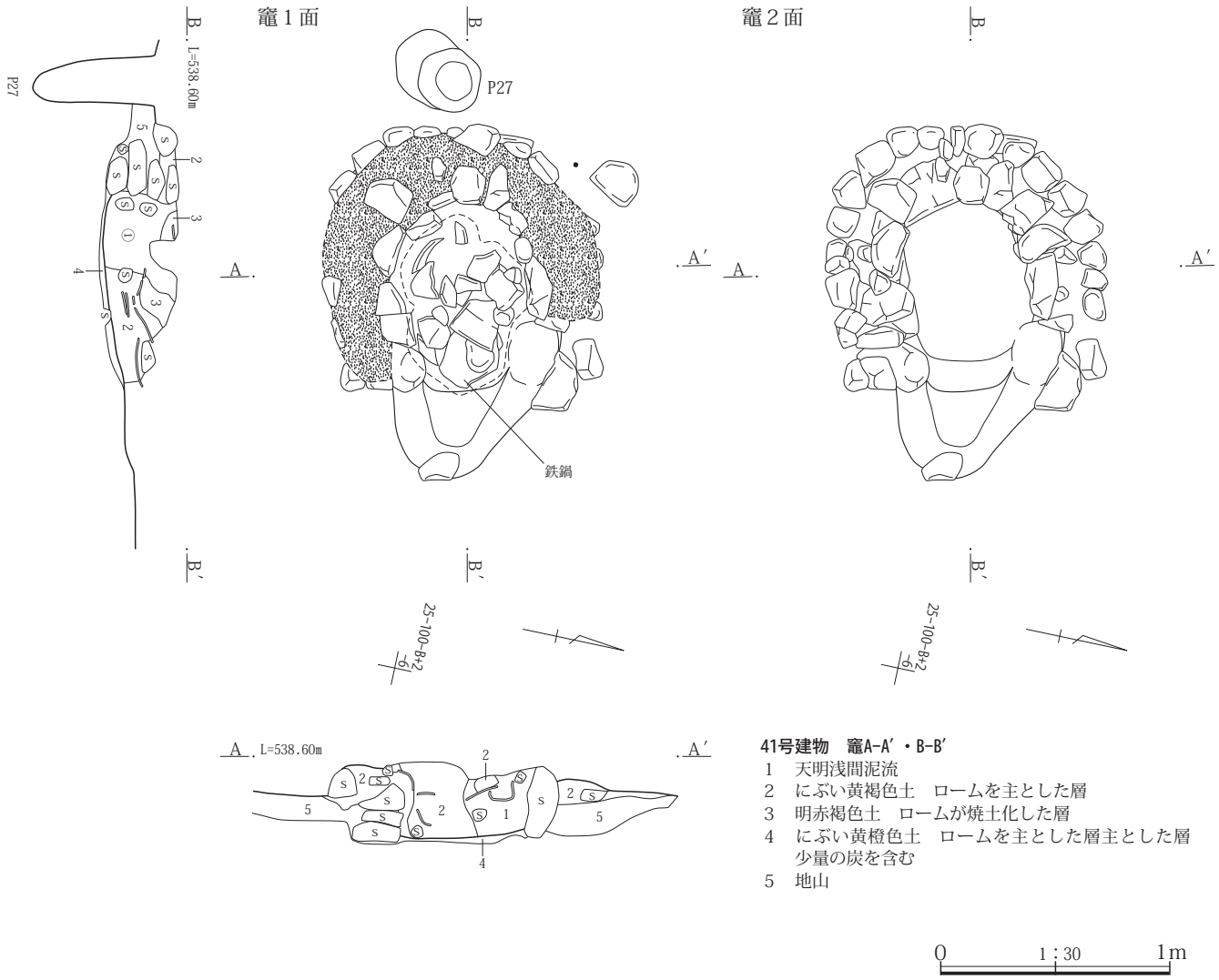
【規模・遺物】囲炉裏を囲む枠木内の規模は90㎝四方、枠木の幅は痕跡の計測で幅約10㎝である。囲炉裏底面は土間面より20㎝程深かった。囲炉裏南西コーナー部分に陶器の水注が正位で出土し、破損した頸部の上位に仏飯器の底部が出土した。

(４)焼土(第211図、PL.175)

【位置・検出状況】土座中央部、囲炉裏北側に直径50㎝、深さ10㎝の土坑状の掘り込みがある。調査段階では焼土として調査した。中に厚さ約２㎝の暗褐色土を含む灰層があり、灰層の下は焼土粒を多く含む灰層となっていた。廃棄された囲炉裏の可能性があるが、調査段階の焼土として報告する。土座が造られる以前の遺構であろうか。

(５)唐臼(第209図、PL.175)

【概要・規模・所見】土間南西のコーナー部分に唐臼が埋められていた。唐臼から北1.3m離れた場所に、杵を支える支脚を埋めたであろうP33(支脚穴)が掘られてい



第208図　６区14号屋敷　41号建物竈

た。

【規模・形状】唐臼は口縁部が地表面に顔を出した状態で確認された。唐臼から北1.3mにある支脚穴Ｐ33の大きさは、直径40㎝、深さ60㎝である。唐臼は口唇部の大きさが胴部よりわずかに狭くなっており、平に加工されてわずかに内傾している。

唐臼は口縁部外径67㎝、口縁部内径38㎝、外面高47㎝、内面高33㎝、口縁部の厚さ14㎝であった。

（６）室（第210図）

【位置・検出状況】竈と囲炉裏に挟まれた場所に幅95㎝前後、深さ20㎝前後掘り込まれ、内部に少量の炭が出土した遺構がある。これまでの調査で竈の脇に同じような遺構が確認されている。用途については不明であるが、囲炉裏や竈の燃料等を置いていた場所ではないだろうか。他の調査例から、室と呼称して報告しているので、ここでも室として報告する。

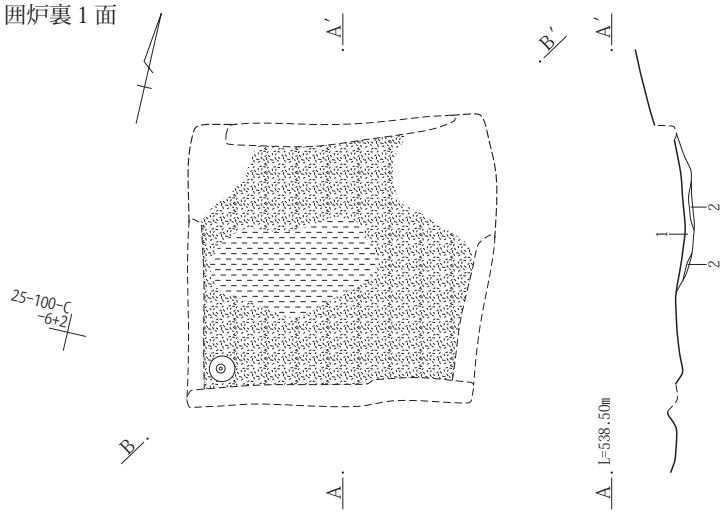
（７）馬屋（第210図）

【位置・構造・規模】41号建物の南東部に位置する。東西3.4m、南北3.3mの方形の範囲が深さ20～30㎝程掘り込まれており、内面に４本の柱穴があった。東側の下屋部分には埋設桶（便槽）が埋められていた。４本の柱穴間隔は東西2.5m、南北2.4m前後であり、ほぼ正方形に近い。掘り込まれていた範囲は、この柱穴より広い範囲であり、桶（便槽）の埋められている部分では桶（便槽）部分まで、さらに東側まで掘り込まれていた。馬屋の範囲は、おそらく東側の下屋柱（確認されていない）部分までであったものと思われる。

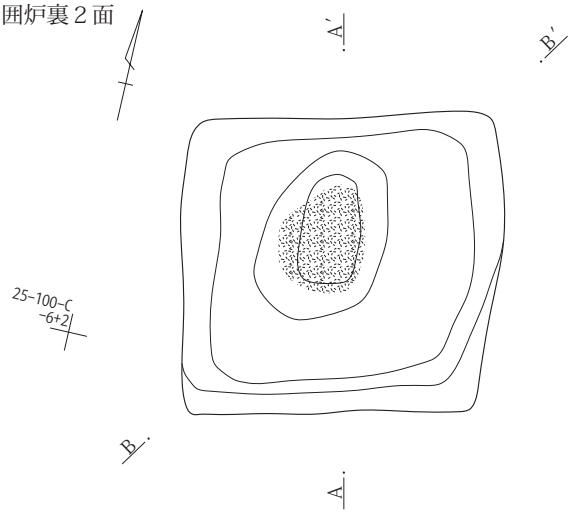
（８）埋設桶（便槽）（第210図、PL.175）

【位置・概要】埋設桶（便槽）は馬屋の東側、下屋部分に埋められていた。桶は板材の木質部を残すが、板材は残っ

囲炉裏１面



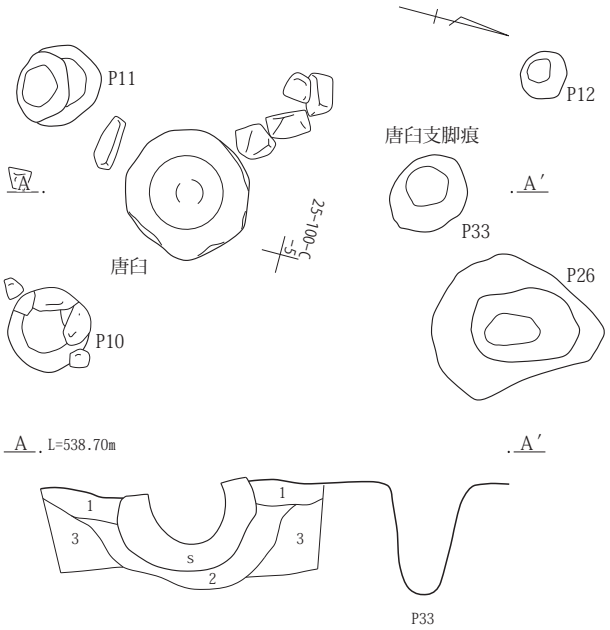
囲炉裏２面



41号建物　１号囲炉裏A-A′
1　暗褐色土　暗褐色土中に多くの灰と少量の炭を含む
2　灰白色土　灰層

0　1：30　1m

唐臼

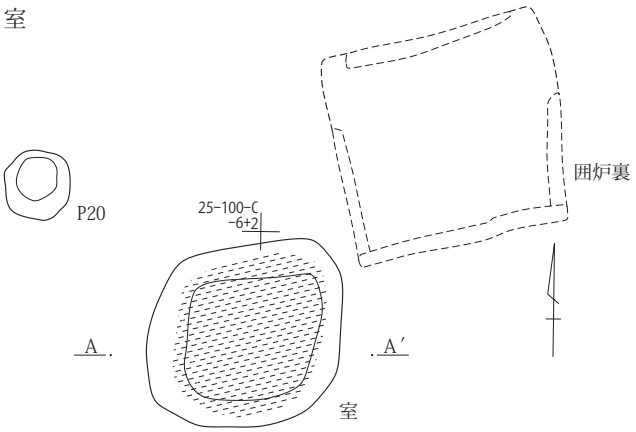


41号建物　唐臼A-A′
1　暗褐色土　土間フクドに近い層　ロームを一部含む
2　黒褐色土
3　地山

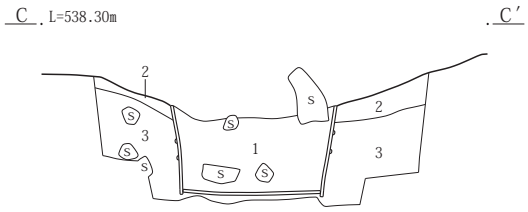
0　1：40　1m

第209図　６区14号屋敷　41号建物１号囲炉裏・唐臼

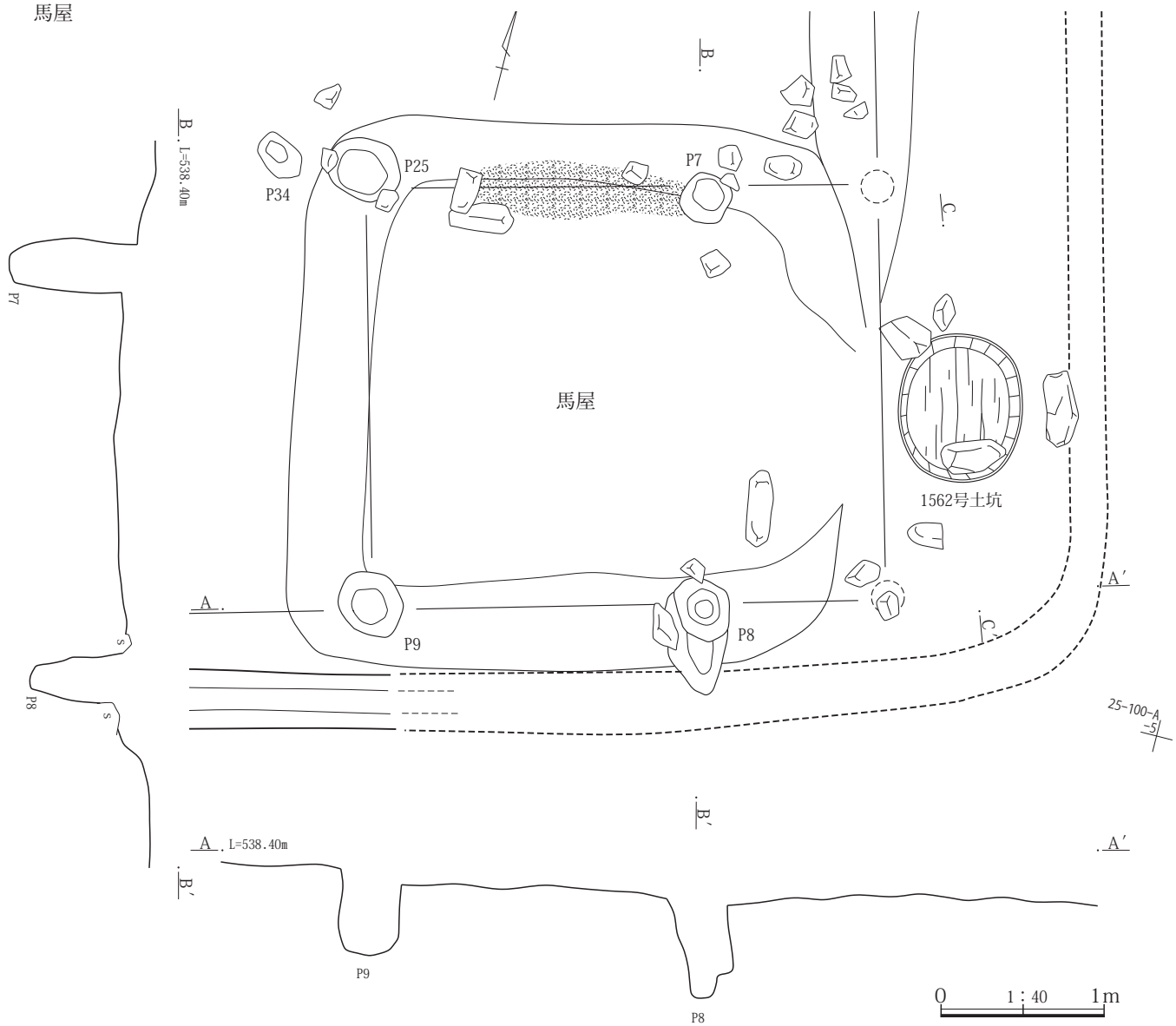
室



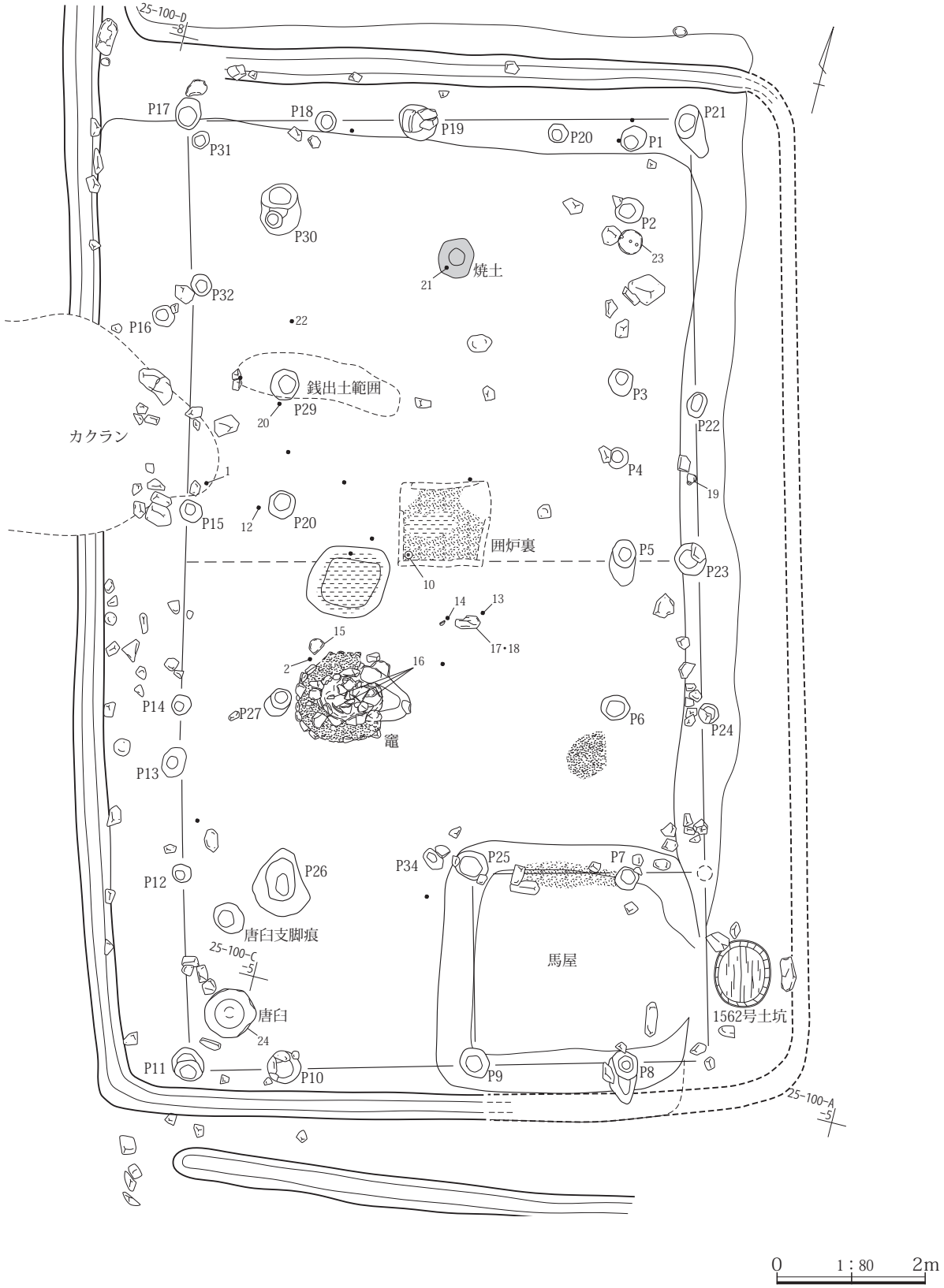
41号建物　馬屋1562号土坑C-C′
1　天明泥流
2　暗褐色土　少量のロームを含む
3　地山層に近い層



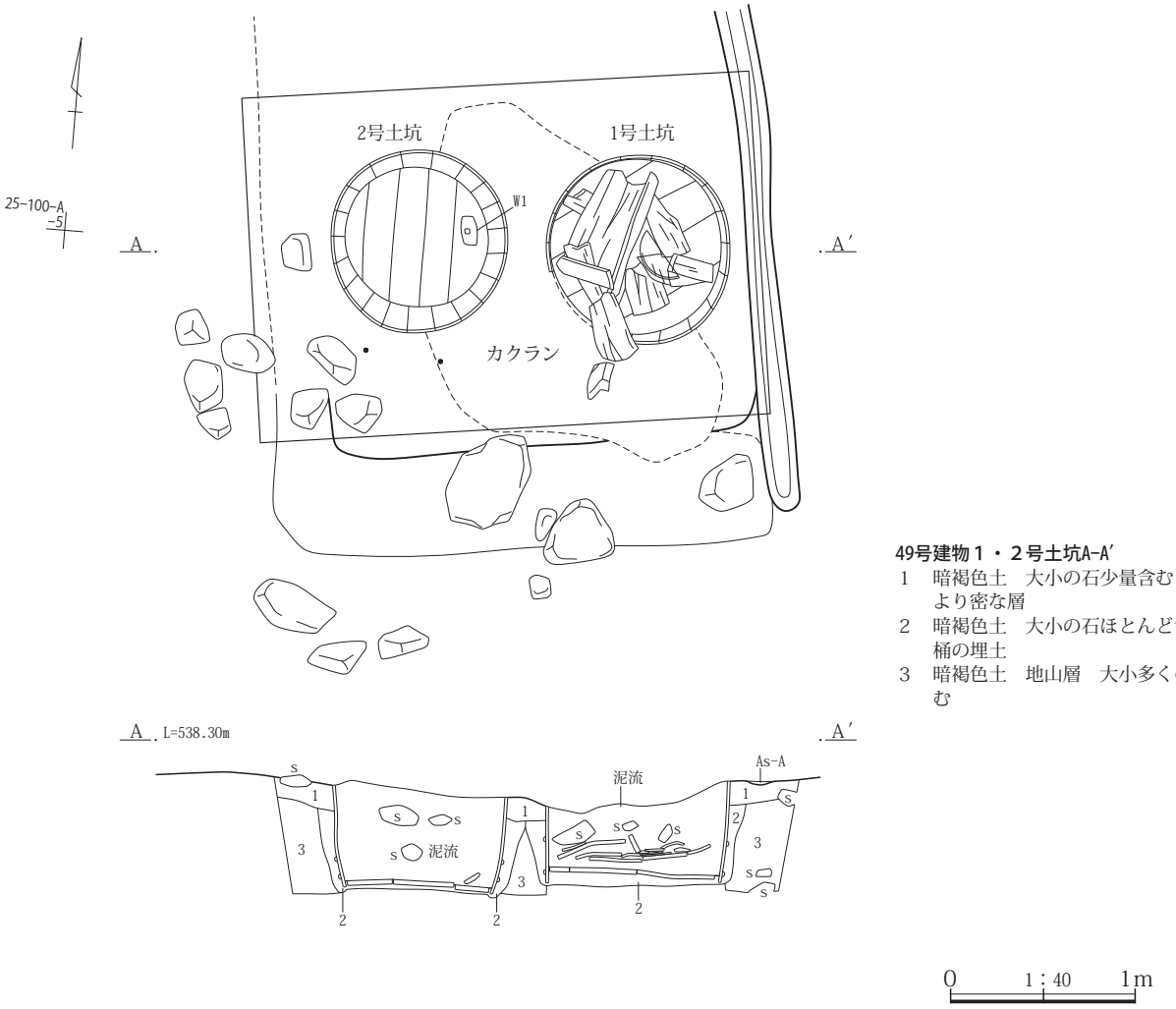
馬屋



第210図　６区14号屋敷　41号建物室・馬屋



第211図　６区14号屋敷　41号建物遺物出土状態



第212図　６区14号屋敷　49号建物(厠)

ていなかった。特に口縁部付近の残りが悪かった。桶の大きさは現状で口径85㎝、底径75㎝、高さ47㎝であり、浅い桶であった。地表面の高さから推定すると、口径90㎝、高さ80㎝前後であったと思われる。側板外側にタガの痕跡が底面から23㎝と33㎝の位置に２か所残る。

第３項　49号建物(厠)(第212図、PL.176)

25-99-Y- ４・５グリッドに位置する。

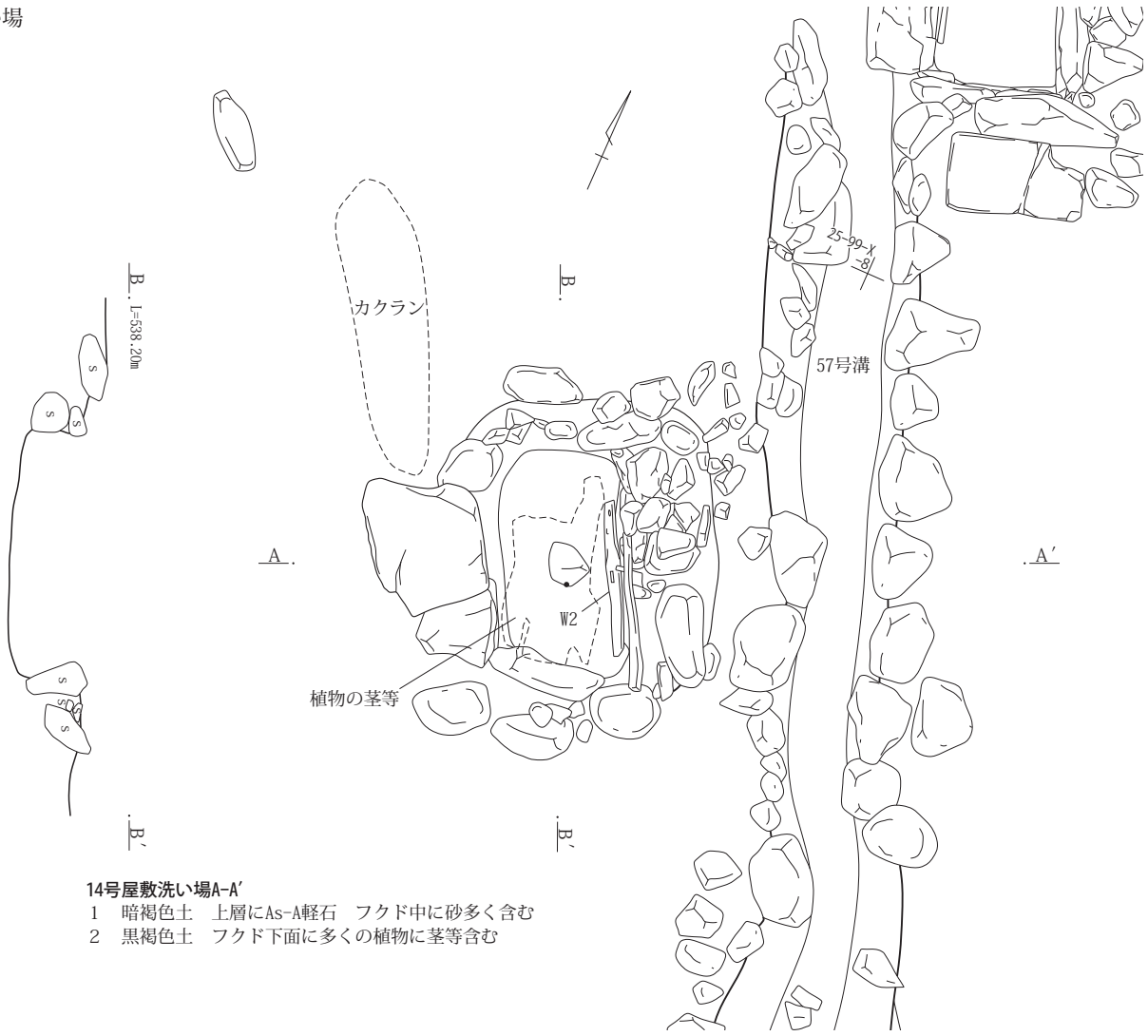
【位置・概要】主屋である41号建物南東の庭部分に位置する。長方形の建物で内面に２つの桶が埋められている。北側の38号建物の付属建物である48号建物は、土台石が良好に残り建物の範囲は明瞭であったが､49号建物では、土台石らしき石列や掘立柱等を埋めた柱穴はなかった。そのために建物の範囲や規模が不明である。

【規模・構造・遺物】建物中央部分の高さは、主屋である41号建物より40㎝程低い場所である｡建物西側に雨落溝、南側に屋敷敷地を区画したであろう段差等をもとに、建物範囲を東西184㎝(１間)、南北273㎝(１間半)の建物であったと想定し、その範囲を図示した。

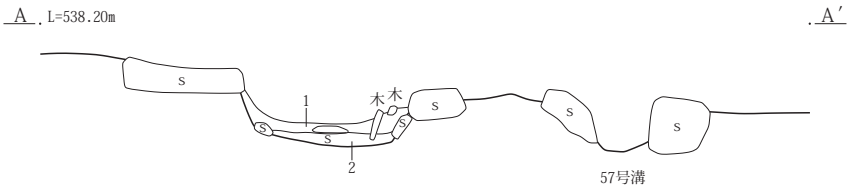
２つの桶は東側の桶を１号土坑、西側の桶を２号土坑と呼称して調査した。１号土坑出土の桶を１号桶、２号土坑出土の桶を２号桶と呼称する。１号桶の規模は底径93㎝、口径97㎝、高さ51㎝、タガの位置は、底板部分と底面から13㎝の位置に２本、２号桶の規模は底径80㎝、口径93㎝、高さ54㎝、タガの位置は、底面から４㎝と14㎝の位置に２本残っていた。

１・２号土坑内の桶の残りは良好ではなかった。２号土坑出土桶の底板は４枚の底板で、直径73.4㎝となっており、各板は側面部に竹釘３個打ち込み板を接合していた。底板の厚さは３㎝であった。２号桶の中からは長さ10.5㎝、幅９㎝で、中央に丸い穴が開けられている木製品が出土している。１号土坑の覆土中から多くの板材が

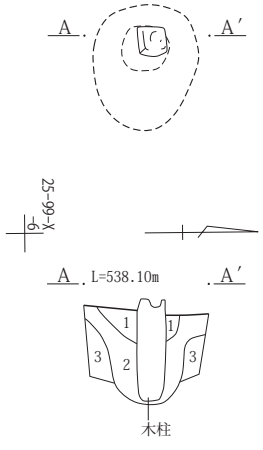
洗い場



14号屋敷洗い場A-A′
1　暗褐色土　上層にAs-A軽石　フクド中に砂多く含む
2　黒褐色土　フクド下面に多くの植物に茎等含む



柱穴



柱穴A-A′
1　暗褐色土　土間フクドに近い層
2　黒褐色土　少量の小石含む
3　地山層

0　1：40　1m

第213図　６区14号屋敷　洗い場・柱穴

出土した。桶の蓋等に使われていたものであろうか。

第４項　洗い場(57号溝３号洗い場)

（第213図、PL.177）

25-99-X-７グリッドに位置する。

【位置・概要】庭の東に57号溝があり、その手前水路から西約１ｍ離れて、水路と並行する方向で長方形に掘り込み、洗い場が造られていた。洗い場は、内面には大小の石を１～３段積んでいる。57号溝より洗い場の底は10㎝前後深くなっているので、57号溝に流れていた水を湧水として集めて洗い場としたと思われる。

【構造・規模】洗い場の石組の中で、49号建物に近い西側に置かれていた１石は、75×62㎝、厚さ16㎝の大きくて平らな石であった。

洗い場の規模は、南北方向1.4m、東西方向90㎝、深さ35㎝である。底部から踏鍬が出土している。

第５項　柱穴(庭)(第194・213図)

25-99-Y-４・５グリッドに位置する。

【位置・概要】庭南東部、49号建物北東、３号洗い場南西に位置した場所に、垂直方向に木材が埋められていた。地上部分には折れて５㎝ほど残っていただけであったが、柱穴の中には、長さ50㎝、太さ15㎝の材が残っていた。深さや大きさから、上屋柱と同じような大きな柱状のものが建っていた可能性がある。用途不明である。

第６項　出土遺物(第401～404・568図、PL.336)

北側の土座部分から銭と砥石、肥前磁器染とすり鉢、建物北東部分から石臼が出土している。囲炉裏南西コーナー部分から、瀬戸・美濃陶器水注が置かれたような状態で出土している。注ぎ口と把手が欠損し、蓋には磁器の仏飯器の底部と思われるものが乗せてあった。囲炉裏南側から煙管が２本、包丁と鉈、竈北に接して茶釜の蓋が出土している。

竈内から釜が出土している。竈内から釜が出土したのは、他の建物では21号建物と16号建物だけであり、非常に貴重な出土例である。土座南端から轡が出土している。他の建物ではほとんど出土していない。馬屋のある建物であり、馬に使われたのであろうか。建築部材は残っていなかった。

第14節　13号屋敷跡(第193・214～221図、PL.178～185)

第１項　13・16号屋敷跡概要

第２項　39号建物　(１)竈　(２)囲炉裏

(３)唐臼　(４)馬屋　(５)土間と土座

(６)建物外南東部分出土遺物群

第３項　46号建物

第４項　出土遺物

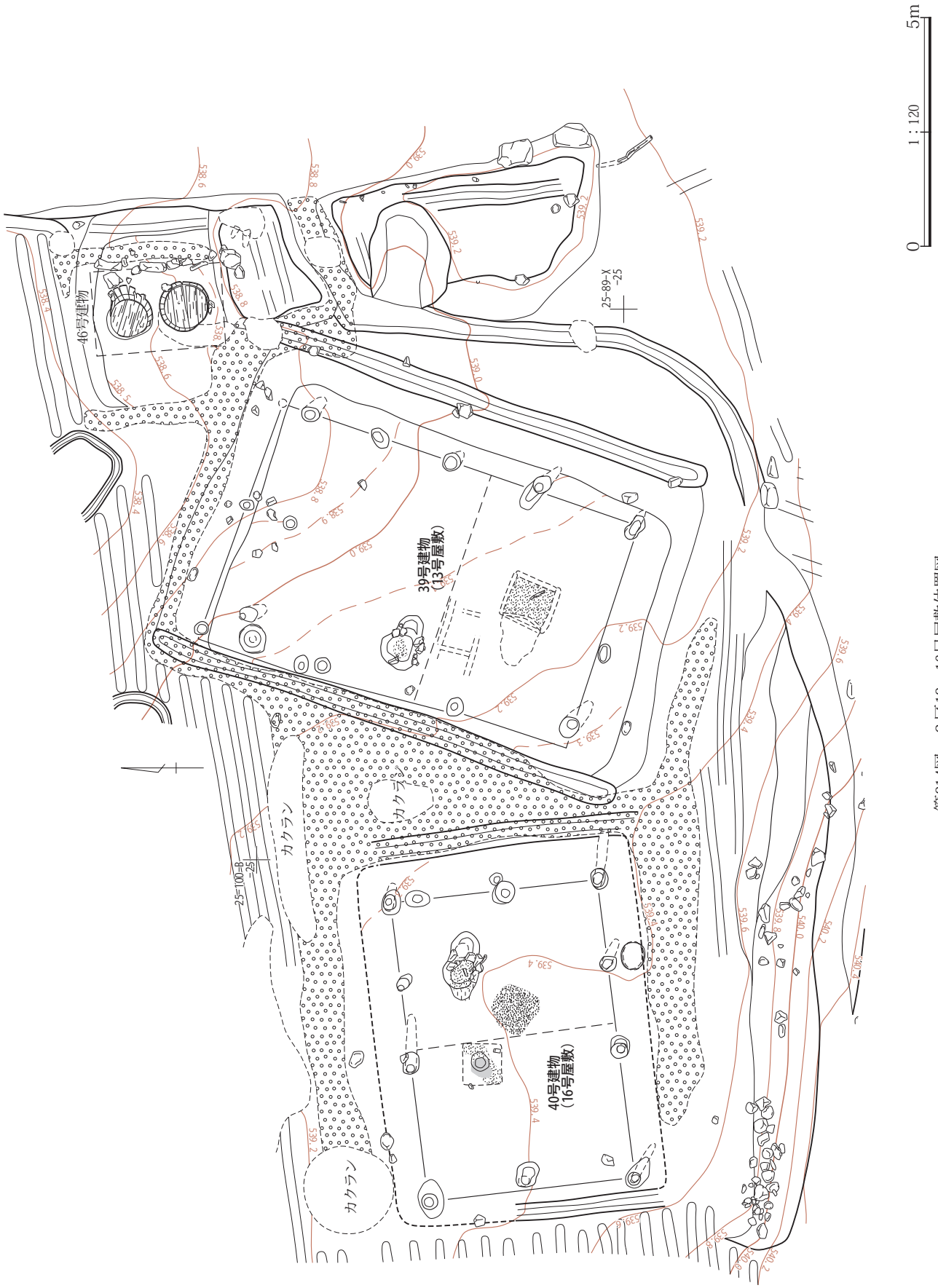
第１項　13・16号屋敷跡概要(６区)

13・16号屋敷跡は村の中央部に位置し、南側に21号道と53号溝、東側に25号道と57号溝がある。13号屋敷は主屋である39号建物と付属建物である46号建物からなる屋敷であり、16号屋敷は40号建物である。調査担当は39・40・46号建物を13号屋敷と呼称して調査したが、39・40号建物は両建物とも馬屋はないが、竈･囲炉裏が造られ、厠又は便槽を伴い、家庭生活ができる建物であるので、39・46号建物を13号屋敷、40号建物を新たに16号屋敷として報告する。

両屋敷は、南北約14m(東側)～９m(西側)×東西約22mの東西方向に長い同じ敷地内に建てられており、西側が16号屋敷40号建物､東側が13号屋敷39号建物である。主屋の主軸方向は大きく異なり、39号建物は東側に約25度傾いているが、南北方向に近い。40号建物の主軸方向は、ほぼ東西方向である。両屋敷の間に明瞭な境界となるような溝や段差等は存在しない。13号屋敷は、敷地東側に狭い庭があり、北東コーナー部分に、付属建物で厠である46号建物がある。16号屋敷は、建物出入口である南側に庭らしき空間がなく、付属建物もない。13号屋敷の出入口は東側の25号道であると思われるが、16号屋敷は南側の21号道との間には１m以上の段差があり、出入口の通路としては少し無理と思われる。39号建物南を通過して25号道に出たのであろうか。両屋敷とも洗い場は不明である。地形は南西部が高く、南東部が低くなっている。

As-A軽石は、39号建物では出入口である東側以外の３方向の雨落溝部分、46号建物では東側の雨落溝で残っていた。40号建物では西側以外の雨落溝部分に残っていた。

両屋敷には共通する大きな特色がある。主屋は規模の



第214図　6区13・16号屋敷位置図

大小や掘立柱建物・土台建物等による違いはあるが、大部分の主屋は上屋柱と下屋柱を持つ構造であった。しかし、39・40号建物および７号屋敷13号建物では、上屋柱と下屋柱が建物の基本構造となっていない。基本的に上屋柱だけの建物である。梁間方向2.5間であり、桁行は３間半から４間半の建物である。

第２項　39号建物(第215～218図、PL.178～184)

25-80･90･99･100-Ｘ～Ａ-24～２グリッドに位置する。【概要・規模】天明泥流を除去した遺構確認段階では、竈部分に大小の石と半分に割られた石臼が表面に飛び出していたが、囲炉裏は埋まっており確認できなかった。建物の柱穴が西と東側に直線状に確認された。南東コーナー部分から外側方向に、石臼・陶磁器・鉄製品等の大量の遺物が、39号建物から押し出されたような状態で重なって出土した。竈と囲炉裏はあるが、馬屋を持たない掘立柱建物である。柱穴は出入口である東側に５本(Ｐ１～Ｐ４・Ｐ10)、西側には６本あるが、東側の柱穴と対となるのは４本(Ｐ６・Ｐ５・Ｐ８・Ｐ９)である。Ｐ７とＰ６北側にＰ12とＰ13がある。南側のＰ10とＰ９の南側に柱穴はないが、この狭い土間面の残存状況からこの部分にも上屋はあったものと思われる。

これらの柱の中で、柱穴Ｐ１・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ10・Ｐ９・Ｐ６の６本は、北西方向から押し寄せた浅間泥流により､南東方向に押し倒された痕跡が明瞭に残っている。竈は壊されており、土間や想定される土座の部分に植物の痕跡も残していないが、多くの遺物が出土していることや、雨落溝中に多くのAs-A軽石が堆積していることと合わせ、建物の屋根がかかって使用されていたことは明らかである。

建物北西コーナー部分に臼が埋められていた。これまでの調査例から、建物北側で唐臼と竈の造られた面が土間であり、囲炉裏のある南側が土座であったと思われるが、土座の痕跡はない。竈は天明泥流に埋もれる以前に廃棄され、多くの石や半裁された臼により埋められていた。囲炉裏は、天明泥流により埋まっていたが、陶磁器の出土等から埋没段階まで使われていたと思われる。

【構造・規模】確認できた柱は全て掘立柱である。

建物は東側に約25度傾いているが、南北方向に近い。柱穴間で計測すると､南北方向(桁行方向)7.36m(４間)、東西方向(梁間方向)4.60m(２間半)である。しかし土間面の様子から、北と南側に92㎝前後の幅で土間が広がっている。その範囲を含めると、南北方向(桁行方向)は9.20m(５間)である。

北側が土間で南側が土座と思われるが、土座の痕跡は全く残っていないので、境は不明である。

多くの掘立柱建物は、桁方向で上屋柱である内側２列と、下屋柱である外側２列の計４列を基本としている。

39号建物はこのような構造とは大きく異なり、下屋柱を持たない掘立柱建物の建物となっている。このような建物は石川原遺跡では、13・39・40号建物の３棟だけである。いずれの建物も小さくて、確実な馬屋は確認されていない。

【建築部材】構造材は出土していない。

ピット一覧表参照

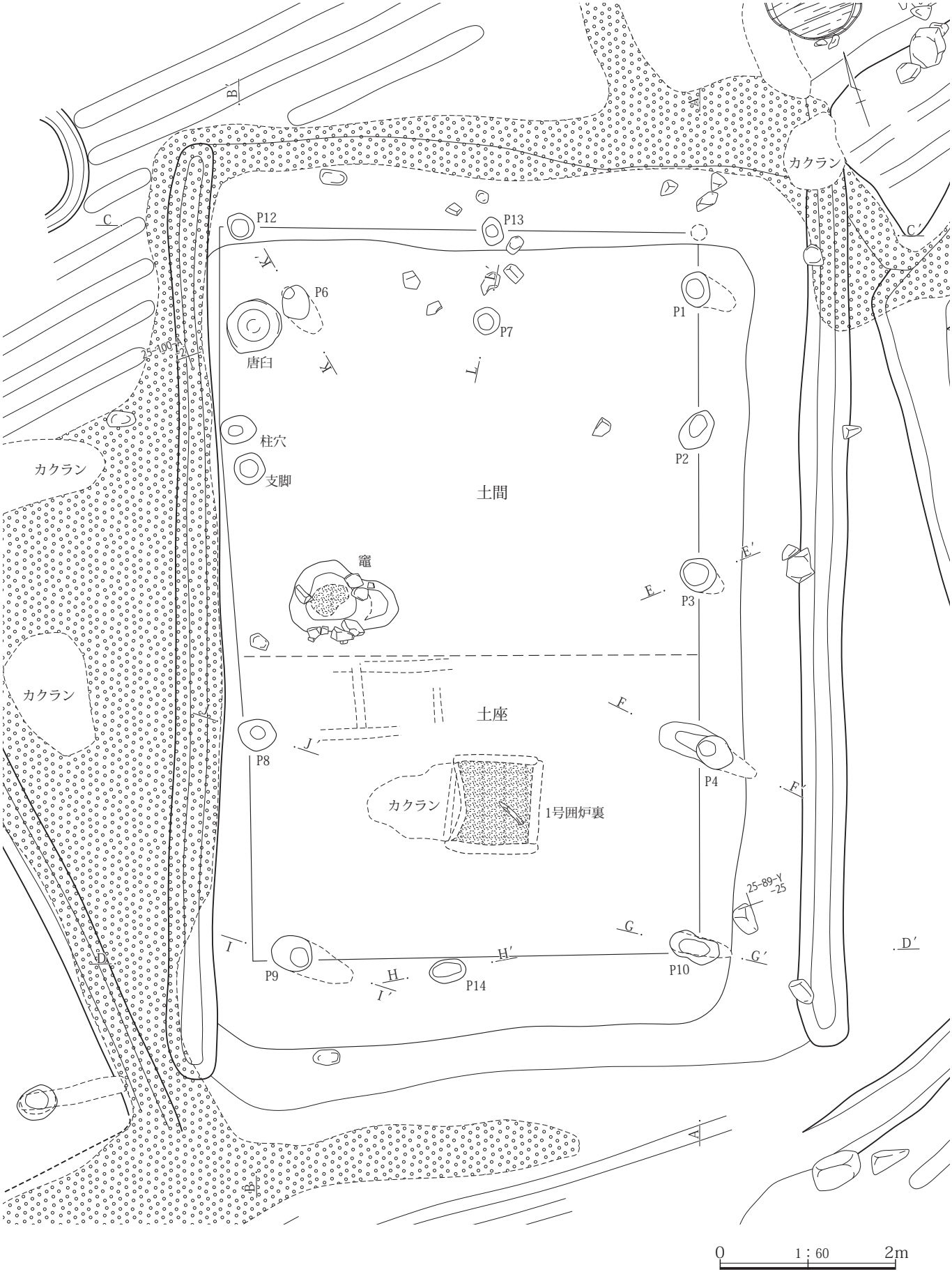
No.	長径cm	短径cm	深さcm
Ｐ１	39	32	103
Ｐ２	49	34	96
Ｐ３	41	38	89
Ｐ４	44	36	87
Ｐ５	35	33	71
Ｐ６	38	33	118
Ｐ７	32	30	58
Ｐ８	43	37	61
Ｐ９	47	40	56
Ｐ10	57	30	78
Ｐ11	41	31	70
Ｐ12	33	29	99
Ｐ13	32	22	74
Ｐ14	42	27	55

(１)竈(第217図、PL.179・180)

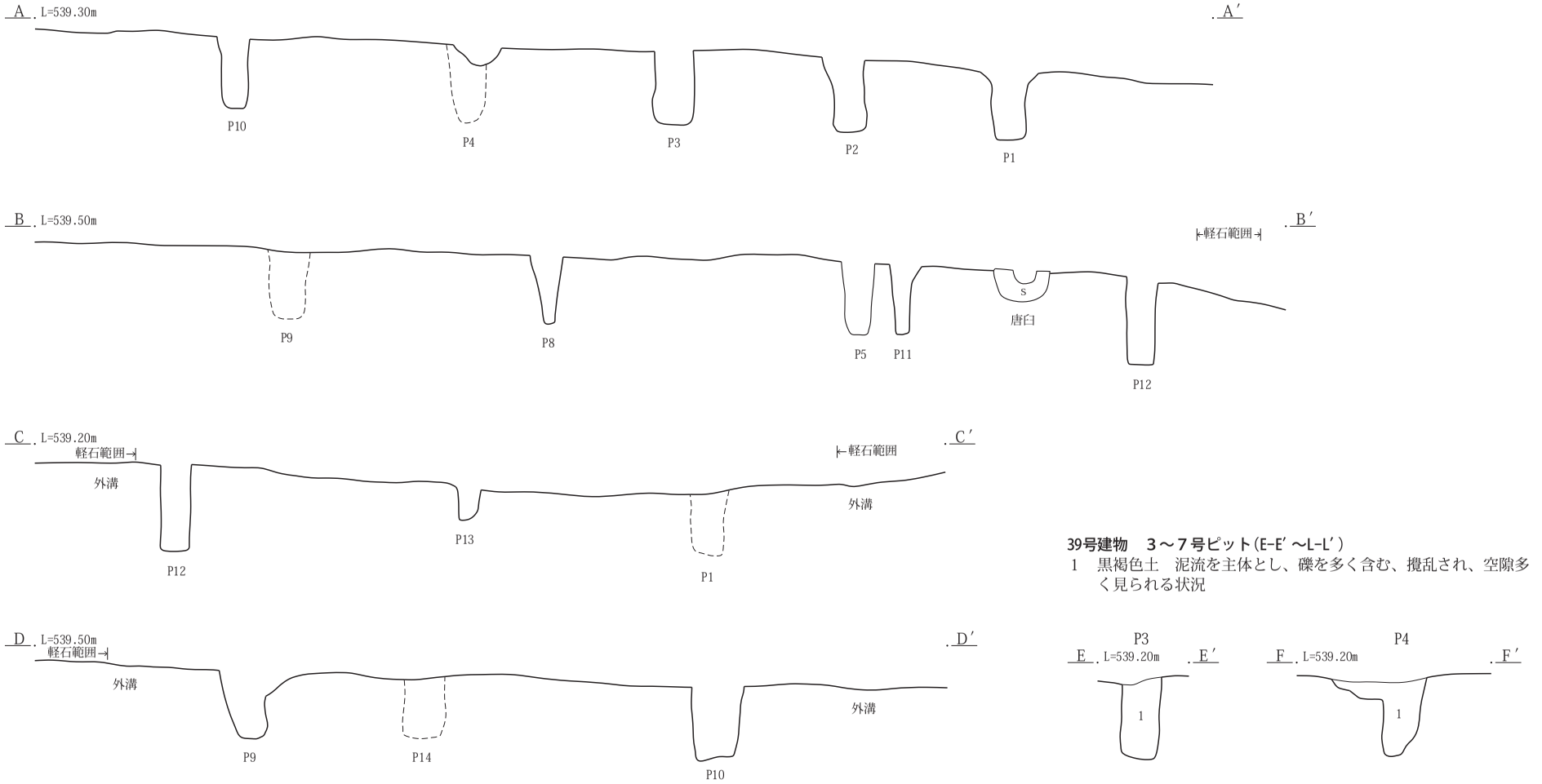
【位置・概要】土間の奥に造られていた。天明泥流を除去すると、大小の石と半分に割られた石臼が表面に置かれていただけであり、竈の特色であるロームで囲まれた石組や、焼土等は全く見えなかった。

表面に置かれていた石臼や石の破片等を除去すると、下から焼土や灰がほぼ円形に出土し、左袖石４個、右袖炊口部分の石２個と、右側奥の石２個がほぼ据えられた状態で出土した。これらの石は全て土間面より下であり、上に位置する竈本体は撤去され、土間面より下の部分は埋められていた。竈は廃棄されていた。

【規模・形状】竈は地山を両袖方向70㎝、奥行方向100㎝、深さ約20㎝の楕円形に近い形で掘り込み、燃焼部を円形に囲むように、大きな細長い石等を建てるのではなく、



第215図　６区13号屋敷　39号建物



39号建物　３～７号ピット（E-E′～L-L′）

1　黒褐色土　泥流を主体とし、礫を多く含む、攪乱され、空隙多く見られる状況

第216図　６区13号屋敷　39号建物断面

小さな石を多く積み上げるように、奥壁・側壁を造っていたようである。燃焼部下面に多くの炭の破片を含む灰層と焼土層が残っていた。

多くの竈では竈を囲むようにロームが使われ、竈のまわりに残っていることが多いが、この竈には残っていなかった。燃焼部灰層の上面の高さは、土間面の高さより14㎝低く凹んでいる。

（２）囲炉裏（第217図、PL.179・180）

【位置・検出状況・規模】土間と土座（想定）の境付近に囲炉裏があり、浅間泥流で埋まっていた。土間面に囲炉裏の枠木は残っていなかったが、枠木の痕跡が明瞭に残っていた。囲炉裏西端部分は撹乱を受けて残っていなかった。枠木の内側にはほぼ全面に灰が残っていた。

枠木部分を含めた規模は、南北方向1.1m、東西方向は西側が一部不明であるが、おそらく1.1m前後と思われる。内部に厚さ約８㎝の灰層が残っていた。灰層の下には直径40㎝前後の円形の範囲が焼土化していた。

（３）唐臼（第218図、PL.180）

【概要・規模・所見】建物北西コーナー部分に臼が埋められていた。他の調査例から唐臼であり、支脚穴は南側約1.2m付近に存在したＰ11と思われる。Ｐ11は直径約30㎝、深さ約69㎝である。唐臼は口縁部が水平ではなく、南側の土間面の口縁部が少し高くなるように埋められていた。

（４）馬屋（推定）

【位置・概要】多くの建物では、出入口部分に馬屋があるが、この建物では馬屋らしき掘り込みや柱跡はなかった。馬屋は造られていないものと思われる。

（５）土間と土座（第215図参照）

【位置・概要】竈を持つ北側が土間で、囲炉裏を境とする南側が土座と思われるが、土間と土座を区画する溝はなく、さらに南側の土座と思われる部分に植物の痕跡が全く残っていない。42号建物等から想定したが、痕跡からは全く明らかにできない。

（６）建物外南東部分出土遺物群（第221図）

39号建物南東コーナー部分、Ｐ10の外側に大量の遺物が出土している。これらの遺物は、39号建物から南西方向に押し出されたような状態である。この方向はＰ４・Ｐ９・Ｐ10等の柱穴が倒れている方向と同じであり、浅間泥流により39号建物を南東方向に押し倒した段階で、建物内部にあった多くの生活用品が、建物外側まで押し出されたことを物語っているものと思われる。出土遺物は、キセル・銭・鎌・鉄鍋・漆椀・櫛・陶磁器椀・農具の鍬の刃先・石臼等、生活用具である。

第３項　46号建物（第219図、PL.185）

25-99-W・X-２グリッドに位置する。

【位置・概要】39号建物北東部分に位置する厠である。

南北方向に長い長方形の建物であり、中央に桶が２個埋められている。北側の桶を１号土坑、南側の桶を２号土坑として調査した。主屋である39号建物は掘立柱建物であるが、46号建物は柱穴がなく、東側には土台建物に見られる石が南北方向に並んで置かれていた。東側の雨落溝と思われる部分にはAs-A軽石が多く残っていた。他の３面に石はなく、雨落溝やAs-A軽石は残っていない。これまでの調査例から、１間×１間半の建物であったことが考えられる。

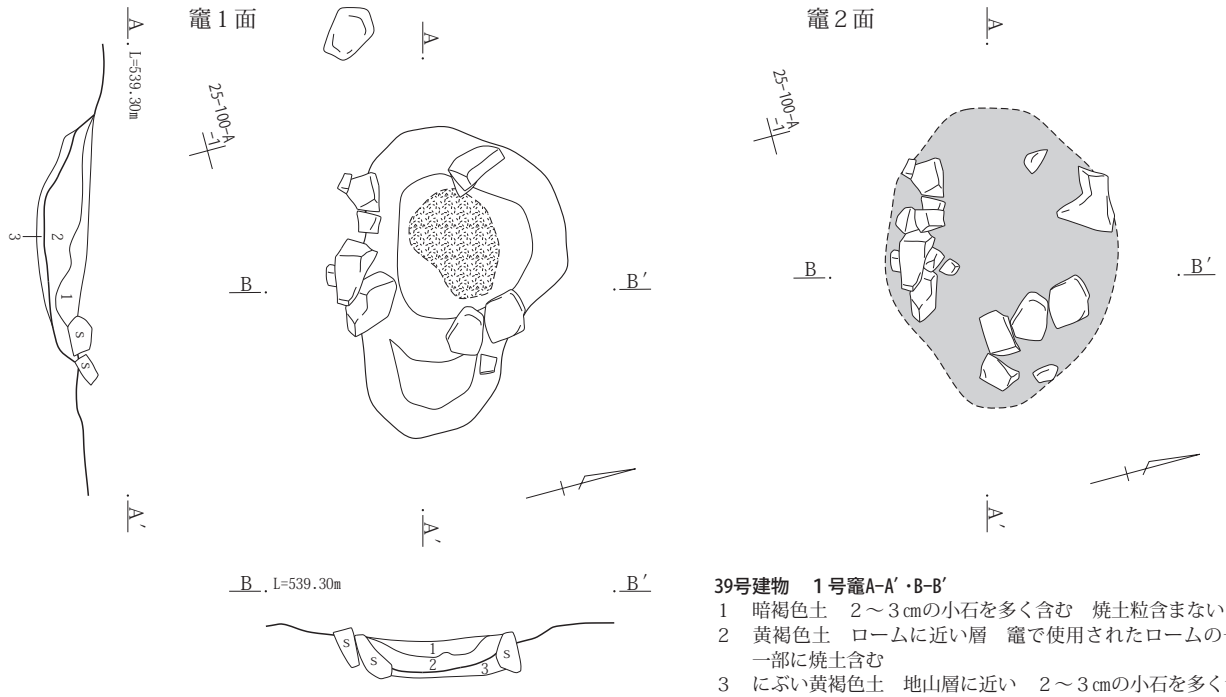
１・２号土坑には桶が埋められており、両方とも丸い底板が良好に残り、側板は上端が残っていなかったが、ほぼ側板全体が残っていた。

【構造・規模】建物の規模は残された土台の石や表面の土の違いから想定すると、南北約270㎝、、東西約90㎝である。１号土坑（便槽桶）は、側板の半分近くが内側に倒れ込んでいた。内部から櫛の破片が出土した。桶の規模は底板の直径80㎝、厚さ2.5㎝、底板はおそらく３枚、底板を接合するための楔各２か所、側板外側のタガは側面に３本残っていた。側板の長さ90㎝。

２号土坑（便槽桶）は、長さ28㎝の小さな桶の底板が１枚出土し、他に曲物の破片が出土した。桶の規模は底板の直径89㎝、厚さ3.4㎝、底板は３枚良好な状態で残っていた。底板を接合するための竹製と思われる楔が各２か所撃ち込まれていた。側板外側にタガは側面に５本残っていた。側板の長さは、土坑面に残っていた痕跡から80㎝だけ計測できたが、底径の大きさから、もっと長かったものと思われる。２号土坑に埋められていた桶の材質はクリであった。

竈１面

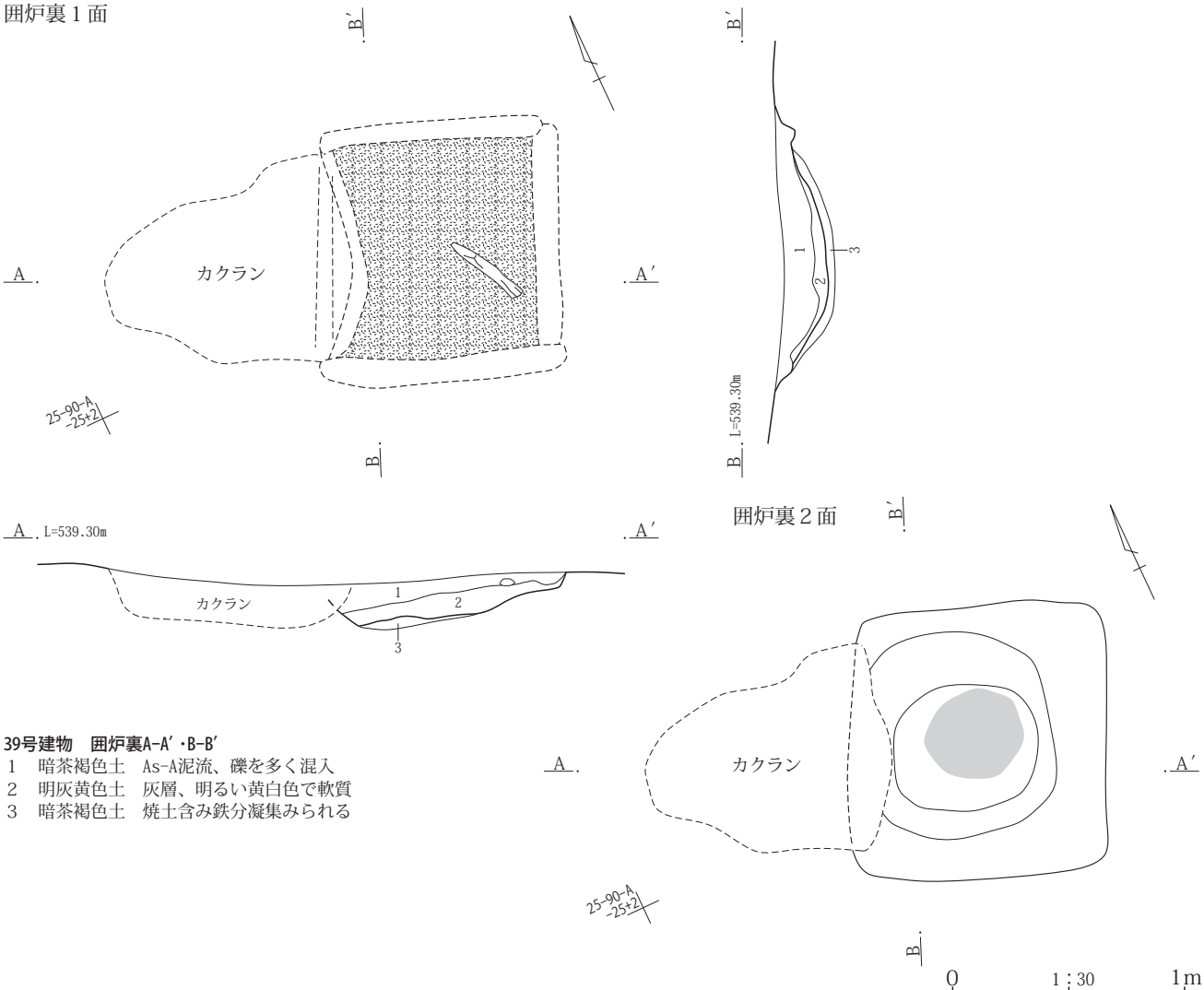
竈２面



39号建物　１号竈A-A′・B-B′
1　暗褐色土　２～３㎝の小石を多く含む　焼土粒含まない
2　黄褐色土　ロームに近い層　竈で使用されたロームの一部か？
　一部に焼土含む
3　にぶい黄褐色土　地山層に近い　２～３㎝の小石を多く含む

囲炉裏１面

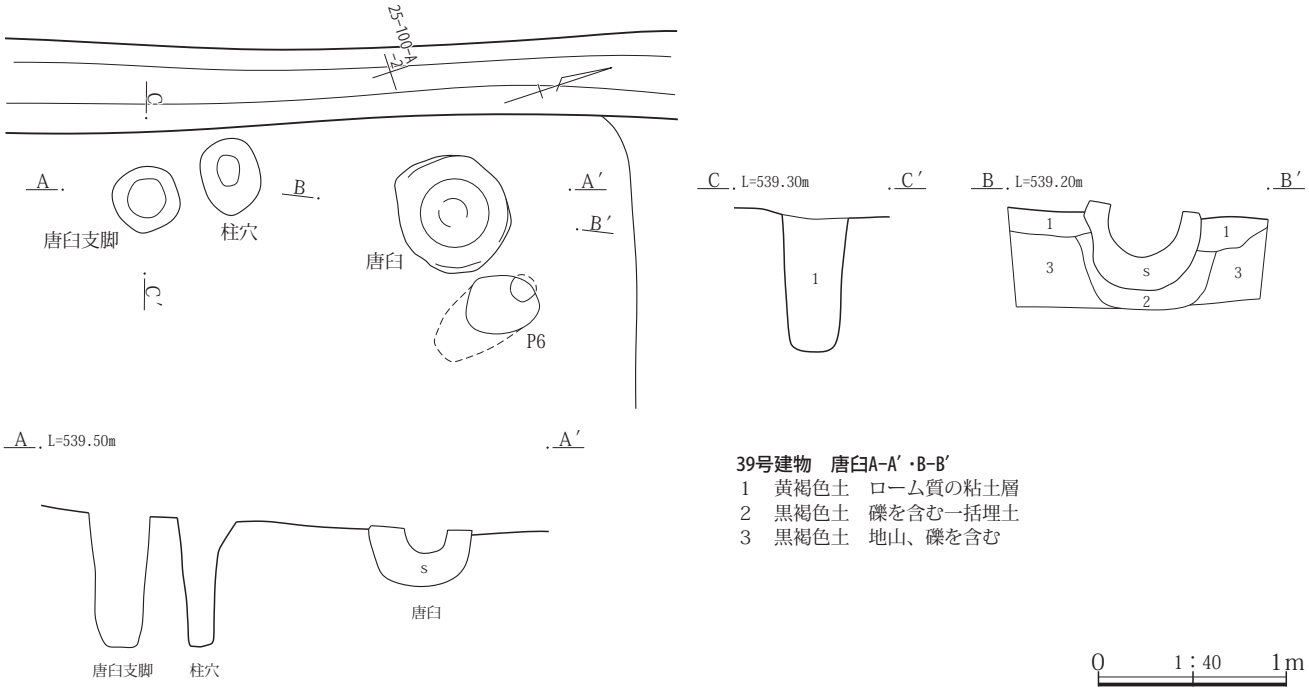
囲炉裏２面



39号建物　囲炉裏A-A′・B-B′
1　暗茶褐色土　As-A泥流、礫を多く混入
2　明灰黄色土　灰層、明るい黄白色で軟質
3　暗茶褐色土　焼土含み鉄分凝集みられる

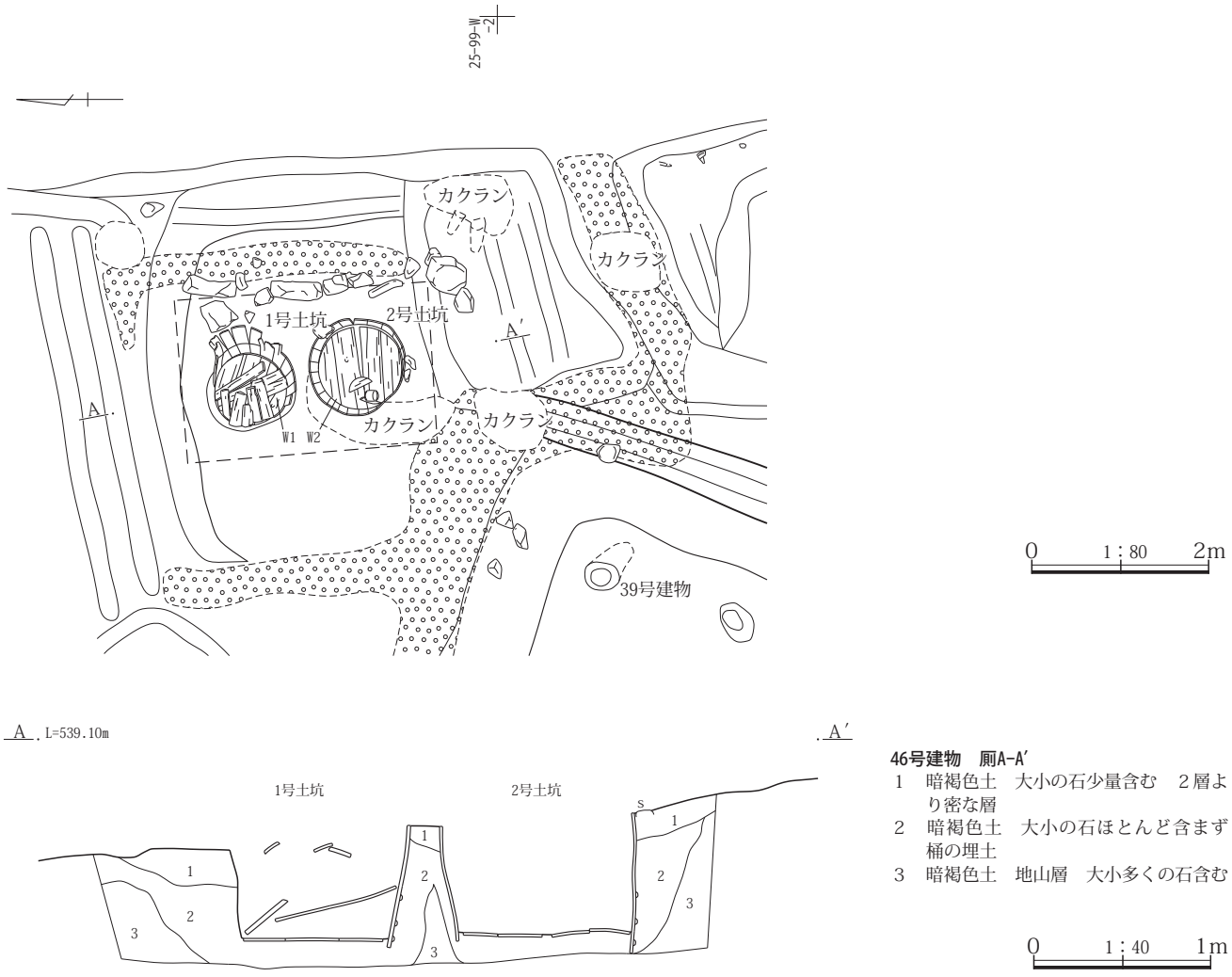
0　1：30　1m

第217図　６区13号屋敷　39号建物竈・囲炉裏



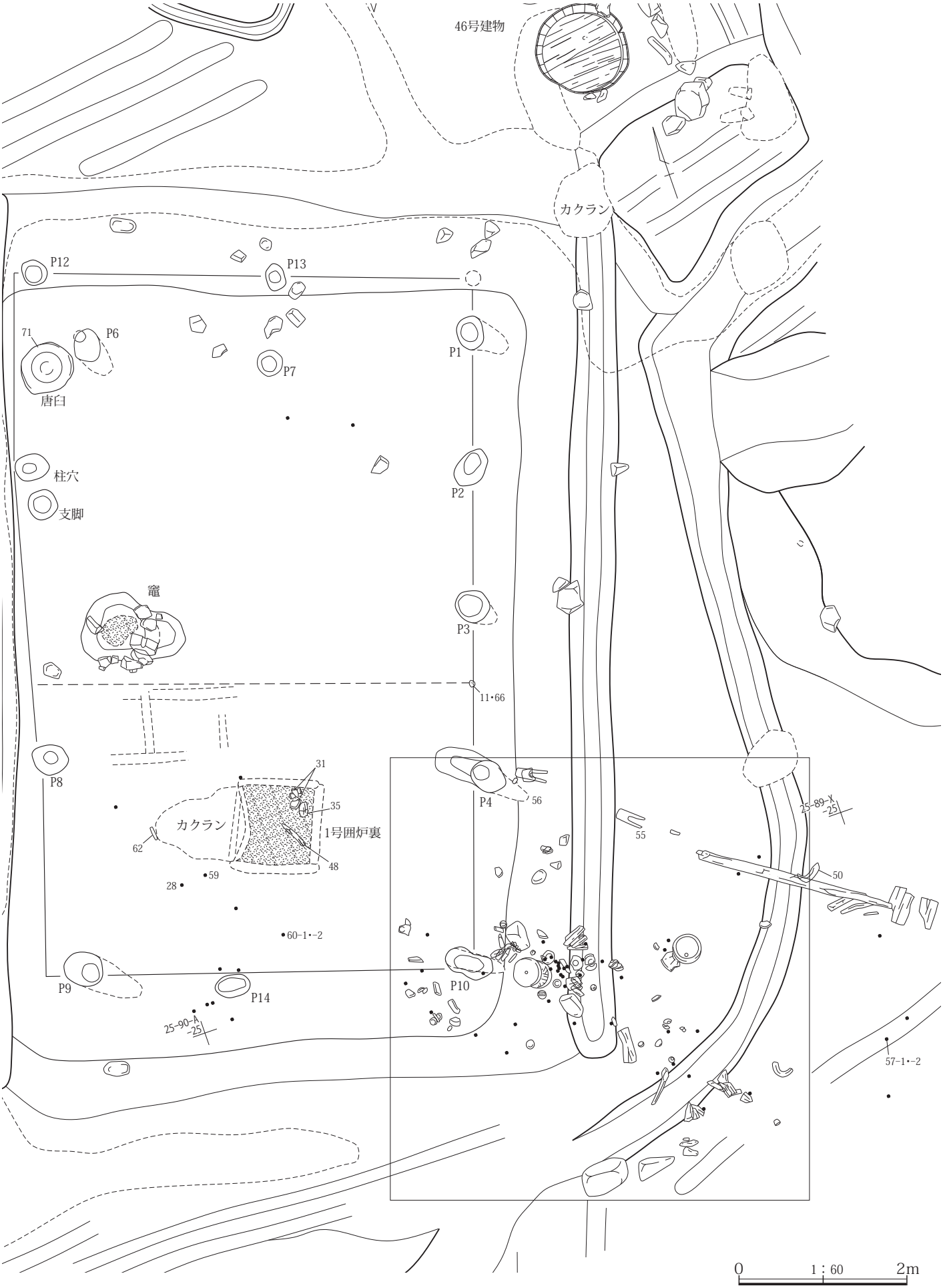
39号建物　唐臼A-A′・B-B′
1　黄褐色土　ローム質の粘土層
2　黒褐色土　礫を含む一括埋土
3　黒褐色土　地山、礫を含む

第218図　６区13号屋敷　39号建物唐臼

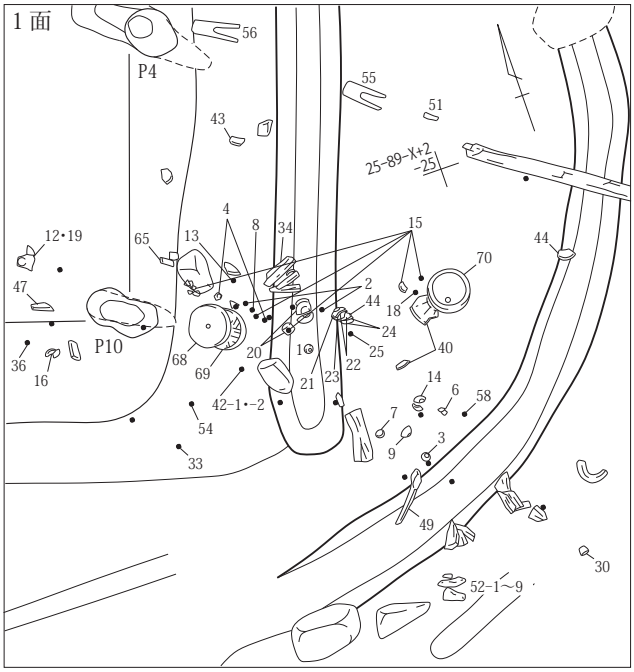


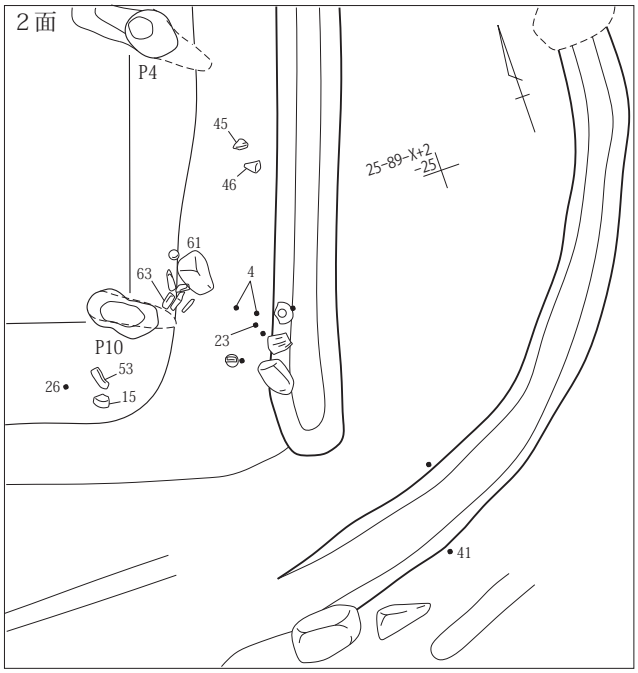
46号建物　厠A-A′
1　暗褐色土　大小の石少量含む　２層より密な層
2　暗褐色土　大小の石ほとんど含まず桶の埋土
3　暗褐色土　地山層　大小多くの石含む

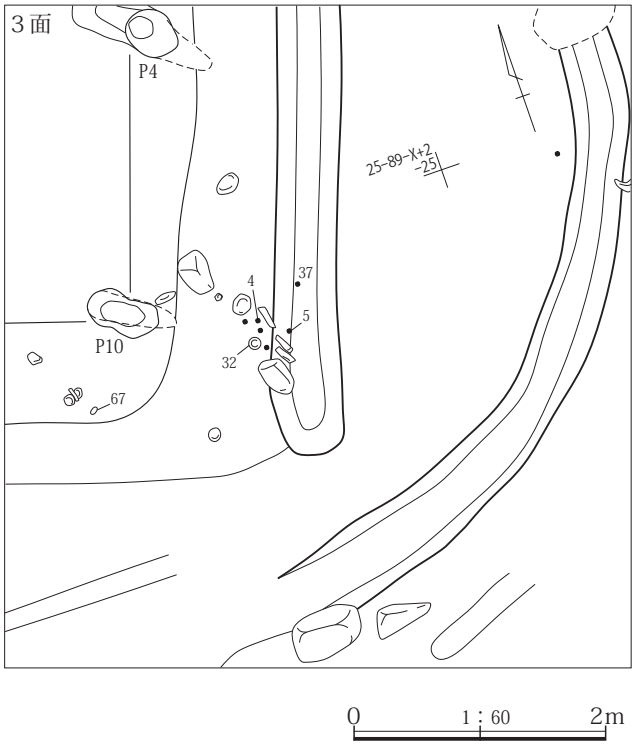
第219図　６区13号屋敷　46号建物(厠)



第220図　６区13号屋敷　39号建物遺物出土状態（１）







第221図　６区13号屋敷　南東部遺物群遺物出土状態（２）

第４項　出土遺物（第404 ～ 410・568図、PL.337 ～ 340）

出土遺物は71点と多い。大部分は建物内ではなく、土座南東部から重なるようにまとまって出土している。おそらく北西方向から天明泥流により、土座付近にあったものが押し出された結果と思われる。

土間部分からの出土はほとんど無かった。建物北西コーナー部分に唐臼が埋められていた。竈内からの出土遺物はない。土座中央部には囲炉裏があり、 囲炉裏内中央部付近から火箸、北東コーナー付近から瀬戸・美濃陶器片口・瀬戸・美濃陶器香炉が、囲炉裏南西から瀬戸・美濃陶器皿が出土している。囲炉裏北東柱穴Ｐ３とＰ４の中間付近から肥前陶器染付碗と火打ち石が出土している。建物南東コーナー部分からは、石臼・肥前磁器碗・肥前陶器皿・肥前磁器筒碗・瀬戸・美濃陶器碗・肥前磁器猪口、鍋・刀・鉄斧２個・鍋等がまとまって出土している。

特徴的な出土遺物として、多くの破損した鉄製品（鎌・斧・飛び口等）９個が１か所に集められていた。破損品を集めていたのであろうか。

肥前陶器皿６枚がまとまって出土している。皿が１か所にまとめられて出土する例は少ない。肥前磁器碗と瀬戸・美濃陶器碗（筒碗２個含）が16個出土している。小さな建物としては、まとまった出土である。

建築部材は残っていなかった。

第15節　16号屋敷跡(第214・222～224図、PL.178・186～189)

第１項　13・16号屋敷跡概要
第２項　40号建物　(１)竈　(２)囲炉裏
(３)土間と土座　(４)1565号土坑(便槽桶)
第３項　出土遺物

第１項　13・16号屋敷跡概要(６区)

13・16号屋敷跡は村の中央部に位置し、南側に21号道と53号溝、東側に25号道と57号溝がある。13号屋敷は、主屋である39号建物と付属建物である46号建物からなる屋敷であり、16号屋敷は40号建物である。調査担当は39・40・46号建物を13号屋敷と呼称して調査したが、39・40号建物は、両建物とも馬屋はないが、竈・囲炉裏が造られ、厠又は便槽を伴い、家庭生活できる建物であるので、39・46号建物を13号屋敷、40号建物を新たに16号屋敷として報告する。

両屋敷の概要については、13号屋敷の中で説明済みである。

第２項　40号建物(第222～224図、PL.186～189)

25-90・100-Ａ～Ｃ-24～１グリッドに位置する。

【位置・概要】天明泥流を除去し、畑の調査を進める中で、耕作されていない一定の区画があった。畑の耕作溝とほぼ並行する東西方向の長方形の範囲であった。屋敷の場合、多くの遺物や、土間面に高く造られる竈が壊れかけた状態で確認されることが多い。しかし出土遺物や、竈の痕跡も全く確認できなかった。調査を進める中で、柱穴が10個確認され、北西方向から南東方向に向かって倒れた痕跡を持つものが多い。雨落溝部分にはAs-A軽石が確認され、天明泥流で埋没する以前に建物が存在しており、天明泥流により押しつぶされた建物が存在していたことが確認された。多くの建物では土間奥のコーナー部分に唐臼が埋められていたが、そのような痕跡はなく、馬屋もない。竈と囲炉裏の間の土間面に、直径約90㎝の範囲でロームが残っていた。土間面に敷かれたものであろうか。建物前面は狭く前庭はない。洗い場は不明である。

出入口右側の下屋下部分に1565号土坑(便槽)があり、桶の内部は天明泥流で埋まっていた。竈や囲炉裏は廃棄されおり、生活用具はほとんど出土していない。小屋等として使われていたと思われる。

【構造・規模】確認できた柱は全て掘立柱である。

建物は東西方向に長い長方形である。東西方向(桁行方向)約6.5m(３間半)、南北方向(梁間方向)約4.5m(２間半)２間半×３間半の建物と思われる。

東側が土間で西側が土座と思われるが、土座の痕跡は全く残っていないので、境は不明である。42号建物の調査例から囲炉裏東端を境とし、土間は東で、土座が西側であったと思われる。

柱穴は出入口である南側に４本(Ｐ５～Ｐ８)、北側に４本(Ｐ１、Ｐ10～Ｐ12)、東西壁面中央部に各１本(Ｐ４・Ｐ９)残っている。Ｐ１・Ｐ５・Ｐ６・Ｐ８・Ｐ11の掘立柱は、北西方向から南東方向に倒れた痕跡を明瞭に残している。

多くの掘立柱建物は上屋柱と下屋柱を持つ構造であるが、40号建物はこのような構造とはなっていない。

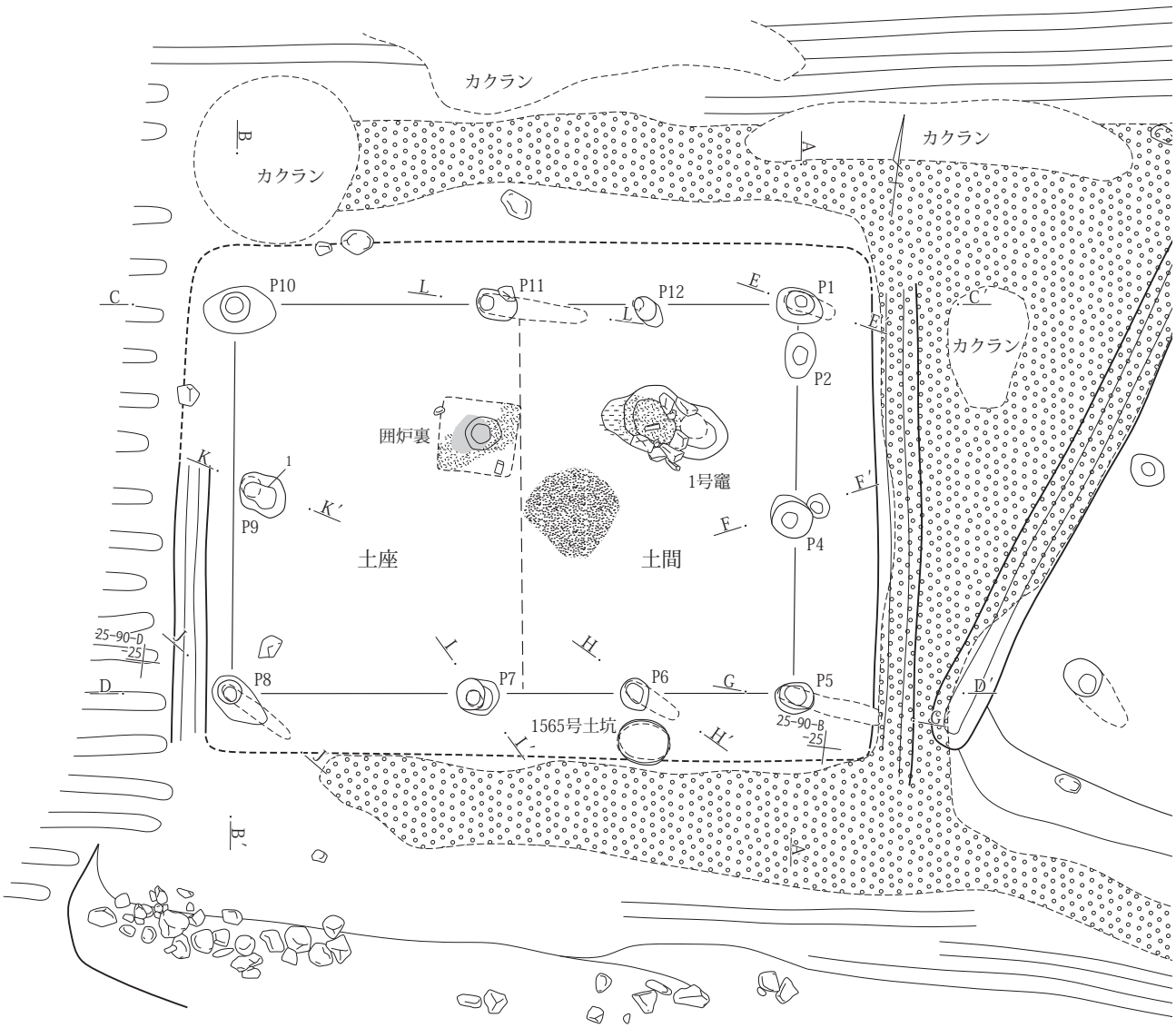
ピット一覧表参照

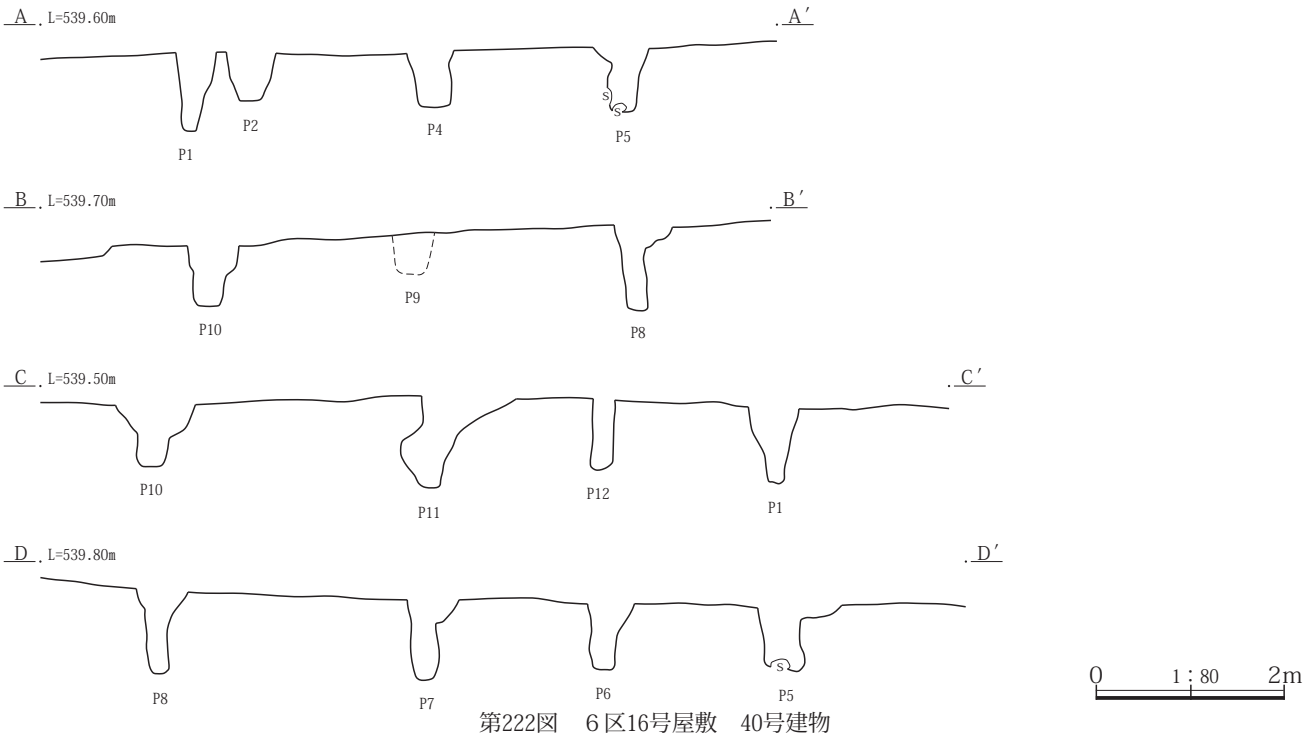
No.	長径㎝	短径㎝	深さ㎝
Ｐ１	34	29	90
Ｐ２	52	35	58
Ｐ４	45	43	70
Ｐ５	40	35	72
Ｐ６	38	35	73
Ｐ７	36	34	84
Ｐ８	28	28	77
Ｐ９	59	50	42
Ｐ10	34	34	72
Ｐ11	47	34	96
Ｐ12	29	24	77

(１)竈(第223図、PL.188)

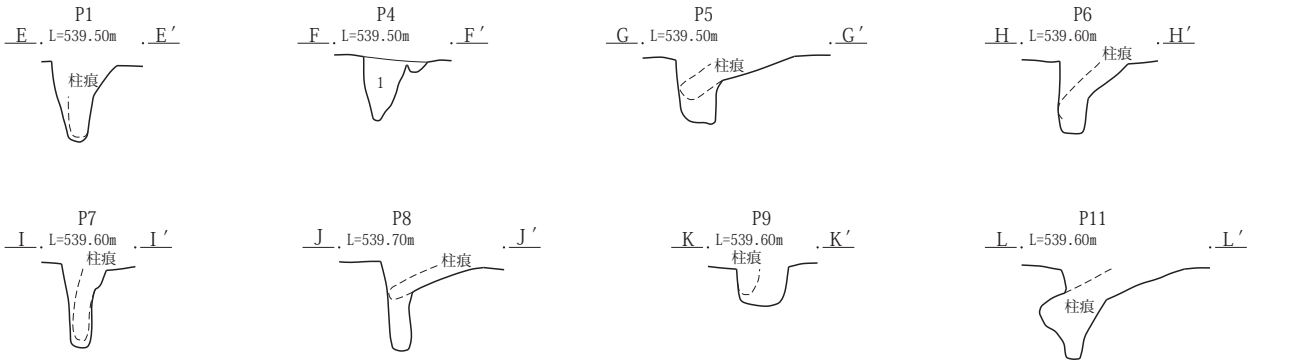
【位置・概要】土間の奥に造られていた。天明泥流を除去すると、土間面とほぼ同じ高さの面から左右の袖石が据えられた状態で確認された。竈に用いられたロームも石の周辺に残っていた。燃焼部にも多くのロームや灰が、竈炊口周辺には多くの炭の破片が残っていた。焼土はほとんど残っていなかった。竈の炊口は出入口のある南側ではなく、囲炉裏のある西側方向であると思われる。袖石はＵ字状に残っており、開口部は西側である。これまで調査してきた大部分の竈は、出入口方向が炊口であったので、特異な例である。

【規模・形状】竈は左袖石２個、右袖石２個、奥の石２個

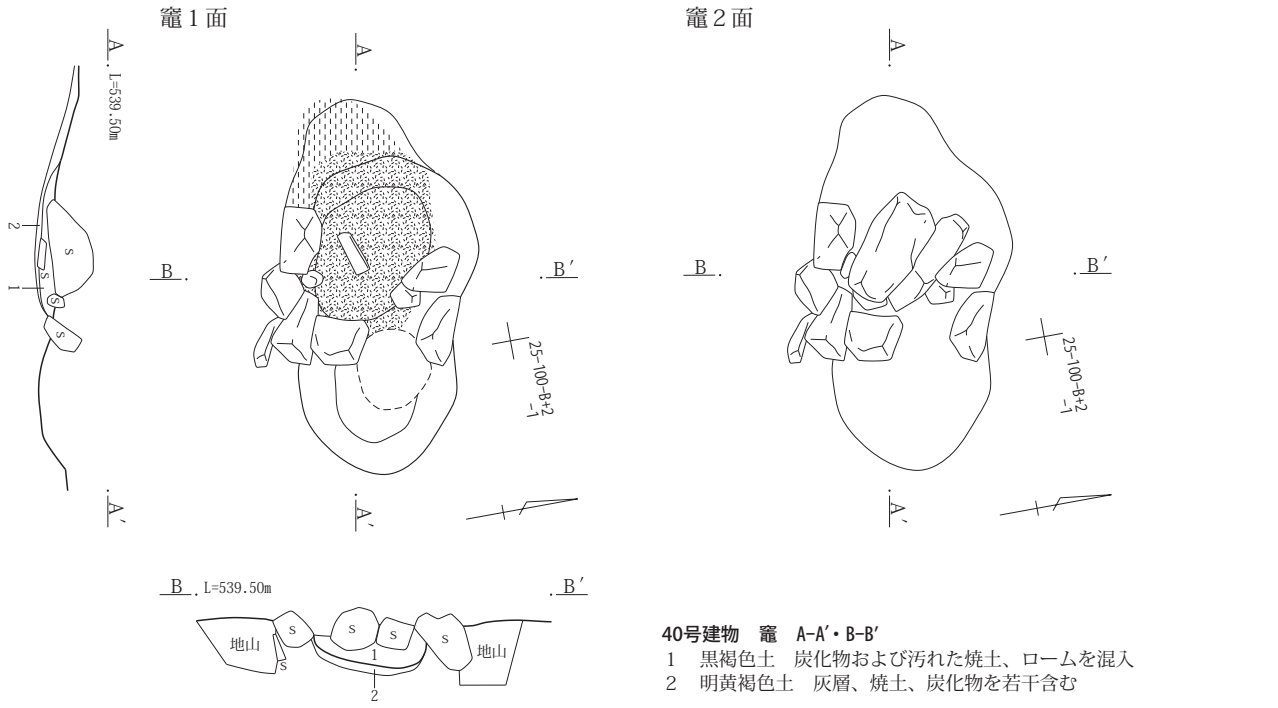




第222図　6区16号屋敷　40号建物

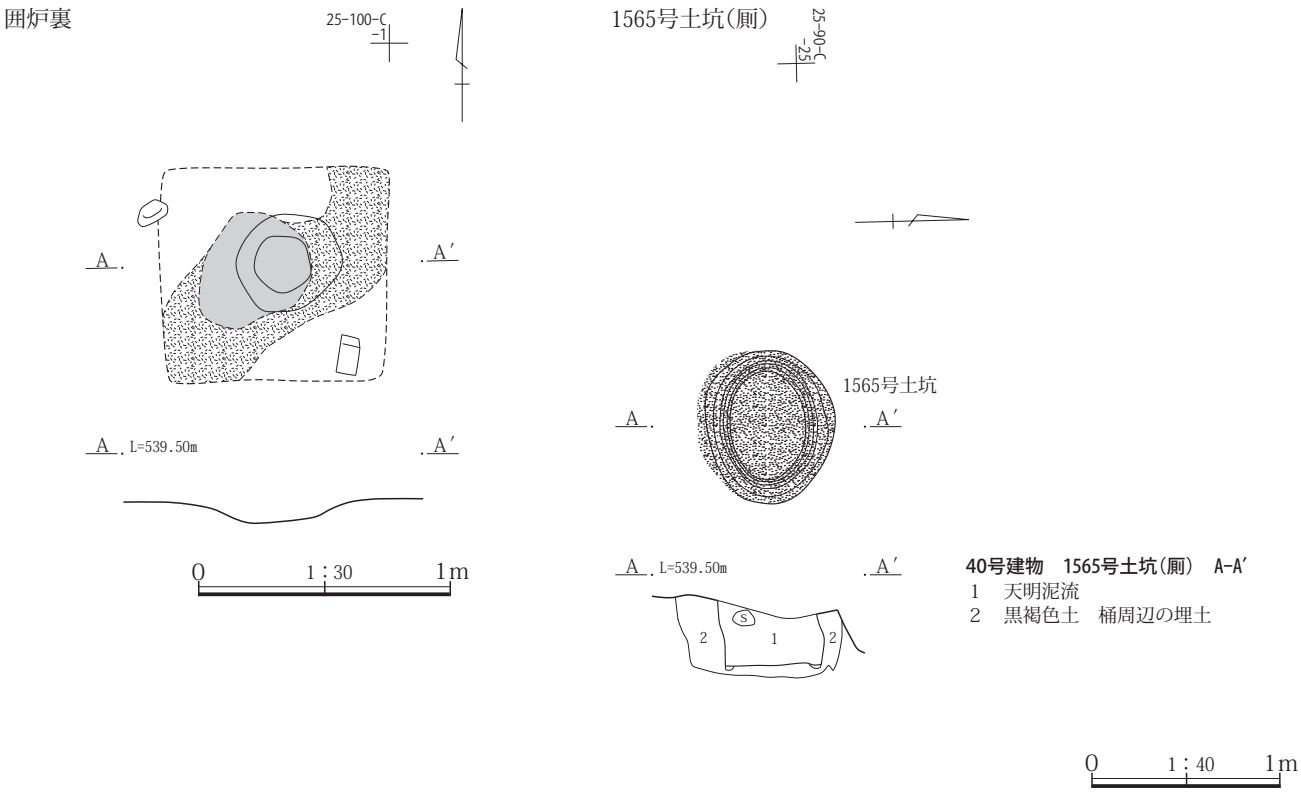


40号建物　Ｐ４　F-F′
1　黒色土　泥流を主体とし、礫を多く含む。攪乱され、空隙多くみられる状況



40号建物　竈　A-A′・B-B′
1　黒褐色土　炭化物および汚れた焼土、ロームを混入
2　明黄褐色土　灰層、焼土、炭化物を若干含む

第223図　６区16号屋敷　40号建物断面・竈



第224図　６区16号屋敷　40号建物　囲炉裏・1565土坑(厠)

がほぼ据えられた状態で出土した。これらの石は細長い石が並べられていたものとも思われるが、残っていたのは石の下半部のみである。上端部は割られており、残っていなかった。規模は残っていた部分での計測である。両袖方向55㎝、奥行方向70㎝、深さ約20㎝である。

竈本体は、破壊され埋められたものと思われる。

(２)囲炉裏(第224図、PL. 189)

【位置・検出状況・規模】土間と土座(想定)の境付近に囲炉裏が造られていた。囲炉裏を埋めるように囲炉裏の中に長さ22㎝、幅12㎝、厚さ12～15㎝の細長い石が中央に２本、左右に少し短い石が各１本並べられていた。これらの石の他にも囲炉裏の中に石が置かれていた。これらの石は、小石とともに土間に似た土で全体が埋められていた。埋めた石の上面の高さは土間面とほぼ同じであった。囲炉裏の枠木は痕跡を含めて全く残っていない。囲炉裏は天明泥流で埋没する以前に破棄され、埋められていた。規模は両袖方向外側で75㎝、内面で約55㎝、奥行方向は不明であるが約90㎝である。内部に厚さ約３㎝のロームと灰が混入した層が残っていた。

(３)土間と土座(第222図参照)

【位置・概要】竈を持つ東側が土間で、囲炉裏を境とする西側が土座と思われるが、土間と土座を区画する溝はなく、さらに南側の土座と思われる部分に植物の痕跡が全く残っていない。42号建物等から想定したが、痕跡からは全く明らかにできない。

(４)1565号土坑(便槽桶)(第224図、PL. 189)

出入口と思われる建物東側土間面の外側に1565号土坑(便槽桶)がある。この建物は付属建物の厠はないので、1565号土坑(便槽桶)が厠であったものと思われる。埋められていた桶は木質部の痕跡が少し残っていただけであり、内部は天明泥流と思われる土で埋まっていた。規模は底径52㎝、高さ37㎝の範囲まで確認できた。

第３項　出土遺物

遺物は出土していない。

第16節　15号屋敷跡(第225～296図､PL.190～245)

第１項　15号屋敷跡概要
第２項　27号建物構造と規模
（１)概要　（２)構造　（３)規模
（４)柱(上屋柱と下屋柱)　（５)土台
（６)出入口と大戸(大戸の構造)　（７)土間
（８)板間　(ア)１階の板間(イ)２階の板間
（９)階段　(10)縁側　(11)土台石の配置
(12)土台の配置
(13)上り框・大引１・大引２・根太
(14)板戸・障子・３本溝の敷居と鴨居
(ア)西側の障子と板戸(イ)東側の障子と板戸
(15)壁　(ア)壁の種類(土壁と竹壁)
(イ)北壁１～８　南壁１～３
(16)竈　(ア)１号竈(イ)２号竈
(17)囲炉裏　(ア)１号囲炉裏(イ)２号囲炉裏
(18)唐臼　(ア)石製の唐臼(イ)杵の柄(ウ)杵
(エ)支脚(オ)重石
(19)室(炭化物集中)　(20)飼葉桶
(21)馬屋　(ア)馬屋桶(イ)１号桶
(22)雨落溝
第３項　前庭と被災建物の堆積状況
第４項　物干台の物干竿
第５項　前庭に並べられた植物
第６項　洗い場
第７項　52号建物
第８項　53号建物
第９項　人骨の出土　(ア)全体の状況(イ)１号人骨
(ウ)２号人骨(エ)４号人骨
第10項　猫の骨出土
第11項　出土遺物　(ア)建築部材(イ)生活用具

第１項　15号屋敷跡概要

25-89-Ｎ～Ｒ-18～23グリッドに位置する。

15号屋敷は、屋敷が密集して造られている村の中心部の最も南端に位置する。屋敷の南は丘陵先端部北側となっている。明治６年壬申字引絵図には、この丘陵上に道(22号道)が描かれており、丘陵先端部が平地と接する２号屋敷東側で村の幹線道である21号道とＴ字状に交差している。丘陵上の道は21号道と交差する南側で、北東方向に墓地の東側を回り込むように分離し、15号屋敷南側に延び、発掘調査された25号道と繋がっているように描かれている。15号屋敷は北側で７号道に面し、南西側は溝と道に接している。この道と溝は７号道・21号道・53号溝との接点はないが、道は21号道で水路は53号溝と思われる。21号道、７号道、25号道および南の丘陵から降りてきた道(明治６年壬申地引絵図)の５本の道が交差する交差点が15号屋敷西約15m付近にあったものと思われる。

西と東側は畑となっており、建物の南西部分に27号建物の付属建物と思われる52号建物と53号建物がある。52号建物には２個の桶(厠１・厠２)が埋められており、53号建物は、土間面に植物の敷物が残っていた。52号建物は物置兼便槽であり、53号建物は物置であったと思われる。27号建物南側に庭があり、庭の南端に、洗い場がある。このように、５号屋敷は主屋である27号建物と付属建物である52・53号建物、前庭と洗い場で構成されている。前庭洗い場東にAs-A軽石が確認されている。As-A軽石を集めて堆積した灰かき山はなかった。15号屋敷27号建物は、北側が７号道に面している。屋敷の東側は畑であり、西側は畑４m前後の空間がある。その部分が屋敷出入口であったと思われる。

この屋敷の最大の特色は、主屋である27号建物の建材が、大量に残っていたこと、さらにその建物には、２階が造られ太い梁が設置され、根太の上には全面に板が貼られていたことである。

これまで多くの建物の調査が行われてきたが、２階に床が貼られていたことが確認出来たのはこの27号建物だけである。２階に上がるための階段も同時に出土している。この階段は東宮遺跡７号屋敷西側10号溝の中からも出土しているが､確実に建物の伴った出土例はなかった。

第２項　27号建物構造と規模(第226～234図、PL.190～216・219～245)

(１)概要

27号建物は、15号屋敷の主屋である。27号建物は、北西側から押し寄せた天明泥流により、建物全体が土台を含めて、その場所に倒れることなく、南東方向の前庭に

第225図　５区15号屋敷位置図

移動し、そこで南西方向に倒れていた。屋根材・土壁・漆椀・膳・戸棚・板戸・障子・大戸・馬具・階段・柱・梁・桁・根太・床板・２階の床板・階段・南壁等が、高さ120㎝、幅400㎝前後の範囲にまとまって出土した。これらの建築部材や生活用具は、天明泥流により押しつぶされる直前まで使われていたものである。貴重で膨大な資料であり、可能な限り現地での記録を残し、大量の出土遺物も図化した。

（２）構造

土台建物であるが､土台石の半分以上は残っていない。本来据えてあったと思われる土台石部分は、深さ10㎝前後、直径50㎝前後の掘り込みとなっていた。浅い掘り込みであり、掘立柱の柱穴ではない。板間部分の土台石の配置は、梁方向(奥行き方向)に４列一直線に並べられている。柱はさらに南側にも１列下屋部分の土台石が並べてあったと思われるが残っていなかった。５列のなかで中央の３列は２間半の距離である。残っていた大引の観察から２間半の中央の土台石は大引を支えるための束を支える束石と思われる。

中央２間半の柱は、屋根を支える上屋柱であり、北側１間と南側半間の柱は下屋柱と思われる。残された土台石と土台の観察から、東西両側壁部分と北側の側壁部分(下屋柱)は、１間～１間半の狭い間隔に建てられている。発掘された下屋柱と思われる柱は、土台の上に建てられており、貫と土壁に伴う間渡穴が多く残っているので、多くが土壁であったっと思われる。

２間半の長さがある大引の中間に位置する束石の上の付近に柱の枘穴はない。そのためにこの位置に柱は立たないとも考えられる。しかし２間半の距離に柱を建てないで、梁を持たせるのは少し無理があるのではないだろうか。西宮遺跡７号建物では､大引の上に柱の痕跡が残っていたので、27号建物でも大引上の敷居の上等に柱が据えられたのではないだろうか。

土間部分の土台石は、馬屋北東コーナー部分に１石あるが、他には残っていなかった。土間北側で唐臼の支脚が問われていた場所の断面図には、土台石が埋まっていたような掘り込みが調査されている。この場所は、東西方向の上屋柱の延長上であり、ここに上屋柱があったと思われる。そこで使われた土台石と思われる大きな石が唐臼の倒れていた干支杵の南側に残っている。

（３）規模

明瞭に遺構が残っていたわけではないが、これまでの調査から１間(184㎝)を基準として計測した。間口約12.6m(７間)、奥行約6.5m(３間半)で南側半間の下屋を持つ建物とも思われる。間口７間の中央部３間半の西側が土間で、東側が板間となっている。板間は東西２間に分かれ、西側は間口4.6m(２間半)、東側は間口2.7m(１間半)となっている。東側の板間はさらに南北２間に区画されると思われるが、不明である。土間の南西コーナー部分に馬屋がある。馬屋は東西方向約３m、南北方向約2.2mで、東西方向に幅広い。北西コーナー部分に唐臼が埋まっており、唐臼から東1.3m付近に支脚が埋まっていた支脚穴が掘られていた。

（４）柱（上屋柱と下屋柱）

建物内に柱は全く残っていなかった。大部分の柱は前庭に残っていた。これらの柱からほぼ完形の柱を集めて、長さ別に区分すると長さ230㎝前後と320㎝前後の２つのグループに分かれる。230㎝前後の柱は下端には土台と接合するための貫と同じ方向の枘穴があり、上端には梁等と接合するための貫と直行する方向の枘がある。側面には貫板が３本通る枘穴がある。これは土壁の柱であり、建物の外側の下屋柱に使われる柱と思われる。320㎝の長い柱は、下端に枘はなく土台石の上に置く石場建である。上端は大きな梁等を受けるために仕口が加工されている。側面には土壁用の貫はない。底部近くに、足固材を差し込む枘穴と、底部から230㎝前後の位置に、差し鴨井等の大きな材を組み込むための枘穴が掘られていることが多い。この枘穴は、貫の枘穴が幅３㎝、長さ12㎝に対し、幅４㎝、長さ19㎝と大きい特色がある。この長い柱は上屋を支える上屋柱と思われる。

（５）土台

【概要】建物土台も本来の位置に残っていたものはなかった。南東方向の倒れていた建築部材から土台と思われる部材を探して報告する。土台とした部材は以下の特色から判断した。

ア．土台は土台石の上に置かれており、土台に合わせて土台下部が削られている。(光付け)

イ．大きさは幅15㎝以上、厚さ15㎝前後の大きさの角材である。

ウ.枘穴は､幅３㎝､長さ９㎝前後で､貫の枘穴(幅約２㎝､

長さ約13㎝)より幅が広く長さが短い。
エ．柱の枘を受ける枘穴の深さは７㎝前後であり、厚さ15㎝前後の土台の中間付近で止まっており、下まで貫通していない。
オ．大部分がクリを使用している。
等の特色から判断した。その結果土台と思われる部材が大戸の下の土台を含めて６個(接合した土台含む)確認された。

土台の中には建物コーナー部分で直行する部材も含まれているが、それらがどこに配置されていたかは、明らかでない。

【構造・規模】大部分の土台は上面に土壁のための間渡穴が掘られており、土台の上は土壁であったと思われる。北側の土台は長さ12m以上あり、数本の土台を繋いで土台としていた。土台３か所でシャチ栓継が確認できた。

【所見】出土建築部材の中で、注目されたのは、長さ約3.2mの上屋柱とその柱西側に組み込まれた差鴨井、柱と差鴨井に囲まれて重なって出土した障子１枚とその下の板戸２枚、および板戸の下付近から出土した３本溝の敷居である。それが南西方向から北東方向に倒れた状態で出土した。障子や板戸は主屋のある北側が底部であり、南側が上である。最も上に障子がありその下に板戸があることから、上が室内で、下が室外であることがわかる。これらの柱や板戸等は、建物の南側の壁部分であり、泥流により押し倒されたことがわかる。ここで出土した柱は石場建の柱であり、土台の上に建てられた柱ではなかった。このことから27号建物は建物が外壁部分の下は、全面に土台が敷かれてはいなかったと思われれる。これまで調査した多くの建物で、外壁部分に土台が全面残っていた例はない。最も残りの良かった東宮遺跡１号建物でも、土間部分の外壁と板間部分の北側は土台が残っていたが、板間東側と南側に土台は残っていなかった。また西宮遺跡７号建物と尾坂遺跡１号建物では、土間・板間の東西の壁面・北側の壁面に土台が残っていたが、南側には残っていなかった。板間南側に土台が使われていなかったことを示す例として、出入口大戸下の土台で指摘できる。この土台は3.2mの長さで、西側が欠けており、全体の長さは不明である。しかし幅約150㎝の大戸の下の土台であり、長さは大戸の倍の３m以上の長さが必要である。27号建物出入口部分と思われる場所の土台は3.5m幅となっており、おそらく3.5m幅であったと思われる。完形で出土している東宮遺跡１号建物の大戸下の長さは3.75mである。この土台は、土間南中央部分に位置し、東西に土台が接続される。両端部は鎌継ぎで接続される加工があり、鎌継ぎの雇枘が東側では残っていた。27号建物大戸下の土台は、西側は欠損しているが、東側は良好に残っていた。東端は柱を受ける枘穴部分から東35㎝部分で切られており、さらに土台が東側に接続されるための加工は全くない。この場所は、土間と板間の境部分である。おそらくここで土台は終わっていたと思われる。土間部分には土台があるが、板間南部分に土台はない。この土台は建物外壁部分で検討したが、土間と板間境部分にも土台が置かれていることも考えられるが、これら石川原遺跡27号建物・東宮１号建物・尾坂遺跡１号建物では土間と板間の境に土台は使われていなかった。

このような調査例から、27号建物でも板間南側の柱は石場建であり、土台ははなかったのではないだろうか。

(６)出入口と大戸(大戸の構造)

【概要】建物出入口は、馬屋東側と思われる。前庭に大戸が室内側を上にして、底部が建物に近い状態で北から南方向に倒れていた。大戸は土台の上でなく、土台の内側に取り付けられたレールの上に置かれる。大戸の下端には２個の戸車があり、戸車はレールの上を回転して移動する。この土台とレールが、大戸は通常の板戸や障子の高さが177㎝に対し、189㎝と12㎝前後高い。大戸の上端部分は、板戸の鴨居より高い位置となる桁の内側に、大戸が移動できる程度の隙間を確保して板が打ち付けられ、大戸の上部はその空間を移動する。その板が、倒れていた大戸の上端から南1.4m付近に東西方向に倒れていた。これらの大戸関連の部材の北が、馬屋東側であり、そこが建物出入口であったと思われる。

【構造・規模】出入口は馬屋東側であり、間口は礎石の配置や、縁側の位置・大戸のレールが取り付けられた土台の残る土地壁の範囲(184㎝前後)等から、間口は1.5mと思われる。

・土台とレール　大戸より主屋に近い北約１mの場所に東西方向に倒れていた。大戸下の土台の長さは3.12mであるが、西側が欠損している。3.5m前後の長さであったと思われる。土台の上幅14㎝前後、高さ18㎝前後であ

り、土台下部３か所は石の上に置かれるために削られていた(光付け)。内側のレールは、50～60㎝間隔に５個の枘を用いて、土台に固定されている。レールは土台から４㎝の距離を保つように固定されていた。枘は土台からレールまでは５㎝と厚く、レールに差し込む部分は２㎝の厚さにして、レールと土台との距離４㎝を保つようにしていた。レール外側には木栓を打ち、レールが離れないように工夫していた。レールは幅３㎝、高さ19㎝である。土台の樹種はクリである。

・大戸　前庭にほぼ完形の大戸が室内側を上にして底部が建物に近い状態で倒れていた。大戸の大きさは、幅156㎝、高さ189㎝、枠板は底板と左右で上はない。板は６枚で板の内側に細長い縦棒が５本。下端が底板に組み込まれ固定されていた。やや太い横棒５本が縦棒と重なる部分が削り重なり、左右の横木に組み込まれていた。

・大戸上部の板材　大戸の南端より南1.4ｍの所に大戸と並行するように東西方向に出土した。長さ322㎝、幅12㎝、厚さ３㎝であり、板材の表面が上になっていた。中央付近で割れていた。取り上げると片側の端と中央部に細長い板材が取り付けられていた。

(７)土間

【概要・規模】土間の南西コーナー部分に馬屋、北端に唐臼、土間に近い部分に竈、竈北東部に室(炭化物集中)がある。土間表面は撹乱を受けており、残りが悪かった。

(８)板間

天明泥流により、建物の大部分は建物部分から南西の庭部分に運ばれ厚く堆積していた。板間の大引・根太・板材も全て移動し、建物内にはほとんど残っていなかった。前庭に押し出された部材から、板間に関するものを選び出し､板間について想定できることを以下報告する。

前庭部分から板間の大引・大引を支える床束・縁框・根太・板等が出土している。それらの材は平行移動して埋まっていたわけではないので、出土位置と材の特色等を合わせて板間について報告する。２階の床面が良好な状態で残っており、この建物は２階建である。27号建物は１階の西側間口3.5間幅が土間で、東側間口3.5間が板間と思われる。２階の床面は土間の上全体に造られており、板間の上にはなかったと思われる。以下説明する。

(ア)１階の板間　【概要】１階板間部分に大引・根太・板はほとんど残っていなかった。前庭部分から１階部分の部材を探してくると、大引(片側面に根太を受ける掘り込みあり・縁框)と両側に根太を受ける掘り込みのある大引大小２本(丸材)が、建物内から前庭に架けての場所から出土してる。大引を土間部分から浮かせ、安定させるために使用されていたと思われる床束も４個出土している。丸太を半裁した根太と思われる部材等の出土から、１階に床は貼られていたものと思われる。使われていたと思われる大引や土台等を参考までに配置してみた。

(イ)２階の板間　【概要】２階の床面が１階の柱・桁根・根太・雨戸・大戸・生活用具等の上に覆いかぶさるように出土した。北・西・東側に大きな梁が南北方向にやや長い長方形に配置されていた(南側は桁と思われるが残っていない)。中央にも南北方向の梁が１本、東西方向に小さな梁が１本配置されていた。全体に田の字状に梁が配置されている。

根太は、４区分された区画に東西方向に各４本配置されている。根太は製材されたような規格品であり、梁に掘られた根太を受ける掘り込みに固定されていた。根太の上には板が４区分された区画に各６枚南北方向に並べられていたと思われる。北側の２区画部分には良好に残っていたが、南側には一部残っていただけであった。

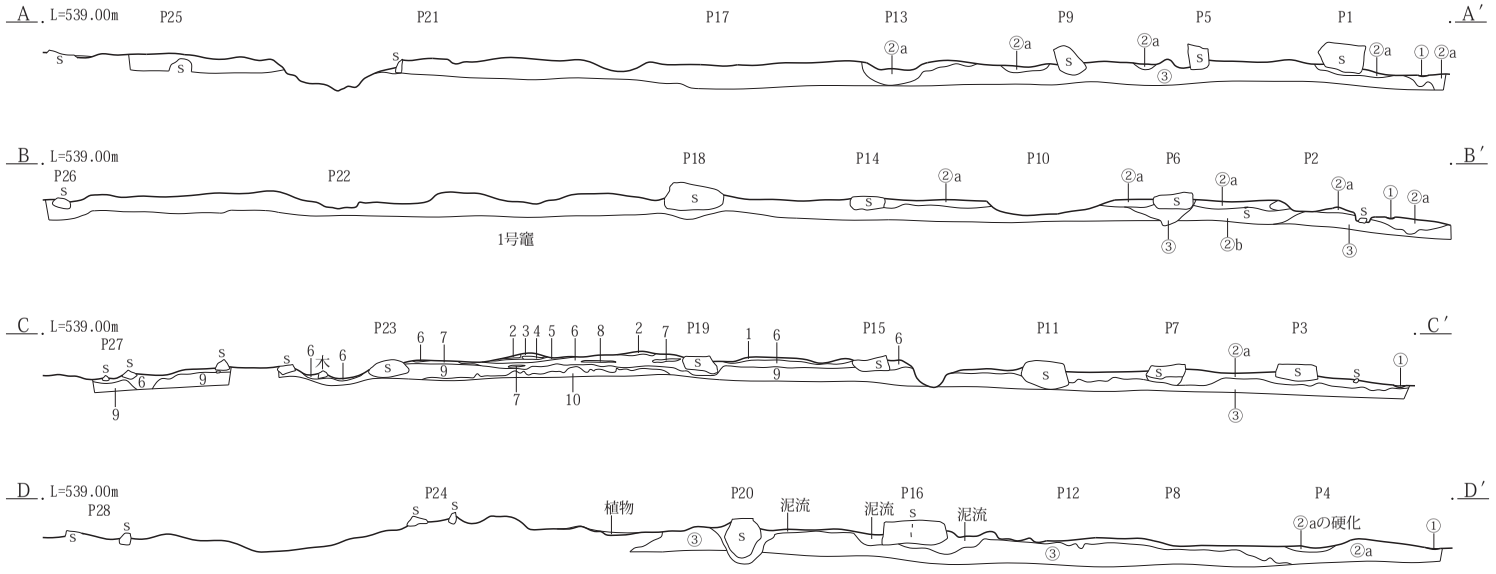
大きな梁が北東と北西コーナー部分で直交する。その部分の梁先端部には、梁を柱に刺して固定させるための仕口が加工されており、その場所には大きな柱が建てられていたことがわかる。

出土した２階の床部分は、残りは良くないが、北と西側にさらに繋がっていたようである。北側梁の北側中央部には北側に延びる梁を受ける仕口が刻まれている。西側梁の西側には、根太を受ける掘り込みが東側と同様にあり、床が西側に存在していたことを物語っている。北側には板材も一部残っていた。東側の梁の東側には根太を受ける掘り込みがない。東側には２階の床面はない。これらの床面が27号建物のどこの位置に存在したのであろうか。前庭に崩れて埋まっていた２階床面部材の柱や壁等は、南東方向から南西方向に倒れている。倒れる以前の北西方向に戻すと、建物東側土間部分となる。

土間部分に発掘された２階の床材を戻すと、図で示したように、ほぼ土間の上全体に床が貼られていた可能性が指摘できそうである。

【規模】残っていた２階板間は梁の長さで計測すると、東

第226図　5区15号屋敷　27号建物



27号建物　礎石A-A′～D-D′

①　As-A
②a 暗褐色土　(10YR3/3)　③の攪乱土　盛土?しまり粘性やや弱くわずかにブロック状
②b ②a層よりわずかにしまりあり
③　暗褐色土　(10YR3/3)　しまりあり　粘性ややあり　小石わずかに含む

27号建物　C-C′　P27～P15

1　灰白色土　(10YR8/1)　灰　２号囲炉裏の一部　一部酸化　炭化粒や木片(木の繊維)を一部に含む
2　黒褐色土　(10YR2/3)　ローム粒をわずか含む　１～５㎜程の礫をわずか含む
3　明黄褐色土　(10YR6/6)　粘土　床材として張り付けたローム土
4　暗褐色土　(10YR3/4)　１～２㎜程の礫をごくわずか含む　炭化粒をごくわずか含む
5　褐色土　(10YR4/4)　暗褐色土(10YR　3/4)も含むローム土　床材として使用　１～３㎜程の礫をわずか含む
　炭化物をごくわずか含む　粒子細かく締りあり
6　黒褐色土　(10YR2/3)　１～２㎜程の礫をわずか含む　５～10㎜程の礫をごくわずか含む　ロームブロックをわずか含む
7　明黄褐色土　(10YR6/8)　ローム土　粒子細かく締りあり　一部酸化
8　黒褐色土　(10YR2/3)　板状の炭化物を全面に含む
9　黒褐色土　(10YR2/3)　２～10㎜程のローム粒をわずか含む　１～15㎜程の礫をわずか含む
10　黒褐色土　(10YR3/1)　２～３㎜程の礫をわずか含む　10～30㎜程の礫をごくわずか含む　酸化土を含む

第227図　５区15号屋敷　27号建物断面

西3.72m(約２間)、南北4.42m(約２間半)である。北側約1.8m(１間)、西側2.7m(約１間半)も板間であったとすると、土間部分全体、東西南北とも約6.4m(３間半)の範囲が２階の板間であったことが想定できる。東側板間部分に２階の板間が貼られていた痕跡は認められなかった。

梁・根太・板の大きさは観察表に記載したのでここでは説明を省く。

(９)階段(PL. 198)

【位置・概要】前庭南東部分で厚く堆積していた建築部材等の最も上の部分から、階段が出土した。階段は北から南側に向かって登れるような状態で、上向きに倒れていた。一部割れて欠損していたが、完全に近い状態で確認することができた。この階段は、２階床板構造材の東梁の下に重なるように、同じ方向に倒れていた。２階の床は全体が崩れ落ちた状態であり、梁・根太・床板が使用時の状態で残っていた。出土状況から階段と２階床面は同時に崩れ落ちたもので、２階の梁に階段が組み込まれてたことが想定できる。これら２階の床面や階段の下からは、建物南の上屋柱・障子・雨戸・縁側・縁側柱・南壁面・物干台や物干竹等が出土した。このような状況から、この建物は２階が床張りであり、出土した階段は２階に上がるためのものであったことが指摘できそうである。

この階段から２階の高さも明らかにできそうである。

【構造・規模】階段は箱階段(踏み板階段)で、踏み板７枚と両側板および裏板である。側板は長さ2.6m、厚さ３㎝、幅14㎝。裏板は３枚で上下２段つなぎ合わせている。全体で長さ2.38m、下の板の長さ1.74m、上の板の長さは0.64mである。板の厚さは約１㎝。階段は斜めにして１階の床面から２階の根太等に架けて使用する。樹種は側板が松、踏み板は松とクリ、裏板はスギである。階段の踏み板を水平にし、使用時の傾斜等を想定して以下説明する。

踏み板７枚中、上下２枚と中央の１枚は、側板に両端大入れ２枚枘割くさび打ち、中央の踏み板の上下各２枚は、側面追い入れの技法で側板に組み込まれている。

側板の角度60度
側板の高さ2.27m
階高(底部から７段目までの高さ) 1.96m
(１階の板間から２階天井板の高さまで)
幅136㎝
ケ上げ(階段１段分の高さ) 28㎝
踏づら(踏み板の上幅) 15㎝
踏み板の横幅37㎝
踏み板の厚さ３㎝

最も上の７段目の踏み板は、２階床面と同じ高さとした。側板は７段目の踏み板から30㎝程上に飛び出している。現在の階段より倍以上の急傾斜角の階段を降りたり登ったりするときの手すりとしたのではないだろうか。

出土状態とこれらの想定数字が正しいなら、１階の床面と２階の床面との高さは196㎝となる。

この数字は、階段の下から出土した上屋柱に掘り込まれている３本溝の敷居から３本溝の鴨居の上端までの距離と同じである。

(10)縁側(PL. 199～201)

【概要】前庭の膨大な建築部材等の下から縁側と思われる部材が、東西方向と南東方向に「く」の字状に折り曲がった状態で出土した。縁側の上には、柱や板戸等大量に堆積していたが、縁側部材の西側部分の部材は土間面、南東部分の部材の南東部分は、多くの建築部材の上にのしかかるような状態で出土した。

【位置・構造】縁側の長さは全長約8.3m(約4.5間)であり、主屋の間口の全長約12.8m(約７間)の半分以上の長さである。主屋の板間の幅約6.4m(３間半)より約１間幅広い。一体この大きな縁側はどの位置に取り付けてあったのであろうか。出土位置で検討すると、縁側は他の建築部材等と同様に、泥流により北西方向から南東方向の前庭に押し流されていた。主屋に取り付けてあったものと思われる。

縁側の構造から考えると、縁側は、細長い床板・床板の下の根太・根太下の２本横架材・横架材を支える、東西と中央の６本の柱から構成されていた。

横架材は、主屋の上屋柱に打ち付けられた内側の根太受けである板材と、外側の下屋柱である。外側の横架材(縁框)が取り付けられた柱が、２本縁側とともに南側に倒れて残っていた。その柱には横架材(縁框)がシャチ栓・込み栓・枘等の仕口で固定されていた。柱は石場建であり、横架材(縁框)の固定されていた位置から下約30㎝の長さで終わっている。そこから下は土台石である。縁側

は、土間から30㎝前後高い位置であったことがわかる。さらに内側の根太架けが固定されていたと思われる上屋柱でも、根太架けと思われ掘り込みの上面から下までの長さは30㎝前後となっている。両柱ともその下は土台石と思われる。このようなことから、縁側は建物１階に造られていたものと思われる。その場合、長さ8.3mの縁側がどの位置に存在したのであろうか。建物東端から8.3mの位置に縁側があるとすると、主屋の出入口幅は約1.5m前後となる。この位置にあったと思われる大戸の幅は1.5mである。人間や馬の出入りは可能であったと思われる。

【規模・加工方法】

・板　縁側の床板の規模は長さ8.3m、幅1.18mである。東西中央部付近で接合されており、西側の長さ3.7m、東側は4.6mである。床面の高さは、柱に組み込まれていたと思われる根太架けの高さから30㎝前後と思われる。床板は東西とも幅12㎝、厚さ２mの１枚板が東西で各９枚使われていた。東西の板は、接合部分が凹凸に加工されており､差し込まれて隙間なく組み込まれていた。

・根太　床板の下は板に直行するように根太が西側で７本、東側で９本あり、屋敷のある北側は板で出来た根太架けに架けられ、前庭側は太い角材(縁框)に刻まれた16個の枘穴に組み込まれていたようである｡根太の多くは、幅約9.5㎝、厚さ約7.5㎝、長さ約113㎝であり、南側は深さ２㎝の方形の枘、北側は先端を両側および底部から細く削っている。根太上９枚の板を固定するために板の両脇８か所を各２本、合計16本の釘で根太と固定していた釘の痕跡が残っていた。根太と縁框を固定するために長さ２㎝の枘部分に釘が打たれていた。この部分に釘を打たないで､根太架け部分に釘で固定されたものもある。樹種はクリが多く松が少し使われていた。

・根太架け　東側で良好に残っていたが、西側半分ほど残っていた残りの良い東側の根太架けの大きさは、長さ4.55m、幅14㎝、厚さ３㎝である。根太を架ける切込みが45㎝間隔に９か所ある。切り込み幅は7.5㎝、深さ３㎝である。根太架けは、建物南側上屋柱間の足固に打ち付けられていた。打ち付けたときの釘２本、釘穴２か所が残っていた。根太は松材の辺材が使われており、木裏部分が鋸、木表部分と両側面が手斧で削られていた。釘は木裏から木表部分に打ち込まれていた。足固めと接する面はやや凹凸のある手斧の面であり、表面部分は鋸で削られた平らな面となっていた。おそらく根太材は、材木中心部から柱等を切り出した残りの辺材部分を利用したものと思われる。西側の根太架けは1.8mほど残っていた。幅・厚は東側の根太と同じであるが、全体の加工方法や釘等は不明である。樹種は同じ松であった。

・縁框　東西の２か所とも良好に残っていた。東側は２つに折れていたが、接合するとほぼ完形である。西側の縁框は長さ3.52m、上下幅14㎝、高さ18㎝である。６㎝四方で、深さ4.5㎝の根太を差し込む枘穴が７個掘られていた。枘穴の間隔は45㎝であり、上面から下２㎝の位置に掘られている。この２㎝の部分に厚さ２㎝の板が固定されていたものと思われる。

東側の縁框は長さ4.35m、上下幅14㎝、高さ17㎝である。約６㎝四方で、深さ4.5㎝から６㎝の根太を差し込む枘穴が９個掘られていた。枘穴の間隔は39㎝前後であり、西側の45㎝間隔より狭い。上面から下２㎝の位置に掘られている。西側の縁框同様にこの２㎝の部分に厚さ２㎝の板が固定されていたものと思われる。東西の縁框の樹種はクリである。東西２本の縁框は、３本の柱に枘組で固定されたいた。東の縁框は、接続部分の柱を通して伸びている底部に造られた枘を、西側の縁框の底部に掘られた枘穴に組み込み、シャチ栓で固定していた。西端の柱には、枘穴に差し込まれた上半分の枘を込栓で固定していた。枘穴の下半分には、足固めに掘られていた枘穴と角材で接合されていたようである。

・縁側柱　縁側の西端と中央には縁側柱が建っていた。東端には残っていなかったが、縁框の仕口から、西端と同様な縁柱が建てられていた。３本柱中西端と中央の柱は北から南方向に倒れていた。柱は石場建であり、側面に枘穴等の加工はなく、上端に桁と組まれていたと思われる間口方向に、平行に造られた欠けた枘の一部が残っていた。柱の大きさは西側が長さ３m、枘穴上部から上端までの長さ2.72m、幅14㎝、厚さ13.5㎝である。中央の柱は､長さ3.18m､枘穴上部から上端までの長さ2.7m、幅14㎝、厚さ14㎝である。樹種は両方ともクリである。

(11)土台石の配置

土台の石は半分以上残っていなかった。また下屋部分にあったであろう土台石も残っていなかった。残っていた土台石と土台石が取り除かれたあとに残っていた痕跡

から全体の配置は次のように考えられる。

建物主屋部分の土台石は東西方向に４列ほぼ直線に並べられていた。最も北側の列は下屋柱が建つ付近の位置であり、土台の下に９個前後の土台石が置かれていたものと思われる。現状では東端板間部分で３個残っていた。北から２番目の列は、上屋柱が建つ付近の位置であり、７個前後の土台が置かれていたものと思われる。現状では板間部分で３個、土間部分西端で１個残っていただけであった。北から３番目の列は、板間部分では上屋柱、あるいは大引や土台等が建つ付近の位置であり、７個の土台石が残っていた。土間部分では馬屋北東コーナー部分と建物西端部分に２個あったと思われるが、馬屋北東コーナー部分の１石が残っていた。北から４番目の列は、主屋南壁部分であり、板間部分では５石あったと思われるが、３石が残っていた。この部分は土台の上でなく土台石の上に直接柱が建っていたようである（石場建）。

土間部分は西端の建物南西コーナー部分に小さな石が残っていた。本来４個前後石が置かれていたものと思われる。最も南側は下屋柱が建つ場所である。想定される付近に数個の石が残っていたが、原位置には残っていなかったようである。この部分には、下屋柱が建つ場所であり、土台石の上に直接建てられていたものと思われる。板間南の下屋部分には、縁側が造られていたものと思われる。

（12）土台の配置

本来の位置に残っていた土台は全くなかった。

他の建築部材や生活用具とともに主屋南側に移動して残っていた。出土した多くの土台本来の位置は不明である。しかし建築部材等は一定の方向にまとまって移動しており、それらの建築部材から土台と思われる部材を選び出し、移動方向を戻して想定される場所に置くことは出来た。作業を進めるにあたって、土壁とともに移動した土台は最も参考になった。その結果を図で示した。

想定復元した土台から、以下の事が指摘できそうである。

①27号建物は土台建物であり、基本的に建物外壁下部分に土台が敷かれている。

②柱は土台の上に枘で組まれて直立している。

枘穴は長さ10㎝・幅４㎝・深さ７㎝であり、反対側に貫通していない。貫の枘穴より長さが短く、幅が広い。

③土台石の上に置かれるので、土台石と接する場所は土台石の形に合わせて削られている（光付け）。

④板間南の外壁部分の柱は土台石の上に直接建っており（石場建）、土台は使われていない。

⑤土間南側の出入口部分の土台は、内側に大戸のレールが取り付けてある。板間部分に少し伸びているが短く切られており、板間下に土台はない。

⑥土間と板間の境部分も柱は石場建であり、土台石の上に土台は置かれていない。

⑦土台の使われている部分は、大部分が土壁であり、土台上面には大部分土壁に伴う間渡棒等を固定する穴が２～３個掘られている。

⑧土台と土台を繋ぐ技法は、シャチ栓継が多い。東宮遺跡や西宮遺跡では，鎌継ぎ・蟻継等が確認されている。

⑨建物四隅のコーナー部分は、東西方向の土台が南北方向の土台を枘で受けており、枘により土台が割れないように東西方向に少し長くなっている。

⑩土台の太さは大部分が12㎝前後の角材である。樹種はクリが大部分使われている。

（13）上り框・大引１・大引２・根太（PL. 201）

・上り框　土間から板間に上がる場所に、上り框と思われる部材が置かれていたと思われる。長さ4.47m、幅15㎝前後の角材で、片側に根太を架ける掘り込みが45㎝間隔に９か所掘られている。底面中央部には土台との間に束を受ける枘穴があり、高さ30㎝前後の床束（1018？の床束）が差し込まれていたようである。上り框と土間との間は、空間となっていたと思われる。

・大引１　表皮を除去した程度の丸材を一部加工した材、大引が板間部分から前庭部分から２個接して出土している。西側の大引１は長さ6.47m（約３間半）と長く、主屋梁方向の長さとほぼ同じである。板間床下を通しで南北方向に置かれた大引である。太さは18㎝前後である。大引の北端は土壁に囲まれた柱に掘られた枘穴に差し込まれていたようであり、長い枘が作り出されていた。南側も柱に固定されるために加工されていた。大引の上面には45㎝間隔に根太を受けるための掘り込みが13個掘られていた。裏面には、束を受ける枘穴が２か所掘られており、束により土間面より30㎝高い位置で固定されていたようである。大引１の東に接して出土した大引２は長さ4.51m、太さ18㎝前後であり、全体に少し曲がっている。

大引の上面には45㎝間隔に根太を受けるための掘り込みが北側から６か所掘られていた。しかし南側３か所は一部掘られていたが、北側ほど明瞭な掘り込みはなかった。この部分にも３本の根太は置かれていたものと思われる。裏面には、束を受ける枘穴が１か所掘られており、束により土間面より30㎝高い位置で固定されていたようである。大引の両端は柱に掘られた枘穴に差し込まれていたようであり、枘が作り出されていた。本来据えられていたと思われる場所に土台とともに図上で配置した。大引２の北側と東側にも大引があったと思われるが不明である。

・根太　大引の間に置かれたであろう根太が板間南部分から多く出土している。特に多いのは上り框と大引１・大引２に挟まれた場所である。長さ1.7ｍ前後、幅12㎝前後で、大部分は丸材を２つに割って内面を平らに削っている材が多い。根太が据えられた状態で出土した18号建物や20号建物では、角材が使用されており、上下面とも平に加工されていた。現在残っている民家では、半裁された根太は丸い面を下にして、床板が乗る面は平らな面となっている。おそらく27号建物でも、丸い面を下にして使われていたものと思われる。大引に架ける部分は、大引の枘の幅と深さに合わせるために、左右の両側と下面の一部を削って大きさを調整している。角材の場合でも同様である。

(14)板戸・障子・３本溝の敷居と鴨居(PL. 202・203)

板戸２枚と障子１枚が重なった状態で、東西に接した位置から２組出土している。これまでの発掘で板戸や障子の出土はあるが、３枚組で２組出土した例はないと思われる。それらの建築材は、敷居・柱・鴨居・桁等に囲まれており、それらの建築部材とともに倒れていた。西側の残りの良い３枚組を西側の障子と板戸、残りの悪い東側の３枚組を東側の障子と板戸と呼称して説明する。

(ア)西側の障子と板戸　障子１枚と板戸２枚が重なった状態で出土している。最も上に障子が１枚、その下に板戸２枚が重なっていた。(W219～W221)板戸や障子は北側が鴨居(W217)、南側が敷居(W218)の上に組み込まれる位置関係であった。障子や板戸の西側には柱が接しており、南側には３本溝の太い指鴨井に囲まれた状態で出土した。３本溝の敷居は板戸の北側下から出土した。

天明泥流は北側から押し寄せて、家は北から南側に向かって倒れている。そのために室内側が上になっており、室内側の障子が最も上に位置している。このことは西側に近接して出土した大戸でも同じであり、室内側が上となっていた。西側の柱は障子や板戸の西側で下に重なって出土した土壁３東側の柱(W210)と思われる。その柱は貫板用の枘穴が３か所開いており、最も下の枘穴には貫が挿入された状態で出土している。その上に敷居が置かれていたものと思われる。この貫は地貫と呼ばれているもと思われる。

・障子　最も上には障子が乗っていた。障子は割れていたが、ほぼ完形である。長さ177㎝、幅89㎝である。下部に腰板が横方向に２枚入っている。腰板の上で紙が貼られる部分は、縦方向に12区分、横方向に４区分されており、下から３段目の片側に薄い板が貼り付けられ、障子を閉めるときの取っ手としていたようである。上端の横方向の桟(上桟)は、板戸とは異なり、最も上に取り付けられている。この構造と規模は、昭和前半まで使われていた障子とほとんど同じである。

・板戸１　障子と下の板戸２に挟まれて出土した。一部縦方向の桟木付近が腐って残っていなかったが、ほぼ全体が残っていた。大きさや構造は板戸中央部分の鍵の有無以外、板戸２と同じである。詳しい説明は板戸２で述べる。

・板戸２　障子と板戸１の下から出土した。一部欠損しているが、ほぼ完形である。長さ177㎝、幅87㎝である。幅が障子より２㎝程狭くなっている。板戸は縦方向に６区分、横方向に３区分されている。最も上の横方向の桟木は、左右の縦方向の桟と同じ位置ではなく、上から７㎝下がった位置で固定されている。これは江戸時代のこの頃の大きな特色である。下から３段目の横桟の上５㎝の所に別の横方向の桟木が造られていた。部材が弱く確認できなかったが、おそらくこの桟木を90度回転させて、板戸２が開かなくなるような鍵であったと思われる。板戸の背板は縦方向に３枚であった。板戸の規模は、昭和前半まで使われていた板戸とほとんど同じである。

・３本溝の敷居　板戸の下からほぼ完形の３本溝の敷居が出土した。長さ171.5㎝で、片側に長さ1.5㎝の枘が作り出されている。枘部分を省くと長さは170㎝となる。幅14㎝、厚さ６㎝、溝の深さ１㎝、幅２㎝前後である。柱に差し込む枘は片側だけである。樹種は松である。

長さ170㎝の間隔に、幅87㎝の板戸２枚と幅89㎝の障子が置かれていたものと思われる。板戸２枚の幅は174㎝となり、敷居幅170㎝より４㎝前後広くなる。これは２枚の板戸が重なる幅と思われる。

民家や発掘例から、外側２本の敷居の溝は板戸、室内側の１本の溝は障子で使われたものと思われる。天明泥流で倒壊する段階では、障子と板戸２枚は片側に寄せられていたものと思われる。

・鴨居　障子や板戸の南側に位置し、柱に差し込まれた状態で大きな鴨居が出土した。

長さ186㎝で両側に大きな枘が作り出されている。枘部分を省くと長さは171㎝となる。幅12㎝、厚さ23㎝と縦方向に厚い大きな鴨居である。溝は幅と深さはいずれも２㎝前後であり、敷居より深くなっている。樹種はクリである。

(イ)東側の障子と板戸　西側の障子と板戸２枚、および柱・敷居・鴨居を取り除くとその下から、障子と板戸２枚が上下の中間付近で２つに割れた状態で出土した。３本溝の敷居は障子や板戸の底部付近の上面から出土している。重複関係は最も下に縁側の板材、その上に板戸２枚、その上に障子の骨組が一部残っていた。その上に、西側の障子１枚と板戸２枚の南東の部分が重なった状態で出土した。一部重複しているが、東西に分かれるようである。下に位置する西側の障子と板戸は、倒れてきた柱と鴨居により破壊され、大きく２つに割れていた。これらの障子と板戸は残りが悪く計測できない。板戸の上部分が、前庭に並べられた植物の上にかぶさるように残っていた。それを観察すると、西側の板戸と同じように２枚重なっており、最も上の横方向の桟木は左右の縦方向の桟と同じ位置ではなく、上から７㎝前後下がった位置で固定されている。また横方向に３区分されている、おそらく同じ構造の板戸であったと思われる。このような出土状況から、西側の障子と板戸と東側の障子と板戸は、近接した場所で使われていた可能性が考えられる。

・３本溝の敷居　３本溝の敷居が障子や板戸の上面から割れた状態で出土している。長さ89㎝で割れている。本来の長さは西側の３本溝の敷居と同じ170㎝前後と思われる。枘はないが、裏面に長さ４㎝、幅１㎝、深さ４㎝の溝が５㎝間隔に２本掘られていた。中にこの大きさに近い割れた板が差し込まれていた。この面は敷居の裏面であり、この溝に差し込まれた板材は、柱と敷居を固定させるための枘組であり、柱にも同様な２つの縦方向に長い掘り込みがあったものと思われる。幅14㎝、厚さ６㎝である。溝の深さ１㎝、幅２㎝前後である。樹種は松である。

(15)壁(PL. 204・205・208)

(ア)壁の種類(土壁と竹壁)　土壁がこれまで多くの建物で発掘調査されているが、北側の土壁の一部が良好な状態で残っているものは、石川原遺跡の対岸にある、東宮６号屋敷11号建物、東宮８号屋敷16号建物、西宮遺跡３号屋敷５号建物等あった。これらの遺跡は、吾妻川左にあり天明泥流は、南から押し寄せ、建物の多くは北側に倒れている。北側の土壁は倒れた場所が、建物裏の石垣や、畑の場合は、その後泥流により埋まるために、残存状態は良かった。しかし、南側の壁はほとんど検出されることはなかった。これは倒れる場所が土間・板間等建物内の場合は、建物内の生活用具や建築部材等と複雑に絡み、水平に倒れないために残りが悪かったものとこれまで思ってきた。

吾妻川右岸である石川原遺跡では、天明泥流は北から南側に向かって押し寄せてきている。そのため南壁は最初に倒れ、その上に建築部材や生活用具が重なり、最後に北側の壁がそれらを覆うように倒れている。これまでの調査例から南側の壁の残りは良好であるが、北側の土壁は残らないだろうと思えた。しかし最も良好に残っていた壁は、北側の土壁であった。

建物は、立っていた位置から前庭方向にほぼ平行移動して崩れるように倒れていた。そのために柱や土台、さらに壁材等を詳しく検討することにより、壁の位置関係を推定することが出来た。なお西壁と東壁については全く分からなかったので、以下の解釈が間違っている可能性も高い。

(イ)北壁１～８　南壁１～３　北壁は土壁であり、全体で４つの大きな区画があり、さらにそれらが２分され、全体で８区画の壁と思われた。北壁１～北壁８と呼称する。その中で最も残りの良い北壁５・６について説明する。この部分は建物板間北側の土壁であり、土台石の上に土台が置かれ、その上に３本の柱が建っている。各柱には２本の貫があり、天井部には桁が載ったと思われるが残っていない。柱には貫と貫の間等に２か所の間渡穴

が掘られている。土台には柱と柱の間に３か所間渡穴が掘られている。間渡棒を軸木として木舞を設置しその表裏を土壁としている。北壁部分には柱・土台・貫に囲まれた部分に多くの土壁が残っており、全面が土壁であったことがわかる。

柱の高さは232㎝であり、足固めから上は205㎝である。太さは12㎝の角材である。板間から天井までの高さは205㎝であった。

これら北側の土壁を撤去し、建築部材や生活用具を撤去すると、北側の土壁の南側に南の壁材が出土した。確認できたのは３か所であり、西側から南壁１・南壁２・南壁３と呼称する。これらの壁は、北側の土壁とは大きく異なっている。北側の土壁は間渡竹と木舞を壁の芯として両面を土壁としていた。建物外壁部分が土壁となっており、現在の民家に残っている土壁とほぼ同じ構造と思われる。しかし南壁は、内側が土壁であるが、外側は割竹を縦方向に密に並べてあり、土壁とはなっていなかった。南壁１と南壁２は馬屋南側の壁部分であり、南壁３は室内側に大戸が収納される土壁である。南壁３は北壁と同様に貫や間渡棒戸木舞で土壁が造られており、その外側に割竹が貼られていた。南壁１と南壁２は、他の土壁と異なり、貫は使われていない。割竹を室内側は横方向、室外は縦方向に密接して並べている。これらの割竹を柱・土台・桁と固定するために、丸竹や細い木材等が縦横数本存在したと思われるが、一部確認できるが、明瞭ではない。さらにこれらの間渡棒等を固定する柱や土台も不明である。このような割竹を並べた壁は21号建物の南壁で確認されている。

南側の土壁は、大戸部分の１か所だけであり、他の場所では確認できなかった。南側は、出土した大戸や板壁４枚の出土から、1/3近くが土壁ではなかったようであるが、残る2/3は土壁と思われるが、なぜか残っていない。さらに竹壁の存在も想定される。多くの情報を残しているので、今後さらに検討が必要である。

(16)竈（第228・229図、PL. 209～211）

【位置・概要】土間北側の１号竈は天明泥流埋没段階まで使われていたものと思われる。１号竈は、北西方向からの浅間泥流により、土間から上の部分の側壁や天井部は、南東方向に押し倒されたような状態で崩され、１号囲炉裏付近まで散乱していた。竈内には割れた粉引臼の上臼も埋まっていた。竈を埋めていた石や臼等を取り除くと、竈の土間下部分が残っていた。

１号竈の南に埋められていた１号囲炉裏、東側に埋められていた２号竈、西側に埋められていた３号囲炉裏（旧３号竈）が造られていた。これらの１号囲炉裏、２号竈、３号囲炉裏は天明泥流以前に廃棄され埋められていた。１号竈東に室（旧炭化物集中）があり東側の板間部分には２号囲炉裏が造られていた。

（ア）１号竈　【概要・構造】竈から南側に散乱していた焼土や石を撤去すると、竈の石組と底部から多くの焼土が確認された。土間上部分の大部分が壊されていた。残された側壁の石は、細長い石を縦方向に並べるのではなく、平らな石を両側壁部分に３列、２段ほど積んだ状態であった。おそらく平らな石を数段積んで、積んだ石の外側にロームを主とした土で固めて造られた竈と思われる。建物内より大きな鉄の釜が出土している。天明泥流で埋まる前の段階まで付けられていたと思われる。

【規模】両袖方向内傾40㎝、積まれた石の外径105㎝、高さは約35㎝であった。

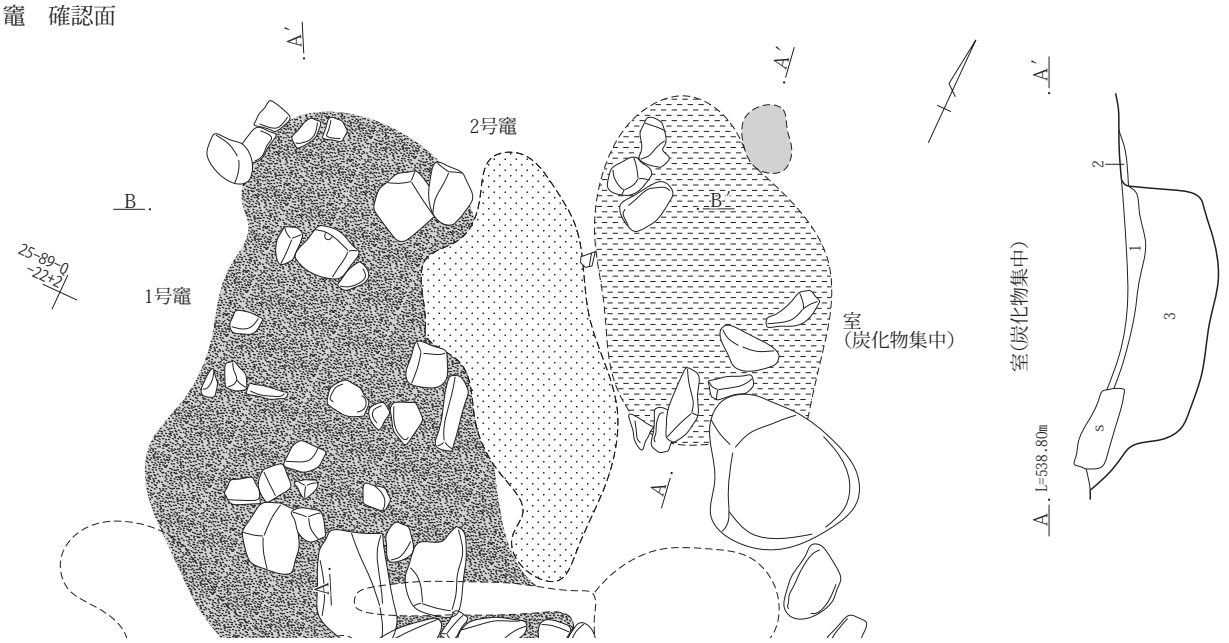
（イ）２号竈　【概要・規模】１号竈右袖部下から確認された。すでに埋められており、底面に10㎝前後の厚さで焼土層が残っていた。灰層は全くなかった。残っていた規模は1.5×1.8m、深さは、中央部で土間面より約38㎝であった。

(17)囲炉裏（第230・231図、PL. 209・211・212）

囲炉裏は天明泥流段階まで使われていた２号囲炉裏と、天明泥流で埋まる段階ではすでに廃棄され埋められていた１号囲炉裏と３号囲炉裏（旧３号竈）がある。２号囲炉裏は板間に造られた囲炉裏であり、１号囲炉裏と３号囲炉裏（旧３号竈）は、土間に造られていた。

（ア）１号囲炉裏　【概要・構造】１号囲炉裏は竈南に位置し、確認段階では、囲炉裏北半分に下臼や多くの石および多くの焼土粒で埋まっていた。それらの石の多くや焼土は竈が天明泥流により壊された残骸と思われる。囲炉裏は囲炉裏枠と思われる両端に枘穴のある材が南側にあり、その南に接して平らな板が置かれていた。他の西・東・北には囲炉裏枠と思われる溝状の落ち込みが残っていたが枠木はなかった。囲炉裏内に焼土が多く残っていたが、土間面と同じ高さである。囲炉裏に伴う焼土の場合、土間面より10㎝前後下の灰層の下にあるので、この

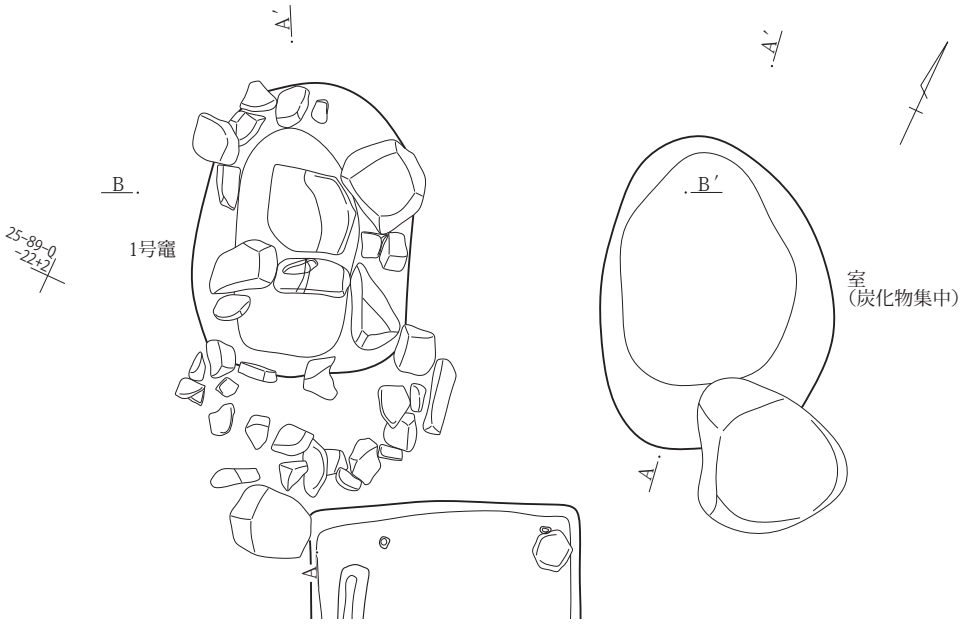
竈　確認面

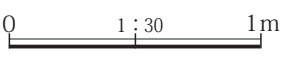


27号建物　室(炭化物集中) A-A′

1　黒色土　(10YR2/1)　枝のような木片や炭化した木片を非常に多く含む　黒褐色土(10YR2/3)も含む　粘性はあるがボソボソした腐葉土のような土質
2　黒褐色土　(10YR2/3)　焼土を多く含む
3　黒色土　(10YR2/1)　枝のような木片や炭化した木片をまばらに含む　酸化土を一部に含む　1層ほどではないが粘性がありボソボソした土

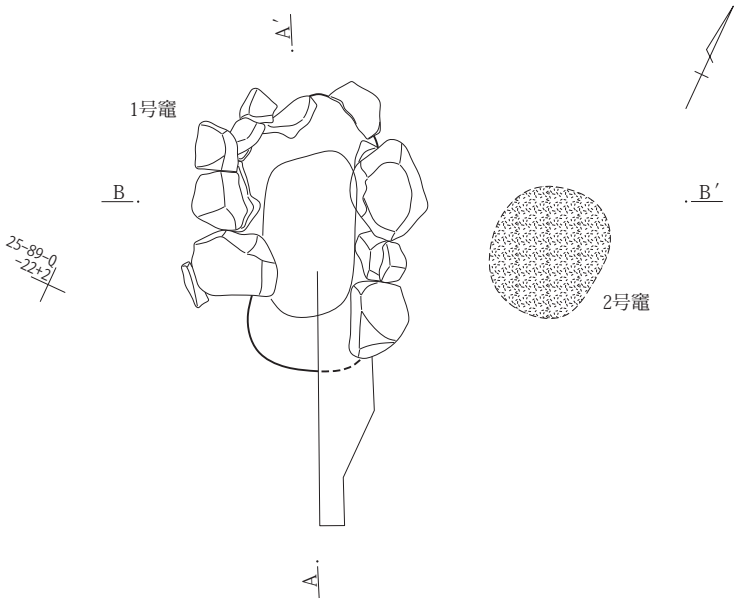
1面

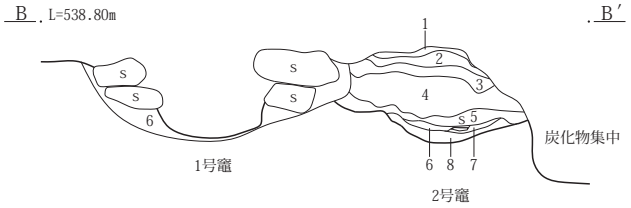




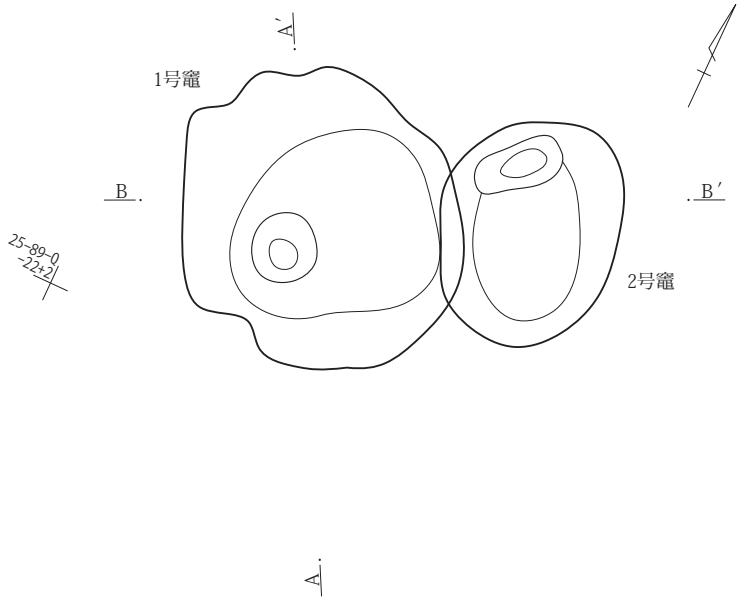
第228図　5区15号屋敷　27号建物1号・2号竈(1)・室

２面





掘り方



27号建物　１号竈A-A′・B-B′

1　黒褐色土　(10YR2/3)　焼土を多く含む　酸化土も含む
2　黒褐色土　(10YR2/3)　灰や焼土を多く含む　炭化物も含む
3　赤褐色土　(2.5YR4/8)　焼土　竈底部の平たい礫は、天板として使用されていた礫が崩落したもの？
4　黒褐色土　(10YR2/3)　２～３㎜程の礫をわずか含む　酸化土を含む　焼土をわずか含む
5　黒褐色土　(10YR2/3)　暗褐色土(7.5YR3/4)を10％程含む　褐色土(10YR4/6)を10％程含む　灰や炭化物をわずか含む　やや締りなし
6　黒褐色土　(10YR2/3)　１～５㎜程の礫や炭化物をごくわずか含む　焼土を一部に含む

27号建物　２号竈B-B′

1　黒褐色土　(10YR2/3)　灰を非常に多く含む
2　黒褐色土　(10YR2/3)　酸化土を含む　５～10㎜程の礫や炭化物をごくわずか含む
3　黒褐色土　(10YR2/3)　２～20㎜程のローム粒を25％程含む　２～５㎜程の礫をわずか含む
4　黒褐色土　(10YR2/3)　３～10㎜程のローム粒をわずか含む　５～10㎜程の礫をわずか含む　３～25㎜ほどの炭化物をわずか含む
5　赤褐色土　(5YR4/8)　焼土　５～15㎜程の炭化粒を多く含む
6　灰白色土　(10YR7/1)　焼土を多く含む　炭化物をわずか含む　柔らかくあまり締まりのない部分あり
7　赤褐色土　(5YR4/8)　焼土　赤褐色(5YR5/8)の灰を20％程含む　炭化粒や灰をわずか含む　柔らかくあまり締まりのない部分多い
8　赤褐色土　(5YR4/8)　焼土　炭化物をわずか含む　灰も一部に含む　やや締りなし

0　1：30　1m

第229図　５区15号屋敷　27号建物１号・２号竈(２)

焼土は囲炉裏に伴うものではなく、竈の崩壊に伴うものと思われる。灰層は残っていない。囲炉裏内の下臼は、設置されたように固定されていた。

【規模】囲炉裏枠木の痕跡から計測すると、枠木内面で東西90㎝、南北約90㎝である。深さは不明である。

(イ)２号囲炉裏　【概要・構造】板間に２号囲炉裏があり、天明泥流埋没段階まで使われていたものと思われる。大きな石を方形に囲み内面には多くの焼土が残っていた。石組は泥流が押し寄せた西側の残りが悪く一部が崩れて南東方向に残っていた。内部に通常では残っている灰層が残っていないので、それも泥流により流されたようである。石で組まれた竈や囲炉裏まで天明泥流は破壊している。土台上の建物が現地に残らずに前庭まで運ばれて倒壊していることが、改めて理解できそうである。

残された東側の石組の石は東西幅45㎝、南北幅65㎝、厚さ25㎝の大きさである。西側の石は東西幅40㎝、南北幅30㎝、厚さ18㎝の大きさである。このような大きな石を方形に並べて、土間面より20㎝前後高くした枠組みを造り、石の上に囲炉裏の枠木が置かれたものと思われる。石組みの内部に土間と同じ土を高さ約15㎝詰めて高くし、その上に褐色土が敷かれ上が灰層となっていたものと思われる。灰層は残っていなかった。

(18)唐臼(石製の唐臼・杵・杵の柄・支脚・重石)(第232図)

【概要】土間北側奥の壁面に沿って東西方向に唐臼が設置されていた。建物北西コーナー部分に唐臼が埋められており、唐臼から東約1.3ｍの所に杵の柄を支える支脚穴があった。石臼は埋まっていたが、杵・杵の柄・支脚・重石がそれぞれの位置に組み込まれた状態で南約２ｍの場所に飛ばされ、南側に向かって倒れた状態で出土した。杵・杵の柄・支脚・重石が、ほとんど壊れることなく完形品として出土しており、整理段階でも一部割れて欠損している部材もあるが、ほぼ全体を実測し、保存することが出来た。同じように唐臼の全体がほぼ残っていた21号建物では、石製の唐臼・杵・杵の柄・支脚・重石が一部欠損し移動していたが、ほぼ組み込まれた状態で出土した。八ッ場ダム関連の調査で、21号建物と27号建物の唐臼は最も残りの良い調査例である。

唐臼は口縁部が土間面より高い位置になるように埋められ、さらに支脚側の口縁部が反対側の口縁部より少し高くなるように埋められていた。他の唐臼と共通する埋め方である。21号建物の唐臼は口縁部上に円形の木枠が載せられていたが、27号建物ではそのような構造となっていない。

(ア)石製の唐臼　【概要・規模】北西コーナー部分に埋められていた。

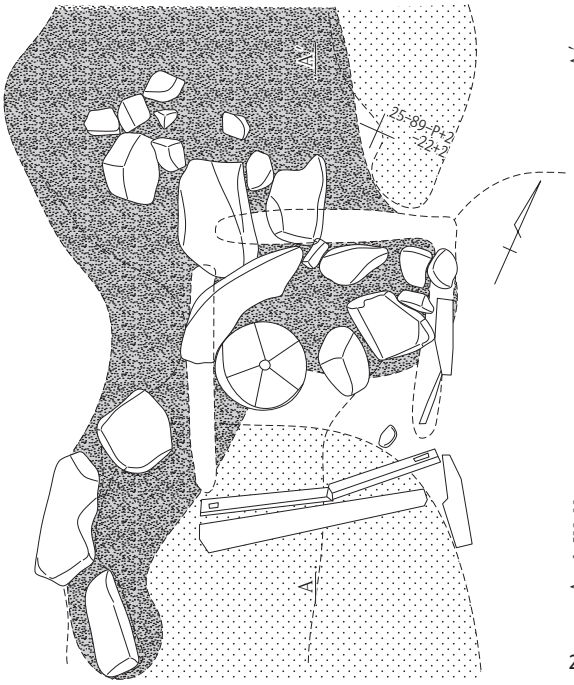
唐臼の高さは48㎝、胴部外径64㎝、口縁部外径59㎝、内径38㎝、口縁部幅８～11㎝であり、口縁部は水平であるが少し内傾している。内側断面で観察すると最大径は口縁部下41㎝、口縁部38㎝で口縁部が少し狭くなっている。口縁部外側が内側同様に内傾している。21号建物のように唐臼を囲む黄褐色の粘土質の土はなかった。

(イ)杵の柄　【概要・規模】柄は根元部分(踏む部分)先端部が一部欠損しているがほぼ完形である。長さ253㎝で21号建物の柄より23㎝ほど長い。柄の根元部分から支脚部分までの距離は105㎝で21号建物より25㎝長い。支脚から杵中央部までの距離は130㎝で21号建物より７㎝長い。杵中央から先端部分までの距離は18㎝である。支脚部分を中心に踏む根元部分と、杵が付く中央部分との距離を比較すると、根元の長さが杵までの長さより25㎝短い(支脚から根元までの長さ42％、支脚から杵までの長さ58％)。この比率は21号建物の柄とほぼ同じである。さらに杵の上には重しである石(8.8kg)が付くので、杵を持ち上げるにはかなりの力が必要であったと思われる。柄の太さは幅12㎝、高さ16㎝であり、縦方向が長くなっている。踏んだ時に地面につく根元部分の長さは約５㎝の距離で半分近くまで薄く削られている。

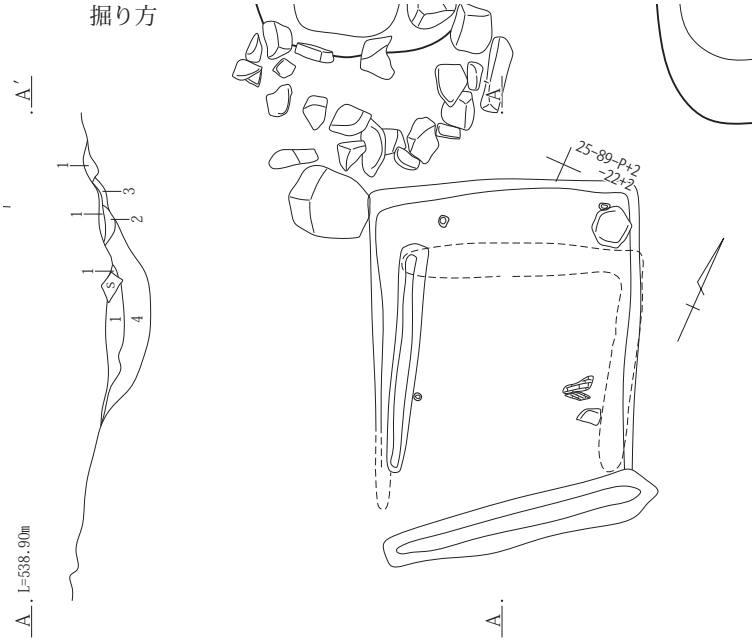
支脚と柄は、柄に取り付けられた軸木が、支脚上端部に掘り込まれている軸木受に差し込まれることにより、セットされる。軸木(長さ約29㎝、太さ約４㎝)は柄に掘られた方形の枘穴に打ち込まれている。柄に打ち込まれる部分は方形であるが、支脚に差し込まれる部分は回転を伴うので丸く整形されている。軸木は支脚の上面から約10㎝下で固定されるようになっている。

(ウ)杵　【概要・規模】発掘段階で杵と柄と重石が組んだ状態で出土している。杵は、柄の下の丸く加工された部分と、長方形に加工された柄の中に組み込まれている部分と、少し狭い長方形に加工された柄から上に出て、重石を固定する部分に分かれる。全体の長さは76㎝、柄から下の円形部分の長さ43㎝、長方形部分の長さ33㎝である。長方形部分は柄の中の長さ13㎝、柄の外側で重石を

１号囲炉裏



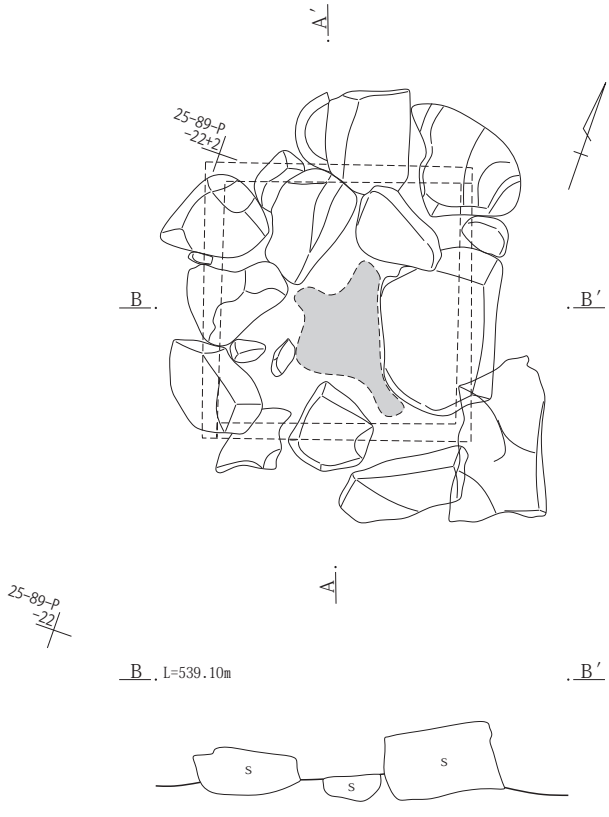
掘り方

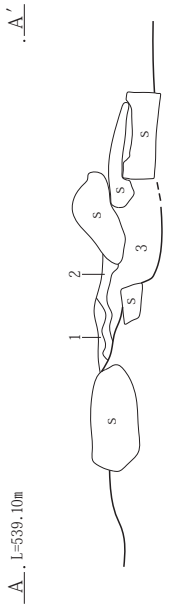


27号建物　１号囲炉裏A-A′

1　黄褐色土　(10YR5/6)　粘土　褐灰色土(10YR5/1)や焼土も混ざる　この囲炉裏を使用しなくなったため粘土で灰や焼土、炭化物に蓋をしたと考えられる
2　黒褐色土　(10YR2/2)　炭化物をわずか含む　囲炉裏内にある石臼は、粘土を張り付け(敷き詰め)た時期とほぼ同時期に置かれたと思われる
3　黒褐色土　(10YR2/3)　焼土をわずか含む　囲炉裏の北側と南側に設置された木枠は泥流の衝撃で南方向へ300㎜ほど移動したと考えられる
4　暗褐色土　(10YR3/4)　灰や炭化物が層状に何層も重なっている　焼土も一部に混入

２号囲炉裏



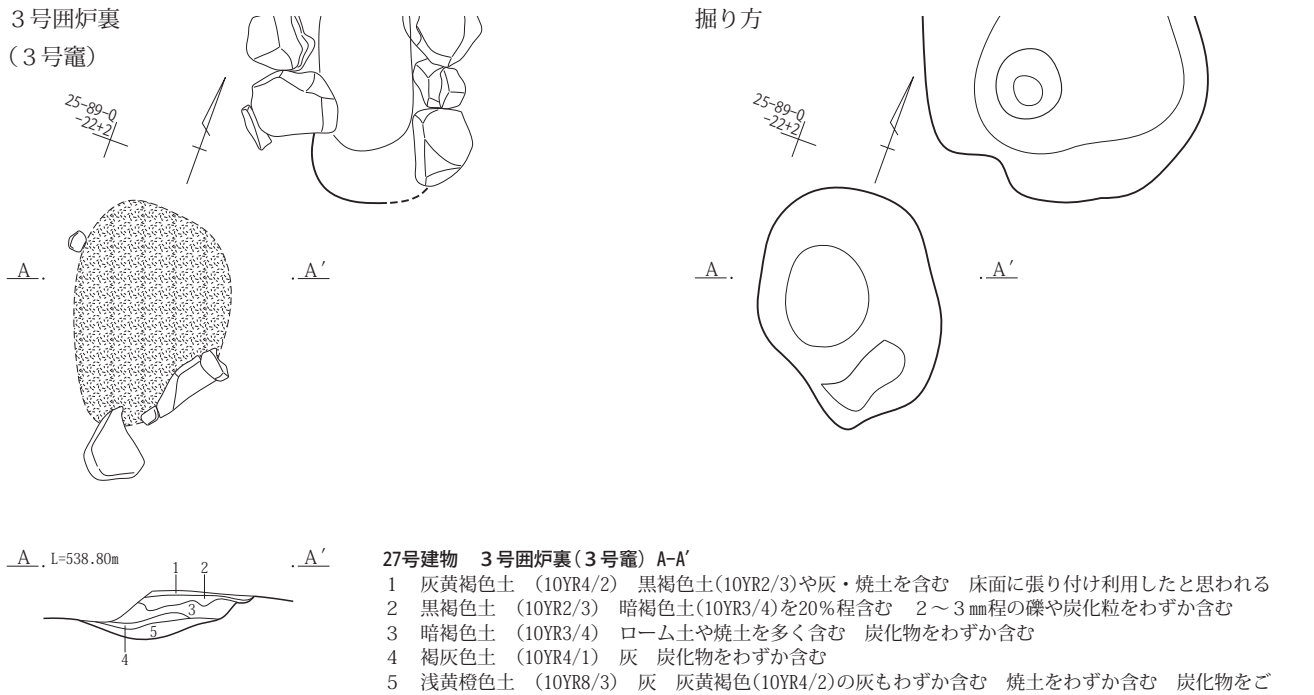


27号建物　２号囲炉裏A-A′

1　赤褐色土　(5YR4/8)　焼土　褐色(10YR4/6)の焼土も30％程含む
2　黒褐色土　(10YR2/3)　焼土を多く含む
3　黒褐色土　(10YR2/3)　焼土をわずか含む　炭化物をごくわずか含む　２～10㎜程の礫をわずか含む

0　1：30　1m

第230図　５区15号屋敷　27号建物１号・２号囲炉裏



27号建物　３号囲炉裏（３号竈）A-A′

1　灰黄褐色土　(10YR4/2)　黒褐色土(10YR2/3)や灰・焼土を含む　床面に張り付け利用したと思われる
2　黒褐色土　(10YR2/3)　暗褐色土(10YR3/4)を20％程含む　２～３㎜程の礫や炭化粒をわずか含む
3　暗褐色土　(10YR3/4)　ローム土や焼土を多く含む　炭化物をわずか含む
4　褐灰色土　(10YR4/1)　灰　炭化物をわずか含む
5　浅黄橙色土　(10YR8/3)　灰　灰黄褐色(10YR4/2)の灰もわずか含む　焼土をわずか含む　炭化物をごくわずか含む

0　1：30　1m

第231図　５区15号屋敷　27号建物３号囲炉裏

固定する部分の長さ20㎝であり、幅が少し狭くなっていた。中央部に重石を固定するための枘穴があり、発掘段階ではそこに木栓があり、重石を固定していた。

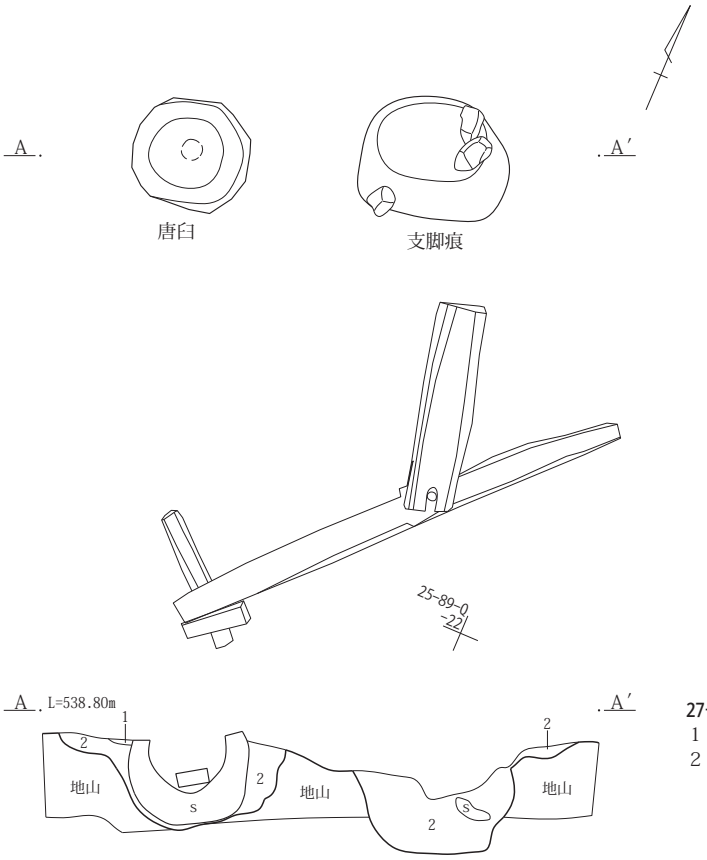
(エ)支脚　【概要・規模】杵中央部から約130㎝の位置に、支脚を支える枘穴がある。杵・杵の柄・重石とともに南側に倒れていた。この支脚は杵の柄を上端に組み込み、杵を支えている。長さ110㎝、幹の太さ23㎝前後の角材である。四隅は丸く木肌を残している。

杵の柄を組み込むために、上部から両端を７～８㎝程残して、中央部分を幅10㎝、深さ19㎝程掘り込む。その場所が杵の柄が組み込まれる場所である。そこを起点に柄がシーソーのように上下するので、掘り込まれた部分の中央部を残して、左右両側を三角屋根のように、長さ約12㎝切り取る。三角屋根の角度は約110度である。この掘り込み部分に杵の柄が組み込まれる。しかし三角屋根の上に、杵の柄が直接置かれることはない。柄が入る部分と直交する切り残された両側の袖部分に、上から12㎝、幅４㎝の溝を掘りその溝に杵の柄側中央部付近の側面に打ち込まれた軸木をセットする。この軸木により杵の柄は、支脚の掘り込み底面に接することなく、１～２㎝前後浮いた状態で固定される。

(オ)重石　石の大きさは長さ34.8㎝、幅14.6㎝、厚さ10.2㎝、重さ8.8kgであった。石の中央部には、杵の柄を装入するための長方形の穴が掘られていた。穴の大きさは10×３㎝、深さ９㎝である。穴の左右には杵と石を固定する木栓を差し込むために、幅２㎝前後の細い溝が掘られていた。発掘段階ではそこに木栓があり、重石を固定していた。石材は変質安山岩である。

(19)室（炭化物集中）（第228図、PL. 214）

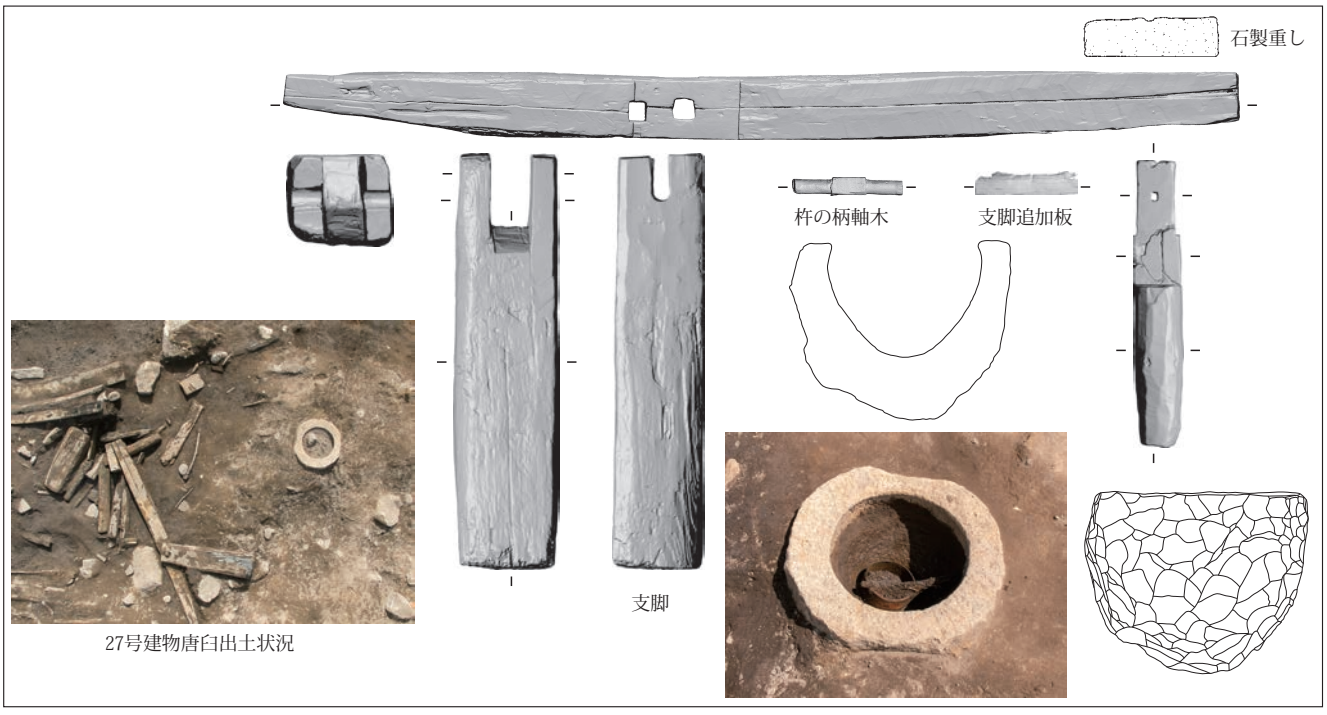
【概要・規模】竈の東側、板間の囲炉裏の北西部に位置する土間部分北端に、土間面を30㎝程掘り込んだ土坑が確認された。表面の土層中には、枝のような木片や炭化した木片を非常に多く含んでいた。その下の厚い土層中には、柄枝のような木片や炭化した木片がまばらに含まれていた。土坑の壁面は石積みや木材等で囲ってはいなかった。囲炉裏と竈の間に掘られている土坑状の掘り込みは、多くの主屋でも確認されている。多くの土坑では底面付近に多くの炭の粉が確認されている。これらの遺構は、炭出土遺構や炭化物集中遺構、あるいは室として呼称された。遺構の状態が同一ではないが、囲炉裏と竈の間に掘られた土坑で、炭が多く出土した土坑について室として報告してきた。27号建物では、多くの枝が出土



27号建物　唐臼・杵支柱A-A′
1　灰黄褐色土　(10YR4/2)　粘土　唐臼の周囲に張り付けてある
2　黒褐色土　(10YR2/3)　５～20㎜程の褐色土(10YR4/6)をブロック状で25％程含む　５～25㎜程の褐灰色土(10YR4/1)をブロック状で３％程含む　酸化土を一部に含む

0　1：40　1m

第232図　５区15号屋敷　27号建物唐臼



しており、燃料の薪等を保管した土坑とも思われるが、室として報告する。

規模は、南北方向長さ約125㎝、東西方向は90㎝、深さ30㎝である。

(20) 飼葉桶(第233図、PL. 214)

【位置・概要】馬屋から北側に約50㎝離れた土間に、馬屋と直行する南北方向で飼葉桶が埋められていた。桶の底部は竈周辺の土間面より30㎝前後低い位置に埋められていた。飼葉桶は割れており、残りが悪く、取り上げた後の実測はしていない。この飼葉桶の上に唐臼の柄と杵が倒れていた。

【規模】外径で長軸92㎝、短軸40㎝、深さ25㎝。内径で長軸92㎝、短軸30㎝、深さ16㎝である。

【所見】飼葉桶は石川原遺跡から９個出土しているが、馬屋に接して出土する場合(16・21・27号建物２個)と、馬屋と関係のない場所での出土(18・51・27号建物３個)、土間面に埋められていないで出土(27号建物４個・51号建物１個・18号建物１個合計６個)と土間面に埋められた状態での出土(16・21・27号建物各１個合計３個)と様々である。さらに大部分が１個の出土であるが、27号建物では５個出土している。飼葉桶とまとめて呼称しているが、用途はさまざまであると思われる。

(21)馬屋(第233図、PL. 214・215)

【位置・概要・規模】土間南西端コーナー部分が馬屋と思われる。馬屋の範囲は、明瞭ではないが土間面より25㎝前後方形に低くなっている範囲と思われる。

南北範囲は建物上屋柱部分から北側の北東コーナーに土台石が置かれている範囲まで約220㎝。東西範囲は西壁から北東コーナーに土台石が置かれているまでの約300㎝の範囲と思われる。

馬屋南側に馬屋桶が１個埋まっていた。

【所見】馬屋部分に建材は全く残っていなかった。これまで発掘された東宮遺跡１号建物や西宮遺跡７号建物等を参考にして、前庭に堆積した建築部材の中から、馬屋の部材と思われる柱や土台等を探して馬屋の構造を想定する。馬屋の外壁部分である南と西側は土台が回り、土壁等の壁面となっており、その面から馬は出せない構造となっていると思われる。室内である北と西側は簡単な柱が建てられ、北側は西宮遺跡７号建物では土台が置かれていた。馬の出入口である東側は西宮遺跡７号建物や東宮遺跡１号建物では、土台は使われていなかった。同じような構造であるなら、馬は土間に面した東側から出入りし、馬栓棒で仕切られ土台はない。北側は土台が置かれその上に柱が建てられ、横棒等で仕切られた板壁等があったものと思われる。

馬屋南東４ｍ前後の場所から、馬屋の柱や土台と思われる部材がまとまって出土している。馬屋北側の土台と思われる長さ約2.3mの土台や、長さ高さ２ｍ前後の丸材を加工し、横棒３本前後を差し込む枘を持つ柱が４本出土している。これらの部材が馬屋で使われていたものと思われる。そのなかの１本は馬栓棒を固定するための木製の鍵が３か所造られていた。また同じく南東約３ｍの場所から飼葉桶が出土している。

(ア)馬屋桶　【概要】馬屋南側に馬屋桶が埋まっていた。桶内部は天明泥流で埋まっていた。桶上面には、多くの板材が天明泥流とともに、落ち込んだような状態で埋まっていた。桶は上部が少し欠けている側板と、ほぼ完形の底板が残っていた。

【規模・構造】桶は、口径底径とも57㎝、高さ50㎝であった。馬屋桶としては小さい。タガが底板部分に２か所、底板から上20㎝と45㎝の計４本存在した。

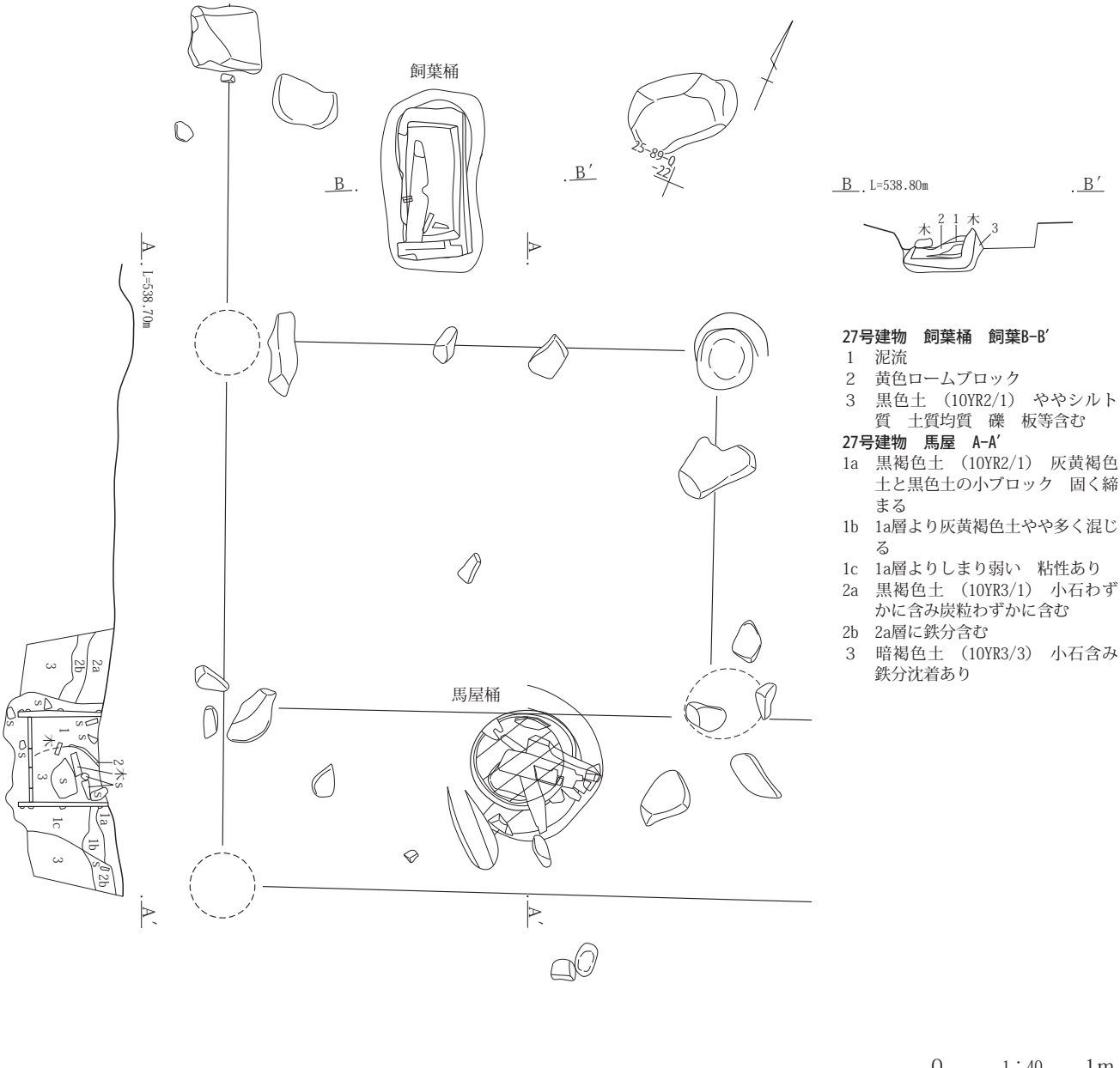
(イ)１号桶　【概要】馬屋桶は出入口の西側にあるが、１号桶は建物出入口と思われる部分の東側に位置する。おそらく厠と思われる。このように馬屋桶と厠が出入口の左右に別に造られている例は、比較的大きな建物にあるが、類例は少ない。馬屋桶は下屋の内側にあるが、１号桶は下屋の外側に位置している。桶の南西部に接して土台石と思われれる大きな石が置かれている。桶や土台石の南側は、30㎝前後一段低くなっている。おそらく桶には、屋根付きの囲いが造られていてのではないだろうか。

桶底部から漆椀が３個出土した。桶は上部が少し欠損しているが、側板とほぼ完形の底板が残っていた。

【規模・構造】桶は、底径36㎝、高さ45㎝であった。タガが底板部分に残っていた。小さな桶である。

(22)雨落溝

建物同様に残りが悪く、良好な状態で軽石を含んだ雨落溝は残っていなかった。建物を囲むように、北・東・南側に溝が確認されており、おそらくこれが雨落溝であったものと思われる。７号道南側で建物北側の中央付

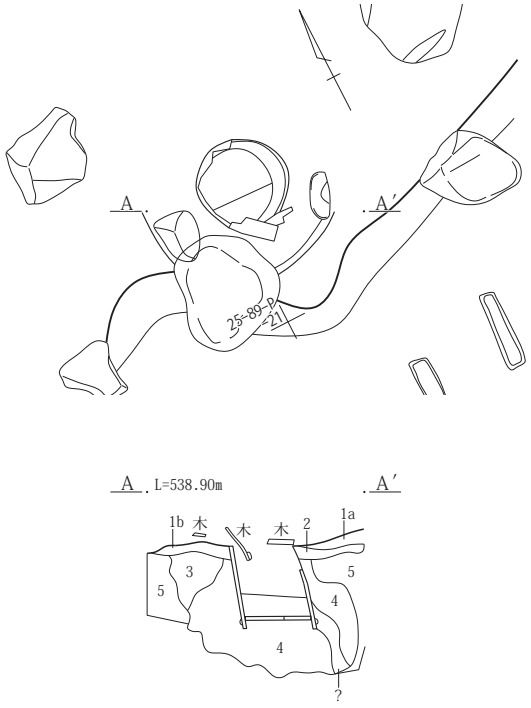


第233図　５区15号屋敷　27号建物馬屋

近から東側に溝が確認され、建物東側の溝に繋がっている。建物南側は、一部雨落溝らしき掘込があるが明瞭でない。建物から60～80㎝離れた位置に掘られていた。深さや幅は撹乱が多いので、明瞭でない。

第３項　前庭と被災建物の堆積状況

主屋南に庭が造られている。庭の南は南東方向から北西方向に延びている丘陵の北東端に位置し、一段高い面となっている。その面に南東方向から北西方向に52号建物と53号建物が造られている。丘陵までの距離は東側で18m前後、西側で10m前後となっている。そのため主屋の南で確保できる前庭は不定形である。距離は東側で22m前後、西側３m前後である。面積としては500㎡前後と思われる。この前庭に27号建物全体が、天明泥流に押し流されて、土間と板間の境付近から南約２mを中心とした場所に、大量に重なった状態で出土した。出土状況から、泥流は27号建物の北側から建物全体を東西両側から抱きかかえるような状態で前庭まで運んだようである。そのために逆方向に建築部材等を戻すことにより、建物の建材等の本来の位置をある程度想定復元することができる。



27号建物　厠（１号桶）A-A′
1a　褐灰色土　（10YR4/1）　固くしまる　白色細粒見られる
1b　1a層にローム小ブロック含み土圧により締まる
2　にぶい黄褐色土　（10YR5/4）　ややシルト質　黄色土含む
3　黒褐色土　（10YR3/1）　粘性しまりあり白色細粒褐色小ブロック含む
4　黒色土　（10YR2/1）　粘性強い　しまりやや弱い　青色斑点あり　小石含む
5　暗褐色土　（10YR3/3）　しまりあり　小石わずかに含む(地山)白色細粒含む

0　1：40　1m

第234図　５区15号屋敷　27号建物厠

第４項　物干台と物干竿(第235図、PL.216)

【概要】前庭に長さ３m弱の細長い丸材４本が、北から南側に向かって倒れていた。西から物干台１～４と呼称する。

丸材は表皮を撤去した程度の加工であり、３本は北端の地中に埋めたであろう部分は細く杭のように削られていたが、最も太い物干台２は平らであり、削られていなかった。物干台１～３の南端はＹ字状になっていたが、物干台４は先端が欠けており、Ｙ字状の部分は残っていなかった。物干台２と３のＹ字部分には、２つの丸材を渡るような状態で丸い竹が出土している。さらに東側の丸材の中央付近には、横方向に丸竹が出土している。物干台１～３の北側には、約２m間隔で３個の小穴が掘られていた。小穴の位置は27号建物縁側南約1.5mであり、建物に並行している。物干台１が埋められていたと思われる場所は確認できなかった。これらの遺構は、27号建物前庭の物干台と竿と思われる。

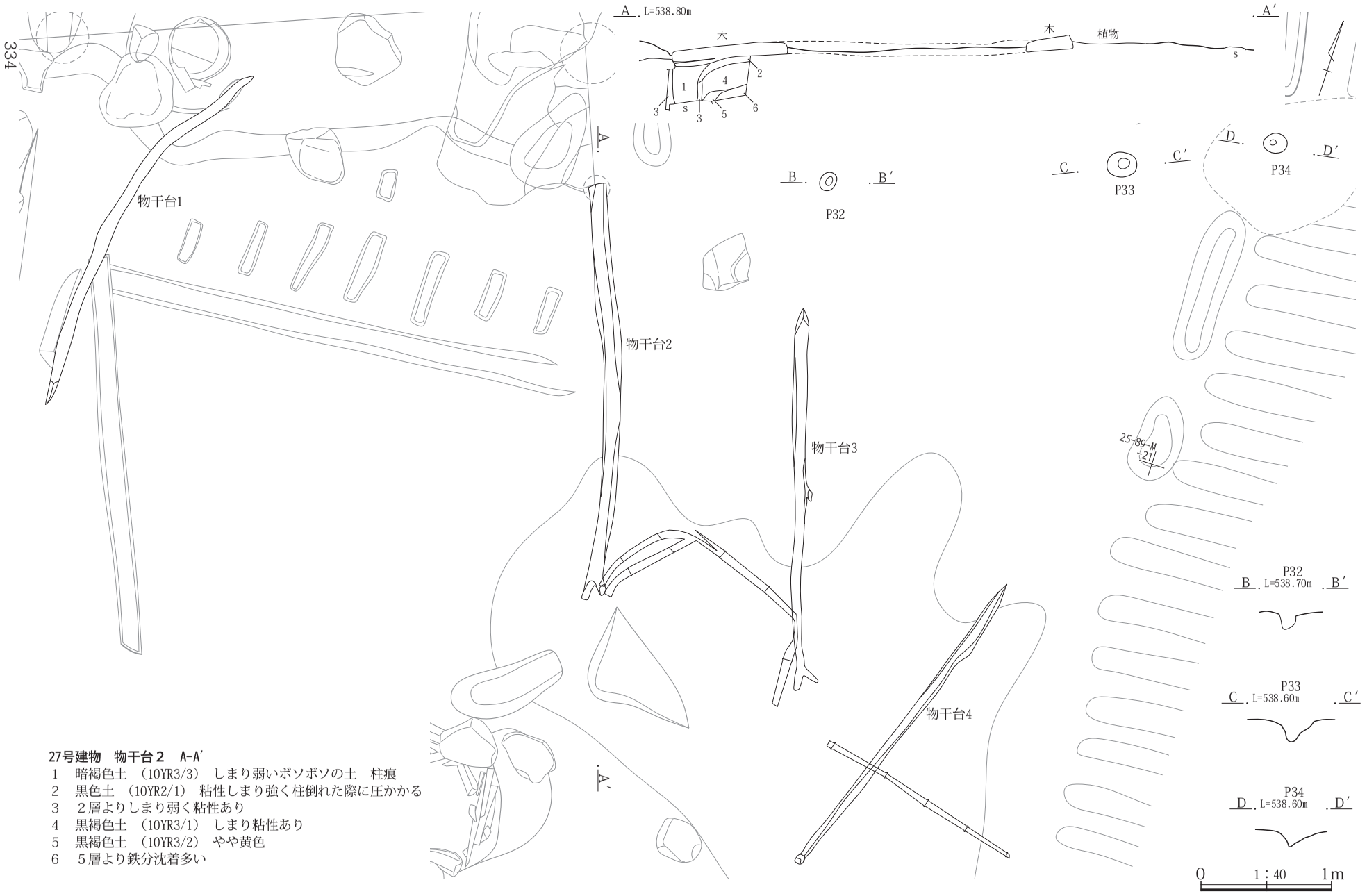
【規模】物干台１は長さ3.05m、太さ９㎝で底部は細く削られており、少し曲がっている。物干台２は長さ3.15m、太さ12㎝で底部は細く削られていない。先端部は幅広くＹ字状に広がっており、最も太い材である。物干台３は長さ2.88m、太さ９㎝で底部は細く削られている。先端部は幅広くＹ字状に広がっている。物干台４は長さ2.59m、太さ８㎝で底部は細く削られている。先端部は欠損している。物干台２と３の南端付近から出土した竿竹は割れて曲がっている。長さは約2.2mである。物干台４の上から出土した竿竹は長さ1.6mで、太さは５㎝前後であった。物干台２～４の物干台が埋まっていたと思われる掘込は、幅10～20㎝、深さ10㎝前後と浅かった。

第５項　前庭に並べられた植物

物干台の竿の下で、２枚重なりの板戸の下から南北方向1.6m前後、東西方向２m前後の範囲から、植物の茎が密集して南北方向に並んだ状態で出土した。写真で観察すると、茎は５本前後重なっている。その茎の下には、並べられた茎と直行する方向で細い丸棒のようなものが置かれていた。全て茎であり葉は見当たらない。下に置かれた丸棒の存在から、乾燥させるために並べられていたことも考えられる。天明泥流が押し寄せた時期に干される茎の一つとして麻が考えられるが、分析していないので不明である。

第６項　洗い場(第236図、PL.217)

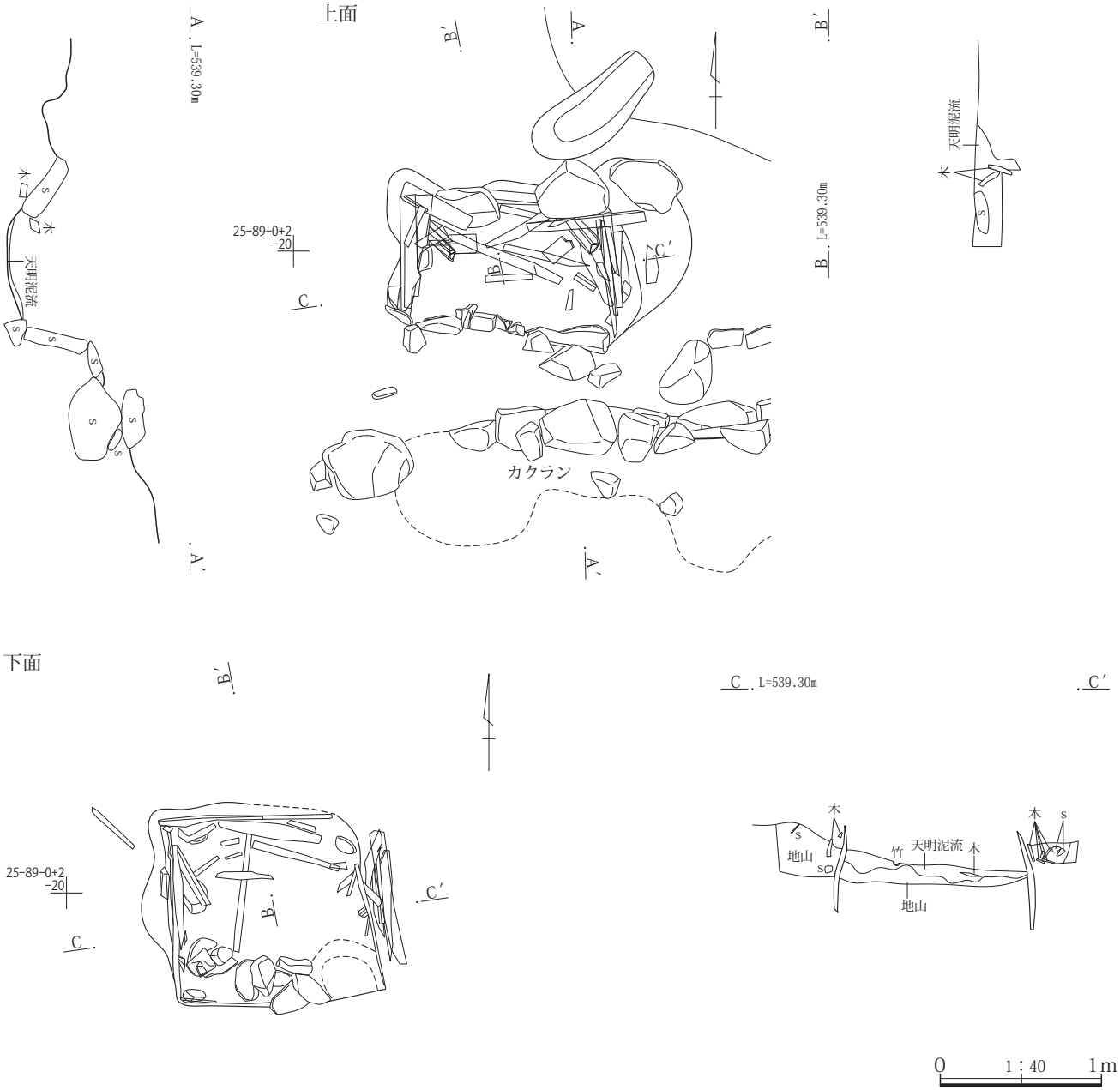
【概要】15号屋敷27号建物前庭南端で、53号建物の北東部分に洗い場がある。大部分の洗い場は水路に沿って掘られているが、水路に面していない。水路は発掘されていないが、南約12m付近に53号溝があると思われる。洗い場は周辺の地形の中で最も低い場所に造られている。主屋である27号建物より20㎝、南西側の53号建物より80㎝、53号溝底部より220㎝低い。洗い場の南側は高い丘陵北端部分となっており、地形の変換地に位置している。地表面を掘れば湧水があったものと思われる。洗い場は地表面を約40㎝掘り下げて造られていた。底部にはAs-A軽石が少し堆積しており、浅間泥流により埋まっていた。浅間泥流とともに木材が一緒に埋没しており、中には杵が柄を付けた状態で埋まっていた。



27号建物　物干台２　A-A′

1　暗褐色土　（10YR3/3）　しまり弱いボソボソの土　柱痕
2　黒色土　（10YR2/1）　粘性しまり強く柱倒れた際に圧かかる
3　２層よりしまり弱く粘性あり
4　黒褐色土　（10YR3/1）　しまり粘性あり
5　黒褐色土　（10YR3/2）　やや黄色
6　５層より鉄分沈着多い

第235図　５区15号屋敷　物干場



第236図　５区15号屋敷　洗い場

【構造】この洗い場は、一段高い南側の石列に沿って東西方向に地面を掘り込んで造られている。多くの洗い場は、掘り込まれた壁面が崩れないように、大きな石を４面とも２段前後積み、石の平らな面が洗い場内側となるように積んでいる。しかしこの洗い場は、長軸方向の北側と南側の壁面には石が２段前後積まれているが、短軸方向の東西壁面には石は積まれていない。東西の壁面は、板壁としていた。

板壁が洗い場内部に倒れ込まないように、板壁中央部に東西の板壁とも長さ60㎝以上の杭を20㎝前後地中に打ち込んで板壁を固定していた。北壁面に積まれていた石垣を撤去すると、石垣の下にも板材や角材が出土した。北側の石垣を積む以前は、板を用いた側壁としていた時期があったと思われる。南側の石垣を撤去して調査したが、そこには板材や角材は出土しなかった。この部分は当初から石垣であったのであろうか。当初北・東・西壁面は板や角材で囲い、南壁面に石を積んだ正方形に近い長方形の洗い場であったと思われる。その後北壁の内側に石垣を積み、東西が板壁、南北が石壁の東西に長い長方形の洗い場として使っていたようである。石垣は、２段前後であり、下部は平らな薄い石を壁面に貼り付けるように置き、その上に大きな石が置かれていた。

【規模】新旧の洗い場と考えられる。天明泥流で埋没した東西板壁南北石垣の長方形の洗い場は、東西約120㎝、南北約70㎝、深さ約40㎝、３方板壁で、南壁のみ石垣であった正方形に近い長方形の古い段階の洗い場は、東西約120㎝、南北約90㎝である。深さは不明である。

第７項　52号建物（第237・238・426・721図、PL.201・349）

25-99-Ｒ-３グリッドに位置する。

【位置と概要】屋敷南西部分に、北西方向から南東方向の斜め方向に造られている。南西の一段高い場所に21号道があり、建物はこの21号道に沿うように造られていた。21号道は南西側の丘陵北東端部に位置し、15号屋敷前庭より50㎝前後高い位置に造られていた。21号道西側には53号溝が造られていた。52号建物と一段高い21号道との段差部分には石垣が積まれていた。52号建物南東部に接して、53号建物が建てられていた。両建物とも主屋である27号建物の付属建物であったと思われる。建物は掘立柱建物と思われ、柱穴が６か所確認されている。柱穴の上部は、天明泥流により南東方向に押し倒されていた痕跡を明瞭に残していた。Ｐ１には南東方向に倒れた柱が残っていた。柱は太さ約12㎝の角材で、柱の長さは約2.8ｍである。南側の端先端部は枘が造られており、底部から2.1ｍの場所には貫と思われる掘り込みが存在する。この柱は本来掘立柱建物に使われている柱ではなく、土台建物の柱と思われる。土台建物の柱を転用して掘立柱として使用したのであろうか。Ｐ３の南東側にも柱が倒れて一部残っていた。柱は太さ約12㎝で、柱の長さは約2.5ｍである。Ｐ３に近い底部には枘が造られていた。Ｐ３に埋められていた柱であろうか。その場合底部に枘があるので、土台建物に使う柱の可能性がある。Ｐ１も同様に、土台建物の柱を転用して掘立柱として使用したのであろうか。

Ｐ２・Ｐ４～Ｐ６の柱穴にも、北西から南東方向に柱が倒れた状態を断面で観察できた。

雨落溝が建物東側と北側の壁想定される壁面から50㎝程離れた場所に残っていた。石垣のある西側と53号建物のある南側には残っていなかった。

これらの柱穴の状況や雨落溝の存在からも天明泥流で埋没する段階まで、建物が建っていたと思われる。

主屋である27号建物と53号建物は土台建物であるが、52号建物だけが掘立柱建物である。建物は、21号道に沿って建てられており、建物長軸方向は西側に30度ほど傾いている。建物北側は土間、南側には２個の桶が埋められていた。東側を桶１、西側を桶２と呼称する。桶の側板は痕跡を明瞭に残したが、側板は残っていなかった。しかし底板は桶１と桶２とも残っていた。桶１の底板は３枚で、竹釘で接合していた。直径90㎝、厚さ2.8㎝で樹種はクリであった。桶２も底板は３枚であった。桶１は実測図掲載。２つの桶とも内部は浅間泥流で埋まっていた。

建物東側に階段と思われる段差が３段造られていた。最も低い東側の標高は538.60ｍであり、建物土間面の標高は539.13ｍである。約53㎝の高低差がある。そのために、建物出入口と思われる東側に階段が造られていたものと思われる。階段の幅約80㎝、奥行約30㎝、２段目と３段目の高低差約15㎝である。

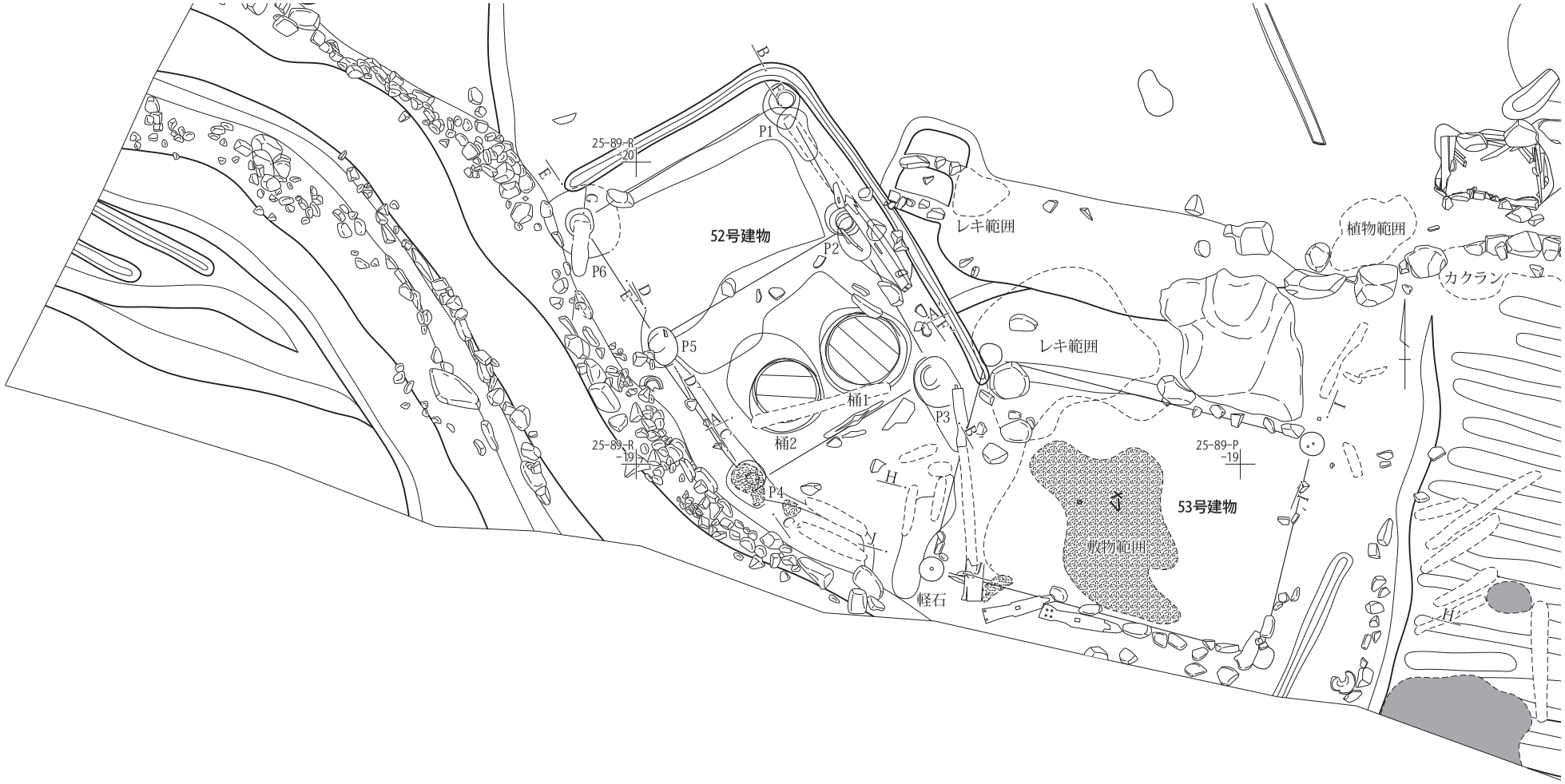
【規模】建物の規模は、柱穴Ｐ１とＰ３、Ｐ４とＰ６の間を計測すると約4.2ｍ前後であり、Ｐ３とＰ４、Ｐ１とＰ６の間を計測すると３ｍ前後である。柱穴Ｐ１とＰ３、Ｐ４とＰ６のほぼ中間の場所にＰ２とＰ５がある。北側の土間部分と南側の桶が埋まっている部分の境は明瞭でないが、桶の埋められた部分が北側の土間部分より高くなっており、その境付近と思われる。北側の土間部分が３ｍ×2.7ｍ、南側の桶の埋まっていた部分が３ｍ×1.5ｍと思われる。

桶１は桶２より大きく、底径約90㎝、高さ75㎝、タガは４か所で底板付近・底板から上８㎝・38㎝・60㎝の位置に痕跡を残している。桶２は底径約85㎝、高さ70㎝、タガは４か所で底板部分の２か所、底板から上12㎝・34㎝の位置に痕跡を残している。

建物の規模は１間184㎝、半間92㎝を基本としてこれまで計測してきた。その結果、建物は間口７間半、奥行３間等一定の規格が確認できた。しかし、52号建物はこの規格で造られてはいないようである。限られた地形や使われる材木等により、最も合理的な寸法を割り出し、

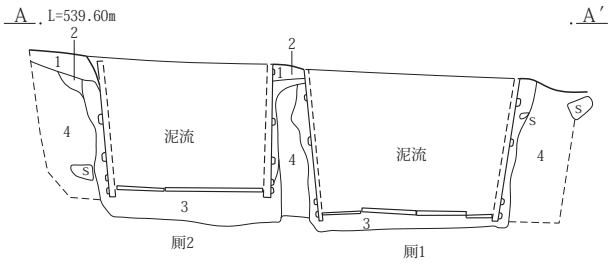
ピット一覧表参考

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm
Ｐ１	57	47	120
Ｐ２	52	48	94
Ｐ３	68	50	66
Ｐ４	43	43	53
Ｐ５	49	37	66
Ｐ６	39	38	83



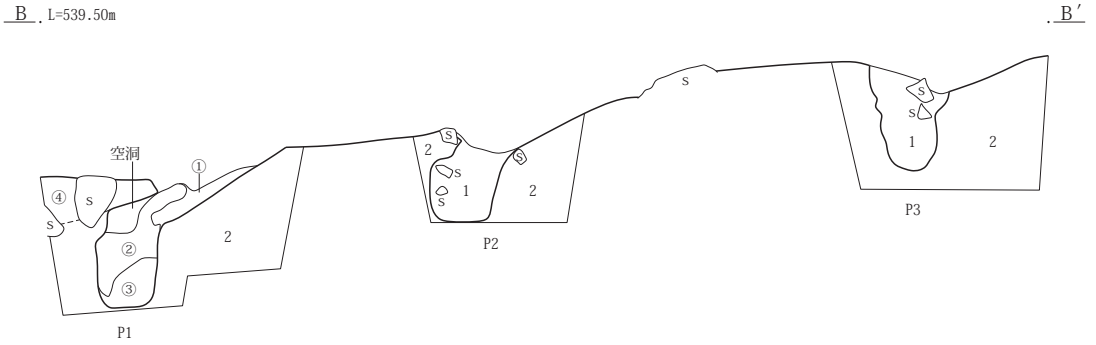
第237図　5区15号屋敷　52・53号建物

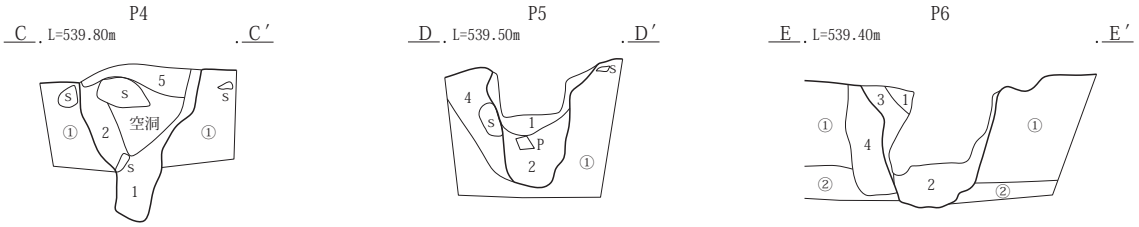
52号建物

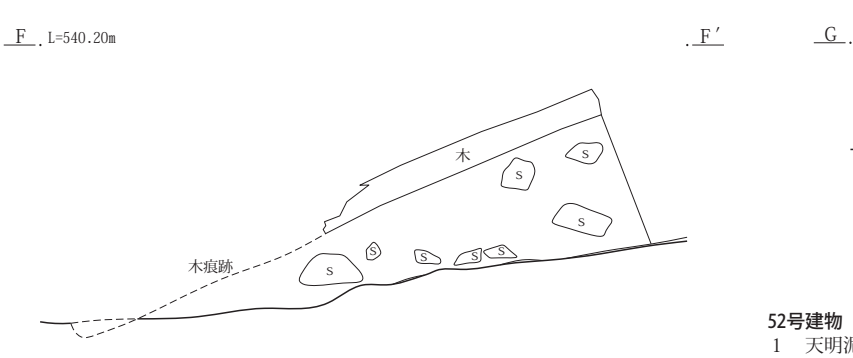


52号建物　厠１，２　A-A′
1　暗褐色土とロームの混土固く踏み締まる
2　黒褐色土　(10YR3/2)　ローム小ブロック小石わずかに含むしまり強い
3　黒褐色土　(10YR3/1)　粘性強くやや青味がかる　小石含む
4　黒褐色土　(10YR3/2)　小石及び白色細粒含む

52号建物　Ｐ１，２，３　B-B′
1　天明泥流層
2　黒色土　(10YR2/1)　小石及び風化小礫含む　粘性しまりあり
①　木質及び鉄分付着木皮成る　しまり非常に弱い
②　木質が鉄分付着硬化
③　柱が抜かれた跡の隙間に落ちた上非常にしまり弱い
④　灰黄褐色土　(10YR4/2)　ややシルト質泥流に押し流された表土



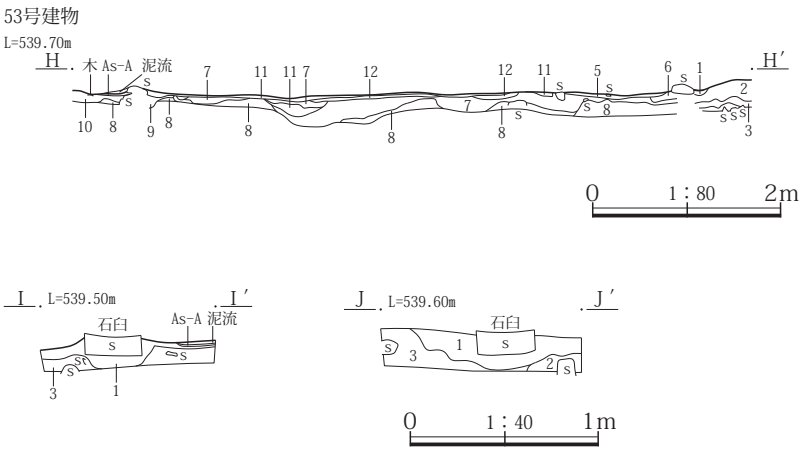




52号建物　柱穴４～６号　C-C′～E-E′
1　天明泥流
2　暗褐色土　(10YR3/3)　しまり弱い　黄色粒含む
3　褐灰色土　(10YR4/1)　小礫含む　固くしまり粘性あり
4　暗褐色土　(10YR3/3)　黄色粒混じりしまりあり
5　黄配色粘土ブロック
①　暗褐色土　(10YR3/3)　地山黄色粒混じる
②　黒褐色土　(10YR3/2)　粘性しまりあり

0　1：40　1m

第238図　５区15号屋敷　52号建物断面



53号建物　H-H′
1　褐灰色シルト質土　(10YR4/1)　上面にAs-Aのりノロ状堆積土
2　灰木褐色土　(10YR4/3)　上層鉄分沈着見られ小石含む
3　２層にローム土含む
4　ローム粒軽石小石混じり暗褐色土(10YR3/3)　爽雑物少なくわずかに粘性しまりあり
5　灰黄褐色土　(10YR4/2)　小石含み鉄分沈着　固くしまる
6　褐灰色土　(10YR4/1)　鉄分沈着小石含む　しまりあり
7　褐灰色土　(10YR4/1)　イに似るが黒色小ブロック多く含む
8　黒褐色土　(10YR3/1)　鉄分沈着ローム小ブロック軽石粒含む
9　黒色土　(10YR2/1)　黄色軽石粒多く含む　しまりあり
10　オより軽石少ない
11　明黄褐色ローム貼床　三和土(多き)
12　黒褐色土の固くしまった層　黄色軽石ローム小ブロック含む

53号建物　I-I′・J-J′
1　黒色土　(10YR2/1)　くすんだ褐色土混じり黄色ローム粒含む　しまり弱い
2　にぶい黄褐色土　(10YR4/3)　小礫含む　ローム粒含む
3　黒褐色土　(10YR3/2)　粘性しまりあり　黄色粒含む　地山

第239図　５区15号屋敷　53号建物断面

建てられた建物と思われる。

第８項　53号建物(第237・239・425・426・722図、PL.218・349)

25-89-Ｐ-18グリッドに位置する。

【位置と概要】屋敷南端と思われる場所に位置し、西側の52号建物の東側に接して造られていた。南側は丘陵の北端部分に近く、発掘区域外で発掘していないが、おそらく21号道に接しており、21号道の南側は53号溝があると思われる。建物は残りが悪く、材等は全く残っていなかった。土台石として石臼が建物北東コーナー部分(台石１・上臼)と南西コーナー部分(土台石４・下臼)に置かれており、南東コーナー部分には大きな土台石２、北西コーナー部分には南に少し移動している土台石と思われる大きな石(土台石５)が残っていた。また土台石１と土台石５の中間付近に土台石６が置かれていた。土台石２と土台石４の中間付近に土台石３はなかった。６個の土台石の間には小さな石が並べられていた。土台石４と土台石３(想定)の間に小さな石はほとんど並べられていない。その場所には、柄と先端鉄の刃を外した踏鍬(えんが)が２個並べられたように置かれていた。

建物内部は平らな土間となっていた。おそらく南西方向の丘陵の一部を削って作った敷地であり、地盤の岩盤を一部削って平らにしたものと思われる。丘陵から東側に離れた屋敷前庭より60～70㎝高い敷地に建物は造られていた。建物東側で前庭との境部分には、削られた岩盤の一部が露出している。52号建物にあった階段等は確認できなかった。

建物中央部に織られた敷物の一部と思われる植物が残っていた。

雨落溝が建物東側で壁想定される壁面から50㎝程離れた場所に残っていた。溝の中にAs-A軽石が残っていた。As-A軽石はほかにも建物西側に残っていたが雨落溝の確認はできなかった。

【規模】建物の規模は土台石間の距離から間口(東西)約4.5m、奥行(南北)約2.9mである。土台石５と土台石１との中間付近に土台石６がある。

第９項　人骨の出土(第284図、PL.219・220)

前庭から３体の人骨が確認された。これまで多くの集落を発掘調査したが、天明泥流下の人骨が確認されたのはこの３体と、同じ石川原遺跡27号建物東側約20mの場所で、７号道南端出土の人骨の一部だけである。なお『浅間記』(富沢久兵衛著)の中では、川原湯村では19軒流失、14人の死亡が記録されている。

27号建物は、北側から押し寄せた天明泥流により南側の前庭に向かって押し倒されている。３体の人骨は倒れた建物の下敷きとなった状態で確認された。３体の人骨

については鑑定分析を実施しており、詳しくは本報告書の中で別に報告する。分析によると西側が１号人骨（６歳前後の小児前半）、中央が４号人骨（熟年後半以降の女性）、東側が２号人骨（４歳前後の幼児後半）である。

（ア）全体の状況　３体の人骨が出した場所は、前庭で建材が最も多く堆積している場所である。堆積状況を知るために、東西南北方向に設定した十字の断面図が交差する付近の南側である。最も上には、屋根等の部材があったと思われるが確認できない。その下に２階の床板・梁・根太が載っていた。それらを取り除いた下から人骨が確認された。

３体の人骨は中央に大人の女性、左右が子供である。３人は手をつなげると思われる約１ｍの距離である。倒れてきた27号建物の下敷きになって死亡したものと思われる。３体の親子関係等は不明である。そこから南15～20mの場所は高い丘陵先端部となっている。そこまで避難すればこの３人は、泥流に埋まることはなかったと思われる。

（イ）１号人骨　最初に確認された人骨である。土間出入口であり、馬や人間が出入りするための大戸が、室内側を上にした状態で北から南に向かって倒れていた。その大戸を除去すると、その下から頭蓋骨等が出土し、一部は西側縁側の下から出土している。骨の周辺には多くの建築部材が出土している。

（ウ）２号人骨　東側縁側の上に一部がかぶさるように柱・三本溝の鴨居が出土し、その内側に障子・２枚の板戸が組み込まれたような状態で出土した。その障子と板戸を撤去すると、その下の縁側の板の上から人骨が出土した。

（エ）４号人骨　１号・２号人骨の中間付近、土間南側の土壁と思われる部材を撤去作業中、東側の柱の下から頭蓋骨が出土した。人骨の一部は西側の縁側の下からも出土した。最も残りの良好な人骨である。

第10項　猫の骨出土（第284図、PL.220）

猫の骨が大引の下から出土している。大引は長さ6.5m（W32）と最も長い建材である。長さ4.5mの大引（W33）とともに、27号建物から南の庭に３～４ｍ前後移動し、大引の南端部分が東側縁側の板に一部乗り上げたような状態で２本が出土している。長い大引（W33）の中央付近の下からほぼ完形の状態で猫の骨が出土した。猫は泥流が押し寄せた反対側の南側に頭が位置していた。分析結果は本報告書の中で人骨とともに報告する。分析によると猫は、左上より圧を受け頭骨がややつぶれているが、ほぼ全身骨格が残存している。

第11項　出土遺物（第410～427・569～722図、PL.224～244・341～349）

27号建物前庭部分を中心に膨大な建築部材と生活用具が出土している。

建物全体が泥流により北西から南東方向に約６ｍ運ばれ、そこで建物全体が南東方向に倒れている。倒れていた遺物範囲は幅400㎝、高さ120㎝であった。堆積した遺物は、北側で柱・土壁・大引等が、生活用具の上に被さるような状態で出土、中央部では多くの柱・縁側・２階の床板や梁・桁・根太材等が重なって出土し、南側では建物南の土壁・竹壁・等が前庭の土の上から出土、縁側の上から上屋柱と敷居・鴨居・板戸、板戸南東部部分の縁側上部からは階段が出土している。それらの出土遺物を写真撮影後上面から実測図を作成し、その下から出土した遺物を写真撮影後実測した。その結果実測面は全部で45面となった。整理段階で、関連した遺物を集めて遺物出土図を作成することも考えたが、膨大な資料を分析して図化することはできなかった。報告書ではそれら41面の実測図に主屋である27号建物と前庭との位置関係、さらに建物壁材との位置関係が理解できるように壁の範囲を図に加えて41枚掲載した。特定の遺物を集めて作成した図面は、柱と土台を集めた第281図、壁に関する柱と土台と竹壁を集めた第282図、縁側・大戸・柱・敷居・鴨居・板戸を集めた第283図、人骨・ネコの骨と大戸・板戸・縁側・大引戸の関連青図にした第284図、縁側に関する部材を集めた第285図・第286図、２階の床板・梁・根太を集めた第287図、漆椀や膳。陶磁器等の生活用具を集めた第288図、桶・飼葉桶等を集めた第289図、戸棚に関する遺物を集めた290図～296図である。しかし、ここで全体を理解するための十分な分析はできなかった。以下は出土遺物について簡単に説明する。

建物が建っていた場所に残っていた遺物は、唐臼の臼や杵と土間に埋まっていた飼葉桶・馬屋南の桶等であり、大部分は泥流により移動して残っていなかった。建

築部材等については出土状況を含めて、各遺構の項で説明した。出土した生活用具は以下のものがある。

鞍・ブラシ・漆碗・お櫃・曲物・丸善・お膳・重箱・箱・茶道具・箸・櫛・下駄・樽・桶・団扇・三味線・遊具・枠・火打ち箱・戸棚・行灯・箕・かご・テンガ・踏鋤・杵・木槌・陶磁器碗・煙管・薬缶・茶釜・鍋・釜・おろし金・鑿・はかり等である。

大部分の遺物は置かれていた場所から移動したものである。その中から良好なセットとして出土した漆器椀と膳、戸棚及び戸棚の中に保管されていたと思われる出土遺物について説明する。

(ア)漆器椀と膳(第644～648・661～663図、PL.224～226)

【概要】27号建物北壁１の下付近から漆器壺椀と平椀の蓋身セット各10個と深椀と浅椀の蓋付２セット、蓋のない深椀と浅椀２個計46個と方形の膳10個が出土している。蓋・身とも外面は暗褐色、内面は赤褐色の漆が塗られていた。

漆器椀の北西部に接した場所で北壁１の下から方形の膳が10個重なった状態で出土している。表面は褐色の漆が塗られ、表面には朱色で梅の花と思われる絵が10膳とも同じように描かれていた。

【所見】10枚セットと当時の一般的な家族数より多くまとまって保管されていた。漆器椀や漆器膳は、残りが良好であり漆はほとんど欠落していない。漆器椀の大部分は平椀と壺椀であり、日常の食器として主に使われると思われる深椀と浅椀はほとんど含まれていない。出土した場所は、台所に近い場所ではない。これらのことから漆器椀と漆器膳は日常使用していたものではなく、保管されていたものと思われる。

出土した位置は北壁１の下付近である。天明泥流により北西方向から南東方向に押されているので、出土位置より北西方向に保管されていたものと思われる。その方向は馬屋であり、土間である。土間部分に漆椀等や膳を保管していたことも否定できないが、馬屋と土間の上は２階の床板が貼られていた。その場所に常時使用していない漆器類を保管していたとは､考えられないだろうか。

(イ)戸棚と出土遺物(第290～296図、PL.221～223)

【概要】27号建物北壁６と北壁７の南側付近から戸棚が出土している。戸棚は他の建築部材や生活用具とともに、泥流により前庭に運ばれて壊れた状態で出土した。出土位置は前庭に堆積した建築部材等の東西南北断面交差点付近北側である。戸棚は底部の板が最も上で、背板が建物のある北側、戸棚の２枚の引戸が南側となる位置関係で壊れていた。敷居が上、鴨居が下から出土した。戸棚の大きさは幅約170㎝、高さ約76㎝、奥行約60㎝であり、横幅が大きく高さが低い。戸棚には中段があった。このような大きな戸棚を出土した建物は、他の遺跡や建物では、全く確認されていない。

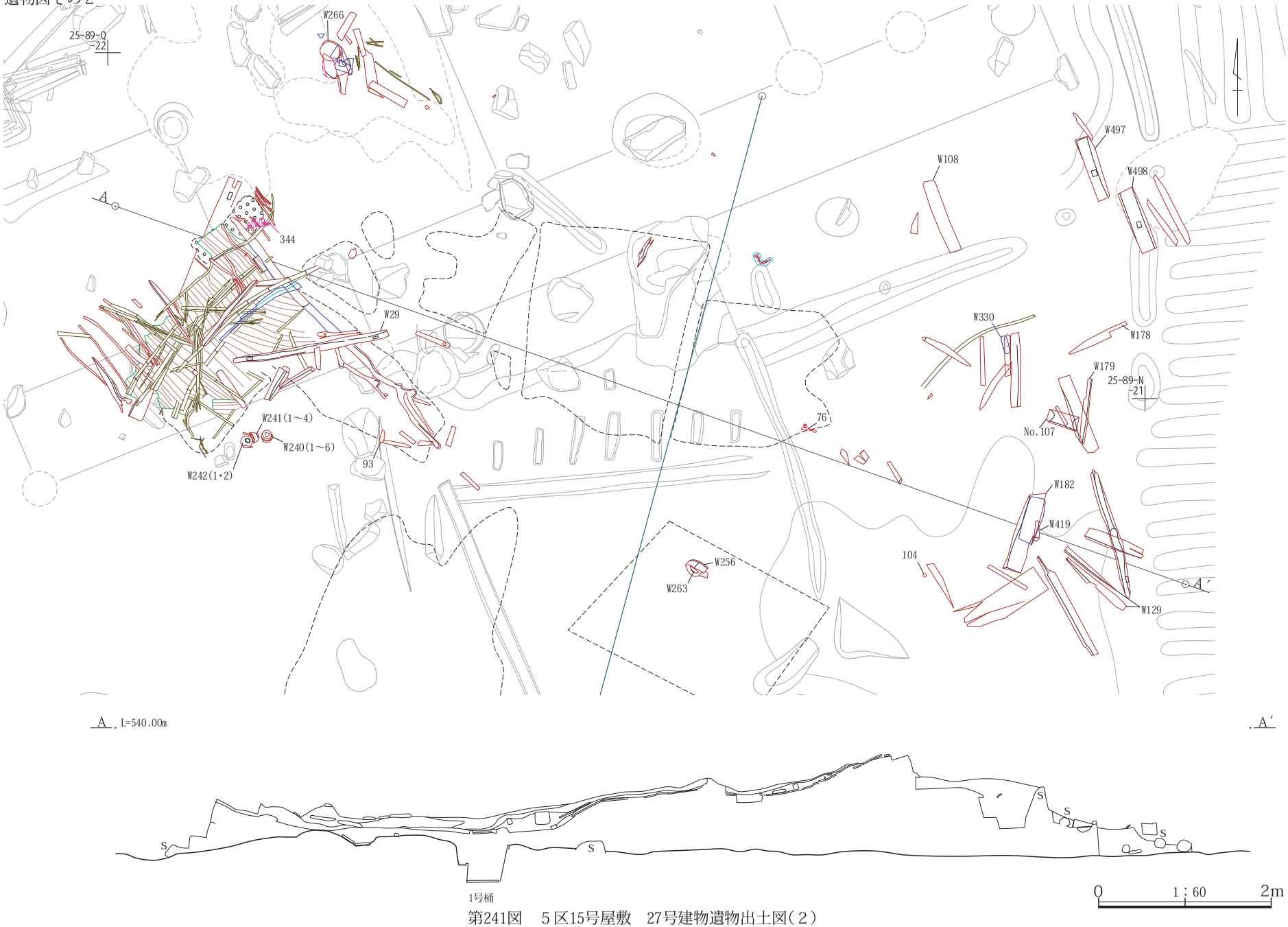
【出土遺物】戸棚の中や周辺から多くの陶磁器・漆器製品・茶筅やひしゃく等の茶道具・重箱・竹の箸・曲物等が出土している。これらは、おそらく戸棚の中に収納されていたものと思われる。これらのセット完形を詳細に調べることにより、当時の陶磁器や茶道具の様子が明らかになる良好な資料である。

【所見】日常雑器の食器類・たばこ・火打ち金・曲物・桶や樽等生活用具の多くは、囲炉裏や土間周辺から出土している。食器類も多く出土するが、家族数(註１)を超える10個以上出土することない。

特別の行事等で人寄せの時に使用する食器類や膳は、家族数より多く必要である。また日常で常時使用しない特別な茶道具や、漆器類は大切に保管して日常の空間には保管しないと思われる。保管場所は、これまでの調査例では戸棚・ざる・かご・木箱等である。27号建物では、大きな戸棚があったが、21号建物では、竹製のかごと木箱であった。かごの中には８枚の皿が重なった状態で、また仏壇下の戸棚には10枚の丸善が重なった状態で保管されていた。51号建物では、仏壇下の戸棚と仏壇の隣に箱があった。仏壇下の戸棚には、陶磁器・曲物・箸・おりん・櫃等が保管されていた。42号建物でも囲炉裏脇に箱が置いてあった。このように多くの建物では、箱や竹製品が収納のために使われていたようである。27号建物では、仏壇はないが大きな戸棚が使われ、その中に多くの生活用具が収納されていた。収納の様子が少し明らかとなってきた。

(註１)天保９年長野原町宗門人別書上帳面を参考とした。この資料では家族数５人が最も多く、大部分が６人以下である。『東宮遺跡(３)』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2017年　283頁に掲載

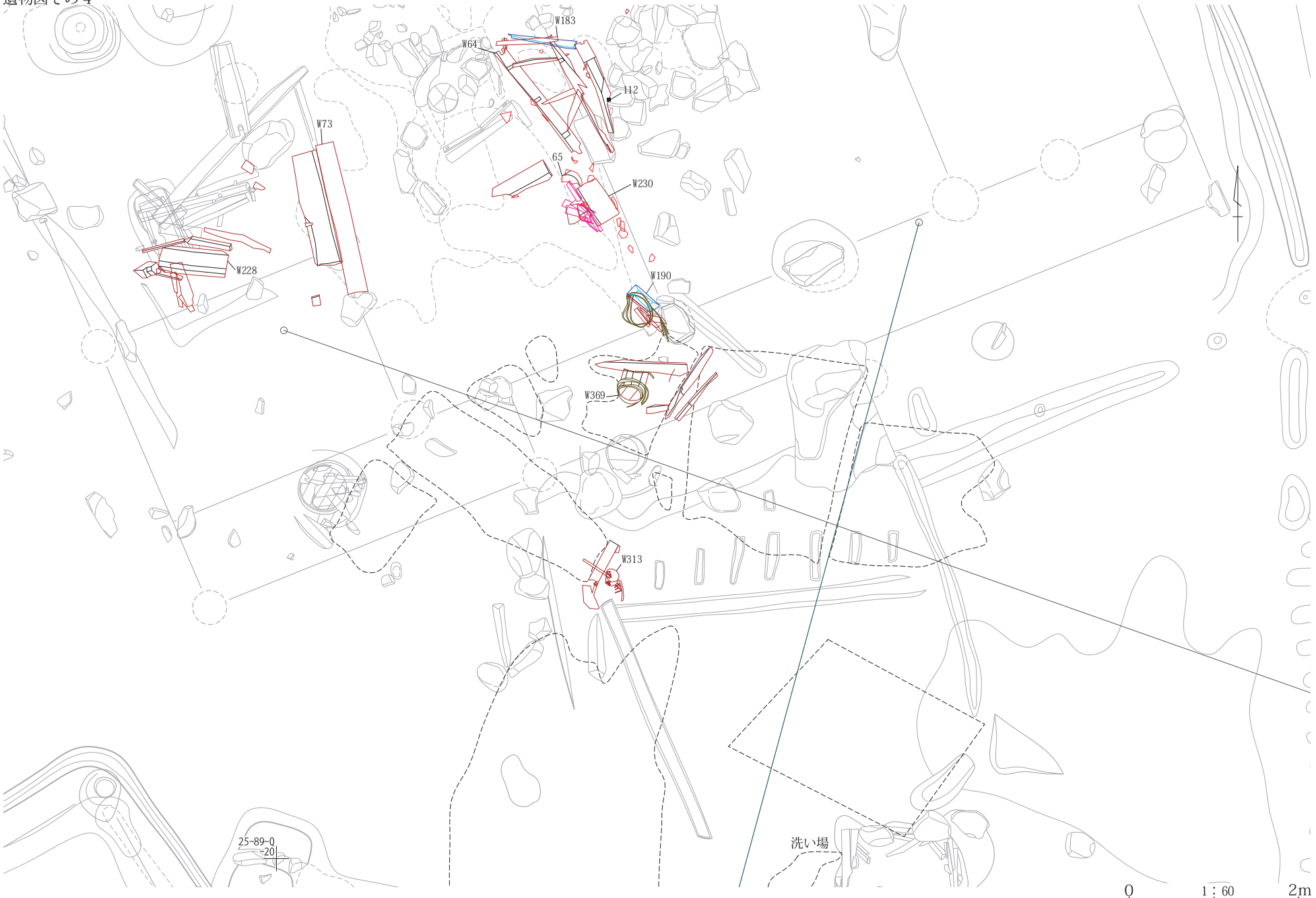
第240図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図（１）



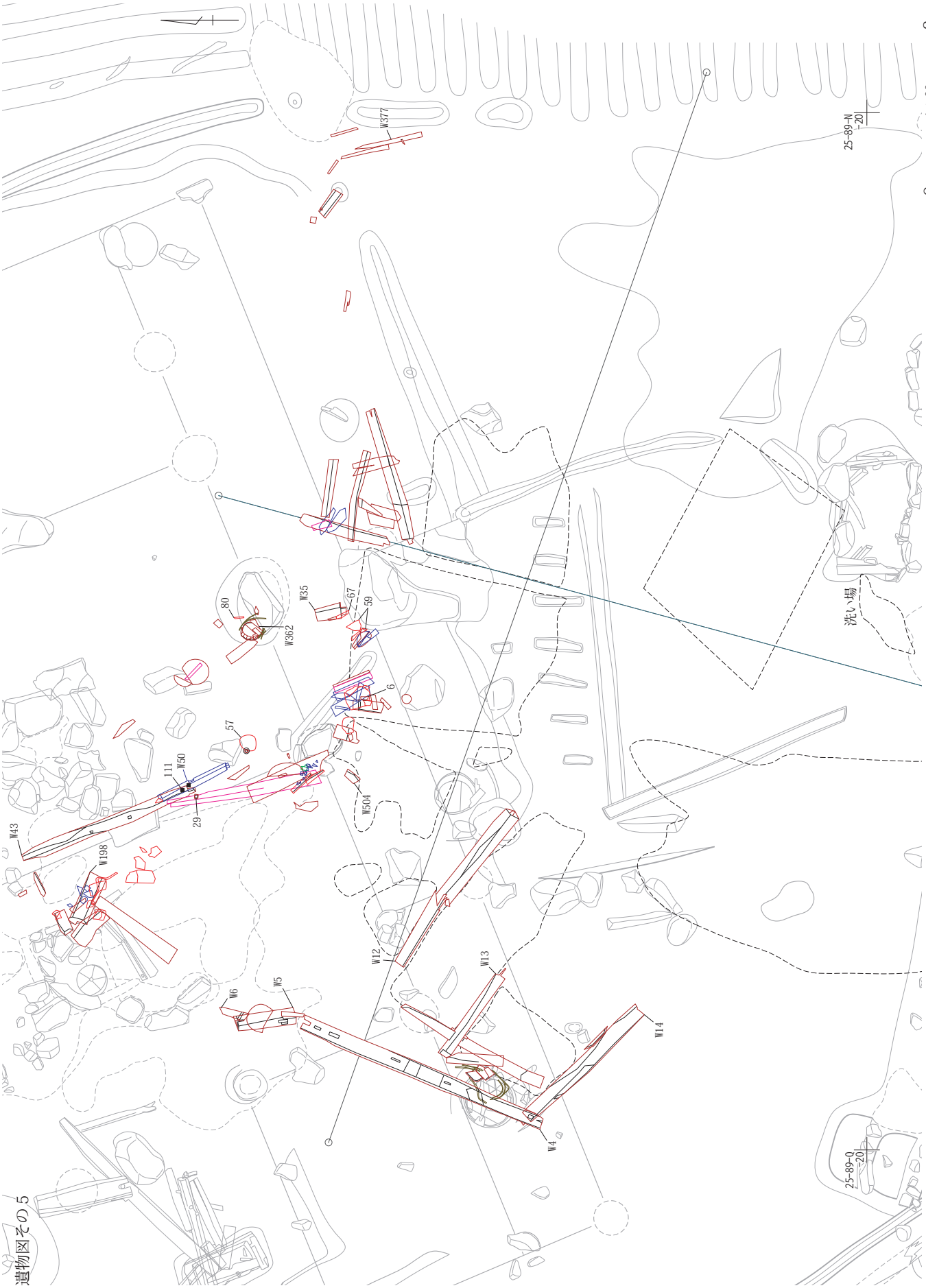
第241図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図（２）

第242図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図（３）

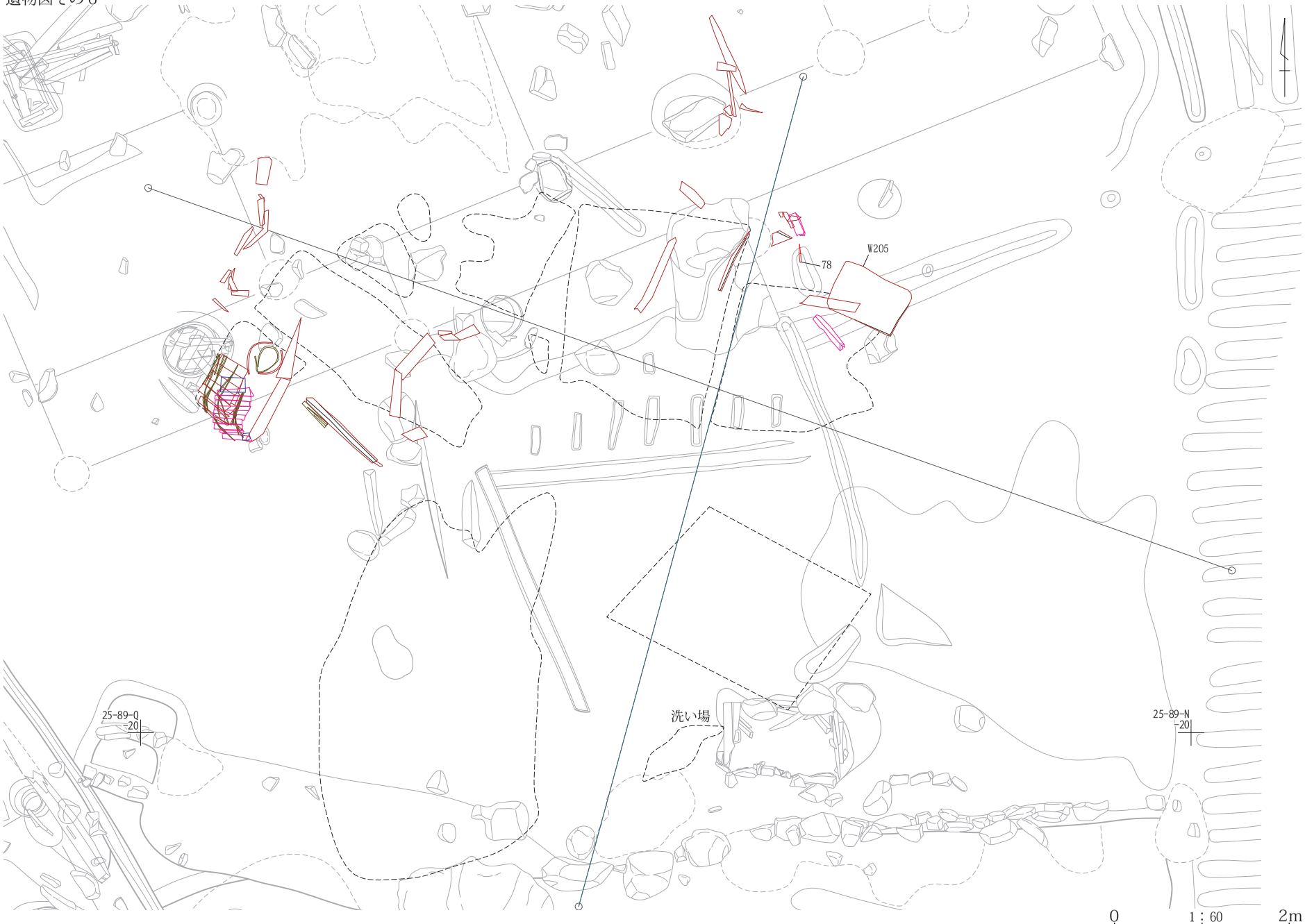
遺物図その４



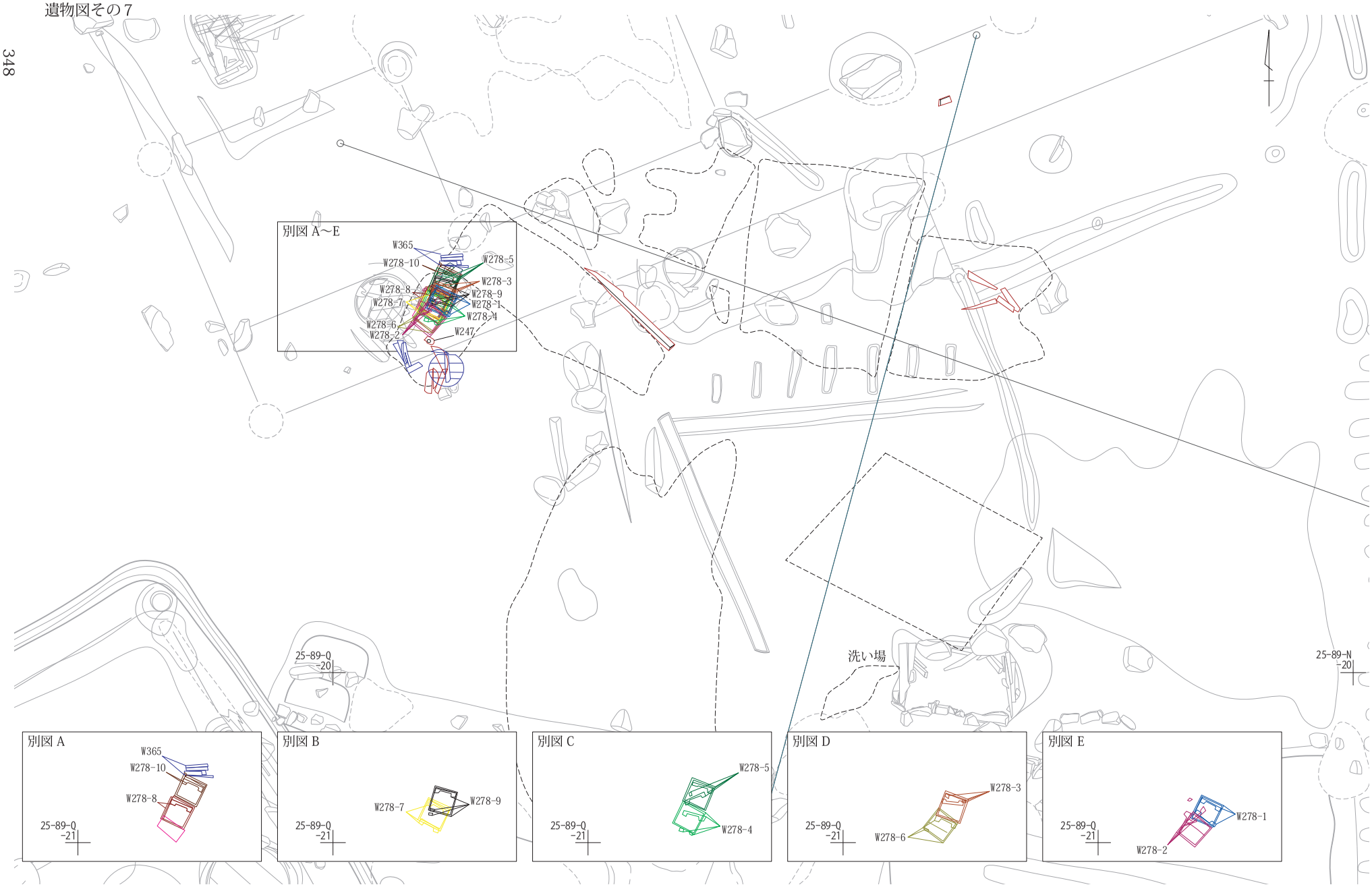
第243図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図（４）



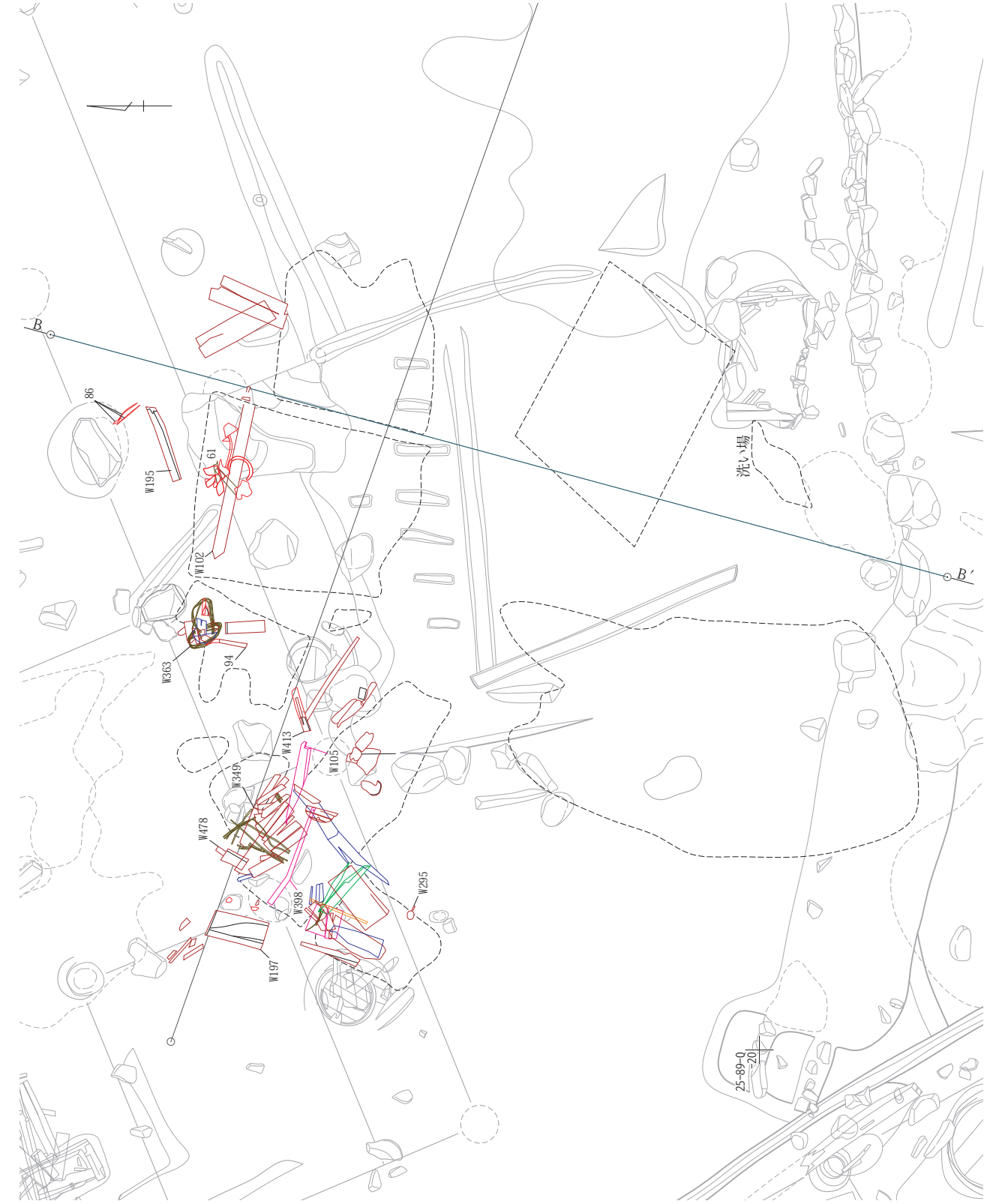
第244図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図（５）



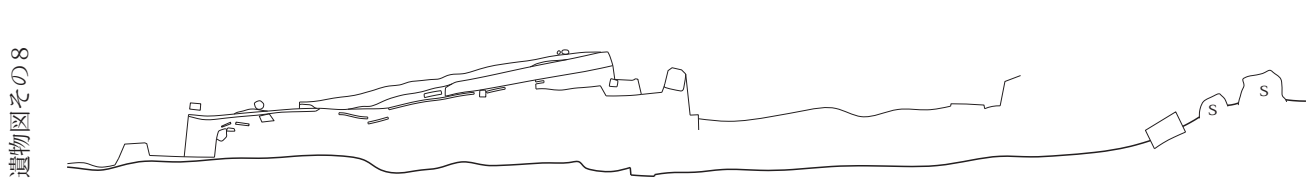
第245図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図（６）



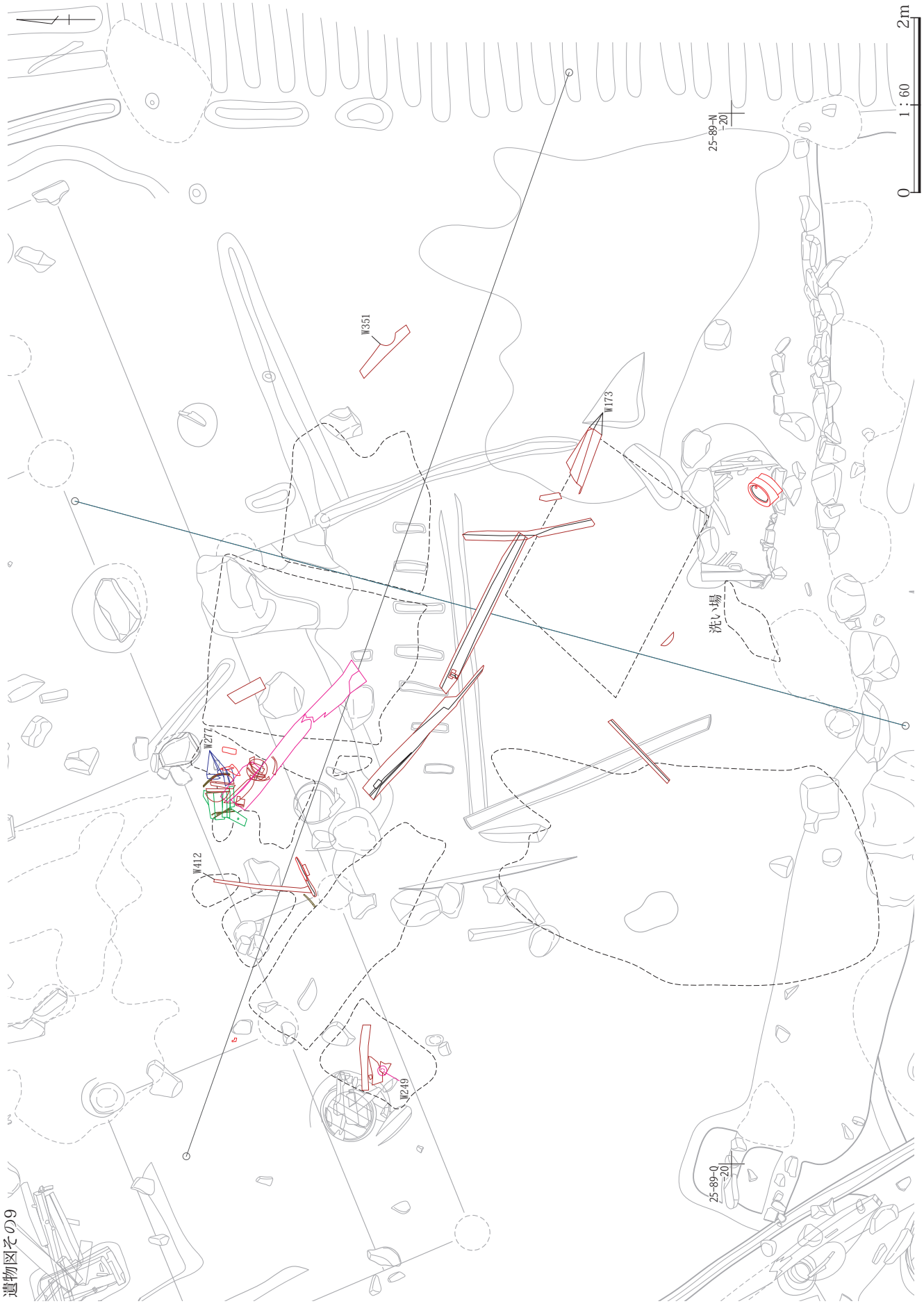
第246図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図（７）



第247図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図（８）

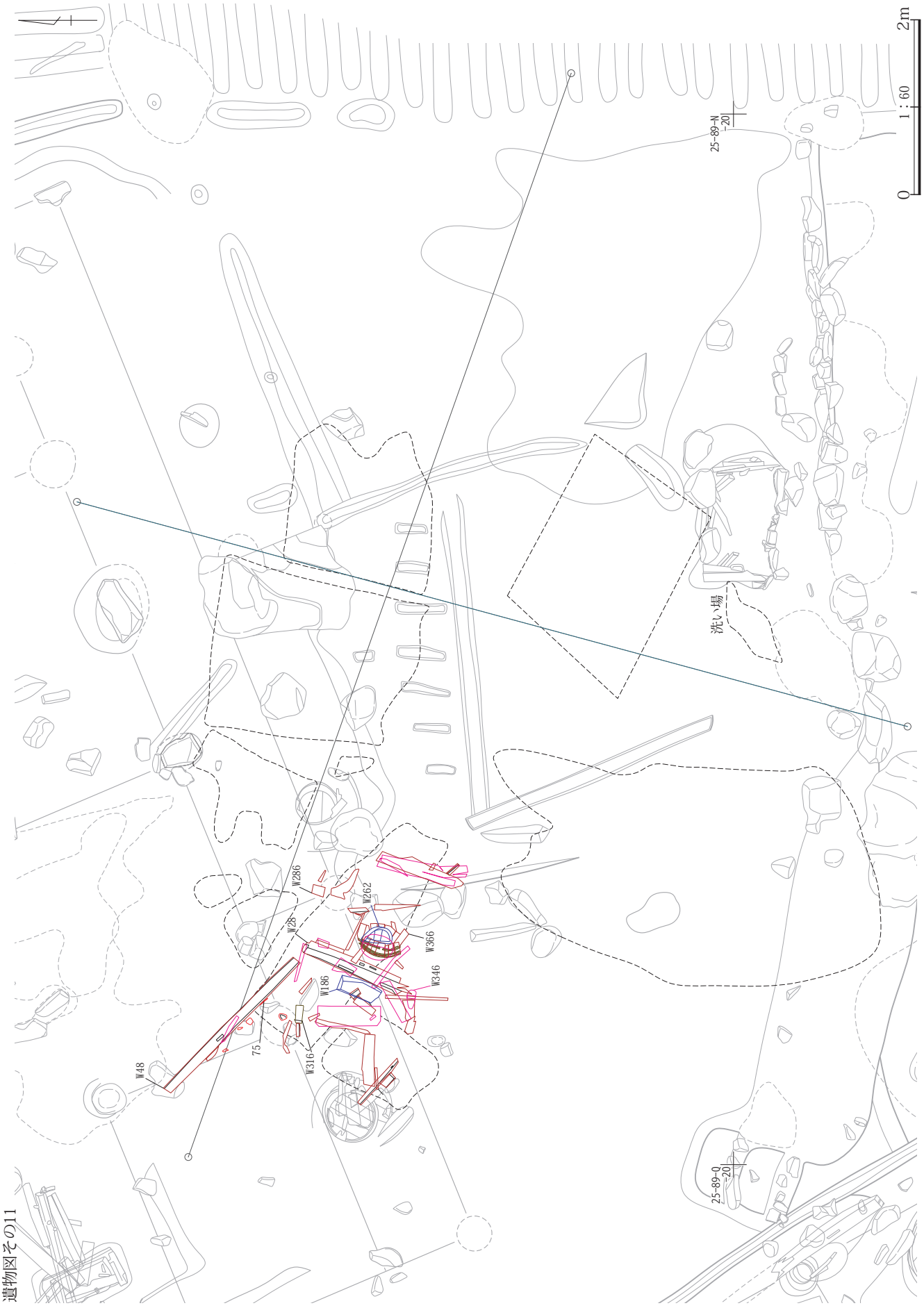


遺物図その８

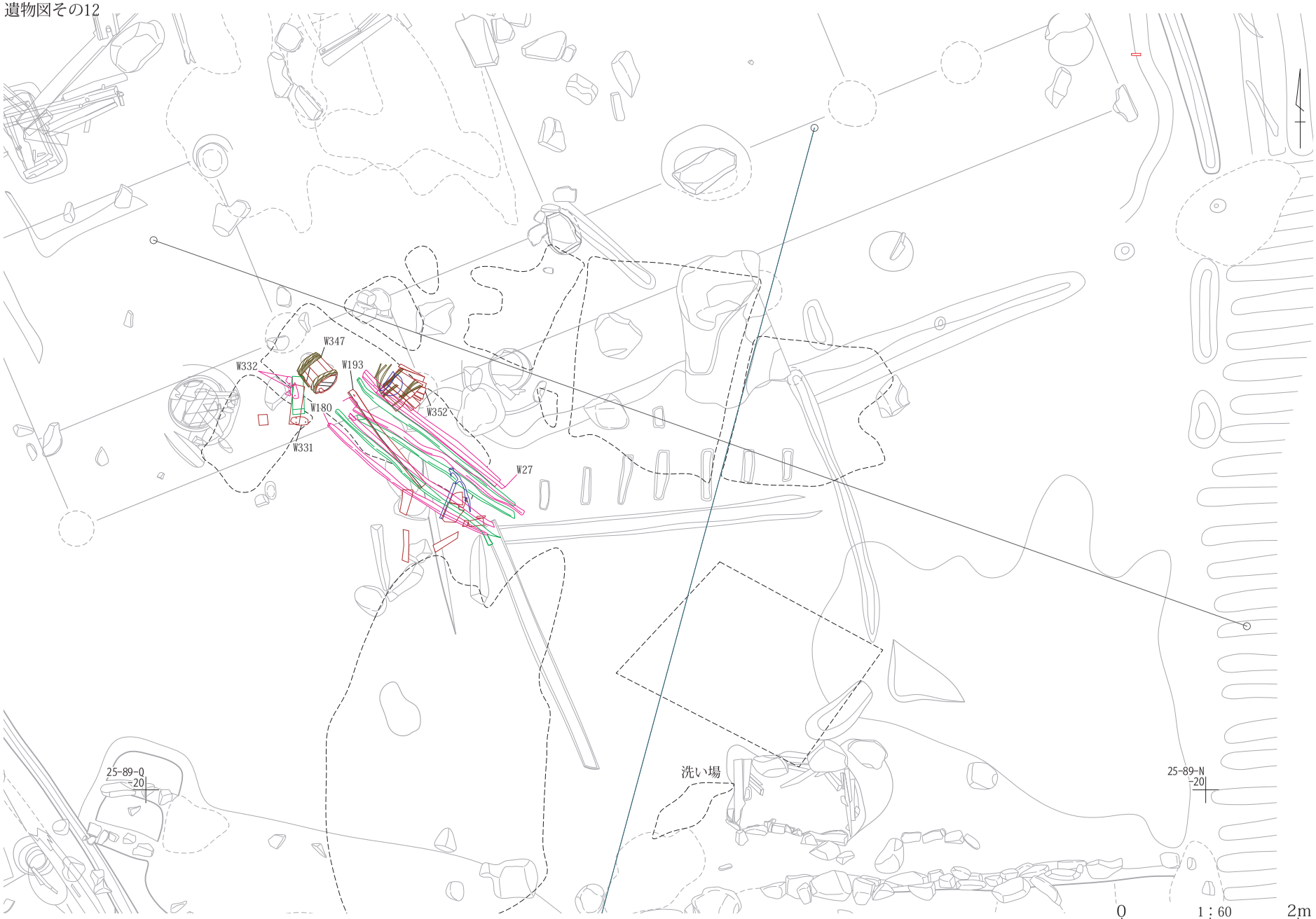


第248図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図（９）

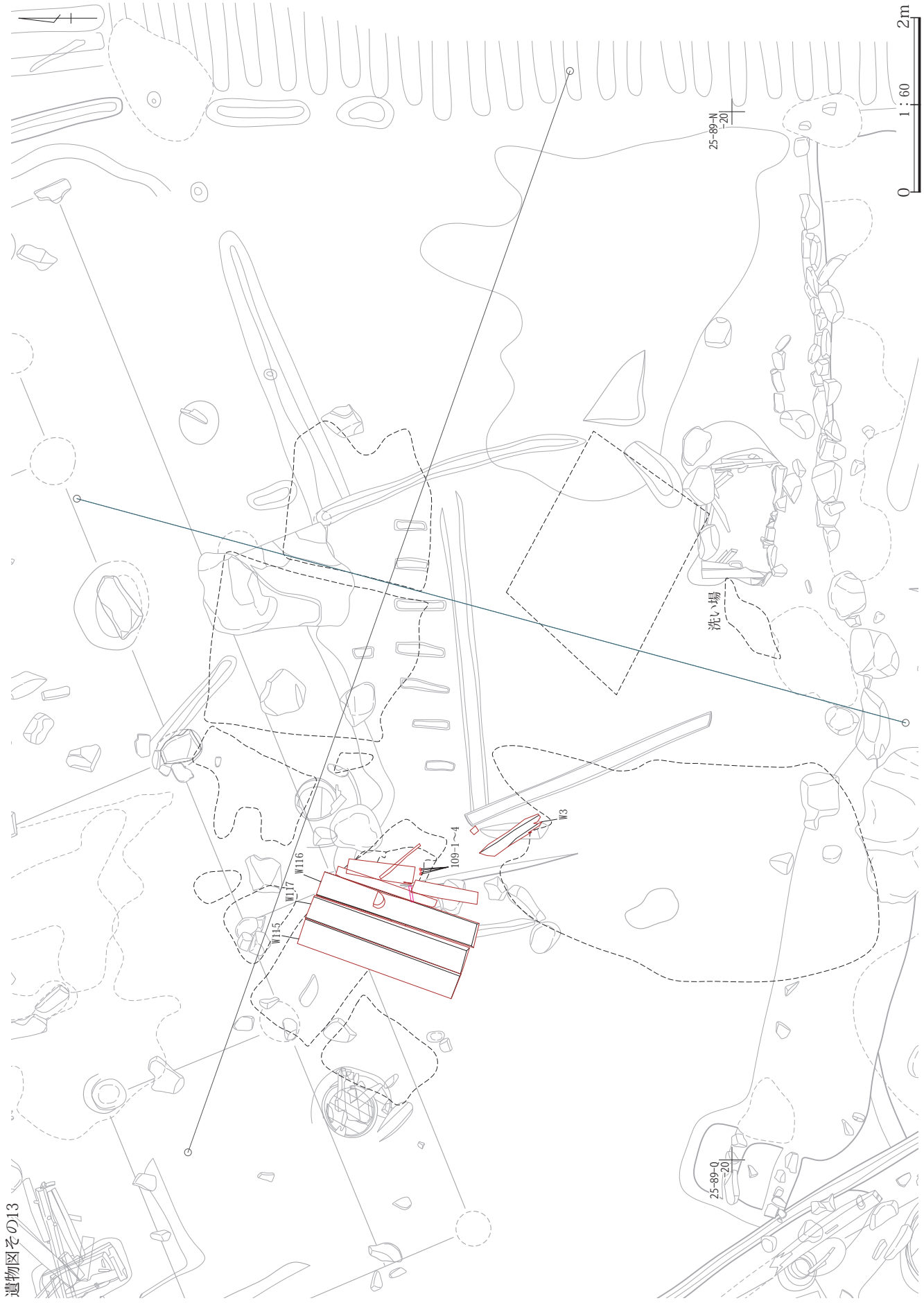
第249図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(10)



第250図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(11)

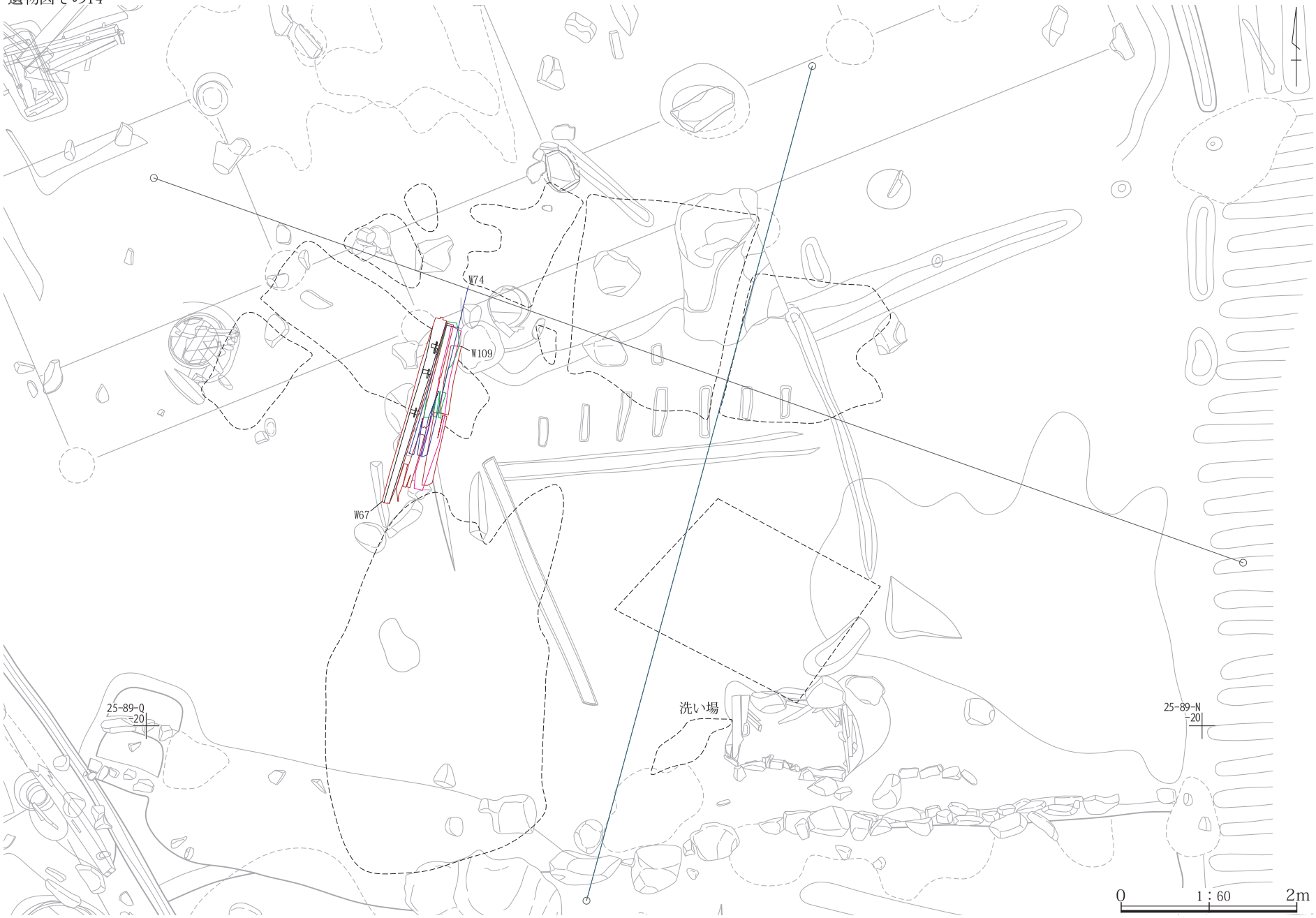


第251図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(12)



第252図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(13)

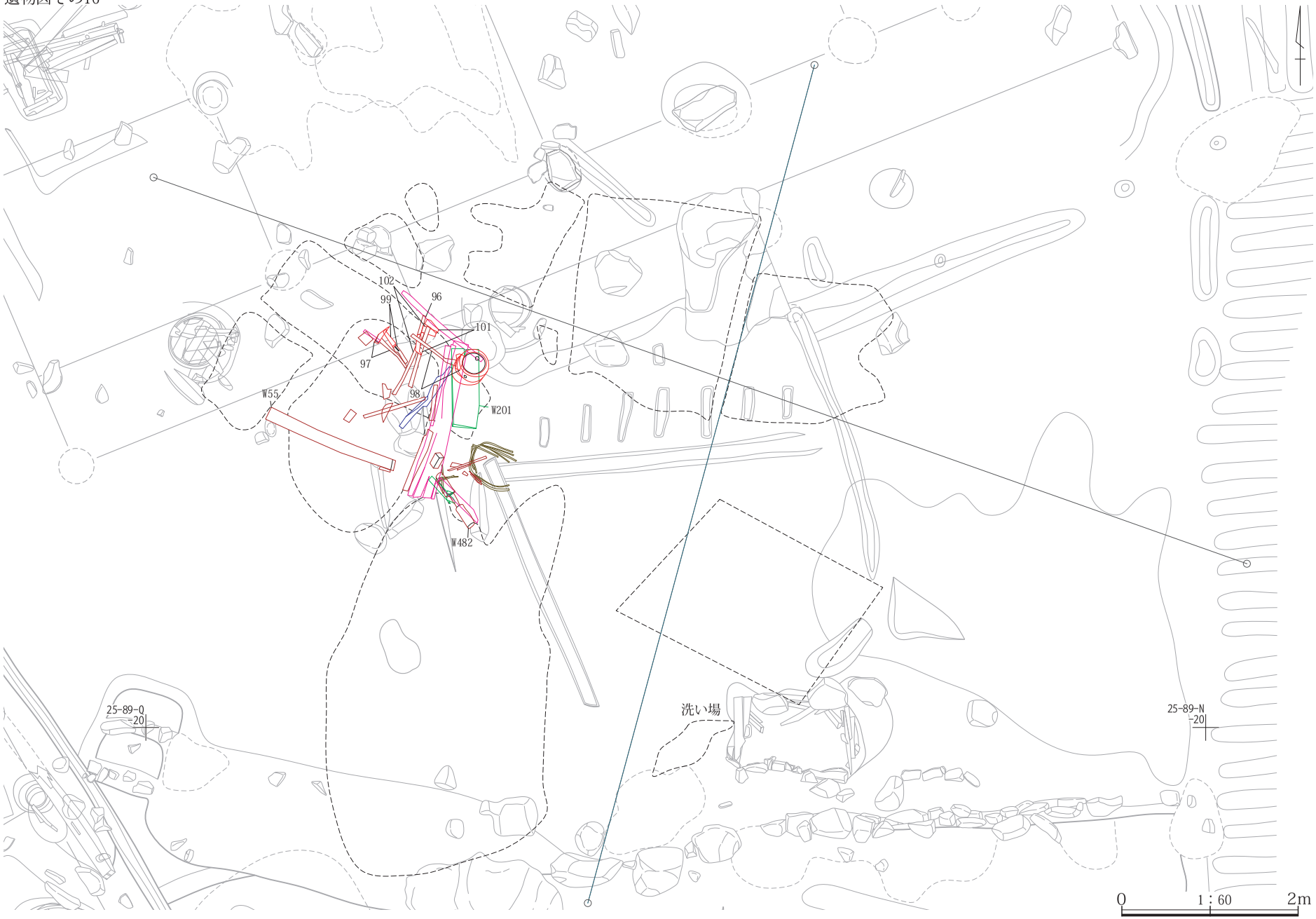
遺物図その13



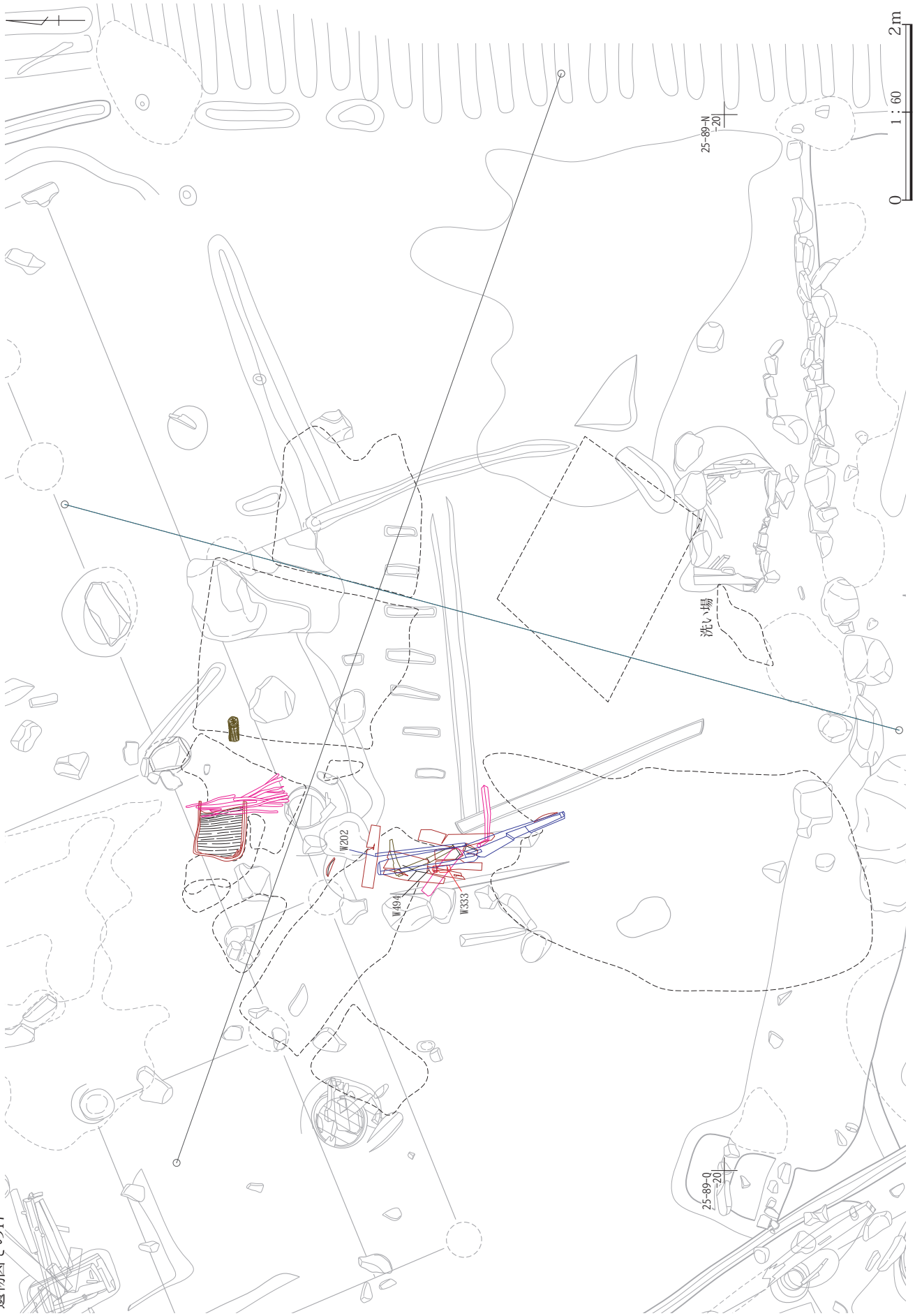
第253図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(14)

第254図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(15)

遺物図その15

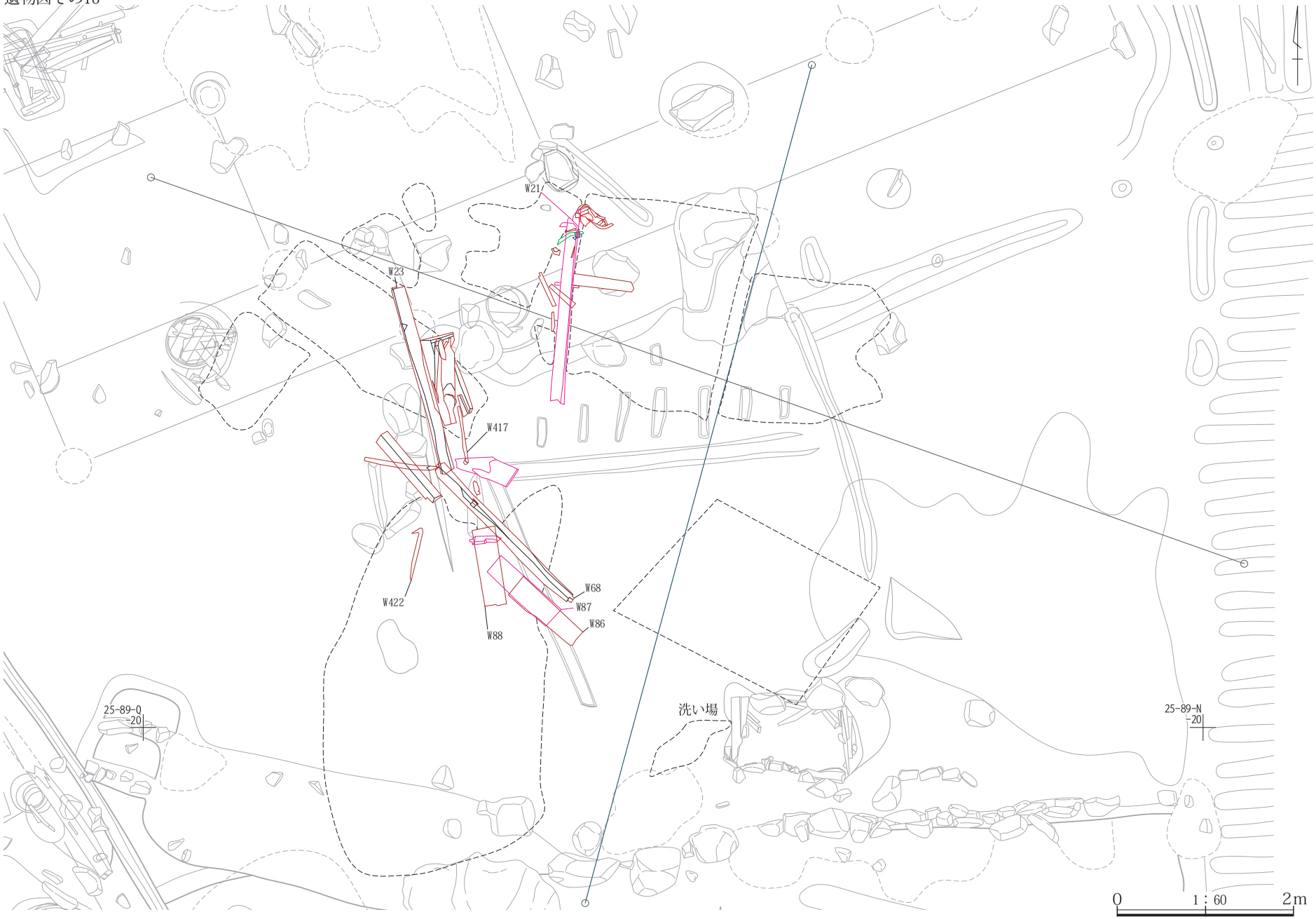


第255図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(16)



第256図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(17)

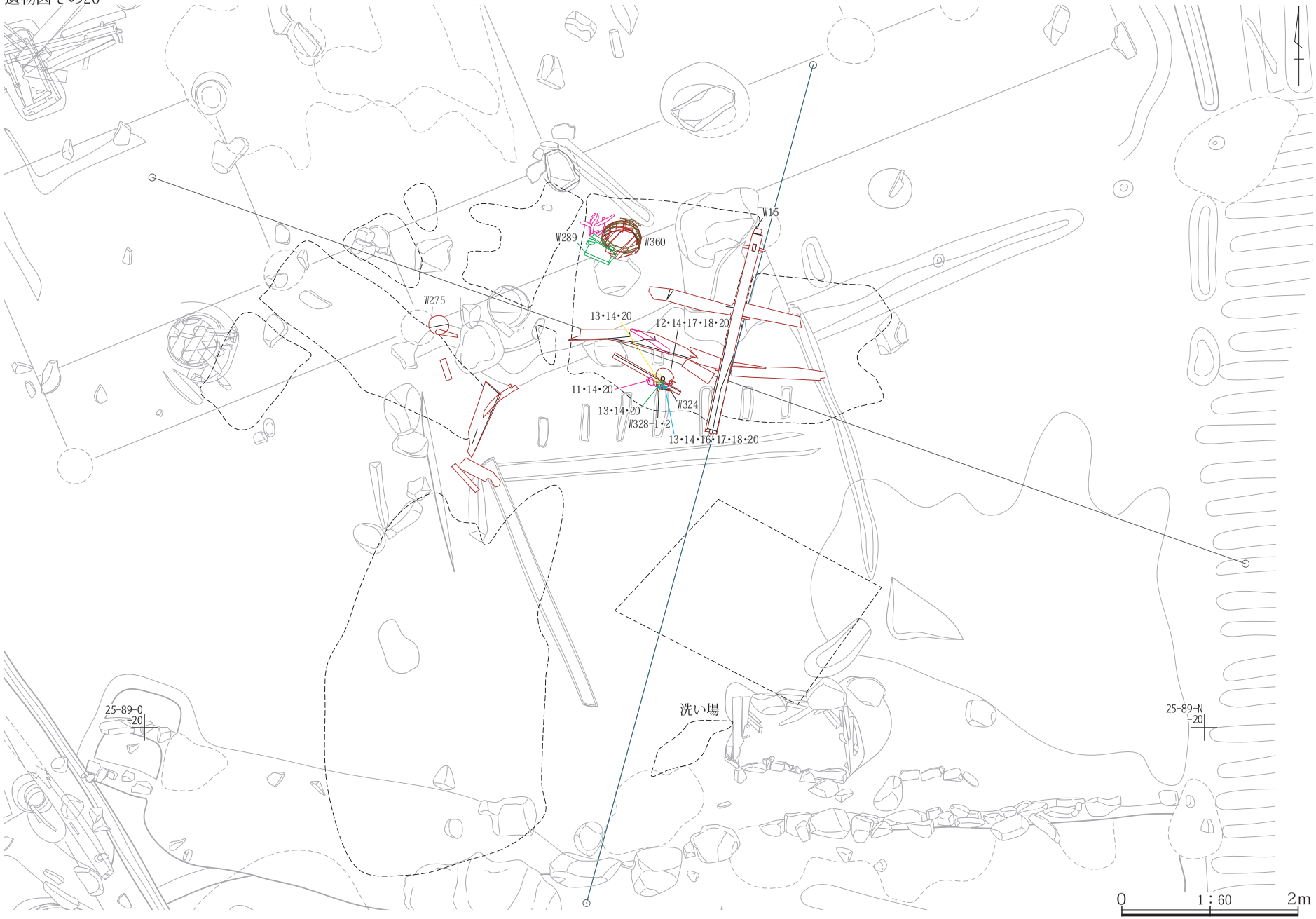
遺物図その17



第257図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(18)

第258図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(19)

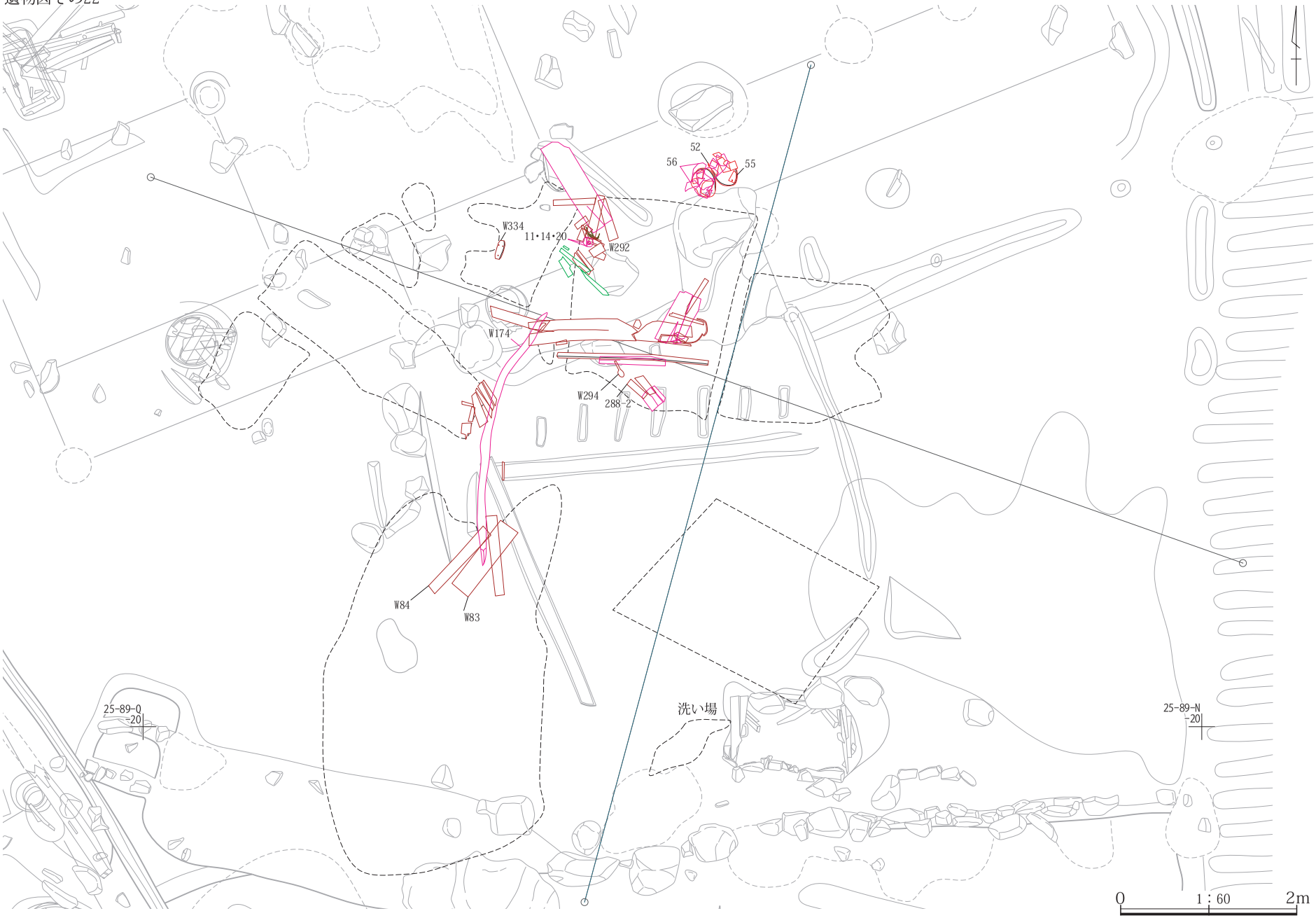
遺物図その19



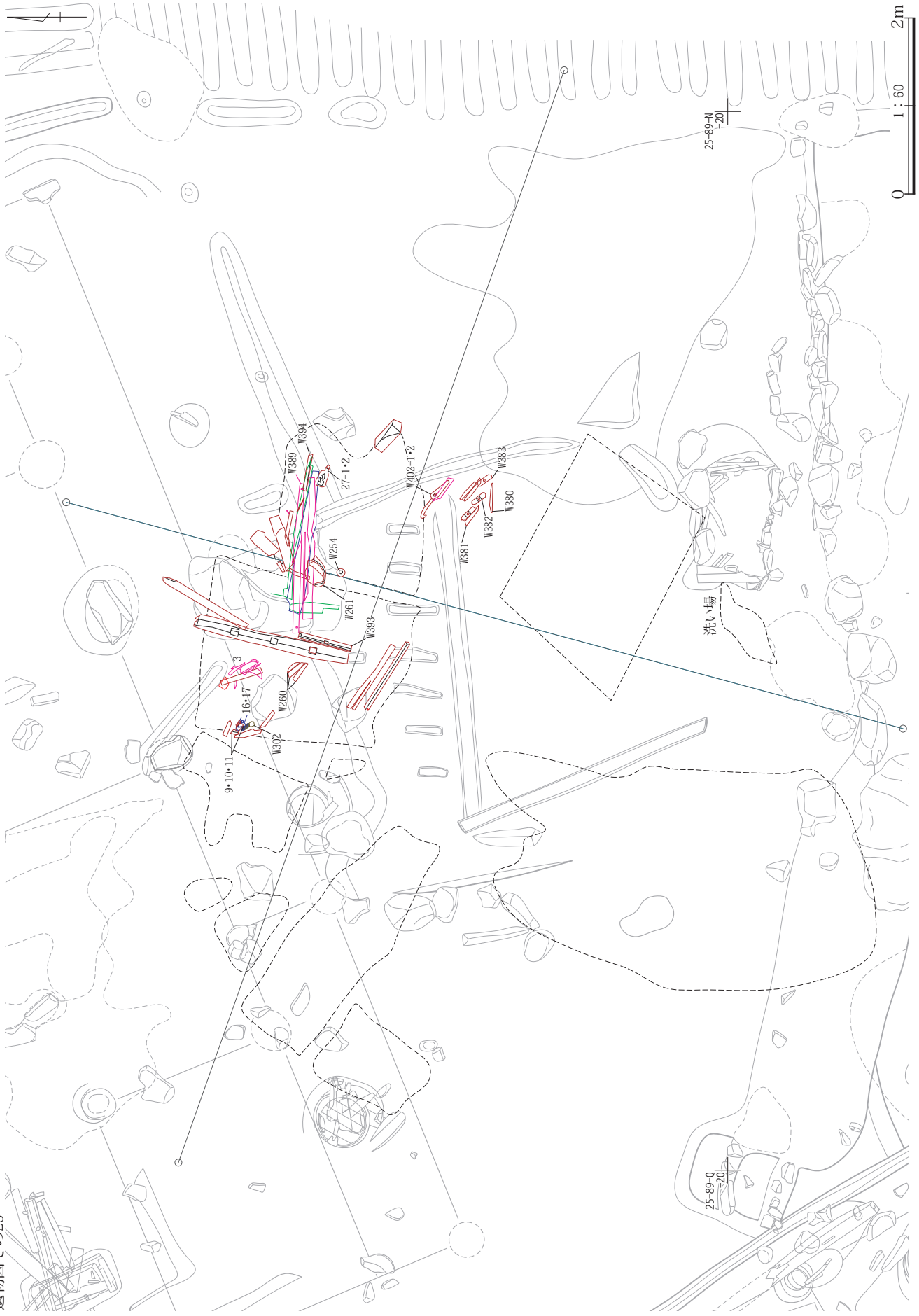
第259図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(20)

遺物図その21

第260図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(21)

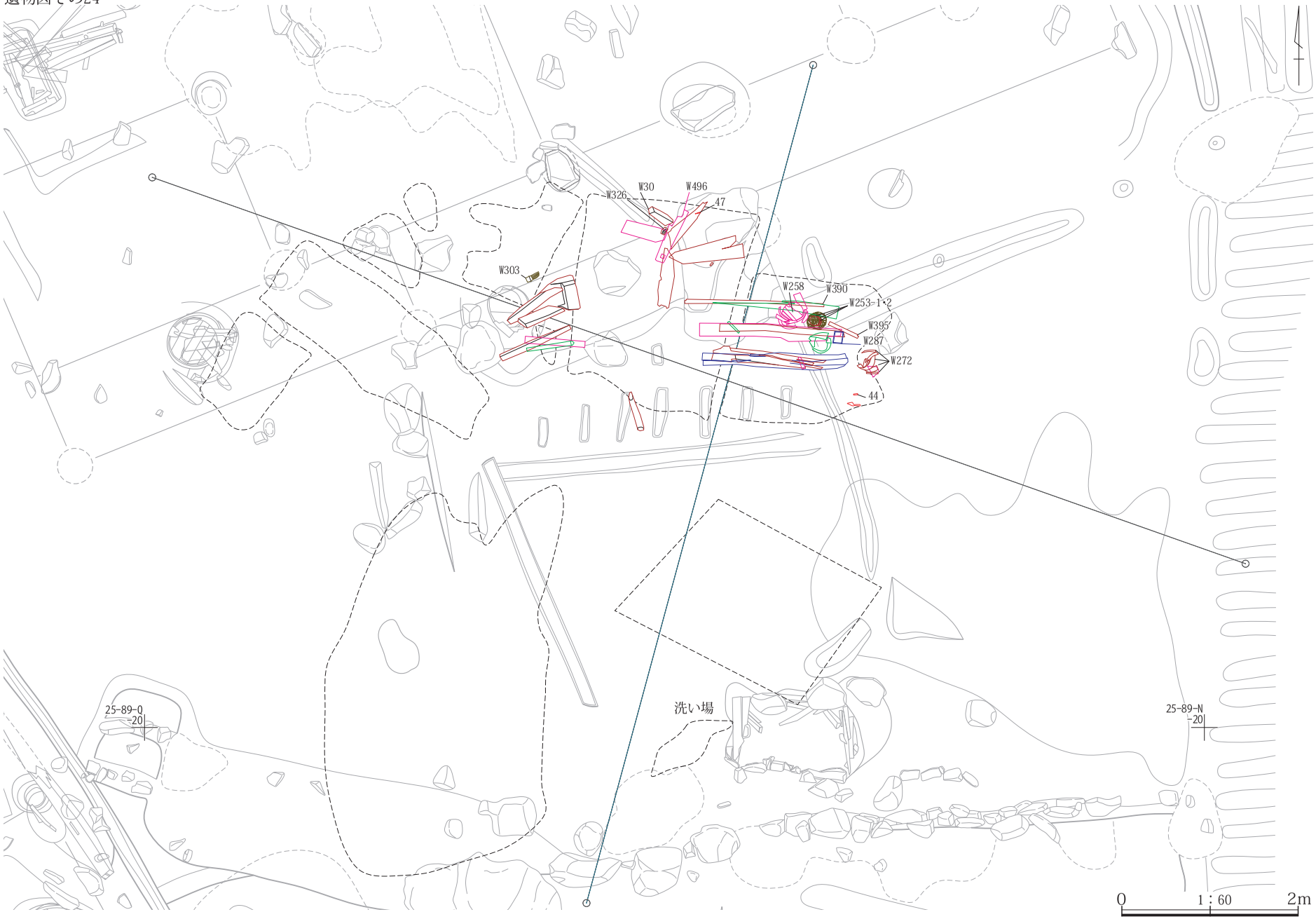


第261図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(22)



第262図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(23)

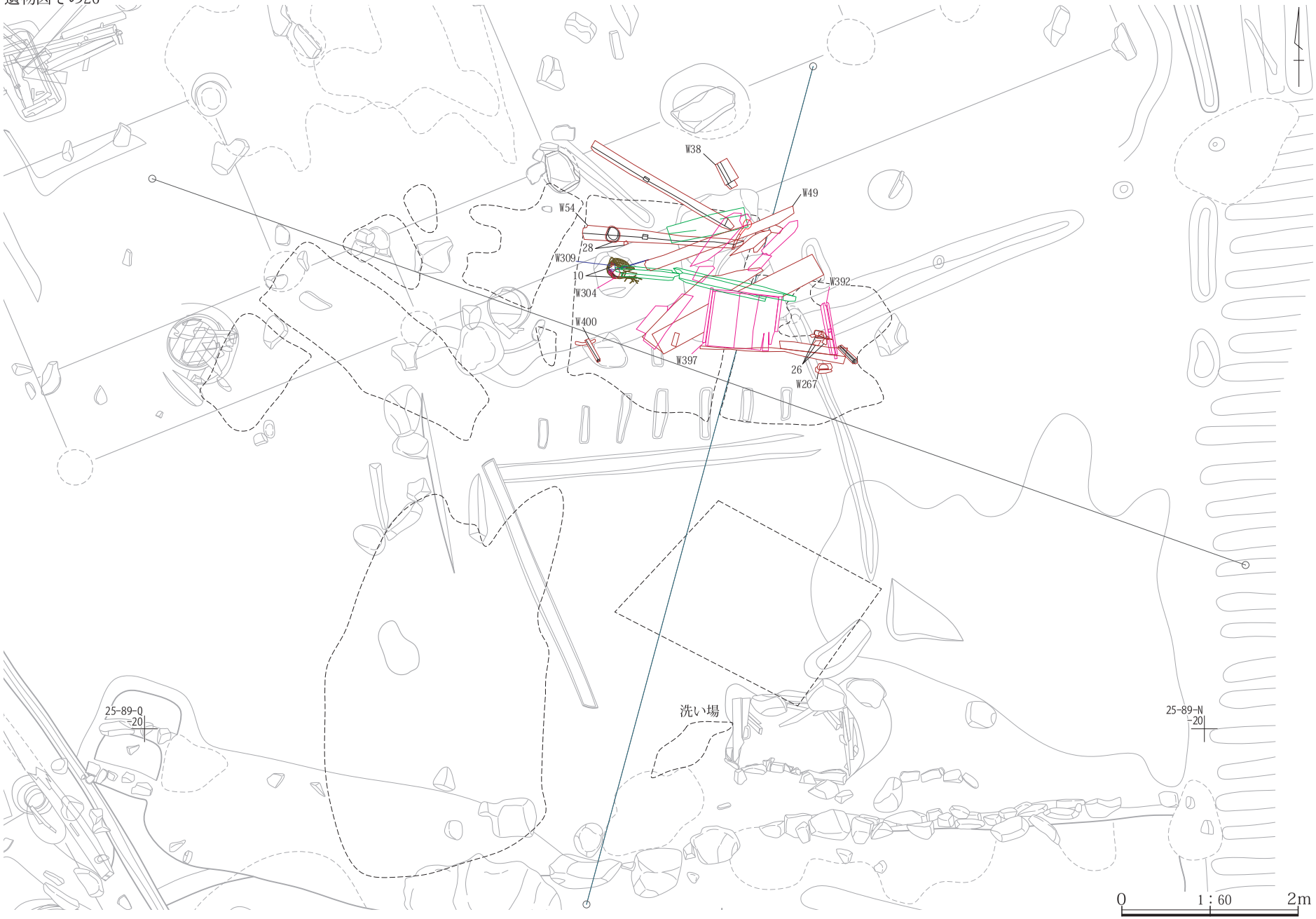
遺物図その23



第263図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(24)

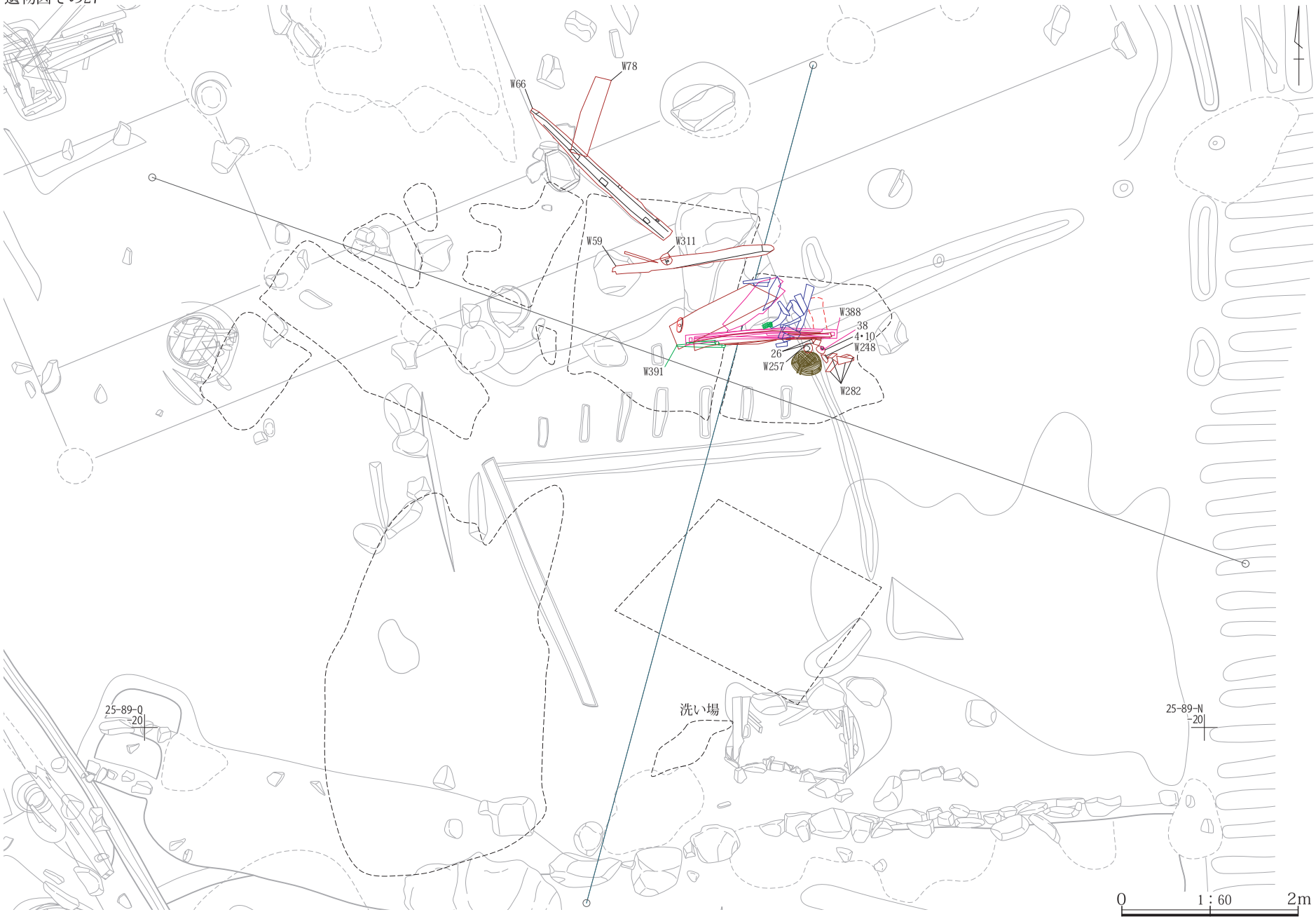
遺物図その25

第264図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(25)

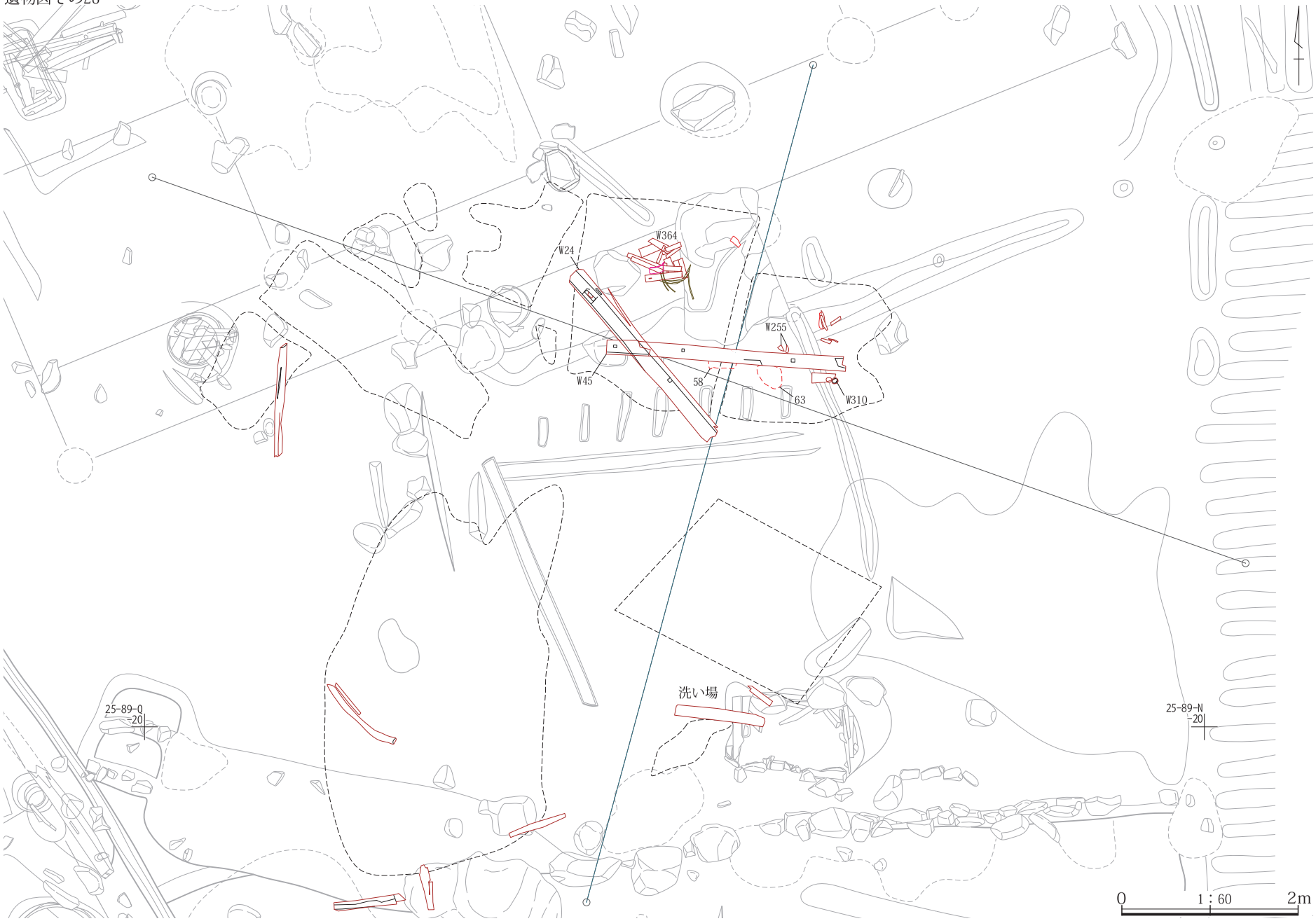


第265図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(26)

遺物図その27

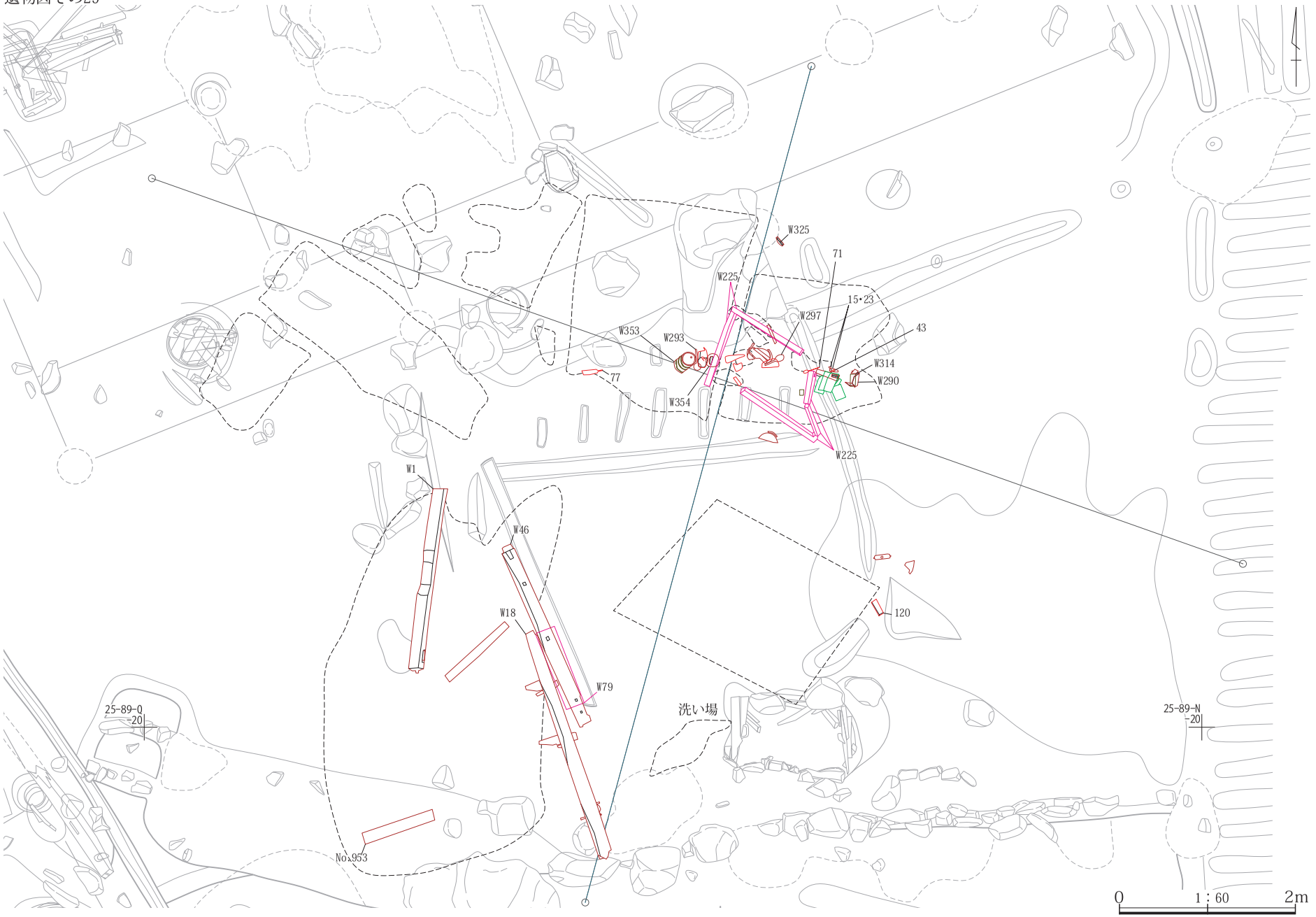


第266図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(27)



第267図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(28)

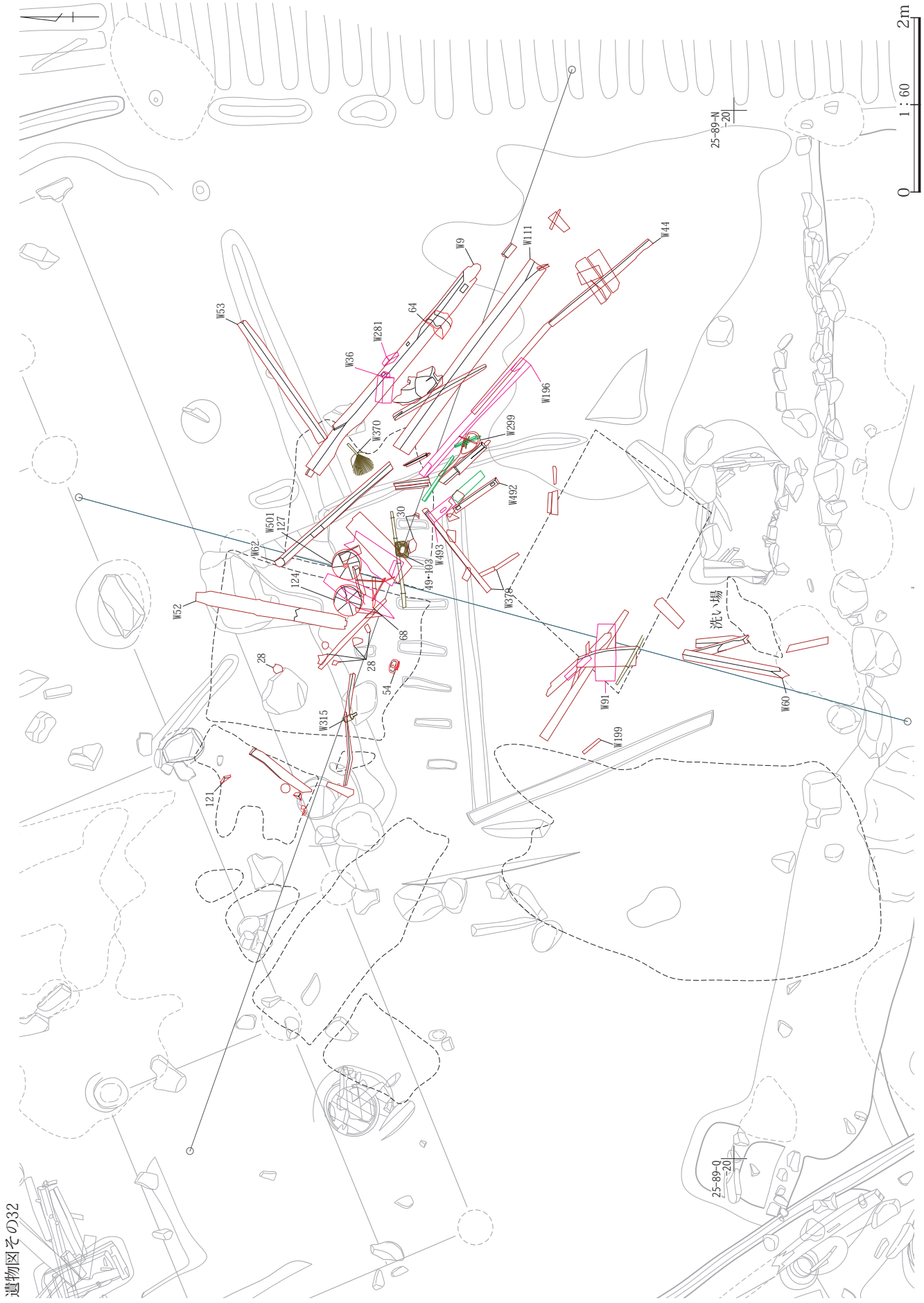
遺物図その29



第268図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(29)

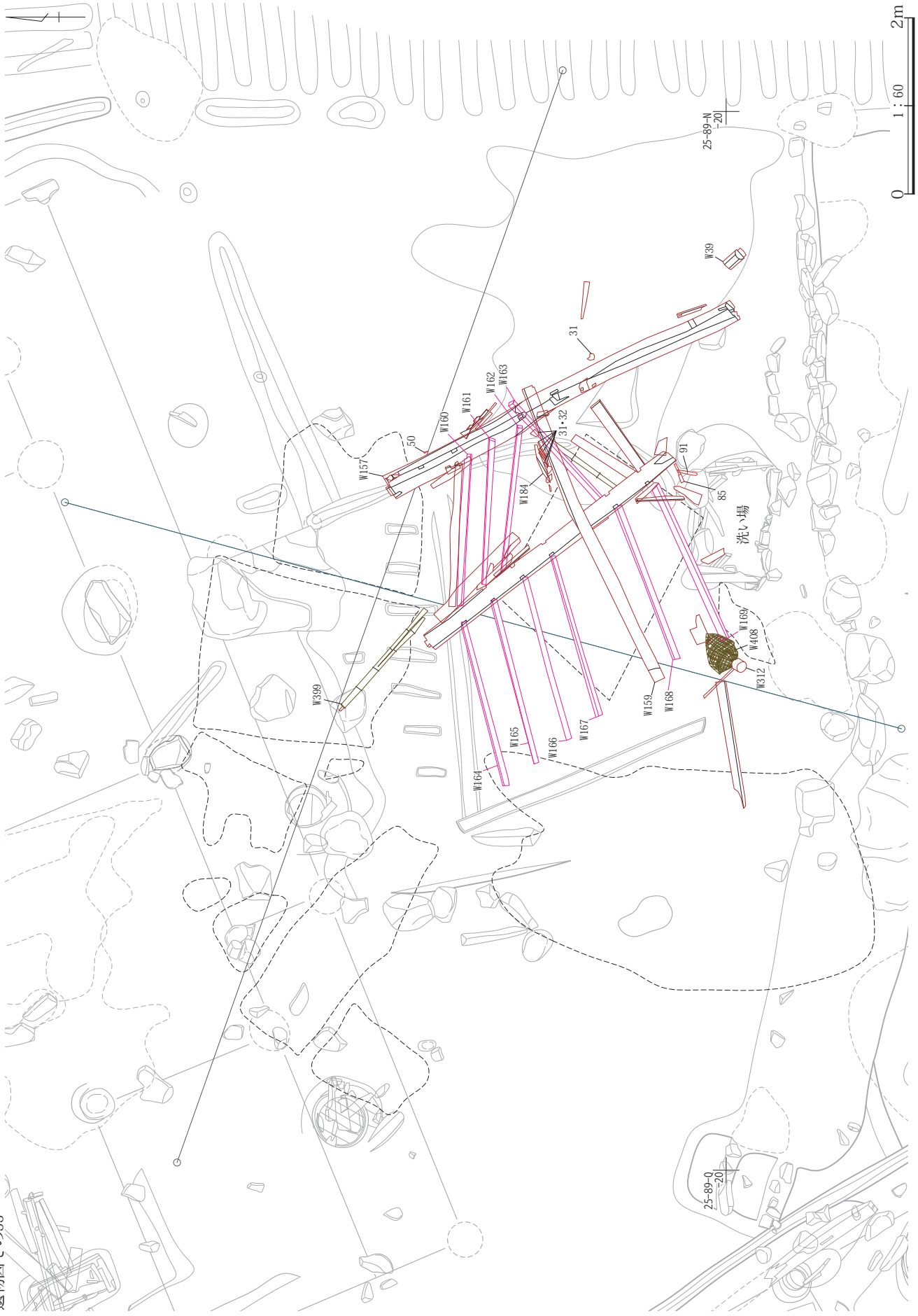
第269図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(30)

第270図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(31)



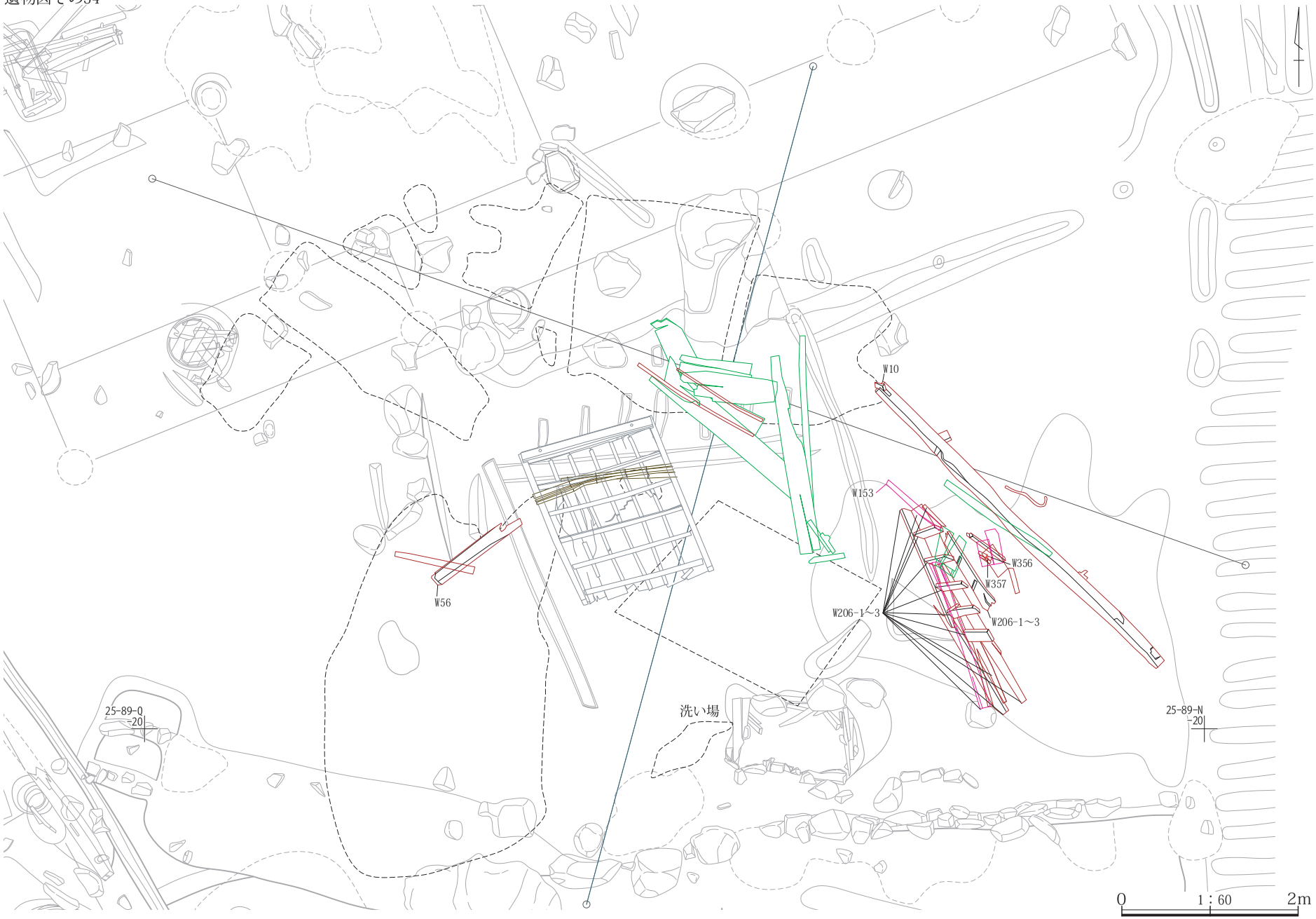
遺物図その32

第271図　5区15号屋敷　27号建物遺物出土図(32)



第272図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(33)

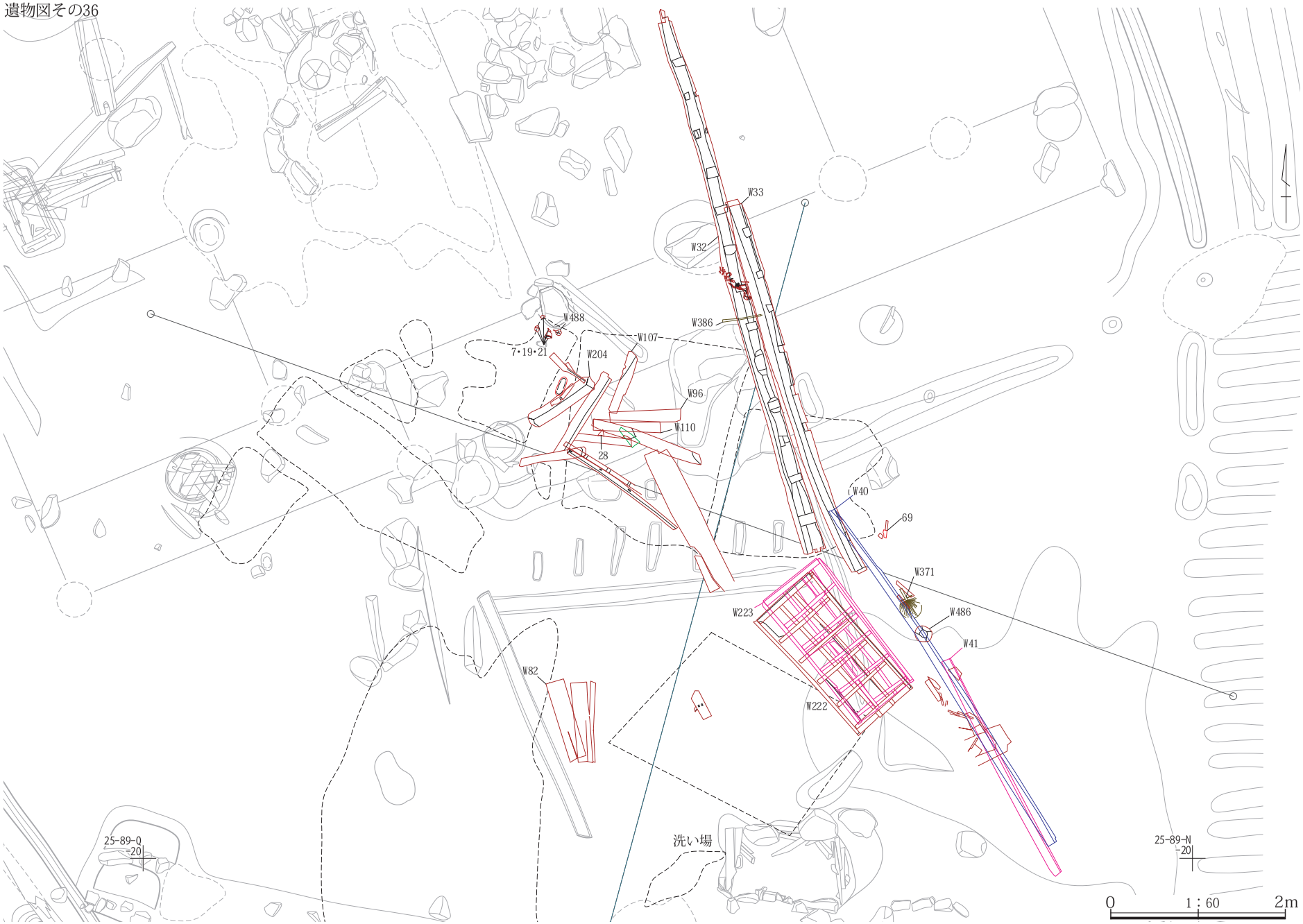
遺物図その33



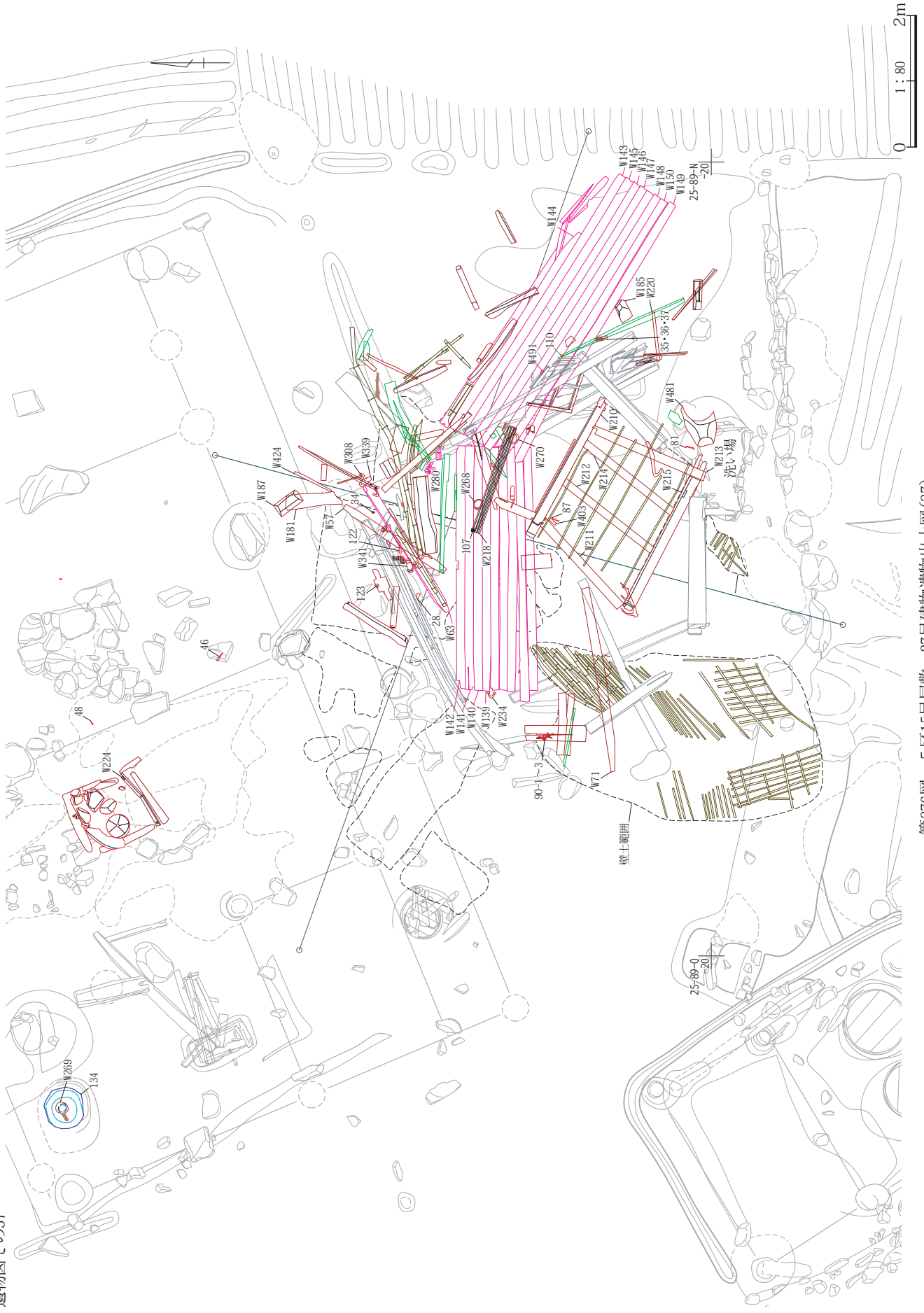
第273図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(34)

第274図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(35)

遺物図その35



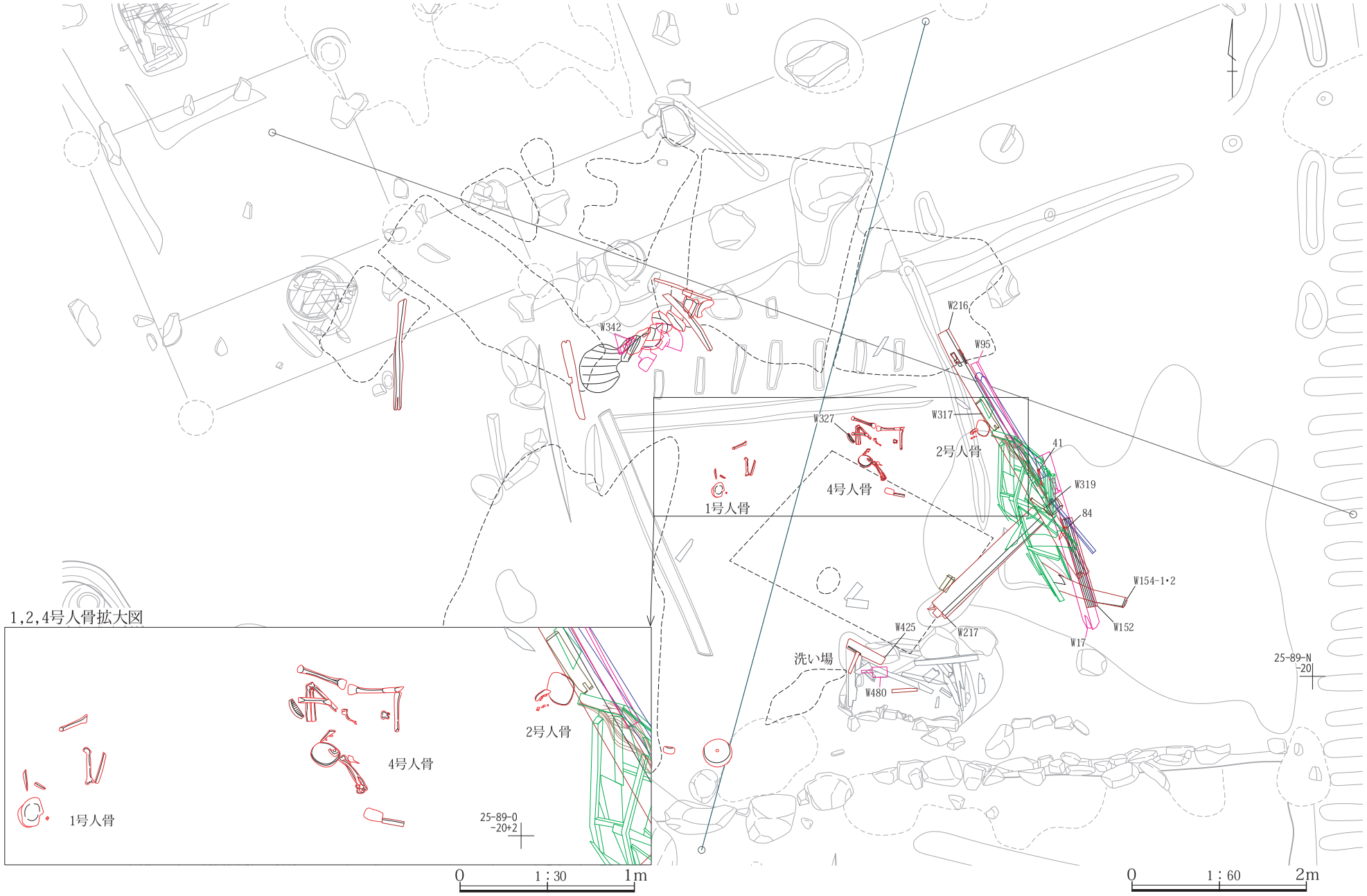
第275図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(36)



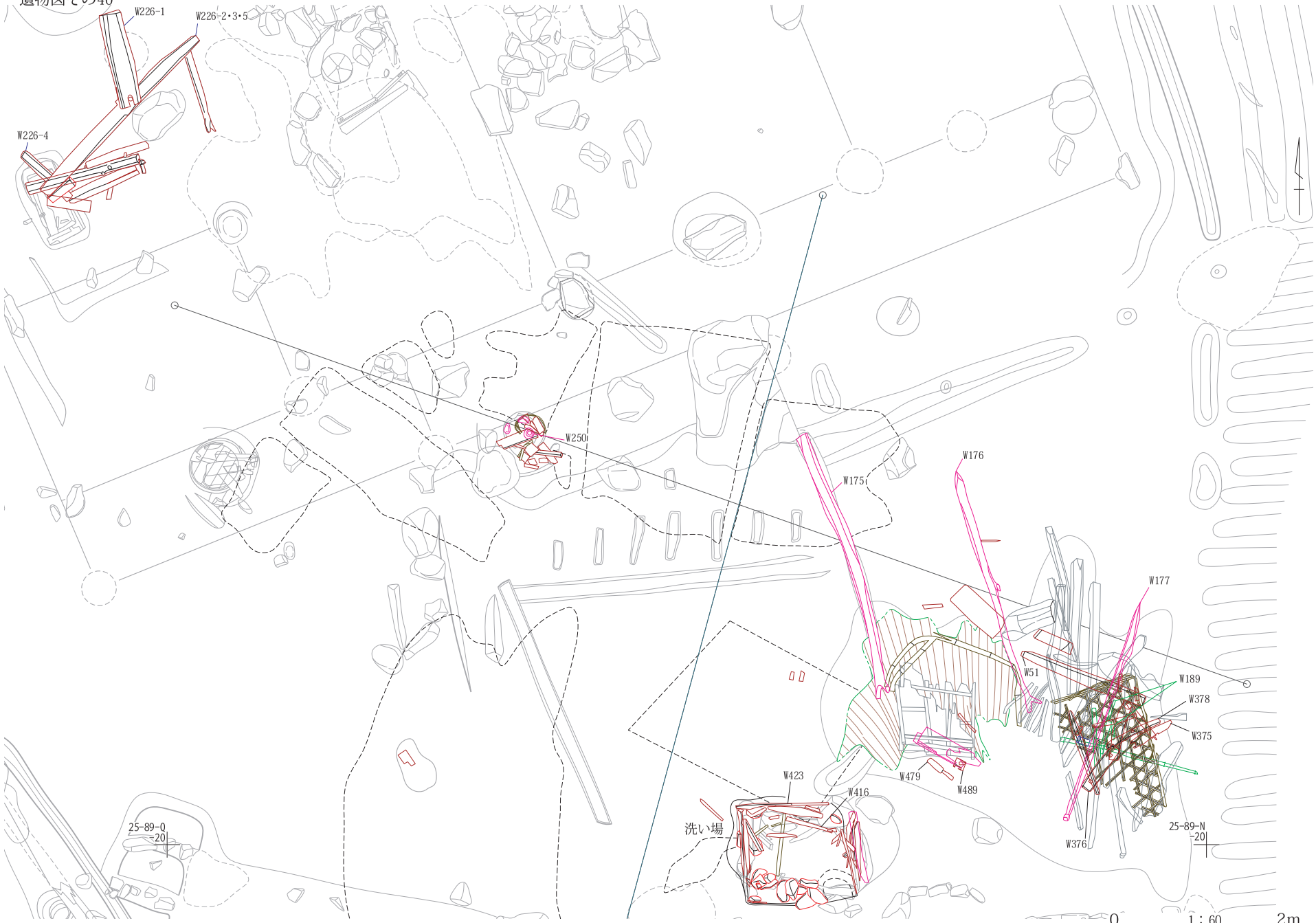
第276図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(37)

遺物図その37

第277図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(38)

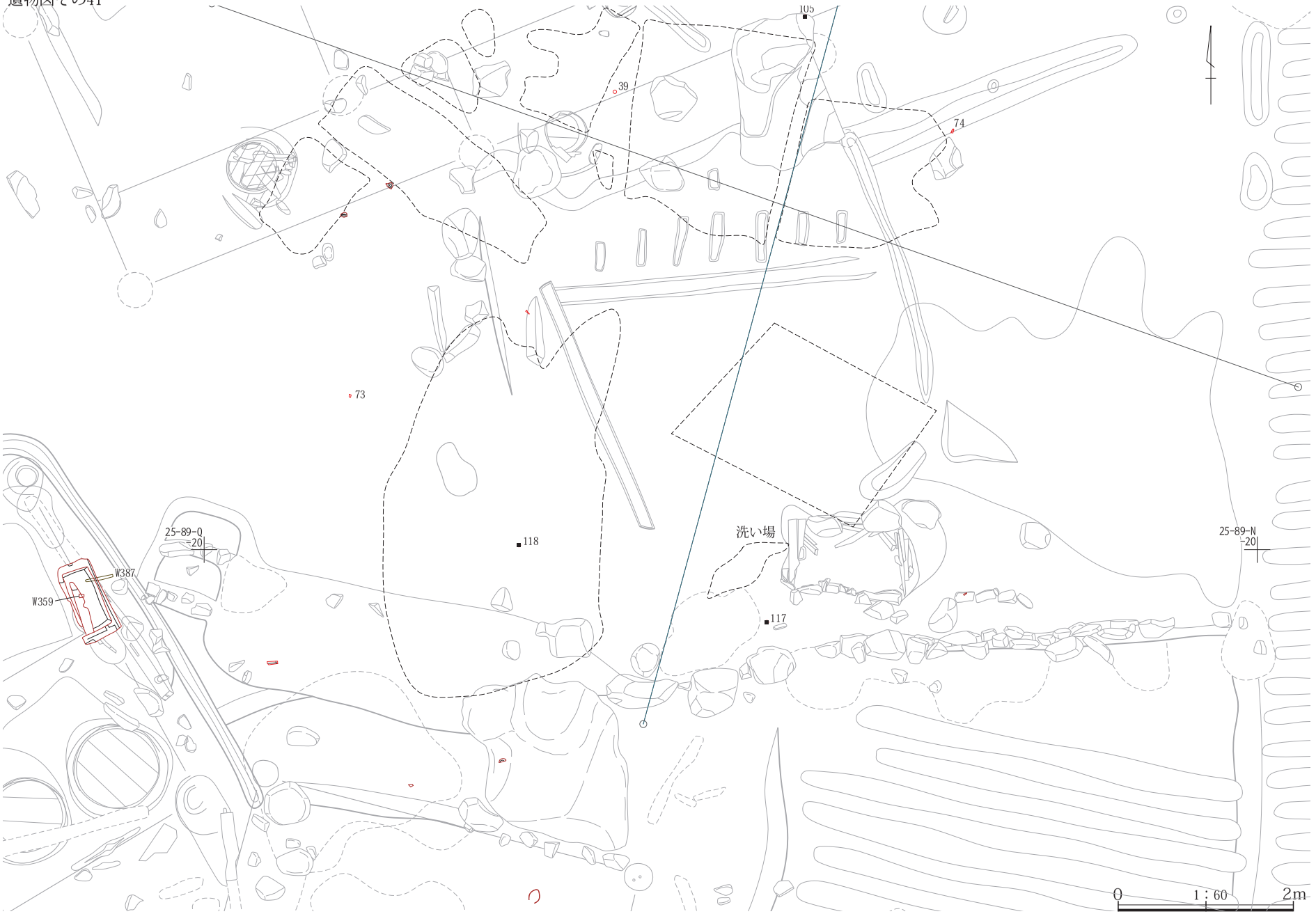


第278図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(39)



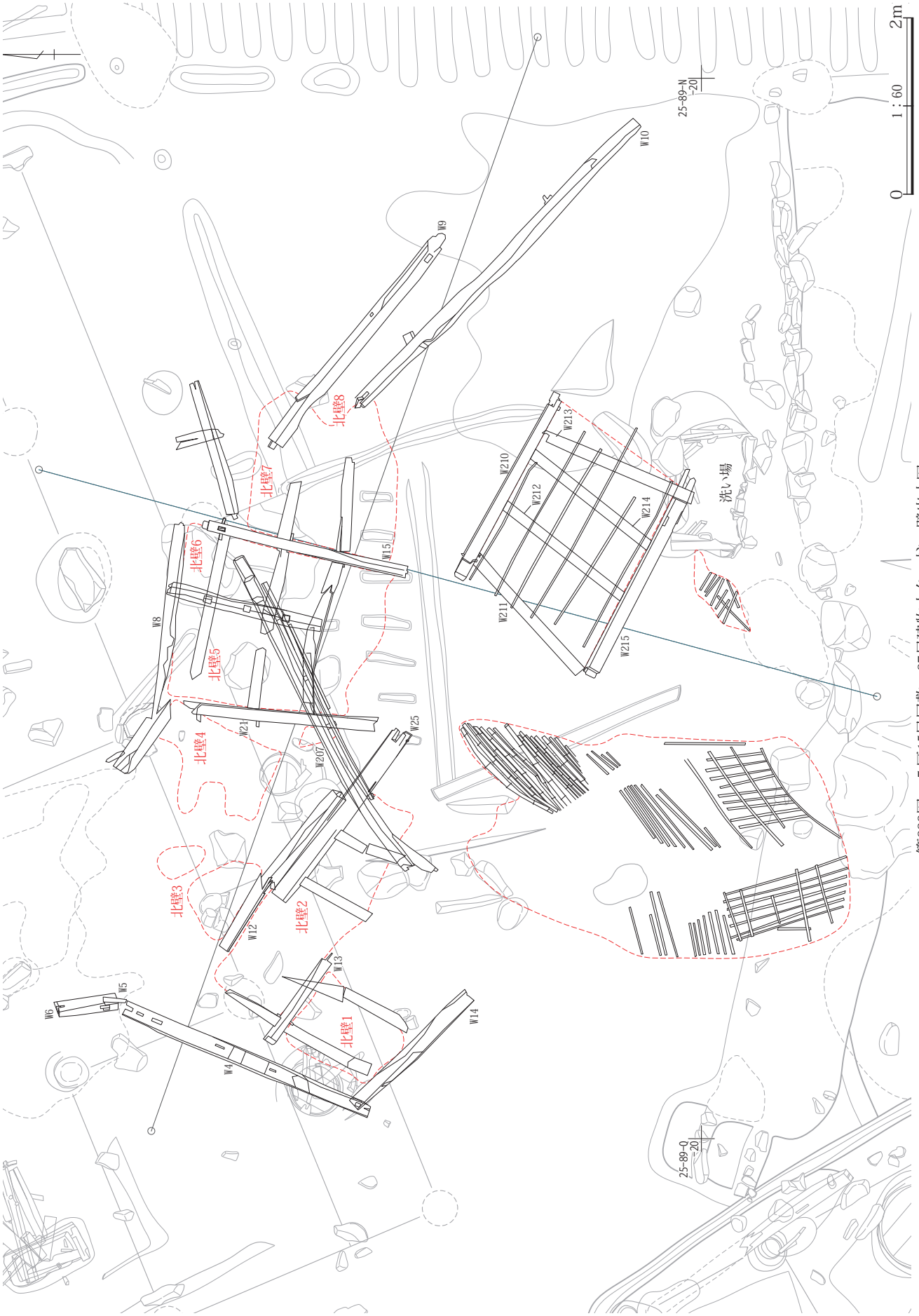
第279図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(40)

遺物図その41

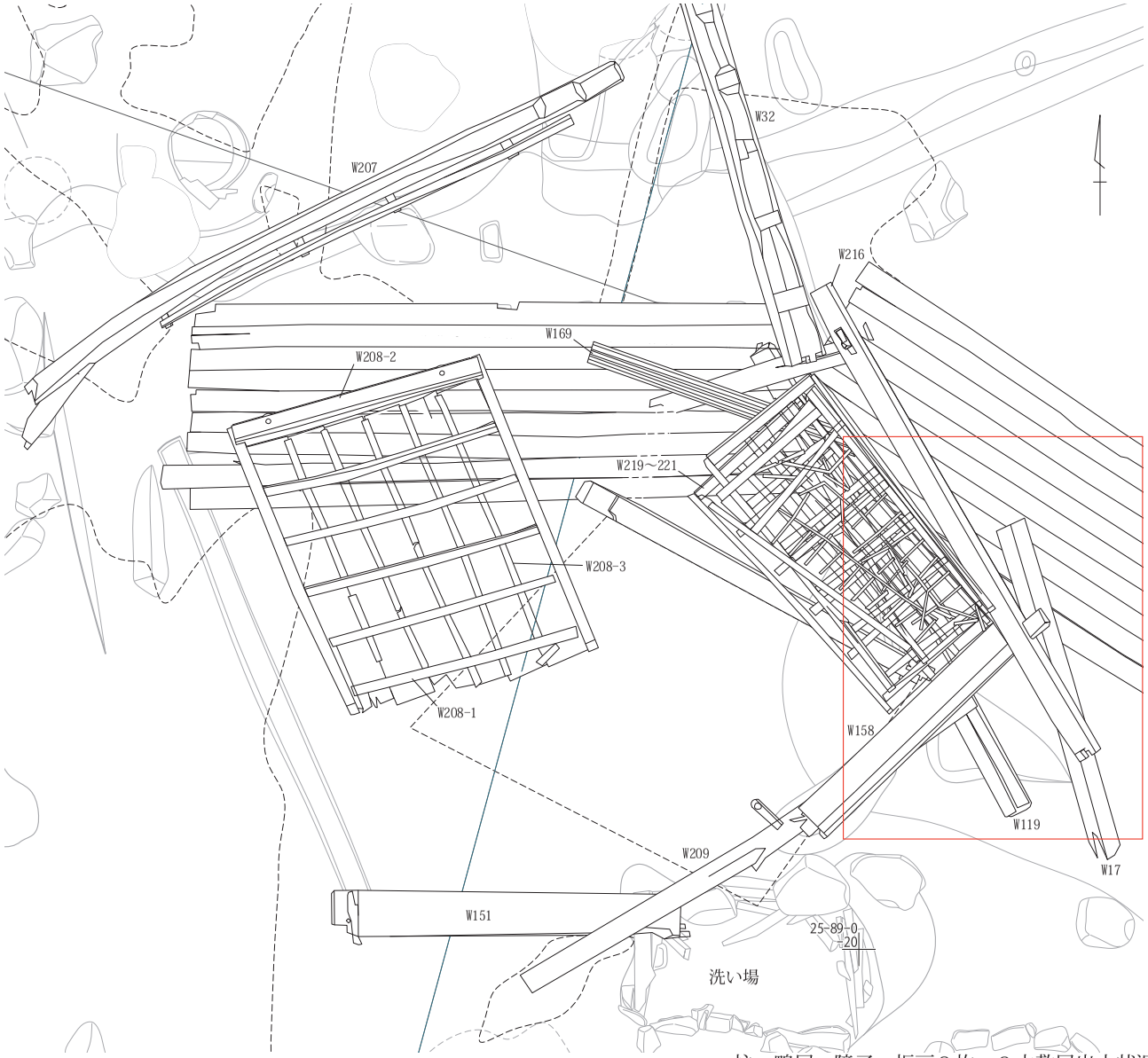


第280図　５区15号屋敷　27号建物遺物出土図(41)

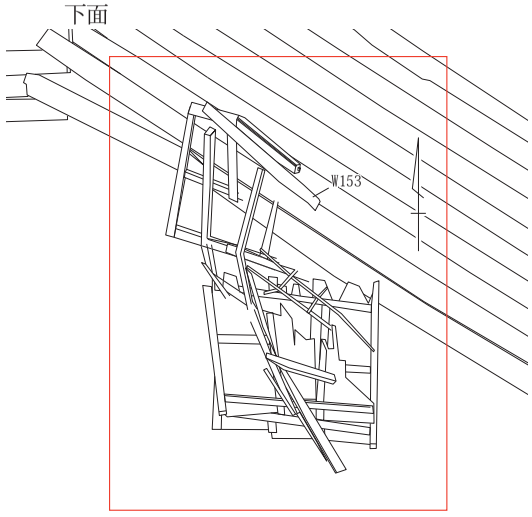
第281図　5区15号屋敷　27号建物土台・柱出土図



第282図　５区15号屋敷　27号建物土台・柱・壁出土図



柱・鴨居・障子・板戸２枚・３本敷居出土状況

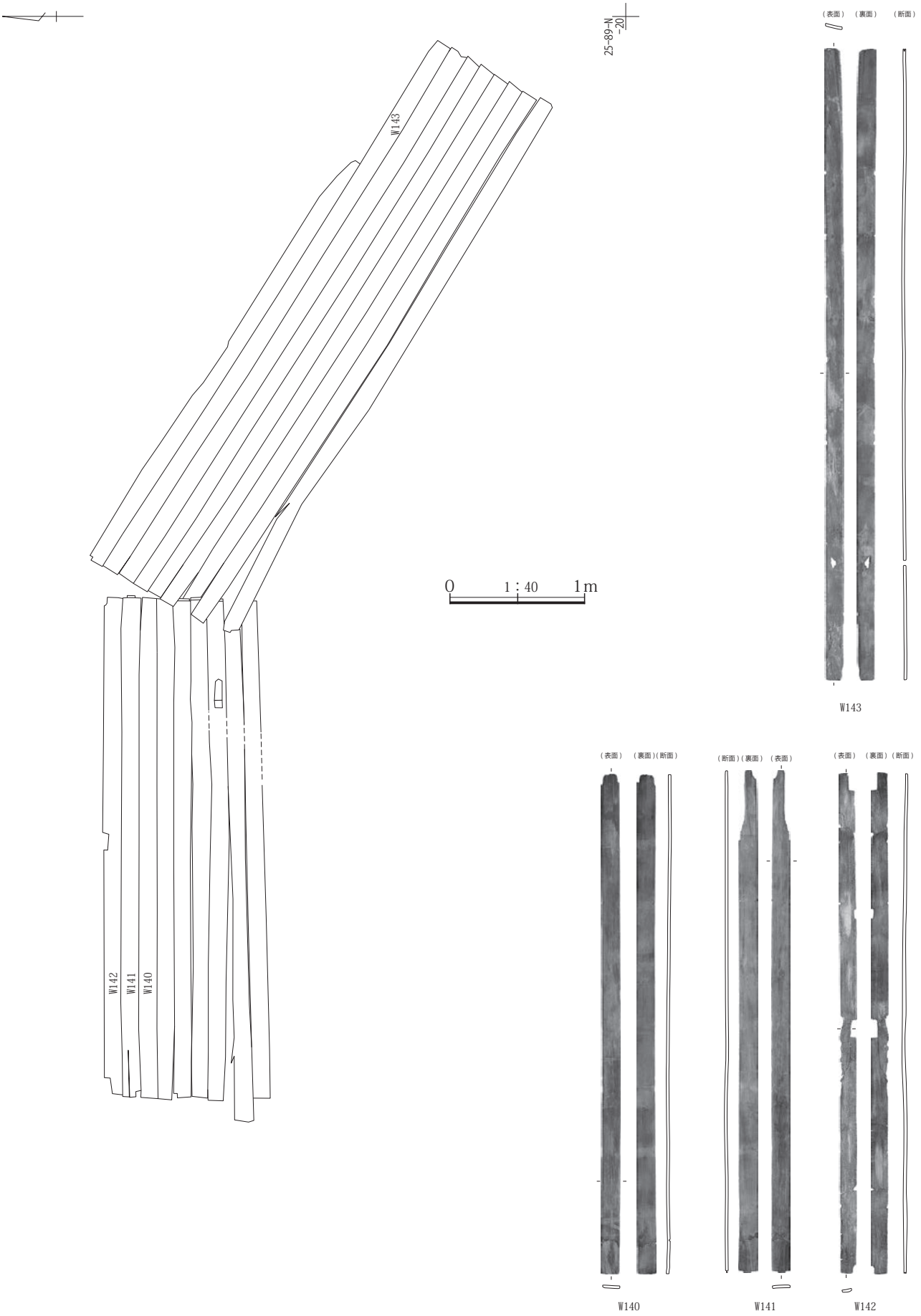


下面より出土した障子・板戸２枚出土状況

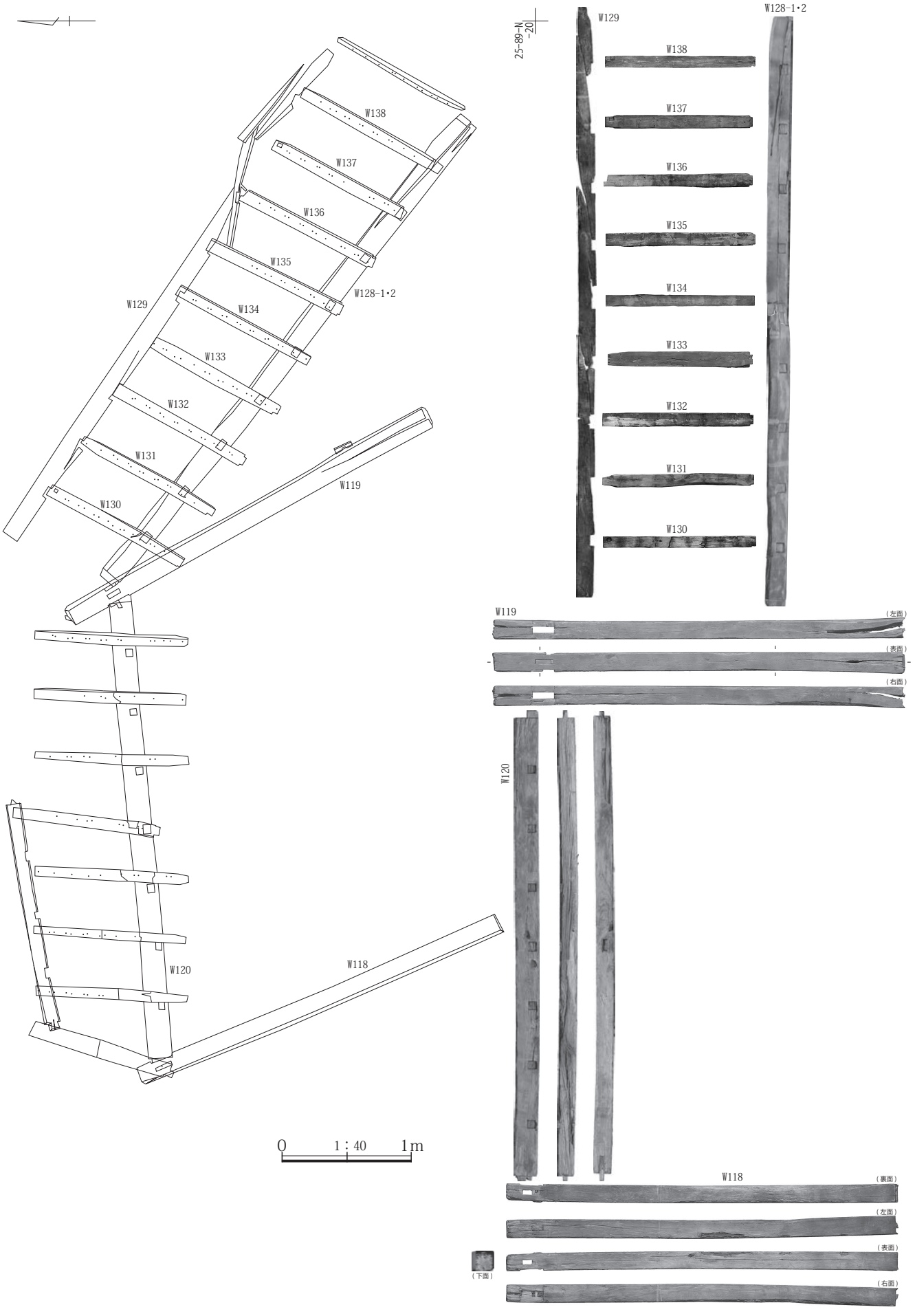
0　1：40　1m

第283図　５区15号屋敷　27号建物大戸・障子・板戸出土図

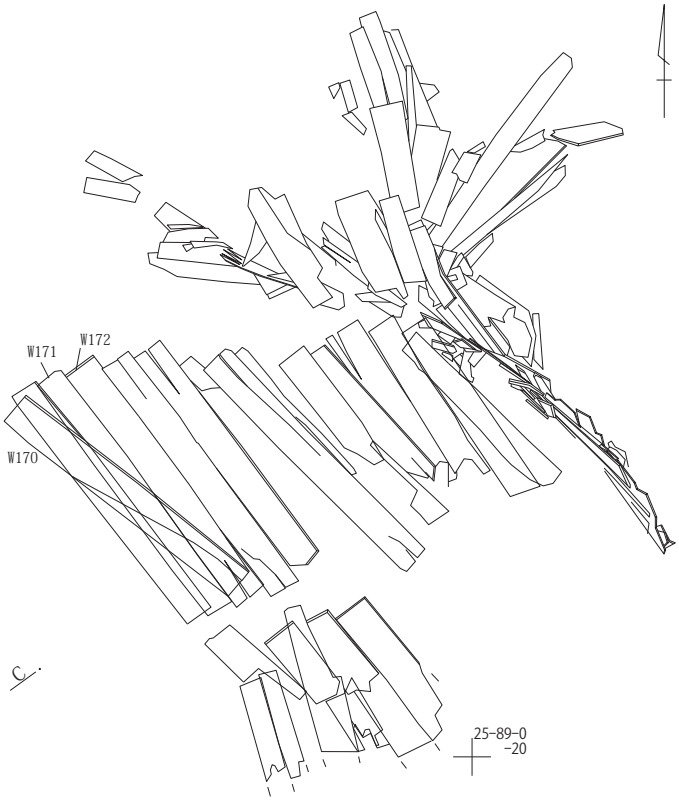
第284図　５区15号屋敷　27号建物人骨・猫出土図



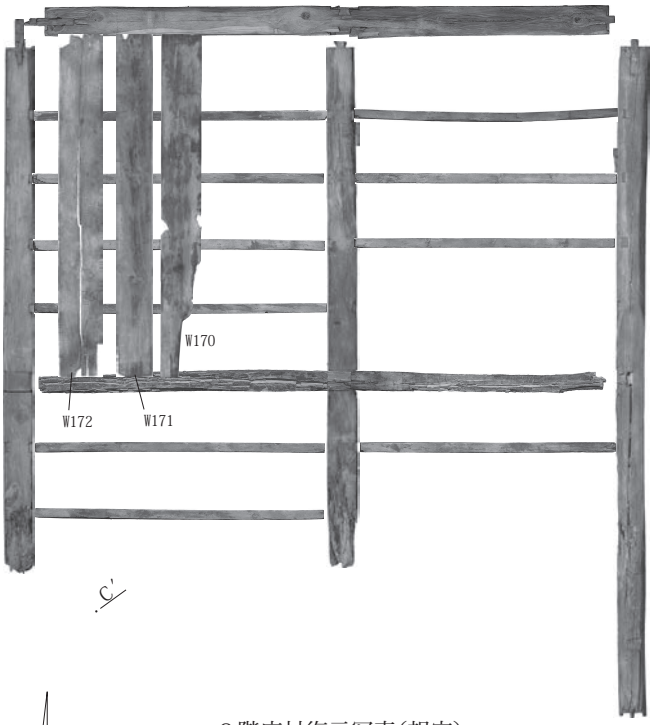
第285図　５区15号屋敷　27号建物縁側板



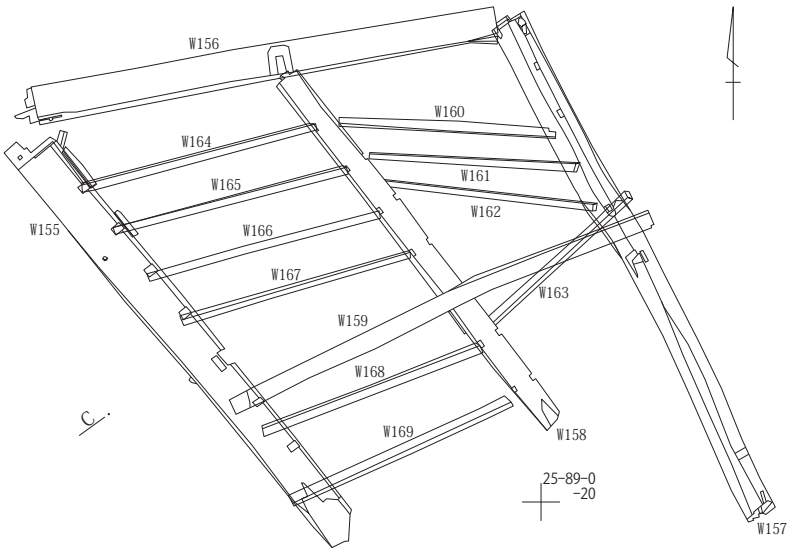
第286図　５区15号屋敷　27号建物構造材



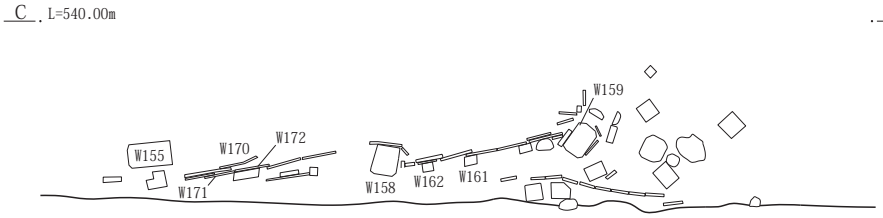
２階床板出土状況



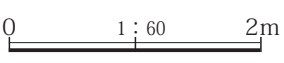
２階床材復元写真(想定)



２階梁・根太出土状況

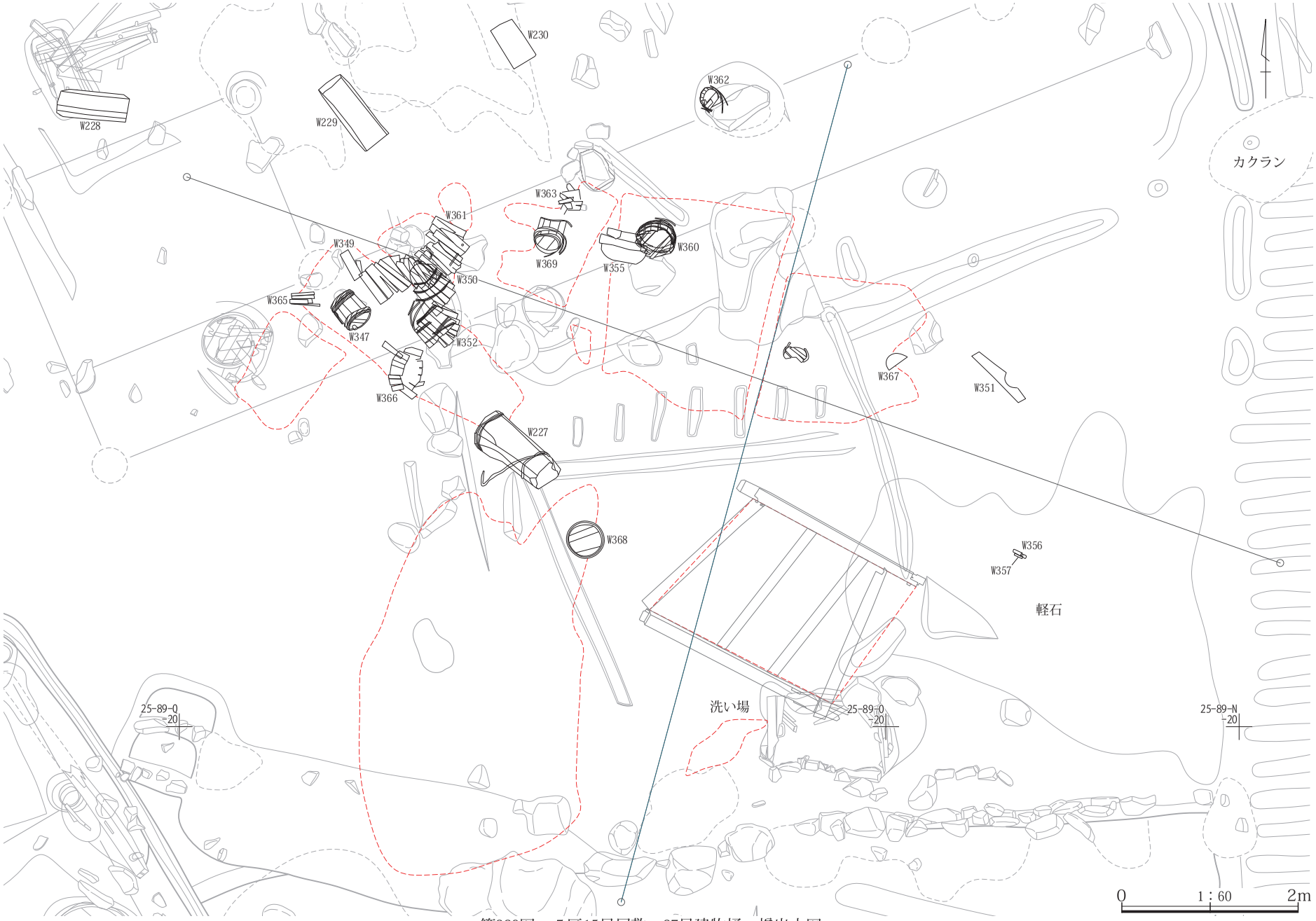


２階床材断面図

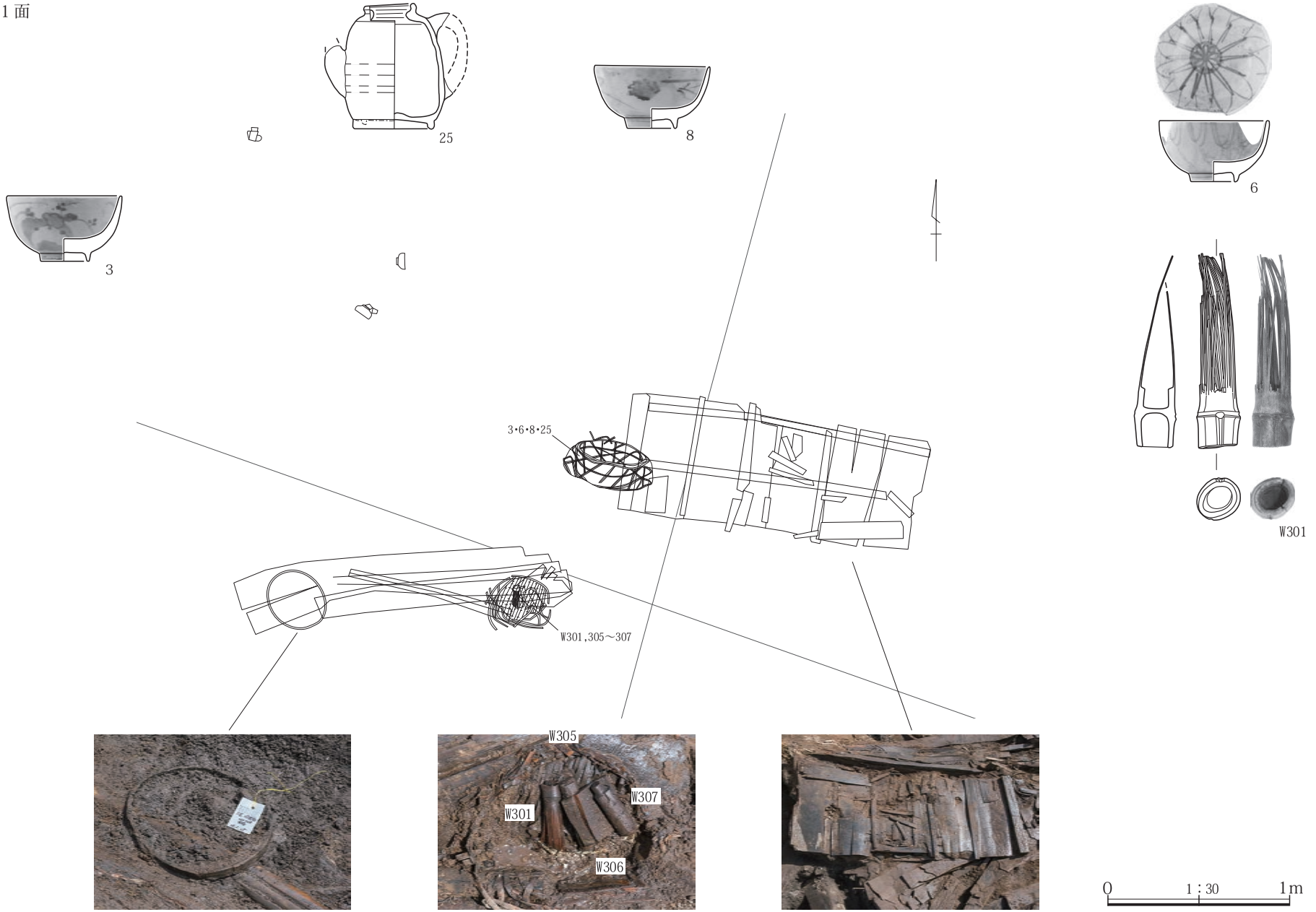


第287図　５区15号屋敷　27号建物２階構造材と床板

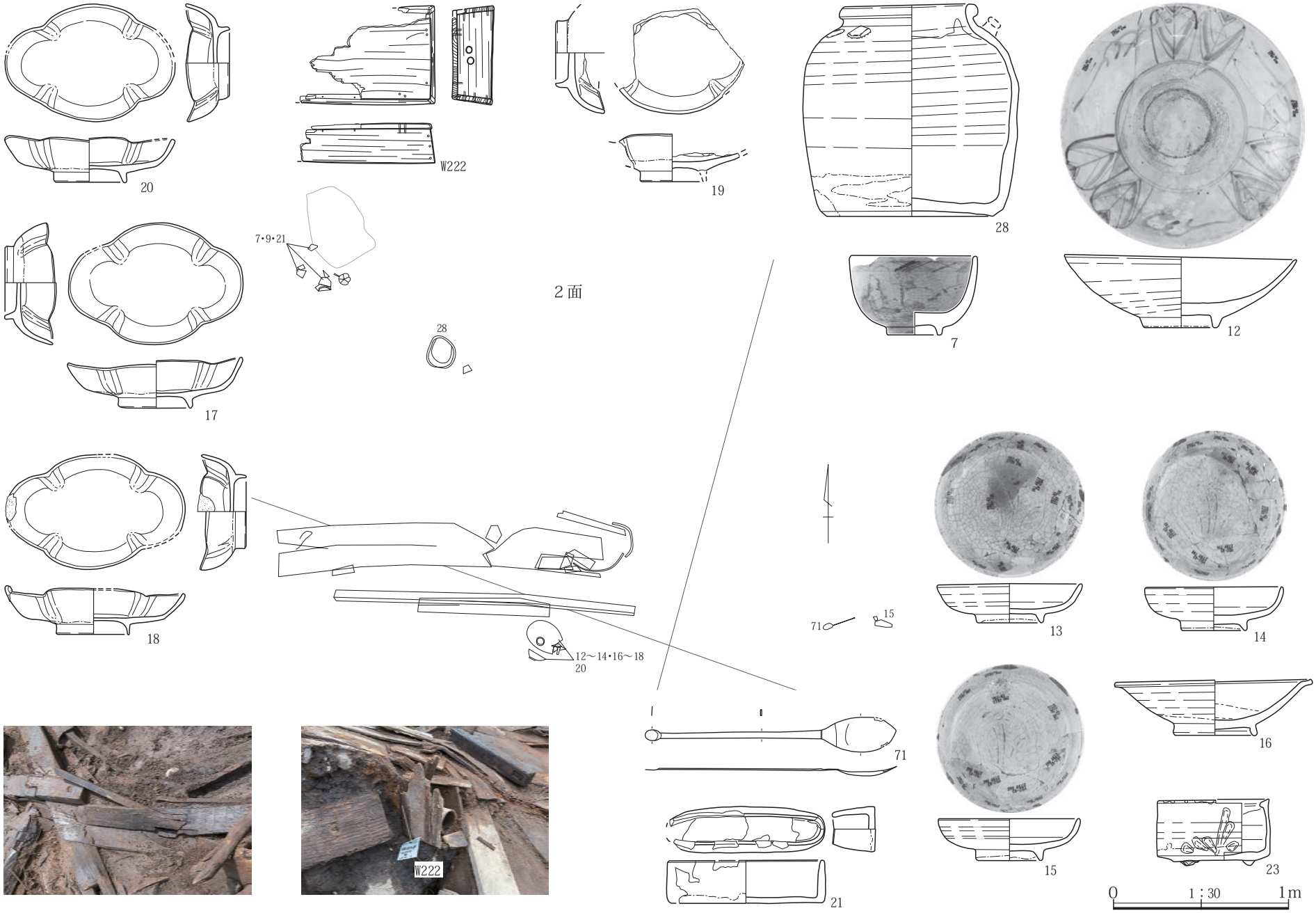
第288図　５区15号屋敷　27号建物食膳用品出土図



第289図　5区15号屋敷　27号建物桶・樽出土図

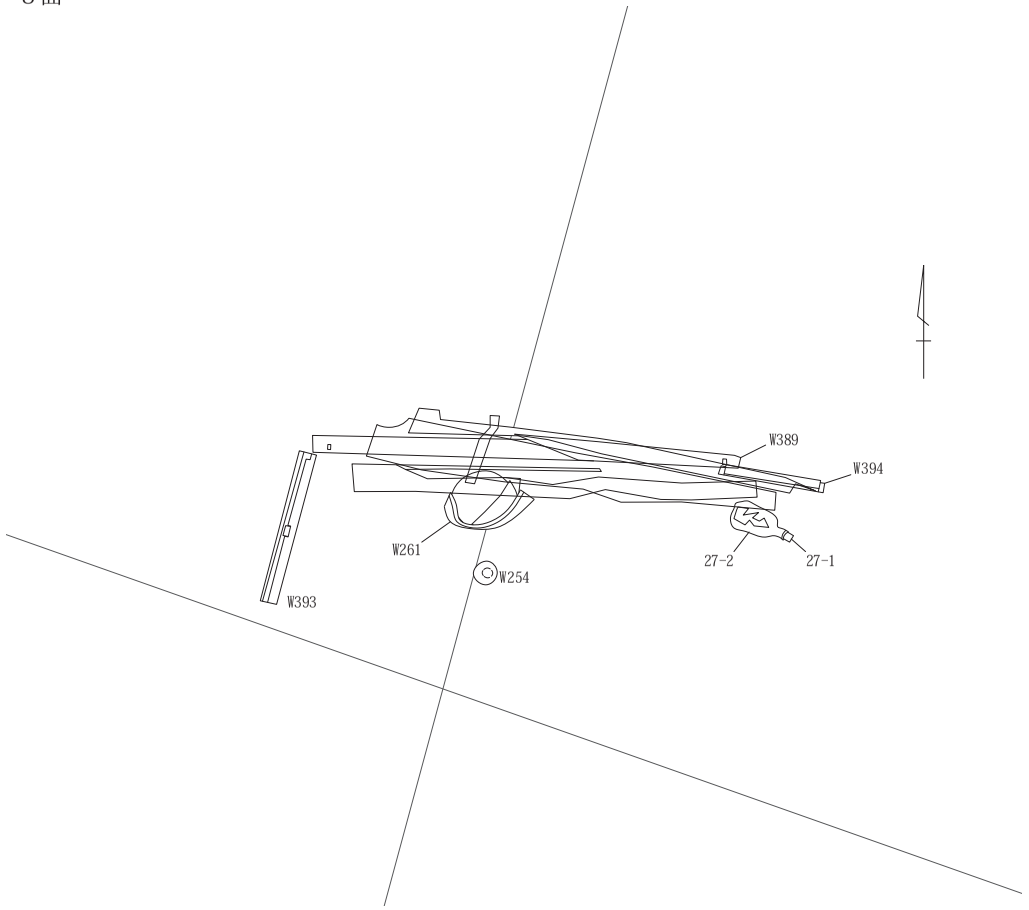


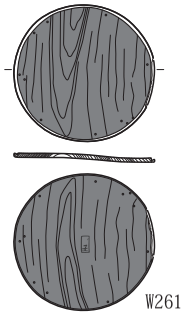
第290図　５区15号屋敷　27号建物戸棚出土図（１）



第291図　5区15号屋敷　27号建物戸棚出土図（2）

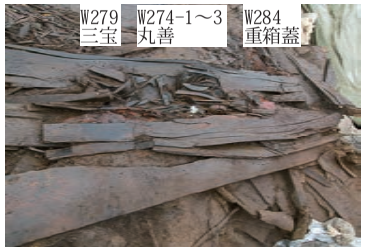
３面

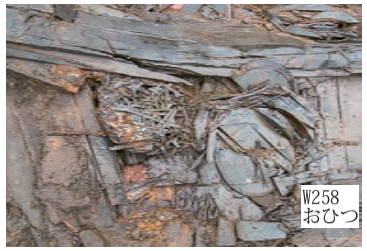




0　1：30　1m

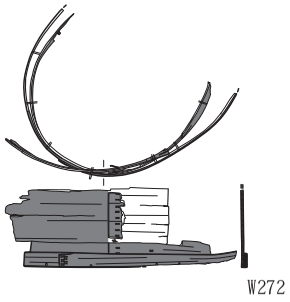
第292図　５区15号屋敷　27号建物戸棚出土図（３）

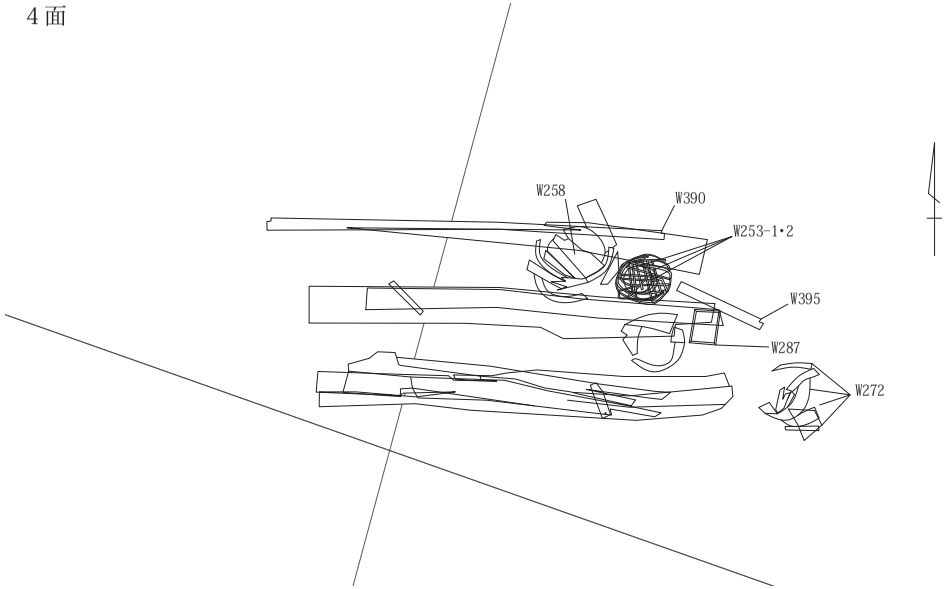




カゴの中に漆椀３枚口縁部を下に重なっていた

４面





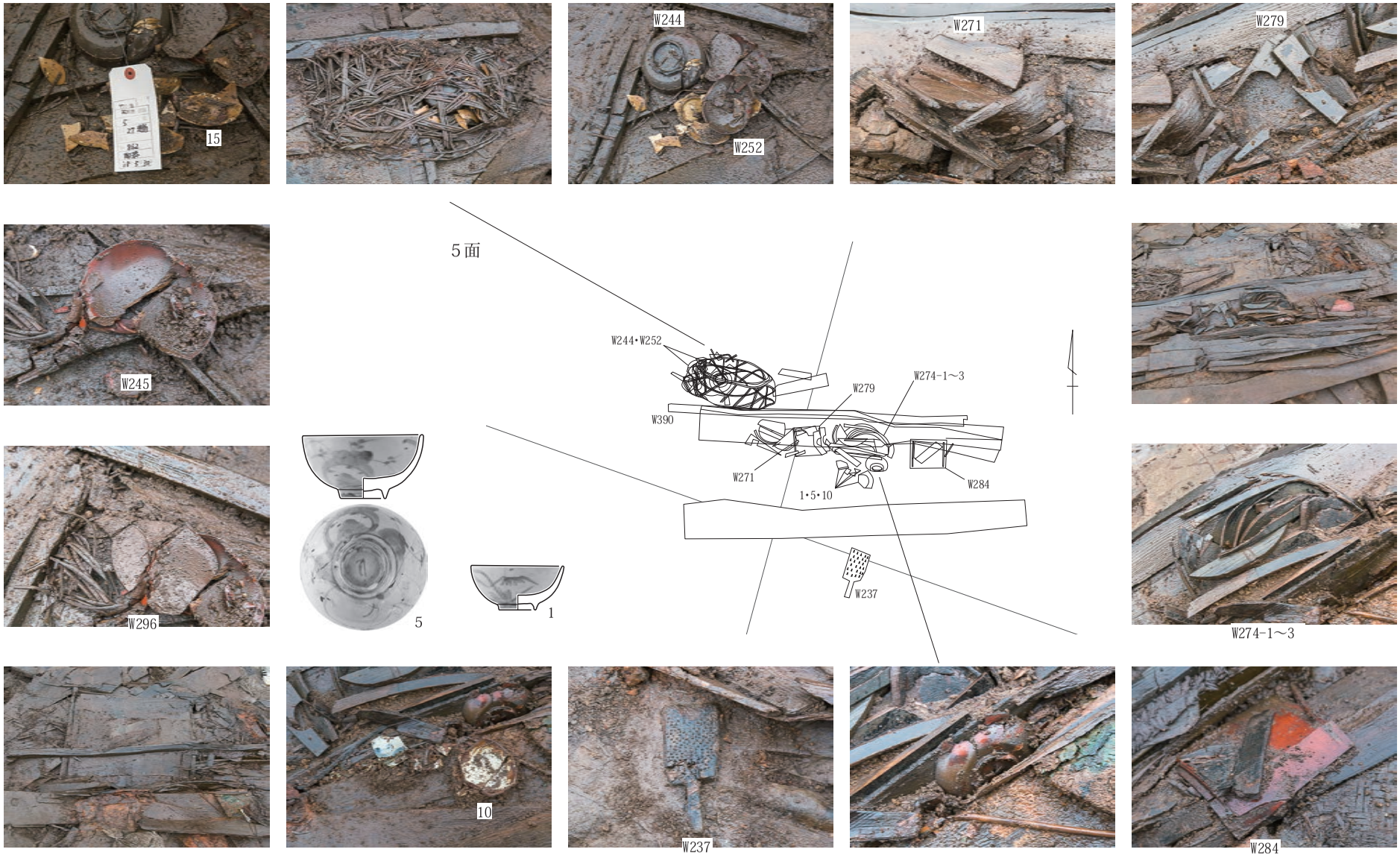
カゴの中、漆椀３枚重なっていた

重箱の蓋表面黒色漆、内面赤色漆

蒸器か

0　1：30　1m

第293図　５区15号屋敷　27号建物戸棚出土図（４）

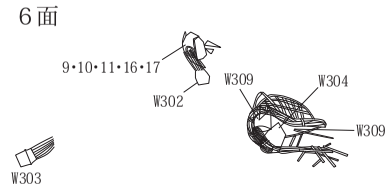


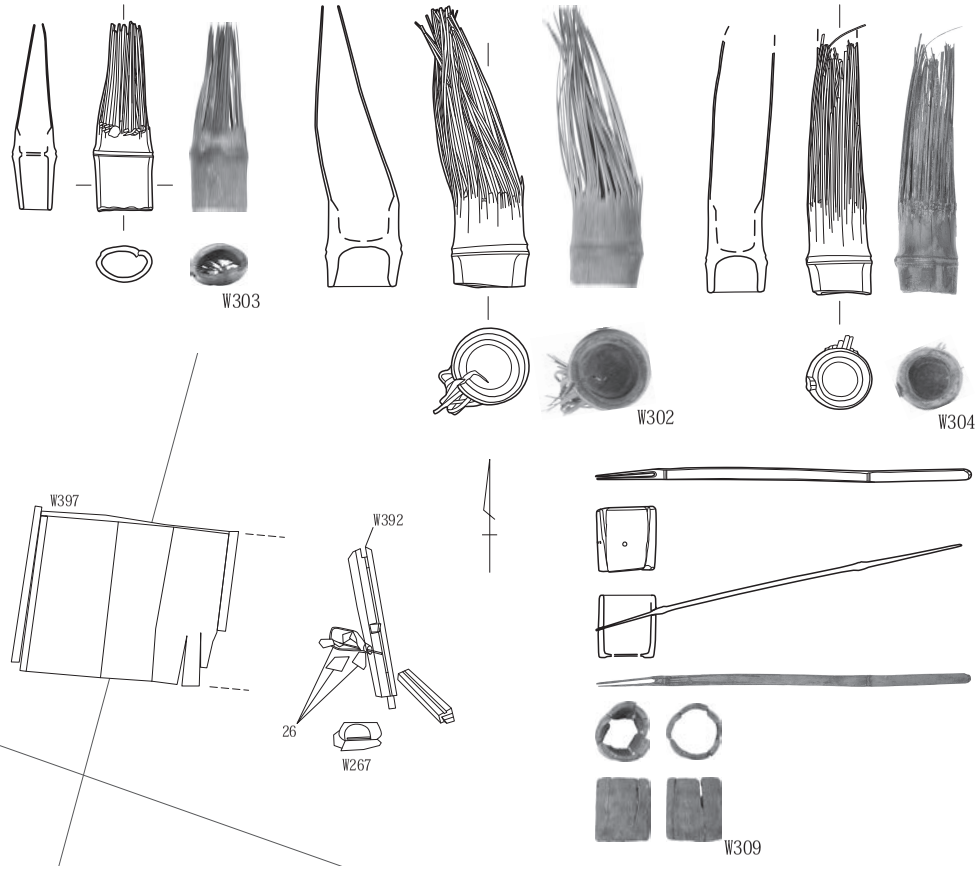
第294図　５区15号屋敷　27号建物戸棚出土図（５）

茶しゃくW309

9・10・11・16・17

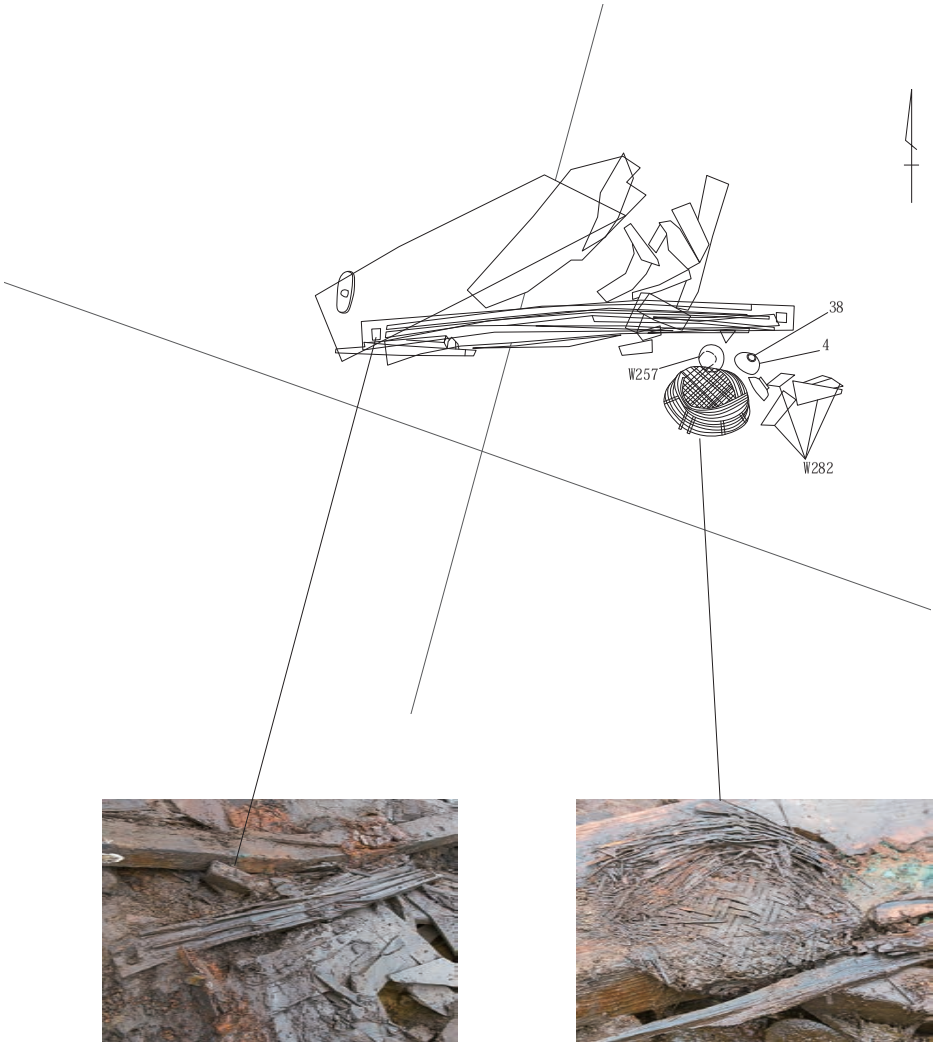
10





第295図　５区15号屋敷　27号建物戸棚出土図（６）

７面



0　1：30　1m

第296図　５区15号屋敷　27号建物戸棚出土図（７）